江戸城ものがたり
皇居周辺の4百年
＊
山岸弘明

江戸城ものがたり
皇居周辺の4百年

＊

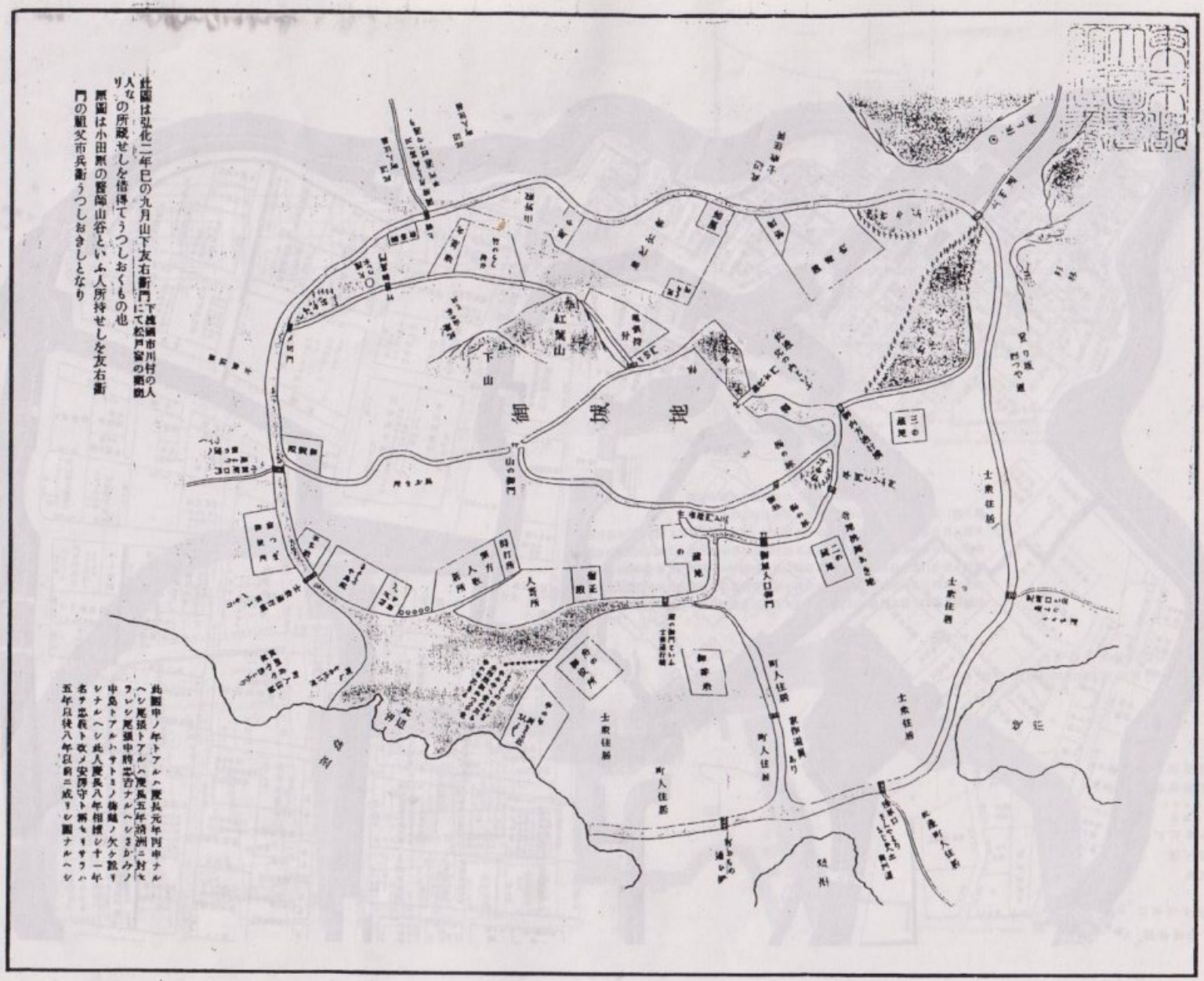
山岸弘明

第1話　皇居東御苑ものがたり……1
第2話　皇居、西の丸ものがたり……8
第3話　皇居吹上御苑ものがたり……12
第4話　北の丸公園ものがたり……18
第5話　皇居外苑ものがたり……25
第6話　一ツ橋1丁目ものがたり……40
第7話　大手町1丁目ものがたり……43
第8話　大手町2丁目ものがたり……57
第9話　丸の内1丁目ものがたり……64
第10話　丸の内2丁目ものがたり……82
第11話　丸の内3丁目ものがたり……94
第12話　有楽町ものがたり……103

参考とした江戸図

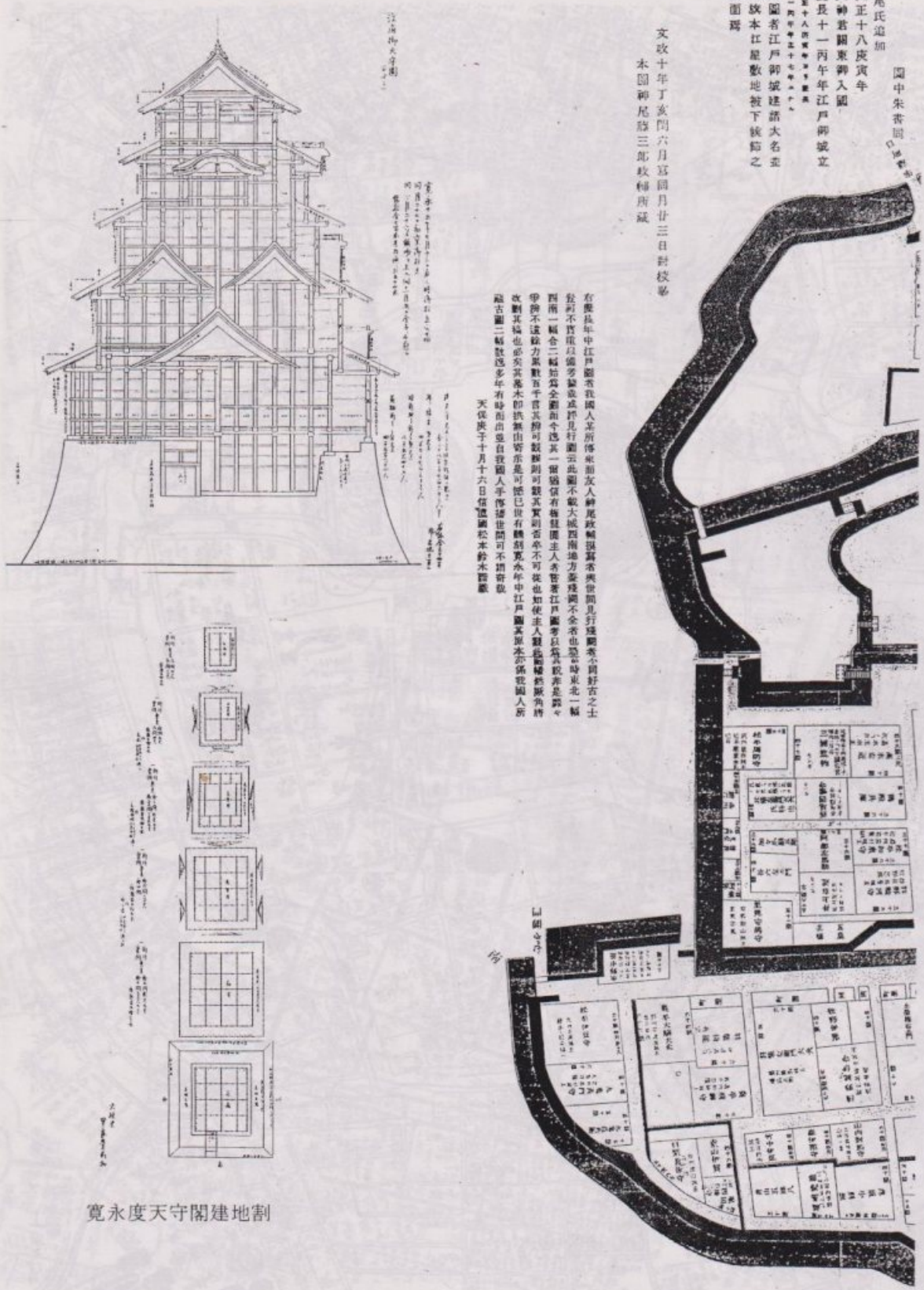
一六〇二慶長7年別本慶長江戸全図（写し・不詳（所有者・不詳）巻頭掲載）
一六〇八〃13〃江戸絵図（出典・東京市史稿）巻頭掲載
一六二三寛永9年武蔵豊島郡江戸庄絵図（複製図）
一六四四正保元年間江戸絵図（不詳（東京市史稿）巻頭掲載）
一六五五承応2年江戸古改庄図（不詳（東京百年史）巻頭掲載）
一六六〇寛文10年新板江戸大絵図（入り・寛文13年）
一六六三〃3年新添江戸之図（不詳（東京市史稿）巻頭掲載）
一六六七延宝5年新板江戸大絵図（入り・延宝4年）
一六七〇〃8年新増江戸大絵図（入り・延宝8年）
一六七九貞享元年江戸絵図（巡り・延宝7年）
一六八四〃貞享元年御江戸大絵図（貞享3年）
一六八八〃5年江戸大絵図（貞享3年）
一六八八〃5年江戸新絵図（貞享3年）
一六九二元禄5年新江戸大絵図（天和2年）
一六九二〃5年江戸大絵図（天和2年）
一六九七〃10年江戸絵図（延宝8年）
一七〇四宝永元年江戸絵図（延宝8年）
一七〇四〃元年新板江戸大絵図（入り・寛文13年）
一七〇六〃3年新板江戸絵図（入り・寛文13年）
一七〇七〃4年江戸絵図（巡り・延宝8年）
一七一〇〃7年江戸絵図（巡り・延宝8年）
一七一四正徳4年江雀川師宣絵図（江戸・延宝4年）
一七一四〃4年江戸絵図（巡り・延宝8年）
一七一四〃4年江戸絵図（巡り・延宝8年）
一七一四〃4年江戸絵図（巡り・延宝8

別本慶長江戸圖


此圖は弘化二年巳の九月山下友右衛門下總國市川村の人なの所蔵せしを借得てうつしおくものなり
原圖は小田原の醫師山谷といふ人所持せしを友右衛門の親父市兵衛うつしおきしとなり
此圖中ノ年トアルハ慶長元年ヨリ申ナルヘシ尾張トアルハ慶長五年濱洲ニ對セラレシ尾張中將忠吉ナルヘシ扨かみノ申ヨトアルハサトミノ後疑ノ欠カ誤リナルヘシ此人慶長八年相續シ十一年名ヲ忠義ト改メ安藝守ト稱セリサラハ五年以後八年以前ニ成リシ圖ナルヘシ
紅葉山
下山
城郭
士農住居
町人住居
江戸



慶長13年慶長江戸図全



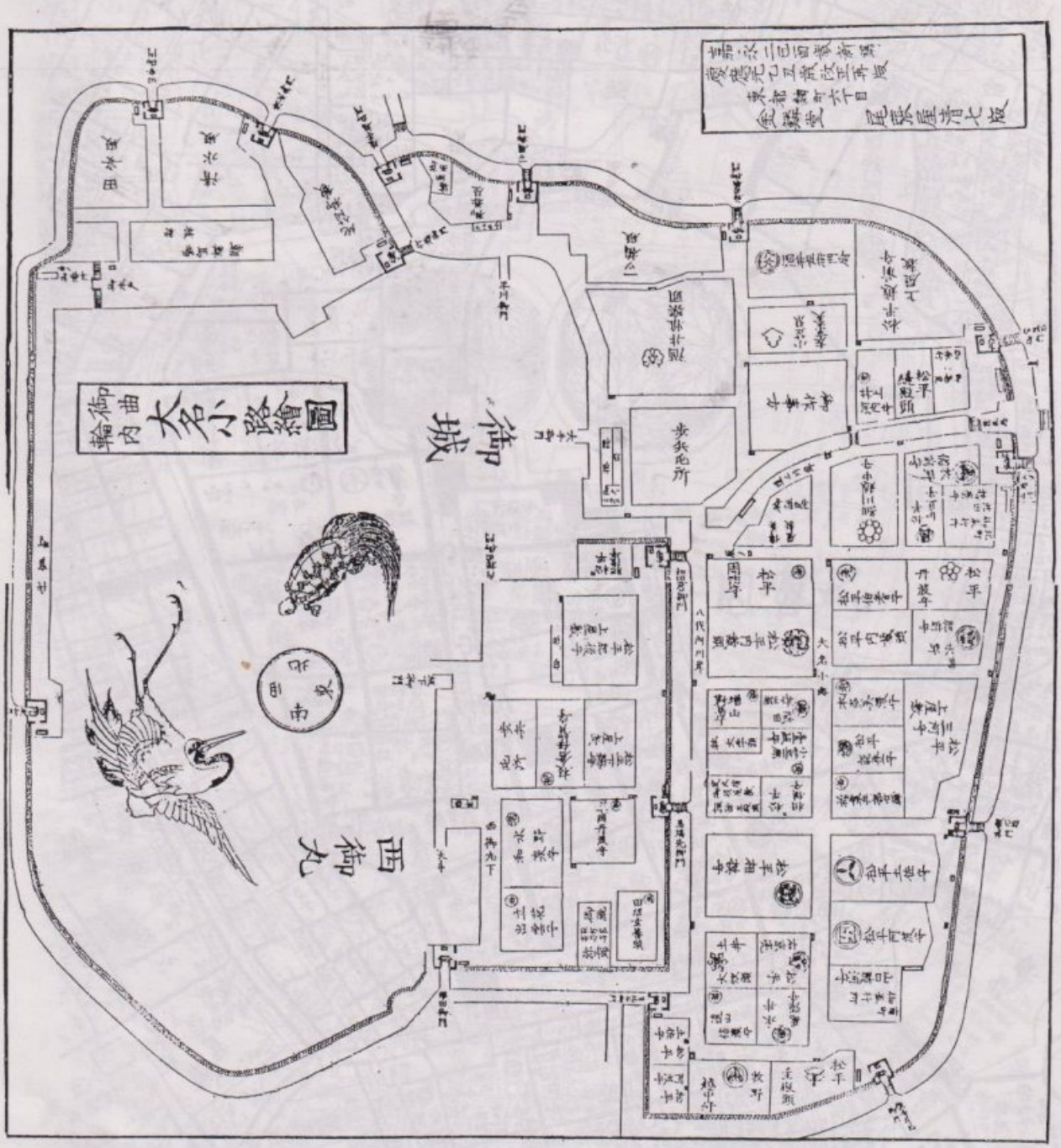
寛永度天守閣建地割



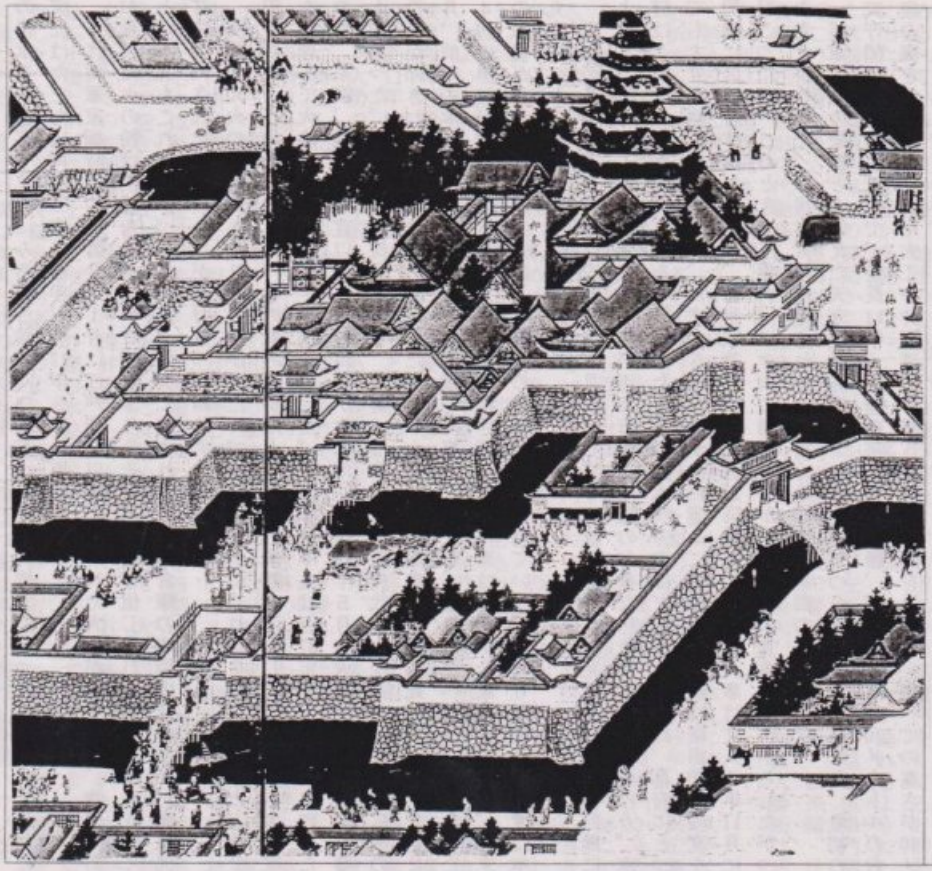
元禄６年江戸図正方鑑



宝暦７年分間宝暦江戸大絵図全



慶応元年御曲輪内大名小路絵図



第1話　皇居東御苑ものがたり

東京都の前身江戸の江は海、戸は入口を意味している。墨田川が江戸湾にそそぐ湿地帯で、日比谷入江などが入りくんだ当時の地形をいいえている。9世紀の終わり恒武天皇の孫高望王が上総介として関東に下ったが、その分流江戸重継が日比谷入江に面した皇居東御苑の地に居館をひらいたのが江戸城のはじまり、12世紀なかごろのことであった。15世紀に入ると江戸は関東管領・上杉定正が支配し、長禄元年、上杉氏の重臣太田道灌がかつての江戸居館跡の地に江戸城を建設した。城は子城、中城、外城の3区画からなり天然の谷や沢を利用した屈指の要害とされたが、詳細は伝わっていない。

15世紀中ころからはじまった戦国時代は小田原後北条の支城とされた。北条氏は関東8か国を支配し、全国制覇の野望をつのらせるが、天下は一足早く織田信長が掌中におさめていた。天正18年、20万の大軍をひきいた豊臣秀吉が小田原城を包囲、北条軍は決戦の機会を失して投降したので北条氏の旧領は徳川家康に与えられることになった。家康の江戸入城は天正18年8月1日、当時の江戸城は石垣もなく荒れはて、板ふきやワラふき建物が散見される程度であったが、家康の心中には発展性を確信した新しい城と町つくり構想があったに違いない。

慶長5年、関が原の合戦の勝利で晴れて征夷大将軍に就任した家康はこの機をうかがっていたかのように大規模な城郭つくりをはじめた。縄張りは藤堂高虎が行い、石材調達は池田輝政、福島正則、黒田長政、加藤清正らの外様大名が命ぜられた。割当は10万石について百人持ち千百こだが江戸近くになく、巨石を求めて伊豆半島に数万人の石きり人夫が送りこまれた。ゲンノウや石ミノで巨石を切出し、石船につんで江戸に運び、荷あげされた石材は修羅とよばれた石台にのせて、数百人の人夫が笛太鼓に合わせて曳いた。石積みは穴太衆とよばれたプロ集団が担当し、工事を命ぜられた諸大名は資金、資材、人員を惜しげもなく投入、慶長12年に完成した。現在、本丸、2の丸、3の丸をめぐる東御苑一帯の石垣の原型だが、その後の積み替えも多く、どこまでが当時のものかはっきりしない。

本丸殿舎も細川忠興、毛利秀就らが担当して慶長11年9月竣工、2代将軍に就任直後の秀忠が入城した。本丸は表御殿、中奥、大奥とわかれ、役所にあたる表向は将軍権威の演出舞台ともいえる大広間を中心に白書院、黒書院などの大建築が連なった。ここには老中、若年寄などの幕閣や番方役人が執務し、5節句、1、15日といった総登城日には全国の大名衆が将軍に謁見した。中奥は将軍の住まい。寝室と御座間などがあり、大奥は将軍夫人や側室などが生活した。

江戸城の歴史は火事の罹災史ともいえた。江戸3百年間に5度焼失、建造は7回をかぞえたが、建築は先代の踏襲で、基本構成はほとんど替わっていない。最初の火事は3代将軍家光の寛永16年8月大雨の日、大奥御台所縁下から出火。梁上に燃え上がった火は必死

の掛水をあざ笑うようにみるみる殿中にひろがった。本丸焼失でいったん西の丸に逃れた家光はただちに再建工事に着手、翌17年9月に復帰した。

4代将軍家綱時代の明暦3年1月に江戸開府以来といわれた大火が発生した。強風にあおられた火の粉は内濠をこえて天守閣にふりそそぎ、不燃と信じられた天守閣が火を吹くと、本丸もこれに引きづられたように炎に包まれた。塩硝倉庫の炸裂爆音のなか、高張提灯に案内された家綱のカゴが焼け残った西の丸に逃れた。

明暦の大火の傷痕があまりに大きかったので復旧工事がおくれ、2年以上をへた万治2年8月にようやく完成した。北の丸の火が飛火した苦い体験を活かして、城周辺の大名家を整理して火除け地を作り、定火消をおいた。この4代本丸は百87年間も焼けずに残ったので、家綱、綱吉、家宣以下9代の将軍が住んだ。天保15年5月の火事は原因不明の不審火であった。火元は大奥長局あたり、大奥には家慶夫人と先代夫人などがいたが、広敷の役人が叩きわった非常口からのがれた。この火災で51人の奥女中が焼死した。弘化2年2月、前年の本丸火災で焼失した本丸御殿を再築。このころ、遣日特使ペリーに率いられた4艘の黒船が浦賀に来航し、太平の夢をゆさぶった。将軍は家定から家茂に変わる。幕末の風雲が急をつげ井伊直弼による安政の大獄がはじまっていた。安政6年10月、今度は本丸中の口から出火した。

東御苑最後の本丸工事は安政7年3月にはじまり万延元年11月に完成した。工事記録によると、建坪が1万1千坪で総工費が百75万両、現在のお金なら数百億円にもなろう。木材はご3家、諸大名に、檜を中心とした全国の銘木20万本ほどを献上させた。幕府にとっても大変な物入りだったが、わずか5年のはかない運命に終わる。幕政は桜田門外の変を契機に公武合体論がおこり、将軍家茂に皇女和宮が降嫁していた。火事は文久3年11月に起こったが、このときも不審火。ツケ火の噂がとびかって将軍の食事は紀伊からしたがった老女が作った。以後本丸は再建されることなくその機能を西の丸に移した。

将軍居城の象徴ともいえた天守閣は秀忠が2つ作り、1つを家光が大改造した。最初の天守閣は本丸中央近くで、慶長11年、伊達政宗、上杉景勝、蒲生秀行らが20メートルの台座を築き、翌12年に御用大工中井正清が5層5重の天守閣を乗せた。すべての高さが80メートル。織田信長、豊臣秀吉の黒い天守に対抗、壁面を漆喰の白とし、入り母屋屋根は木の屋根に鉛と錫の合金で覆った。鉛屋根はサビると白く、瓦屋根にくらべて軽い。巨石を積み重ねた強固な天守台の構築と上ものの軽量化が天守の高層化を実現した。屋根の両端、鬼瓦の上には木組金ムクのシャチがさんぜんと輝き、日本最大の天守閣としてますますその偉容を天下に誇った。

幕府政治が軌道にのりはじめると城内は手狭となったので、元和8年、天守閣を縮小、北はね橋近くに移動した。天守台を14メートルとし、5層5重の天守に地階がついた。破風張出、屋根は銅瓦葺きで、高さは70メートルとなった。寛永12、13年の江戸城の総仕上げ工事は全国の大名を総動員した大事業であった。天守閣は石垣を黒田忠之、浅野長あきらが改め、1層を水野勝成、2層永井直政、3層松井康重、4層松平忠国、5層を永井直清とフロアごとに諸大名に内外装を一新させた。14年12月完成。どの角度も正面のようにみえたことから八方正面の異名もとった。白壁をアスファルトで包んだ耐火構造としたが明暦3年1月の大火で焼失。強風で開いた窓が火を呼び込んだ。

明暦大火直後の明暦3年2月、前田綱紀が天守台石垣再建工事に着手。焼失した天守台はいたみがはげしく、すべての石を取り替えた。万治2年本丸も完成し、天守閣再建の機運はみなぎったが、将軍家綱補佐役の叔父保科正之が反対し、ついに日のめをみることができない。現存する天守台は花崗岩を積み上げた12メートル。台上から北の丸公園、大手町、霞が関、新宿などのビル群がみはらせる。

江戸城の城門は俗に36見附といわれたが、よくかぞえると92もある。江戸時代、大名たちが威儀を正して登城した大手門は、江戸城でも最大の格式を誇った。太田時代からの城門だが、慶長12年12月、藤堂高虎の縄張りで櫓門を築き、元和6年に伊達政宗が石垣を築いて枡形門とした。伊達家は大手門建設という栄誉をになったが出費も莫大で、人夫42万人、黄金2千6百枚を使った。枡型門は2重の門と塁壁を組み合わせ曲折や喰違いで敵の進入を防いだ。方形の明地を中心に高麗門、渡櫓、番所がセットで、1の門の高麗門は2本の本柱にかけた切妻屋根に小型の屋根をコの字形に配置し、門扉に鉄板を張りつけた。門は江戸時代のもので、大手濠、桔梗濠の石垣に白壁塀がめぐった。

4角の空間は枡型で、戦時は武者だまりとなる。騎馬武者、鎧武者をここに集結し、1の門を開いて進撃する。撤収は味方を入れ門を閉じ、敵兵の紛れ込みをチェックして2の門を開く。防衛上の配慮も多い。入口が狭く一度に大勢の人が入れないうえ、いったん中に入ってしまうと密室となり、周囲のガンギをのぼって武者走りをつたった城兵が、渡櫓や土塀に開けられた狭間から鉄砲や弓矢をいかけた。

2の門は渡櫓門。両脇に石塁を積み上げ、2階部分に長い渡櫓を連ね、巨大な大ご門をかけた。渡櫓門の上層は22間×4間。入母屋屋根に本瓦をふき、両端にシャチ瓦をのせた。シャチは伝説の魚。水を吹いて、生命力が旺盛なことから呪術的な意味で全国の城郭に取り入れられた。大手門は四海をしろしめす江戸城の正面玄関として、威容を天下に誇った。こえて大番所があった。江戸城最初の警備所で10万石以上の譜代大名が任命された。平日60人、登城日は百人の門番がつめ、開門は卯の刻（午前6時ころ）から酉の刻（午後6時ころ）まで。明暦3年、元禄16年、安政2年と火災、大地震の被害をうけたが再建。維新

後の関東大震災で焼失したので昭和48年に復元した。

大手門をわたって3の丸尚蔵庫、無料休息所あたりは天神濠で、先の石塁に囲まれた所に下乗橋と3の門、銅門があった。下乗橋は2の丸と3の丸の間の木橋で、大名の大半はここでカゴを下りた。渡りきった所が3の門。寛永6年に酒井忠世、真田信之らが枡型門を築いた。歩道の両側に高さ4メートルほどの石塁が覗くが地下にも4メートルほどが埋められている。天神濠、蛤濠の石垣で、白壁が連なり、歩道部分の高麗門をくぐると枡型に出た。北、西の2面が多聞になっていた。多聞は塀の幅をひろげて人が通れるようにした武器庫で緊急時はこの狭間から鉄砲や弓矢を射かけた。左折した南側の石塁は渡櫓門跡でこの上層に長さ24間の渡櫓が乗った。3の門は城内最大の警備所で甲賀組、根来組、伊賀組、25人組が交代勤務した。門は慶応3年の2の丸火災で焼失、付属した百人番所は昭和38年に修理復元された。

越えると広場に出、ここで道順が2つに分かれる。まっすぐ進むと本丸に抜け、大きく右折すると2の丸御殿への道で3の門と一体になった銅門があった。慶長19年、寺沢広高の建造で、大ご門が銅張りになっていたのが門名となった。高麗門、枡型、渡櫓門からなり、渡櫓門は明治6年に撤去され、石塁だけが残った。本丸への道を歩くと中の門跡にでる。枡型はなく両側の石塁の上に長さ13間の渡櫓門がのった。石塁の巨石がひときわ目をひく。江戸城最大規模のもので一辺が2メートル以上のものがめだつ。これをレンガのように切込み積みとした。寛永6年建造、明治6年に撤去された。

いよいよ本丸。上り石段の途中にある中雀門が最後の城門で、書院出櫓、多聞、書院櫓、渡櫓門の右折枡型になっていた。慶長12年幕府の直轄工事として建造、書院櫓、書院出櫓は慶長11年建造の2重櫓で、渡櫓門と同じ明治6年に撤去された。大名たちはこの門を通って、大勢の番士が平服して出迎える中を本丸玄関にすすみ、大刀をあずけて所定の控えの間で待機した。将軍の謁見は一瞬。大半の大名は団体、み簾ごしに平服した。

大手門以外にも本丸へのコースが4つあった。西の丸と3の丸をむすぶ内桜田門も大手6門の1つ。家康入城当時門瓦に太田氏の家紋が残っていたので桔梗門ともよばれた。寛永時代に枡型門とし、その旧態を今日に残している。平河門は3の丸御殿の正門だが、お局門ともよばれた。慶長11年ころ太田道灌以来の冠木門を枡型とした。正面に高麗門を築き、方形の空き地の後方に渡櫓門を配した典型的な枡型門で、大ご門をくぐって左手にすすむと3の丸御殿に、真ん中は梅林坂をへて大奥に達した。右は帯郭。平河門と竹橋を結ぶ土堤だが、この土堤で内濠と外濠の水位を保たせ、不浄門として罪人や死者の搬出口とした。忠臣蔵で吉良義央に刃傷におよんだ浅野長矩も罪人としてこの門から田村建顕邸に運ばれた。北はね橋は本丸と北の丸をむすび、西はね橋は本丸と西の丸を繋いでいる。濠を深く有事に橋がとり外せるようはね橋とした。

櫓は城門や城壁に作った高楼で展望台兼武器庫といったところだろうか。窓の狭間から弓や鉄砲をいかけ、床穴から石を落として敵兵を防ぐ仕組みになっていた。江戸城の城壁をめぐった櫓は本丸に10基、2の丸に7基、3の丸に1基、東御苑合計18基の存在が確認されているが、その大半は江戸後期の火災で焼失して、現存は富士見櫓と桜田巽櫓の2基だけ。本丸の西の丸側、坂下門の右手にのぞむ3重櫓が富士見櫓で、石垣は加藤清正が造った。天守閣焼失後は城外からみえる富士見櫓が本丸のシンボルとなり、歴代将軍が時折この櫓から江戸市中をながめた。大正12年の関東大震災で崩壊して復元。白壁の櫓と緑の松、濠池のコントラストが美しい。

2の丸の西の丸側、富士見櫓下と天守台に幕府の金蔵があった。徳川幕府の金庫で何百万両ともいわれた大判、小判、金塊などを保管した。厳重に守られたはずの幕府金蔵が安政2年に破られた。市中に持ち出された4千両と内濠に沈められた6千両のあわせて1万両で、2年後に犯人が捕まりハリツケとなった。明治維新のときこの金蔵がカラだったので勘定奉行小栗忠順が持出したとする埋蔵金伝説が各地に残っている。

3の丸の大手町1丁目側に勘定奉行勝手方支配の下勘定所があった。幹部の詰める勝手方事務所は本丸御殿内にあり、下勘定所に実務担当者が執務した。3の丸の大手門から入った南側の空き地は登城する大名衆従者たちの待合所になっていた。大名たちの大半は次の大手3の門下乗橋の所でカゴを降りたので、残されたカゴかつぎ、ぞうり取り、笠持ちなどがこの待合所で待機した。

江戸城本丸跡　（千代田①　皇居東御苑）

12世紀	江戸四郎重継、太郎重長、忠重	
長禄元－4～文明18－7	太田道灌備中守資長	
文明18年～永正2年	曽我豊後守佑重、氏興	城代
永正2年～〃 15－4	上杉扇谷朝良	上杉定正、朝良の家臣
〃 15年～大永4－1	〃 朝興	隠居城
大永4年～不詳	富永政直	本城居住
〃 4年～天文16－7	太田大和守資直	外城居住
天文16－7～永禄7年	新六郎康資	〃
大永4年～天文2年	遠山四郎兵衛宗忠	子城居住
天文2年～永禄7年	〃 丹波守宗岑	〃 氏康の家臣
永禄7年～天正8年	〃 政景	〃 氏政の家臣
天正8年～〃 18－8	〃 景政	〃 氏直の家臣
〃 18－8～慶長8－2	徳川三河守家康	江戸2百50万石
慶長8－2～〃 10－4	太政大臣家康	征夷大将軍（初代）
〃 10－4～元和8－4	〃 秀忠	〃（第2代）
元和9－8～寛永元－4		本丸修築のため西の丸へ
〃		本丸復帰、水戸藩邸へ

寛永元－11～〃16－8	徳川太政大臣家光	征夷大将軍（第3代）
〃17－9～慶安4－4	〃	〃（第4代）
慶安4－8～明暦3－1	右大臣家綱	〃（第5代）
万治2－8～延宝8－5	〃	〃（第6代）
延宝8－8～宝永6－1	綱吉	〃（第7代）
宝永6－5～正徳2－10	内大臣家宣	〃（第8代）
正徳3－4～享保元－4	家継	〃（第9代）
享保元－8～延享2－9	右大臣吉宗	〃（第10代）
延享2－11～宝暦10－5	家重	〃（第11代）
宝暦10－9～天明6－9	家治	〃（第12代）
天明7－4～天保8－4	太政大臣家斉	〃（第11代）
天保8－4～〃15－5	内大臣家慶	〃（第12代）
弘化2－2～嘉永6－6	〃	〃
嘉永6－10～安政5－7	〃	（第13代）
安政5－12～〃6－10	家定	〃（第14代）
万延元－11～文久3－11	右大臣家茂	〃（第14代）
〃	〃	〃
〃	〃	〃

皇居東御苑の本丸には家康から家茂まで14代の将軍が起居した。初代の家康は文字どおり徳川家の創始者だが、その道のりは決して平坦なものではなかった。幼くは今川義元の人質生活にはじまり、長じてのちも織田信長、豊臣秀吉の配下に甘んじた。「鳴かぬなら鳴くまで待とうほととぎす」。忍の1字を貫いた家康に最後のチャンスがやってきた。慶長5年関が原の合戦の勝利で天下の実権をおさめ、8年晴れて征夷大将軍に就任して江戸に幕府を開いた。2年後に世子秀忠に将軍職を譲ったが、自ら大御所として政治の実権をにぎり、大阪の陣で豊臣秀頼を滅ぼして後顧の憂いを一掃した。

つづく秀忠は偉大な父家康の薫陶をえて2元政治をつづけ、西の丸引退後は大御所として若い家光政権を指導した。家光は、酒井忠世、土井利勝、阿部忠秋の名補佐役をえて幕府の創業期を完成させる。江戸城の繁栄がきわまり、諸制度が確立した。茶道、書画の風流にも長じたが、弟忠長を自刃させ後世非難された。4代家綱は家光の急死で11歳のとき将軍職を継承するが生まれつき病弱でオジの保科正之、老中の松平信綱が補佐し、後期は大老酒井忠勝を重用、幕政はしだいに弛緩した。

家綱が急逝したあと、世子がなく後継争いがおこったが弟の綱吉が就任。初政は大老堀田正俊の補佐で綱紀を改革したが、正俊の横死後は実権をにぎった側用人柳沢吉保が政治を専横し、生母桂昌院、僧侶隆光のいいなりに生類あわれみの令を連発した。華の元禄とうたわれた繁栄の影で一般市民は悪政に泣いた。綱吉にも子がなく、兄綱重の子家宣を後継とした。賢明の誉れ高く側用人の間部詮房や新井白石の補佐をえて前代の悪政を改めたが3年で亡くなり、後継の幼将軍家継も夭折したので2代将軍秀忠の血統はすべて途絶えた。

本丸焼失のため西の丸へ	
本丸再建復帰	
本丸焼失のため西の丸へ	
本丸再建復帰	
館林家から養子	
甲府家から養子	
紀伊家から養子	
一ツ橋家から養子	
本丸焼失のため西の丸へ	
本丸再建復帰	
紀伊家から養子	
本丸焼失のため西の丸へ	
本丸再建復帰	
本丸焼失のため西の丸へ	

8代将軍を継承した吉宗は御3家紀伊藩主徳川光貞の3男。はじめ鯖江3万石の養子となったが兄2人が相ついで病死したので紀伊藩主となり、享保元年将軍家に迎えられた。側用人政治を廃止して将軍親政に復活、享保の改革をすすめて徳川家中興の英主と仰がれた。次の家重は吉宗の長男だが、幼少から言語障害がはげしく側用人の大岡忠光にすべてを託した。家治は田沼意次の専横に覆われ幕政にかかわることなく終わる。家治にも実子がなく一ツ橋治済の子家斉を11代将軍に迎えた。51年間にわたって親政を行ない、引退後も大御所として実権をにぎった。

13代将軍家定のときペリーが開国を要求し、多難な外交政策は阿部正弘らの幕閣にゆだねられた。家定にも世子がなく、生前から後継争いが表面化した。紀州慶福と一ツ橋慶喜が争い、井伊直弼が強権を発動して家茂（慶福）をすえた。家茂は公武合体のため皇女和宮の降嫁をいただいたが、慶応元年長州再征の大阪陣中で病死。幕末の風雲はますます急を告げた。東御苑本丸は文久3年焼失。最後の将軍慶喜の入城はなかった。

江戸城本丸大奥跡（千代田① 皇居東御苑）

文禄4－7～寛永元年	浅井江与	将軍秀忠の御台所
寛永元年～〃はじめ	鷹司孝子	将軍家光の御台所
明暦3年～延宝4年	浅宮顕子	将軍家綱の御台所
寛文4年～宝永6年	鷹司信子	将軍綱吉の御台所
宝永6年～享保2年	近衛熙子	将軍家宣の御台所
寛延2年～宝暦10年	五十宮倫子	将軍家治の御台所、西の丸へ
宝暦10年～明和8－8	〃	閑院宮直仁親王の娘
安政3年～文久3－8	島津敬子	将軍家定の御台所、浜御殿、西の丸から
文久2年～〃3－11	和宮親子	将軍家茂の御台所、仁孝天皇の皇女
家重の御台所比宮、家斉の御台所篤姫、家慶の御台所楽宮は本丸入りなし		

主要側室

天正18年～元和2年	万の方	将軍家康の側室、紀伊頼宣、水戸頼房の生母、代官町へ
〃～〃	勝の方	〃
慶長2年～〃	奈津の方	3の丸、小石川へ
〃中ころ～〃	六の方	〃
寛永年中～承応2年	楽の方	将軍家綱の生母、田安門へ
〃14年～天和3年	夏の方	将軍家光の側室、松平甲府綱重の生母
〃16年～慶安4－12	玉の方	〃将軍綱吉の生母
〃16年～正徳元年	万の方	3の丸へ
寛文10年～元禄元－11	伝の方	大奥取締
		〃将軍綱吉の側室、世子徳松の生母
		5の丸、3の丸へ

元禄年中	～宝永6年	大典侍の局	将軍綱吉の側室、北の丸、馬場先へ
宝永6年	～正徳2年	須免の方	将軍家宣の側室、世子大五郎の生母 馬場先へ
正徳2年	～正徳6年	左京局	〃 将軍家継の生母 吹上御苑へ
享保元年	～享保8年	古牟の方	将軍吉宗の側室、田安宗武の生母
〃 元年	～〃 6年	梅の方	〃 一ツ橋宗尹の生母
延享2－9	～延享5－2	幸の方	将軍家重の側室、将軍家治の生母
〃 2－9	～宝暦10－4	逸の方	西の丸、2の丸から清水重治の生母
寛延2年	～明和6－11	知保の方	〃 2の丸、西の丸へ 将軍家治の側室、世子家基の生母
天明7年	～文化7年	楽の方	西の丸、2の丸へ 将軍家斉の側室、将軍家慶の生母
寛政4年	～天保12年	宇多の方	将軍家斉2男2女の生母
〃 8年	～〃 12年	蝶の方	〃 4男2女の生母
文化3年	～〃 12年	美代の方	〃 智泉院、家斉墨付事件
〃 5年	～文化14－3	八重の方	将軍家斉6男2女の生母
〃 10年	～天保12年	以登の方	〃 3男2女の生母
文政5年	～文久2年	美津の方	将軍家慶の側室、将軍家定の生母2の丸へ
安政6年	～〃 3－11	みさの方	焼失で西の丸へ 将軍家茂の生母

忠長御殿、5の丸御殿跡　（千代田①　北はね、西はね橋内）
元和元禄元－11～宝永6年　徳川右中将忠長伝の方　甲府16万石　将軍秀忠2男
元禄2年～慶長はじめ　西の丸　詳細不詳　将軍綱吉の側室、世子徳松の生母

吹上左京局御殿跡　（千代田①　吹上御苑）
宝永6年～正徳2年　左京局　将軍家宣の側室、将軍家継の生母
正徳6年～宝暦2年　月光院左京局　本丸から復帰

大奥は将軍夫人、側室の居所であった。江戸時代、主人の公務の場を表、妻妾の生活の場を奥といったが、江戸城のそれは桁はずれで3万4千平方メートルにおよぶ本丸建造物の半分以上を占めた。表向とは2本のお鈴廊下でつながったが、将軍以外男子禁制。女だけが生活した。大奥は大きく3つに大別された。御殿向は将軍夫人御台所の生活の間、広敷は大奥広敷役人たちの事務所兼作業場、長局向は大奥女性の居室で、側室たちが係の女性たちをおいた。大奥には常時数百人が起居し、3人の上ろう、7人の年寄を中心に独特の組織社会を作った。この大奥で2代将軍秀忠夫人江与、家光夫人孝子、家綱夫人浅宮、綱吉夫人従姫以下14代将軍までの正妻と側室、生母などが起居した。

文禄西の丸跡　（千代田①　中の門内あたり）
文禄2年～慶長はじめ　西の丸　詳細不詳

大奥制度が確立したのは3代将軍家光時代で、自らの将軍就任に功労のあった春日局に大奥の実権のすべてをゆだねたが、局は大奥慣例を制度化、風紀を取締まった。しかし、一方で政治介入もめだち、横槍が歴代の幕閣たちを苦しめた。大奥は代々の将軍継嗣問題でも影響力を発揮した。5代将軍綱吉のとき両生母の夏の方、玉の方が対立、7代家継のとき左京局、須免の方、8代吉宗のとき月光院、天英院の争い、13代将軍の継嗣騒動では南紀家茂派、一ツ橋慶喜派に別れた。実子の将軍職就任運動は有力大名たちをまきこんで陰湿な暗闘をくりひろげた。また寛政の改革では老中松平定信に年寄大崎が、天保の改革で水野忠邦に姉小路がかみついた。大奥をあげて反対し、改革を失敗させたりもした。大奥は女ばかり、風紀の乱れを露呈した絵島事件と延命院事件などもあった。大奥の歴史も火事との戦いであった。明暦3年、天保15年の火災など江戸城と運命をともにし、文久3年を最後に永遠にその姿を消した。

西はね橋近くに5の丸御殿がおかれたこともあった。5代将軍綱吉側室伝の方の居館という。下級士卒の娘だが、綱吉の寵愛をうけて鶴姫と世子徳松を産み、綱吉と桂昌院を喜ばせた。しかしその徳松も5才で亡くなったので養子を決意することになる。世人は5の丸様、3の丸移転後は3の丸様と呼んだ。左京局は6代将軍家宣の側室で7代将軍家継生母。浅草住職の娘だが、甲府桜田屋敷につとめて家宣の手つきとなった。家継在職中は幼将軍生母として権勢をほしいままとしたが、没後は吹上御殿で静かな余生を送った。和歌をたしなみ、囲碁、将棋などの遊技にも通じた。

2の丸御殿跡　（千代田①　2の丸）
寛永7－5～寛永12年　茶室、庭園　将軍家茶室
〃 12年～〃 20年　2の丸御殿　将軍家別荘
〃 16－8～〃 17－9　徳川家光　征夷大将軍（第2代）本丸焼失のため仮本丸
〃 20年～慶安3－9　徳川家綱　将軍世子　西の丸へ　明暦3年焼失、同年再建
延宝7年～延宝8－8　〃 綱吉　将軍後継者　本丸へ上がる　延宝9年再建
正徳6年～享保元－8　〃 吉宗　将軍後継者　本丸へ上がる
享保元年～〃 10年　〃 家重　将軍世子　西の丸へ、延享4年焼失
宝暦10年～宝暦11年　〃 家定　大御所　再建
嘉永5－5～嘉永5－11　〃 家定　将軍世子　西の丸焼失、完成後復帰　文久3年焼失、慶応元年再建、慶応3年焼失

御台所と主要側室

元禄2－2～元禄2－11	桂昌院	将軍綱吉の生母　3の丸工事のため
享保16－9～元文6－2	天英院	将軍家宣の御台所　熙子

享保3－5～享保11－6	由利の方	将軍吉宗の生母
〃 7年 ～しばらく	久免の方	将軍吉宗の側室
宝暦10年 ～宝暦11－12	逸の方	清水重治の生母
寛保2－6～延享2－9	幸の方	将軍家治の生母
天明6年 ～寛政3年	蓮光院知保の方	将軍家治の側室、世子の生母
天保12年 ～嘉永3年	本輪院以登の方	将軍家斉の側室
〃 ～〃 4年	宝池院宇多の方	〃
〃 5－6	速成院蝶の方	〃
嘉永6年 ～しばらく	勝光院姉小路	将軍家慶の側室
文久2年 ～慶応3－12	本寿院みつの方	2の丸焼失、西の丸へ
〃 3年 ～文久3－8	天璋院篤子	将軍家定の御台所 2の丸焼失、西の丸へ
慶応元－4～慶応3－12	〃	再建復帰 2の丸焼失、西の丸へ

家康入城当時の2の丸は本丸と空濠をへだてた丘陵地で、江戸幕府開府直後の慶長12年、主郭工事のため本丸との間に白鳥濠を、3の丸との間に天神濠をひらいて独立した郭とし、寛永12年、3の丸の一部をけずって敷地をひろげた。3の丸からは大手下乗橋につづき、本丸には中の門、中雀門でつながった。2の丸には世子の殿舎2の丸御殿と金蔵、櫓7棟、多聞8棟、諸門10、番所などがあった。

2の丸御殿の前身は寛永7年、名人小堀遠州の造った茶室と庭園で、その美しさを桂離宮庭園とならび称された。しかし6年後の寛永12年には取りこわし、表御殿、奥御殿、大庭園をもった2の丸御殿に改めた。寛永16年、本丸火災のため3代将軍家光が仮本丸として1年余をすごし、20年に世子家綱の御殿とした。家綱は慶安3年、西の丸をへて本丸に迎えられる。わずか11歳。生まれつき病弱で夫人と側室をおいいたが子供がなかった。

延宝7年、家綱が亡くなって弟の綱吉が5代将軍に決まったとき、大手町の館林藩邸からこの2の丸御殿に移って、将軍後継者としての立場を明確にした。綱吉が本丸入りしたのは先代将軍関係者の身辺整理の終わった2か月後で、大奥も総入替えになった。

正徳6年、7代将軍家継が早世したとき紀伊徳川吉宗を推す月光院派と尾張徳川継友を支援する天英院派が次期将軍の座を争ったが、間部詮房が6代将軍の遺言として吉宗を指名し、かけつけた吉宗を迎え入れたのもこの2の丸御殿であった。政争に敗れた天英院もまた、享保16年、西の丸から2の丸に入居した。6代家宣の御台所で近衛関白家の令嬢だが、幼将軍を擁して権勢をほしいままにした側室月光院の陰で不遇を囲っていた。再起をかけた大勝負にも負け寛保元年、60歳の生涯を終えた。

9代将軍家重のライバル側室も2の丸御殿で生活した経験をもっている。寛保2年からの4年間は世子家治の生母幸の方が、代替わり後の宝暦10年から御3卿清水家創設者の徳川重治生母逸の方が住み、10代将軍家治の側室知保の方は長男竹千代を生んで世子生母となったが早世したので、将軍没後2の丸御殿に移ってひたすら家治の冥福を祈った。

文久元年、公武合体のため仁孝天皇の皇女和宮が14代将軍家茂のもとに降嫁されたが大奥は先代将軍夫人の天璋院が統制しており、公家風と武家風の違いが両者の確執を深めて反目しあった。3年、伝え聞いた天皇のおぼめしをもって天璋院が2の丸に引退。13代将軍家定が世子だった嘉永5年から、西の丸火災で住居を移したこともあった。2の丸御殿も度重なる災禍に遭遇している。明暦3年焼失、同年再建。延宝9年建替え。延享4年火災後は14年間の歳月をへた宝暦10年再建。文久3年焼失、慶応元年再建。しかし、わずか2年後の慶応3年12月に焼け、明治維新を迎えた。現在は近代的な洋風公園にかわっているが奥まった日本庭園は寛永時代を模して復元したものだという。

3の丸重臣邸（千代田① 3の丸）

慶長12年 ～寛永12ころ	阿部備中守正次	岩槻5万5千石
〃 ～〃 12ころ	青山大蔵少輔幸成	掛川5万石
〃 ～元和9年	青山播磨守忠成	岩槻4万5千石
〃 ～寛永9－5	酒井雅楽頭忠世	前橋8万石
〃 ころ ～元和8－8	岡田太郎右衛門利治	6百石程度
元和9年 ～寛永4－11	本多上野守正純	宇都宮15万5千石
寛永4－11～〃 12－2	酒井備後守忠利	川越2万石
元和9ころ～〃 12ころ	〃 讃岐守忠勝	8万石
慶長ころ	稲葉丹後守正勝	小田原8万石
〃 ～寛永ころ	青山図書助成重	下総国内1万石
〃	伊奈熊蔵備前守忠次	小室1万石
〃	加藤伊織則勝	1千5百石
〃	青山権之助成国、松風勘四郎、松雲	関東郡代 鷹総支配

3の丸御殿跡（千代田① 3の丸）

寛永20－7～慶安元年	3の丸御殿（初代）	将軍家別荘
正保3－1～正保4年	亀松御殿	将軍家光2男 早世
〃 3－1～〃 4年	徳松御殿	〃 4男 のちの将軍綱吉
〃 5－8～明暦3－1	3の丸御殿（2代）	将軍家別荘
延宝8－11～元禄2－2	桂昌院楽の方	将軍綱吉の生母
元禄2－11～宝永2－2	〃	工事のため2の丸へ
宝永6－4～元文3－6	瑞春院伝の方	3の丸御殿完成、復帰

3の丸脇清雲院御殿跡（千代田① 3の丸）

元和2年 ～明暦3年	清雲院奈津の方	将軍家康の側室 のちに小石川屋敷へ

江戸城の正門大手門すぐが3の丸で、郭は慶長12年の造営。初期のころここに幕府政治をすすめた年寄官邸をおいた。三井物産前の大手濠をこえた東御苑の濠端に家康重臣のひとり本多正純邸があった。隠居した家康にしたがって駿府で執政を勤め、家康没後2代将

軍秀忠の老中に加わったが、宇都宮釣り天井事件で失脚した。

3代将軍家光時代の大老酒井忠世邸も大手門すぐ右にあった。秀忠時代の慶長15年に老中にすすみ、家光時代は若手6人衆をひきいて大老にすすんだ。幕府の政治組織が整備、拡充されたもっとも大切な時期でもあった。酒井忠勝は酒井忠世につづく幕府体制確立期のリーダー。寛永元年家光新体制で老中、15年～明暦2年まで大老をつとめ、江戸城の完成、鎖国令の推進、諸制度の確立など幕政の近代化をはかった。寛永12年、江戸城総構え工事で郭外に転出。以後3の丸御殿、下勘定所、従者控え所などに代わった。

大手門の右、3の丸奥まった地に将軍家別荘ともいえた3の丸御殿があった。初代が寛永20年の竣工だが慶安元年に撤去して3代将軍家光の3男亀松と4男徳松御殿を造営した。亀松は1年後に早世したが徳松は成人してのちに5代将軍綱吉となる。慶安5年再び3の丸御殿を竣工。延宝8年からの25年間、5代将軍綱吉の生母桂昌院が住んだ。桂昌院は3代将軍家光の側室楽の方といい、八百屋の娘から従1位まですすんだ日本女性の出世頭といわれている。綱重を生んだ玉の方が生涯をかけたライバルで、その孫を養子に迎えるという結末も因縁を感じさせる。護持院の怪僧隆光と組んで生類哀れみの令を推進させた。

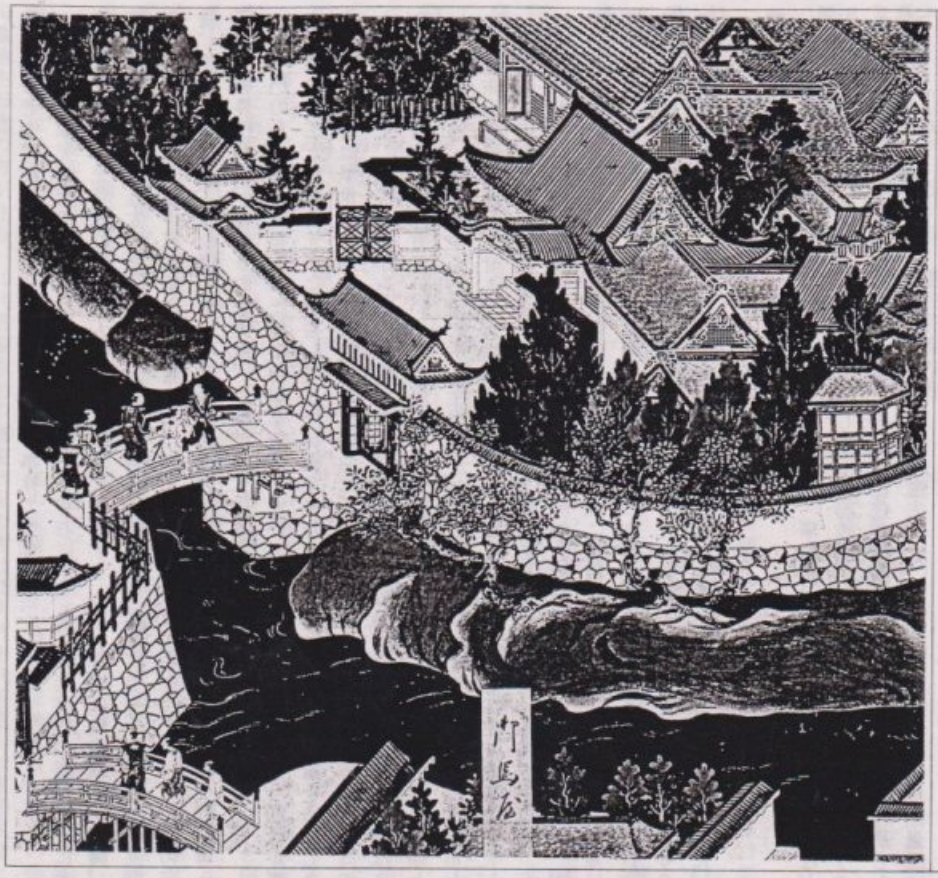
6代将軍家宣に変わった宝永6年からは前将軍綱吉の側室伝の方と大典侍を迎える。伝の方は早世した綱吉世子の生母で、大典侍は綱吉晩年の愛妾、北の丸様とも呼ばれた。綱吉の寵臣柳沢吉保が、綱吉を大典侍とともに北の丸に隠居させ、わが子吉里を次期将軍に擁立しようとしたとされる柳沢騒動で有名。奈津の方は家康後期側室3人衆の1人。17才のとき近侍し、大阪の陣、駿府政治にも供奉した。元和元年、家康の死去で江戸に移り3の丸に生活。明暦元年、幕命によりオイの係長谷川藤該を養子に迎えて一家を創設した。

明治以降の皇居東御苑

明治維新当時の東御苑周辺は大手門、内桜田門、平河門、北はね橋門、大手3の門などが健在であったが、城内主要施設を焼失して、幕府威信の低下を象徴しているかのようであった。明治5年、新政府は2の丸を中心とした残存建造物を統合して第1大隊屯所とし、百人番所、同心番所、大番所をのぞくすべてを撤去した。明治16年陸軍省御用掛測量図によると、本丸はその大半が東京鎮台工兵作業場、近衛工兵作業場で、天守台周辺に測候所、北はね橋周辺に内務省地理局、2の丸が教導団工兵作業場、3の丸内務省分析所などになっていた。陸軍省が東御苑からひきあげたのが明治20年で、21年には新皇居・明治宮殿の建設がきまり、東御苑にも皇宮警察署、主馬寮庁舎、馬車舎、馬場、人力車場などが置かれた。

すう密院が建設されたのもこの年。大日本帝国憲法審議のための最高諮問機関であったが、戦後新憲法発布で廃止されて現在の皇宮警察本部になった。また、明治後期図では中央気象台、内閣、調度局、爵位局、内閣文庫などがあった。中央気象台は気象庁の前身。関東大震災後に現在地の大手町1丁目に移転した。大正8年、本丸と2の丸、2の丸と3の丸をさえぎった白鳥濠と天神濠の一部を埋め立て、跡地に昭和20年から宮内庁病院に変わる倉庫などを建てた。この宮内庁病院でのちに美智子妃殿下が皇太子殿下を出産。昭和天皇の最後をみとることになった。

昭和20年5月の東京空襲では皇居明治宮殿を全焼したが、東御苑は大きな被害をうけることなく終戦。天皇は戦後の新憲法制定で国民の象徴とかわり、皇室財産は皇室、厚生省、宮内庁、大蔵省所管などに細分された。昭和35年、宮殿造営協議会答申をうけた閣議決定で、皇居東御苑の庭園化と一般公開を決める。この年から8年間の整備工事をへた昭和43年10月、21万平方メートルにおよぶ東御苑が一般公開された。開苑日は月曜と金曜、年末年始、特別行事日をのぞく毎日、入口で入苑証を受け取り、任意の出口で返却できる。現在、皇居東御苑の一画には楽部、書陵部、桃華堂と昭和はじめ建造の武術道場・済寧館、馬車調教や乗馬訓練の乗馬クラブなどがある。楽部は宮中雅楽の教育機関で、書陵部は歴代天皇手沢本などの禁裏伝来図書や徳川幕府紅葉山文庫貴重書などを保管している。



第2話　皇居、西の丸ものがたり

皇居の昔は局沢、紅葉山などとよばれ、畑や林、寺院などの点在する江戸市民の遊山の地であった。家康入城後もしばらくはこんな状況だったらしく、慶長7年図は空地になっている。西の丸が郭として経営されるのは関が原の合戦からしばらく後、慶長15年3月の江戸城工事で、奥羽、関東、信州の諸侯が担当したとされるが詳細は伝わっていない。工事がはじまったばかりのころ、石垣を積み上げているのをみた家康が土塁に改めさせたというエピソードが伝えられている。この結果、桜田濠一帯だけがゆるやかな傾斜をもったはちまき土居になった。西の丸郭東側前面は2重橋濠で背後は道灌濠が囲み、本丸に準じた備えになっている。慶長16年10月竣工。初代殿舎もこのとき完成して家康の隠居城と定められた。以来、6度におよぶ西の丸御殿が建て替えられたが、徳川時代を通じた将軍の隠居城、世子館で、その構成は本丸にならって表向、中奥、大奥にわかれた。

表向では大御所、世子が政務をとり、中奥はその居室、大奥に夫人らが生活した。本丸にくらべるとやや小さく、本丸が万一のとき将軍家族、大奥、幕閣らがそのまま移転してきた。寛永16年、明暦3年、天保15年、安政5年の4度にわたって仮本丸に、江戸時代最後の元治元年から慶応4年までの4年間は本丸となった。慶応4年、この本丸に鳥羽伏見の戦いにやぶれた15代将軍慶喜が逃帰り、この年の4月11日に無血開城された。家康入府以来2百77年7か月、太田道灌の江戸城創立から実に4百12年の歳月が流れていた。

旧江戸城西の丸の本丸境の小高い丘は紅葉山で、ここに家康以下歴代将軍の霊廟がおかれた。家康の東照宮は元和4年に完成し、以後歴代将軍廟が追加された。この廟に毎月17日、将軍、譜代諸侯、幕閣が参詣した。諸大名が大紋烏帽子を着用したことから大紋行列とよび、将軍は大広間玄関から奥で紅葉山に向かった。明治維新後の明治元年12月撤去。紅葉山には宝蔵が6棟あった。うち3棟が将軍の武器蔵で残り3棟は書庫。書庫は慶長7年、家康が作った富士見文庫を寛永16年に移設した。明治政府に引き継がれた書物は現在も内閣文庫として保存されている。

西の丸にも城門と櫓が多い。正門の西の丸大手門は現在の2重橋手前の石橋で、高麗門をくぐると枡型と本瓦葺の渡櫓がひかえ、1の門と2の門が平行していた。6～10万石クラスの譜代大名が鉄砲20丁などを常備して警護にあたった。明治21年、明治宮殿の造営にあたって高麗門を撤去、木橋を石橋に改めた。現在は特別な来客や天皇の公式外出以外終日閉門されている。ついで中仕切門があり、50メートルほどすすむと2重橋門にでる。江戸時代西の丸大手橋、西の丸下乗橋とよばれた主要城門で、石垣を2重に積上げ、その上に橋ゲタと橋杭をおく特殊構造で城外からみると2重にみえた。明治21年に長さ32メートル、巾11メートルの鉄橋に改め、昭和39年に架替えされた。大橋は寛永元年、2重橋は慶長19年架橋という。城内には西の丸玄関門、坂下門、西の丸裏門、山里門、太田門など28

門が知られ、紅葉山にも6門が記録されている。櫓は伏見櫓が1ここで多聞が5こ。その1こしかなかった櫓が現存している。皇居前広場から石橋右手にみえる伏見櫓で寛永6年、豊臣秀吉の伏見城櫓をわざわざ解体して江戸に運んだ。

西の丸跡　（千代田①　皇居新宮殿、宮内庁周辺）

慶長16－7～元和2－4	徳川家康	主に駿府に在住
元和3－11～〃8－4	〃家光	将軍世子
〃8－4～〃9－8	〃秀忠	征夷大将軍（第2代）本丸修築のための仮本丸
〃9－8～寛永元－4	〃家光	将軍世子
寛永元－9～〃9－1	〃台徳院秀忠	大御所
〃9－5～〃11閏7	酒井雅楽頭忠世	留守居役
〃16－8～〃16－8	徳川太政大臣家光	征夷大将軍（第3代）本丸焼失のための仮本丸、2の丸へ
慶安3－9～慶安4年	〃右大臣家綱	征夷大将軍（第4代）西の丸修築、本丸へ
明暦3－1～万治2年	〃	本丸焼失のための仮本丸へ上がる
宝永元年～宝永6年	〃家宣	将軍世子
享保10年～延享2年	〃家重	〃
延享2年～〃10年	〃有徳院吉宗	大御所
元文2年～〃	〃家治	将軍世子
明和6年～安永8年	〃家基	〃　早世
天明元年～天明6年	〃家斉	本丸へ上がる
寛政4－12～寛政5年	〃竹千代	〃　早世
天保8年～天保9－3	文恭院家斉	本丸へ上がる
〃10－4～〃12年	〃大御所	大御所
〃15－5～弘化2－2	〃内大臣家慶	西の丸焼失
弘化ころ～嘉永5－5	〃家定	西の丸再建復帰
嘉永5－11～〃6－10	〃将軍世子	征夷大将軍（第12代）本丸焼失のための仮本丸
安政6－10～文久元－11	〃右大臣家茂	本丸焼失のため2の丸へ
元治元－7～慶応2－8	〃	西の丸再建復帰
慶応2－12～〃4－4	〃　慶喜	征夷大将軍（第14代）本丸焼失のため仮本丸
		本丸焼失のため以降本丸
		水戸、一ツ橋家から養子

西の丸大奥跡（主要者のみ）　（千代田①　皇居新宮殿、宮内庁周辺）

元和9年～寛永元年	鷹司孝子	世子家光の御台所　北の丸へ
寛永元年～〃3年	浅井江世	将軍秀忠の御台所
明暦4－5～万治2－9	浅宮顕子	将軍家綱の御台所、伏見宮貞清親王の娘
宝永元年～宝永6年	近衛熙子	将軍家宣の御台所　本丸へ上がる
〃正徳2－10	須免の方	将軍家宣の側室、世子大五郎の生母
〃ころ～〃2年	古牟の方	〃　馬場先へ
〃2年～〃16年	天英院近衛熙子	将軍家宣の御台所　浜御殿、2の丸へ
〃16－12～〃18年	比宮増子	将軍家重の御台所、伏見宮邦永親王の娘
享保20年～寛保元－6	幸の方	本丸入りなし
元文2－2～延享2－9	逸の方	将軍家治の生母　2の丸をへて本丸へ上る
宝暦4－12～宝暦10年	五十宮倫子	清水重治の生母　将軍家治の御台所、閑院宮直仁親王の娘
〃11－12～明和4年	逸の方	清水重治の生母　西の丸下、桜田御用屋敷へ
明和7－6～天明6－9	知保の方	世子家基の生母　2の丸へ
天明元年～文化14－5	登美の方	将軍家斉の生母
〃元－9～天保15年	近衛篤姫ただ子	将軍家斉の御台所
文化元年～〃8年	楽宮喬子	将軍家慶の御台所、有栖川宮幟仁親王の娘
天保12－11～嘉永元－11	鷹司任子	浜御殿へ
嘉永2－11～〃3－6	一条秀子	世子家定の御台所
文政5年～慶応4－4	実成院みさ	〃
安政3年～文久2年	天璋院篤子	将軍家茂の生母　清水屋敷へ
文久3－8～慶応元－4	〃	将軍家定の御台所　本丸へ上がる
〃3－11～〃4－4	静寛院和宮親子	2の丸へ
慶応2年～〃4－4	今出川美賀子	将軍家茂の御台所　清水屋敷へ
〃3－11～〃4－4	本寿院美津	将軍慶喜の御台所　水戸屋敷へ
〃3－12～〃4－4	天璋院篤子	将軍家定の生母　一ツ橋屋敷へ
		一ツ橋屋敷、尾張下屋敷へ

西の丸殿舎は家康の隠居城として作られたが、本人は駿府に居住したのでほとんど在城することなく終わり、元和3年、14歳の家光が西の丸入り、以後代々の将軍がこれにならって大御所、世子居所とした。元和9年、2代将軍秀忠が隠居し、家光は上洛して3代将軍に就任する。将軍と大御所の住居を交代するため、寛永元年8月西の丸修築工事を完工、秀忠家族と旧幕閣らは西の丸に移った。家光初政の10年間はこの西の丸を中心に大御所政治を展開した。家光上洛中の寛永11年閏7月、西の丸台所から出火。この年大名火消制度が開始されたばかりで諸大名は火事現場に入れず小人数がモタモタしている間にたちまち全焼してしまった。この時の留守居は老中筆頭の酒井忠世であったが、責任を感じて謹慎、老中を辞退した。寛永13年3代西の丸御殿を再築、10歳の世子家綱が入居したが、翌年家光の突然の逝去で4代将軍として本丸に移った。慶安4年、再び殿舎を大改造。この殿舎はその後百87年間火災にあわなかったので、家宣、家重、家治、家斉が世子時代、吉宗、家斉が大御所時代をおくった。

天保9年12月、西の丸台所から出火。この時は定火消、町火消、諸大名が消火にかけつけたが、火の廻りが早く全焼。大御所家斉は山里から吹上お庭にのがれ、大奥女性らも着のみ着のまま本丸広敷に移った。再建は天保10年だが、13年後に再び焼失し、嘉永5年12月にまたまた復旧した。

米国艦隊ペリーの来航は幕府政治を根底からゆさぶることになった。これを契機におこ

った尊皇攘夷のあらしは荒波のように徳川政権におおいかぶさってくる。万延元年には井伊直弼が桜田門外に倒れ、幕府の権勢も失墜する。はげしい将軍継嗣闘争をへて14代将軍に就任した家茂期の文久3年6月、麻布西久保通り周辺の大火が江戸城に飛火、本丸は大事にいたらず消し止めたが、西の丸の火は伏見櫓と下乗橋をのぞくすべてを灰燼と化した。城内には放火説がとびかい、奇怪事件がつづいて将軍も枕を高く休むことができない。

西の丸の再建計画もたたない同じ年の11月に今度は本丸と2の丸が全焼。江戸城内に本丸、2の丸、西の丸がないという由々しき事態になった。将軍家はひとまず御3卿の徳川清水邸を仮本丸とした。江戸城再建計画は緊急課題であったが、内外多事、財政不足のため本格建造ができない。とりあえず仮殿舎を西の丸に建造することとし、工事は翌元治元年7月に完成した。この建物は以降の4年間江戸城の本丸となる。慶応2年7月、14代将軍家茂が第2次長州征伐惨敗のなか急逝、21歳の若さであった。15代将軍には水戸家出身で御3卿徳川一ツ橋家に養子となっていた慶喜が就任した。慶喜は幕府権威の立直しをかけて、幕政の改革に取組む。老中板倉勝静、稲葉正邦を中心に若手有能者を登用し、フランス公使ロッシェを顧問に迎えて洋式軍政に取組んだ。

しかし、一方で有力大名や志士たちによる倒幕計画も着々すすめられていた。慶応3年10月、諸般の情勢を勘案した慶喜は意表をついて大政の奉還を上書し勅許をえる。慶喜の真意は引き続く新体制でのトップにあった。同じ日、倒幕の密勅が薩長軍にくだる。慶応4年1月、大義によって君側の奸を一掃するとした幕府軍とあくまで倒幕に執念を燃やし錦旗をなびかせた薩長軍が鳥羽伏見に激突した。その数、薩長軍5千で一方の幕府軍は1万5千人。3倍の幕府軍にいどんだ薩長軍の士気が上回った。敗走する幕府軍は淀城にさがったが、薩長軍に寝返っていた淀勢の砲火をあびて全軍総くずれとなった。慶喜が大阪城を脱出して江戸に逃帰り、徳川氏の覇権奪還の夢はついえた。慶喜は上野寛永寺に謹慎。江戸開城の行われた4月11日早暁、わずかな供に付添われて静々と水戸に退いた。

西の丸大奥は大御所や世子夫人を中心に本丸とまったく同じ機能をもっていた。西の丸が仮本丸になった最後の4年間に皇女和宮が住んだ。仁孝天皇の8女親子内親王で母は藤原経子。14歳のとき有栖川宮熾仁親王との婚儀をととのえるが、公武合体を策した幕府の執拗な要請に婚約を解消して江戸へ下った。その後、公武合体が失敗し、朝廷と幕府がことごとに対立したので心休まることがない。慶応2年夫の14代将軍家茂が大阪の陣中で急逝したので落飾。維新後の明治2年、新政府から家禄千石、化粧料3百石が与えられた。

最後の将軍慶喜夫人は美賀子で一条忠香の養女。慶喜が御3卿徳川一ツ橋家時代の安政2年に結婚。大奥に1年半ほど住んだ。江戸開城当時、大奥には13代、14、15代将軍の生母、夫人が同居したが、慶応4年4月11日が開城日と決まると、6日に慶喜夫人が水戸藩邸に、9日家茂夫人と生母が清水邸、10日に家定夫人と生母らが一ツ橋邸に退出した。

明治以降の皇居

明治元－4～明治元－8	大総督府		
〃　元－5～〃　元－7	江戸鎮台		
〃　元－7～〃　元－10	鎮将府		
〃　元－10～〃　元－12	明治天皇睦仁親王	天皇家	遷都　皇居とする
〃　2－3～〃　2－4	侍詔局		
〃　2－4～〃　6－5	明治天皇睦仁親王	天皇家	
〃　22－1～〃　45－7	明治天皇睦仁親王	天皇家	明治元－10行宮、同月東京城、2－3皇城と改称 明治6－5焼失、赤坂離宮（旧紀州邸）を仮皇居とする 明治宮殿竣工復帰
大正4－11～大正15－12	明治天皇睦仁親王	天皇家	明治21－10宮城と改称
昭和3－11～昭和20－5	昭和天皇裕仁親王	〃	昭和20－5戦災焼失、吹上御苑お文庫、東御苑宮内庁内を仮皇居とする　昭和23－7皇居と改称
〃　43－10～〃　64－1 平成2－10～現在	昭和天皇裕仁親王 平成天皇昭仁親王	天皇家 〃	宮殿再建復帰

慶応4年4月11日、江戸城の新政府軍への引渡しは梅江田武次、木梨精一郎ひきいる尾張、薩摩、長州、熊本、備前、大村、佐渡原7藩の兵士によって行われた。新政府軍城受取隊の一行が西の丸下に隊列を編成して待機するなかを代表者が城内に入り、迎入れる幕臣もわずか。江戸城の関係者らはすでに徳川清水邸などに移動していたので、とくに抵抗もなく事務的に行われた。江戸城には有栖川宮熾仁親王の率いる大総督府が入り、官軍の本拠となった。

慶応4年5月、江戸城内に江戸鎮台（後出東京鎮台とは別組織）をおいた。鎮台の名は奉行の唐名。新政府は旧幕府時代の名称をきらって千年以上も前の職名を復活させた。鎮台は行政官の1つとされたが、その長は有栖川宮が兼任。非常体制下で軍政をしいた。年号を明治とした10月、明治天皇が江戸に到着。江戸城を東京城と改称、すべての行政を天皇の親政とする旨の詔勅がだされた。明治天皇はいったん京都に還幸されたがほどなく復帰し、西の丸をもって皇城と定められた。恒武天皇以来実に千年におよんだ京の都を江戸に移す、東京遷都が実現することになった。明治維新とともに変革の時代を迎える。明治2年6月版籍の奉還を、こえて4年7月には廃藩置県が実施された。

新体制の中心地となった明治6年5月、皇城女官部屋から出火。ぐれんの炎はまたたくまに皇城を焼きつくした。明治天皇はいったん吹上お庭にのがれたが、その日のうちに赤坂の旧徳川紀伊邸に移り、赤坂離宮を仮御所と決定した。皇居の再建計画は火災翌7年か

ら始まったが、征韓論に敗れた西郷隆盛による西南戦争など世相の緊張がつづいて機運が定まらない。ようやく明治17年に着工し、21年10月に竣工された。建築面積が1万6千平方メートル、総工費は当時のお金で5百万円かかった。旧西の丸の地に表宮殿、一段高い山里に天皇、皇后の居室奥御殿をつないだ。表宮殿の外観は平安内裏の流れをくんだ純和風宮殿づくりだが、内部は洋風装飾で、格天井に華麗なシャンデリアをさげた。和洋折衷の宮殿に天皇が謁見する正殿と鳳凰の間、饗宴所の豊明殿、控所にあたる溜の間などがあった。技術の粋を集めたこの宮殿は当時、木造建築として世界屈指とされた。

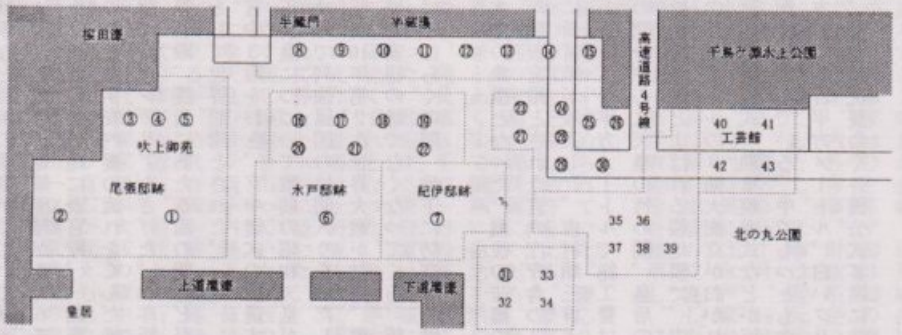
宮殿から離れた吹上お庭に賢所、皇霊殿、神殿の宮中3殿をおき、宮中儀式の設備すべてをこの宮殿にそろえた。この宮殿で明治天皇、大正天皇につづいて戦前の昭和天皇が執務をとられた。この間わが国は富国強兵への道をあゆんで列強諸国の仲間入りをはたしたものの、軍指導による戦時色を一段と強めていた。昭和16年第2次世界大戦が勃発。戦況の進展とともに米軍機による帝都襲撃がはじまり宮城も安穏の地でなくなってくる。昭和20年5月の東京大空襲で明治宮殿を焼失。天皇一家はしばらくの間、地下に防空濠を備えたお文庫に生活された。

昭和20年8月15日終戦。新憲法の発布で天皇は日本国の象徴となった。戦後の苦難の時代をへた昭和36年お文庫の地に吹上御所が完成。9年間仮宮殿とされた宮内庁庁舎の3階から移転された。こえて昭和43年旧明治宮殿の一部に新宮殿が竣工した。吉村順三博士の設計で、鉄筋コンクリート2階、地下1階、延面積が2万3千平方メートルで総工費は百33億円かかった。宮殿儀式を行なう正殿は中央の松の間を中心に天皇の竹の間、皇后の梅の間、3室が1殿で、天井が8メートル、壁面は若松紋様浮織とよばれる裂地張で、中央正面に金糸に大王松を織りなした高さ4メートル、巾15メートルの3曲大衝立がおかれ、天皇、皇后の椅子が配備されている。ここで新年祝賀式や親任式、勲章親授式などが行われる。宮殿はこの正殿を中心に左右の5棟14室を回廊でむすんでいる。中でもっとも大きな建物が豊明殿で宮中の大宴会場になる。室内は長方形で9百平方メートル。白いクリスタルシャンデリアに中村岳陵えがく豊旗雲がはえる。国賓の晩餐会や各種公式宴席に使用されている。

長和殿は春秋の間、松風の間、波の間などが連なり、長さ百60メートル。新年と天皇誕生日の国民一般参賀では天皇ご一家がこの表廊下からごあいさつされる。国民参賀が始まったのは戦後の昭和23年で、当初は芝生の明治宮殿焼け跡に誘導、仮宮殿の宮内庁屋上や仮設お立台で天皇ご一家が国民の祝意にこたえたが、昭和29年に先をいそいだ祝賀の列が押倒され多数の死傷者をだすという労しい事故も起こった。坂下門入ってすぐの白い3階建てコンクリート建築は宮内庁庁舎で、昭和10年の建造。27年からのひととき3階の長官室と食堂を改造して仮宮殿とした。前身の宮内省は明治2年の創立で、戦後24年総理府外局としての宮内庁に組織変更された。桔梗門内の皇宮警察本部は明治19年の創設で戦後宮内省の管轄をはなれて警視庁、国家地方警察本部、警察庁所属に変わった。皇室一家の護衛、皇居警備などを担当している。

第3話　皇居吹上御苑ものがたり





太田道灌当時の吹上御苑周辺は千鳥が淵川（現在の外濠）が迂回して谷地をつくった天然の高台で、皇居側は同じく自然の渓谷を利用した外濠（現在の道灌濠）、北の丸公園のある田安台とも千鳥が淵の池でさえぎられていた。古くは松原、鼠穴などといい、吹上御苑から皇居、北の丸公園にかけての一画に山王社、多聞院、三光院などの寺社が点在していた。家康の江戸入府にあたり、領内各地の直轄地をおさめる代官住居としたので代官町ともよばれた。慶長7年ころとされる江戸古図にはお代官衆、尾張持分、山野殿、竹のこし持分、年寄衆、番衆、既、見はり所、竹やぶなどの記載がある。尾張は松平尾張中将忠吉のことで、家康4男。2代将軍をつぐ秀忠のすぐ下の弟で母を西郷局といった。関が原の合戦の戦功で尾張57万石を得たが、慶長12年28歳の若さで亡くなった。

半蔵門から千鳥が淵にかけての代官町郭が完成するのは、慶長11年の江戸城工事とみられ、外郭石垣は藤堂高虎、細川忠興、前田利光、池田輝政らが担当したが分担箇所が伝わっていない。完成直後、慶長12年江戸図には勘定奉行大久保長安、老中本多正信らの名前があるが、半蔵門周辺は未完成らしく空き地や谷地、竹やぶなどがめだっている。半蔵門から桜田門にいたる通称、弁慶濠とよばれるあたりは慶長16年3月に起工して7月に完成。伊達政宗、鍋島勝茂らが工事を担当した。ゆるやかな斜面をもった土塁のうえに低い石垣をめぐらせ、いただきに老松の緑がはえている。江戸城で唯一作りが違うこのあたりの景色を1番だとする人が多い。

元和年間、代官町吹上御苑の地に御3家が賜邸された。尾張義直、紀伊頼宣、水戸頼房。いずれも家康晩年の子で、秀忠2男の駿河大納言忠長もまた、このころ吹上御苑の一画に邸地を受けたが、寛永7年改易、自害を命ぜられた。明暦3年1月の大火は江戸の大半を焼き払った。代官町の御3家も焼失し、火の粉は道灌濠をこえて江戸城に飛火。本丸、天守閣などの主要建物も炎上した。明暦大火の被害の大きさにこりた幕府は大火後の復興計画に取りかかった。北条正房、渡辺信貞に詳細な市街実測を命じ、これをベースに火災防止対策をおりこんだ都市計画が実施された。吹上の地にあった御3家邸も、本丸近くに宏壮な邸宅があれば飛火しやすいというので城外に移されることになり、尾張、紀伊家は麹町に、水戸家は小石川に広大な代地が与えられた。

跡地は大半が火よけ空き地とされたが、一部に大名邸、旗本邸が残り、火消組屋敷、鉄砲火薬庫、米蔵などもおかれた。宝永2年そのすべてを撤去、同7年に吹上御苑の前身にあたる吹上お庭が完成した。半蔵門は江戸城6門のひとつで、当初は土橋、元和4年浅野長あきらが地形を築き、6年奥羽諸候が枡型と渡櫓を作った。菊の間詰めの1万石クラス大名が守ったが、明治3年渡櫓を撤去。昭和20年の東京大空襲で高麗門を焼失し小門だけになった。門を入って方形の枡型があり、いったん右にまがって渡櫓をくぐると大番所が

あった。半蔵門の名は家康時代、伊賀衆忍者で鬼の半蔵と恐れられた服部正就邸が門前におかれたことに由来した。

資料図1-1～5　（千代田①　生物学研究所、吹上護衛所、浄水場）
元和2-12～慶安3-5　徳川大納言義直　名古屋62万石　将軍家康9男
慶安3-6～明暦3-5　〃　権大納言光友　〃　尾張家付家老
元和はじめ～寛永15ころ　竹腰山城守正信　今尾3万石
〃2年　～承応ころ　成瀬隼人正正成　犬山3万石　〃
寛永ころ　徳川水戸藩向屋敷
明暦3ころ～元禄11年　坊主衆屋敷　古川春喜、樋口松サイ、石井永トク、川井休古、高木センソウ、江間七春、伊藤道介、田島トウタン、田島宗与、高野宗清、河津雪斉、高木喜宗
〃4-5～寛文3-12　土井能登守利房　下妻2万石　のちに老中
寛文3-12～貞享2-6　石川若狭守総良　神戸2万石
貞享2年　～元禄6-4　〃　辺江守総茂　〃　1万7千石
明暦3ころ～宝永2年　塩しょう蔵、鉄砲薬蔵　別資料　元禄11年まで
〃3-5～〃7年　火除け空き地、植留
宝永7年　～現在　吹上お庭、吹上御苑（以下すべて同じ）

資料図1-6、7　（千代田①　賢所御所周辺）
慶長12年　～元和4-2　水野監物忠元　山川3万5千石
〃　ころ　長谷川久三郎政吉　4千7百石　将軍秀忠小姓
〃　ころ　興津三十郎直勝　1千石　興津直景の嫡子
〃　ころ　戸田半平光正　8百石　大番組頭
〃　ころ　三井左衛門佐忠正　1千5百石　御徒頭
〃　ころ　岡部庄左衛門、伊丹善助、浅見久兵衛、にしな検校、市川伝三郎、花井三九、吉田朱慶、空き地、谷
元和2-9～寛永元-4　徳川中納言頼房　水戸35万石　将軍家康11男
寛永元-4～〃　元-10　徳川家光　征夷大将軍（第3代）
〃　元-10～明暦3-5　徳川中納言頼房　本丸工事のため仮本丸
元和4-2～〃　3-5　徳川大納言頼宣　和歌山55万石　将軍家康10男
明暦3-5～　火除け空き地（以下資料図1-1～5参照）　（前出）　復帰

皇居吹上御苑奥深い生物研究所のあたりに御3家筆頭の徳川尾張家上屋敷があった。尾張家の藩祖は家康の9男義直で、母を亀といった。5才のとき甲斐24万石をえ、次いで尾張に転封して名古屋城を築いた。録高は61万石で従2位大納言。義直が上道濠と桜田濠に接した1万坪におよぶ吹上の地を拝領したのは元和2年のことで、4年間の工事をへた6年閏12月に新第を竣工。しかし、築後1か月にすぎない翌7年正月に焼失したので再度建て直し、9年2月に大御所家康、兄の2代将軍秀忠のお成りが実現した。

寛永15年には嫡子光友と3代将軍家光の長女千代姫との婚儀が整い、邸内に豪華な新婚御殿を造営。尾張邸は屋根にシャチホコをのせた切妻造唐破風檜皮葺きのお成門と4脚瓦葺きの表門を江戸城側に構えた豪壮な桃山建築で、玄関、遠侍、大広間とつづく殿舎は檜皮葺き入母屋で、大破風にみごとな彫刻をほどこした。

水戸邸はその尾張邸の北隣にあった。徳川頼房は家康の11男で母は万の方といった。3歳で下妻10万石、6歳のとき水戸に栄転して35万石、従3位権中納言にすすんだ。頼房は家康の没後江戸に定住して藩政は城代や家老に代行させたので、世人は副将軍と崇めた。吹上御苑邸の豪華さは尾張家とほぼ同様、寛永時代とされる『江戸図屏風』に金色に目映いお成り門が記載されている。元和2年邸地を拝領し6年暮竣工。寛永元年2月、兄将軍秀忠とオイの世子家光のお成りがあり、この年、江戸城本丸、西の丸工事のため将軍住居を一時ここに移した。

吹上お庭御3家邸の1番奥、吹上御所近くにあった紀伊藩邸に徳川頼宣が住んだ。頼宣は家康の10男で生母は水戸頼房と同じ万の方。2才のとき水戸20万石を受け、次いで55万石で和歌山に入封した。従2位大納言。初代藩主として城下町を整備し藩政を確立した。吹上邸は元和4年の拝領で竣工は6年12月。3家ともほぼ工期を同じくしており、城大工が絢爛と技術の粋を競いあった。寛永元年1月、秀忠と家光がお成り。明暦3年の大火で焼失、赤坂御所の地に移転した。

吹上護衛所周辺に尾張家付家老の竹腰正信と成瀬正成邸があった。竹腰正信は家康晩年の側室亀前夫の子で、亀が尾張義直を生み異父兄弟となったので、義直が尾張に封じられたとき付家老に迎えられた。成瀬正成は関が原の合戦の行賞で3万2千石をえ、駿府老中のとき家督を之幸に譲って同じく義直の付家老となった。明暦大火後、尾張邸の一部はのちの老中土井利房邸となり、江戸城茶坊主屋敷、鉄砲火薬庫などがおかれたが、宝永年間にすべてを撤去した。

資料図1-8　（千代田①　吹上御苑）
慶長12年　～寛永5-11　三浦半三郎正次　5百石　大番頭
寛永はじめ～〃　15-3　服部玄蕃頭政久　1千石　書院番組頭
正保ころ　～明暦元-2　筒井内蔵忠重　1千4百石　留守居役
明暦元-9～天和3-2　〃　忠助　1千9百石　〃
天和3-7～元禄11年　〃　忠清　1千5百石　寄合
元禄11年　～　火除け空き地（以下資料図1-1～5参照、以下同じ）

資料図1-9　（千代田①　吹上御苑）
慶長12年　～寛永ころ　朝倉藤十郎宣正　掛川2万6千石　徳川駿河家付家老
寛永ころ　～慶安3-11　朝倉岩見守在重　2千石　町奉行

慶安3－12～延宝4－10	朝倉仁左衛門重宣	2千石	留守居
延宝4－11～元禄元－7	〃　景宣	1千7百石	駿府番衛
元禄元－12～〃2－7	〃　亀之丞景豊	〃	
〃3－4～〃　11年	仁左衛門景儀	3百石	書院番

資料図Ⅰ－10

慶長ころ	（千代田①）		
正保ころ	吹上御苑）		
不詳	大久保弥十郎某	不詳	
寛永元年～〃ころ	牧野佐渡守親成	関宿3万2千石	京都所司代
不詳～万治2－10	輿津兵庫良信	2百俵	中原代官
万治2－10～元禄11年	〃　庄蔵某	〃	〃　無嗣廃絶
	中山勘三郎直範	5百石	将軍家綱小姓
	中條左京信慶	5百石	別資料　明暦3－10拝領

資料図Ⅰ－11

慶長ころ	（千代田①）		
	吹上御苑）		
	榊原隼之助忠重	4百石	留守居役
寛永ころ～寛永14－3	陰山因幡守貞広	1千2百石	書院番士
正保ころ～万治2－2	中根大隅守正成	5千石	大番頭
〃～延宝元－3	〃　日向守正勝	6千石	〃
延宝元年～元禄10－11	〃　大隅守正延	〃	〃

資料図Ⅰ－12

慶長12年～（千代田①）			
元和9年～明暦2年	吹上御苑）		
明暦2年～〃3ころ	輿津内記忠能	1千7百石	書院番
〃3ころ～元禄11年	〃　忠行	1千2百石	屋敷改
	〃　忠直	〃	小姓組
	伊沢源右衛門政季	3百俵	

資料図Ⅰ－13

慶長ころ～寛永ころ	（千代田①）		
正保ころ	吹上御苑）		
明暦ころ～元禄11年	某　珍阿弥某	不詳	
	本多播磨守信吉	1千2百石	同朋
	松平次郎兵衛清行	9百俵	将軍綱吉もり役
			小納戸

資料図Ⅰ－14

慶長12年～元和8－5	（千代田①）		
元和8年～承応元－3	吹上御苑）		
承応2－3～貞享元－7	矢部掃部定清	4百40石	細工頭
貞享元－7～元禄元－6	〃　七左衛門定勝	〃	〃
元禄元－6～〃　11年	〃　四郎兵衛定房	〃	小普請
	〃　平左衛門定長	〃	
	〃　定則	〃	大番

資料図Ⅰ－15

慶長12年～寛文9－2	（千代田①）		
寛文9－3～延宝2－6	吹上御苑）		
延宝2－7～元禄10－11	伊沢隼人正政信	2千2百石	留守居役
	〃　政成	〃	小姓組番頭
	〃　播磨守正久	3千2百石	書院番頭

半蔵門入ってすぐ半蔵濠ぎわの地は鼠穴とよばれ、江戸時代はじめ代官たちの官邸になっていた。この一画に朝倉宣正邸があった。越前1国を領有した朝倉孝景の嫡流で、秀忠に属して上田7本槍とうたわれた。掛川2万6千石のとき徳川駿河忠長の付家老となったが、忠長の廃絶にあたって、老職の責務をはたさなかったとして断絶された。次の朝倉在重も一族。大阪の陣の戦功で秀忠側近にすすむが景豊のとき無嗣廃絶。養子再興後の石高は7割ダウンの3百石であった。牧野親成は4代将軍家綱の側近で京都所司代をつとめて田辺3万5千石に栄進した。

陰山家は鎌倉公方足利持氏の子孫で、貞広が千4百石の旗本として取立てられた。中根正成は2代将軍秀忠にしたがって5千石をえ、次の正勝のとき6千石にすすんだ。本多信吉は家康大番頭として2百20石をえた信勝の2男。2代将軍秀忠の小姓組から4代将軍家綱もり役にすすみ千2百石取りとなった。伊沢家は武田氏旧臣で、政信が2代将軍秀忠に仕えて旗奉行、鉄砲組の長などにすすみ、正久のとき加禄、3千2百石となった。

資料図Ⅰ－16、20

慶長ころ	（千代田①）		
	吹上御苑）		
	日下部伊予守某	不詳	
元和ころ～承応3－10	西尾隠岐守忠昭	田中2万5千石	
承応3－12～元禄2ころ	〃　忠成	小諸2万5千石	
延宝はじめ～〃　2ころ	西尾小諸藩添屋敷（または中屋敷）		

資料図Ⅰ－17

慶長12年～元和元－6	（千代田①）		
元和元年～天和2－3	吹上御苑）		
〃2－7～貞享2－4	倉橋内匠助政勝	5千石	将軍秀忠小姓
貞享2－7～元禄2ころ	〃　久盛	3千石	先弓頭
	〃　兵之助久政	2千俵	小普請
	〃　内匠助久富	2千石	新番頭

資料図Ⅰ－18

慶長ころ	（千代田①）		
正保ころ～明暦3ころ	吹上御苑）		
明暦3ころ～寛文7－8	小泉甚之丞某	不詳	
寛文7年～元禄2ころ	土屋長三郎政重	7百石	書院番士
	江原与右衛門宣全	2千石	目付
	〃　甚右衛門全村	1千7百石	進物役

資料図Ⅰ－22

慶長ころ～寛永ころ	（千代田①）		
	吹上御苑）		
	川村善次郎重久	1千3百石	将軍家光もり役

資料図Ⅰ－19、21

慶長ころ～寛永ころ	（千代田①）		
承応ころ～明暦2－5	吹上御苑）		
明暦4－5～延宝3－8	本多百助信勝	7百石	総堀奉行目付
延宝3－10～元禄2ころ	宮崎備前守時重	3千5百石	留守居役
	酒井大学頭忠恒	松山2万石	
	〃　岩見守忠予	〃	

寛文ころ　～延宝5－4　滝川長門守利貞　2千石　留守居役
延宝5年　～〃　7ころ　〃　利錦　〃　小姓番頭
延宝7ころ～延宝年間　大久保山城守忠高　1千5百石　留守居番

吹上御苑の中央部あたりに西尾藩の上屋敷がおかれたこともあった。元和から元禄はじめまでの70年間で、忠昭、忠成の2代。この間、田中、小諸、横須賀と転封したが石高の2万5千石は変わらなかった。倉橋政勝は家康の関東入府にしたがい5千石の采地をえたが、久盛のとき3千石に降格、天和2年に分知して子孫は2千石となった。滝川利貞は片野2万石をえた雄年家の養嗣子。正年のとき実子がなくいったん封地を返上したが、10分の1の2千石で再興した。酒井忠恒は左衛門尉家老中忠勝の2男で2万石を分知。大久保忠高は大久保忠世系、3代将軍家光の側衆などをへてのちに八幡1万石に栄進した。

資料図－23　（千代田①）
慶長ころ　千鳥が淵水上公園そば）　不詳
寛永ころ　～明暦3年　中根喜八某　〃　6千石
明暦3ころ～寛文12－11　杉浦越後守正友　〃　6千石
寛文12年　～延宝ころ　北条右近大夫氏利　〃　2千石
不詳　～貞享4－9～元禄元－1　〃　対馬守氏澄　〃　2千5百石
貞享4－9～元禄元－1　内藤出羽守某　不詳　留守居
元禄元－1～〃　2－4　小菅猪右衛門政親　1千5百石　大番頭
〃　2－4～〃　はじめ　戸田美作守直武　1千3百石
〃　はじめ　稲生五郎左衛門正照　1千5百石
〃　後期～〃　11年　内藤出羽守某　不詳　小姓組頭
北条右近氏澄　2千5百石　勘定奉行

資料図－24　（千代田①）
慶長12年　千鳥が淵水上公園そば）
寛永3年　～寛永3－5　弓気多源七郎昌吉　2千石
正保ころ　～　〃　昌勝　1千2百石　目付
池田忠右衛門、主水　不詳

資料図－25　（千代田①）
慶長12年　～寛永4－7　千鳥が淵水上公園そば）
寛永4－7～元禄5－7～〃　11年　大岡二郎兵衛直政　6百石
〃　直利　1千石
〃　〃　直保　〃

資料図－26　（千代田①）
慶長ころ　千鳥が淵水上公園そば）
〃　～寛永3－8　本多左大夫光重　不詳
寛永ころ　興津河内守某　〃
〃　3年　～寛文12－5　喜多見五郎右衛門勝忠　2千石
〃　若狭守重政　五郎左衛門重恒　1千石
寛文12年　～天和3－1　喜多見1万石
天和3－1～貞享はじめ　斉藤飛騨守三政　不詳

資料図－27　（千代田①）
慶長ころ　～寛永15－10　千鳥が淵水上公園側）
寛永15－10～不詳　～明暦元－8　中根壱岐守正盛　5千石
不詳　～明暦元－8　玉虫八左衛門宗茂　1千4百石
明暦元－8～〃　3－3　中根壱岐守正盛　5千石
〃　3－3～万治2－8　〃　平十郎正朝　4千石
万治2－8～寛文8－12　大久保市太郎、玉虫助十郎　伊奈淡路守某　〃
寛文8－12～延宝5－6　黒田三五郎直邦　3千石
延宝5－6～貞享2－1　畠山民部大輔基玄　高家5千石
貞享2－1～元禄元－10　別資料　元禄元－11永井相模守拝領　将軍綱吉近侍のちに側用人
元禄元－10～〃　12－9～〃　12－11　酒井能登守忠正　1千5百石　側
〃　12－11～宝永元－10　黒田豊前守直邦　7千石　のちに老中

資料図－28　（千代田①）
元和6ころ～寛永10－2　千鳥が淵水上公園側）
寛永10－2～慶安4年　日下部大隅守定好　3千石　目付、普請奉行
慶安4－11～万治2－8　〃　五郎八定正　4百石　西の丸小姓組
万治2－8～　〃　定芳　〃　別資料　明暦4－2まで

資料図－29　（千代田①）
慶長ころ　千鳥が淵水上公園側）　大垣3万石　大番頭
寛永ころ　石川日向守家成　4千石　禁裏付
万治ころ　～元禄はじめ　植村志摩守家政　2千5百石　側
元禄はじめ～〃　9－8　石谷五衛門武清　3千5百石　大工頭、小納戸
〃　9－8～〃　11年　柴田出雲守勝門　1千石
木原兵三郎重弘　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

資料図－30　（千代田①）
慶長ころ　千鳥が淵水上公園側）　大番頭
明暦3ころ～元禄7－7　松平出雲守勝隆　3千石　屋敷改
元禄7年　～〃　9－4　石谷七之助清亮　1千百石
〃　9年　～〃　11年　〃　九八郎清信　〃　目付
〃　〃　〃　〃　〃　〃　

り、勝忠が堺奉行、重政が1万石をえて5代将軍綱吉の側用人となった。北条氏利は小田原落城後、狭山1万石をえた北条家3代家信の弟。2千石で別家をたてたが次の氏澄のとき無嗣廃絶となった。弓気多家は昌吉の代に2千石をえたが、昌勝が2代将軍秀忠の勘気をこおむり減知。日下部定好は関が原の合戦のとき旗奉行をつとめ4千石となったが、定芳のとき家臣の微罪をとがめて殺害したとして放逐された。

濠際に大名の石川家成邸があった。家成は家康に仕え関が原の戦功で大垣3万石を獲得した。次の植村家と松平家も旗本から大名にすすんだ。植村家政は2千石の大番頭から高取2万7千石に、松平勝隆も寺社奉行で佐貫1万5千石の新封をえた。柴田勝門は本能寺の変後のしし が岳の戦いで豊臣秀吉に敗れ、北の庄を攻め囲まれて自害した勝家の嫡流。その孫勝重は落城の中を落ち延び、のちに家康に召し出されて2千石をえ、2代とんだ勝門が5代将軍綱吉の側にすすんだ。

明暦の大火の被害が余りにも大きく、これまでの大名火消制度ではとうてい対応できないことを痛感した幕府は大火の翌万治元年、定火消を創設して4名の旗本にその長を命じた。第1次は半蔵門外、飯田町、御茶の水、市ヶ谷の4か所で、翌2年にこの鼠穴火消屋敷が追加された。定火消に任命される旗本は3千石から5千石の大身で、役料が3百人ふち、与力6名、同心30名がついた。定火消は饅頭紋をつけた頭巾をかぶり、はでな毛織物の火事羽織を着て騎馬で出役した。実際の消火活動はガエンとよばれた火消人足が行ない、かれらはガエン部屋と称した大部屋に起居した。クリカラモンモンの入墨を入れ、下帯1本に印ハンテンをきて盛場をおし歩いた。オドシタカリの嫌われものであったが、いざ火事場では裸で火の中に飛込む命知らずが多く大名火消と消口を争って喧嘩した。

鼠穴の火消屋敷は江戸城に近く、定火消も若い大名血縁や譜代旗本がつづいた。初代の永井直孟は高槻藩祖直清の弟直貞の嫡男、池田長清は松山藩祖長吉5男の子、石河貞代は関が原の合戦で1番首をえた貞政の3代で、大森頼隆は北条早雲に滅ぼされた大森小田原家の後胤。父頼直が関が原の合戦の戦功で5千石に出世した。

資料図Ⅰ-31～34　（千代田①　下道灌濠側）
慶長ころ～慶長18－4　大久保石見守長安　8千石　勘定奉行、石見銀山奉行、佐渡奉行、伊豆代官
〃　ころ～〃　18－4　〃　藤十郎某　長安の世子　慶長18年父不正廃絶
別資料　英国大使館の地
神保五郎兵衛氏長　2千石
太鼓坊主屋敷、水野勘八
〃　ころ　青山図書頭成重　下総飯田1万石
慶長18ころ～元和元－11　本光国師金地院崇伝僧侶　元老中
元和元－11～寛永10年　石谷左近将監貞清　1千5百石　政治顧問
明暦ころ　花畑　別資料　樹木屋敷、馬屋

資料図Ⅰ-35～39　（千代田①　北の丸公園側）
慶長ころ　天野対馬守康宗　1千俵
〃　12年～元和6ころ　日下部五郎八定好　3千石　奉行、旗奉行
〃　12年～〃　6ころ　成瀬吉衛門正一　2千百石　伏見城留守居
〃　12年～〃　元年　本多佐渡守正信　甘縄1万石　慶長5年～元和元年老中
〃　12年～〃　6ころ　本多大隅守忠純　皆川2万8千石
元和6－1～寛永7年　徳川大納言忠長　府中50万石、将軍家光の弟　寛永7年除封
正保2－4～元禄11ころ　米蔵、百間御蔵
〃　2ころ～〃　11ころ　塩しょう蔵、鉄砲火薬庫
元禄10－2～〃　11ころ　松平次郎左衛門某　不詳
〃　10－9～〃　11ころ　稲生下野守正照　1千5百石

資料図Ⅰ-40～43　（千代田①　近代美術館工芸館）
慶長ころ　本多縫殿助康俊　西尾2万石
〃　寛永3－12～明暦4－7　本多三吉某、加藤喜左衛門某　（後出）
〃　ころ　天樹院徳川千姫　興津河内守某　不詳
承応ころ　安藤伊賀守重元　安藤右京分家3千石　小姓番頭
正保2－4～　米蔵囲込み（以下資料図Ⅰ－35～39参照）

寛永のころここに金地院崇伝邸がおかれた。崇伝は京都南禅寺の住職だが、慶長13年、家康に見出されて政治顧問に迎えられた。京都方広寺の鐘銘事件を画策して豊臣家滅亡の引き金としたのもこの崇伝。武家諸法度、禁中並公家諸法度制定に参画し、元和元年、家康の命で江戸に下り吹上御苑に邸地を受けた。寛永4年の紫衣事件では、幕府の処分に反対した沢庵和尚らを厳罰に処して世論の反発を買った。その権勢にカゲリがみえたのもこの事件以後のことであった。

大久保長安は江戸時代はじめの財務担当官僚。家康の関東入府にしたがって代官頭となり、岩見鉱山奉行、佐渡奉行、伊豆代官などをつとめた。大量の金鉱を産出して創業期の財政基盤を確立したが、慶長18年中風のため逝去。ところが私財を本多正信に追求され、不正があったとして改易、藤十郎ら遺子7名に死罪が命ぜられた。

江戸幕府初頭のころ、家康最大の側近として活躍した本多正信邸も吹上の地にあった。当時の幕政は江戸の将軍秀忠と駿府大御所家康による2元政治下にあり、正信は家康の指令を確実に秀忠幕府に実行させる付家老的な存在となった。大久保忠隣らの武功派と対立し、激しい政争の末、反対派を一掃した。

この一画に悲劇のヒロインとして有名な徳川駿河忠長邸がおかれている。忠長は2代将軍秀忠と正室江与の2男。母の溺愛もあったが、2つ年上の兄家光と将軍継嗣騒動を演じ

て敗れ、元和2年甲斐18万石、寛永元年には駿府55万石、従2位大納言に任じられた。忠長邸は元和6年拝領、8年竣工。檜皮葺き軒唐破風4脚門のお成門と瓦葺き切妻破風4脚の大唐門があり、象鼻、獅子頭など精緻な彫刻でかざられた。寛永2年2月、4年3月、10月、5年3月、4月としばしば兄家光がお成り。外目には緊密にみえた兄弟のきずなもこのあたりまでだったのだろうか。寛永7年7月、突如蟄居を命ぜられ10年12月自害。28歳の若さであった。駿河邸は幕府が没収し、御殿を上野聖堂学問所に、お成門も品川妙国寺に移築された。跡地は江戸城の米蔵、一部は火薬倉庫と変わった。

明治以降の皇居吹上御苑

明治維新をもって江戸城は皇居と代わったが、皇居吹上お庭はひきつづいて旧江戸城時代そのままのたたずまいを伝えていた。明治16年に陸軍省ご用掛がつくった測量原図によれば、吹上お庭の出入口は西の丸からの吹上門と北の丸側の吹上お成門の2か所で半蔵門から北の丸にいたる半蔵濠沿い道路もダンホリと塀にはばまれて別世界を形成していた。吹上門入ってすぐのあたりは広場で城内の遊び場や練兵場として使われた。庭の中央部分に1周千メートルほどの馬場があり、天皇、皇族、高官、女官らが馬術の鍛練をした。賢所近くに大きな庭池があったが、戦時中、その地下をほって池水を枯らしたという。小池が各所に点在し、池周を庭道がめぐっている。滝見茶屋、富士見茶屋、楓茶屋があり、梅松竹のブロックが手入れのいきとどいた最高権力者の庭園をしのばせる。明治時代に西の丸をつなぐかけ橋をつくり、のちに濠池を埋立てて道灌濠を上下にわけた。

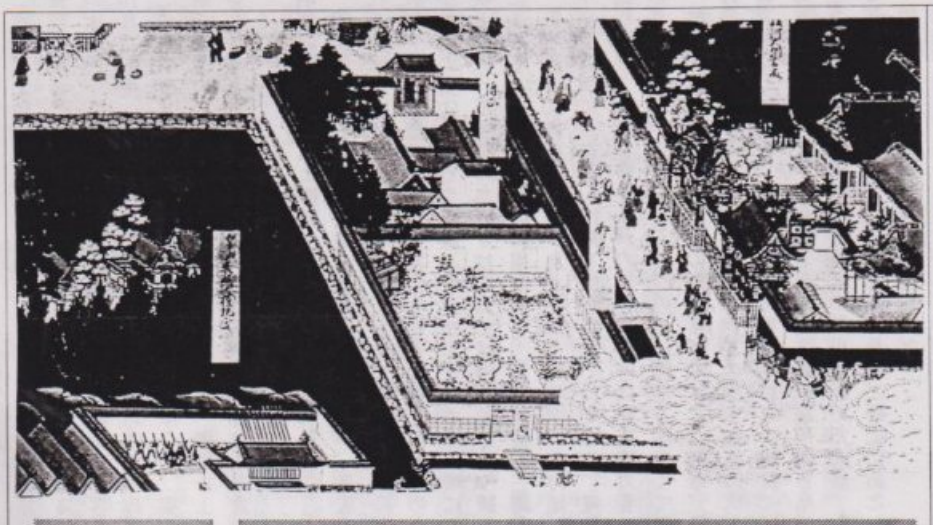
戦後の吹上御苑はススキの群落と雑木林で、野草、野鳥が自然のままにとびかい、武蔵野の原野をほうふつさせるという。この吹上御苑に吹上御所、宮中3殿、参集所、生物学研究所などがある。吹上御所は昭和36年11月の建設で、2階建鉄筋コンクリート千3百平方メートルあったが、平成5年12月に装いを一新した。宮中3殿は賢所、皇霊殿、神殿のことで、元旦の四方拝など古式の装束に固めた天皇、皇太子ご夫妻らが参拝される。昭和4年建築の生物学研究所では昭和天皇がご研究にあたられ、隣接した水田と畑で先祖の神々にお供えする作物をお手植えされた。

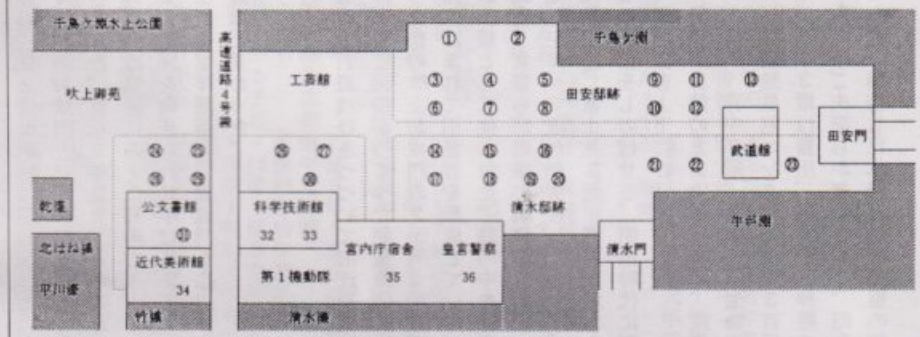
戦況が厳しくなった16年にお文庫ができた。1トンクラスの爆弾でも大丈夫のようにぶ厚いコンクリートで囲み、地下に防空壕を作った。昭和20年5月の皇居戦災から27年宮内庁々舎3階の仮御所に引越しするまでの間、昭和天皇ご1家が生活された。

参考　江戸城の城門と櫓　①

＊3の丸
大手門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
平川門＝木橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門、高麗門（不浄門）
内桜田門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
桜田巽2重櫓＝初重平側千鳥破風、2重入母屋屋根破風なし。現存
＊2の丸
3の門＝木橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
銅門＝高麗門、内枡型左折、渡櫓門
中の門＝中仕切左折、渡櫓門
下梅林門＝木橋、内枡型左折、渡櫓門
蓮池門＝土橋、内枡型右折、渡櫓門
蓮池2重櫓＝不詳。明治6年まで
蓮池3重櫓＝初重妻側千鳥破風、2重破風なし、3重入母屋屋根破風なし。明治6年
寺沢2重櫓＝不詳。明治6年まで
百人組2重櫓＝初重破風なし、2重入母屋屋根破風なし。明治6年まで
奥巽3重櫓＝初重両面千鳥破風、2重妻側唐破風、3重入母屋屋根平側唐破風
東3重櫓＝不詳。明治6年まで
＊本丸
中雀門＝上り石段、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
塩見坂門＝上り坂、内枡型右折、多聞櫓門
上梅林門＝上り石段、内枡型右折、渡櫓門
北はね橋門＝はね橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
西はね橋門＝はね橋、高麗門、内枡型左折、薬医門
天守閣5重＝初重平側千鳥破風2妻側千鳥破風、2重妻側千鳥破風2平側千鳥破風、3重破風なし、4重妻側唐破風平側唐破風、5重入母屋屋根破風なし。明暦3年
富士見3重櫓＝初重妻側唐破風平側千鳥破風、2重平側唐破風、3重入母屋屋根破風なし。現存
書院2重櫓＝初重平側千鳥破風、2重入母屋屋根平側唐破風。明治6年まで
書院渡櫓＝入母屋屋根破風なし。明治6年まで
書院渡櫓続2重多聞＝1重破風なし、2重切妻屋根破風なし。明治6年まで
書院出2重櫓＝初重破風なし、2重入母屋屋根破風なし
台所3重櫓＝初重平側千鳥破風、2重妻側唐破風、3重入母屋屋根平側唐破風
文久3年まで
塩見2重櫓＝初重妻側唐破風、2重入母屋屋根破風なし。文久3年まで
梅林2重櫓＝文久3年まで
五十三間櫓＝初重平側千鳥破風、2重入母屋屋根破風なし。文久3年まで
乾2重櫓＝初重平側唐破風妻側千鳥破風、2重入母屋屋根破風なし。明治6年まで
数寄屋2重櫓＝明治6年まで
主要門、主要櫓のみを記載

第4話　北の丸公園ものがたり





北の丸公園の前身田安台はかつての百姓地で田安（築土）明神社が鎮座していた。江戸3社の1つで、祭神は平将門であったが、将門が賊徒とされるにおよんでににぎの尊に改神した。江戸城工事で田安門外に移転、のちの変転をへて現在は九段北1丁目に社を構えている。家康入城後の慶長はじめ図では番衆屋敷が多く、竹やぶなどの特記もある。

北の丸郭造営は慶長12年、江戸城工事の一環として行われた。関東、奥羽、信越諸大名が動員されたこの工事は石高百万石ごとに5組を編成し、うち4組が石材を集めた。天守閣と雉子橋から溜濠にいたる外濠と北の丸郭が完成したという。直後の状況を記載した慶長12年江戸図に居住者名が詳載されている。2千石から5千石クラスの譜代役職者が大半で、安藤重信、安藤直次、内藤清成らの幕閣が目をひく。公園奥まった地に3代将軍家光の2男徳川甲府綱重邸が置かれたのは慶安元年から明暦3年までの9年間。当時北びくに町ともよばれた一画に千姫、阿茶局、春日局、孝子などの御殿がおかれた。明暦大火後は火よけ地などがめだち、享保16年に8代将軍吉宗の2男徳川田安宗武が、宝暦9年に9代将軍家重の2男徳川清水重好が邸地を拝領する。一ツ橋家とともに御3卿とよばれ、万一将軍家に血脈がとだえたとき世嗣に選ばれる家柄となった。

北の丸公園の江戸時代は田安門、清水門、竹橋門に囲まれた江戸城外郭の1つで、一般に田安御門内、清水御門内などと呼ばれた。田安門は元和6年に土橋を木橋に改め、寛永6年に松平忠昌が枡型を築いた。高麗門を入って枡型を右折すると渡櫓にでた。渡櫓は明治4年に撤去、その後再建されたが、高麗門は寛永13年建造当時のもので、江戸城でもっとも古い建造物という。昭和36年に国の重要文化財に指定された。

清水門の起源は清水寺、清水がわきでたなどの説がある。元和6年架橋、寛永元年に浅野長あきらが枡型を築いた。明暦の大火で焼失し、万治元年に再建。唯一渡櫓のない櫓門となったが、北の丸公園の開園にあたって寛永時代の渡櫓門として修築された。高麗門も明治4年に撤去されたが再建。昭和36年、田安門、外桜田門とともに国の重要文化財に指定された。竹橋の名は徳川氏入城当時竹を編んだ橋、竹藪そばの橋などの由来がある。慶長はじめ図ではお内方通行橋とあり、元和6年に枡型となった。明和5年落雷焼失後しばらく放置されたが修築。明治はじめに門を撤去された。

資料図－1、2　（北の丸公園①　千鳥が淵側突出地）
慶長ころ　島田兵四郎重次　2千石　旗奉行
〃　〃　次兵衛利正　5千石　南町奉行
寛永ころ～正保ころ　戸田采女正氏鉄　大垣10万石
正保ころ～万治3－11　久世大和守広之　上総国内1万5千石　のちに老中
万治3－11～寛文2－2　内藤弥三郎重頼　5千石　定火消代官町役屋敷
のちに高遠内藤家再興

寛文2－2～延宝9－9　安藤内蔵助重広　5千石　定火消代官町役屋敷
延宝9－9～元禄8－2　岡部数馬正敦　〃　〃
元禄8－2～〃10－6　酒井伊勢守忠英　4千5百石　〃
〃10－6～宝永元－10　能勢次左衛門頼方　4千石　〃
宝永元－10ころ　火よけ空き地

資料図1－3　（北の丸公園①　千鳥が淵側）
慶長ころ　村越与左衛門某　不詳
寛永ころ～寛永9年　朝倉筑後守宣正　徳川駿河家付家老2万6千石
寛永9年駿河家連座廃絶　谷村1万8千石
正保ころ～明暦3－3　秋元但馬守泰朝　秋元但馬守旧邸と慶光院、斉藤頼母邸を3つ1つにして鳥居権之助、宮城三衛門拝領

寛文8－2～しばらく　鳥居権之助忠以　1千石　小姓
〃ころ～元禄はじめ　愠　平兵衛某　不詳
元禄はじめ～〃4－9　小菅作右衛門某　〃
〃4－9～〃8－10　荻原彦次郎重秀　3千、7百石　勘定奉行
〃8－10～〃10ころ　大木伊兵衛親貞　不詳
〃10－10～不詳　つき屋
〃11ころ～　明地（以下同じ）

資料図1－4　（北の丸公園①　千鳥が淵側）
慶長ころ　森川内膳正重俊　3千石
明暦3ころ～万治3－12　中条左京信慶　5百石
万治3－12～　定火消し屋敷囲込み（以下資料図1－1、2参照）

資料図1－5　（北の丸公園①　千鳥が淵側）
慶長ころ　証人屋敷
寛永ころ　酒井内記忠重　5千5百石　大番頭

資料図1－6　（北の丸公園①　千鳥が淵側）
慶長ころ～寛永5－10　島田越前守直時　5百石程度　大阪町奉行
寛永5－10～不詳　〃清左衛門直次　7百石
正保ころ～寛文ころ　川村喜八某　不詳
寛文ころ～貞享ころ　山高宇右衛門信澄　2百70石＋百30俵　賄頭

資料図1－7　（北の丸公園①　千鳥が淵側）
慶長～明暦ころ　酒井作右衛門重之　2千石＋千俵　小姓番頭
延宝ころ～貞享ころ　朽木和泉守則綱　福知山藩分家6千石　側衆
貞享ころ～元禄元－3　林　信濃守忠隆　1千8百石　側衆
元禄元－3～〃5－4　松平隼人正忠冬　5千石　側衆、勘定奉行
〃5－4～〃10－10　小笠原遠江守某　不詳

資料図1－8、9　（田安門千鳥が淵側）
慶長ころ　山口但馬守重政　牛久1万5千石
〃ころ～寛永2年　里見証人屋敷
元和ころ～慶安2－12　成瀬隼人正正成　犬山3万5千石　元老中、尾張家付家老
寛永2年～明暦ころ　〃正虎　尾張家付家老
承応ころ～明暦ころ　増山友之助資弥　2千俵　将軍家綱小姓

資料図1－10　（田安門千鳥が淵側）
慶長12年～不詳　松平豊前守勝政　8千石　大番頭、駿府城代
正保ころ～明暦3－3　島田刑部直次　7百石　進物役
明暦3－3～寛文8－2　松平豊前守勝義　8千石　のちに松平多古家立藩

資料図1－11　（北の丸公園①　田安門千鳥が淵側）
慶長ころ～承応2－7　松平大隅守重勝　三条2万石　将軍秀忠小姓
承応2－7～〃2年　鳥居岩見守忠頼　1千5百石　のちに寺社奉行
〃2年～寛文8－2　〃権之助忠以　1千石
寛文8－2～元禄8－4　小笠原山城守長矩　吉田4万石

資料図1－12～13　（北の丸公園①　田安門千鳥が淵側）
慶長ころ　松平長門重直、松平金七某　5千石　持筒頭
寛永6ころ～不詳　斉藤伊豆守利宗

資料図1－1～13　（北の丸公園①）
享保元年～享保16－1　御用屋敷　御用屋敷囲込み
〃元－8～〃3－10　水野出羽守忠周　松本7万石　将軍吉宗2男
〃3－11～〃8－5　日向守忠幹　〃
〃8－7～〃9－1　隼人正忠恒　〃
〃16－1～明和5年　徳川権中納言宗武　田安10万石
明和5年～安永3年　〃大蔵卿治察　〃　一ツ橋家から養子
天明7年～天保7年　〃権大納言斉まさ　〃　将軍家斉11男、養子
天保7年～〃10年　〃斉荘　〃　尾張家へ養子

〃10年～文久3年　〃慶頼　〃
文久3年～〃3－11　〃寿千代　〃　戸山屋敷へ
〃3－11～元治元－7　徳川家茂　征夷大将軍（第14代）　江戸城焼失のため仮本丸となる
元治元－7～慶応元年　徳川寿千代　戸山屋敷から復帰
慶応元年～明治元年　〃家達　田安10万石　宗家16代相続
明治元年～〃5年　御用邸（以下明治以降の項につづく）

北の丸郭完成直後の江戸時代はじめ、田安台は徳川譜代の大名と旗本高官邸とされ、その千鳥が淵側に秋元泰朝、戸田氏鉄らの邸地があった。秋元泰朝は日光東照宮の遠営奉行など2代将軍秀忠の側近として1万8千石にすすみ、酒井忠重は川越2万石から2千石を

分知して書院番頭、大番頭にすすんだ。朽木則綱は福知山藩植綱の2男、3千石の分知をうけて4代将軍家綱の側衆。島田重次は松平広忠以来の直参で、鉄砲の頭、旗奉行をつとめて2千石をえ、利正のとき5千石に加増された。つづく戸田氏鉄は徳川創設期の功臣、一西の嫡男。新田の開発や治山治水事業をすすめ、林羅山などに学んだ。久世広之は7千石をえた広宣の3男。秀忠の小姓から3代将軍家光側近に転じて老中にすすんだ。

一方、廃絶、減知の処分に泣いた大名、旗本も多かった。水野家は家康の母大の里方にあたり、忠周はその5代で松本7万石を領有したが、忠恒のときで江戸城で突然抜刀して狂気廃絶。酒井重之の祖父重勝は若年から家康につかえて長久手の戦い、関が原の戦いで旗奉行をつとめて5千石となったが、重之の相続が幼少として3千石に減知された。

明暦大火後の万治3年からは代官町定火消組屋敷がおかれた。初代の内藤重頼は勝山2万石正勝の長男だが、父の逝去時は幼少のため旗本に降格、成人して定火消に任命された。安藤重広も高崎5万6千石重長の子で5千石を分知された。能勢頼方の元禄13年4月、自らの火消し屋敷を失火して謹慎。宝永元年に廃止となった。

一画に山口牛久、成瀬犬山、松平三条、小笠原吉田藩邸などもおかれた。山口重政は天正年間に家康の旗本となり、慶長6年に関が原の軍功で牛久1万5千石をえたが、嫡子重信と大久保忠隣養女との結婚が私婚だとされ廃絶。再興の機をうかがう父子は大阪夏の陣で井伊直孝に属して旧領に返咲いた。成瀬正成は家康側近で徳川尾張家の創設と同時に付家老となり、犬山城主として大名格とされた。松平勝政は家康の母大の再婚先松平久松勝俊の養嗣子。大阪の陣に従軍して大番頭、駿府城代にすすみ、4代勝以のとき1万2千石で諸侯に列した。

松平重勝は能美家を興した。家康の6男忠輝につけられ三条2万石となるが、忠輝が配流されると召しかえされた。小笠原家は礼法宗家の一門。家康に属した秀政の3男忠知が寛永時代に杵築4万石で立藩した。儀式典礼に明るい家柄を反映して風雅にいそしみ、茶道に長じた。斉藤利宗は加藤清正の重臣だが、加藤家が廃絶されるにおよんで處士となり、寛永6年3代将軍家光に召しだされて持筒頭にすすんで同心50人を預けられた。元禄11年大火焼失。跡地は火よけ地となった。

享保16年からは御3卿筆頭の徳川田安家を迎える。田安家の初代は8代将軍吉宗の紀伊藩主時代の2男宗武。享保元年、父の将軍職襲封にしたがって江戸城本丸に移り、従3位右近権中将、10万石を拝領した。次の治察のとき嗣子なく一ツ橋家から斉まさを養子とした。斉まさの男子はいずれも早世したので娘ムコに11代将軍家斉の11男斉荘を迎えたが、のちに男子ができ、御3家の尾張藩に後継問題がおこったとき、支藩松平秀之助を推す藩士らの反対を押し切って再養子とした。田安家は実子慶頼が継承、重病の13代将軍家定をたすけ、14代将軍家茂の初期は幼将軍を後見したが、慶喜派の復権で失脚した。最後は家達。慶応4年、鳥羽伏見の戦いに敗れた15代将軍慶喜が謹慎、隠居したとき徳川宗家16代を相続。駿河70万石に移封された。

資料図－14、15　（北の丸公園②　武道館の一部、牛ケ淵側）
慶長12年～正保2－10　森川金右衛門氏信　3千石
正保2－12～明暦3－8　〃　庄九郎氏之　先鉄砲頭
明暦3－12～寛文8－2　〃　助右衛門氏知　2千5百石
慶長ころ～元和2年　成瀬隼人正正成　慶長5年～元和2年老中
元和2年～寛永11－10　成瀬伊豆守之成　栗原3万4千石
寛永11－～16－10～承応ころ　〃　之虎　栗原1万6千石　寛永15年無嗣廃絶
明暦ころ～明暦3－3　青山因幡守宗俊　3千石　のちに小諸藩立藩
〃　3－3～〃　3－3　藤枝摂津守方孝　2千石　3の丸家老
〃　3－10～天和2－10　明暦3年大火後の割替えで長田十太夫、神尾権十郎、藤枝摂津守など4邸を秋元摂津守拝領
天和2－10～貞享4－11　秋元越中守富朝　谷村1万8千石
〃　摂津守喬朝　川越5万石　寺社奉行
松平因幡守信輝　古河10万石

資料図－16　（北の丸公園②　中央あたり）
慶長ころ～元和元－4　服部権太夫政光　4千石
元和元年～承応ころ　〃　政信　4千2百石
承応ころ～明暦2－8　天野左兵衛康勝　1千7百石　徳川甲府家もり役
明暦2－8松平左兵衛督元屋敷、天野左兵衛邸の一部を土屋但馬守拝領
土屋但馬守数直　4百石＋千俵
松平豊前守勝義　8千石　側衆
松平美作守乗政　小張1万石　のちに松平多古藩立藩
朽木和泉守則綱　3千石　のちに若年寄
南條小十郎隆友　3百俵　朽木土浦家分家
金奉行

資料図－17　（北の丸公園②　中央あたり）
慶長ころ～承応ころ　加藤喜助正次　2千石
寛永10年～明暦3－3　宮城越前守和甫　6千石　京都警衛
承応ころ～明暦3－3　〃　三左衛門和治　大目付
明暦3－3～元禄元－4　増山弾正少輔正俊　西尾2万石
元禄元－4～〃　10－10　戸田右近太夫氏定　大垣10万石　別資料　元禄5－6増山弾正邸を戸田右近拝領
〃　後期　佐野長門守正周　1千9百石　勘定奉行
14ころ　稲生下野守正照　1千5百石

資料図－18　（北の丸公園②　清水門そば）

慶長12年～元和2年	本多三弥左衛門尉正重	相馬1万石	
元和2年～正保ころ	〃　豊前守正貫	8千石	
正保ころ～寛文ころ	松平弥十郎某	不詳	
承応ころ～寛文ころ	渡辺監物某	〃	

資料図－19　（北の丸公園②　清水門そば）

慶長ころ、寛永ころ	神尾　某、成瀬主馬某	
明暦ころ	松平源太郎某	不詳

資料図－20　（北の丸公園②　清水門そば）

慶長ころ～明暦ころ	本多藤左衛門某	不詳
	長田八郎左衛門重以	1千石

資料図－21　（北の丸公園②　牛が淵側）

慶長12年～寛永13年	渡辺山城守茂	7千石	
寛永13年～不詳	〃　監物忠	5千石	
正保ころ	本多豊前守正貫	8千石	
			青野八左衛門養子重貞か
			駿府奉行
			徳川駿河家付
			〃　書院番頭

資料図－22、23　（田安門内）

慶長ころ～不詳	松平孫十郎某	不詳	
不詳～明暦ころ	松平源十郎正村	5百石	
正保ころ	神尾権十郎某	不詳	
〃	3－3	中山勘解由直守	4千石
〃	3－3	松下善大夫之綱	5百石
明暦3－3～	増山対馬守邸囲込み。当初は母泉光院居住		

資料図－14～23　（北の丸公園②　清水門側）

元禄10－10～享保元－8	火除け地、馬曲輪空き地		
享保元－8～〃　2－2	堀田伊豆守正虎	山形2万石	
〃　2－2～宝暦8年	水野出羽守預かり火除け空き地		
宝暦8年～寛政7年	徳川中納言重好	清水10万石	
寛政10年～〃　11年	〃　敦之助	〃	
文化7－11～文化13－5	〃　斉順	〃	
〃　13年～文政10年	〃　式部卿斉明	〃	
文政10年～弘化3年	〃　斉かつ	〃	
慶応2年～慶応4年	〃　昭武	〃	
〃　4－4～〃　4年	静寛院和宮	仁孝天皇の皇女、	
〃　4－4～〃　4年	実成院おみさ	将軍家茂生母	
明治元年～明治2－8	徳川左中将家達	静岡70万石	
〃　2－8～〃　5年	御用邸（以下明治以降の項参照）		
享保4ころ～幕末	朝鮮馬場		

武道館あたりの江戸はじめに成瀬正成、森川氏信邸があった。正成は天正ころ家康にしたがい関が原の合戦の行賞で桑原3万4千石を領有した。駿府老中にすすみ、徳川尾張義直のもり役となると長男の正虎をともなって犬山3万石に転じたので、父の旧領は2男の之成が継いだ。之成は根来衆百人組頭をへて3代将軍家光の本丸付にすすんだが、後継の之虎が5歳で急逝して廃絶となった。青山宗俊は3代家光への諫言がすぎて改易された忠俊の長男。赦免されて小諸3万石で再興された。松平乗政は大給家の分流。側衆から若年寄で1万石を拝領した。安藤信友は8代将軍吉宗期の老中で、松平乗邑のもと享保の改革をすすめた。

北の丸公園の清水門を入ったまもなくから中央部にかけての一画に江戸時代はじめのころ、本多正重らの邸地があった。本多正重は家康の腹心正信の弟。関が原の合戦で槍奉行、大阪の陣で軍謀に参与した。官位を終生固辞したが1万石をえ、養子の正貫は8千石て書院番頭、大番頭をつとめた。渡辺家は綱の後胤で代々1字名を名のった。姉川の合戦で銀銭3文を与えられ、以後家紋はそれにちなんだ。家康の旗本として徳川駿河忠長につけられたが、忠長の切腹で蟄居し子孫は減知された。増山正利は4代将軍家綱の生母宝樹院お楽の弟。幼い家綱に付属して大名となり、弁舌さわやか、家光にかわいがられた。

北の丸公園、清水門の地の代名詞ともいえる徳川清水家が創立されたのは宝暦8年のことである。初代は9代将軍家茂の2男重好で、母は遊喜の方といった。7歳のとき3万俵をえ、従3位左近衛権中将にすすみ、武蔵、上総国内などに10万石を拝領した。重好に嗣子なく11代将軍家斉の実子を次々と養子に迎えた。家順は7男だが、御3家徳川紀伊家の再養子となり、つづく斉かつも家順の逝去で紀伊12代を相続した。

15代将軍に慶喜が就任直後の慶応2年、慶喜の出身家にあたる御3家徳川水戸家から弟の昭武が清水家を継承した。当時の幕府はフランスと密接な関係をむすびつつあり、翌年ウィーンで開催される万国博覧会の出展を決めていた。フランス政府からの要請にこたえて、将軍親族として昭武の派遣が決定する。徳川幕府が崩壊したのは昭武ら一行が万国博閉幕後のヨーロッパ外遊中のことで、帰国後、最後の水戸藩主に戻った。

資料図－24、25　（北の丸公園①　中奥部）

慶長ころ	倉橋長右衛門政範	1千石
〃	戸田左門氏鉄	尼崎5万石
寛永ころ～明暦ころ	大工小屋	明地、御用地、植溜（以下同じ）
明暦3年～享保4ころ	朝鮮馬場、植溜	（〃）

資料図－26	（北の丸公園①　中奥部）		
慶長12年～寛永8－1	高木甚右衛門清本	2百石	
寛永8年～〃 9－4	〃　茂右衛門元吉	4百石	
〃 9年～正保ころ	〃　信次	大番	
正保5－12～明暦3－3	増山弾正少弼正利	西尾2万石	大阪城守衛
資料図－27	（北の丸公園①　中奥部）		別資料　春日局元屋敷拝
慶長ころ	安藤帯刀直次	掛川3万8千石	慶長5年～元和2年老中
寛永ころ	安藤彦四郎直政	将軍家綱生母の母	実子増山弾正邸となり
正保ころ～明暦3－3	泉光尼	尼寺院主	
明暦ころ	伊勢慶光院上人		
資料図－28～30	（北の丸公園①　中奥部）		
慶長ころ	内藤修理亮清成	常陸国内2万1千石	慶長6～11年老中
〃	影山兵衛、藤忽右衛門	皆川1万石	留守居
寛永ころ	松平大隅守重則	天樹院中屋敷	
〃	天樹院中屋敷	6千石	勘定頭
承応ころ～明暦ころ	杉浦内蔵充正友		
資料図－31	（北の丸公園③　国立公文書館）		
慶長ころ	内藤若狭守清次	下総国内2万6千石	元和2～3年老中
寛永ころ	水野左近忠善	田中4万5千石	
正保ころ	酒井紀伊守忠吉	7千石	勘定奉行
資料図－34	（北の丸公園③　国立近代美術館）		
慶長12年～元和7－6	安藤対馬守重信	高崎5万6千石	慶長16年～元和7年老中
元和7－6～寛永13－1	〃　右京進重長	〃	のちに寺社奉行
寛永13－1～慶安元－9	牧野内匠頭信成	関宿1万7千石	
慶安元－9～明暦3－3	徳川左馬頭綱重	賄料15万石	将軍家光2男
元禄10ころ～明治維新	北の丸蔵、炮筒蔵		
資料図－32、33	（北の丸公園②　科学技術館）		
慶長ころ	大久保次右衛門忠佐沼津2万石		
〃	加藤伊織則勝	1千5百石	鷹総支配
〃	鷹部屋、内藤甚九郎、木村、竹やぶ		
元和2ころ～寛永11年	英松院勝	将軍家康側室	
寛永9年～〃 20年	春日局福	将軍家光乳母、大奥取締	
正保ころ～延宝2年	本理院孝子	将軍家光御台所、通称中の丸様	
延宝2年～明治維新	明地、道路敷	明暦3－3大火後の割替えで若干移動	
資料図－35～36	（北の丸公園⑤、⑥　宮内庁宿舎、皇宮警察宿舎）		
慶長ころ	神尾掃部某	不詳	
〃　ころ	阿部新右衛門重次	5百70石	手鷹頭
元和2－4～寛永14年	神尾阿茶局	将軍家康側室、通称神尾一位殿	
明暦3－3～慶安元年	天樹院千姫	将軍秀忠長女、通称東丸様	
		代官町から、飯田町へ	
慶安元年～明治維新	明地、道路敷		

北の丸公園の一番奥、吹上御苑との境めあたりの江戸はじめは代官町につづく官舎街で、譜代大名や高官旗本らが住んでいた。首都高速環状線の代官町ランプあたりに譜代の名門戸田氏鉄邸があった。戸田家は代々松平家につかえ、関が原の合戦では父一西が西軍々中から家康に通じ、氏鉄は東軍の秀忠軍に与して、尼崎5万石に加増された。

安藤直次は幼時から家康につかえ、江戸幕府成立後は老中に列して、徳川紀伊頼宣に付けられた。内藤清成は2代将軍秀忠のもり役で、関東総奉行にすすむが、将軍鷹場で農民の狩猟を許可したことから家康の怒りをかい免職。内藤清次は父遺領の2万7千石をえて老中となった。この一画は明暦3年の大火以後溜堀や火よけ地、道路敷地などになり、享保4年ころ馬場を作って、朝鮮馬場とよばれた。

国立近代美術館一画は安藤重信からはじまっている。徳川創設期の功臣直次の弟で、長久手の戦い、関が原の戦いにしたがって老中となり、高崎5万6千石城主にすすんだ。つづく重長が寺社奉行のとき、明暦の大火が起こり、将軍家綱の井伊邸移徙に反対してふみとどまらせた。火事は西の丸が残り井伊邸が焼失した。牧野信成は徳川譜代康成の3男。大阪夏の陣のとき大砲を大阪城に打ち込んで淀君や豊臣秀頼のドギモをぬいた。寛永10年4千石の加増をうけて関宿牧野藩を立藩した。

慶安元年、3代将軍家綱の2男綱重を迎える。綱重は家綱の41歳のときの子で当時の風習にしたがって叔母千姫のもとに養子にだされた。兄は4代将軍家光で弟がのちの5代将軍綱吉。慶安元年竹橋門内に邸地をうけ賄料15万石で正3位中将右馬頭に任官し、のちに甲府25万石となった。竹橋屋敷の居住は明暦3年まで。この年の大火で神田橋門内に移転した。

のちに6代将軍にすすむ家宣がこの屋敷で生まれた。綱重の長男で母は千姫邸につとめた保良という。家宣（綱豊）が生まれたとき、綱重と関白二条家との間に縁談がすすんでいて、子供があってはまずいと家老の養子として育てさせた。のち正式の嫡子に迎えようとしたとき一部の家臣がにせものとして幕府に訴えた。危うく天一坊にされかけた綱豊は成人後、甲府藩主にすすみ5代将軍綱吉の養子として6代将軍に就任した。明暦3年、跡地は北の丸お蔵とかわり幕末におよんだ。

科学技術館の地の慶長時代は大久保忠佐邸、鷹部屋、竹やぶなどになっている。忠佐は

徳川4天王忠世の弟で、蟹江の戦いで7本槍の武功をあげ5千石を与えられた。慶長6年には関が原の合戦の勝利で沼津城主の座をえるが嗣子なく除封。鷹部屋は将軍の軍事訓練や狩に使う鷹や犬を管理した。鷹匠支配2名のもとに鷹匠頭6名、鷹匠40名が配置された。

北びくにともよばれたこの地に千姫、阿茶局、勝、春日局など徳川家ゆかりの女性たちが邸地を連ねた。勝は13歳から家康にしたがった中の側室3人衆の1人。家康の1女をもうけたが早世。聡明快活な性格が家康の心をつかんだという。家康没後の寛永11年鎌倉に寺院を建立して余生は尼生活を送った。春日局は3代将軍家光の乳母。家光の父秀忠と正室江与が弟忠長を将軍にしようとしたとき家康に直訴して逆転。家光の信任をえて大奥制度を独断確立した。春日局の北の丸上屋敷は千6百坪ほどの武家屋敷で、玄米食にぬか味噌、いわしという質素な生活ぶりだった。

3代将軍家光の正室孝子は元和9年に江戸城に輿入れしたが、家光と不仲で正保ころから北の丸で別居生活を送った。家光没後の万治3年に上洛、2代将軍秀忠の5女で後水尾天皇のもとに入内された東福門院和子に面談した。宮内庁宿舎、皇宮警察宿舎の江戸時代はじめに阿茶局、千姫が住んだ。阿茶局は家康はじめの側室3人衆の1人。家康との間に子供はなかったが才知にすぐれ、大阪の陣では和睦交渉の使者にもたった。元和2年江戸にもどり、東福門院和子の入内に母代わりとして付き添った。

一画で一際めだつのが千姫邸。2代将軍秀忠と御台所江与との長女で、家光はその弟になる。7歳のとき政略結婚のため豊臣秀頼に輿入れしたが、元和元年大阪落城のときに奇跡的な帰還をはたした。翌元和2年に本多忠刻と再婚したが死別。寛永3年徳川家に復帰して北の丸に住んだ。家光、家綱2代にわたって内外に重きをなしたが、明暦3年1月の大火で焼失。慶安元年、北の丸邸を養子綱重に譲って城外の飯田町御殿に移転した。巷間伝えられる吉田御殿は事実ではない。

資料図1～36　明治以降の北の丸公園

明治7－1～昭和20－8　近衛騎兵第1連隊、近衛騎兵第2連隊

明治18年第1旅団を編成、明治24－12近衛師団と改称

〃　7－1～明治20ころ　陸軍省砲兵大隊、陸軍省騎兵大隊

〃　19－6～大正末ころ　近衛軍楽隊

〃　19－3～昭和20－8　近衛経理部

〃　18－7～〃　20－8　陸軍省歩兵第1旅団司令部

〃　24－12～〃　20－8　近衛師団司令部

〃　30－9～〃　20－8　陸軍省築城部本部

〃　31－1～〃　20－8　陸軍省教育総監部

付帯設備に練兵場、体操場、病室、営倉、弾薬庫がある

昭和20－9～〃　21－5　禁衛府

旧近衛第1師団有志による宮城守衛

GHQ命令により解体

昭和20年代　学徒会館、警察練習所、電気試験所、宮警教習所、吹奏楽団、農林省資材局、東京財務局、勤労局、厚生局、労政局、獣医協会、農林省分室

〃　30年代はじめ　関東電気通信資材配給局倉庫、電々公社施設局、郵政省倉庫、関東信越国税局、公共企業体等調停委員会、労働省基準局、労働省統計局

〃　30年代　田安門側＝東京地方連絡局、郵政大臣官房資材部、乾門会館、皇宮警察本部音楽隊、千代田区立グランド、学生会館、学生会館本部、東学生会館、学生会館診療所図書室、中央矯正研修所、中央矯正研究所、法務省研修寮、パン船木、荒井清水門側＝警察学校、学生会館、警視庁弥生会館、警視庁寮、藤田、丸の内電話局、警視庁第1機動部隊、警視庁自動車整備工場、自動車練習場、東京丸の内地区電話局車庫、大橋ほか、麹町電気通信工作工場、国税庁税務講習所支所、厚生省関東信越医務出張所、運輸省交通局寮、関東公安公共企業体等労働委員会、労働省保険審査室、労働省分室図書室、厚生省車庫、丸山、坂口、辰己、田原ほか、功力自動車、功力、大野

昭和39－10～現在　日本武道館

〃　44年～〃　北の丸公園

〃　39年～〃　科学技術館

〃　46年～〃　国立公文書館

〃　44年～〃　国立近代美術館

〃　52年～〃　国立近代美術館工芸館　重要文化財（旧近衛司令部）

〃　40年代～〃　警視庁第1機動隊、皇宮警察宿舎、宮内庁宿舎

北の丸公園の明治、大正、昭和戦前期は近衛連隊兵舎であった。近衛兵は天皇の護衛兵で、明治5年、薩摩、長州、土佐3藩の親兵を改称して、北の丸公園の地に移転した。歩兵2連隊、騎兵1大隊、砲兵、工兵、ちょう重兵5千5百人からなる精鋭軍団で、士気、武力とも一般兵を圧倒した。初代の近衛部督は山県有朋、副督が西郷従道で薩摩、長州2軍の巨頭がならんだ。北の丸公園には近衛師団司令部、第1旅団司令部、第1、第2連隊、教育総監部、築城本部、近衛砲兵隊、経理部の兵営が建築され、周辺に練兵場、弾薬倉庫、体操場、病院、営倉などが付属された。近衛師団司令部庁舎は明治34年建造、田村鎮設計の2階建てゴシック建築で、明治の香りただようレンガづみを今日に伝えている。昭和47年、国重要文化財に指定され、同52年から国立近代美術館工芸館になった。教育総監部は軍隊の教育、訓練総括機関で、総監は陸軍大臣、参謀長官と3長官とよばれた。

明治11年8月、前年の西南戦争思賞と給料削減に不満をかこった近衛歩兵第1大隊の下士官ら2百60名が蜂起し、大隊長を殺害して、近くの大蔵卿大隈重信邸に大砲を打込んだ。さらに赤坂仮御所にあった明治天皇に直訴しようとしたが鎮圧され、首謀者53名が銃殺された。

明治27年に起こった日清戦争には病いをおした師団長北白川宮能久親王が率いる近衛師団が台湾に転戦した。宮は台南で亡くなり、前出旧近衛師団司令部に騎馬像を奉じている。明治37年日ロ戦争、昭和14年日中戦争に出動、16年第2次世界大戦の開戦後は皇居守衛と首都防衛にあたった。昭和20年8月の終戦前夜、徹底抗戦を主張する青年将校らは師団長を殺害して、天皇の終戦詔勅録音盤の奪還を企てるが果たせず、翌15日正午、天皇の玉音がラジオ電波にのった。師団は25日に軍旗を奉焼して解散した。

終戦直後、北の丸一帯の旧近衛連隊兵舎は、皇宮警察本部、警視庁機動隊、警察学校、学徒援護会、郵政省、労働省などが雑居したが、昭和34年、皇居造営審議会がすみやかな公園化推進を答申し、目前に迫った東京オリンピックの柔道会場としての日本武道館を起工した。昭和39年10月、法隆寺の夢殿を模した優雅な日本武道館を竣工。晴れわたった空のもとファンファーレが高々とひびきわたった。世界94か国、5千5百人が一堂に会した若人の祭典がはなやかに繰ひろげられたが、ここ柔道会場では無差別級の神永昭夫こそオランダのヘーシングのけさ固めに敗れたものの、猪熊功、岡野功、中谷雄英が金メタルを獲得して日本柔道の名を高めた。北の丸公園の整備工事も翌40年ころから着々と本格化、昭和44年に開園された。

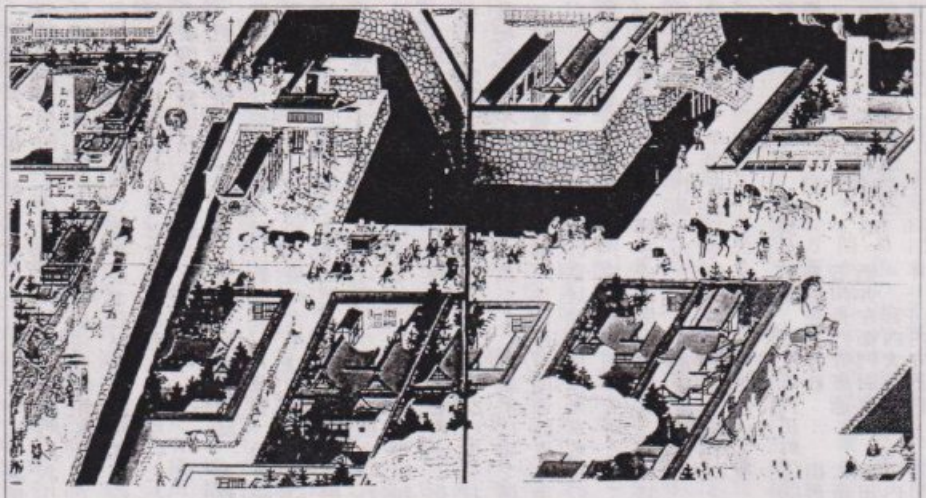
平成8年現在、北の丸公園には日本武道館、科学技術館、国立公文書館、国立近代美術館、警視庁第1機動隊、皇宮警察宿舎、宮内庁宿舎などがあり、近衛歩兵第2連隊記念碑、皇紀2千6百年記念碑、警視庁初代長官川路利良と殉職者をまつる弥生神社、岡山信雄曹長謝恩碑、馬頭観音などの記念碑が残されている。科学技術館は日本科学技術振興財団が科学技術庁などの協力をえて昭和39年に開館したもので、建物が人間の手のひらの形をしている。「技術の最初は人の手であった」という思想を現わしているという。宇宙科学、原子力、産業技術などが一目で分かるように展示されている。

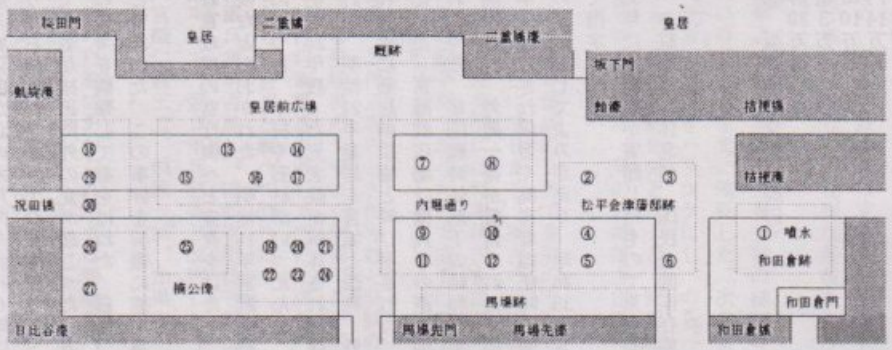
国立近代美術館は文字どおり近代美術の殿堂。昭和44年ブリジストンタイヤの石橋正二郎会長が私財で建築、国に寄贈する形で開館した。地上4階地下1階、2～4階の常設展示場に20世紀はじめから現代にいたる絵画や版画、彫刻などを展示している。52年重要文化財の旧近衛司令部庁舎を改造して工芸館を作った。建物は明治43年3月に作られた洋風レンガ建築で、棧カワラふきの屋根中央部分に8角の塔屋根がついている。国立公文書館は昭和46年、各省庁で保管されていた公文書を集中保存して一般にも利用できるように開設されたもので、江戸時代の紅葉山文庫、昌平坂学問所図書なども保管している。

参考　江戸城の城門と櫓　②

＊西の丸
西の丸大手門＝木橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
西の丸中仕切り門＝中仕切り直進、渡櫓門
西の丸書院前門＝木橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
坂下門＝土橋、高麗門、内枡型右左折、渡櫓門
西の丸裏門＝上り坂、薬医門、中仕切り直進
山里門＝土橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
吹上門＝土橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
紅葉山下門＝木橋、内枡型右折、渡櫓門
伏見2重櫓＝初重平側千鳥破風、2重入り母屋屋根平側唐破風
＊西の丸下
和田倉門＝木橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
馬場先門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
外桜田門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門（重要文化財）
＊吹上御苑、北の丸公園
半蔵門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
田安門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門（重要文化財）
清水門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門（重要文化財）
竹橋門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
＊外濠
雉子橋門＝土橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
一ツ橋門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
神田橋門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
常磐橋門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
呉服橋門＝木橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
鍛冶橋門＝木橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
数寄屋橋門＝木橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
山下門＝土橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
幸橋門＝木橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
虎の門＝土橋、高麗門、内枡型左折、渡櫓門
赤坂門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
喰違門＝土橋、喰違左折
四谷門＝土橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
市ヶ谷門＝木橋、高麗門、内枡型直進、渡櫓門
牛込門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
筋違門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
浅草門＝木橋、高麗門、内枡型右折、渡櫓門
主要門、主要櫓のみを記載

第5話　皇居外苑ものがたり





皇居外苑周辺の家康入城当時は日比谷入江が入組んだ湿地帯で漁師町や畠地であったという。文禄元年にはじまった西の丸（中の門内）工事の残土を皇居外苑に運んで整地し、ために一帯は魚などを売る商売人が集まって繁盛するようになった。

慶長7年江戸図には1の倉地、僧正殿、人寄所、時打所、頭方人数居所、荷物あげ場、相模の中島殿、本多殿、馬おき場などがある。1の倉地は平成天皇成婚記念噴水一画で、和田倉の起源は太田時代和田蔵某が居住した、地名の和田に倉地などの説がある。僧正殿は増上寺源誉僧正（存応上人）で、本多はこのころ江戸町作りをすすめていた本多佐渡守正信、相模の中島殿には里見忠義の欠字との解説が欄外にある。周辺に工事関係者の飯場や舟着場、厩などがあった。

皇居外苑が江戸城の内郭として諸大名の邸地とされたのは慶長12年ころのことで、石垣工事はこれより遅い慶長19年、西国大名を総動員した石垣修築工事とみられる。日比谷交差点近くの石垣は加藤忠広と浅野長あきらが担当したという。予定地一帯は大変な沼地で地盤が弱く、加藤家では萱を刈り取って一面にしきしめ子供たちを集めて踏み固めさせた。工事は大幅に遅れたが、大雨のとき浅野家の石垣がくずれて、加藤家の工法が見直された。

西の丸下、和田倉御門内、馬場先御門内などとよばれた皇居前広場は江戸城本丸と西の丸に隣接する拠点で当初は榊原康政、井伊直政、本多忠勝、大久保忠隣、鳥居忠政ら徳川家の譜代重臣邸がイラカを連ね、後期は老中、若年寄らの邸地とされた。かれらは幕閣就任とともに江戸城近くに居住を命ぜられ、退任と同時に没収された。その変遷は枚挙にいとまないが、江戸末期のころ、松平会津藩邸、奥平忍藩邸、板倉松山藩邸、稲葉淀藩邸、立花三池藩邸、平岡船方藩邸、田沼相良藩邸、歩兵屯所、厩、馬場で明治維新を迎えた。

皇居前広場への出入り口には和田倉門、馬場先門、外桜田門の3門があった。和田倉門は太田時代、倉地に橋をかけたのがはじまり、桝型は元和6年の建造で、高麗門を入って左側に渡櫓を潜った。明暦3年、明和年間に焼失したが、天保5年に作られた門が大正12年の関東大震災まであった。木橋は昭和年間の再建で、石垣など周辺の遺構が旧態を物語っている。江戸時代は2、3万石クラスの譜代大名が鉄砲、弓などを常備して警護した。

馬場先門は寛永6年、門と桝型を築いたのがはじまりだが、当初は締切門で、寛文8年の大火後通行を認めた。馬場先の名は大土塁下にそって追回し馬場をおいたことによる。この馬場は城内でも古い方のもので、寛永12年朝鮮曲馬を3代将軍家光が上覧したという記録が残っている。門橋は明治維新後も残ったが、明治37年5月、日露戦争の九連城陥落の祝賀パレードが馬場先門にさしかかったとき雑踏のため転倒して多くの死傷者をだすという痛ましい事故が起こった。これにこりた東京市らは皇居前広場を公園として整備し、石垣の半分を撤去して道路をひろげた。

外桜田門は桜田地区と皇居をむすんでいる。家康入城以前からの木戸門を元和6年に奥羽諸侯が枡型門とした。濠をわたって高麗門があり、右に折れると巨大な渡櫓にでる。江戸時代の歴史を現在に残している。この外桜田門で有名な桜田門外の変が起こった。万延元年3月、大雪の日、水戸浪士らが大老井伊直弼のカゴを襲撃して首をはねた。白昼、幕府の要人が殺されるなど常識では考えられないことであった。この事件を契機に徳川幕府の威信は衰退の一途を辿った。

明治維新後の皇居外苑は官軍屯所と元勲邸、太政官政府の官庁街へと変身をはたす。太政官代、兵部省、神祇省、教部省、大蔵省、元老院などがおかれた。明治16年宮殿新築工事がはじまると、皇居前広場の大半は造営工事場になった。木材や石材がいったんここで加工されて工事現場に運ばれた。工事の終わった明治25年残った元老院が解体され、残材が撤去されて一面の空き地に変わり、芝が植えられた。明治21年皇居を宮城と改称、外苑は宮城前広場と総称されることになり、戦後の昭和26年に皇居前広場と呼び直された。

大正12年9月の関東大震災は東京全土を焦土と化した。宮城前広場は罹災者の避難地となり、30万人ともいわれた人たちが眠れない夜をおくった。挙国戦時体制下の昭和15年、皇紀紀元2千6百年記念式典がここ宮城前広場で開催され、外苑一帯が整備された。昭和20年8月終戦[2]皇居前広場の地は連合国進駐軍の手に接収され演習や高官着離任時の閲兵がくりかえされた。戦後の皇居前広場は東京名所の1つとしてよみがえり、昭和35年5月、皇居外苑をふくめた旧江戸城一帯が国の史跡として指定された。

皇居前広場の象徴、楠正成の馬上銅像は、明治33年に住友家が寄贈したもので東京美術学校の高村光雲の作品。かたわらに皇居参観観光バス駐車場、休息所、国民公園保存協会などがあり、年間を通じて内外の観光客でにぎわっている。

資料図1-2～4　（皇居外苑②、旧元千代田町①③　坂下門前交差点周辺）

慶長ころ	鳥居左京忠政	山形20万石
〃	石川長門守康通	大垣3万石
〃 ～元和4－3	酒井左衛門尉家次	高田10万石
元和4－8～寛永ころ	〃宮内大輔忠勝	庄内14万石
寛永ころ	井上河内守正利	笠間5万石
承応ころ ～慶安4－4	堀田加賀守正盛	佐倉11万石
慶安4－8～万治3－11	〃上野介正信	〃
明暦3－3割り替え、地形変更		のちに寺社奉行
万治3－11～天和2－4	阿部伊予守正春	大多喜1万6千石
別資料　延宝7年図牧野伊予守		関宿7万3千石
天和2－4～元禄8－11	牧野備後守成貞	天和元年～元禄8年側用人
元禄8－11～〃10－4	〃美濃守成春	元禄10年～宝永2年老中
〃10－4～〃13年	小笠原佐渡守長重	岩槻6万石
元禄13－12～宝永6－3	稲葉丹後守正通	佐倉10万2千石　元禄14年～宝永4年老中
宝永6－3～享保16－9	松平肥後守正容	会津23万石
享保16－10～延享3－9	〃容貞	〃
延享3－11～文化2－7	〃容のぶ	〃
文化2閏8～〃2－12	〃容住	〃
〃3－3～文政5－2	〃容衆	〃
文政5－4～嘉永5閏2	〃容敬	〃
嘉永5閏2～慶応4年	〃容保	〃　文久2年～元治元年京都守護職
明治元－8～明治3－11	軍務官、2－7兵部省	
別資料　明治2－3侍詔局、旧会津藩邸へ移転		
兵部省添邸　明治5－2出火焼失		
別資料　明治9年官用地明細表では、①②旧陸軍兵学寮、③旧陸軍兵学寮調馬所、別資料　糺問所		
〃5－8～〃9ころ	陸軍省軍馬局	
〃10ころ～〃20ころ	陸軍省軍馬局調馬厩	
〃10－8～〃17－2～〃24－4	陸軍省衛成本部、衛成主衛、衛生大隊	
〃24ころ～現在	陸軍大学校	
〃43－11～大正12－9	宮城前広場、昭和23－7皇居前広場	
大正13－2～昭和6－5	帝室林野管理局	出火焼失
	消防本部仮庁舎	

資料図1-5、6　（皇居外苑②、旧元千代田町　坂下門前交差点周辺）

慶長ころ ～慶長7－9	井伊兵部少輔直政	彦根18万石　徳川4天王
〃7－9～寛永7－9	〃直勝	安中5万石
承応ころ ～明暦3－3	水野監物忠善	岡崎5万石
慶長ころ ～慶長11－5	榊原式部大輔康政	館林10万石　徳川4天王　慶長5～11年老中
〃11－ ～元和元－5	〃遠江守康勝	〃　松平姓を称す　元老
元和元－12～寛永18－3	〃式部大輔忠次	姫路15万石　大番頭
寛永18－3～明暦3－3	松平外記忠実	明暦3－3　水野監物、松平外記邸をあわせ拝領
明暦3－3～貞享4－2	阿部豊後守忠秋	寛永10年～寛文6年老中
貞享4－2～元禄元－8	土屋相模守政直	貞享4年～享保3年老中
元禄元－8～	牧野備後守邸に囲い込み（以下資料図－2参照）	

東京駅の八重洲側正面の行幸通りをすすんだ皇居前広場北側の地は江戸時代、3の丸と西の丸下を結ぶ内桜田門、西の丸と西の丸下を結ぶ坂下門前に位置した要路で、江戸はじめのころ井伊直政、榊原康政ら譜代の重臣邸を集めた。井伊直政は徳川4天王の1人で井伊の赤備えと称した騎馬軍団を編成して相次ぐ合戦に戦功をあげ、彦根18万石となった。次の直勝は直政の長男だが、大阪の陣のとき病床で、変わりに弟直孝が出陣したので、宗家継承を弟に譲って分家した。榊原康政は小牧、長久手の戦いで豊臣軍を破り、徳川4天

王の1人にかぞえられた。関東入府で館林10万石をえ、大事にのぞんであわてずさわがず、動きが機敏であったことから家康の信任が厚かった。次の康勝は大阪陣中で病死したが後継がなく、榊原家の名跡を惜しんだ家康が一族の大須賀忠次に宗家継承を命じた。忠次には1代松平姓が与えられ、元老（大老格）としていつでも意見をいえる立場となった。

酒井家次の父忠次は徳川4天王首席で母は家康のオバになる。関が原の合戦では上田城の真田昌幸に行く手をはばまれたが、大阪冬の陣で先鋒をつとめて高田10万石となり、次の忠勝のとき最上義俊改易後の庄内14万石に栄進した。鳥居忠政の父は家康の今川家人質に付人としてしたがい、関が原の合戦では家康の留守城伏見を守って壮烈な最後をとげた元忠で、すすんで山形22万石をえた。

承応のころ、堀田正盛邸となった。正盛の母は稲葉正成の先妻の子で春日局の縁で3代将軍家光に近侍した。家光6人衆の1人として幕政に参画し、家光に殉死した。次の正信は圧政に苦しんだ農民を救おうと将軍家に直訴した佐倉惣五郎をハリツケにし、のち、幕政批判の意見書を提出して佐倉に引上げたので、狂人として廃絶処分となった。阿部正春も家光に殉死した父重次の遺領のうち1万6千石を分知されたが、兄の岩槻藩主定高の遺言で嫡子正邦の成人までの間宗家をつないだ。

5代将軍綱吉の寵臣牧野成貞邸もこの一画に構えた。旗本儀成の2男で遺領のうち2千石を分知。成貞の出世街道は館林時代の綱吉に近侍したことにはじまる。綱吉の将軍襲封にしたがって側用人にすすみ、その待遇は老中に準じた。成貞邸には将軍綱吉をはじめ、生母桂昌院、娘の鶴姫らが足しげく来訪した。成貞には嗣子がなかったので成春は養子。生類哀れみの令の提唱者隆光の弟子で綱吉が仲立ちした。

最後の松平保科家は2代将軍秀忠の4男正之の直系。3代正容のとき松平姓と葵紋の使用が許された。容保は文久2年京都守護職を拝命して尊皇攘夷のうずまく京都で長州過激派の弾圧をすすめたが、鳥羽伏見の戦いの敗戦後は15代将軍慶喜を奉じて江戸に戻り、引き続く明治維新の戦いでは奥羽越列藩同盟の中心藩として官軍と戦って敗れた。

明治維新を契機に皇居前広場は江戸へ進撃した官軍兵営が占拠し、旧松平肥後守邸は新政府軍の軍務官となった。軍務官は新政府軍の統括本部で、翌2年兵部省と改称した。兵部卿（大臣）は江戸進攻で大総督をつとめた有栖川宮熾仁親王で、前原一誠、山県有朋が補佐した。

兵部省添邸とされた明治5年2月出火。折から北西の烈風にあおられた火は馬場先門をこえて丸の内一帯にひろがった。道三濠から南、旧鳥取藩邸の兵部省、高知山内藩邸、岡山池田藩邸にいたる地、現在の丸の内のほぼ全域を焼失して銀座方面にのびた。この火事で首都の中心部は焼野原と化したが維新草々の政府は本格的な再建計画に着手できず、大半はしばらく放置された。明治中期は軍馬局、衛生本部などで、後に陸軍大学校となった。陸軍の幹部養成機関で7年間校地をおいた。明治後期は宮城前広場で、43年その一部に皇室財産を管理する皇室林野局が庁舎をかまえたが、関東大震災のとき出火し、L字型に折れ曲がった馬場先濠をこえた炎は大手町1帯を焼失させた。

資料図1－1　（皇居外苑③、旧元千代田町②　噴水周辺）

慶長ころ～寛永はじめ	和田蔵	
寛永はじめ～〃　5－7	豊島刑部少輔信満　1千2百石	目付、寛永5年刺殺廃絶
	別資料　寛永9年図神尾刑部	
	阿部豊後守忠秋　忍8万石	寛永10年～寛文6年老中
〃　6－8～明暦3－3	和田御蔵	
明暦3－3～天和ころ	中山勘兵衛預かり屋	
天和3－2～貞享ころ	牧野備後守添え屋敷	
貞享ころ～元禄10－4	小笠原佐渡守添え屋敷	
元禄10－4～〃　13年	和田蔵御用屋敷、馬預かり方屋敷	
〃　13年～正徳5－1	松平肥後守添屋敷	
正徳5－1～享保13－5	和田蔵御用屋敷	
享保13－5～寛保元年	斉藤三右衛門預かり屋	
寛保元年～寛政5年	曲木又左衛門、又六郎預かり屋	
寛政5年～文政2－11	松平肥後守添屋敷	
文政2－11～慶応4年	市政裁判所付兵隊和田蔵門詰所　明治はじめ御用地	
明治元－7～明治元－12	陸軍兵学寮	
〃　4－12～〃　5－2	陸軍省添邸	
〃　5－8～不詳	陸軍省軍馬局調馬分屋、馬場地	
〃　10ころ～明治13ころ	内務省書庫千代田文庫、22年内閣文庫	
〃　13ころ～〃　44年	内閣記録課分室	
〃　44年～大正元ころ	内閣恩給局	
大正13年～昭和18－11	平成天皇御成婚記念噴水塔、和田倉休息所　平成7－6改修	
昭和36年～現在		

皇居外苑噴水の地の慶長年間は和田倉で寛永はじめに豊島信満邸になった。信満は太田道灌に滅ぼされた豊島一族の子孫。信満は目付にすすんだが寛永5年8月、婚姻違約の遺恨から城内西の丸で老中井上正就を殺害し、実子主膳とともに切腹廃絶となった。次の阿部忠秋は3代将軍家光側近で家光6人衆の1人として老中をつとめた。明暦大火で焼失。跡地はふたたび蔵地とされ、牧野備後守、小笠原佐渡守添屋敷をへて和田蔵御用屋敷になった。当時、皇居前広場には2重橋濠にそって厩があり、和田蔵門と馬場先門との間の約5百メートルほどが馬場で、馬預かり曲木又左衛門らが居住した。文政2年に松平会津藩の添屋敷に変わり幕末を迎えた。

明治維新直後の市中は新政府軍兵士がわがもの顔で闊歩し、幕府ひいきの江戸市民とトラブルを起こしたり、新政府に不満の旧幕臣の抵抗もあって、治安は乱れた。みかねた旧

旗本の大久保与七郎が自らの手兵をもって新宿の警備にあたり、旧町奉行所から変身した市政裁判所の付属兵隊として和田倉門に詰めた。

厩、馬場地などをへた千代田文庫は当初内務省の図書庫で旧紅葉山文庫の一部などを保管した。政府は各省蔵書を赤坂離宮内の太政官文庫に集め、明治22年から和田倉門内に移した。44年大手門内、昭和46年に国立公文書館に移管したが跡地は内閣記録課分室としてしばらく残った。戦前は恩給局がおかれた。恩給局は明治11年の創設で軍人や官吏一般の恩給事務を取扱った。大噴水は昭和36年、平成天皇の皇太子時代に成婚を記念して作られたもので、平成7年に大改修された。

資料図1-7　(皇居外苑②、旧宝田町　中央皇居側)

慶長ころ～慶長16-10	大久保加賀守忠常	寄西2万石	
〃 16-12～寛永12年	〃　忠職	加納3万石	
寛永12ころ～万治2-7	阿部対馬守重次	岩槻9万9千石	寛永10年～15年若年寄
万治2-7～寛文10-12	本多美作守忠相	膳所本多家分家	留守役ほか
寛文10-12～延宝8-8	堀田備中守正俊	安中2万石	
延宝8-8～天和2-4	牧野備後守成貞	常陸国内1万3千石	側衆
天和2-4～貞享3-7	堀田豊前守正休	吉井1万石	
貞享3-7～元禄元-4	加藤佐渡守明英	壬生2万5千石	のちに若年寄
元禄元-4～〃 元年	大久保安芸守忠増	小田原大久保家世子	元禄元年若年寄
〃 元年～〃 2-3	南部遠江守直政	八戸2万石	元禄元～2年側用人
〃 2-3～〃 3-4	松平備前守正信	玉縄2万石	
〃 3-4　〃 3-7	弾正忠正久	〃	のちに若年寄
〃 3-7～〃 9-10	別資料　元禄2年図	松平安房守信孝	
〃 9-10～宝永元-11	内藤丹波守政親	泉2万石	
宝永元-11～正徳元-6	本多伯耆守正永	沼田2万石	〃 9年～宝永元年若年
正徳元-7～〃 3-8	永井伊豆守直敬	赤穂3万3千石	宝永元年～正徳元年若年
〃 3-8～享保13-5	〃　伊賀守尚平	岩槻3万2千石	
享保13-5～〃 19-9	大久保佐渡守常春	烏山2万石	正徳3年～享保13年若年
〃 19-9～寛保元-10	別資料　享保13-5	林佐渡守邸を太田備中守拝領	
寛保元-10～明和4-7	太田備中守資晴	館林5万石	享保13～19年若年寄
	西尾隠岐守忠尚	横須賀2万5千石	〃 19年～延享2年若年寄
	板倉佐渡守勝清	相良2万石	〃 20年～明和4年若年寄、側用人
明和4-7～安永4-8	水野壱岐守忠見	北条1万5千石	享保8年～安永4年若年
安永4-8～天明3-2	松平伊賀守忠順	上田5万3千石	安永4年～天明3年若年
天明3-2～〃 5-12	別資料　天明元年図	鳥居丹波守忠意	〃 6年～〃 5年若年寄
〃 5-12～〃 8-4	米倉丹後守昌晴	六浦1万2千石	天明5～8年西の丸若年寄、若年寄
	松平玄蕃頭忠福	小幡2万石	
〃 8ころ～寛政5-8	青山大膳亮幸完	郡上4万石	天明8年～寛政3年若年
寛政5-8～寛政10ころ	立花出雲守種周	三池1万石	寛政5年～文化2年若年
〃 10ころ～文政5-8	小笠原近江守貞温	小倉新田1万石	文化2年～文政5年西の丸若年寄、若年寄
文政5-8～天保9-8	森川紀伊守俊知	生実1万石	文政5年～天保4年若年
天保9-8～安政2-10	松平玄蕃頭忠恵	小幡2万石	天保9年～嘉永7年若年
安政2-10～安政5-9	安政2-10松平伊賀、松平玄蕃邸をあわせ拝領		
〃 5-9～文久2-4	堀田備中守正睦	佐倉11万石	安政2～5年老中
	安藤対馬守信正	平5万石	万延元年～文久2年老中
文久2-4～〃 2-10	当初は堀田邸の半分を拝領、残り半分が預かり地、文久2-4預かり地を拝領。この分は同年中に返上		
〃 2-10～〃 3-1	板倉周防守勝静	松山5万石	文久元年～元治4年老中
〃 3-1～慶応4-4	文久2-6内藤紀伊守邸を添地拝領		
慶応4-4～明治5-2	松平下総守当分預かり		
明治5-3～〃 7ころ	歩兵屯所		
〃 7ころ～〃 9ころ	親兵屯所、連隊、陣隊、長州屯所、御用邸		
〃 9-6～〃 21年	近衛5番大隊調練所		別資料兵営
〃 14-5～〃 14-7	近衛第1大隊営		
〃 16年～〃 21-8	警視庁用地、警視庁練兵場		一部に巡査教習所
〃 21-8～現在	東京憲兵隊仮本部		
	皇居造営工作場		
	芝張工事、21-10宮城前広場、昭和23-7皇居前広場		

資料図1-8　(皇居外苑②、旧宝田町①　中央皇居側)

慶長ころ～慶長16年	平岩主計頭親吉		徳川義直付家老
〃 ころ～〃 14-6	本多中務大輔忠勝	犬山12万2千石	
〃 14-6～元和8-4	〃　美濃守忠政	桑名10万石	慶長5～14年老中
元和8-4～〃 9-8	徳川家光	姫路15万石	
〃 9-8～寛永8-8	本多美濃守忠政	将軍世子	
寛永8閏10～〃 15-11	〃　甲斐守政朝	姫路15万石	
〃 15-12～〃 18-3	〃　内記政勝	〃	
〃 18-3～万治元-10	北条出羽守氏重	掛川3万石	
万治2-7～〃 3-11	阿部因幡守正春	岩槻11万5千石	
〃 3-11～延宝7-6	久世大和守広之	関宿5万石	寛文3年～延宝7年老中
天和2-4～貞享元-12	稲葉石見守正休	青野1万2千石	天和2年～貞享2年若年寄、貞享2年廃絶
貞享元-12～〃 3-7	内藤大和守重頼	下野3万3千石	貞享元～2年若年寄
〃 3-7～〃 4-6	稲垣安芸守重定	山上1万3千石	〃 2年～宝永4年若年
〃 4ころ～元禄元-4	大久保安芸守忠増	下総ほか1万石	2～4年寺社奉行
元禄元-4～正徳元-12	加藤佐渡守明英	壬生2万5千石	小田原大久保家世子
正徳元-12～〃 4-9	水野大監物忠之	岡崎5万石	元禄3年～正徳元年若年
〃 4-9～享保3-5	森川出羽守俊胤	生実1万石	正徳元年～4年若年寄
享保3-5～〃 8-3	大久保佐渡守教寛	松春1万6千石	正徳4年～享保2年若年
〃 8-3～〃 9-12	水野壱岐守忠定	北条1万6千石	宝永6年～享保8年若年
			享保8年～延宝4年若年

享保9－12～享保13－5	松平伊賀守忠周	上田5万8千石	享保9～18年老中
〃 13－5～〃 13－9	大久保山城守常春	烏山3万石	〃 18年老中
〃 13－10～〃 17－3	伊豆守忠胤	〃	
延享元－3～延享元－11	小出信濃守英貞	園部1万9千石	享保17年～延享元年若年
宝暦8年～〃 8－9	戸田淡路守氏房	畑村1万石	延享元年～宝暦8年若年
〃 8－10～明和4－7	本多長門守忠英	大和国内1万石	宝暦8年若年寄
明和4－7～安永9－6	水野壱岐守忠見	北条1万5千石	〃 8年～安永4年若年
	板倉佐渡守勝清	安中3万石	明和4年～安永9年西の丸老中、老中
安永9－6～天明元閏5	伊勢守勝暁	〃	
天明元閏5～寛政8－12	太田備中守資愛	掛川5万石	
寛政8－12～〃 12－12	青山下野守忠裕	篠山5万石	寛政8～12年若年寄
〃 12－12～文化7－6	植村駿河守家長	高取2万5千石	〃 12年～文政8年若年
文化7－6～文政8－5	松平能登守乗保	岩村3万石	文化7年～文政9年西の丸老中
文政8－5～〃 11－10	寛政12・10大半を植村駿河守、一部を太田備中守領。高取2万5千石を植村駿河守家長へ移動		
〃 11－11～〃 11－12	寛政8－12太田備中守邸と松平越中守邸の一部を青山下野守拝領		
〃 11－12～天保14－11	青山下野守忠裕、一部を太田備中守拝領		
天保14－11～弘化元－11	牧野備前守忠雅	長岡10万石	寛政8～12年若年寄
弘化元－12～嘉永元－10	青山下野守忠良	浜松7万石	〃 12年～文政8年若年
嘉永元－10～安政2－10	松平伊賀守忠優	上田5万3千石	文化7年～文政9年西の丸老中
安政2－10～	堀田備中守邸囲込み（以下資料図－7参照）		
正徳4－9～享保3－5	森川出羽守俊胤	生実1万石	正徳4年～享保2年若年
享保3－5～〃 8－3	大久保佐渡守教寛	松春1万6千石	宝永6年～享保8年若年
〃 8－3～〃 9－12	水野壱岐守忠定	北条1万6千石	享保8年～延宝4年若年
〃 9－12～〃 13－5	松平伊賀守忠周	上田5万8千石	〃 9～18年老中
〃 13－5～〃 13－9	大久保山城守常春	烏山3万石	〃 13年老中
〃 13－10～〃 17－3	伊豆守忠胤	〃	
〃 17－3～延享元－11	小出信濃守英貞	園部1万9千石	〃 17年～延享元年若年
延享元－11～宝暦8－4	戸田淡路守氏房	畑村1万石	延享元年～宝暦8年若年
宝暦8年～〃 8－9	本多長門守忠英	大和国内1万石	宝暦8年若年寄
〃 8－10～明和4－7	水野壱岐守忠見	北条1万5千石	〃 8年～安永4年若年
明和4－7～安永9－6	板倉佐渡守勝清	安中3万石	明和4年～安永9年西の丸老中、老中
安永9－6～天明元閏5	伊勢守勝暁	〃	
天明元閏5～寛政8－12	太田備中守資愛	掛川5万石	

寛政8－12～寛政12－12	青山下野守忠裕	篠山5万石	寛政8～12年若年寄
〃 12－12～文化7－6	植村駿河守家長	高取2万5千石	〃 12年～文政8年若年
文化7－6～文政8－5	松平能登守乗保	岩村3万石	文化7年～文政9年西の丸老中
文政8－5～〃 11－10	文化8－5添地拝領、文政8－5松平錫邸の一部を添地拝領。資料図－10へ移動		
〃 11－11～〃 11－12	稲村駿河守家長	高取2万5千石	文政8～11年執政格、内府付
〃 11－12～天保14－11	水野越前守忠邦	浜松7万石	文政11年～天保14年西の丸老中、老中
天保14－11～弘化元－11	牧野備前守忠雅	長岡10万石	寛政8～12年若年寄
弘化元－12～嘉永元－10	青山下野守忠良	浜松7万石	〃 12年～文政8年若年
嘉永元－10～安政2－10	松平伊賀守忠優	上田5万3千石	文化7年～文政9年西の丸老中
安政2－10～	堀田備中守邸囲込み（以下資料図－7参照）		
正徳4－9～享保3－5	森川出羽守俊胤	生実1万石	正徳4年～享保2年若年
享保3－5～〃 8－3	大久保佐渡守教寛	松春1万6千石	宝永6年～享保8年若年
〃 8－3～〃 9－12	水野壱岐守忠定	北条1万6千石	享保8年～延宝4年若年
〃 9－12～〃 13－5	松平伊賀守忠周	上田5万8千石	〃 9～18年老中
〃 13－5～〃 13－9	大久保山城守常春	烏山3万石	〃 13年老中
〃 13－10～〃 17－3	伊豆守忠胤	〃	
〃 17－3～延享元－11	小出信濃守英貞	園部1万9千石	〃 17年～延享元年若年
延享元－11～宝暦8－4	戸田淡路守氏房	畑村1万石	延享元年～宝暦8年若年
宝暦8年～〃 8－9	本多長門守忠英	大和国内1万石	宝暦8年若年寄
〃 8－10～明和4－7	水野壱岐守忠見	北条1万5千石	〃 8年～安永4年若年
明和4－7～安永9－6	板倉佐渡守勝清	安中3万石	明和4年～安永9年西の丸老中、老中
安永9－6～天明元閏5	伊勢守勝暁	〃	
天明元閏5～寛政8－12	太田備中守資愛	掛川5万石	

寛政8－12～寛政12－12	青山下野守忠裕	篠山5万石	寛政8～12年若年寄
〃 12－12～文化7－6	植村駿河守家長	高取2万5千石	〃 12年～文政8年若年
文化7－6～文政8－5	松平能登守乗保	岩村3万石	文化7年～文政9年西の丸老中
文政8－5～〃 11－10	文化8－5添地拝領、文政8－5松平錫邸の一部を添地拝領。資料図－10へ移動		
〃 11－11～〃 11－12	稲村駿河守家長	高取2万5千石	文政8～11年執政格、内府付
〃 11－12～天保14－11	水野越前守忠邦	浜松7万石	文政11年～天保14年西の丸老中、老中
天保14－11～弘化元－11	牧野備前守忠雅	長岡10万石	寛政8～12年若年寄
弘化元－12～嘉永元－10	青山下野守忠良	浜松7万石	〃 12年～文政8年若年
嘉永元－10～安政2－10	松平伊賀守忠優	上田5万3千石	文化7年～文政9年西の丸老中
安政2－10～	堀田備中守邸囲込み（以下資料図－7参照）		

皇居外苑のほぼ中央部にあたるこの地は太田道灌入城当時宝田村とよばれた古い土地で、明治5年町名制定のとき旧名の宝田町が復活した。江戸はじめは本多忠勝、大久保忠常ら三河以来の譜代が代々つづいた。本多忠勝は最古参の譜代直参。徳川4天王とうたわれ、関東入府で大多喜10万石を与えられた。忠勝には嫡子の忠朝があったが大阪夏の陣で討死。家康はオイの政朝に宗家継承を命じた。平岩親吉は幼時から家康につかえ、今川義元の人質にも同行した。関が原の合戦の勝利で甲府6万3千石にすすみ、徳川尾張義直の付家老として犬山12万3千石が与えられた。大久保忠常は徳川幕府創設期の功臣忠隣の嫡男。関が原の合戦に先立つ上杉討伐では先鋒として宇都宮にすすんだが、石田三成の挙兵で上田城を攻めた。

寛文のころから資料図－7、8の両屋敷とも若年寄などの役宅とされた。江戸城に向かって左側の地は阿部重次、堀田正俊邸をへて堀田正休が拝領した。正休は幕府に意見書を提出して廃絶された正信の嫡子。いったん父の罪をえて信濃に流されたが天和2年に2万石で再興。大番頭をへて5代将軍綱吉の子徳松付となった。西尾忠尚は8代将軍吉宗の引退で西の丸にしたがうがのちに9代将軍家重の本丸老中につけられた。板倉勝清は吉宗、家重期25年間の老中で10代将軍家治の就任にあたって側用人に転じた。鳥居忠意は11代将軍家斉世子時代からの側近で、首席老中松平信明の腹臣として大御所時代に老中にすすんだ。立花種周は寛政の改革をすすめた松平定信に対立、大奥方幕閣として解任された。

一方向かって右側資料図－8の稲葉正休は小田原8万石正則の弟の子で、はじめ5千石

の家督を相続、書院番頭、近習をへて若年寄にすすんだが、親類すじにあたる大老堀田正俊に専横のこと多いとして刺殺、自らもその場で惨殺廃絶された。大久保教寛は小田原藩大久保忠朝の2男。綱吉の側用人から家宣付若年寄となり、1万1千石の大名に列した。板倉勝清は10代将軍家治期、太田資愛は11代将軍家斉前期の老中で、植村家長は化政時代の執政格、内府付。さしずめ老中待遇といったところだろう。家斉の信任が厚く姫たちの婚儀御用、嗣子御用掛などをつとめた。

江戸後期、文政11年からの15年間は水野忠邦邸になった。忠邦は唐津藩主忠光の嫡子で、寺社奉行のとき老中昇進の願いをこめて浜松6万石への替地を申請して許された。大阪城代、京都所司代のとき自藩の藩政改革にとりくみ、寛政6年に念願の老中を手中に入れると大御所家斉の死を待って天保の改革にのりだす。享保の改革、寛政の改革にならった綱紀の刷新と経費の節減、奢侈の禁止などであったが、改革の実があがらない天保14年、上知令の発令とともにおこった排斥の嵐はついに12代将軍家治を動かして解任された。

つづく牧野忠雅は忠邦のあと筆頭老中にすすんだ阿部正広を助けて、混迷をつづけた外交行政を担当した。青山忠良は10代将軍家重期5年間の老中。松平忠優は12代将軍家慶、13代将軍家定期に2度にわたって老中をつとめ、嘉永6年のペリー来航では開国、和親条約の締結をすすめ、再任期は条約勅許の不要論を主張して老中を罷免された。

安政4年、資料図－7、8の両役宅、若年寄松平忠意、老中松平忠優邸をあわせて堀田正睦が拝領し、以後、首相官邸ともいえる首席老中役宅となった。堀田正睦は13代将軍家定期の安政2年、阿部正弘らの推挙をえて2度目の老中でその首席となった。安政3年、日米和親条約の締結で開港した下田にアメリカの総領事ハリスが到着、星条旗をかかげた一行が江戸城に到着して通商条約の締結を求めたので、正睦は京都に参内して勅許を求めたが、朝廷内の攘夷派の反対にあって実現しない。家定の継嗣騒動では一ツ橋慶喜に属して擁立に失敗、井伊直弼の大老就任で失脚した。

変わって安政5年からの4年間は安藤信正邸になった。若年寄時代の万延元年に井伊直弼が桜田門外に倒れたので、久世広周と幕閣を構成して首席老中にすすむ。井伊の強硬路線を修正して公武合体策をとった。イギリス公使館襲撃事件が起こり、文久改革に取組むが成果をえない。文久元年14代将軍家茂への皇女和宮降嫁に奔走して実現させるが、翌2年1月、坂下門前で尊皇攘夷派の襲撃をうけて失脚。最後の板倉勝静は14代将軍家茂、15代将軍慶喜期の老中。寺社奉行のとき安政の大獄に反対して免職されるが、14代将軍家茂逝去後に慶喜擁立に成功してその筆頭老中となる。慶喜の幕政改革を補佐し、幕府体制の立直しをめざすが時代の波に抗するすべもない。最後は歩兵屯所（後出）で明治維新を迎えた。

慶応4年4月11日、江戸は新政府軍によって開城されたが、目の前に本拠を構えた西の丸下歩兵屯所はなすすべもなく静観するばかりだった。14日に武装解除され、解散。旧歩兵屯所は長州軍屯所、親兵屯所と変わった。親兵は明治4年2月に創設された天皇護衛部隊。鹿児島藩歩兵4大隊、砲兵4隊、山口藩歩兵3大隊、高知藩歩兵2大隊、砲兵2隊、騎兵隊2小隊が任命されたが、翌5年3月に近衛兵と改称された。先だつ明治5年2月大火で焼失。跡地はしばらくの間放置して、近衛兵の調練場とされたが、明治7年ころ近衛第1大隊が兵舎を造り、警視庁練兵場、巡査教習所などをへて、東京憲兵隊の創設期の仮本部となった。

資料図－9、10　（皇居外苑②、旧宝田町②　内濠通り中央部周辺）

慶長ころ	～寛永11－1	大久保相模守忠隣	小田原6万石
不詳	～元和5－5	石川主殿頭忠総	文禄2年～慶長17年老中
慶長ころ	～明暦3－3	本多出雲守忠朝	佐倉6万石
正保ころ	～天和元年	本多能登守忠義	大多喜5万石
寛永11－1	～宝永元－10	稲葉美濃守正則	元和5年無嗣廃絶
天和元年	～正徳4－9	阿部豊後守正武	白河12万石
宝永元－10	～享保2年	秋元但馬守喬知	小田原11万石
正徳4－9	15－7	阿部豊後守正喬	万治元年～延宝8年老中
享保2－9～	～延享元－6	水野和泉守忠之	天和元年～宝永元年老中
延享元－6～	3－5	松平伊豆守信祝	元禄12年～正徳4年老中
3－5～安永8－7		松平右近将監武元	正徳元年～享保2年老中
安永8－9～天明元閏5		武寛	享保2～15年老中
天明元閏5～天明7－7		天明元－閏5大半を久世大和守、一部を太田備後守拝領	15年～延享元年老中
7年～寛政8－12		久世大和守広明	岡崎5万石
寛政8ころ～享和元－7		松平越中守定信	浜松7万石
享和元－7～文化14－8		太田備中守資愛	館林6万1千石
文化14－8～文政6－11		牧野備前守忠精	延享4年～安永8年老中
文政6－11～	8－5	阿部備中守正精	天明元－閏5大半を久世大和守、一部を太田備後守拝領
″	8－5～	松平右京大夫輝延	関宿5万8千石
″	9－6	松平能登守乗保	天明元～5年老中
″	9－8～	松平周防守康任	白河11万石
″	9－11～天保6－12	青山因幡守預かり	″　7年～寛政5年老中
天保6－12～	7－2	脇坂中務大輔安董	太田備中守資愛
″	7－2～	井上河内守正春	掛川5万石
″	12－4	間部下総守詮勝	寛政5年～享和元年老中
″	12－4～		牧野備前守忠精
″	14－8		長岡10万石
″	14－8～		享和元年～文化13年老中
″	14－11		阿部備中守正精
			福山10万石
			文化14年～文政6年老中
			松平右京大夫輝延
			高崎7万2千石
			文政6～8年老中
			松平岩村藩、植村高取藩邸に分割
			文政8－5
			岩村3万石
			文化7年～文政9年西の丸老中
		松平周防守康任	浜田6万1千石
		青山因幡守預かり	文政9年～天保6年老中
		脇坂中務大輔安董	竜野5万1千石
		井上河内守正春	浜松6万石
		間部下総守詮勝	鯖江5万石
			天保7～12年西の丸老中、老中
			天保12～14年老中
			″　11～14年老中

天保14－11～嘉永3－7	戸田山城守忠温	宇都宮7万8千石	天保14年～嘉永4年西の丸老中、老中
嘉永4－9～〃4－12	〃因幡守忠明	〃村上5万石	嘉永4年～元治元年老中
〃4－12～文久2－6	内藤紀伊守信思	竜野5万1千石	文久2年老中
文久2－6～〃2年	脇坂中務大輔安宅	〃	〃2年～元治元年老中
〃2年～元治元－7	板倉周防守勝静	松山5万石	元治元年～慶応元年老中
元治元－7～慶応元－10	阿部豊後守正外	白河10万石	
慶応元－11～〃元ころ	松平下総守当分預かり		
〃元ころ～〃3－2	板倉伊賀守勝静	松山5万石	慶応元年～慶応4年老中
〃3－2～〃3ころ	本庄伊予守預かり		
明治元－10～明治2－2	神祇官出張所		
〃2－3～〃5－3	東京神祇官、4－7神祇省		
〃5－3～〃6－4	教部省		
〃6－2～〃6－5	工部省用地		本庁建設なし
〃6－5～〃10－8	太政官代		式部寮を併設
〃6－5～〃10－1	正院、		
〃12－3～〃14年	外務省		
〃14ころ～〃15－9	宮内庁部長局		
〃15－9～〃16－4	華族会館		別資料斯文黄
〃16－4～〃21－10	皇居造営事務局		
〃18－1～〃19－1	修史館		
〃21－11～現在	野芝張庭地、宮城前広場、昭和23－7皇居前広場		

旧宝田町内堀通りの中央あたりの慶長時代は大久保忠隣と本多忠朝邸からはじまっている。大久保忠隣は譜代の長老忠世の嫡男。姉川の合戦、長久手の戦いなどで抜群の軍功をあげ、譜代武功派代表として2代将軍秀忠をささえたが、謀将本多正信と対立して改易された。次の石川忠総はその大久保忠隣の2男。家康の命で大垣藩石川家成の養子となったが、実父の処分に連座し、復帰が許された大阪の陣で城奥ふかく攻入った。本多忠朝は4天王忠勝の2男で、忠義は長男忠政の3男。榊原忠次移封のあとをうけて白河12万石を領有したが、その治世は「民間の難儀このときよりなり」ときびしい収奪を伝えている。稲葉正則は正勝の2男。4歳のとき母が病死したので祖母の春日局に大奥で養育された。4代将軍家綱の信頼をえて22年間老中をつとめた。

この一画は慶長から明治維新まで、老中などの役宅となった。中期の松平武元は石岡藩主松平水戸頼明の3男だが、館林藩松平武雅の末期養子に迎えられ、8代将軍吉宗の信任をえて、9代将軍家重の補佐役、世子家治の教育係をつとめた。松平定信も徳川田安宗武の7男に生まれ白河藩松平定邦の養子となった。11代将軍家斉始政の首席老中で田沼意次一派を処断して寛政の改革を断行するが、努力の割りに成果が現れない。やがて光格天皇の父尊号事件が起こって失脚した。太田資愛、牧野忠精、松平輝延ら11代将軍家斉期の老中邸をはさんだ脇坂安薫は、大奥と宗教界の大スキャンダル延命院事件で関係者を厳罰に処した。

間部詮勝は13代将軍家定期の老中。大阪城代、京都所司代をへて老中となったが、天保の改革をすすめる水野忠邦と衝突して退任。阿部正外は14代将軍家茂期の老中。旗本3千石の父の遺領をついでのち、白河10万石の宗家正ひさ養子に迎えられ老中にすすむ。幕閣首脳として兵庫の即時開港を主張して罷免された。最後、老中板倉勝静（前出）のとき明治維新を迎えた。

明治維新後の皇居前広場、旧宝田町の一帯は、神祇省、教部省、太政官代、大蔵省、民部省、岩倉具視邸など明治新政府の太政官庁街、明治元勲邸とかわっていく。旧老中板倉藩邸跡に設置された神祇官は天神と地祇をつかさどり、教部省は仏教の衰退とキリスト教の伸張を憂慮した左院の建議で大教宣布をすすめた。明治4年から18年まで14年間の太政大臣は三条実美で島津久光、有栖川宮熾仁親王、岩倉具視が左右大臣をつとめた。

一時外務省もおかれた。霞が関の旧黒田邸本省を焼失した明治12年からの2年間で、創世期の華族会館が皇居前広場に居をかまえたこともあった。明治7年6月、創会したが定屋をもてず、明治15年9月宝田町2番地の宮内省部長局旧家屋に移ったが、半年後の16年4月に宮内省から同番地東隣の建物への移転を求められ、19年1月今度は新宮殿の造営局使用のため再び宝田町3番地の旧岩倉邸御用邸一部を代地とした。

資料図I－11（皇居外苑②、旧宝田町③　中央部丸の内側）

慶長6年～元和元年	小笠原兵部大夫秀政	松本8万石	
元和元年～寛永17－3	〃忠真	小倉15万石	
寛永17－3～明暦3－3	酒井備後守忠朝	酒井忠勝嫡子	寛永12年～15年若年寄
明暦3－3～貞享3－7	水野監物忠善	岡崎5万石	
貞享3－7～元禄2－2	喜多見若狭守重政	喜多見1万石	
元禄2年～〃2－8	山内大膳亮豊明	中村3万石	延宝8年～元禄2年側用人、犬大支配　勘気廃絶
〃3－6～〃6－12	青山播磨守利朝	尼崎4万8千石	元禄2年若年寄、不敬廃絶
〃6－12～宝永元ころ～〃元－11	阿部豊後守邸囲込み	忍10万石	
宝永元ころ～〃2－2～正徳3ころ	阿部飛騨守正喬		お成御殿
正徳3ころ～延享3－6	御用屋敷		
延享3－8～明和8－6	松平下総守忠雅	桑名10万石	
明和8－6～天明6－12	〃忠刻		
天明7－1～寛政5－11	〃忠啓		
寛政5－11～享和2－5	〃忠功		
〃享和2－6～文政4－3	〃忠和		
文政4－5～天保9－10	〃忠翼		
天保9－10～〃12－4	松平修理大夫忠堯	忍10万石	
〃12－5～文久3－4	〃忠彦		
	〃下総守忠国		

文久3－4～明治2－3　松平下総守忠誠　忍10万石
明治はじめ　押小路大外記、壬生官務その他下地宮人
〃　2－2～〃　2－3　神祇官出張所
〃　2－4～〃　4－8　会計官、2－7大蔵省
〃　2－12～〃　4－7　民部省
〃　4－4～〃　19年　岩倉具視　右大臣
〃　19－1～〃　21－7　華族会館　一部に工部省用地がある
〃　23年～現在　宮城前広場、昭和23－7皇居前広場
大正13－2～昭和6－9　警視庁仮庁舎　濠沿いに建築

資料図－12　（皇居外苑②、旧宝田町　中央部丸の内側）
慶長ころ　皆川志摩守広照　皆川7万石　松平越後家もり役
慶長14年不正廃絶

寛永ころ～寛永6－8　内藤百介正勝　勝山2万石
〃　7年～万治3－11　〃　弥三郎重頼　5千石
正保ころ～延宝ころ　大久保右京亮教勝　小田原大久保藩分家6千石　大番頭
貞享ころ～貞享3－7　喜多見若狭守重政　3千2百石　側用人
〃　3－7～元禄5－7　内藤大和守清枚　高遠3万3千石
元禄5ころ～〃　5ころ　松平市正英親　杵築3万2千石
〃　5ころ～〃　6－4　大久保左衛門某　不詳
〃　6－4～〃　後期　滝川越前守利錦　4千石　小姓番頭、側衆
〃　後期～宝永元－12　青山備前守秘成　郡上藩分家3千石　側衆
宝永元－12～〃　3－6　間部越前守詮房　3千石
〃　3－6～〃　3－9　三浦壱岐守預かり　宝永元年～正徳6年側用人、のちに老中
〃　3－9～正徳3－5　御用屋敷、小普請方　正徳3－5永井伊賀守預かり
正徳3ころ～　松平下総守邸に囲込み。または宝暦年間御用屋敷に囲込み（以下資料図－11参照）

同じ旧宝田町の丸の内側は小笠原秀政と皆川広照からはじまっている。小笠原家は室町以来、騎芸乗馬礼法の宗家として知られる家柄で、家康の関東入府にしたがい古河3万石をえた。秀政が家康長男松平岡崎信康の長女と結婚して徳川家と姻戚関係となったが、大阪夏の陣で長男とともに討死したので家康の命令で2男の忠真が家督をついだ。寛永9年小倉15万石に移封。外様大名の多い九州の要衝の地に徳川勢力を進出させた。

皆川広照は天正ころから家康に属して松平越後忠輝のもり人となった。忠輝の悪行を幕府に訴えていったん所領を没収されたが、忠輝改易後復帰しおとぎ衆をつとめた。寛永図は内藤正勝邸になっている。正勝は兄清政の遺領のうち2万石をえたが3年後に病死し、嫡子重頼が幼少のため廃絶された。翌年親族の願いにより5千石で再興。4代将軍家綱に信任されて、のちに若年寄、京都所司代、高遠3万3千石となった。喜多見重政は旗本千百石取りの養嗣子で、5代将軍綱吉の信任をえて大名に列した。綱吉の生類哀れみの令で大大支配を命ぜられ、四谷や中野などに犬小屋を造成して野犬を保護したが、綱吉の勘気にふれて廃絶となった。

江戸中期の正徳3年から桑名、忍10万石松平奥平藩の上屋敷になった。忍は現在の行田市で城下町の名残がある。武田勝頼と戦って長篠城を死守した奥平信昌の4男が藩祖で母は家康の長女亀姫。家康の養子とされ松平姓を名のった。西の丸下入居時は桑名を領有し、忠堯の文政6年に忍に移った。忠啓のとき男子がなく徳川紀伊宗将の7男忠功とさらに下の弟忠和を養子とした。忠国のときにも血統がたえて徳川水戸家から養子を迎えたが実父の斉昭が安政の大獄で謹慎を命ぜられると離縁し、烏山藩主の子忠誠に改めた。慶応4年鳥羽伏見の戦いに幕府軍の一員として出陣したが惨敗。忠誠はわずかな供と江戸へ逃げ帰った。

明治維新後、旧忍藩邸跡地に会計官がおかれた。会計官は財務事務を担当する中央官庁で、明治2年大蔵省と改め、松平慶永、伊達宗城、大久保利道が大蔵卿（大臣）にすすんだ。岩倉具視は京都の貧乏公卿の出だが政治にうとい公卿のなかで徐々に頭角を表した。一旦は和宮を強引に降嫁させた奸物として失脚するが、この間大久保利道、西郷隆盛、坂本竜馬らの参謀役となり、王政復古、倒幕密勅などを画策して新政府設立の原動力となった。明治4年廃藩置県を断行して右大臣にすすみ、特命全権特使としてアメリカ、ヨーロッパを視察した。のちの明治6年、西郷隆盛の征韓論を退け、大久保と明治政府の実権をにぎって富国強兵、殖産興業をすすめた。

明治後期から宮城前広場に組込まれ、関東大震災後、馬場先濠にそって警視庁と消防本部の仮庁舎がおかれたこともあった。有楽町の赤レンガ庁舎を焼失した大正13年からの7年間で、この間震が関桜田門外の地に総工費4百万円をかけた5階建て新庁舎建設をすすめた。

資料図－13　（皇居外苑①、旧祝田町①　2重橋前交差点周辺）
慶長ころ～不詳　三浦監物重成　本佐倉1万3千石
不詳～寛永8－8　〃　右馬助重勝　寛永8年無嗣廃絶
承応ころ～慶安4－8　内田信濃守正信　鹿沼1万5千石
慶安4－8～万治元－2　〃　出羽守正象
万治はじめ～天和元－1　堀田備中守正俊　安中4万石
天和元ころ～〃　3－7　内藤若狭守重頼　下野3万3千石
〃　ころ～延宝5－8　久世大和守重之　関宿5万石
延宝5－8～　大久保加賀守邸囲込み（以下資料図－14参照）

資料図－14　（皇居外苑①、旧祝田町　2重橋前交差点周辺）
慶長ころ～寛永15－8　高力左近大夫忠房　浜松3万1千石
寛永15－8～明暦3ころ　加賀爪甲斐守直澄　掛塚1万石
万治元－5～延宝5－8　永井伊賀守尚庸　淀2万石　大番頭ほか
寛文5～10年若年寄

延宝5－8～元禄11－10　永井伊賀守邸、久世大和守邸をあわせ拝領
元禄11－10～正徳3－7　大久保加賀守忠朝　小田原10万3千石延宝5年～元禄11年老中
〃　〃　隠岐守忠増　〃　11万3千石宝永2年～正徳3年老中
正徳3－9～〃　4－9　加賀守忠方　〃
元禄6－12お成りのため曽我周防守邸を添地拝領。この分は元禄中ころ返却
正徳4－9～享保7－5　井上河内守正峯　笠間6万石　宝永2年～享保7年老中のちに寺社奉行
享保7－7～〃　8－4　〃　正之　〃
〃　8－4～延享2－11　松平左近将監乗邑　佐倉6万石　享保8年～延享2年老中
元文2－9南隣西尾隠岐守添屋敷永預かり、拝領
延享2－11～〃　2－11　松平伊豆守預かり　佐倉12万石　延享2年～宝暦11年老中
〃　2－11～宝暦11－2　堀田相模守正亮　〃　のちに京都所司代
宝暦11－3～〃　11－8　大蔵大輔正順　〃　延享5－3、寛延3－2隣接明地のうち添地拝領
〃　11－8～〃　12－1　松平肥後守預かり　浜松6万石　宝暦10年～明和元年老中
〃　12－1～明和元－5　井上河内守正経　浜松6万石　明和元年西の丸老中
明和元－5～〃　6－8　阿部伊予守正右　福山10万石　2～6年老中
〃　6－8～安永9－11　阿部豊後守正充　福山10万石　〃　6年～安永9年西の丸老中
天明元年～天明7－3　鳥居丹波守忠意　忍10万石　〃　本丸老中
〃　7－3～〃　8－4　阿部伊勢守正倫　壬生3万石　天明元年～寛政5年老中
〃　8－4～文化元－1　松平伊豆守信明　福山10万石　〃　7～8年老中
文化元－1～天保7閏7　青山下野守忠裕　吉田7万石　〃　8年～享和3年老中
天保7閏7～〃　8－5　〃　因幡守忠良　篠山5万石　文化元年～天保6年老中のちに老中
〃　8－5～〃　9－4　松平伊豆守信順　吉田7万石　天保8年老中
〃　9－4～〃　15－11　土井大炊頭利位　古河7万石　〃　9年～15元年老中
〃　15－11～安政4－9　牧野備前守忠雅　長岡10万石　〃　14年～安政4年老中
安政4－9～〃　5－7　松平伊賀守忠優　上田5万3千石　安政4～5年老中
〃　5－7～万延元閏3　間部下総守詮勝　鯖江5万石　〃　5～6年老中
万延元閏3～文久2－6　久世大和守広周　関宿6万8千石　万延元年～文久2年老中
文久2－6～慶応2－7　水野和泉守忠精　山形5万石　文久2年～慶応2年老中
慶応2－7～〃　2－10　稲葉美濃守正邦　淀10万2千石　慶応2～4年老中
〃　2－10～〃　4年　拝領したが移転にいたらなかった模様
明治元年～明治3ころ　明地
〃　4－7～〃　5－2　報恩隊、土州屯所、御用邸
〃　5－2～〃　16年　近衛5番大隊屯所
〃　16年～〃　21年　近衛騎兵中隊兵営
〃　21－6～現在　皇居造営工作場　芝張工事、21－10宮城前広場、昭和23－7皇居前広場

2重橋前の交差点周辺の江戸時代はじめは、高級旗本や譜代大名の邸地が置かれた。慶長ころの高力忠房は大高の戦いなどで軍功をあげた清長の子で、大概をへて浜松3万石となった。三浦重成は鎌倉三浦氏の子孫で、家康の関東入府のとき佐倉に1万石を領有した。内田正信は8百石の旗本2男だが、9才で家光小姓となり1万石に栄進した。

西の丸下と呼ばれたこの一画も老中役宅としての性格を深めていく。大久保忠明は徳川幕府創設の功臣忠隣3男の2男で忠職の養嗣子となった。4代将軍家綱に近侍、老中にすすんで忠隣改易以来72年ぶりに小田原の旧領に戻った。

8代吉宗治世の享保年間に幕府最高責任者として享保の改革を推進した松平乗邑邸ともなった。改革は元禄以来膨大となった消費支出に歯止めをかけ、農民の年貢取立てをきびしくした。その専横は幕府の全権力を一身に集中させたが、吉宗が引退して新将軍に家重が就任すると罷免。西の丸下屋敷は即日退去を命ぜられ蟄居の身となった。堀田正亮は大老正俊4男の2男だが兄正春の末期養子に迎えられて宗家を相続した。吉宗の引退と松平乗邑失脚後の首席老中で、幕政は前代の踏襲、享保の改革と田沼時代のハザマ期ともいえた。阿部正右は10代将軍家治期、松平信明は11代将軍家斉初期、青山忠裕は家斉後期化政時代華やかな32年間老中をつとめた。

後期は土井利位邸となった。利位は12代将軍家慶期、水野忠邦のもとで天保の改革を推進するが上知令を契機に反対派にまわり、忠邦失脚で、老中首座にすすんだが、難局の外交問題に対応ができず、忠邦の復帰が決まると病気を理由に退任した。間部詮勝のこの地は2度めの老中時代。井伊直弼大老のもと、勝手掛兼外国掛老中の重職を担当、安政の大獄で梅田雲浜、橋本左内らの一ツ橋派、尊皇壌夷派志士を処罰した。久世広周も13代将軍家茂期2度めの老中時代。井伊直弼横死後の万延元年首席老中に復帰して安藤信正とのコンビで和宮降嫁を実現したが公武合体の失敗で再び失脚した。この地の最後は稲葉正邦。京都所司代をへた慶応2年から老中。15代将軍慶喜の腹臣として最後の幕政改革に参画し、慶応4年鳥羽伏見の戦いでは淀城を拠点とした徹底抗戦に反対、幕府軍に打撃を与えた。明治維新後は近衛騎兵中隊とされ、皇居造営工作場をへて宮城前広場に組込まれた。

資料図－15　（皇居外苑①、旧祝田町　2重橋前交差点周辺）
慶長ころ～慶長16年　北条左衛門大夫氏勝岩富1万石
〃　16年～寛永18－3　出羽守氏重　関宿2万2千石
寛永18－3～明暦2－7　松平出雲守勝隆　佐貫1万5千石　寛永12年～万治元年寺社奉行
明暦2－8～寛文8－2　松平出雲守邸、曽我丹波守邸の一部を拝領
寛文8－2～延宝5－12　内藤出雲守忠清　5千石　側衆
延宝5ころ～〃　8ころ　板倉筑後守重直　8千石　側衆、福島板倉藩分家
久世大和守重之　庭瀬5万石
別資料　寛文10－8大久保出羽守邸を久世大和守拝領。同11－6同邸阿部豊後守隠居邸拝領。同11－6堀田備中守邸を久世大

延宝8－9～元禄元－4　曽我土佐守助路　5百石　将軍綱吉小姓
〃　8－9～〃　はじめ　大井甲斐守昌信　7百石　書院番士
天和2－4～貞享元－8　稲葉岩見守正休　青野1万2千石　若年寄、被殺廃絶
元禄ころ　～宝永3－11　小沢宇右衛門忠房　6百石　小納戸
〃　後期　～宝永3－11　依田新五郎盛紀　3百俵　小姓
宝永3－11～〃　4－8　三浦壱岐守預かり　別資料　元禄15－6柳生備前守預かり
〃　4－8～しばらく　大久保長門守邸囲込み（資料図－18参照）
享保はじめ　有馬兵庫頭氏倫　2千4百石　将軍吉宗側御用
〃　大久保長門守邸囲込み（資料図－18参照）

資料図－16　（皇居外苑①、旧祝田町　2重橋前交差点周辺）
慶長ころ　西尾因幡守吉定　7百石　花房西尾藩分家
不詳　～寛永18－3　松平和泉守乗寿　館林6万石
寛永18－3～しばらく　松平縫殿助真次　7千石　（後出）
承応ころ　～明暦2－8　曽我丹波守古祐　3千石　大阪町奉行
万治はじめ～貞享ころ　明暦2－8一部を内藤出雲守邸に囲い込み
貞享はじめ～〃　3－9　堀田備前守邸囲い込み（資料図－13参照）　2千俵　日光廟守護
〃　3－9～元禄ころ　梶　金平定良　貞享3－9梶　金平邸、割残あわせ拝領
〃　2ころ～貞享3－9　松平藤兵衛正房　8百石　小姓
〃　3－9～正徳2－3　柳沢出羽守吉保　1千石　小納戸上席
享保ころ　～享保13－5　加藤源太左衛門正令　5百50石　桐間番
〃　13－5～〃　19－9　御用屋敷　西尾隠岐守添屋敷　預かり
〃　19－9～寛保元－10　太田備中守添屋敷　預かり

資料図－17　（皇居外苑①、旧祝田町　2重橋前交差点周辺）
慶長ころ　鵜飼兵部氏長　1千7百石
元和ころ　～寛永9－1　森川出羽守重俊　生実1万石　寛永5年～9年老中
寛永9－6～寛文3－1　〃　伊賀守重政　〃
寛文3－3～天和3－1　〃　出羽守重信　〃
天和3－1～貞享4－9　万治元－5堀田備中守邸と浦替合
元禄ころ　～享保元ころ　牧野美濃守成時　牧野兵部頭養子　中奥小姓
享保元ころ～〃　17ころ　加藤源五左衛門景利　3百俵　大番
〃　源四郎景氏　〃
〃　15－12～しばらく　不詳

資料図－18　（皇居外苑①、旧祝田町　2重橋前交差点周辺）
元禄6－12～元禄12－1　大久保隠岐守お成御殿　1千石
〃　12－1～〃　15－12　元禄6－12曽我播磨守邸、道路敷あわせ添地拝領
中根大隅守正延　6千石　将軍綱吉側
別資料　元禄15－12中根大隅守邸を松平主計拝領
松平主計頭某

和守拝領。延宝8－9板倉筑後守邸を2分、曽我土佐守、大井甲斐守拝領

元禄12ころ～正徳2－5　中村新右衛門、友之助　6千石　近習番
〃　12ころ～宝永4－9　松浦藤五郎成之　3百俵　小普請
宝永4－11～〃　7－9　〃　源次郎成興　〃
〃　7－12～正徳3－2　〃　平馬成昭　〃
正徳3－2～〃　3－4　三浦壱岐守預かり　足利1.1万石　西の丸老中
宝永2ころ～宝永3ころ　戸田大炊頭忠時　大久保長門守教寛　荻野山中1万6千石宝永3年～享保8年若年寄
宝永4－8依田新五郎邸を添地拝領
正徳2－5中村友之助邸を添地拝領
〃　3－4松浦玄馬邸を添地拝領

享保3－5～〃　8－3　巨勢伊豆守至信　1千石　将軍吉宗生母いとこ側衆
〃　3－5～〃　4－4　巨勢丹波守由利　5千石　将軍吉宗生母弟
〃　4－4～〃　8－3　〃　大和守利啓　5千石
〃　8－3～〃　10－6　大久保長門守教寛　荻野山中1万6千石
〃　10－6～寛延3－11　本多伊予守忠統　神戸1万5千石　享保10年～寛延3年若年
寛延3－11～宝暦10－10　〃　丹後守忠永　〃
宝暦10－10～明和2－8　〃　忠興　〃

明和2－8～天明8－6　延享4－7添地拝領　明和2年～天明8年若年
天明8－6～文化5－4　酒井飛騨守忠香　鞠山1万石　天明8年～文化5年若年
文化5－6～〃　5－12　京極備前守高久　峯山1万石　高備
〃　5－12～文政11－5　水野壱岐守忠韶　鶴枚1万5千石　文化5年～文政11年若年
文政11－7～〃　12－2　〃　甲斐守忠実　〃
〃　12－2～天保3年　堀田摂津守正敦　堅田1万石　寛政2年～天保3年若年
天保3年　～〃　12－9　本多豊後守助賢　飯山2万石　天保3～12年若年寄
〃　12－9～安政5－8　本庄伊勢守道貫　高富1万石　〃　12年～安政5年若年
安政5－10～万延元－1　〃　道美　〃
万延元－1～文久2－11　堀　出雲守之敏　椎谷1万石　安政7年～文久2年若年
文久3－2～〃　3年　〃　備中守之美　〃
〃　3－9～慶応4年　立花出雲守種恭　下手渡1万石　文久3年～慶応4年若年
明治元年　～明治4年　御用邸
〃　はじめ　宮内省掛勤めのもの住居
〃　7ころ～明治10年代　下川自炊、加藤意則所有地
〃　16ころ　近衛騎兵営官舎の模様（以下資料図－14参照）

2重橋前の内濠通り交差点の地の江戸はじめに北条氏勝がいた。氏勝は豊臣秀吉の小田原征伐で伊豆山中城を守ったが落城、家康のすすめで麾下に加わった。以後、豊臣徳川連合軍の案内役として関東地区平定に貢献し、岩富に1万石を与えられた。次の氏重は高取藩主保科正直の4男。家康の命で北条家に迎えられたが嗣子なく廃絶。西尾吉定は家康のもとで戦功をあげた吉次の3男で、松平乗寿は浜松、館林を転封して老中となった。曽我家は父尚祐が千石をえ、古祐のとき2代将軍秀忠につけられて3千石にのばした。寛文のころ、永井淀藩の老中役屋敷の一部に囲込み、のちに御用屋敷とされた。

同じ2重橋前に老中の森川重俊も邸地をおいた。はじめ秀忠に近侍して3千石となったが、大久保忠隣事件に連座して高崎に配流され、大阪の陣で晴れて出陣が許され軍功をあげて再び秀忠の側近となった。秀忠が引退、大御所となるとこれにしたがい殉死。将軍継嗣問題で忠長派だった重俊が家光政権下での改易をおそれたともいう。

元禄6年老中大久保忠明邸に5代将軍綱吉のお成りが決まり、道路をはさんだ日比谷濠の曽我周防守邸が添地されてお成御殿が造成された。元禄11年ころ、添地分が上地されて生まれたのがこの地、資料図－18である。戸田忠時は百俵小姓組番士の2男だが、伏見奉行から西の丸老中にすすみ1万1千石で足利に陣屋をおいた。つづく大久保教寛のとき添地拝領があって若年寄役宅とした。本多忠統は8代将軍吉宗期の若年寄。勝手方御用掛として財政難の打開につとめた。酒井忠香は10代将軍家治の世子家基付となり、のちに若年寄にすすんだ。

最後の立花種恭は幕末混乱期の若年寄で、老中格の会計総裁をかねた。14代将軍家茂の第2次長州征伐にしたがい大阪城へ出張、明治維新の戦いでは奥羽列藩同盟を脱退して仙台兵の攻撃をうけた。ほどなく新政府によって旧領三池への転封が決まり、藩主らは下手渡に帰ることなく新任地へ移った。明治維新後は宮内省勤めの者などが居住した。

資料図－19　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長12年　～寛永ころ　加賀爪民部少輔忠澄　9千5百石
明暦3－5～万治3－12　朽木伊予守植綱　土浦3万石
寛文元年　～貞享4－2　〃　種昌　福知山3万2千石
貞享4－2～元禄2－4　柳生但馬守宗在　柳生1万石　将軍剣術指南役
元禄2－6～宝永3－11　〃　備前守俊方　〃　目付、あちに南町奉行
宝永3－11～　間部越前守添屋敷、囲い込み（以下資料図－24参照）　寛永12年～慶安2年若年寄

資料図－20　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長ころ　阿部左馬助忠吉　5千石　大番頭
寛永ころ　岡田太郎右衛門利永　8百50石　進物役
承応ころ　～慶安4年　三枝土佐守守恵　6千石　書院番頭
慶安4年　～延宝ころ　〃　摂津守守俊　4千石　駿府城代
貞享2－7～貞享3－9　斉藤飛騨守三政　6千石　小姓
別資料　元禄元－4拝領
貞享3－9斉藤飛騨守、金田遠江守邸をあわせ拝領
〃　3－9～元禄元－11　柳沢出羽守吉保　1千石　小納戸上席
元禄元－11～〃　12－1　大久保隠岐守忠増　小田原藩世子
〃　12－1～宝永7－3　安藤信濃守定行　3千石　廊下番頭
宝永7－3～　間部下総守邸囲い込み（以下資料図－24参照）

資料図－21　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長ころ　松平和泉守家乗　岩村2万石
寛永ころ　石川大垣藩下屋敷
承応ころ　～正徳3－9　松平縫殿助真次　7千石
正徳9年　～貞享4－8　〃　乗次　大給1万6千石
貞享4－9～元禄元－11　〃　乗成　奥殿1万7千石
元禄元－11～〃　4－2　黒田豊前守長重　秋月5万石
〃　4－2ころ～〃　8－5　荒川土佐守重好　1千石　将軍綱吉小姓
〃　8－5～宝永7－3　平岡和泉守頼恒　2千石　〃
宝永7－3～　間部越前守邸に囲込み（以下資料図－24参照）

資料図－22　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長ころ　～寛永ころ　谷　六右衛門衛友　丹波山1万5千石
慶安4年　～寛文3－12　石川播磨守総長　石川2万石
寛文3－12～天和3－1　森川摂津守某　不詳　小姓番頭
貞享年間　～元禄ころ　平岡阿波守頼恒　2千石　（前出）
元禄ころ　本多平六郎重路　3百石　桐間番
宝永ころ　～享保2ころ　土屋薩摩守某　1千石　廊下番頭

資料図－23　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長ころ　井上主計頭正就　横須賀5万2千石元和3年～寛永5年老中
不詳　～寛永12年　永井信濃守尚政　淀10万石　元和8年～寛永10年老中
寛永12年　～明暦3－5　朽木伊予守植綱　土浦3万石　寛永13年～寛文元年若年寄
明暦3－5～不詳　土井兵庫頭利長　下野国内1万石
〃　ころ　～　松平若狭守邸に囲込み（以下資料図－24参照）

資料図－24　（皇居外苑①、旧祝田町　楠公像周辺）
慶長ころ　～寛永13－1　牧野駿河守忠成　長岡7万4千石
寛永13－1～〃　13－3　酒井雅楽頭忠世　前橋12万2千石　寛永13年大老
〃　13－8～〃　15－1　松平紀伊守家信　佐倉4万石
〃　15－5～寛文9－9　〃　若狭守康信　篠山5万石
寛文9－9～天和元－10　〃　主膳正信利　8千石　徳川徳松もり役
延宝ころ　堀田対馬守正英　田中5万石
貞享ころ　～貞享3－7　太田摂津守資直　岩槻3万2千石　宝永元年～正徳元年若年寄
〃　3－7～元禄8－3　永井伊賀守直敬　上田5万8千石　〃　2～6年若年寄、側用人
元禄8－3～宝永3－5　松平伊賀守忠周　宝永2年～享保元年側用人、若年寄、将軍家継後見役
宝永3－5～享保2－2　間部越前守詮房　高崎5万石

資料図－19～24　（皇居外苑①　享保2～17年の皇居前広場楠公像周辺）
享保2－2～享保17－4　寿光院大典侍　清閑寺大納言熙定の娘、将軍綱吉側室
宝永3－11柳生備前守邸を添地拝領
〃　7－3安藤信濃守、平岡和泉守邸を添地拝領
正徳6－6一部を板倉近江守邸に返上

享保2－2～享保14－12	徳川竹姫	清閑寺大納言熙房の娘、将軍吉宗養女
〃 14－12～〃 16－4	松平下総守預かり	
〃 2－2～〃 17－4	法心院右近の方	家宣側室、通称1の部屋様
〃 2－2～〃 17－4	蓮浄院すめの方	家宣側室、通称大典殿

皇居前広場の有楽町寄り、楠公像や観光バスの駐車場のあたりは、初期は徳川創設期の功臣や官吏役宅でのちに若年寄役宅や厩などになった。加賀爪忠澄は大阪夏の陣のとき大野治長の豊臣秀頼助命嘆願に徳川方使者として大阪城に入り、のちに大目付などをつとめて9千5百石をえた。朽木稙綱は家光に仕えて6人衆に列し、柳生家は柳生流宗厳8男宗矩のときから将軍剣法指南役となった。平岡頼恒の曽祖父頼勝は関が原の合戦で西軍にあった小早川秀秋を内応させたが、頼資のときお家騒動が起こって改易。再興された頼恒が4代将軍家綱小姓として2千石となった。

一画の慶長時代に牧野忠成邸があり、酒井忠世の大老役屋敷がおかれた。牧野忠成は関が原合戦、大阪の陣にも出陣して長岡7万4千石をえた。酒井家は上屋敷が大手門前にあり、寛永9年には大御所秀忠の旧邸西の丸御殿を預かっていた。しかし11年に西の丸を全焼させたので責任をとっていったん老中職を辞退した。13年大老に昇進、西の丸下邸はこのときの役屋敷である。松平形原家は家康3祖の5男が藩祖で、家信が家康の関東入府にしたがって佐倉4万石に取立てられた。堀田正英は大老正俊の弟。5代将軍綱吉世子徳松もり役をへて若年寄にすすみ、松平忠周も若年寄から吉宗の側用人に取立てられた。

江戸中期の幕政推進者となった間部詮房もまたここに邸地を拝領した。詮房は徳川甲府家時代の6代将軍家宣に近侍し、西の丸入りにしたがって老中、側用人にすすんだ。新井白石とのコンビで生類哀れみの令を廃止するなど正徳の治とよばれた善政をしいた。正徳2年家宣が急逝すると、幼将軍家継の後見役にすすみ昼夜をとわず城内に起居、家継の死後、吉宗を8代将軍に推挙したが罷免された。

8代将軍吉宗の享保はじめのころ西の丸下の一画を割替えて徳川家ゆかりの女性たちが邸地をうけた。大典侍は清閑寺大納言熙定の娘。はじめ京都の宮廷につかえ、5代将軍綱吉御台所従姫にしたがって下向した。才色兼備、綱吉晩年の寵愛を一身にうけたが子はなかった。竹姫は大典侍のメイで、享保年間に吉宗の養女とされたが側室ともいう。右近の方は浪人の養女だが元禄期に奥勤めして6代将軍家宣の側室となった。長男実千代をうむが3か月で亡くなり、同じ家宣側室のおすめの方の2男大五郎、3男虎吉も早世した。

資料図－25（皇居外苑①、旧祝田町⑤、⑥）

享保16－4～享保18－9	石川近江守総茂	下館2万石
〃 18－11～〃 20－6	播磨守総陽	〃

享保16－4元竹姫屋敷、松平下総守預かり邸拝領

享保17－4	大火後の割り替えで御用屋敷の一部添地拝領	
〃 20－6～寛保元－10	板倉佐渡守勝清	相良2万石
寛保元－11～〃 元－12	松平下総守預かり	享保20年～宝暦10年若年
〃 元－12～延享2－7	松平備中守正貞	大多喜2万石
延享2－7～宝暦3－10	堀田加賀守正陳	宮川1万3千石
宝暦4－3～〃 5－3	土岐伊予守頼おき	沼田3万5千石
〃 5－5～〃 12－12	美濃守定経	延享2年～寛延4年若年
〃 12－12～天明元－9	鳥居伊賀守忠意	壬生3万石
天明元－9～文化9－12	井伊兵部少輔直朗	与板2万石
文化9－12～文政11－11	別資料 天明元年図松平伊賀守忠順、	天明元年～文化9年若年
文政11－11～天保14－7	京極周防守高備	峯山1万1千石
天保14－8～〃 4－9	堀 大和守親しげ	文化9年～文政11年若年
〃 4－9～〃 14－12	松平肥後守預かり	文政11年～天保14年若年
〃 14－12～文久3－9	小笠原伊予守預かり替え	
文久3－9～慶応4年	酒井右京亮忠ます	敦賀1万石
明治元年～明治2年	平岡丹波守道弘	武蔵ほか1万石
〃 2－4～〃 2－8	五辻安仲	行政官判事
〃 2年～〃 5－8	侍紹局、2－7侍紹院	
〃 5－8～〃 6－6	中山忠能、中山慶子神祇伯、	2位局
〃 6－6～〃 8－4	集議院事務調所	
〃 8－4～〃 8－7～〃 23－10	右院、左院	
	元老院	
25年～現在	宮城前広場、昭和23－7皇居前広場	

享保14年3月、烈しい西北風のなか江戸市中4か所から出火。西の丸下の火は一帯を焼いて山下橋外に類焼した。翌4月、幕府は再び西の丸下の区画整理を実施。側室たちの邸地を城外に動かし、若年寄役宅、厩などとした。石川総茂は8代将軍吉宗の信任をえて世子家重側用人などをつとめた。堀親しげは堀家中興の英主として有名。水野忠邦の片腕として寛政の改革をすすめたが、忠邦の失脚で辞任。酒井忠ますは幕末期3度にわたる若年寄で、元治元年イギリス、アメリカ、フランス、オランダ各国と下関条約の締結につとめた。最後の平岡道弘は12代将軍家慶付き西の丸小姓から本丸にしたがい、勝手入用掛をへて1万石の諸侯に列した。

明治維新後、旧若年寄役宅は中山忠能、慶子邸になった。慶子は孝明天皇の側室で明治天皇の生母。中山忠能は慶子の父だから、天皇の外祖父になる。天皇の幼少期を自宅で養育し、即位後に絶大な権勢をふるった。徳川幕府を討伐した密勅の発行者ともいわれ、新政府では議定や神祇伯、大正天皇養育掛などをつとめた。

侍詔局はひろく一般の建言をとりいれるとした明治天皇の趣旨にそって、明治2年3月東京城内に開設、4月に皇居前広場の地に移って上下2局をおいたが8月には集議院と合併して大手町に移った。4年の太政官制度の改革で正院、右院、左院の3院制となり、正

院は太政大臣、納言、参議以下で構成した政治の中枢的機関。右院は各省長官、次官らが正院の下問をうけた。8年4月元老院を設置。元老院は天皇任官の立法機関であったが、緊急事項は内閣が独断で決定したのでやがて無力化していく。明治9年日本憲按を起草、23年10月帝国議会の開設で廃止となった。

資料図－26　（皇居外苑①、祝田町③）
享保17－12～寛延年間　享保17年以降の皇居前広場楠公像周辺）
寛延年間　～宝暦11ころ　松平長菊預かり地
宝暦11年　～明和4年　享保17－12御用屋敷、竹本佐渡守、岡村丹後守、吉川次右衛門邸跡明地預かり
安永2－8～寛政3－7　堀田相模守拝借地
寛政3－7～〃6－6　安祥院遊喜の方　将軍家重側室、清水重好生母
〃6－6～不詳　別資料　安祥院、明和9－5まで在住
不詳　～慶応4年　諏訪部文九郎堅雄　百50俵　召馬預厩
明治元年　～明治5－8　〃　八十郎定員　〃
〃5－8～〃6－6　〃　文右衛門定昭　〃
〃6－6～〃8－6　厩　金三郎、丛十郎、弥三郎　〃
〃7年～〃8－3　明治5年焼失
〃8－6～　明地　別資料　集議院翻訳局
工部省用地（庁舎建設なし）
内務省雇外国人居留地
警視庁練兵場、巡査練習所（以下資料図－27参照）

資料図－27　（皇居外苑①、祝田町④　享保17年以降の皇居前広場楠公像周辺）
享保17－4～延享3－7　水野壱岐守忠定　北条1万5千石　享保8年～延享4年若年寄
享保17－4大火後の割り替えで若干移動。御用屋敷のうち拝領
延享3－7～明和4－10　小出信濃守英持　園部1万8千石　寛延元年～明和4年若年寄
明和4－10～寛延元－8　延享3－7水野壱岐守、明地のうち拝領
加納遠江守久通　東阿倉川1万石　延宝元年～延享2年側御用取次
寛延元－10～天明6－8　青山大膳亮幸完　八幡4万8千石　明和4年～天明6年若年寄
〃　〃　〃　高取2万石　天明7年～文化4年側申次、若年寄、伏見奉行
天明6－10～文化元－8　〃　久堅　〃　文化元～8年若年寄
文化元－8～〃7－6　〃　久周　〃　寛政12年～文政8年若年寄
〃7－6～文政8－5　植村駿河守家長　文政8～12年若年寄
別資料　文化7－6～文政9－11、松平能登守老中役屋敷
文政8－5～〃12－6　本多遠江守正意　田中4万石　文政12年～天保11年若年寄
〃12－6～天保11－3　小笠原相模守長貴　勝山2万7千石　天保11～12年若年寄
天保11－3～〃12－8　内藤大和守頼寧　高遠3万3千石
〃12－8～万延元－8　本多越中守忠徳　泉2万石　天保12年～万延元年若年寄
万延元－8～文久元－10　諏訪因幡守忠成　諏訪3万石　万延元年～文久元年若年寄
文久元－10～慶応2－10　田沼玄蕃頭意尊　相良1万石　文久元年～慶応2年若年寄
明治元年～明治2年　中山忠能　神祇伯
〃はじめ～〃2－7　議定所

明治はじめ～明治5－8　工部省測量司
〃8－3～〃16年　警視庁練兵場
〃16年～〃21年　皇居造営工作場、同跡地
〃21年～現在23－7　野芝庭池整備、宮城前広場、昭和23－7皇居前広場
〃32－1～昭和32－9　内閣恩給局

資料図－28　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）
慶長ころ　～寛永ころ　松平周防守康重　篠山5万石
寛永10－2～寛文9－4　保科肥後守正之　会津若松23万石
寛文9－4～延宝9－3　〃　筑前守正経　〃
延宝9－3～天和3－7　内藤若狭守重頼　5千石　のちに高遠内藤家立藩
天和3－7～元禄2－7　大久保佐渡守忠高　八幡1万石
元禄2－7～〃5－1　松平右京亮輝貞　7千石　将軍綱吉小姓
〃5－1～〃6－12　曽我周防守助興　6千5百石　側衆
〃6－12～　大久保加賀守邸に囲込み

遊喜の方は松平親春の養女。奥勤めのとき9代将軍家重の寵愛をうけて御3卿徳川清水重好の生母になる。家重の逝去で落飾して西の丸下屋敷に移ったが、明和4年に火災焼失して再び桜田御用屋敷内に住居を移した。跡地は再割替えされて諏訪部預かり厩となる。諏訪部家は小田原北条氏の旧臣で家康に召しだされた馬術の達人定吉の後胤。6男成定の血統が百50俵で代々馬預かりをつとめた。

西の丸下、外桜田門入ってすぐの内濠通りとの間あたりに松平康重、保科正之邸があった。康重は東条城主の長男だが、母は家康の侍女で実父は家康だともいわれている。小田原の合戦には家康の先鋒をつとめ、関東入府で私市、のちに篠山5万石をえた。つづく保科正之は2代将軍秀忠のかくし子で、母は板橋の農家の娘という。奥勤めのとき手付きとなり、正室江与への発覚をおそれた秀忠がこっそり出産させ、保科正光に養育を託した。正之は成人ののち高遠2万石を相続。秀忠の生前は正式な父子対面はなかったが3代将軍家光のとき将軍の弟として厚遇された。寛永20年山形をへて会津若松23万石に栄進、家光の遺言で4代将軍家綱の後見役となった。跡地は旗本高官邸とされ、5代将軍綱吉の側衆曽我助興のとき隣接する老中大久保加賀守邸へ囲込みとなった。

楠公像周辺の一画に8代将軍吉宗治世下で権力の中枢に位置した加納久通邸があった。久通は吉宗の紀伊時代の御用番頭で、吉宗が将軍になると江戸城にしたがって側御用取次を命ぜられた。久通は老中を差しおいて3奉行を指揮し、幕政を取仕切って享保の改革をすすめた。次の久堅のとき嫡男がなく大岡忠光の2男久周を養嗣子とした。久周は11代将軍家斉時代、松平定信派としてお側取次に就任し、寛政の改革にあたった。青山幸完も寛政の改革期と化政時代2度にわたる若年寄。本多忠徳のときペリーが来航し、海岸防備御用掛、貿易御用掛を担当した。諏訪忠誠は若年寄を2度つとめ、再選期は外国御用取扱を

兼ねたが、長州征伐に反対して辞任。最後の田沼意尊の若年寄期は水戸天狗党を追討、鎮圧した。

明治はじめは議定所となった。議定は明治元年閏4月に設置された議政官で、岩倉具視、三条実美、中山忠能以下薩摩、長州、土佐、肥前藩主など明治維新の功臣22名が就任した。いわば新政府の方針を決める最高会議となるべきはずであったが軌道にのることなく廃止。以後測量司をへた8年から警視庁練兵場、16年に皇居造営の作業場とされた。

資料図－29～33　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

慶長ころ～寛永16－8	品川新六郎吉久	1千石	
寛永16閏11～寛文11－4	〃　式部大輔高如	〃	奥高家
寛文11－4～元禄はじめ	〃　豊前守伊以	〃	〃
慶長ころ～寛永ころ	曽我又左衛門古祐	1千石	目付
寛永ころ	今川主膳正直房	1千石	高家
〃	小野寺某		
正保ころ～元禄ころ	石川斉阿弥、佃田某		
〃　〃	岡田淡路守重治	6百石	
〃　万治ころ～寛文10ころ	某　万清		
	大久保出羽守忠朝	3千石	
〃	朽木民部少輔添屋敷		
延宝ころ	大島某	不詳	
元禄ころ	石川作右衛門某	〃	

資料図－29　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

元禄	野呂数馬教景	6百50石	将軍綱吉小姓
〃　～元禄8－8	中島助六郎資将	3百石	小納戸
〃　8－8～正徳2－6	中条丹波守直景	5百石	廊下番組頭
正徳2－6～享保2－1	正徳2－6中条丹波守、道路敷あわせ拝領		
享保2－1～〃　17ころ	河野信濃守安通	6百50石	将軍綱吉小姓
	大屋吉衛門昌任	3百50石	小納戸

資料図－30　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

貞享ころ～元禄はじめ	中根八郎右衛門某	3百俵	近習番
元禄　～〃　10－3	佐藤三左衛門某	3百俵	小姓組
〃　10－3～宝永4－8	田中左平太すえ房	6百石	廊下番組頭
不詳　～正徳2－5	林　牛斉某	2百俵	医師
正徳2－5～享保2－1	新見伊予守正言	7百石	将軍綱吉小姓
享保2－1～〃　17－6	藪七郎左衛門勝信	4百石	小納戸

資料図－31　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

延宝　～延宝8－9	大沢右京太夫基恒	2千石	奥高家
〃　8－9～元禄はじめ	荒川長門守重好	1千石	将軍綱吉小姓
元禄5ころ	伊東志摩守祐資	5千石	将軍綱吉小姓

資料図－32　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

貞享　～元禄2－7	曽我七兵衛祐忠	8百石	元禄中ころ～元禄12－6
元禄2－7～〃　はじめ	金田佐太夫某	不詳	〃　12－6～しばらく
〃　はじめ～〃　5－12	大島阿波守義全	1千6百石	〃　12－6～宝永5－3
〃　5－12～〃	伊庭五大夫豊祥	3百俵	〃　12－6～〃　4－8
〃　市十郎清長		百50俵＋10口	不詳　～享保2－1
〃　14ころ～宝永5ころ	稲葉長門守添屋敷	4百50俵	享保2－1～〃　2－7
不詳　～享保2－1	間部主膳詮貞		〃　2－8～〃　2－8
享保2－1～〃　17－4	吉川次郎右衛門一従	3百石	〃　2－11～〃　はじめ
			〃　はじめ～〃　17－4

資料図－33　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

正保ころ～貞享3－2	佐野福阿弥正長	5百40石	安藤伊勢守某　3千石
貞享　～元禄16－6	都筑甚五衛門		小平彦次郎某　2百俵
元禄　～〃　16－11	平岡仁右衛門資しげ	6百石	植田庄助満高　3百俵
〃　16－6～〃　16－11	三浦老岐守預かり		宝永5－3増田寿針邸に囲込み
〃　16－11～正徳3－2	清原三之丞幸信	百50俵	土田孫三郎貞休　3百俵
〃　16－11～〃　3－2	小川李之助某	百50俵	儒者
正徳3－2～享保2－1	柳生十郎右衛門久辰	3百俵	柴田八郎兵衛某　不詳
〃　3－2～〃　2－1	柳生播磨守久寿	6百俵	小納戸、西の丸小姓
享保2－1～〃　10－9	栗原権左衛門某	不詳	上野七郎衛門某　3百石
〃　10－10～〃　17－4	岡村丹後守某	〃	松平下総守預かり
			奥医
			栗本瑞見直方　3百石
			小林半助某　不詳
			増田寿針某某　〃
			土岐信濃守某　〃
			三浦老岐守預かり
			牧野備後守預かり替え
			竹本佐渡守正綱　4百石

資料図－34　（皇居外苑①　皇居前広場日比谷濠沿い）

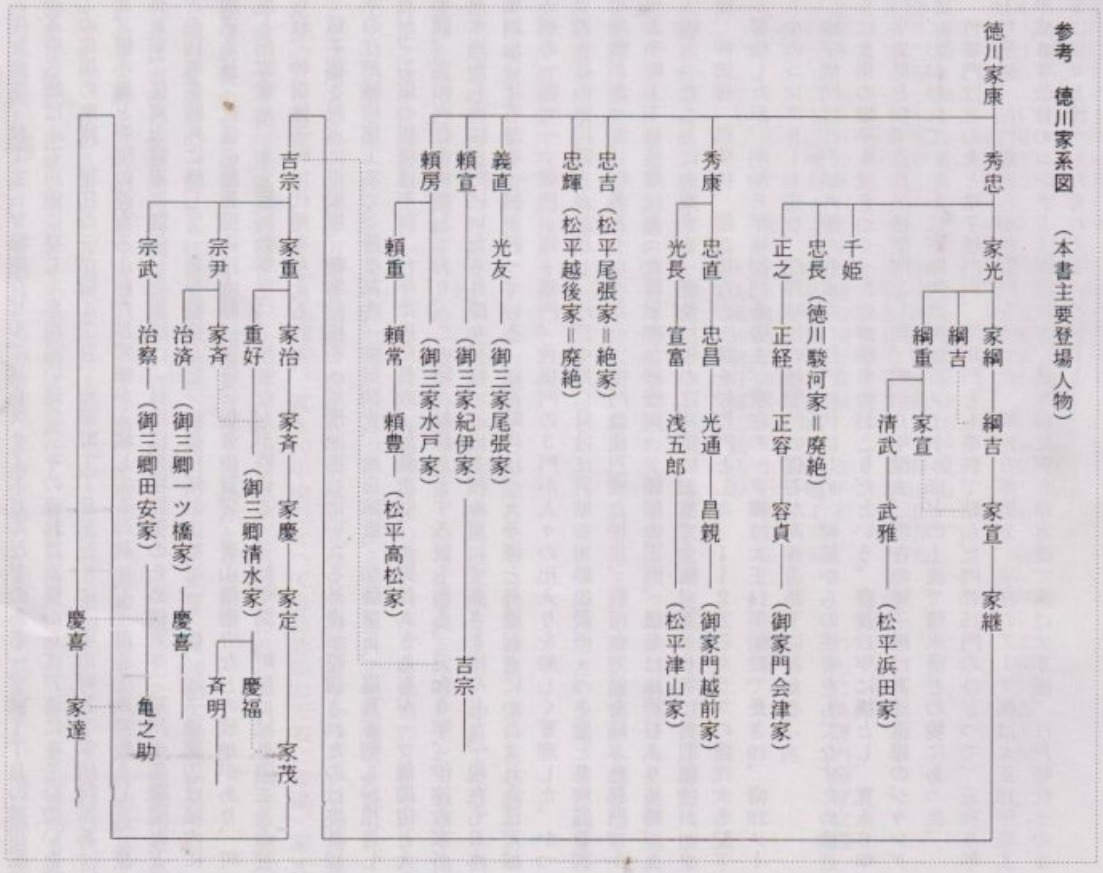
慶長はじめ～慶長19－9	里見阿波守忠義	館山12万石	将軍綱吉側
不詳　～寛永12年	永井信濃守尚政	淀10万石	行水方
寛永12年　～明暦3－5	朽木民部少輔植綱	唐津1万石	儒者
	明暦3－5大火後の割り替えで西位置に若干移動		小納戸、西の丸小姓
			慶長19年大久保忠隣連座廃絶
			元和8年～寛永10年老中
			奥医
			間部詮房弟、小納戸
			西の丸小姓
			同朋頭
			新番
			行水方
			〃
			小納戸
			西の丸小姓
			角右衛門、小納戸

明暦3－5～元禄元－9	土井兵庫頭利長	西尾2万3千石	
元禄元－9～〃 2－5	斉藤飛騨守三政	6千石	将軍綱吉小姓
元禄2－5～享保9－2	別資料 元禄3年図平岡和泉守		
享保9－2～〃 9－12	三浦壱岐守明敬	刈谷2万3千石	
〃 9－12～〃 17－4	〃 明喬	〃	
	水野壱岐守忠定	北条1万5千石	

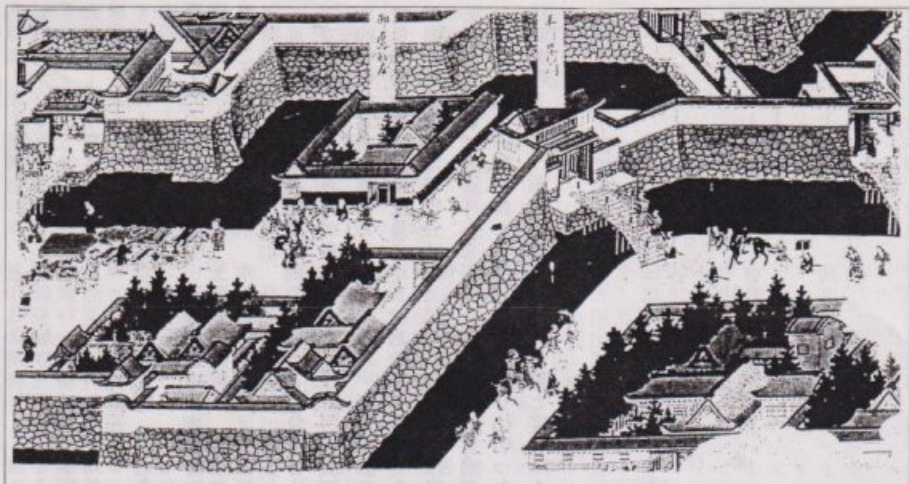
資料図－35 （皇居外苑①、皇居前広場日比谷濠沿い）
慶長ころ 五島主膳玄雅 五島1万5千石
寛永ころ 永井伝十郎直清 山城国内2万石

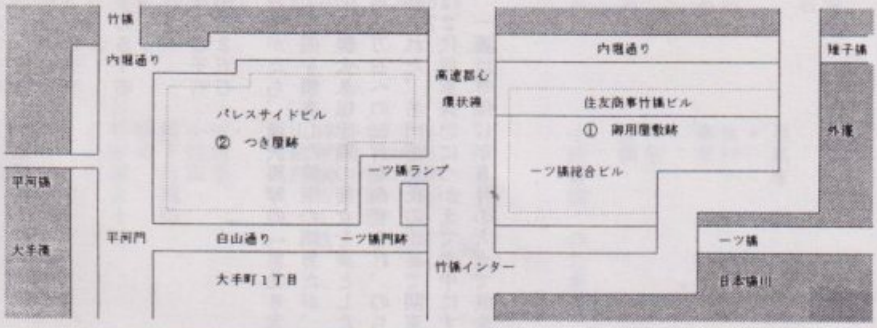
皇居前広場日比谷交差点側のコーナー部分に日比谷櫓がたち、滝沢馬琴の『里見8犬伝』で有名な里見忠義邸があった。忠義は安房、上総2か国を領有した義康の嫡男だが、小田原合戦の延着で館山12万石とされた。徳川創設期の英傑大久保忠隣の養女を妻としたが、慶長19年その忠隣が改易されるにおよんで連座、倉吉3万石への転封を命ぜられ、のちに無嗣廃絶となった。処分は配流に等しく館山城は棄却された。名門里見氏の改易で関東地方の有力外様大名のすべてが姿を消した。永井尚政は2代将軍秀忠につかえて老中にすすみ、江戸城天守閣、西の丸再建などを取り仕切った。一画は享保17年3月の大火で焼失。区画整理されて、前出の若年寄役宅、既と変わった。

参考 徳川家系図 （本書主要登場人物）



第6話　一ツ橋1丁目ものがたり





住友商事、NTT一ツ橋総合ビル、パレスサイドビルなどのある一ツ橋1丁目の徳川家康入府当時は小石川沼に発した平川沿い地で、その流れは京橋から江戸湊にそそいでいた。この平川の南岸、現在の一ツ橋1丁目、大手町1丁目あたりに上平川村と下平川村があった。根小屋と寺院の連なる小村だが家康が入城して3の蔵地、一部を士衆屋敷とした。慶長8年、征夷大将軍に就任した家康は、11年江戸城拡張のため清水寺、平川寺正蔵院など古寺10寺を城外に移して一帯を整備した。慶長12年の工事で一ツ橋、雉子橋周辺は城内に組込まれ、直後の慶長図には内藤伊賀守、板倉伊賀守、青山播磨守などの蔵地があり、町屋と商家蔵地、本丸留居数寄屋坊主屋敷などが読める。元和年間、町屋は城外退去を命ぜられ、神田雉子町に代地を与えられた。

雉子橋を起点に呉服橋、数寄屋橋をへて溜池落口にいたる外濠が整備されたのは慶長12年の江戸城修築工事で、藤堂高虎、前田利光、池田輝政、加藤清正、福島正則らが担当したが、石垣の規模は不詳。19年に黒田長政、加藤忠弘、浅野長あきらが一ツ橋周辺と大手前、丸の内郭を構築しており、この時が起源だとする説もある。元和6年、伊達政宗が清水門から内桜田門にいたる外濠を補修。石垣を積み重ねて高さを増やした。現在も日本橋川沿いに石垣の一部が残っている。江戸時代は、大手濠と外濠起点にかこまれた江戸城外郭の一部で一ツ橋門、雉子橋門、竹橋門の3門が人々の出入りを厳しく管理した。かつて若き日の徳川綱吉が起居し、江戸中期以降は江戸城の米穀脱穀所・つき屋と幕府庭番御用屋敷があった。町名ともなった一ツ橋門は江戸城と神田、駿河台方面を結ぶ外郭門でかつ大手町1丁目西端にあった将軍御3卿徳川一ツ橋邸の正門。橋名は江戸打入り当時、丸太橋だったことに由来する。慶長12年の江戸築城工事で土橋、寛永6年に奥羽諸侯が一ツ橋、神田橋、呉服橋、鍛冶橋など5橋を枡型門とした。1～2万石クラスの譜代大名配下が警備したが、明治6年枡型門を撤去。現在の一ツ橋は大正14年架設で長さ19、幅28メートルのコンクリート造り。江戸時代の枡型門の礎石が高速道路下にみえる。

雉子橋門は江戸城外濠の起点で、江戸時代はじめ、朝鮮からの使者をもてなすため橋近くに食用の雉子小屋をつくったのが橋名のおこりだという。慶長12年に橋とし、寛永6年、松平忠昌と松平直良が枡型門とした。明治6年撤去。現在の雉子橋は高速道路のジャングルにおおわれているが江戸時代は西側百メートルほどの上流で清水濠との境にあった。

竹橋門は北の丸と雉子橋門内、平川門とも帯郭で結んだ内郭15門のひとつで、元和6年上杉景勝、佐竹義宣らが枡型門を作った。明治6年撤去。現在のアーチ橋は大正15年竣工、平成5年改修のコンクリート橋だが、橋を境に西が清水濠で東は大手濠。江戸時代そのままに満々と濠水をたくわえている。

資料図1-1	（一ツ橋1丁目①、旧竹平町 一橋総合ビル、新住友商事ビル）	
慶長ころ	松風六郎兵衛正孝	3百石
〃	三えき、市野弥五郎、長谷川藤右衛門、長谷川□右衛門	
	内藤信濃守蔵、神谷又五郎蔵、加藤喜左衛門蔵、蔵、松風六右衛門蔵、松風助右衛門蔵、小林十左衛門蔵	
寛永ころ	伊丹播磨守頼勝	徳美1万2千石
		寛永10～16年勘定奉行、佐渡奉行、金山奉行
〃	小川宗二、某	縫殿
慶安4-7～明暦3-5	徳川右馬頭綱吉	賄料15万石
明暦3-5～天和元-12	酒井日向守忠能	田中4万石
貞享ころ～〃3ころ	那須遠江守資弥	烏山2万石
享保ころ～享保ころ	増井弥左衛門某	4百石
〃 3-2～〃 8-9	某島喜左衛門某	金奉行、蔵奉行
〃 元-3～宝暦3-11	小普請方小屋場	不詳
宝暦3-11～慶応4年	御用屋敷	将軍家光4男
明治はじめ	歩兵屯所、5番屯所	天和元年不正廃絶
〃 はじめ～明治4-2	蜂須賀茂あき	徳島25万石、徳島藩知事
〃 4-2～〃 5-2	兵部省所有地（兵舎か）	
〃 5-2～〃 10-2	東京女学校、竹橋女学校（文部省用地）	
〃 10-2～大正13ころ	文部省	大正12年焼失移転
大正14ころ～昭和18ころ	外国語学校	一時土木局出張所併設
昭和20年ころ	明地	
〃 26-5～昭和40ころ	リーダースダイジェスト日本支社	
〃 20年代～〃 30年代	大洋自動車竹橋営業所、皇宮警察竹橋寮、広場	
	麹町清掃第1分室、関東電気通信局輸送班、東京電気通信調整	
	パレスサイドビル（毎日新聞、パレスサイドアーケード）	
〃 41-6～現在	電々公社竹平加入電話局、千代田管理部	
〃 30ころ～昭和42年	一ツ橋総合ビル（NTT東京千代田支社、千代田ネットワーク）	
〃 54-2～現在	新住友商事ビル（NTT東京千代田支店、住友商事）	
〃 45-9～〃		

資料図1-2 （一ツ橋1丁目②、旧竹平町 パレスサイドビル、毎日新聞）

慶長ころ	蔵地	（前出）
寛永ころ	内藤伊賀守重頼	5千石
慶安4-7～明暦3-5		のちに高遠内藤家再興
寛文元年～元禄10年	徳川右馬頭邸囲込み	
元禄10年～享保はじめ	つき屋	
享保はじめ～慶応4年	明地	
明治元年～	つき屋	
	歩兵屯所（以下資料図1-1参照）	

住友商事、NTT一ツ橋総合ビル、パレスサイドビルの慶長図は蔵地や町屋であったが、町屋は元和年間に城外に移転したので、寛永図には伊丹頼勝邸が記載されている。頼勝は家康、秀忠、家光の3代につかえ、勘定奉行、佐渡奉行などをつとめた。

慶安4年、3代将軍家光の4男徳松邸となった。徳松はのちの5代将軍綱吉の幼名で、母は桂昌院楽。6才のとき15万石をえ、8才で元服して従3位中将右馬頭にすすんだ。聡明の噂高かった少年時代で、明暦大火後大手町1丁目に移転し、館林25万石にすすんだ。兄家綱は4代将軍に就任したが健康にめぐまれず嗣子をえない。綱吉35歳のときに兄綱重の子綱豊（のちの家宣）をさしおいて5代将軍に迎えられた。世に花の元禄とうたわれた徳川幕府の最盛期ではあったが、生類あわれみの令に代表される悪政でも有名。花の生涯は宝永6年、64歳をかぞえた。明暦3年、徳川綱吉邸が酒井忠能邸とつきやに変わった。忠能は当時全盛をきわめた大老酒井忠清の実弟で田中4万石を領有したが、4代将軍家綱の後継抗争で忠清が失脚したとき、本来逼塞すべき立場にありながら江戸に参勤したとして廃絶。つづく那須資弥も実子がありながら養子を迎えたのが曲事だとして断絶となり、跡地は小普請小屋に変わった。

パレスサイドビル、毎日新聞の一画は江戸城内で消費する米の精米所で菓子も製造した。江戸城には将軍家族と側近、大奥女性など2千人ほどが生活しており精米量も膨大であった。寛文元年の創設で、元禄10年の火災焼失後、一時一ツ橋門外に移転したが、享保はじめに復帰した。

10代将軍家治の宝暦はじめ、雉子橋つき屋隣に御用屋敷を新設して庭番拝借長屋とした。庭番は城内庭番所の宿直、内密御用などを担当した。庭番17家の大半は日比谷公園の桜田御用屋敷に居住しており、雉子橋屋敷にはその分家などをおいた。文化14年武鑑によれば鉄砲玉薬奉行明楽嘉太夫2百俵。この職務は留守役支配で役料20人ふち、同心が34人ついた。庭の方支配河合次郎衛門百俵3人ふちなどが記載されている。

明治維新後は江戸に進攻した官軍将兵の駐屯所になった。明治はじめ図では5番屯所、歩兵屯所、土佐藩預かりなどとある。明治5年文部省用地となり、わが国最初の女子官立学校である東京女学校が開校した。開明的で性差別のない普通教育をめざしたが、明治10年、財政難のため廃校。津田塾、学習院女子部など後輩私立女学校のはなやかな校史にくらべてもあまりにはかない運命となった。

この年、大手町1丁目から文部省が移転。当初は旧幕時代の建物をそのまま利用したようである。14年森本寿吉設計の洋風2階建て新庁舎を竣工。明治31年の『新編東京名所図絵』には「家屋は低い木造の総2階家で、構内に3～4棟の建物あり、規模すこぶる狭小かつ質素」と記している。大正12年まで。この庁舎で木戸孝允、西郷従道、寺島宗則、河野敏鎌、福岡孝弟、大木喬任の歴代文部卿が、明治18年、内閣制度の発足で森有礼以下の文部大臣が執務した。

関東大震災のあと、戦前の一ツ橋1丁目は東京外語学校とされた。明治30年に濠こえの地東京高等商業（現在の一ツ橋大学）付属校として発足、東京外国語大学の前身になる。

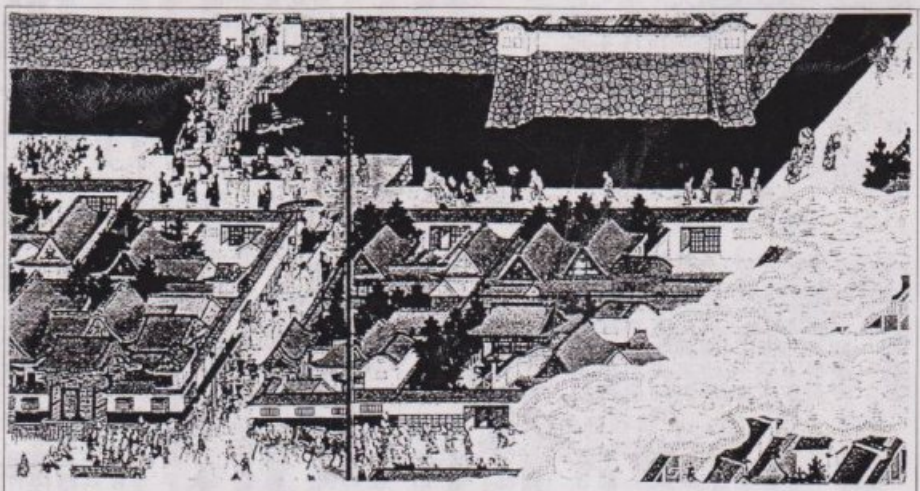
戦後の昭和26年からはアメリカの月刊大衆誌『リーダースダイジェスト』の日本語版発行所で、高度成長時代の波がおしよせた30年代に竹橋インターを中心に首都高速道路が一ツ橋一帯をめぐった。昭和41年6月、毎日新聞社とリーダースダイジェスト社が所有する1万3千平方メートルの地に9階立ての近代ビルディング、パレスサイドビルが竣工した。毎日新聞は明治42年以来の歴史をきざんだ有楽町社屋では紙勢の増大に対処できないとして創刊百周年を記念して新社屋の移転にふみきった。

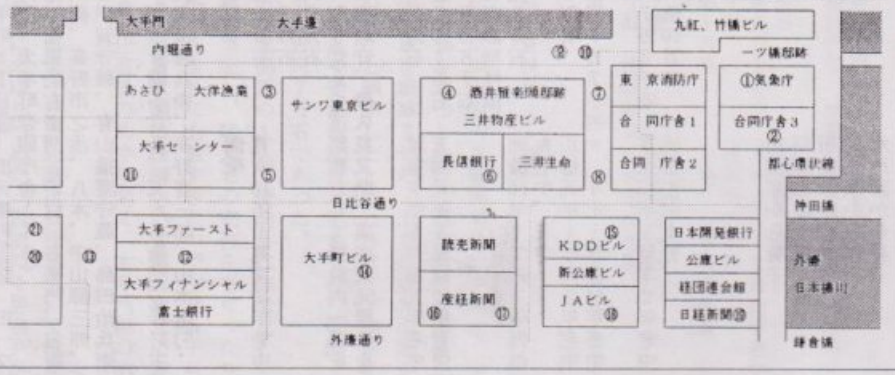
総合商社・住友商事の東京支社は戦後の昭和21年、日本橋にはじまった。その後、住友グループの関東拠点でもある丸の内1丁目新住友ビルに移転したが、急激な社勢の進展にたちまち入り切れなくなったので、39年、日本電信電話公社が一ツ橋の所有地に民間共同ビル建設計画があると知ると入札の末この構想に加わった。当初、ビルは24階の予定であったが、皇居周辺の美観条例で高さ制限を加えられたので16階に縮小された。公社建築課の基本設計に、大林組の施工で42年着工。3年余りの工期をへた45年9月に竣工した。1階から3階までを公社が、4階以上を住友商事が区分保有し、別棟の6階ビルは公社の千代田支社などが入居したが、のちに民営化されてNTT日本電信電話株式会社となった。

参考　江戸城主要年表　本書登場主要建造物の略歴

城郭	
12世紀	江戸重継、江戸館完成
長録元年	太田道灌、江戸城完成（子城、中城、外城。静勝軒ほか）
天正18年	徳川家康、江戸入城。江戸城補修
慶長8年	日比谷入江埋め立て。丸の内郭原型完成
〃 11年	本丸、2の丸、3の丸郭完成。雉子橋～溜池の外郭完成
〃 12年	北の丸郭完成
〃 16年	西の丸郭完成
〃 19年	西の丸下郭完成、本丸内部、3の丸城門石垣を構築
寛永6年	2の丸を拡張
〃 13年	外郭を構築
享保7年	外郭の土塀を撤去して松をうえる
主要殿舎	
本丸御殿	慶長11年、元和8年、寛永14年（寛永16年焼失）寛永17年（明暦3年）
天守閣	万治2年（天保15年）弘化2年（安政6年）万延元年（文久3年）
2の丸御殿	慶長11年、元和8年、寛永14年（明暦3年焼失）
	寛永12年（明暦3年焼失）明暦3年、延宝9年（延享4年）宝暦10年（
3の丸御殿	文久3年）慶応元年（慶応3年）
西の丸御殿	寛永20年、正保3年、正保5年、延宝8年（元文3年廃止）
	慶長16年、寛永元年（寛永11年焼失）寛永13年、慶安4年（天保9年）
	天保10年（嘉永5年）嘉永5年（文久3年）元治元年（明治6年）明治
	22年（昭和20年）昭和43年
文禄西の丸	文禄元年（慶長はじめ焼失か）
紅葉山東照宮	元和4年、承応2年（明治2年撤去）
城門	
慶長11、12年	中雀門、大手門、内桜田門、平川門などの主要内郭門を構築
〃 19年	銅門を構築
元和6年	清水、竹橋、和田蔵、外桜田門を構築。内郭門枡型を構築
寛永5年	馬場先、雉子橋、一ツ橋、神田橋、常磐橋、呉服橋、鍛冶橋、数寄屋橋
	日比谷門を構築
〃 6年	大手3の門枡型を構築
〃 13年	山下、幸橋、虎之、赤坂、四谷、市ヶ谷、牛込、小石川、筋違橋、浅草
	橋門を構築
明治6年	雉子橋、一ツ橋、神田、呉服橋、数寄屋橋、日比谷橋門などを撤去

第7話　大手町1丁目ものがたり





大手町はその昔、芝崎村、平川村（一部）とよばれた寒村で、時宗の日輪寺と平将門を祭神とした明神社があった。文禄2年、太田道灌が入府したとき江戸築城工事のため移転、日輪寺は台東区西浅草に落ち着き、明神社は神田橋外に転じて神田明神となった。平将門は平安時代の武将で、関東を制して新皇を称したが、天慶3年武運つきて一族の平貞盛に討たれ、その首が大手町の地にとんだという。嘉元年中、2代遊行上人がこの明神社首塚で将門の怨霊を供養し祟りをしずめて念仏の道場を開いた。将門塚は酒井雅楽頭邸となった江戸時代も残り現在も日本長期信用銀行と三井物産ビルの谷間に鎮座している。

徳川家康入城当時の大手町周辺は一ツ橋1丁目で紹介した平川古寺がつらなったが、いずれも慶長はじめに取払われて、慶長7年図では寺地払跡空き地、2の蔵地、士衆屋敷などになった。大手町の象徴ともいえる大手門は江戸城の表玄関であった。太田道灌時代からの城門で、家康入城当時は城入口門、12年図で大橋、寛永9年図は元大橋口と変わっている。慶長12年の江戸城工事で藤堂高虎が縄張りしたが、その詳細は伝えられていない。元和6年、伊達政宗が石垣を改修して枡型門を竣工。伊達家は大手門建設という栄誉をになったが、このための出費が莫大で延べ人夫42万人、黄金2千6百枚を使った。高麗門を入ってすぐが方型の明地で右に曲がって渡櫓にでる。大名たちはこの櫓と門をカゴのまま次の下乗橋まで乗り入れた。

大手門前のパレスホテルの地に巨大な腰掛があり、周辺の内濠通りは空き地になっていた。ここは従者待合所とも呼ばれた広場で大名登城の従者が待機した。通信機がなかった当時、総登城日の交通対策に苦労している。順番とおりに登城するためそれぞれの大名家が町角ごとに連絡員を配備して、その合図で一時停止、発進をくりかえした。腰掛は大名衆が鉢合わせしたときの待合所とも、御3家従者用という。従者らは濠端に敷物をしいて待ったので広い大手門前も人波で埋まった。大手門の右側協和銀行などの入った大手ビル前に下馬を通告する立札があった。

大手町と神田を結ぶ神田橋も枡型城門で、厳しい警備体制がしかれた。橋をはさんで内側が江戸城内で大名家の上屋敷がならび、神田側は城外で旗本たちが住んでいた。徳川入城以前は芝崎口、神田口ともよばれ、江戸6口の1つにかぞえられた要所であった。慶長12年に周辺の外濠が整備されたが、石垣工事はこのときか19年のいずれか。寛永6年に佐竹義定が枡型門を築き、明治4年に撤去された。寛永時代のはじめ、神田橋の下を流れる外濠（日本橋川）で春日局につれられた幼き日の家光が水泳を楽しんだというほほえましいエピソードも残っている。石垣の一部は現存するが、橋上に高速道路が走って当時の面影はない。

資料図1-1	（大手町1丁目③④、旧同町⑦、旧竹平町1丁目②、旧元衛町①②、旧一ツ橋御門内　丸紅ビル、竹橋ビル、気象庁、東京消防庁、大手町合同庁舎1～3）		
慶長ころ～寛永ころ	中根七蔵、江林清右衛門、松風助右衛門、中村口右衛門、包坂検校、松雪、大久保彦兵衛、高野市之丞、八木、中山源三郎、留居数寄屋坊主衆、板倉伊賀守蔵、青山播磨守蔵、島田治兵衛蔵		
不詳～明暦3-3	酒井和泉守、大久保嘉平次、倉橋小兵衛、天木右衛門、松野主馬、大久保六左衛門、大久保藤兵衛、高野喜三郎、山本道勺		
〃～〃	井上筮間藩中屋敷		
〃～〃	中根壱岐守正盛	5千石	
寛永4-9～寛文2-3	松平伊豆守信綱	川越6万石	側衆
寛文2-4～〃11-12	〃甲斐守輝綱	〃7万石	寛永10年～寛文2年老中
〃12-2～延宝8-8	〃伊豆守信輝	古河7万石	
延宝8-8～〃9-1	明暦3-3明暦大火後の割り変えで道路敷として屋敷内一部を上げ、井上河内守、中根壱岐守、津久見又助、実成院元屋敷を拝領		
天和2-4～元禄12-9	堀田備中守正俊	安中3万石	延宝7年～天和元年老中
元禄12-閏9～〃13-12	戸田山城守忠昌	佐倉7万1千石	天和元年～元禄12年老中
〃13-12～正徳元-4	〃忠真	〃6万8千石	
	元禄6-12山名信濃守邸を添地拝領		
	小笠原佐渡守長重	岩槻5万石	
正徳元-4～〃4-9	阿部豊後守正喬	忍5万石	
〃4-9～享保14-10	戸田山城守忠真	宇都宮7万7千石	〃4年～享保14年老中
享保14-12～〃15-7	〃越前守忠余		
〃15-7～元文5-11	松平右京大夫輝貞	高崎7万2千石	享保15年～延享2年老中
元文5-11～明和元年	徳川刑部卿宗尹	一ツ橋10万石	
明和元-12～寛政11年	民部卿治済		
寛政11年～文化12年	〃斉敦		
文化13年～天保元年	〃兵部卿斉礼		
天保元年～〃8年	〃民部卿斉位		
〃8年～〃9年	〃刑部卿慶昌		
〃9年～弘化4年	〃民部卿慶寿		
弘化4年～〃4-8	〃昌丸		
〃4年～慶応2年	〃刑部卿慶喜		
慶応2年～〃4年	〃茂栄		
元文5-11松平右京大夫、酒井一学邸、道路敷をあわせ拝領、寛保元年新邸完成、移徙			
天保5-12隣接道路敷を添地拝領			
〃7-11割替えで道路をはさんだ向屋敷と一つになる			
徳島藩屯所、徳島蜂須賀藩邸			
御用邸、近衛兵営			
陸軍省軍馬局			
明治元-11～しばらく	田安家から養子		
〃はじめ～7-3～明治20ころ	将軍家慶5男、養子		
	田安家から養子		
	尾張家から養子		
	水戸家から養子、15代将軍		
	宗家へ養子、		
	尾張藩から養子		
	享保15年～延享2年老中		
	将軍吉宗4男		
	元禄10年～宝永7年西の丸老中、老中		
	正徳元年～享保2年老中		
	丸老中		
	④丸紅ビル、竹橋合同ビル		
	大正13ころ～昭和30ころ		
	昭和30年代		
	〃40年代		
	〃47-1～現在		
	〃54-2～〃		
	③気象庁		
	昭和5ころ～		
	〃～〃31年		
	〃30年代～〃38ころ		
	〃39-3～現在		
	③消防庁		
	大正13ころ～昭和はじめ		
	〃11-11～〃はじめ		
	〃後期～〃はじめ		
	昭和はじめ～戦前		
	〃はじめ～昭和19-8		
	〃13-5～〃22-9～〃50ころ		
	〃20年代～30年代		
	〃51-4～現在		
	③合同庁舎1～3		
	昭和はじめ～昭和23ころ		
	〃24-6～〃40ころ		
	〃戦前～15ころ		
	〃37年～現在		
	〃41年～〃		
	明治17-2～明治17-10	陸軍大学校	
	〃8-5～〃21ころ	陸軍省病馬院、8-11陸軍省病馬厩	
	〃21-1～しばらく	陸軍省乗馬学校、蹄鉄学校	
	〃28-1～大正3ころ	近衛騎兵連隊兵営	
	大正元年ころ	印刷局官舎	
	〃はじめ～大正14ころ	不詳（明地らしい）	
	〃12年～	外国語学校、陸軍省馬生局	
		昭和4年ころ区画整理。千代田通りと錦橋ができる	
		中央気象台（運輸通信省、運輸省管轄に変更）	
		気象庁官舎	
		村山商事、三橋ビル、信用館、千代田ビル、錦モーター、レンガ置場、肥後屋、広瀬倉庫	
		明地	
		丸紅ビルヂング（丸紅東京本社）	
		竹橋合同ビル竹橋会館（日本輸出入銀行、海外経済協力基金、KKR東京竹橋）	
		中央気象台分台（④から分離）	
		中央気象台	
		気象庁	
		中根、佐藤、佐々木、名上、鈴木	
		気象庁新庁舎（東京管区気象台）	
		東京管区気象協会、日本気象協会	
		文部省	
		内務省社会局	
		復興局、東京職業紹介事務所	
		都市計画委員会、土木局	
		内閣調査局、内閣企画院、企画庁	
		厚生省	
		労働省別館（公共企業体委員会）	
		東京都建設局、交通局	
		労働省婦人少年局、大手門外巡査派出所	
		東京消防庁本部庁舎、丸の内消防署	
		東京税務監督署、神田橋税務署、麹町税務署	
		東京国税局、国税局徴収部	
		鉄道省改良事務所、造幣局出張所、通信省航空局	
		農林省東京営林局、内閣企画院	
		大手町合同庁舎第1号館（関東農政局、運輸局、電気通信管理局、東京入国管理局、東京航空局、関東地方建設局）	
		大手町合同庁舎第2号館（東京国税局、大手町1郵便局、国税	

昭和46年	～現在	局診療所）
		大手町合同庁舎第3号館（東京法務局、関東農政局、関東財務局、関東通商産業局）
資料図－2	（大手町1丁目③	気象庁、大手町合同庁舎3）
明暦3－3～寛文7－7	土屋但馬守数直	土浦4万5千石　承応2年～延宝7年側衆、若年寄、老中
寛文7－7～延宝7－9	〃 相模守政直	〃
延宝7ころ～貞享はじめ	金田遠江守正勝	5千石　将軍綱吉側
貞享ころ	戸田山城守忠昌	佐倉6万1千石　天和元年～元禄12年老中
〃 ～元禄元－11	斉藤飛騨守三政	6千石　将軍綱吉小姓
元禄元－11～〃 2－7	松平安房守信孝	小島1万石　元禄2～3年若年寄
〃 2－7～〃 2－10	松平采女正某	不詳　将軍綱吉小姓
〃 2－10～〃 6－12	山名信濃守泰豊	5千俵　元禄6－12 山名信濃守邸、道路敷あわせ添地拝領
〃 6－12～〃 中期	戸田山城守邸囲込み	
〃 中期～正徳5－4	松平右京大夫邸囲込み	
正徳5－4～元文5－11	酒井修理大夫添屋敷	
元文5－11～	徳川刑部卿邸囲込み（以下資料図－1参照）	

延宝7ころ～貞享はじめ　金田遠江守正勝　5千石　将軍綱吉側
貞享ころ　戸田山城守忠昌　佐倉6万1千石　天和元年～元禄12年老中
〃 ～元禄元－11　斉藤飛騨守三政　6千石　将軍綱吉小姓
元禄元－11～〃 2－7　松平安房守信孝　小島1万石　元禄2～3年若年寄
〃 2－7～〃 2－10　松平采女正某　不詳　将軍綱吉小姓
〃 2－10～〃 6－12　山名信濃守泰豊　5千俵　元禄6－12 山名信濃守邸、道路敷あわせ添地拝領
〃 6－12～〃 中期　戸田山城守邸囲込み
〃 中期～正徳5－4　松平右京大夫邸囲込み
正徳5－4～元文5－11　酒井修理大夫添屋敷
元文5－11～　徳川刑部卿邸囲込み（以下資料図－1参照）

地は移転当時、現在地に加え④番地の丸紅ビル、竹橋合同ビルを包括したが、区画整理で分断され、④番地を気象台、③番地を分台と称した。戦後は③番地に主要設備を配備し④番地は気象庁、気象協会の官舎、庁職員の福利厚生施設としてバレーボールコートがおかれ、外濠沿いの道路敷地にそって民間の小ビルや修理工場、レンガ置き場とされた。現在の気象庁庁舎は昭和39年3月の竣工の8階ビルで、敷地内に天気予報でおなじみの日本気象協会がある。気象庁が新築移転した飛び地跡地は日本セメントに払い下げられ、うち3千平方メートルに三菱地所との共同ビル建設がすすめられることとなった。工事は大成建設が請負、1階づつ積みあげる積層工法がとられた。47年1月地下4階地上16階、床面積5万5千平方メートルにおよぶ新ビルが完成。テナントの総合商社丸紅にちなんでビル名は丸紅ビルヂングと命名された。隣接する竹橋合同ビルは昭和54年2月の竣工。15階の近代ビルディングで日本輸出入銀行、海外経済協力基金、KKR竹橋などが入居した。

大手町1丁目の神田橋、錦橋周辺は戦前大蔵省、内務省、農林省、気象庁などが官庁街を形成したが15年の落雷火災で一帯を焼失し、昭和20年2月の東京空襲で再び焦土とした。このため終戦時は大半が焼け跡明地、応急建設されたバラック庁舎が散見されたにすぎなかった。戦後わが国経済の復興にともなって厚生省、労働省、国税庁、東京都建設局などの木造庁舎が建設され、将来の都市構想が問題提起されるようになった。昭和27年政府の官庁営繕審議会は大手町地区官庁の集中統合を骨子とした改革案答申を行ない、独立庁舎と決まった気象庁をのぞく合同庁舎3棟の建設工事がはじまった。37年鉄筋コンクリート9階の大手町合同庁舎1号館が竣工して東京入国管理局、運輸省航空局、建設省地方建設局などがオフィスを開いた。41年には同じ9階建て2号館が完成、大手町にかかわり深い東京国税局の庁舎とされた。最後の3号館は46年に竣工。15階庁舎に東京法務局、関東農政局、関東財務局、関東通商産業局が入居した。昭和51年4月、東京の防火、消防業務の総本部ともいえる東京消防庁本部庁舎も竣工した。地上14階の高層建築で千2百人の職員が都内75か所の消防署を統括する。戦後連合軍GHQの指導でそれまで警視庁の管轄下におかれた消防部を独立させて東京消防庁とし、本部庁舎に併設された丸の内消防署庁舎は4階、同じ月、協和銀行本店の地から庁舎を移した。

資料図－4　（大手町1丁目①、②、旧同町①、②、③　三井物産ビル、三井生命ビル、日本長期信用金庫、サンワ東京ビル）

天正18年～元和3－7	酒井河内守重忠	前橋3万3千石	
元和3－7～寛永9－5	〃 雅楽頭忠世	12万2千石	慶長15年～寛永13年老中、大老　別邸拝領
寛永9ころ～〃13－11	〃 阿波守忠行	15万2千石	寛永12年～13年老中
〃14－1～延宝9－1	〃 雅楽頭忠清	15万石	承応2年～延宝8年老中、
延宝9－1～貞享元－8	〃	〃	寛永16年牧野駿河守忠成邸、天海僧正祈祷所を添地拝領
貞享元－10～宝永5－10	〃	〃	正保3－11天海僧正元屋敷を添地拝領　明暦3－3明暦大火後の割り替えで松平和泉守、本多内記邸を添地拝領
宝永5－10～享保5－4	〃	〃	堀田備中守正俊　古河9万石　延宝7年～貞享元年老中、大老
享保5－4～〃16－9	〃	〃	松平肥後守正容　会津23万石
〃16－10～安永元－7	〃	〃	酒井雅楽頭親愛　前橋15万石
安永元－8～寛政2－7	〃	〃	〃　親本
寛政2－9～文化11－9	〃	〃	忠恭　姫路15万石　延享元年～寛延2年老中
文化11－9～天保6－4	〃	〃	忠以
天保6－4～弘化元－10	〃	〃	忠道
弘化元－12～嘉永6－8	〃	〃	忠実
嘉永6－10～万延元－10	〃	〃	忠学
万延元－12～慶応3－2	〃	〃	忠宝
慶応3－2～〃4－5	〃	〃	忠顕
〃4－5～慶応4年	〃	〃	忠積　文久3年～慶応元年老中、大老
明治元年～明治2－6	〃	忠悰	慶応3～4年老中
〃2－6～〃4－8	〃	〃	文政13－5、天保7－12添地拝領
〃2－3～〃2－7	〃	〃	毛利権大納言敬親　山口36万石
〃2－8～〃3閏10	〃 元徳		〃　〃、山口藩知事
〃4－8～昭和15ころ	公議所		
〃4－8～〃8－9	集議院		
昭和8年～しばらく	大蔵省		
②三井物産	内務省		
昭和15年～昭和37年	中央会議所、東京土木出張所		
〃20ころ～〃40ころ	逓信省外局航空局、27年運輸省航空局		24年航空保安庁、25年運輸省外局航空局、
〃40ころ～〃50ころ	気象庁大手町寮		
〃51－10～現在	大手町住宅展示場、三井物産ビル、別館平　将門首塚		
史跡			
②三井生命、日本長期信用銀行			
昭和24－6～昭和41年	関東財務局分室		合同庁舎3に移転
〃20年代～30年代	モータープール		
36－4～現在	三井生命ビル		
〃36－12～現在	日本長期信用銀行本店		40－2第2期工事
①協和銀行（一部資料図－11のつづき）			
昭和10－8～昭和39－4	丸の内消防署、千代田寮、署長官舎		
〃42－7～〃51－4	丸の内消防署		

昭和53－11～現在　大洋漁業ビル、協和大洋ビル（協和銀行本店、あさひ銀行、大洋漁業）

①大手センタービル（一部資料図－11のつづき）

昭和21－5～昭和25－9　国際自動車丸の内営業所、GHQハイヤー、PDバス駐車場

〃　25年～32ころ　駐車場、運動場

〃　32－6～57ころ　東京貿易会館

〃　29－10～57ころ　東京都立産業会館

〃　58－10～現在　大手センタービル（センタープラザ、IBM情報科学館、住友金属工業）

①三和銀行

昭和20年代　モータープール

〃　30年代　東京都第1建築事務所

〃　40年代　日本住宅公団東京支所、東京商工会議所、国際連合協会東京支部、東京都国民年金部

〃　48－12～現在　第1サービス駐車場

サンワ東京ビル（三和銀行本部、東京営業部）

資料図－3　（大手町1丁目①　協和大洋ビル、大手センタービルの一部）

慶長7年～慶長17－4　土屋民部少輔忠直　久留里2万石

〃　17－4～寛永11－9　〃　利直　〃

寛永11－9～承応3－1　松平和泉守乗寿　館林6万石　寛永19年～承応3年老中

承応3－3～明暦3－3　〃　乗久　〃　5万5千石

明暦3－3～　別資料　寛永11年酒井雅楽頭邸拝領、明暦元－10拝領

割り替えで酒井雅楽頭邸に囲込み（以下資料図－4参照）

資料図－5　（大手町1丁目①　大手町センタービルの一部）

慶長ころ～慶長19－1　最上出羽守義光　山形57万石

〃　19－2～元和3－3　〃　駿河守家親　〃

元和3－5～〃　8－8　〃　義俊　元和8年お家騒動廃絶

寛永ころ～元和2－9～寛永3－5　鳥居伊賀守忠春　高遠3万石

寛永3年～〃　8－8　本多中務大輔忠刻　姫路10万石　世子

〃　8閏10～〃　15－11　美濃守忠政　15万石　忠刻の父

〃　16－4～寛文元－3　出雲守政朝　〃　郡山19万石

本多内記政勝　明暦3年明暦大火後の割替えで若干移動

酒井雅楽頭邸囲込み。別資料寛文6年（以下資料図－4参照）

寛文元－3～　資料図－6　（大手町1丁目②　日本長期信用銀行、三井生命ビル）

慶長ころ～寛永8－3　鳥居土佐守成次　谷村3万5千石　徳川駿河家付家老

寛永8－6～〃　9年　〃　忠房　〃　寛永9年忠長連座廃絶

承応ころ～寛文9－6　井上河内守正利　笠間5万石　万治元年～寛文7年寺社奉行

寛文9－6～貞享4－10　〃　中務少輔正任　郡上5万石　明暦3年割り替え移動

貞享4－10～元禄4－12　松平主殿頭忠房　別資料　2月拝領

元禄4－12～〃　7－2　九鬼長門守隆律　三田3万6千石

〃　7－2～〃　9－4　松平弾正忠正久　飯野2万石　元禄7～9年若年寄

〃　9－4～〃　12－9　米倉丹後守昌員　皆川1万5千石　9～12年若年寄

〃　12－9～宝永6－9　稲垣対馬守重富　大多喜2万5千石　12年～宝永6年若年寄

正徳元年～享保はじめ　鳥居伊賀守忠英　壬生3万石　正徳元年～享保元年若年寄

享保はじめ～〃　7－5　久世隠岐守重之　関宿5万石　〃　3年～〃　5年老中

〃　7－5～〃　17－8　安藤対馬守信友　加納6万5千石　享保7～17年老中

〃　17－8～〃　20－6　黒田豊前守直邦　沼田3万石　〃　17～20年西の丸老中

〃　20－6～延享3－10　松平豊前守乗賢　岩村2万石　〃　20年～延享3年西の丸老中、老中

延享3－10～〃　4－6　本多伯耆守正珍　田中4万石　享保3年～宝暦8年老中

〃　4－6～〃　4－9　秋元但馬守涼朝　川越6万石　〃　4年西の丸若年寄

〃　4－9～寛延2－2　松平右京大夫輝規　高崎7万2千石

寛延2－2～〃　2－11　〃　輝高　〃　のちに老中

〃　2－11～宝暦3－3　酒井左衛門尉忠寄　庄内14万石　寛延2年～明和元年老中

宝暦3－3～寛政元－5　榊原右京大夫政永　高田15万石

寛政元－5～〃　8－12　〃　政敦　〃　徳川一ツ橋向屋敷囲込み（以下資料図－8参照）

資料図－7　（大手町1丁目③　東京消防庁、大手町合同庁舎1）

慶長ころ　板倉周防守重宗　関宿5万石　元和6年～承応3年京都所司代

寛永ころ～承応ころ　小細工小屋、大工小屋　別資料　寛永16－7水野備後守元綱邸を小細工小屋とする政治顧問

〃　16－6～寛永20－6　寛永16－6天海大僧正、小細工小屋を拝領

〃　20－6～明暦3－2　南光坊天海大僧正　僧侶　観音院（南光坊、知楽院経営）

明暦3－2～延宝8－9　本多土佐守忠隆　膳所藩分家5千石　将軍家綱近侍

延宝8－9～貞享元－8　板倉市正重大　5千石　板倉勝重4男、側衆

貞享元－8～〃　年間　稲垣安芸守重定　山上1万3千石　貞享2年～宝永4年若年寄

元禄元ころ～元禄2－4　柳沢出羽守吉保　1万2千石　元禄元年～宝永6年側用人

〃　2－4～〃　4－2　畠山民部大輔基玄　高家5千石　元禄2～4年側用人のちに沼田黒田家立藩

〃　4ころ～〃　4ころ　黒田豊前守直邦　大野5万石　小姓、ご従衆

〃　6ころ～〃　7ころ　松平但馬守直良　明石6万石

〃　8－2～正徳元－12　松平若狭守直明　金田能登守正明　3千石

正徳元－12～元文5－11　松平右京大夫邸囲込み

元文5－11～　酒井雅楽頭邸囲込み

松平右京大夫邸囲込み（以下資料図－8参照）

資料図－8　（大手町1丁目②、③　大手町合同庁舎2、三井生命ビルの一部）

慶長6年～正保元－7　土井大炊頭利勝　古河16万石　慶長15年～正保元年老中、大老

正保元－9～明暦3－3　〃　遠江守利隆　〃　13万5千石

明暦3－3～貞享3－7	松平和泉守乗久	唐津7万石	明暦大火後の割り替えで松平和泉守邸、土屋但馬守邸に2分
貞享3－9～元禄3－9	〃	乗春	
元禄3－11～〃 6－10	松平右京大夫輝貞	高崎7万2千石	左近将監乗邑　鳥羽7万石　のちに老中
〃 6－10～正徳5－4	〃	〃	元禄8－2金田能登守邸を添地拝領、御成御殿造営、正徳元－12返上
正徳5－4～享保20－5	酒井修理大夫忠音	小浜11万3千石	享保18～20年老中
享保20－7～元文5－8	〃	〃	備後守忠存
元文5－10～〃 5－11	〃	〃	一学忠用
〃 5－11～延享4－9	松平右京大夫輝貞	高崎7万2千石	享保15年～寛延2年老中
延享4－9～明和4－8	秋元但馬守涼朝	川越6万石	宝暦10年～明和元年老中
明和4－8～天明6閏10	田沼主殿頭意次	相良5万7千石	明和6年～安永元年老中
天明6閏10～〃 7－3	榊原式部大輔預かり	明屋敷	
〃 7－3～寛政4－9	鳥居丹波守忠意	壬生3万石	天明6年～寛政5年老中
寛政4－9～天保7－11	徳川一ツ橋家向屋敷		
天保7－11～〃 14－8	徳川田安家下屋敷	別資料	寛政8－12榊原式部大輔邸を添地拝領
〃 14－3～安政4－9	松平福井藩中屋敷		天保7－11割替えで半分が徳川一ツ橋邸囲い込み。残り半分が徳川田安拝領
安政4－9～	割替えで酒井雅楽頭邸囲込み（以下資料図－4参照）		

三井物産ビル、三井生命ビル、日本長期信用ビル、サンワ東京ビルの一帯は酒井忠世、忠清、堀田正俊、保科正容と江戸時代史をいろどった超重要人物が移り住んだ。かずある酒井家の中でも一際輝かしい功績を残したのが雅楽頭家とよばれた酒井姫路家で、天正18年家康の江戸入城にしたがってその表玄関、大手町の地を拝領した。初代が重忠で忠世のとき老中筆頭をへて大老にすすんだ。老中筆頭は現在の総理大臣で大老はさしずめ臨時大統領といったところだろう。常置された職制でなく、江戸時代3百年の就任者はわずか10人にすぎない。1代とんだ忠清も大老にすすんだ。4代将軍家綱の信任を独占し、その専権は人々を下馬将軍とおそれさせた。下馬の名は江戸城大手門下馬札の前に上屋敷があったからで、権勢を将軍とならび称されたともいえた。しかし家綱の後継問題で有栖川宮幸仁親王を迎えようとしたが実現できず、綱吉の5代将軍就任で失脚した。

忠清に変わった堀田正俊は、延宝8年5月家綱が明日をも知れぬ病床にあったとき、徳川光圀と綱吉擁立に成功して幕閣中心者としての地位を確立した。天和元年首席老中から大老にすすむ。綱吉初期の幕政を補佐し、天和の治とたたえられた善政をしいたが、貞享元年私怨のため若年寄稲葉正休に江戸城内で刺殺された。堀田家が大手町の地にあったのは天和元年から貞享元年までの7年間の大老在任期間。事件を契機に綱吉の政治理念もうすれ類廃政治への道を歩むことになる。

貞享元年から元禄年間をはさんだ宝永5年までの間、会津若松28万石松平保科邸になった。正容の父正之は2代将軍秀忠の3男で4代将軍家綱の補佐役として重きをなした。つづく正経は病弱で弟の正容に藩主の座をゆずる。5代将軍綱吉の命をうけ、保科から松平に改めたのもこの正容時代であった。

宝永5年大手門前の地に酒井雅楽頭家が復帰し、以後明治維新までの百60年間、親愛、親本以下の12代が住んだ。最初の2代が前橋15万石で、忠恭のとき姫路15万石に転封した。酒井家は江戸中後期こそ、中央政界から遠ざかったが、幕末の風雲が急をつげるようになると幕政への参加をよぎなくされてくる。文久3年、14代将軍家茂の上洛にともなって忠積に江戸留守居役が命じられ、老中首座、大老にすすむ。この間、公武合体派による8／16クーデターがおこり、長州追放と7卿落ちで尊壌派を一掃した。慶応3年、家茂の逝去でようやく隠居をみとめられたが、今度は嫡子忠惇に老中が命ぜられた。15代将軍慶喜にしたがって大阪入り、鳥羽伏見の戦いでは幕府軍の一員として戦って敗れた。幕末期の国表は勤皇、佐幕派が藩論を2分したが、藩主が幕府の重職にあったことから志士の弾圧も過酷をきわめ、恭順がきまると今度は佐幕派への糾弾と断罪がはじまった。幕末の酒井邸は三井物産、日本長期銀行、三井生命、サンワ東京ビル、大手センタービルの一部から日比谷通りを挟んだ大手町ファーストスクェアの一部1万2千坪におよんだ。

江戸はじめのころ、大手町に邸地を拝領したが、途中、酒井雅楽頭邸に囲い込みとなった大名家も多かった。日比谷通りの大手門前交差点まん前、大手センタービルと協和大洋ビルの江戸はじめは土屋忠直邸であった。土屋家は武田氏の旧臣だが、昌次のとき長篠の戦いで戦死し、孫の忠直が家康に見出されて秀忠に付けられた。久留里藩2万石で利直と2代が住んだ。つづく松平乗寿は3代将軍家光末期から4代将軍家綱にいたる15年間の老中。酒井忠勝大老の全盛期で、このころ幕府基盤が一気に確立した。明暦3年の振袖火事で焼失。直後の割替えで酒井雅楽頭邸に囲込みとなった。

山形52万石最上義光、家親、義俊の3代が大手町センタービルの地にあったのは慶長7年ころから元和8年までの20年間。義光は関が原の合戦で徳川方につき戦後出羽1か国が与えられたが、鷹狩から帰った家親が急死して義俊が遺領をついだとき、反対派は毒殺されたとして幕府に訴えた。しかし確証もなく一派処断。義俊も幼少で国政の鎮護がおぼつかないとして領地を没収された。

跡地は寛永9年図で高遠3万石の鳥居忠春邸だが、本多家資料は元和2年拝領としている。本多家は徳川4天王の1人忠勝2代忠政の嫡子忠刻に徳川秀忠の長女千姫が輿入れしたときの新居という。千姫は政略結婚でいったん、豊臣秀頼と結婚したが大阪落城のとき脱出し、忠刻に再嫁した。本多家は桑名10万石から姫路15万石に栄転。部屋住みの忠刻に

も化粧料10万石が贈られた。しかし、10年後に忠刻が亡くなり千姫は愛娘勝姫とともに徳川家に復した。

日本長期信用銀行ビル、三井生命ビルの初代は鳥居成次であった。成次は関が原の合戦で伏見城に奮死した元忠の3男。徳川駿河忠長の家老となったが、忠房のとき忠長除封に連座して廃絶。次の井上正利は笠間5万石で老中。元禄時代中期から若年寄、老中役屋敷として定着している。久世重之は7代将軍家継、8代吉宗初政の老中。前半は政治顧問の間部詮房と新井白石が幕政を牛耳り、久世らの幕閣がこれに抵抗した。

安藤信友は享保の改革期の老中で、黒田直邦は5代将軍綱吉の小姓から大名に取立てられ、6代将軍家宣の就任でいったん免職されたが、8代将軍吉宗のとき西の丸老中に返り咲いた。松平石川乗賢も吉宗に抜擢された1人。格式尊重、序列重視の封建秩序を強化した。本多正珍は8代将軍家重期の老中だが、領内農民の直訴を無視したとして罷免。寛延2年から酒井忠寄邸になった。酒井家は氏忠からはじまる左衛門尉家で、9代将軍家重と10代家治期の首席老中にすすんだ。次の榊原家は徳川4天王の1人康政を藩祖とする名門だが父政岑時代、不行跡から左遷され、政永が父の反省のうえに藩政の改革をすすめた。

東京消防庁の慶長時代は板倉重宗邸であった。父勝重は京都所司代をつとめた人。重宗も2代将軍秀忠ブレーンとして近侍し、父の引退にともなって遺領の関宿5万石を継承して京都所司代にすすんだ。寛永図では大工小屋とあり、寛永16年小細工小屋を天海僧正が拝領したという記録も残っている。天海僧正は徳川家康の政治顧問で、寺社行政に貢献したことで知られている。しかし同じ僧侶で政治顧問の崇伝と対立し、城内で激論を戦わせた。家康の葬儀ではいったん久能山に葬られた遺骸を翌年日光に移葬。寛永元年上野寛永寺を創建して開山となった。

元禄時代は側衆、高家衆など旗本高官邸に変遷する。高家の畠山基玄は5代将軍綱吉の側用人をつとめた。畠山家は守護大名、管領家の後胤で延宝7年に高家になった。高家に就任できる家柄は26家で、うち10人ほどが礼節をつかさどった。元禄8年、松平輝貞邸に囲込み、以後、酒井修理、田沼主殿頭、徳川一ツ橋、徳川田安邸囲込みなどをへて、最後は酒井雅楽頭邸の一部に組込まれた。

大手町合同庁舎2と三井生命ビルの土井利勝は2代将軍秀忠の腹心で、江戸、駿府の2元政治時代、両政権をつなぐ役割をはたした。慶長15年から34年間の老中、うち3代将軍家光の寛永15年以降は大老。明敏、知略にすぐれ、初期幕政の確立者とされている。土井家大手町屋敷は次の利隆、利重とつづいて明暦3年の大火で移転した。松平輝貞は当時とぶ鳥おとす勢いとされた柳沢吉保の養女を妻とし、5代将軍綱吉の寵愛をえて高崎7万2千石の太守におさまった。元禄8年隣接する金田能登守邸を添地拝領。ここに御成御殿を竣工して綱吉を歓待した。正徳5年からの25年間、小浜酒井藩3代の上屋敷になった。忠音は大老忠勝の後胤。寺社奉行、若年寄をへて老中。秋元涼朝は家康の近臣泰朝の系統で10代将軍家治期に老中にすすんだ。

世に田沼時代とうたわれた田沼意次江戸上屋敷が明和8年大手町にうまれた。意次の父意行は8代将軍吉宗の供で、紀伊から江戸入りして9百石をえた。意次も吉宗の小姓から9代将軍家重の御用取次となったが、将軍は言語障害がはげしく大奥にこもって表御殿に出なかったので、幕府高官との間を取り次ぐとともに、昇給昇格人事につくした。自らも金銀財宝を惜しげもなくばらまき、やがて相良5万石の中堅大名に栄進した。大手町邸は10代将軍家治の老中時代、もっともその権勢がきわまったころである。田沼邸は千客万来、連日山のような贈り物で埋まった。意次は収賄政治家の代表でもあったが、もっとも進歩的な政治家との評価もあった。新田の造成、物産の開発、文化の奨励などをすすめたが、保守勢力から憎悪され、金権政治は江戸っこたちの反感を買った。天明6年、家治が逝去して11代将軍に徳川一ツ橋家から家斉を迎えると立場は一転し、老中を罷免され奥州1万石へ減封。大手町邸も没収された。

幕末期の大手町1丁目は大手濠側に徳川一ツ橋家上屋敷、酒井姫路藩邸と歩兵屯所がならび、2列めは酒井庄内藩上屋敷、小笠原小倉藩上屋敷と作事方の6邸をもって明治維新を迎えたが、慶応4年、東征軍の進撃で江戸城が無血開城されると、その玄関先に位置した大手町も大きな変換を余儀なくされてくる。維新当時、周辺大名家はすべて国元に引上げて無人。新政府はこれらを次つぎに没収していった。徳川一ツ橋邸は阿波藩屯所となり、酒井雅楽頭邸は長州藩屯所、酒井左衛門尉邸は薩摩藩屯所、歩兵屯所は3番4番屯所がおかれた。

明治維新の歴史は山口藩主の敬親抜きには語れない。第1次征長では3人の家老の首を差し出して辛くも家格をまっとうしたが、こうした政治姿勢に藩内尊攘派の不満が高まってくる。高杉晋作らの松下村塾門下生が武備恭順を藩の方針として統一、大村益次郎による軍制改革がすすんで、倒幕色が一気につよまった。薩長連合が誕生、鳥羽伏見の戦いに完勝した官軍が江戸城開城をはたしたのは慶応4年4月のことであった。三井物産ビル周辺の旧酒井雅楽頭邸を山口藩が占拠し、廃藩置県までの4年間藩邸としたが藩主の居住はなかった。

明治元年、広く会議をおこし万機公論に決すべし、との誓文趣旨を実行するため旧姫路藩邸の一部に公儀所がおかれ、翌年集議院とした。各藩を代表する江戸留守居役などが集まったが、大半が保守的で政府の改革路線とあわず4年の廃藩置県後その機能は左院に引継がれた。江戸が東京と変わり、町に活気が戻るようになると旧体制時代の城門が邪魔に

なってくる。明治5年、雉子橋、一ツ橋、神田橋、常磐橋など21門の撤去を決定した。この年町名が制定され、大手町1、2丁目、元衛町、道三町、銭瓶町の5町になった。兵営で埋まった大手町に大蔵省、内務省、文部省などが進出して官庁街を形成する。大手町は再び大きな転換期を迎える。

明治4年酒井姫路藩邸は大蔵省となり6年に内務省との合同庁舎を竣工させた。本館は林忠恕設計の半洋風2階建、大手門側の正門を入って左が大蔵省、右が内務省。JRガード側の裏門と庭園は幕藩時代の面影を伝えた。大蔵省大手町庁舎最初の大蔵卿（大臣）が大久保利通で、以下大隈重信、松方正義、井上馨。内務省も大蔵省と同根で明治4年独立。当初は旧姫路藩邸におかれた大蔵省の片隅に庁舎の看板をかかげた。初代卿が大蔵卿から横滑りした大久保利通で伊藤博文、松方正義、山県有明とつづいた。大正12年の関東大震災で焼失。跡地に数棟の平屋バラック庁舎をたてて廊下で結んだが、復興計画で中央官庁が霞が関に集められることになり、昭和8年新築庁舎に移転した。

その後しばらくの間、内務省跡地も大蔵省庁舎の一部として使用されたが、昭和15年6月、合同庁舎2の地にあった航空局の2階建木造庁舎が落雷焼失、皇居防御を優先した消防体制をあざわらうように火の粉は神田橋税務署、内閣企画院、厚生省、中央気象台を焼いて大蔵省を灰燼と化した。大手町1丁目は昭和20年の戦災でも大きな被害をうける。2月25日の東京空襲は中央気象台新庁舎、麹町税務署、東京都財務局、内閣印刷局に2百50キロ爆弾と焼夷爆弾の雨を降らせ、4月13日空襲で丸の内消防署、三和銀行、石炭統制会、機械工業会館などを焼失した。大手町の地は三井物産の地の航空局バラック庁舎、中央電話局など一部をのぞく大半が焼け野原で終戦のときを迎えたのであった。

三井物産ビルの戦後は航空局と気象庁寮、駐車場という組合せであった。航空局は戦前の通信省外局航空局の後身で航空保安庁をへて運輸省航空局となった。昭和37年、合同庁舎1の新庁舎に移転。跡地は住宅展示場、カーウォッシュセンター、駐車場とされた。業容の拡大で内幸町の旧社屋が手狭となった三井物産がこの地に進出したのは昭和51年のことで、延建築面積16万1千平方メートル、皇居を眼下にみおろす24階の高層ビルを誕生させた。本館が高さと幅とも百メートルの正方形で、内堀側の3角形の明地が緑の遊歩道になっている。勤務者が7千人、来客も5千人をこえるマンモスオフィスで、低層の別館とはドーム式のわたり廊下がつながっている。58年5月、この前庭池にカルガモ親子4羽が巣作りをはじめてマスコミの話題をさらった。内濠へ引っ越しのため内濠通りを横断する一家が大きく報道された。

三井生命ビル、日本長期信用銀行ビル地には関東財務局があった。大蔵省出先機関として24年設立。当初は旧軍資産を中心とした国有財産の処理にあたった。46年合同庁舎3に移転。平成元年8月の閣議報告にもとづいて埼玉県への再移転が決定している。三井生命の前身は高砂生命で、昭和2年、三井グループに加わって社名変更した。東洋拓殖ビルにおいた本社も三井2号館に移転したが、戦後の急激な業績進展とともに従業員数もふえ、自社ビル建築の必要性が高まっていた。三井生命が大手町の都有地の払下げを受けたのは、昭和29年のことで、当初、その敷地面積が3千6百平方メートルであったが、隣接地千3百平方メートルを加えた昭和34年着工。2年余の歳月をへた36年4月に竣工した。9階建て、延べ4万8千平方メートル。総工費は38億円であった。昭和36年、9階建ての日本長期信用銀行本店が竣工し、48年には創業96周年、設立40周年を記念した三和銀行が高層24階のサンワ東京ビルを建築させた。黒ミカゲ石の高層部分には東京本部、低層部分には営業部門が入居した。建設当時は超高層の銀行ビルと話題になったが、千6百平方メートルにもおよぶプラザには樹木が生い茂って周辺サラリーマンたちを楽しませている。

協和大洋ビル、大手センタービルの一部は明治40年の市区改正工事の結果、後出資料図－11から分離した飛び地で明治、大正時代は憲兵隊幹部の官舎、後期に宮内省料地とされたが、昭和10年丸の内消防署に貸下げられ、耐火造3階庁舎を完成した。新型ポンプ車1台、ハシゴ車1台、救急車1台、34名の職員が勤務した。戦争がはげしくなった20年4月東京空襲で被爆したが、応急修理して業務を再開。42年に鉄筋コンクリート3階のモダン庁舎を竣工、復帰したが、昭和51年大手町官庁の統合計画の一貫として、東京消防庁本庁舎に併設された新庁舎に再度移転した。

跡地は大洋漁業に払下げられ53年24階建ての近代ビルディングが竣工した。1階から18階までの主要部分に丸の内1丁目の新丸ビルから協和銀行本店が入居し、上階は大洋漁業が占めた。協和銀行は昭和20年東京、大阪、名古屋の9貯蓄銀行を合同して港区に日本貯蓄銀行を興したのがはじまり。23年社名を協和銀行と改め普通銀行とした。27年都心部進出のため新装なった新丸の内ビルヂングに移転、昭和53年業容の拡大にともなって本店を再び移した。80年度の建築協会賞を受賞ビルで、内堀側が大洋漁業玄関で、永代通り側は協和銀行（現あさひ銀行）になっている。

大手センタービルの戦後は国際自動車が昭和21年丸の内営業所をひらいてGHQ専用ハイヤーとPDバス駐車場としたことにはじまる。PDは米進駐軍の物資調達指示書で、軍の要請にしたがって将兵やその家族輸送の任にあたった。隣接した明地は東京都の産業会館と貿易会館になった。都立産業会館は昭和29年竣工の8階建て、都内企業の常設展示場、企画イベント会場などとなった。東京機械貿易会館は32年に完成した9階建てビル。昭和30年代からはじまる高度成長社会の産業、貿易振興の推進役をはたした。昭和58年10月、貿易会館と産業会館の地に大手センタービルが竣工。センタービルの名は住所が大手町1

丁目1番地、大手町の中心だからと命名した。ダンヒルのライターをイメージしたというデザイン。赤ミカゲ石の壁が垂直にたちあがってみえる。地下4階地上23階、延建築面積が6万7千平方メートル、建築主は竹中不動産で、上階の13階からの11フロアは住友金属本社が入居し、日本長期信用銀行や外資系の証券、金融会社が多い。

資料図1－9～10　（大手町1丁目②先　大手濠沿い道路敷）
慶長ころ　松原備前某、安栖、伊奈備前蔵、大久保岩見蔵、彦坂小刑部蔵
寛永ころ　青山　某

資料図1－11　（大手町1丁目①　大手センタービルの一部）
明暦3－3～寛文7－7　酒井摂津守忠当　庄内14万石
寛文7－7～延宝7－9　土屋但馬守数直　土浦4万5千石　寛文5年～延宝7年老中
延宝7－9～天和元－4～〃2－11　土井能登守利房　大野4万石　延宝7年～天和2年老中
天和元－4～〃2－11～元禄12閏9　松平因幡守信衡　川越在1万2千石〃7年～〃2年若年
〃2－11～元禄12閏9　秋元但馬守喬知　谷村4万石　元禄12年～正徳4年老中
元禄12閏9～正徳元－6　本多伯耆守正永　沼田3万石　〃9年～宝永元年若年
正徳元－6～〃3ころ　鳥居伊賀守忠英　壬生3万石　正徳元年～享保元年若年
〃3ころ～享保2－2～〃14－1　久世大和守重之　関宿6万石　〃3年～享保5年老中
享保2－2～〃14－1　堀田伊豆守正虎　山形10万石　享保14年大阪城代
〃14－3～〃16－2　〃　正春　〃
〃16－2～寛保2－6　〃　相模守正亮　佐倉12万石　のちに老中
寛保2－6～延享元－9　土岐丹後守頼稔　沼田3万5千石　寛保2年～延享元年老中
延享元－11～〃元閏12　〃　伊予守頼おき　〃
〃元閏12～寛延2－6　三浦志摩守義理　刈谷2万3千石　延享2年～寛延2年若年
寛延2－7～天明7－7　酒井石見守忠休　松山2万5千石　宝暦11年～天明7年若年
天明7－7～寛政2－6　本多弾正少弼忠かず　泉1万5千石　天明7～8年若年寄
寛政2－6～文政12－2　堀田摂津守正敦　堅田1万石　寛政2～6年老中
文政12－2～文久3－2　酒井雅楽頭添え屋敷　〃　2年～天保3年若年
文政12－2　堀田摂津守邸住居家作分を添地拝領。残りを松平主税拝領
文久3－2～慶応4－4　陸軍奉行歩兵屯所　文久3－2遠山美濃守邸一部、3－4残りを添地
明治はじめ　軍務官3・4番屯所
〃2－7～5年　兵部省兵営
〃5ころ～しばらく　陸軍省東京鎮台15番大隊営
〃7ころ～しばらく　外国人居住地（イギリス＝エ・シリングフォールド、アルベード・ウォートルス）
〃8ころ～明治23ころ　近衛工兵中隊、陸軍省鎮台工兵第1大隊
〃20－4～　憲兵司令部、東京憲兵隊本部（丸の内1丁目資料図－3参照）
〃26－4～　東京商工中学校（〃）
明治42年市区改正工事のため4分割。大半は丸の内1－①、一部を大手町1－④につづく
明治42ころ～大正12ころ　憲兵隊官舎
昭和はじめ～昭和9－7　東京市区整理局
不詳～〃39－4　宮内庁料地
昭和10－8～〃　丸の内消防署（つづく）昭和20－4戦災焼失、応急修理
以下区画変更のため前出大手町1－①につづく

日比谷通りの大手センタービルの地は明暦大火の後、松平越前家が分割されて後出大手町ビル一画から移転した酒井庄内藩邸から始まり、次の土屋数直から老中、若年寄役宅となった。寛文、延宝年間の土屋数直は3代将軍家光7人衆の1人で、4代30年間にわたって幕閣に重きをなした。元禄文化が華ひらいた5代将軍綱吉期は土井大野藩邸、秋元谷村藩邸、本多沼田藩邸、久世関宿藩邸と老中家がつづいた。

久世重之のとき綱吉、家宣、家継、吉宗と将軍職がめまぐるしく変わり、次の堀田正虎は大老にすすんだ正俊2代の後胤。幕命をうけて長瀞一揆を鎮圧したが、その後の大阪城代への赴任の道中で倒れた。正亮は寺社奉行から老中にすすんで、佐倉12万石に出世した。

10代家治期は松山2万5千石の酒井忠休邸になった。大老酒井忠勝分家の3代目だが将棋がつよくプロ棋士の井上因碩を破ったという記録が『徳川実記』にある。本多忠かずは勤倹節約大名として有名。経済学者を起用して藩財政の再建にあたらせ6年間の大倹約を発令した。塩や漁業を奨励して殖産振興の実をあげた。成果は寛政の改革に着手しようとした老中首座松平定信の目にとまり、やがて幕閣として迎えられ、定信のもっとも信頼された政治家として手腕を発揮した。幕末期は酒井雅楽頭添え屋敷、歩兵屯所（前出）で明治維新を迎えた。

維新後の一画は官軍屯所で、近衛工兵隊、鎮台工兵隊、15番大隊営をへて明治20年から憲兵司令部、東京憲兵隊本部となったが、大手町スクエア側には東京商工中学校が校舎をかまえた。明治24年芝田村町で開校した高等商業学校予備門の後身で、木造2階百37坪。生徒数6百50名であった。明治42年の市区改正工事で一帯は大きく様がわりされる。道三濠の埋立てが完了し、大手門から道三濠敷を経由した永代通りが新設され、八代洲河岸から直線で神田橋、本郷通りに抜ける日比谷通りが完成した。憲兵隊、商工中学校の一画は4分され、南側大半が現在の丸の内1丁目パレスホテル側で憲兵隊と憲兵隊練習場、北側が現在の協和大洋ビル、大手センタービルで憲兵隊官舎に、東側は現在の大手ファーストスクエアで、官舎、東京商工中学校、日本衛生会に分割された。

資料図1－12、13　（大手町1丁目⑤、旧道三町①　大手町ファーストスクエア、安田火災
富士銀行、大手町共同ビル）
慶長5年～慶長19年　前田芳春院松　前田筑前守利長の母　証人（人質）

慶長10－冬～明暦3－2	前田筑前守利常	金沢百20万石
明暦3－2～寛文元－2	徳川左馬頭綱重	甲府25万石
寛文元－2～宝永2－4	破損小屋、細工小屋、小細工小屋	
宝永2－4～〃 6－3	柳沢甲府藩中屋敷	
〃 2－4～〃 7－11	内藤山城守政森	安中3万石
〃 6－5～〃 7－11	辰の口御用屋敷	
〃 7－11～慶応4年	小普請方定小屋、作事方定小屋、普請方役所	
明治元－10～明治はじめ	営繕司出張所、用度司	
〃 7年～〃 20ころ	内務省土木寮用地、制作寮出張所、工務省営繕出張所	
〃 5ころ～〃 10ころ	蜷川式胤	
〃 20ころ～大正はじめ	内務省土木出張所、土木監督署	
〃 20ころ～〃 12ころ	東京鉱山監督署、地質調査所、地質課	
〃 39－9～〃 12年	特許局、特許局特許陳列所	
⑤大手町ファーストスクエア	明治40年市区改正工事のため一部区画再編	
明治40ころ～大正7ころ	東京商工中学校（大手町1－①のつづき）	
〃 44－5～昭和10ころ	日本衛生会（大手町1－①のつづき）	
大正10ころ	東京瓦斯	
〃 12ころ～昭和はじめ	会計検査院	
昭和20年代はじめ	モータープール	
〃 25－10～〃 61ころ	東京海上ビル別館	
〃 26－5～〃 40ころ	大手ビル	
〃 40ころ～平成元ころ	三菱金属ビル	
〃 33年～昭和61ころ	千代田電々ビル、電々公社千代田庁舎総合建物、千代田NTTビル	
〃 26－11～平成4ころ	千代田電話局、丸の内電話局分局、NTT東京千代田支社	
平成4－2～現在	大手町ファーストスクエア　平成8年第2期工事完成予定	
⑤富士銀行、安田火災		
大正11－12～昭和30ころ	永善社永楽ビル	
〃 12－9～〃 23－10	安田銀行仮本店、第3銀行仮本店　大正12－11安田銀行本店	
昭和23－10～〃 30ころ	富士銀行本店、本館	
〃 27－8～現在	富士銀行本店、旧本店ビル　41－8富士銀行本店	
はじめ	印刷局分室	
〃 30年代	倉庫、全国燃料会館、交通公社	
〃 31－10～平成はじめ	安田火災海上ビル別館	
平成4－7～現在	安田火災富士銀行大手町共同ビル	

大手町ファーストスクエア、安田富士共同ビル周辺の江戸はじめは前田年長邸であった。年長の父利家は豊臣政権の功労者であったが、秀吉没後、政権奪取をめざす徳川家康の標的にされた。利長はやむなく母の芳春院を人質として江戸へ差出し、2代利常の正室に秀忠の娘を迎えてお家安泰をはかった。関が原の合戦では徳川方について加賀、越中、能登3か国百20万石をえ、大手町には芳春院と2代利常が住んだ。殿舎は伏見城下で拝領したじゅ楽秀次邸を移設したともいう。慶長19年の『当代記』には家造江戸1番とある。元和3年秀忠お成り。寛永9年大火で焼失したが翌10年再建。その作事を江都あげて噂した。『林家蔵書』によれば、四隅に櫓をあげ、唐破風切妻4脚門と入母屋櫓門があり、内部は2階建の数寄屋造り楼閣、大廈高楼とよぶにふさわしかったという。

明暦大火のあと、前田金沢藩邸は3代将軍家光の2男綱重邸に代わった。綱重13才。北の丸、雉子橋門内につづく3度めの邸地で、大手町には8年間、弟綱吉邸と並んで邸地をおいた。寛文5年、甲府25万石に栄進。手狭のため日比谷公園の地に移転。跡地は一時御破損小屋と称したが、宝永2年からの6年間、柳沢吉保と内藤政森邸に2分された。

この地が小普請方と作事方の組屋敷とされたのは宝永7年のことで、一部に普請奉行役所があった。小普請方と作事方は小普請奉行と作事奉行の中核で、大手町屋敷は事務所兼作業場、材木置き場といったところだろうか。作事は城内と日光東照宮の建築工事を担当し、小普請は大奥と役屋敷、全国の寺社管理などにあたった。

旧作事方の一画の明治はじめは営繕司、用度司、製作寮出張所、土木寮出張所などと呼び変えられたが、材木などの置き場や作業場として継続された。一部が蜷川式胤邸だったこともある。制度局、外務省、文部省などを歴任した考古学者で、明治4年に『旧江戸城写真帳』を残した。明治中後期は土木監督署、鉱山監督所、地質調査所、特許局で、明治42年の地区改正工事の結果、道三濠の埋立て、周辺道路の変更で東京商工中学校、衛生会、永楽ビルなどの敷地が組込まれた。土木監督署は内務省と関東地区都県管理河川、港湾工事の監督機関。鉱山監督所は農工務省が管轄する鉱山を監督し、地質課は地質の鑑定調査にあたった。特許局は農商務省の1局で、木挽町本省から独立移転した。局内の陳列所には特許の資料や発明品が展示されたが、関東大震災で焼失、跡地の一部に会計検査院がおかれたこともあった。

戦前は大半が官有地であったが、霞が関への官庁集中化がすすむにつれてますます明地がめだつようになる。唯一民間企業の用地は明治40年の市区改正工事でうまれた飛地や埋立地で、大正11年、安田保全とこれに関係する保善社が永楽ビルを竣工し、安田銀行が進出した。安田銀行は安田善次郎によって築かれた戦前期の代表的金融機関。明治12年日本橋小舟町で創業した合本安田銀行の後身で、大正12年関東大地震直後に第3銀行など10行を合同して社屋を大手町に移した。第1次世界大戦以後安田財閥の中核となるが、戦後の財閥解体後は社名も富士銀行と改め、新たな発展をとげた。東京オリンピックの行われた昭和39年本店新築工事に着手、2年半の工期をへた41年に竣工した。2階建て低層部と16階高層部を組合わせ、敷地の3分の1を広いプラザとして、その下を地下鉄の連絡通路に提供した。安田火災海上は昭和19年東京火災らの合併で発足。31年旧富士銀行本館跡に別

館を建てたが、平成4年富士銀行と安田火災富士銀行大手町共同ビルを興した。

戦後の20年代後半に次々とビル建設がすすんだ。太平鉱業が大手ビルを建設したのは昭和26年のことで、このビルはのちに三菱金属鉱業の本社となった。通信省から分離直後の日本電信電話公社も同じ26年に千代田電話局を開局した。大手町にはのちに紹介する通信省本庁もおかれた文字通りNTTの町。千代田電話局、千代田電々ビルなどが加わった。千代田電話局は本格的複合電話局マルチユニットのはじまりという。当時、大手町、丸の内を中心とした都心部は空前のビル建設ブームを迎え、いずれもが千本単位の電話本数を要求したのでパンクは時間の問題となった。千代田局の開設は隣接する大手町ビル、新丸ビル建設と工事を競うかのようにすすめられ、建設は通信省はじまって以来という工期1年の短期間で開局した。ここに戦後7年間、復旧を当面の目標に後手ごてとなっていた都心部の電話局状も一気に好転した。隣接の千代田電々ビルは東京電気通信局の独立にともなって計画された。地上9階地下2階、延べ5千百平方メートル。新築当初は2階から4階までを丸善石油に賃貸したが、後期は関東電気通信局と電々公社の丸の内営業所などとされた。

平成4年、NTT東京千代田支社を中心に東京海上ビル別館、三菱金属ビル跡地に大手町ファーストスクエア第1期工事が竣工した。4角の土地に変則6角形のビルを2棟向かいあわせに建てる。つづく第2期工事も平成8年完成の予定で、ともに地下5階地上23階の超高層ビル。外壁の中央部分が格子窓、角が横連窓とメリハリをつけた。

資料図－14（大手町1丁目⑥、⑦　大手町ビル、サンケイ会館）

慶長ころ	～慶長16年	堀尾帯刀吉晴　松江24万石
〃	16年～寛永10－9	〃　山城守忠晴
寛永11年	～正保4－10	酒井宮内大輔忠勝　庄内14万石
正保4－12	～明暦3－3	寛永元年～明暦2年老中、大老
〃	〃	摂津守忠当
〃	〃	明暦3－2明暦大火後の割り替えで水野出羽守、酒井摂津守、藤堂大学邸をあわせ拝領
明暦3－3	～延宝8－5	徳川右馬頭綱吉　館林25万石
延宝8－8	～天和3閏5	〃　徳松　将軍家光3男、宗家相続
天和3閏5	～元禄9－7	天和3年無嗣廃絶
元禄9－7	～〃　12－11	寛文元－2手狭のため徳川左馬頭邸の一部を添地拝領
〃	12－11～〃　16－12	神田御殿、本屋敷
〃	16－12～宝永6－6	天和元－8建物一部を2の丸に移築
宝永6－6	～正徳5－4	別資料　延宝8年～神田御殿
〃	〃	一部を柳沢美濃守邸に囲込み
〃	〃	水野摂津守勝長　結城1万8千石
〃	〃	再び柳沢邸に囲込み
〃	〃	柳沢刑部少輔経隆　甲府新田1万石　松平姓を称す
正徳5－4	～享保17－8	甲府1部と松平刑部邸を拝領
〃	〃	榊原式部大輔政祐　姫路15万石
享保17－8	～寛保元－10	〃　政岑
寛保元－10	～宝暦2－2	小笠原右近将監忠基小倉15万石
宝暦2－3	～寛政2－11	左京大夫忠総
〃	〃	〃　右近将監忠苗
寛政3－1	～文化元－7	〃　伊予守忠固
文化元－7	～天保14－7	左京大夫忠徴
天保14－9	～安政3－7	右近将監忠嘉
安政3－8	～万延元－6	左京大夫忠幹
万延元－11	～慶応元－9	〃　忠忱　香春15万石
慶応3－6	～明治2年	別資料　池田章政
明治2年	～〃　5－2	藤堂和泉守高献　津藩知事
〃	5－2～〃　6－4	工部省所有地、陸軍省所有地　別資料　5－8から
〃	6－4～〃　10－1	教部省
〃	6－4～〃　10－1	文部省
〃	5－8～〃　10－2	督額局　6－4新庁舎
〃	6－1～〃　11－1	農商務省
〃	14－12～〃　24年	駅通局出張所
〃	16ころ	会計監査院
〃	24ころ～大正14年	東京大林区署
〃	28ころ～〃　14年	専売局
大正元ころ～〃	10ころ	特許局陳列所
〃	末ころ～〃　10ころ	米穀局、電報局調査課
昭和12ころ～〃	15ころ	営林局
〃	戦前	昭和20年戦災で一帯を焼失、明地
⑥大手町ビル		
昭和20－9	～昭和21－1	日本航空機工業接収
〃	20年代はじめ	モータープール
〃	28－4～〃　31年	三菱29号館（27－1～31大洋自動車）
〃	33－4～現在	大手町ビル（協和醗酵、日本セメント、日本原子力発電）
⑦読売新聞社		
昭和20年代はじめ		モータープール
〃	25ころ～昭和40ころ	大蔵省関東財務局
〃	46－11～現在	読売新聞社
⑦サンケイビル		
昭和20年代はじめ		モータープール
〃	26－3～昭和37－8	東京労働基準局
〃	34ころ	日英自動車、日本交通
〃	30－3～現在	産経会館、サンケイビル本館（産業経済新聞社、日本工業新聞社、サンケイ新聞社、サンケイ会館）
〃	31－5～〃	産経別館、サンケイビル別館（大手町産経学園）
〃	48－10～〃	産経新館、サンケイビル新館（山種証券大手町支店、モービル石油）

資料図－16、17　（大手町1丁目⑦　サンケイ新聞社）
慶長10以前～寛永7－7　藤堂和泉守高虎　津32万4千石
寛永7－10～明暦3－5　〃　大学頭高次　〃
明暦3－5～　徳川右馬頭邸に囲込み（以下資料図－14参照）

大手町ビルとサンケイ会館の地の江戸はじめは藤堂高虎、堀尾吉晴で、寛永11年に庄内14万石の酒井忠勝邸になった。高虎は秀吉が亡くなると家康に通じて関が原の戦いなどで活躍した。諸大名に率先して妻子を人質として差出し、江戸が首都と決まると江戸城の縄ばり、日光東照宮、大阪城建設などに忠勤して津32万石の太守に封じられた。忠勝は3代将軍家光につかえて老中となり、寛永15年土井利勝とともに老中を免じられ、重要事項のみを合議するように命じられた。これが大老の起源となる。家光の死後は遺言で幼将軍家綱を補佐した。

明暦大火で一帯を焼失、直後の区画整理で、水野忠当、藤堂高次邸の一部をあわせて3代将軍家光の4男綱吉邸となった。聡明、好学の誉れも高かった青年時代で、将軍継承後は独裁政治家として大くぼうへの道を歩んだ。天和元年、建物一部を2の丸に移設。跡地はしばらくの間、神田御殿とよばれた。

正徳5年から榊原姫路藩邸とかわった。2人めの政岑は1千石の分家から15万石の養子に迎えられたが、藩主の座につくと吉原にいりびたって№1太夫を落籍し、お披露目に色町の遊女を総あげした。ときあたかも8代将軍吉宗による享保の改革のまっ最中。吉宗の逆鱗にふれた政岑は隠居謹慎を命ぜられ、嗣子政永は高田15万石へ左遷された。

寛保元年から幕末までの百30年間は小倉15万石の小笠原藩邸となり、忠基以下8代が住んだ。小笠原家は小笠原礼法で知られる名門。代々将軍家礼法指南役をつとめた。忠固のとき、藩主の幕閣就任運動のため藩士の俸禄を半減したことからお家騒動が起こった。藩主の野心に抵抗した3百人が黒崎宿にたてこもった。幕末慶応2年の第2次長州征伐では、急逝した忠幹の喪をふせて幕府軍の先陣となったが、近代兵器を誇る長州軍に敗れ、自らの小倉城に火をかけて脱出した。

旧小笠原小倉藩邸の明治はじめは文部省と教部省になった。初代の文部卿が大木喬任で、木戸孝允、西郷従道が継いだ。教部省は明治初期の神道と仏教を統括した。明治5年神祇省を改め移転。その後、しばらくの明地をへた明治14年、一画が農商務省になった。大隈重信、伊藤博文の発議で大蔵、内務などに分散した農商業務を一元化したもので、初代農商務卿が河野敏鎌。以下西郷従道、黒田清隆などが就任した。明治24年庁舎はいったん京橋に移転したが関東大震災後の大正14年、加藤高明内閣が農林省と商工省を分割したのを機に日経ビル、経団連ビルの地に復帰し、昭和19年までつづいた。

この一画の明治、大正、昭和戦前期は会計検査院、東京大林区署、特許局、営林局などの官庁出先機関になった。会計検査院は明治13年、後出大手町2丁目に開設、農商務省移転の跡地に引移ったもので、国財政の決算検査、会計、経理の監督機関として独立した権限を有した。東京大林区署は関東近県の官林を管理した。

昭和20年戦災のため一帯を焼失。大半は終戦しばらくの間明地とされたが、28年に旧国税庁跡地5千平方メートルが産経新聞に払下げられることになった。当時の産経新聞は有楽町の外濠沿いに本社屋と印刷工場を連ねたが、狭溢で社勢の拡大に対応できなくなっていた。一方当時の大手町は「わずかにバラック建ての役所と少数の商社があるだけで、明地は自動車の駐車場の利用され、まことに寂しいかぎり」（前田久吉伝）だったという。30年地下1階地上9階塔屋3階からなる新社屋が誕生。近代会館ホール、クラブなどを擁し、屋上にヘリポートを設置して注目を集めた。

大手町ビルヂングは昭和33年竣工の9階オフィスビル。日比谷通りから大手町両国線まで、長さが2百メートルあり日本1長い。高度成長時代はじめ「東洋一のビル」と話題を呼んだ。読売新聞の地は総合庁舎の建設につれて明地となり、43年銀座本社屋が手狭で新用地を求めた読売新聞に払下げされることになった。翌44年起工、2年間の工期をへた46年11月10階建ての新社屋を竣工して、高速輪転機が新紙面の印刷を開始した。

資料図－15　（大手町1丁目⑧、⑨　KDDビル、開銀ビル、公庫ビル）
慶長以前　～正保4－5　水野隼人正忠清　松本7万石
正保4－8～寛文8－6　〃　出羽守忠職　〃　承応元年～寛文2年大阪城代
寛文8－8～元禄2－1　〃　隼人正忠直　〃
元禄2－1～宝永6－6　明暦3－3割り替えで一部を徳川館林邸に囲い込み　元禄元年～宝永6年側用人、大老格、松平姓を称す
宝永6－6～正徳5－4　柳沢美濃守吉保　甲府15万石　松平姓を称す
〃　甲斐守吉里　〃
元禄2－2松前備前守邸、9－7巻だ御殿、13－8南続き地添地拝領　正徳5－4松平甲斐守、酒井左衛門邸入替え、一部を松平伊予守、榊原式部邸に添地
酒井左衛門佐忠真　庄内14万石
正徳5－4～享保16－8　〃　左衛門尉忠温　〃　寛延2年～明和元年老中
享保16－10～明和3－3　〃　左衛門佐忠寄　〃
明和3－5～〃　4－1　〃　左衛門佐忠徳　〃
〃　4－2～文化2－9　〃　左衛門尉忠器　〃
文化2－9～天保13－4　〃　忠発　〃
天保13－4～文久元－8　〃　忠完　〃
文久元－8～〃　2－9　〃　忠篤　〃　文久3年江戸市中取締
〃　2－12～慶応4－3　〃　忠宝　〃　会津若松12万石
慶応4－3～〃　4年　島津修理大夫忠義　鹿児島77万石、鹿児島藩知事
明治はじめ

明治5年～明治11年　大蔵省紙幣寮、雇異国人居住地、部長官邸
〃11年～〃31年　大蔵省印刷局
〃31年～昭和20－2　内閣印刷局　昭和20年戦災焼失
大正14－4～〃18－11　農林省
⑧KDDビル、新公庫ビル農協ビル
昭和20年代～30－9～現在　明地、駐車場
国際電信電話東京局舎、KDD大手町ビル（国際電信電話東京支店）
〃63ころ～〃　KDD大手町新ビル
〃43－10～〃　新公庫ビル（農林漁業金融公庫、中小企業信用保険公庫）
〃30年代～41－1～現在　産業経済協会、長期農民組合、印刷局宿舎、富士工業宿舎
農協ビル（全国農業教導団組合連合会、農林中央金庫本店、農協ホール）
⑨日本開発銀行、公庫ビル、経団連会館、日経ビル
昭和20年代～32年ころ　東京キャンプモータープール
国際電信電話自動車詰所、丸大連輸
〃20年代～昭和45ころ　麹町税務署
〃38－1～現在　日本輸出入銀行日本開発銀行合同ビル、日本開発銀行本店ビル
〃64ころ～〃　日本開発銀行本店ビル新館
〃37－10～〃　公庫ビル（国民金融公庫大手町支店、農林漁業金融公庫、国民金融公庫、北海道東北開発公庫、中小企業金融公庫）
経団連会館（経済団体連合会、経団連ホール）
〃41－11～〃　日経ビル（日本経済新聞社、日経ホール）
〃39－3～〃

資料図－18　（大手町1丁目⑨）
慶長～元和元年　溝口外記常吉　不詳
寛永ころ～明暦3－1　長屋　元和元年廃絶

資料図－19　（大手町1丁目⑨　日本経済新聞社、経団連ビル）
寛文3ころ～延宝7－9　土井能登守利房　大野4万石
延宝7－9～天和元－4　松平因幡守信衡　武蔵1万2千石　延宝7年～天和2年若年
天和元－4～〃2－1　稲葉丹後守某　不詳
〃2－1～貞亨2－3　堀田下総守正仲　古河10万石
貞亨2－3～元禄2－3　松平備前守正信　甘縄2万石2千石
元禄2－3～　柳沢出羽守吉保邸囲込み（以下資料図－15参照）

神田橋そばKDDビル一画の水野松本家は徳川家康の生母大の実家で、大のオイ忠清が慶長6年に小幡1万石を立藩して邸地を受けた。溝口常吉は関が原の合戦で2代将軍秀忠にしたがい大阪冬の陣にも徳川方として出陣したが、徘徊禁止とされた京都周辺に立寄り軍律違反とされた。夏の陣では豊臣方の誘いに乗じて大阪城にこもり討死。神田橋門の土手際、日本経済新聞社、経団連ビル周辺の地の江戸はじめ図に長屋がある。藤堂津藩邸の向屋敷で、明暦大火後の区画整理のとき添地をえて土井利房が拝領した。大老利勝の4男で4代将軍家綱の側近として老中に昇進した。堀田正仲の父も大老正俊で、この年城中次の間で若寄稲葉正休に刺殺された跡を継いだ。

江戸文化が花ひらいた元禄2年から甲府15万石の柳沢吉保邸に変わっている。吉保は最初百60石の綱吉小姓番組頭であったが、綱吉が5代将軍になると出世街道を驀進することになる。元禄元年、側用人に抜擢され1万石をえて大名に列し、その後も次々と加増をえて15万石の甲府城主となった。大手町時代の柳沢家は全盛期で老中首席、大老格。吉保の権勢がきわまったが、一方でとかくの噂もたえなかった。綱吉が倒れて6代将軍に家宣が就任すると政権の座を追われ、晩年は六義園の別邸に引きこもった。酒井忠勝、田沼意次、水野忠邦らの権力者の最後が不運だったのにくらべ平穏な引退ぶりであった

正徳5年から幕末までの百50年余、大手町ビルなどの項で紹介した酒井庄内藩邸が戻って忠真以下9代の上屋敷になった。忠真は5代将軍綱吉の側用人から奥詰となり、8代将軍吉宗の世子家重の元服上使をつとめた。つづく忠寄も老中にすすんだが、藩財政は緊迫し、忠徳はじめての国入りのとき福島までの旅費しか調達できなかったという。忠徳は地元の豪商本間光丘の支援をえて財政立直しをはかり、次の忠器のとき幕府の長岡転封命令を阻止した。

大蔵省の印刷寮が旧酒井庄内、松平福井藩邸に入ったのは明治7年。翌8年、神田橋正面にウォートルス、ホアンビル設計のイタリア教会風の本館を竣工させた。当初の紙幣はドイツで印刷し、日本で押印して流通させたが、やがて太政官印刷局と統合、国内での紙幣印刷を開始する。11年印刷局と改称、終戦直後市ヶ谷に移転した。

大正16年からは印刷局の一部、東部分が分割されて農林省本庁舎となった。農商務省を農林、商工の2省に分割したときの中央官庁で農業、食料、畜産、水産行政などを主管した。初代大臣は第1次加藤高明内閣の高橋是清で、東条英樹内閣の山崎達之輔まで20人が就任した。戦争が一段と厳しさを増した戦時後期は物資の欠乏が深刻で食料品を中心に生産、配給、消費を計画的に推進する価格統制を実施した。昭和18年、戦時の行政再編で農商務省にその事務を引継ぎ、東京空襲で被爆焼失した。戦後この一角は明地からスタート。占領軍に接収されてモータープールとされた所も多かった。旧通信省、電信電話関連企業がめだつ大手町にKDD国際電信電話ビルが加わったのは昭和30年のことで、電信電話公社の国際部分を引継いだKDDの東京国際電報局、東京国際電話局、大手町国際電話施設局が入った。

大蔵省に関係ふかい公庫と新公庫ビルが建設されたのは昭和37年と43年であった。公庫は中小企業や産業開発などの資金貸出を目的とした政府金融機関で、国民金融公庫、中小

企業金融公庫、中小企業信用保険公庫などが入居している。また、38年建設の日本輸出入銀行、日本開発銀行も政府関連機関で、昭和41年竣工の経団連はわが国の財界をリードする経済4団体の中心。21年に発足、歴代の会長は石川一郎、石坂泰三、植村甲午郎、土光敏夫、稲村嘉寛らがつとめた。

日本経済新聞は明治9年に創刊した『中外物価新報』の後身で、社屋は茅場町にあった。昭和36年、百万部突破を目標とした「新増紙3か年計画」の一貫として都心部進出をめざし、印刷局跡4千7百平方メートルの土地確保が決まったこの年7月、ビル建設工事に着工。39年に地上9階地下4階塔屋3階、上に電波塔を備えた日経ビルを竣工させた。

資料図I-20～21　（大手町1丁目）

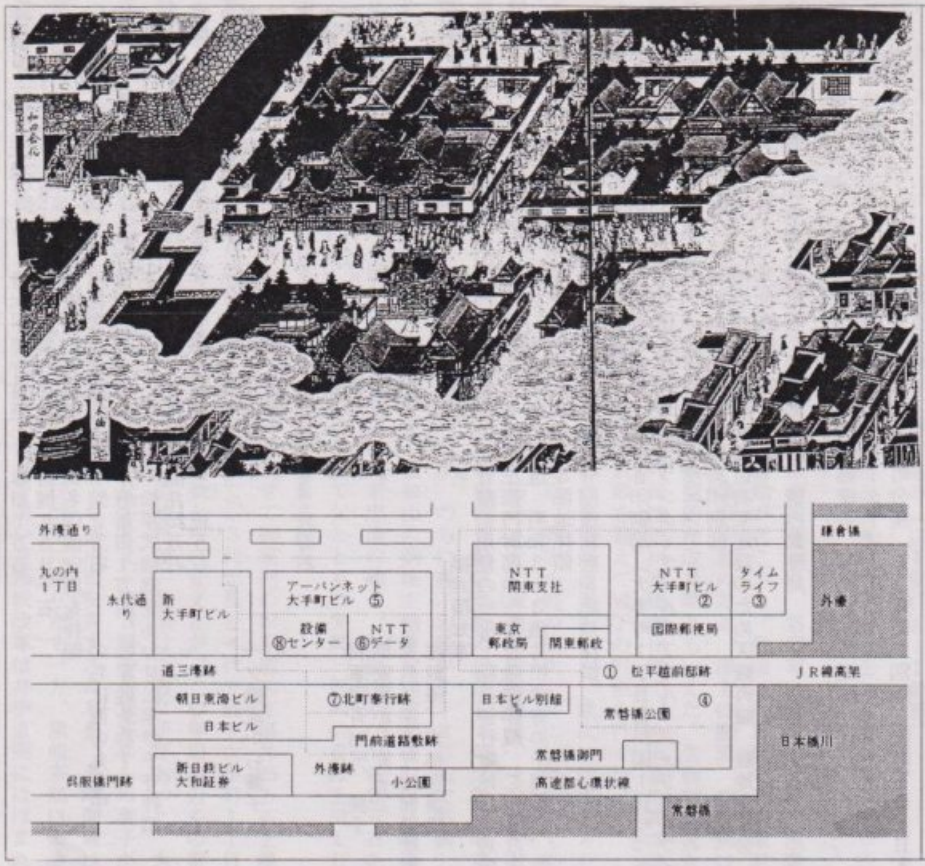
天正ころ～寛永5年　町屋
慶長ころ～正保ころ　天野屋敷

加藤家御用商人天野太郎左衛門江戸蔵屋敷

参考　江戸幕府の主要役職　本書登場人物の担当業務

征夷大将軍　天皇が任命した幕府の指揮、統率者。江戸時代は徳川家世襲
御台所　将軍の正室
大老　将軍を補佐する幕府の最高責任者。非常置。譜代10万石以上
首席老中　老中の責任者。大老ないときの幕府最高責任者
老中　将軍に直属して政務を総括。定員4～5人。譜代2万石
若年寄　老中に次ぐ職務で旗本、後家人を総括。定員3～5人。譜代大名
側用人　老中の上申を取次ぎ、将軍の命令を老中に伝達。非常置。
御用取次　御用の取次や裁決を伝達。非常置。
奏者番　謁見時の取次、進物披露、殿中礼式。20～30人。譜代大名
寺社奉行　全国の寺社、僧侶、神官取締り、訴訟事務。定員4人。譜代大名
勘定奉行　全国の郡代、代官を支配、租税収納、会計。定員4人。3千石高
江戸町奉行　江戸市中の行政、司法、警察。定員2人。3千石高
留守居　将軍出陣中の城代。泰平時は大奥取締り。定員4～6人。千石高
大目付　老中の耳目となって政務を監察。定員4～5人。3千石高
京都所司代　朝廷政策、西国諸大名監視。譜代2万石
高家　名族の子孫。幕府の儀式、典礼。はじめ26家。千5百石高
作事奉行　幕府直轄の土木営繕、江戸城修繕。定員2人。2千百石高
普請奉行　江戸城の石垣、濠、橋などの土木工事。定員2人。2千石高
小普請奉行　江戸城の小修理。定員2人。2千石高
同朋頭　大名の城内案内、給仕。定員4人。役料2百俵
大番頭　旗本から選抜された精兵。戦時は先鋒、江戸城警備。12組。5千石高
書院番頭　戦時に将軍を守る親衛隊。門警備、駕籠脇守衛。10組。4千石高
小姓組頭　戦時に将軍を守る親衛隊。将軍内務。6～10組。4千石高
新番頭　戦時に将軍を守る親衛隊。将軍護衛、先駆。4～8組。2千石高
鉄砲百人組頭　大手3の門警備。4組。
旗奉行　将軍の軍旗、馬印管理。2人。2千石高
持弓頭　戦時は将軍を守る弓隊。平時は中仕切門を警備。4組。3千石高
持筒頭　戦時は将軍を守る鉄砲隊。平時は中仕切門を警備。4組。3千石高
先手頭　戦時は弓、鉄砲隊。平時は5門、上野、芝参詣時の寺警備。28組
使番　戦時は戦功を視察し、斥候、伝令。平時は上使。50人。千石高
定火消役　江戸市中の消防隊。8～15組。役料3百人ぶち
小十人頭　戦時の組編成。平時は将軍の出行に供奉。11～20組。千石高
徒士頭　将軍出行の道路警備。玄関中に迎える。20組。千石高
側衆　将軍側に侍し、御用の取次や裁決などを伝える。定員5～8人
納戸頭　幕府の金銀、衣服、調度品、献上品管理。定員2名。役料7百石
小納戸頭取　将軍の理髪、食事。定員4～5名。千5百石高
大学頭　経籍を進講し、文学のことを司る
奥医師　将軍家族の専属医師

第8話　大手町2丁目ものがたり



大手町2丁目は旧江戸城大手郭の東側。道三濠で区切られた常磐門までの一画にあたった。江戸が最初の賑わいを示したのが、この道三濠両岸で、現在の大手町1、2丁目と丸の内1丁目の一画だという。徳川家康の入城当時、材木町、舟町、4日市町などの町名も記録に残っている。全国から舟づみされた木材や生活物資が江戸湊、日本橋川を通じて江戸の町に集められた。

慶長8年、江戸城工事がはじまると建築資材の荷上げルートとして、道三濠はまっさきに整備された。遠浅の日比谷入江を埋め立て、江戸前島を掘割して道三濠と結び、平川につないで外濠とした。道三濠の名は幕府医官今大路道三邸に由来しているから、江戸時代はじめのものだろう。江戸時代を通じて常磐橋御門内、神田橋御門内の地名で親しまれた。町の代名詞ともいえる常磐橋は天正18年架橋といわれる江戸古橋のひとつで、当初は大橋、大手口、浅草口などとよばれたが、寛永のころ『金葉集』の1首から常磐橋と定めた。

門周辺の石垣は慶長12年に作られ、寛永6年、枡型工事のとき整備した。長さ31、幅11メートルの木橋をわたって高麗門をくぐると枡型にでる。内部が25×27メートルで10メートルほどの石垣がめぐり、門の石垣をのぼる幅7メートルの岩岐がついて、上から弓矢、鉄砲を射かける構造になっていた。方形の枡型を直角に左折すると渡櫓門に出て、外に大番所があった。現在も明治10年建築の石橋が当時の姿をとどめ、周辺は史跡として整備されている。

日本ビルの地には道三濠をわたる銭瓶橋があった。架橋は慶長ころとされるがはっきりしない。橋工事のとき銭瓶を発掘したことが橋名の起こりで、橋際で永楽銭を交換したともいう。橋は門や大番所がなく自由に通行できた。明治40～42年の区画整理で道三濠の埋め立てと同時に撤去された。

江戸時代、門内には松平越前家上屋敷、太田掛川藩上屋敷、稲村高取藩上屋敷、勘定奉行所などがイラカを連ね、一時北町奉行所がおかれたこともあった。常磐橋の内側に渋沢栄一像がある。渋沢は幕末期フランスに留学し、明治の産業界の発展に貢献したが、大蔵省勤務、実業各社の創設など大手町とともに関係が深かった。

資料図1
慶長13－9～慶長15－3　生駒讃岐守一正　丸亀6万石（大手町2丁目③、④、⑤、⑦、旧同町⑨、旧同町③　NTT大手町ビル）
〃　15－4～元和7－6　〃　正俊　〃　17万2千石
元和7－7～寛永17年　〃　壱岐守高俊　〃　寛永17年生駒騒動改易
寛永17－3～寛文7－10　小笠原右近将監忠真　小倉15万石
寛文7－12～元禄5－4　〃　忠雄　〃
元禄5－4～〃　5年　別資料　寛文12年一部を渡辺筑後、寛文年間大久保佐渡守拝領
〃　5－7～〃　6－8　松浦肥後守某　不詳
青木甲斐守重成　麻田1万石　側衆

元禄6－10～元禄7－2	青木甲斐守重矩	麻田1万石
〃 7－3～〃 8－3	松平伊賀守忠周	岩槻4万8千石
	別資料	元禄7－3山名信濃守邸を拝領
〃 8－3～宝永5ころ	黒田豊前守直邦	下館2万石　のちに西の丸老中
宝永6ころ～正徳3－3	柳沢式部少輔時睦	甲府新田1万石　松平姓を称す
正徳3－3～享保6－12	松平伊予守吉邦	正徳3－3松平下総、松平式部邸をあわせ松平伊予守拝領
享保6－12～〃 9－4	〃 中務大輔宗昌	福井25万石
〃 9－5～寛延2－10	〃 兵部大輔宗矩	30万石
寛延2－12～宝暦8－3	佐兵衛督重昌	
宝暦8－3～寛政11－9	越前守重富	一ツ橋家から養子
寛政11－9～文政8－12	〃 治好	〃
文政9－1～天保6閏7	斉承	32万石
天保6－8～〃 9－7	斉善	
〃 9－10～安政5－7	慶永	将軍家斉24男、養子
		田安家から養子
		文久2年～元治元年政事総裁職、京都守護職
安政5－7～明治4ころ	茂昭	〃
〃	〃	、福井藩知事
	正徳5－4柳沢甲斐守跡御用地の一部、稲荷神社敷地を添地拝領	
	延享4－6酒井左衛門尉邸の一部を添地拝領、この分は宝暦2－6酒井邸に返還	
	明和3－3酒井摂津守の一部添地、文政12－6、天保5－3添地拝領	
	文政12－12巨勢日向守邸道路敷を添地拝領	
明治4年～〃 8年	府県出張所	
〃 8年～大正12年はじめ	大蔵省紙幣寮、大蔵省印刷局（大手町1丁目資料図－15つづき）	
〃 9－12～〃 12年	雇外国人居住地（オランダ＝チュルヂアール、アメリカ＝ウイリアムス、コルネリヤエス）	
	紙幣寮製造所、印刷局印刷部	
	明治40ころ東京駅周辺高架建設のため区画再編、敷地を2分	
〃 後期～〃 ころ	万世橋税務署	
大正13－10～昭和20ころ	逓信省、鉄道郵便局、構内郵便局	
③大手町NTTビル、逓信総合ビル、東京国際郵便局、関東電波管理局		
昭和20年代	電信局、郵政局、モータープール	
〃 30年代	東京中央郵便局大手町分室、東京電報局別館、国際写真、日本搬送通信部	
〃 36－4～現在	電々公社大手町総合局、大手町電々ビル、NTT大手町ビル	
〃 43－4～〃	大手町電々ビル別館、NTT大手町ビル別館	
〃 37－4～〃	東京郵政局	
〃 39－11～〃	逓信総合ビル（関東電気通信局、通信総合博物館）	
〃 43－9～〃	東京国際郵便局	
〃 50年代	東京中央電報局、東京郵政監察局	
〃 52－3～現在	関東郵政局	
③タイムライフビル		

昭和20年代はじめ～20年代～昭和30年代		モータープール
〃 40年代		日本セメント、アサノセメント、アサノスレート、鎌倉橋巡査派出所
〃 45－7～現在		明地
		タイムライフビル（タイムインコーポレイテッド）
③高架側		斉藤、藤沢、伊藤、徳世、宇井、西、竹下、児玉、岡田
昭和20年代～昭和30年代		渡辺商店、平田商店
〃 20年代～現在		清水商店、国鉄千代田工事局、首都高速駐車場、資材置き場
〃 50年代～〃		ジャパンエキスプレス作業所、千代田硝子、徳世、三機工業倉庫、常磐橋食堂、大和水産、喫茶アロン、根本商店、東日写真植字、車庫、栄養食、清和会、鈴ヤ、東京ガス詰所、斉藤、松沢、常磐橋ガレージ、常磐橋ガレージサービス工場、タイプ印書、弘済被服、満月そば、明治牛乳
④高架商店街		この間省略
昭和32ころ		交栄印刷、東鉄工業、弘電社、駐車場、常磐橋ガレージ、弘済被服
〃 40年代以降		日立常磐橋別館
平成3ころ		日本ビル別館
⑦日本ビル別館		常磐橋換気所
昭和47－2～現在		首都高速工事事務所、前田建設
〃 49ころ～〃 50ころ		常磐橋公園、常磐橋御門跡、渋沢栄一像
史跡		
資料図1－2、3	（大手町2丁目③ NTT大手町ビル、タイムライフビル）	
慶長ころ～寛永6－9	青山満千世成次	千石　小姓
〃 寛永6年～〃 18－8	中川伊勢守忠勝	3千石　山田奉行ほか
〃 18年～明暦ころ	〃 半左衛門光重	小姓組
	〃 重勝	2千6百石　小姓番士
	小笠原左近大夫邸に囲込み（以下資料図－1参照）	
資料図1－4	（大手町2丁目③ 東京国際郵便局、JRガード周辺）	
慶長はじめ～慶長15－6	伊奈備前守忠次	小室1万石　天正18年～慶長15年代官頭
〃 15－6～元和4－3	〃 忠政	〃　慶長15年～元和4年関東郡代
元和4－3～〃 5－8	〃 忠勝	〃　元和4～5年〃
〃 ～明暦3－6	〃 忠隆	1千2百石　元和5年無嗣廃絶
明暦3－6～寛文7－11	松平主殿頭忠房	福知山4万5千石　養子再興、関東郡代
寛文7－11～天和元－3	酒井河内守忠挙	守屋2万石　酒井前橋藩世子
天和元－3～〃 3－5	土井能登守利房	大野4万石　寛文4～天和元年老中
		元老中

天和3－6～延宝7－9　土井内記利知　大野4万石
延宝7－9～元禄2ころ　松平因幡守信興　不詳
元禄2ころ～〃 6－12　西郷越中守治員　東条1万石　中奥小姓
〃 6ころ～正徳ころ　柳沢出羽守邸に囲い込み
正徳はじめ～〃 3－2　松平下総守中屋敷
〃 3－2～〃 3－3　松平式部大輔預かり
正徳3－3松平下総守、松平式部大輔邸をあわせ拝領
〃 3－3～　松平大炊頭邸に囲い込み（以下資料図－1参照）

NTT大手町ビル周辺の江戸時代は讃岐17万石を領有した生駒一正からはじまった。一正の父親正は関が原の合戦で西軍につき、世子の一正が徳川方と親子が両軍に分かれた。戦後の慶長13年、一正はその妻子を人質として江戸に差出し、将軍家は満足して江戸屋敷を準備したという。1代とんだ高俊のときお家騒動が起こった。発端は江戸家老と国家老の対立だが、若年の藩主高俊の乱行が伝えられ、幕府決裁の結果、藩主は配流、前野派は切腹などの重い処断が課せられた。外様大名の典型的な改易劇ともいえた。生駒邸は寛永時代に小笠原小倉藩邸に変わった。小笠原忠真の母は徳川家康の孫娘で、大阪夏の陣で父と兄を失ったが、明石10万石当時、有名な宮本武蔵を迎えて城下の町割を行った。

NTT大手町ビル、タイムライフビルのはじめは青山成次であった。成次は飯田1万石成重の嫡男だが父が大久保長安事件に連座して廃絶。秀忠小姓の成次も父にしたがって蟄居した。大阪の陣で赦免され、父の旧領の一部千石をえた。東京国際郵便局、JRガード周辺のはじめ、伊奈忠次は家康に認められて関東郡代兼勘定奉行に就任して地方行政の基礎を築いた。3代忠勝のとき無嗣廃絶となったが、のちに養子忠隆が1千2百石で再興した。つぎの松平忠房は18松平の1つ深溝家で、福知山の前城主稲葉紀通廃絶後の混乱を治めて善政をしいた。寛文7年からの酒井忠挙は大老忠清の嫡子。部屋住みながら2万石をえて老中首座にすすんだが、5代将軍綱吉の就任で父とともに失脚。西郷治員は上田1万石で5代綱吉の奥小姓となるが勤務態度不良で改易された。

正徳3年、奥平山形、柳沢甲府新田藩邸をあわせて御家門の松平越前家福井25万石上屋敷になった。福井藩は徳川家康の2男秀康が藩祖で、3代忠昌と4代光通を大手町1丁目の項で紹介した。その後藩邸は霊岸島屋敷を上屋敷と呼び変えたが、この年旧邸近くの常磐橋門内に復帰した。正徳5年、延宝4年などに添地拝領、敷地は1万2千坪あった。大手町には吉邦からの10代が住んだ。7代のとき血統がたえ、御3卿や将軍家からの養子がつづいた。幕末の英傑として知られる慶永（春嶽）も徳川田安斉まさの8男。当時藩政は累損90万両という破局的状況にあった。慶永は藩政改革に乗りだす一方、黒船来航以来激動する幕府政治にも深くかかわった。橋本左内らを用いた幕政改革は井伊直弼にはばまれていったん失脚するが直弼の横死後、政事総裁職として幕閣に復帰した。最後の藩主茂昭は支藩松平糸魚川藩の長男で、安政5年慶永の隠居後、幕命により福井藩を相続、長州征伐で副総督を勤めた。

廃藩置県が行われた明治4年、松平福井藩邸は府県事務所とされた。地方行政の連絡事務所といったところであったが軌道にのることなく廃止。8年からは大手町1丁目で紹介した大蔵省印刷局の一部に組込まれた。関東大震災で焼失。敷地は大幅縮小されて、通信省となった。通信省は駅逓と通信を統括した中央官庁だが京橋の本庁舎を関東大震災で焼失、東京中央郵便局のバラック庁舎同居をへて、仮庁舎を完成させた。戦時下の昭和18年、行政改革のため解体して運輸通信省とし、戦後の24年連合軍総司令部の意向をうけて郵政省と電気通信省に分割した。大手町の通信省用地の大半はこのとき電信電話関連企業に払下げられ、NTT関連企業の基盤となった。通信総合ビルの通信総合博物館は、明治35年通信省構内に開設された郵便博物館の後身で、昭和39年に郵政省、NTT、KDDなどが共同で建築した。1階から3階までが展示場で通信文化の啓発普及を目的にしている。

外濠とNTT大手町ビルに囲まれた細長いビル、タイムライフビルは印刷局の戦災跡地で、戦後、日本セメント、アサノセメント、アサノスレートの作業所をへて大林組が資材置場などにしていた。昭和43年、三菱地所が2千平方メートルを買収して賃貸ビルを着工したところ、アメリカの大手出版社・タイムライフ社から大口申込みがありビル名となった。ビルは45年7月完成。地下2階、地上15階、延べ床面積は2万6千平方メートルであった。日本ビルヂング別館は旧日立常磐橋館の後身で、47年2月に完成した地下3階地上13階の三菱地所賃貸ビル。延べ面積が1万4千平方メートル。イタリア商業銀行などが入居している。

資料図－5　（大手町2丁目①、②、⑤、⑥、旧同町④、⑥、⑧、旧銭瓶町①、②　アーバンネット大手町ビル）
慶長ころ～慶長12－9　松平出羽守忠政　横須賀6万石
〃 12－9～元和元－12　〃 式部大輔忠次　榊原館林家を継承絶家
元和ころ～寛永9－8　井伊掃部頭直孝　彦根30万石　のちに元老（大老）
寛永9－7～11－9　松平周防守康映　岸和田5万石
〃 11－9～延宝3閏4　土屋民部少輔利直　久留里2万1千石
延宝3－6～7－8　〃 伊予守頼直　延宝7年狂気廃絶
〃 7－9～貞享元－3　松平美作守乗政　小幡2万石
貞享元－3～2年　堀田対馬守正英　北条1万3千石　もと若年寄
〃 2－6～元禄2－4　松平伊賀守忠周　上田5万8千石　貞享2年若年寄
元禄2ころ～〃 7－1　黒田伊勢守長清　直方5万石
〃 7－1～8－5　明屋敷
〃 8－5～12－9　稲垣対馬守重富　烏山2万5千石
元禄11－10中津三左衛門邸を添地拝領

元禄12－9～元禄14－10	米倉主計頭昌明	皆川1万2千石
〃 14－10～宝永2－4	内藤丹波守政森	安中2万石
宝永2－4～享保17－8	黒田豊前守直邦	下館1万5千石
享保17－8～延享2閏12	三浦志摩守義理	刈谷2万石
延享2閏12～宝暦4－3	土岐伊予守頼おき	沼田3万5千石
宝暦4－3～〃 10－4	大岡出雲守忠光	岩槻2万石
〃 10－4～天明2－3	兵庫頭忠喜	宝暦4～10年若年寄、側用人
天明2－3～〃 6－9	式部少輔忠要	〃
〃 6閏10～寛政9－3	丹後守忠烈	〃
寛政9－3～文化元－1	主膳正忠正	〃
文化元－1～〃 3－5		前老中、のちに老中
〃 3－5～天保12－6	松平伊豆守信明	前老中
天保12－6～文久2－3	戸田采女正氏庸	前老中、のちに老中
文久2－3～〃 2－4	太田備中守資始	文久2年～元治元年老中
〃 2－4～〃 2年	板倉伊賀守勝静	前老中
〃 2年～〃 3－7	安藤対馬守信正	文久2～3年老中
〃 3－7～元治元－7	小笠原図書頭長行	〃
元治元－7～慶応元－11	唐津藩嗣子名代	3年若年寄
慶応2－2～〃 3年	有馬遠江守道純	元治元年～慶応2年老中
〃 3－11～〃 4年	松前伊豆守崇広	慶応元～3年老中
明治はじめ～明治20ころ	井上河内守正直	元～4年老中
〃 15－12～〃 24ころ	板倉伊賀守勝静	〃
	武庫、武庫司、武庫司添役、陸軍省倉庫	別資料 貨幣司
	会計監査院	明治40年ころ高架工事、42年道三濠埋立て工事のため区画再編
①丸の内野村ビル	道三濠埋立地（住所表示永楽町）	
明治42ころ～44－5	常磐病院（のちの東京鉄道病院）	
〃 44－5～大正はじめ	日清生命建築用地	
大正はじめ～昭和7年	日清生命	
昭和7－10～〃 20ころ	野村ビル、平成3－3丸の内野村ビル（大和銀行東京本部）	
〃 20年代～現在	丸の内野村3号館（松村石油東京支店）	
①東京大和銀行ビル	日清生命	
大正6－11～昭和7ころ	保険局分室（戦災焼失）	
昭和16ころ～20年代	明地	
〃 〃 30年代	石原産業東京支社、矢島建設、渡辺高木事務所、駐車場	
〃 48－12～現在	東京大和銀行ビル（大和銀行東京信託部）	
①丸の内野村3号館	丸の内野村3号館（松村石油東京支店）	
昭和4年～〃		
②新大手町ビル		
明治～大正11－5	明地	
大正11－5～昭和20－9	朝鮮銀行	
昭和20－9～〃 22ころ	進駐軍接収	
昭和22－6～昭和30－1	ファーストナショナルシティ・バンクオブニューヨーク	
〃 33－12～現在	新大手町ビル（石川島播磨重工業、さくら銀行大手町支店、東海銀行東京支店、シティバンクNA）昭和34－2第2期工事、38－5増築	
②NTT関連ビル	東京電話交換局、36－4東京中央電話局、36－12東京郵便局電話課、43－4東京中央電話局 昭和21－1～27－10一部を進駐軍接収	
明治26年～昭和30ころ	東京市外電話局	
大正12年～〃 64ころ	東京国際電話局、丸の内電話局、第2丸の内電話局	
〃 23ころ～〃 64ころ	梁瀬自動車仮組立工場（電話局の敷地一部借用か）	
〃 7年～大正11－12	東京中央電信局、東京中央電報局、丸の内電報局	
〃 15－9～昭和45ころ	丸の内電気通信管理所、東京電報局電信通信所	
昭和20年代～〃 40ころ	東京データ通信局、NTTデータ大手町ビル（NTTデータ通信、電気通信科学財団、日産レンタカー、NTT東京千代田支社）	
〃 64ころ～〃	NTT東京丸の内中央支店丸の内設備センター	
平成2－6～〃	アーバンネット大手町（東京テレコムセンター）	
⑥朝日東海ビル、新日鉄ビル	高田商会	
大正7ころ～大正12ころ	東洋生命本館	
昭和はじめ～昭和10年	帝国生命大手町分館	帝国生命に包括移転
〃 10年～〃 12－3	日本曹達本社	戦災焼失
〃 12－3～〃 20－2	帝国生命大手町分館	
〃 20－2～〃 22年	朝日生命大手町分館	
〃 22年～〃 45ころ	朝日生命大手町分館、朝日生命麹町支社	
30年代	小ビル、阿部、倉庫、山口、呉服橋巡査派出所	
46－7～現在	朝日東海ビル（朝日生命保険相互、東海銀行東京営業部）	
〃 45－2～〃	新日鉄ビル（新日本製鉄）	
⑥大和証券ビル	藤本ブローカー証券、17－7藤本証券	
昭和10－10～昭和18－10	大和証券、別館	
〃 18－10～30ころ	大和証券ビル（本店）昭和45－3、46－1増築	
〃 31－11～現在	鉄道省線路敷高架、国鉄線路敷高架、JR線路敷高架	
⑤JR線路敷高架敷	中央郵便局小包課分室	
明治40年～現在	鉄道院中央教習所宿舎	
大正元ころ	東洋商事、日本交通営業所、丸平、猪塚、上原、大西商店、北見、寺尾、東洋広告、東京都血液銀行輸血部、丸徳商店、大洋興業、高野、三球、緒方、長島、ときわ屋、竹内、東京地下街	
明治43－1～大正6－7	佐志田倉庫、電気通信協会、電気通信共済会印刷部、弥生産業、	
大正3－9～〃 7年	共立信号、鉄道機材燃処理、四万興業、双葉鉄道工業、三久メリヤス、大丸産業、林組、大手町商事、日本鉄道車両、工事協	
昭和20年代～昭和30年代		
⑤JR線路敷高架下商店街		
昭和30ころ		

平成はじめ

⑥日本ビル
大正はじめ～大正11年
〃　11年～昭和40－11
昭和6－3～〃　40－11
〃　23－3～〃　35年
〃　37－7～〃　40－11
〃　40－11～現在

会、丸嘉組、北谷、新生電業倉庫、創美工業ほか
この間省略
大皆栄、章月、電気通信棚包、復建エンジニアリング、国際写真、日本通運、大手町センター、倉庫、フタバホール、双葉鉄道工業、四方荘、木村屋、大丸、倉庫、日本国民食、斉藤商店、大丸産業、倉庫、新生電業、中松商会、藤田工務店、倉庫、大手町、キャビンほか

銭瓶町ポンプ場用地
下水課呉服橋出張所、13－4同第1工営部、昭和5－5同呉服橋出張所、東京都下水道局銭瓶町庁舎
呉服橋出張所銭瓶町ポンプ場、13－8芝浦汚水処理場銭瓶町ポンプ場、東京都下水道局銭瓶町ポンプ所
梁瀬自動車本店、組立工場、修理工場　6－1から本店
ヤナセ社史ではのちの山叶証券
三越呉服店別館、仕入部、三越大手町別館
三菱倉庫
機械工業会館
世界経済館
興農会館（農林中央金庫）　26－9農協ビル、全販連増築、日本ビルと改称
第3大手町ビル
日本ビル（三越大手町別館、静岡銀行東京支店、東京都下水道局銭瓶町庁舎、同銭瓶町ポンプ所、日立製作所、日本水産、興和石油）昭和43－8増築

資料図1－6　（大手町2丁目②、旧同町④、旧銭瓶町①　NTTデータビル）

天正ころ～慶長8－8　松平因幡守康元　関宿4万石
慶長8－8～寛永元－5　〃　甲斐守忠良　大垣5万石
寛永元－6～正保4－8　五郎憲良　小諸4万5千石　正保4年無嗣廃絶
慶安元閏1～貞享2－10　佐渡守康尚　長島1万石　慶安元年再興
貞享2－10～元禄元ころ　〃　忠充　3百俵
元禄はじめ～5－11～11　中島助六郎資将　（前出）
〃　5－11～10　長谷川玄蕃某　不詳
〃　元ころ～〃　元－11　斉藤飛騨守三政　6千石
〃　元－11～3－10　松平安房守信孝　将軍綱吉小姓　小島1万石
〃　3－12～〃　15－4　下野守信治　元禄2～3年若年寄
元禄11年大火後の割り替えで屋敷内の一部を上げ、長谷川玄蕃、前田与左衛門邸を拝領。別資料　元禄8年ころ拝領
〃　15－4～宝永ころ　柳沢美濃守中屋敷
宝永ころ～正徳4－9　井上河内守中屋敷
正徳4－9～享保2－2　阿部豊後守中屋敷
享保2－2～〃　8－3　増山対馬守正任　長島2万石
〃　8－3～〃　20－5　享保2－2阿部豊後守邸、黒田豊前守邸の一部を拝領
松平能登守乗賢　岩村2万石

享保20－6～延享2－9　松平因幡守康元　久留里3万石
延享2－9～〃　5－7　堀　飛騨守直喜　椎谷1万石
〃　5－7～宝暦10－12　小堀備中守政峯　小室1万石
宝暦11－2～安永6－4　和泉守政方
安永6－4～天明3－2　〃　米倉丹波守昌晴　六浦1万2千石
天明3－2～〃　7－3　水野壱岐守忠韶　北条1万2千石
〃　7－3～〃　7－7　横田筑後守準松　9千5百石
〃　7－7～文化14－11　久世大和守広誉　関宿5万石
文化14－11～天保元－8　〃　長門守広運
天保元－10～〃　14－11　〃　大和守広周
〃　14－11～安政5－7　文化3－6割り替え　鯖江5万石
安政5－7～〃　6－8　間部下総守詮勝　〃
〃　6－9～慶応2－2　太田掛川藩添屋敷
慶応2－2～明治はじめ　植村駿河守家保　高取2万石
明治はじめ～　松平縫殿助乗謨　田野口1万6千石　慶応2～4年老中、陸軍総裁

武庫（以下資料図1－5参照）

享保7－2今大路道三郎一部預かり、のち拝領
黒田大和守直純　のちに老中
享保19年～宝暦10年伏見奉行、西の丸若年寄、若年寄
安永6年～天明5年若年寄

資料図1－7　（大手町2丁目⑤　JRガード）

慶長ころ～寛永9－9　牧野内匠頭信成　7千石
寛永8－10～〃　17－1　加賀爪民部少輔忠隆　5千5百石　北町奉行所
〃　16－7～慶安3－7　朝倉岩見守在重　2千石
慶安3－7～万治2－1　石谷左近将監貞清　1千5百石
万治2－1～寛文7閏2　村越長門守吉勝　1千7百石
寛文7閏2～延宝9－3　島田出雲守忠政　2千石
延宝9－3～元禄6－12　北条安房守氏平　1千5百石
元禄6－12～〃　11－12　川口摂津守宗恒　2千7百石
〃　11－12～宝永元－10　元禄11－10割り替えで松平下野守邸の一部を添地拝領　4千5百石
宝永元－10～〃　4－5　保田越前守宗易　北町奉行所
〃　4－5～〃　7－2　松野河内守助義　1千5百石
〃　7－2～享保2－2　本多伊予守忠統　近江国内1万石
享保2－2～〃　8－6　牧野兵庫頭忠列　6千石　のちに峰山牧野家立藩
〃　8－6～〃　16－9　中山出雲守時春　1千5百石　中町奉行所、北町奉行所
〃　16－9～元文3－2　享保8－6足高の制により町奉行は3千石高となる　1千石
元文3－2～延享元－6　諏訪美濃守頼篤　北町奉行所
延享元－6～宝暦3－4　稲生下野守政武　1千5百石
宝暦3－4～明和6－8　石河土佐守政朝　2千7百石
明和6－8～天明7－6　能勢肥後守頼一　6百石
天明7－6～〃　7－9　依田和泉守政次　5百石
〃　〃　曲淵甲斐守景漸　1千6百石
〃　〃　石河土佐守政武　2千7百石

天明7－9～天明8－9	柳生主膳正久通	6百石	北町奉行所
〃 8－9～寛政3－12	初鹿野河内守信与	1千2百石	〃
寛政4－1～文化3－4	小田切土佐守直年	3千石	〃
文化3－4～文政12－12	巨勢日向守利和	5千石	側衆
文政12－12～天保14－3	松平福井藩中屋敷		
〃 14－5～〃 14－6	久世大和守預かり		
天保14－6～嘉永元ころ	松平筑後守正名		側衆
嘉永元ころ～〃 4年	松平主計某	不詳	
嘉永4年～嘉永6ころ	夏目左近将監信明	5千石高	西の丸付き側衆
〃 6ころ～〃 6－10	〃 近江守某	〃	中奥小姓
〃 6－10～文久2ころ	薬師寺筑前守元真	5千石高	側衆
文久2年～〃 2年	安藤対馬守信正	磐城平5万石	前老中
〃 2ころ～〃 2－9	酒井右京亮忠ます	敦賀1万石	前若年寄
〃 2－9～〃 3－4	松平越前守添屋敷		
〃 3－4～〃 3－6	遠山美濃守友禄	苗木1万石	前、のち若年寄
文久3－7～〃 3ころ	一色山城守直温		勘定奉行
元治元年～元治元年	根岸肥前守衛奮。		〃
〃 元年～慶応元年	土屋豊前守正直		
慶応元年～〃 4ころ	勘定奉行所		
〃 4ころ～〃 4年	陸軍所		
明治はじめ～	武庫（以下資料図－5参照）		

資料図－8（大手町2丁目②　新大手町ビル）

天正ころ～寛永5年	町屋	2百50石	狩野派絵師
明暦ころ	狩野法眼探幽		
寛文10－1～元禄9－8	水野岡崎藩下屋敷		
元禄9－8～〃 11年	荒川土佐守重好	1千石	小姓
明暦ころ～〃 11年	坂井珍安、了庵	不詳	医師
延宝ころ～〃 11年	佐田玉仙道ひろ	3百俵	針医師
寛文ころ～〃	竹田道安信広	2百俵＋10人ぶち	総医師
〃～〃	伊阿弥角之丞某	不詳	畳師
〃～延宝7ころ	山本道匂某	3百俵	庭師
〃	土屋民部少輔下屋敷		
不詳	島田出雲守利木	1千石＋1千俵	長崎奉行、町奉行
〃～貞享はじめ	江藤良元瑞哲	百俵	医師
貞享ころ～〃 2－3	金保安斉某	不詳	
〃 2－3～元禄はじめ	住吉具慶某	不詳	
元禄はじめ～〃 6－4	昌津又三郎某	不詳	
〃 6－4～〃	松本全甫某	百俵＋10口	奥医師
〃 はじめ～〃 6－4	渡辺善三郎某	不詳	
〃 6－4～〃 10－4	堀本一甫重あき	2百俵	医師
〃 10－4～	萩生法眼景明	2百俵	奥医師
〃 11－9～元文2閏11	今大路式部大輔親顕	1千2百石	典薬方
元文2－12～享保7－2	〃 民部大輔元勲	〃	〃
享保7－2～享保7－7	増山対馬守預かり	一部は松平能登守邸添地	
〃 7－7～宝暦4－3	松平下総守添屋敷		
宝暦4－3～文化元－2	大岡出雲守添屋敷		
文化元－2～	松平伊豆守囲込み（以下資料図－5参照）		

大手町2丁目の旧常磐橋門内南側、丸の内電話局一画の慶長期は松平大須賀忠政邸からスタートしている。大須賀家は譜代の武将で、関が原の合戦後、横須賀5万石をえて松平姓をうけた。次の忠次のとき、父の生家榊原館林家に嗣子がなく、名跡を惜しんだ家康の命令で榊原家に復帰したので大須賀家は除封となった。元和年間に徳川譜代筆頭の彦根藩井伊直孝邸になった。直孝の父直政はつねに先陣の名誉を受けた徳川4天王のひとりだが、関が原の合戦での戦傷の後遺症で亡くなり、嫡子直勝も病弱で別家を立てたので弟の直孝が相続、3代将軍家光時代の寛永10年に元老（大老）に迎えられた。当時の幕閣は新参譜代中心で構成されていたので、門閥譜代の代表としていつでも将軍に意見をいえる立場となった。

寛永9年から次々に新藩主を迎えることになる。土屋頼直が失神して倒れたとき、お目見の年令に達していた実子の申請がなかったとして改易。堀田正英も若年寄にすすんだが、相続遺書のミスをとがめられて同じく改易となった。短期間の居住がめだったが、黒田下館家は28年、三浦家は13年、土岐家は9年間つづいた。

江戸中期に9代将軍家重の側用人大岡忠光邸となった。宝暦4年から50年間が大岡岩槻2万石上屋敷で次の忠喜との2代。当初常磐橋屋敷3千5百坪と隣接する道三橋添屋敷千2百坪を別々に賜邸され、のちに1つにした。忠光の生家は代々3百石の少身だが、将軍世子家重の小姓となって出世街道を歩むことになる。家重が将軍位を継承すると、側用人に任ぜられ2万石となった。家重は病弱のうえ言語障害がはげしく忠光だけが理解できたので唯一の窓口となった。忠光は表政治に出ることなく老中に協力して幕政を助けた。宝暦10年没。忠光を失った家重は将軍職を世子家治にゆずって大御所となった。

大岡邸は幕閣中枢を占めた大名たちの引退と再起の地になっていく。松平信明は側用人、老中を退任したが、2年後再び老中に復帰して辰の口の老中屋敷に戻った。天保12年からの12年間は元老中の太田資始邸で、水野忠邦の天保の改革に反対して徳川斉昭と忠邦の失脚を企てるが失敗。忠邦の失脚後、久世広周らの説得で幕閣に復帰したが、今度は井伊直弼と対立して1年後に罷免。のちにまたまた老中に復帰した。

幕末風雲急をつげるころ、変遷は一段と激しくなった。文久2年には安藤信正、小笠原長行、有馬道純と3人替わり、元治元年松前崇広、慶応2年井上正直邸のとき明治維新となった。安藤信正は井伊直弼没後の幕閣リーダー。公武合体のため皇女和宮の14代将軍家茂降嫁をはたし、外交担当老中として活躍するが、江戸城坂下門で水戸浪士に襲われ辞任。

小笠原長行は文久2年、慶応元年、2年と3たび老中となった。唐津6万石の世子で、明治戊辰の戦いのとき会津と五稜郭で政府軍に抵抗した。有馬道純は文久3年の若年寄で、松前崇広と井上正直は慶応時代の老中。幕閣は激しく変遷したが、歴史の波に抗するすべもなかった。

NTTデータ通信初代の松平久松家は家康の母大の再嫁先で、藩祖康元は家康の異父弟になる。大手町邸はその康元の天正年間拝領ともいう。康元、忠良と関宿4万石、大垣5万石に栄進したが、次の憲良のとき嗣子なく除封、弟康尚が長島1万石をもって再興された。元禄時代の松平滝脇家は家康第5祖の弟が代々松平家に近侍したことにはじまる。信孝は若年寄にすすみ、信次が小島1万石をえて諸侯に列した。松平乗賢は8代将軍吉宗享保の改革から9代家重期の幕閣。享保9年に将軍世子家重に近侍して老中に抜擢された。

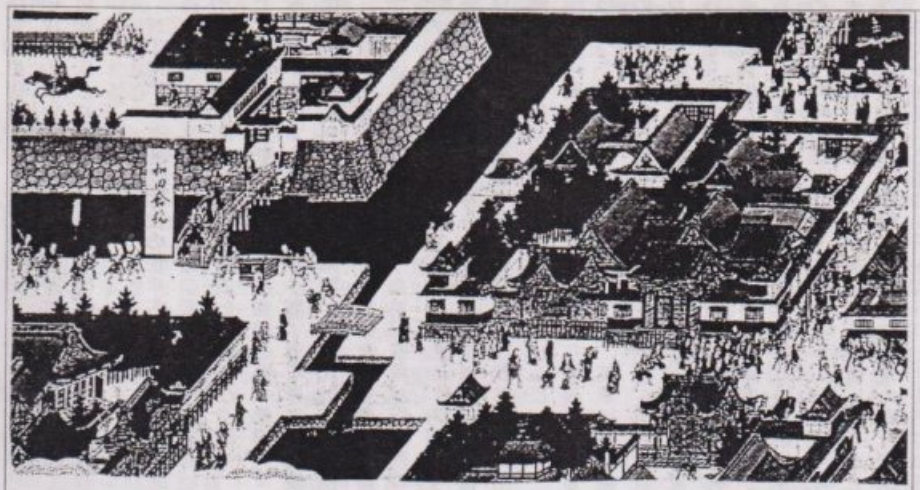
寛政から天保にわたる50年間は久世関宿藩3代の上屋敷となった。広周は幕末期の老中で安藤信正と主導権をにぎったが、安藤が坂下門の変で狙撃されると老中の座から失脚。次の間部詮勝も安政の大獄を推進するが、方針変更で隠居謹慎が命ぜられた。松平乗謨は慶応元年、若年寄に再任し、陸軍御用掛、外国取扱を担当して老中にすすんだ。この年、14代将軍家茂が大阪で急逝し、乗謨は葬儀のため出向、常駐して朝廷との折衝にあたった。慶応4年退役。朝廷に勤皇誓詞を提出した。

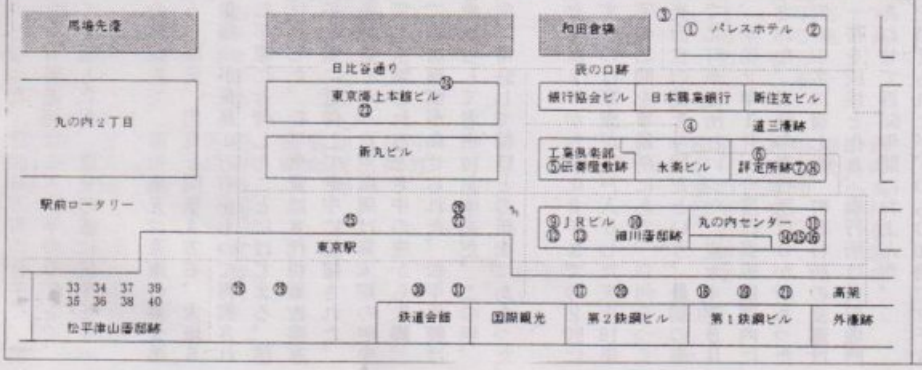
この一画の江戸時代は寛永9年から宝永4年までと享保2年から文化3年までの2回にわたって町奉行所がおかれた。江戸に町奉行が登場するのは家康が江戸入りした天正18年のことで、初代は板倉勝重と彦坂小刑部。当初は自宅の広間を事務所にあて、白州をつくった。町奉行所の形態がととのうのは、3代将軍家光治世の寛永年間だという。最初の奉行所を丸の内1丁目の南町奉行所と銭亀橋をはさんで北町奉行所といった。宝永4年5月、火災焼失のため数寄屋橋門前へ移転を命ぜられたが、享保2年1月、今度は呉服橋門内にあった北町奉行所が焼失したので再びこの地が指定された。当時の奉行所は3か所あったので、一時中町奉行所ともよばれたが、ほどなく北町の旧名に復した。町奉行所の変遷は火事との戦いでもあった。文化3年3月、またまた一帯を灰燼と化し、奉行所は呉服橋門内、丸の内1丁目に移転された。この地の奉行所はあわせて百65年間におよんだ。

初代の加賀爪忠隆は5千5百石のとき江戸町奉行を命ぜられたが、のちの加増で9千5百石までのぼした。大目付のとき長崎に派遣され、漂着異国人を断罪してキリスト教徒を迫害した。4代石谷貞清のとき天下を騒乱の渦にまきこむ大陰謀とさわがれた慶安の変が起こった。石谷の就任1か月後のことで、訴人によって企てを知った石谷が丸橋忠弥宅に乗込み一味30名をお縄にした。依田政次時代に江戸城火攻め法を論じて死刑となった山県大弐事件が起こり、田沼景漸のとき若年寄・田沼意知が刺殺された。小田切直年の18年間に鬼あざみ清吉をお縄とし、市中引き回しのうえ獄門、ハリツケとした。

文化以降、将軍に近侍した側衆など旗本高官をへて、文久2年の一時期、安藤磐城平藩上屋敷になった。この年1月、藩主の安藤信正が坂下門外で襲撃されて負傷し、傷いえたあと、島津久光らの進言で老中を罷免された。酒井敦賀藩邸、遠山苗木藩邸をへた勘定奉行所で明治維新を迎えている。酒井家は小藩ながら代々幕府要職についている。忠ますも幕末期3度にわたって若年寄をつとめ、元治元年にはイギリス、アメリカ、フランス、オランダ各国と下関条約の締結をすすめた。遠山友禄も2度若年寄をつとめたが大手町邸はその狭間期。末期は勘定奉行所になった。勘定奉行は定員が3～4名で3千石高。1年交代で勘定方と公事方を分担したといい、ここでは訴訟を担当する公事方が執務した。慶応最後のころ陸軍所がおかれたという資料もあるがはっきりしない。

第9話　丸の内1丁目ものがたり





江戸時代、現在の大手町と丸の内町境あたりに、江戸町発祥の地ともいえた道三濠があった。道三濠は桔梗濠下の東京銀行協会ビルを起点に、日本興業銀行から大きく大手町側に折れ、永代通り、新大手町ビル、日本橋川をへて新日鉄ビルと常磐橋小公園の所で外濠と合流していた。天正18年、徳川家康江戸入府直後の開せんで、この濠の両側に諸国から商人が集まって店を構え、材木町、船町、柳町、四日市町などが生まれた。

江戸城下建設のために集められた木材は江戸湊から日本橋川をさかのぼって材木町に集められ、船町は回船問屋の町、市場には周辺の村人たちが生活物資を運びこんだ。やがて工事作業者めあての遊女屋が20軒ほどならび、江戸最初の銭湯も誕生した。しかし、江戸が覇都としてのにぎわいをみせると周辺は城内に組込まれ、寛永5年に転出を命じられた。道三濠の名は幕府医師今大路道三邸に由来した。東京銀行協会ビルの地に江戸時代、内濠からの濠水を道三濠におとす辰の口があった。慶長16年に伊達政宗が建造。落口が辰に似たとも江戸城の辰の方向ともいう。四六時中大きな水音がながれ、「朝々は鴨のきている辰の口」などの句が当時ののどかさを伝えている。

丸の内1丁目の江戸はじめは家康の6男で高田75万石松平忠輝、越前家の嫡流福井50万石松平忠昌、久留米21万石有馬豊氏、小倉30万石細川忠興、姫路52万石池田輝政などが邸地を賜り、のちに老中、若年寄役宅、忠臣蔵ゆかりの伝奏屋敷、最高裁判所にあたる評定所、遠山の金さんが活躍した北町奉行所などがおかれた。

1丁目は丸の内郭のほぼ北半分にあたり、外濠に呉服橋門、西の丸との間に和田蔵門、道三濠を道三橋と銭瓶橋がわたっていた。呉服橋は慶長8年ころの橋で橋名は門外の呉服町に由来した。寛永6年東北諸大名が門と石垣をきずき、16年に細川忠利が枡形を作った。門近くは外濠がくびれせばまった木橋を渡って高麗門をくぐると枡型にすすみ、直進して渡橋に出た。内側に大番所がひかえ2万石クラスの外様大名が交代で警備にあたったが、維新後の明治6年10月門を撤去した。丸の内野村ビルの地に道三濠をわたる道三橋があった。長さ10メートルほどの木橋だが、枡型もなく24時間通行自由であった。橋際にあった今大路道三が徳川家康に呼ばれて遅刻したとき、濠を遠回りしたことをいいわけにしたので、以後遅刻のないように橋をかけさせたという。

資料図1、2（丸の内1丁目①　パレスホテル）

慶長ころ～元和9年	青山伯耆守忠俊	岩槻4万5千石　慶長～元和9年老中
寛永ころ	寛永ころ酒井山城守、青山大蔵少輔邸に2分	元和9年勘気廃絶
〃	酒井山城守重澄	大手門前広場になる
〃	青山大蔵少輔幸成	寛永5～20年老中
13－1～明暦3－3	安藤右京進重長	高崎5万6千石

明暦3－3大火後の割り替えで敷地一部移動、大半が空き地となる（以下資料図－3参照）

万治3－5～明治はじめ　畳蔵（〃　〃）

資料図－2　（丸の内1丁目①、旧大手町1丁目①　NK本社ビル、AUビル）

慶長～元和2年　松平上総介忠輝　高田75万石

元和2年～〃5年　明屋敷　将軍家康6男

〃5年～正保2－8　松平伊予守忠昌　元和2年不行跡廃絶　福井50万石

正保2－10～明暦3－3　〃越前守光通　〃45万石

明暦3－3　明暦3－3割り替えで安藤右京進、酒井摂津守邸に2分

〃　安藤対馬守重博　高崎5万6千石

寛文元－2～〃6年　万治2－7旧邸跡地の一部を添地拝領

〃6年～延宝元－5　本多内記政勝　姫路15万石

延宝元－7～天和元－2　板倉内膳正重矩　烏山5万石　寛文5年～延宝元年老中、京都所司代

〃　重種　〃　延宝5年～天和元年寺社奉行、西の丸老中

天和元－2～貞享3－7　松平日向守信之　郡山9万石　貞享2～3年老中

貞享3－8～元禄元－8　〃忠之　古河8万石

元禄元－8～〃6－12　土屋相模守政直　土浦9万5千石

〃6－12～〃10ころ　酒井靭負佐忠ぞの　小浜12万3千石　〃4年～享保3年老中

〃10ころ～〃12閏9　松平越中守定重　桑名11万石

〃12閏9～宝永元－10　秋元但馬守喬知　谷村4万石　元禄12年～正徳4年老中

宝永元－10～正徳4－9　井上大和守正岑　笠間6万石　〃12年～享保7年若年寄、老中

別資料　元禄12－閏9拝領

正徳4－9～享保2－2　松平紀伊守信庸　篠山5万石　正徳4年～〃元年老中

享保2－2～寛保ころ　小笠原右近将監忠雄　小倉15万石

寛保ころ～宝暦10ころ　西尾隠岐守忠尚　横須賀3万石　宝暦元～10年老中

宝暦10ころ～〃12－1　鳥居伊賀守忠意　壬生3万石　〃10～11年若年寄

〃12－1～明和5－11　松平宮内少輔忠恒　小幡2万石　寛延元年～明和5年若年

明和5－11～寛政4－11　水野豊後守忠友　沼津5万石　明和5年～天明8年若年寄、側用人、老中

寛政4－11～〃6－7　鳥居丹波守忠意忠てる　壬生3万石　〃6年～寛政5年老中

〃6－9～〃8－12　水野出羽守忠友　沼津3万石　寛政8年～享和2年西の丸老中

享和2－9～〃12－1　松平能登守乗保　〃3万石　寛政10年～文化3年若年寄、西の丸側用人、老中

〃12－1～明和5－11　大和守忠成　岩村3万石　文化3年～天保5年若年寄

明和5－11～寛政4－11　水野出羽守忠成　沼津3万石

寛政4－11～天保5ころ～〃12－6　文政12－5堀田摂津守邸の一部を添地拝領　天保5～12年老中

〃6－9～〃8－12　太田備後守資始　掛川5万石

〃12－6～〃14－7　間部下総守詮勝　鯖江5万石　〃11～14年老中

〃14－7～弘化2－1　堀　大和守親密　飯田2万7千石　〃14年～弘化2年老中

弘化2－1～嘉永5－7　大岡主膳正忠固　岩槻2万石　〃7年～嘉永2年若年

嘉永5－7～安政2－9　森川出羽守俊民　生実1万石　嘉永5年～安政2年若年

安政2－10～文久元－7　遠藤但馬守胤統　三上1万石　天保12年～文久元年若年

文久元－7～〃3－2　遠山信濃守友祥　苗木1万石　元治元年～慶応3年若年

〃3－2～慶応4年　歩兵屯所　文久3－2遠山美濃守邸一部、3－4残り添地拝領

明治はじめ　3、4番屯所

〃2－8～明治5－4　軍務官分庁、兵部省糺問所、陸軍省糺問所

〃5年～しばらく　鎮台15番屯所

〃7年～明治9年　外国人居住地

〃9年～〃20年　近衛工兵中隊、鎮台工兵

〃20－4～昭和20年　東京憲兵本部、東京憲兵隊分隊

①パレスホテル

昭和12－12～昭和20年　帝産林野局

〃20年～〃22年　宮内庁病院　赤坂見附診療所戦災焼失のため移転

〃22－8～〃36年　進駐軍接収＝テイトホテル

〃36－9～現在　パレスビル（アイシーアイジャパン）

〃36－10～〃　パレスホテル

①AIUビル　明地

昭和20年代、30ころ　千代田ビル

〃40ころ～〃49－3～現在　朝日生命別館

AIUビル（ナショナルウェストミンスター銀行、カウンティナットウエスト証券、AIU保険）

①NKKビル　日本鋼管本社、49－6NKKビル（NKK本社）

昭和24－10～現在

資料図－3　（丸の内1丁目①先　桔梗濠沿い道路敷）

慶長ころ　木原七郎兵衛吉次　4百40石　普請方総奉行

内濠通りと永代通りの交わる旧江戸城大手門前の交差点をはさんで、大手町と丸の内にわかれている。江戸時代は東京銀行協会ビルから発した道三濠が曲折してこの濠の北側は大手門前、辰の口北沿などとよばれて、維新後も大手町に属したが、昭和4年4月の新町名制定で丸の内に組込まれた。門前のこの周辺は大手町1丁目で紹介した門前広場で江戸時代は諸大名の従者待合場でもあった。

丸の内の北西側馬場先濠と桔梗濠に面したパレスホテルの地は青山忠俊からはじまった。父忠成は家康の腹心で忠俊も岩槻4万石、3代将軍家光の老中もり役となったが、激しくいさめたことから家光の反感を買って改易。寛永図では忠俊邸跡地が2分されて青山幸成、酒井重澄と変わっている。幸成は忠俊の弟で家光の老中をつとめた。つづく安藤重長は2代将軍秀忠の側近重信の養子。家光の命を受けて徳川駿河忠長の自刃をみとどけた。明暦

大火後しばらくの空き地をへて、万治3年に畳蔵が造られ一部が腰掛けになった。作事奉行の属役畳奉行が江戸城の畳をここで管理した。

パレスホテルの東京駅寄りNKK本社ビルとAUUビルの地の慶長はじめに高田75万石の松平忠輝が賜邸された。忠輝は徳川家康の6男で母は茶阿の方、妻は伊達政宗の娘五郎八姫で越後少将とよばれた。大阪夏の陣のとき大和口に備えたが戦闘の機会を逸したうえ、帰途幕臣を切って勘当され、元和2年改易となった。当時、大手町、丸の内、外桜田につらなる大名屋敷はそれぞれに絢爛の美を競ったが中でも一際豪華さを誇ったのがこの忠輝邸であった。「とくに門の結構はあまねく沙汰された」と『当代記』が伝えている。跡地を松平忠昌が拝領した。忠昌は徳川家康の2男松平結城秀康の2男で、伯父忠輝の旧跡をついで高田25万石を領有したが、越前家2代をついだ兄の忠直が改易されるにおよんで福井50万石に復帰した。寛永ころの作とされる『江戸図屏風』によれば敷地いっぱいにめぐらせた白壁長屋の4隅に櫓をたて、正門と将軍のお成にそなえたお成門が並んだ。お成門は日暮門ともよばれ1日みていてもあきないほどの精密華麗な彫刻で飾られたという。

豪華絢爛を誇った松平光通邸は明暦3年の大火で焼失し、跡地は南北に2分された。東京駅側は安藤重博邸だが間もなく老中役宅にかわっていく。板倉重矩、重種父子は4代将軍家綱期の重臣。松平信之、土屋政直、秋元喬知は5代将軍綱吉期、松平信庸は6代家宣、7代家継期、西尾忠尚は9代家重期の老中をつとめた。つづく水野忠友は10代家重の小姓から側用人、老中にすすんだが、松平定信の寛政の改革で田沼派幕閣として退けられた。

水野忠成も11代将軍家斉の西の丸側用人をへて本丸老中にすすむ。間部詮勝は天保の改革をすすめた水野忠邦と衝突して老中を退いたが、井伊直弼大老期に勝手掛、外国掛老中として復帰した。当時の幕政は将軍継嗣、条約勅許など難局のさなかにあったが、一ツ橋派と尊攘派の弾圧に強権を発動した。若年寄遠藤胤統時代の万延元年3月に桜田門外の変がおこり、井伊の首級を保持した有村次郎左衛門がこの若年寄役宅に自首した。

風雲急をつげた文久3年2月、陸軍奉行配下の歩兵屯所になった。徳川家には旗本8万騎とうたわれた家臣団があったが、江戸末期になるとこれも時代遅れで、幕府は急遽外国式軍隊の編成に迫られた。文久2年暮れ、陸軍奉行を新設して大関増裕を初代に任じ、翌年、酒井雅楽頭添屋敷となっていた日本鋼管とAUUビルの地などに歩兵屯所を作った。慶応元年、時の陸軍奉行小栗忠順がフランス兵式によって歩兵隊、騎兵隊、砲兵隊を新設。慶応4年鳥羽伏見の戦いに敗れた15代将軍慶喜が江戸に逃れたとき、小栗と最後の歩兵奉行大鳥圭介、海軍総裁榎本武揚らが主戦論を展開したが陸軍歩兵の出番はなかった。

明治維新後は官軍屯所をへて兵部省糺問所となった。軍規をただす裁判所で、明治5年の陸軍裁判所設置までつづいた。明治の前半は工兵隊兵営で、20年からは憲兵隊本部がおかれた。憲兵は陸軍内の犯罪と思想、防諜などを目的とした軍事警察であったが、日比谷焼打ち事件、米騒動の鎮圧、戦時下の植民地政策など、時代とともにその権限を拡張して、国民生活に深く干渉した。

明治後期の市区改正工事で4分された昭和12年、皇居付属の帝産林野局となった。帝産林野局はご料局の後身で皇室の財産を管理した。この年4階ビルを建設して事務所を移したが、戦争が一段と厳しさを増した昭和20年、赤坂見附に避難していた宮内庁病院が焼失したので、いったんここを仮診療所とした。戦後の昭和22年今度は占領軍の命令で軍用ホテル確保のため、再び模様替えされて国営のホテルテイトが誕生した。2年後民営化、外国人に混じって日本人の宿泊も認められたが、一般人には夢の存在だった。昭和35年株式会社パレスホテルが設立され、翌年10階ビルに装いを一新したホテルとパレスビルが誕生した。日本鋼管は明治4年創業のわが国第2位の鉄鋼メーカー。昭和24年、いったん中央区においた本社を丸の内に移転。30年代の1時期、道路1本をはさんだ大手町1丁目の貿易会館地としたこともあったが、49年に18階建ての現ビルを竣工して復帰した。

資料図1-4　（丸の内1丁目③、旧同町③、旧道三町①、旧永楽町⑤～⑦　銀行倶楽部。新住友ビル、日本興業銀行本店）
慶長ころ～明治40ころ　辰の口および周辺道路敷

資料図1-5　（丸の内1丁目④、旧同町③、旧道三町①、旧永楽町⑤～⑦　日本工業倶楽部、永楽ビル、新永楽日本製紙ビル）
慶長ころ　有馬玄蕃頭豊氏　久留米21万石
寛永ころ　竹中采女正重義　府内2万石　寛永11年不行跡廃絶
正保ころ　別資料　寛永13-3鳥森光長、のちの伝奏屋敷を拝領
寛永11年～慶応4年　松平土佐守某
〃　12-1～明暦3-3　伝奏屋敷
慶応4-2～慶応4-2　評定所
明治元-10～明治2-8　幕府公議所
〃　3年～〃　5-9　会計官駅逓司
〃　5-9～〃　7年　大蔵省分析所
〃　9-8～〃　9-8　太政官印書局
〃　9-9～〃　10年代　内国勧業博覧会事務局　別資料明治5年伝奏屋敷跡に博物館
〃　11-11～〃　20-5　紙幣寮用地
〃　19-3～〃　23年　府立第1勧工場、13-9民営辰の口勧工場
〃　23年～　近衛師団経理部
三菱合資所有地、明地

③銀行倶楽部
大正5年～昭和20-9　銀行集会所、銀行倶楽部、手形交換所
昭和20-9～〃　31-7　進駐軍接収＝極東空軍司令部バンカーズクラブ

昭和31－7～現在	銀行倶楽部、平成5ころ東京銀行協会ビルヂング
〃 20年代	明地
〃 30年代	銀行会館東京手形交換所、大手町建物、東光電気
〃 40－12～現在	銀行会館（全国銀行協会連合会、東京銀行協会東京手形交換所）
③新住友ビル	
明治45年～大正7－7	警察官練習所
大正7年～しばらく	明地
戦前	警察協会本部、明地
昭和20年代	モータープール
〃 30年代	東光電気工事
〃 34－4～現在	大手町建物ビル、新住友ビル（住友銀行東京営業部）
③日本興業銀行本店	
大正12－6～昭和40年代	日本興業銀行
昭和10－9～〃 40年代	日本興業銀行新館
〃 18－6～〃 33年	材料倉庫
〃 35－4～〃 40－12	仲27号館
大正13－10～〃 4年	三菱地所自動車車庫、事務所
昭和4－6～〃 39年	丸の内ガラージビル、20年代 進駐軍接収BCCFパーキング
〃 49－1～現在	日本興業銀行本店
④工業倶楽部	
明治22－8～明治25－7	東京電話交換局
〃 25年～大正9年	明地
大正9－11～現在	日本工業倶楽部
④永楽ビル	
大正ころ	東京海運
昭和19－2～昭和20年	造船会館
〃 20年～〃 23年	進駐軍接収＝明地（モータープール）
〃 23年～〃 27年	資材置場
〃 27－1～現在	永楽ビル（三菱信託銀行本店、永楽実業）
④新永楽ビル、山陽国策パルプビル	
大正10ころ～昭和11－2～昭和42年	樺太工業
〃 44－5～現在	大川田中事務所、武州銀行、21年山陽パルプ本社ビル
	山陽パルプビル、新永楽山陽国策パルプビル（山陽国策パルプ、埼玉銀行）
④東銀ビル	
大正11－9～昭和20年	横浜正金銀行
昭和20年～〃 21－10	日本交通公社、横浜正金銀行
〃 21ころ～〃 34ころ	東京銀行支店
〃 15－1～〃・50年	仲28号館
〃 35－3～現在	東銀ビル（東京銀行丸の内支店）昭和52－8仲28号館部分を増築
④住友信託東京ビル	
昭和戦前～〃 20年代～昭和30年代	丸の内ガラーヂホテル東京
昭和10ころ～現在	住友銀行ビル、61ころ住友信託銀行本店
④東洋信託銀行本店	
大正5－2～昭和20年	台湾銀行本店
昭和20年～〃 49年	三和銀行東京支店
〃 49年～現在	東洋信託銀行本店、54－11新築

資料図1－6　（丸の内1丁目④　住友信託ビル、新住友信託ビル、東銀ビル）

慶長ころ	脇坂甚内安治　大州5万3千石
元和2－7～寛永3－4	山名禅高豊国　6千7百石
寛永3－4～明暦3－3	〃 平右衛門豊政　秀忠おとぎ衆
不詳～〃 3－3	医者衆屋敷　意安、玄斉、竹田式部、専益、山下道円、玄昌
明暦3－3～慶応4年	明暦3－3山名主殿頭、医者衆屋敷をあわせ評定所とする
明治元－10～明治2－4	評定所　訴訟決議機関
〃 2、3年ころ	会計官出張所、2－3会計官本庁
〃 3－7～明治3－11	会計官訴訟所
〃 3年	大蔵省造幣局出張所
	大蔵省分析所に囲込み（以下資料図1－5参照）

資料図1－7、8　（丸の内1丁目④　東洋信託ビル）

明暦3－3～元禄ころ	伴　宗悦直貞　5百石　医師
元禄後期～〃 16－3	久志本左京常勝　2千石　総医師
明暦3－3～貞享元－12	坂井伯元政朝　3百俵　儒者、評定所目安読み
貞享元－12～元禄ころ	〃 伯隆政直　〃
元禄ころ～宝永7閏8	〃 新七郎政親　〃 小十人組
宝永7－9～享保10ころ	〃 内蔵助政富　〃
	別資料　貞享4－2久志本左京邸を塙宗悦拝領
	別資料　元禄9－8坂井伯元邸を能勢市兵衛拝領
	御用屋敷
	評定所に囲込み（以下資料図1－6参照）
享保10ころ～	
〃 10ころ～	

丸の内1丁目の日比谷通り、銀行協会ビルの江戸時代は辰の口で馬場先濠の濠水を道三濠に落とした。銀行会館、日本興業銀行は周辺の広場や道三濠跡で、その東京駅寄りの一画日本工業倶楽部、永楽ビルの地の江戸はじめ慶長図は有馬豊氏からはじまっている。豊氏は三田城主則頼の2男に生まれ、秀吉に仕えて横須賀3万石をえたが、秀吉没後は家康方となり、関が原の合戦、大阪の陣などの戦功で、福知山をへて久留米21万石へ栄進した。つづく竹中重義は秀吉の軍師半兵衛のいとこ重利の嫡子だが、長崎奉行のとき、奸曲のこと多かったとして切腹を命じられた。

寛永11年跡地は忠臣蔵ゆかりの伝奏屋敷になった。伝奏は武家からの願出を朝廷に取次ぐ、伝達奏聞の役柄で徳川時代は納言、参議の2名が選ばれた。その伝奏が江戸に下向するときの接待所が伝奏屋敷であった。忠臣蔵の発端となった元禄14年3月の勅使は柳沢前

大納言資廉と高野前中納言保春、院使は清閑寺前大納言熙定の3人で、浅野長矩と伊達村豊が勅使、院使の饗応役に任命された。一行は11日に伝奏屋敷に到着し、14日に江戸城内白書院において将軍綱吉と対面する手はずとなったが、その14日に事件がおこった。松の廊下で浅野が吉良義央に切りつけ、討果たすことができないまま取抑えられた。浅野に切腹のさたが下ったのは同日午後6時、7時間のスピード結審であった。

東洋信託銀行、住友信託銀行ビルの地のはじめは脇坂安治であった。ししが岳7本槍の1人として勇名をはせ、関が原の合戦後大州5万3千石となった。山名豊国は応仁の乱をおこした宗全の嫡流。家康の信任をえて6千石、秀忠おとぎ衆に加えられた。寛永12年1月、幕府の最高裁判所ともいえる評定所を伝奏屋敷においたが、明暦3年の大火後敷地を分割して独立させた。毎月定められた式日に月番老中、寺社奉行、町奉行、勘定奉行などが集まって部門間の調整や大名、旗本らの裁判にあたった。

旗本3千石の男ダテ水野成之（十郎左衛門）がこの評定所で裁かれたのは寛文4年3月のことで『徳川実記』には「被髪して袴もつけず、そのさまもっとも不敬なればとて切腹せしめられる」とある。評定所には専任の所長がなく、留役勘定方、改方、書物方と目安読儒者などがおかれた。評定所官舎の坂井政朝は目安読みで、目安箱を管理し、評定の席で内容を披露した。3代政親の宝永6年解役、以後目安読みは評定所勤役が担当し、寛政2年に廃止された。8代将軍吉宗の享保7年、評定所前広場に目安箱が設置された。庶民の意向を幕政に反映させるためのもので、小石川療養所、町火消などの制度はこの目安箱から生まれた。

明治維新後、評定所、伝奏屋敷の一画は新政府の会計官本庁、駅逓司、大蔵省分庁へと変遷した。会計官は明治はじめの財政統括官庁で、2年7月の官制改革で大蔵省と改称された。明治初年図にちょ幣司としたものがある。ちょ幣は新政府初期の軍札だが敦遠された。明治5年新紙幣発行にさきがけ3百50万両のちょ幣を回収して、八重洲紙幣寮跡で焼却した。駅逓司も会計官の一部門で水陸運輸、駅逓を統括したが、1年ほどで皇居前広場の地に移った

明治3年には会計官から機構変更した大蔵省の外郭庁舎分析所がおかれた。本館が68坪で工場はわずか11坪にすぎなかったが、東京における最初のレンガ造建築として建築史上名高い。イギリス人建築家ウォートルスの設計で6年に明治皇后の行幸があった。明治11年1月この分析所が東京第1勧工場とされた。勧工場はわが国最初の官営デパート。市内の一流商店が出店して家庭用品などを販売したが明治13年、民営に変わった。

明治22年、日本工業倶楽部の地に東京電話交換局が誕生。24年この辰の口電話交換局で直列複式交換器を試用、これがわが国の電話交換発祥地となった。当初は交換台が3台で、交換手は男子2名、女子9名、ほかに事務所員3名がいた。電話総数は百79台だったという。勝手の分からない加入者は「申す申す」を連発して会話ができなかったなどの逸話も残っている。日本工業倶楽部は大正6年団琢磨を理事長に創設された総合経済団体。当初その事務所を丸の内3丁目の帝国鉄道協会ビルにおいたが、業務の拡大につれて手狭となり、9年三菱地所所有明地の一部7百坪を借りて倶楽部ビルを新築した。外観ルネッサンス風、入口にドリス式円柱を配し、屋上に当時日本産業のシンボル紡績工と炭鉱夫の銅像をあげて名物となった。建物は関東大震災、東京戦災に焼失することなく現在に大正建築の優雅さを伝えている。

大正11年2月に竣工した大川田中事務所は渋沢栄一のオイで製紙王とうたわれた大川平三郎とのちの日産化学社長田中栄八郎兄弟が三菱地所の敷地に建築した鉄筋コンクリート事務所ビル。終戦直後の昭和21年、大川の子息が山陽パルプを興して初代会長に就任したので山陽パルプ本社ビルとした。昭和42年竣工後50年をへて建物も老朽化して手狭となったことから地主の三菱地所との共同ビル建設に着手、44年5月隣接する永楽ビルヂングを包含する地上11階地下3階の鉄筋コンクリートビルを竣工、増設部分を山陽ビルヂングとした。

永楽ビルヂングは戦時下の木造事務所造船会館の跡地で、一時占領軍の駐車場とされたこともあった。昭和27年、三菱合資系新会社の所有地に三菱地所が鉄筋コンクリート地下2階地上8階延べ2万4千平方メートルの永楽ビルヂングを竣工。八重洲ビルヂングの米軍接収で仮本社屋生活を送っていた三菱信託銀行が入居し、旧三井物産系新会社の第一物産も本社を移した。三菱信託と丸の内の関係は深い。昭和2年、三菱本館の一隅で創設。翌3年、ビルに隣接したテニスコート跡に新築した八重洲ビルに移ったが、終戦直後、八重洲ビルが進駐軍に接収されたので、いったん三菱銀行本店の一部に移転した。面積がこれまでの3分の1だったうえ、出征者の復帰でますます狭く、昭和27年、折りから新築中の永楽ビル1、2、地階3千9百平方メートルに進出した。丸の内支店は27年三菱新館で開設。28年、戦前本社をおいたこともある八重洲ビルに移転し、48年から三菱ビルに構えた。

東京銀行ビル地は大正11年、横浜正金銀行竣工からはじまる。横浜正金銀行は明治21年創設の外国為替銀行で、東京支店は昭和2年竣工、重厚さがあふれていた。戦前期は台湾の外為国家機関とされたが、21年解体にあたって普通銀行の東京銀行に改組し、31年創設百周年記念事業の一環として新築した。旧ビルの一部を保存したコンクリート地上9階地下3階であったが、52年8月、三菱仲28号館を取り込み増築。13階、延べ3万1千平方メートルとした。

東洋信託銀行の前身・台湾銀行も戦前期の台湾開発、南方進出のための金融機関。明治32年の創立で大正4年丸の内進出のため鉄筋コンクリート4階ビルを竣工。昭和2年鈴木商店への不良貸付が原因でいったん破産し、昭和恐慌のきっかけを作った苦い経験ももっている。その後政府の援助をえて再建したが、昭和20年今度は閉鎖機関に指定され解散。三和銀行東京支店をへた49年に系列会社の東洋信託銀行と変わり本店とした。54年新ビルを竣工。12階建て。

住友銀行の本社は大阪だが、丸の内とのかかわりも深い。戦前から住友銀行ビルがあって、東京支店、東京事務所などとされた。住友信託銀行は創業2年目の大正15年、日本橋通2丁目の住友銀行内で開店。昭和8年、住友グループの首都圏拠点・新住友ビルの建築にともなって入居し、社勢の興隆による人員増加に対処するため、61年に12階建ての自社ビルを竣工させた。

新住友ビル、日本興業銀行周辺の明治中期は明地。40年の市区改正工事は隣接する道三濠と辰の口を埋立てたが、しばらくは丸の内に引続く荒地で、一時は警察官練習場とされた。一画が永い眠りから目をさますのは大正5年以降のことである。この年、銀行集会所が竣工し、12年には日本興業銀行が姿を現した。東京銀行協会ビルヂングの前身・東京銀行集会所は大正5年第1国立銀行頭取渋沢栄一の提唱で発足した銀行集会所兼手形交換所で、モダンルネッサンス式建築を主流にした大正建築ならではの上品さとおだやかさを備えた。昭和20年の終戦後は米軍に接収されて空軍司令部クラブとされたが31年解除。平成はじめ取壊されたが5年に竣工した東京銀行協会ビルヂングに壁面デザインが復元された。

日本興業銀行は明治35年興業銀行法にもとづいて設立された特殊金融機関。大正12年丸の内に進出して現在地にレンガ造り6階建てビルを建て、昭和10年新館ビルを増築した。昭和3年竣工の丸の内ガラーヂビルヂングは三菱地所によるわが国最初の車庫専用ビル。鉄筋コンクリート6階ビルにゆったり2百50台の駐車スペースをとった。東京の自家用車千5百台、道路の駐車自由でいたるところに明地があった時代のことだから借手はつかず赤字経営がつづいたという。昭和20年進駐米軍BCCFパーキングとして接収され解除後の39年新東京ビル地下に移転。建物は40年に取壊された。

昭和49年、日本興業銀行跡地に丸の内ガラーヂビル、仲27号館、周辺道路敷地を加えた千4百平方メートルの敷地に日本興業銀行本店が竣工。地下5階地上15階、延建築面積は7万6千平方メートルとなった。一方、新住友ビルの一画は戦後30年代まで明地がつづいたが、昭和34年地上9階地下3階建ての大手町建物ビルが竣工し、住友銀行東京営業部と住友商事など住友グループ各社が入居した。ビル名も住友グループの関東拠点にふさわしい新住友ビルとなった。

資料図1－9、10　（丸の内1丁目⑥、旧同町①、旧永楽町2丁目②　JR本社、丸の内センタービル、丸の内ホテル、交通公社ビル）

慶長ころ　堀　淡路守直重　須坂1万2千石
〃　8年　～元和6閏12　細川越中守忠興　小倉30万石
元和6閏12～寛永18－3　〃　忠利　熊本54万石
寛永18－5～慶安2－12　〃　肥後守光尚
慶安3－4～正徳2－7　〃　越中守綱利
正徳2－7～享保17－6　〃　宣紀
享保17－8～延享4－8　〃　宗孝
延享4－10～天明5－10　〃　重賢
天明5－12～〃7－9　〃　治年
〃7－9～文化7－11　〃　斉しげ
文化7－11～文政9－2　〃　斉樹
文政9－2～万延元－4　〃　斉護
万延元－7～明治4－6　〃　韶邦
明治4－9～〃8－2　兵部省武庫司、5－2陸軍省武庫司
〃　はじめ～〃20年　砲兵本庁用地、陸軍歩兵営、陸軍鎮台歩兵営、陸軍大隊営、陸軍歩兵第3連隊
〃　20ころ～　明地

⑥JR本社ビル　鉄道省用地
明治23年～昭和12年　鉄道倶楽部
昭和2ころ　鉄道省、18－11運輸通信省、20－5運輸省
12－12～昭和41年　国鉄ビル旧館、JR本社ビル旧館
〃　41年～現在　日本国有鉄道東京鉄道管理局、45年国鉄ビル本館、62年JR本社ビル本館
〃　24ころ～〃　国鉄ビル新館、JR本社ビル新館

〃　38－1～〃　鉄道省用地
⑥丸の内センタービル　鉄道倶楽部
昭和4年～昭和38年　帝国生命本社、帝国生命館、22年朝日生命本社　本社移転
〃　38年～〃60ころ　朝日生命館、朝日生命館、丸の内朝日生命館、朝日生命郵便局
〃　5－10～〃59ころ　第1銀行本店、帝国銀行本店、第1銀行本店、第1勧業銀行東京中央支店

〃　59－11～現在　丸の内センタービル（富士通、日本勧業角丸証券）
⑥丸の内ホテル　東京タクシー
大正6年～昭和30ころ　丸の内ホテル、中央ビル
昭和6年～〃15－6　日本曹達、20－3同本社
〃15－6～〃20－11　丸の内ホテル、一時進駐軍接収
〃20－11～現在　丸の内ホテル新館
〃36－4～〃　日本活動写真仮本社
⑥交通公社ビル　明地
大正12－12～昭和6－1　鉄道省増設用地
昭和6－1～〃15－9
〃15－9～〃20－9

昭和20－9～昭和21－2　進駐軍接収＝使用なしの模様
〃　21－10～〃　31年　日本交通公社、交通公社案内所
〃　35－12～現在　交通公社ビル（日本交通公社本社）

資料図－11　（丸の内1丁目⑥）
不詳～寛永8－12　今大路延寿院正紹　5百石　将軍家医師
正保ころ～明暦3年　加賀爪甲斐守直澄　塚掛1万3千石　寛永元～10年寺社奉行
承応ころ～寛文6－7　牧野下総守某　不詳
明暦3年～寛文6－7　細川越中守邸に囲込み
寛文6－7～貞享4－8　細川淡路守利重　高瀬3万5千石
貞享4－9～元禄11－11　〃　利昌　〃
元禄11－11～　細川越中守邸に囲込み（以下資料図－9、10参照）

資料図－12　（丸の内1丁目⑥）
元和2－4～寛永14－6　前田大和守利孝　七日市1万石
寛永14－6～貞享2－4　〃　右近大夫利意　〃
貞享2－7～元禄6－7　〃　宮内少輔利庶　〃
元禄6－9～〃　8－9　〃　右京利慶　〃
〃　8－11～〃　11－9　〃　利英　〃
元禄11－9大火後の割替えで前田長十郎、米津周防守、今大路道三、依田玄蕃邸を拝領
戸田采女正氏定　大垣10万石
享保8－4～〃　20－8　〃　伊勢守氏長　〃
〃　20－10～明和5－4　〃　采女正氏英　〃
明和5－6～寛政12－1　〃　氏教　〃
寛政12－1～文化3－4　松平和泉守乗寛　西尾6万石
文化3－4～　割り替え、細川越中守邸に囲込み（以下資料図－11参照）

資料図－13　（丸の内1丁目⑥）
慶長ころ　某元隠
寛永ころ～貞享元－3　米津内蔵介田盛　摂津1万5千石
貞享元－3～元禄11－9　〃　伊勢守政武　久喜1万2千石　大阪城代　貞享4年～元禄元年寺社奉行
別資料　慶長9年～寛永元年田盛の父勘兵衛田政八重洲で北町奉行を勤める
元禄11－9～　大火後の割替えで戸田采女正邸に囲込み（以下資料図－12参照）

資料図－14　（丸の内1丁目⑥）
慶長ころ　柳生又左衛門宗矩　2千石　寛永9～13年大目付
不詳～寛永3－9　今大路道三親清　7百石　医官、典薬頭
寛永3－9～〃　16－4　親昌　1千2百石
〃　16－6～貞享3－5　親俊　〃
貞享3－7～元禄11－9　親顕　〃

元禄11－9～　大火後の割替えで戸田采女正邸に囲込み（以下資料図－12参照）

資料図－15、16　（丸の内1丁目⑥）
不詳～明暦3－3　医者衆玄竹、亀庵、宗琢
明暦3－3～万治2－12　知楽院　知楽院屋敷の一部を拝領
万治2－12～不詳　依田（佐田）玉仙某不詳　総医師
寛文ころ～延宝ころ　清水亀庵某　7百石　医師
延宝ころ～元禄年間　志木法眼某　不詳　〃
寛文ころ～〃　清水道裕某　〃

東京駅丸の内北口の1等地JR本社、丸の内センタービル、交通公社ビルなどのある一画の江戸時代は細川熊本藩邸であった。初代の細川忠興は織田信長、豊臣秀吉のもとで活躍した藤孝（幽斉）の嫡男で、関が原の合戦のとき家康の先鋒をつとめて小倉30万石をえた。忠興の妻はガラシャ夫人で有名なキリスト教徒で、関が原の合戦の開戦にあたって大阪屋敷を石田勢に囲まれたとき、人質を拒否して屋敷に火をつけて自害した。次の忠利のとき熊本54万石に栄進。6代宗孝が藩財政の立直しをはかった。幕末の細川藩は中央情勢を的確にみきわめお家の安泰をはかる。文久2年藩主の昭邦が京都にのぼって公武の周旋につとめた。

江戸時代はじめのころ、一画に邸地をもったが細川邸に囲込みされた大名屋敷も多かった。加賀爪直澄は家康に近侍した忠澄の嫡男。家光小姓から寺社奉行にすすんだが、将軍から連日の会議を慰労されて菓子をたまわったとき使者を前に失眠したことが不敬のふるまいとされ罷免された。一部が前田七日市藩邸だったこともある。前田利孝は加賀前田利家の4男で1万石を分知した。戸田大垣藩は氏教のとき11代将軍家斉の側用人をへて老中となり松平定信のもと寛政の改革をすすめた。柳生宗矩は柳生新陰流を創案した宗厳の5男。3代将軍家光の信任が厚く、寛永17年1万2千石をえて将軍家剣術指南役となった。米津田盛は町奉行をつとめた田政の嫡男。家光につかえて大阪定番にすすみ、1万石を加増されて大名に列したが、次の政武の勤務成績が不良とされて罷免された。

細川越中守邸がおかれた道三濠沿いは江戸時代はじめのころ医者町ともよばれ、今大路道三をはじめとした幕府お抱えの医者衆屋敷があった。今大路正紹の父正盛が医術の奥義をきわめたのは戦国末期で、正親町天皇、織田信長、豊臣秀吉と歴代の天下人を診断した。正紹が家康に迎えられ、子孫は世襲して典薬頭をつとめた。3代親昌のとき祖父と父の采地をあわせて千2百石になった。

維新後の明治4年9月、細川藩邸は公収されて陸軍省の武器庫となり、明治22年までの約20年間東京鎮台歩兵第1連隊第2大隊営、第1師団歩兵第3連隊などの兵舎がおかれた。後期明治20年『陸軍沿革要覧』によれば東京鎮台兵力は4連隊、将官、下士官9百50名、

卒6千百名。大半がこの兵舎に常駐した。明治23年、歩兵第3連隊兵舎跡地、永楽2丁目1、2番地2万5千坪の敷地はいったん三菱合資に払下げられたが、33年には2番地1万5千坪が鉄道局の停車場用地、高架線路敷用地として買戻され、大半は大正期まで明地のまま放置された。

丸の内ホテルの前身は丸の内タクシーで大正6年に現地で創業した。その後の昭和6年商号を変更してホテル業に進出、15年に化学企業・日本曹達の系列に入って本社とされたこともあったが、21年独立して丸の内ホテルを復活させた。20年代には占領軍の軍用ホテル接収も体験、昭和36年には旧タクシー時代の大宴会場を取壊して増築。交通公社ビルと同一外観で内部を接続した。

関東大震災直後に日活の前身日本活動写真仮本社もおかれた。日活は大正元年、日本映画創世期の4社が合併した映画会社で尾上松之助、大河内伝次郎、小杉勇の人気スターを擁して、当時の銀幕の人気を独占していた。関東大震災では本社と系列15館を焼失したが1か月後にバラック仮館で復旧。震災後慰安に飢えた市民がこれらの映画館に殺到した。無声映画から有声画面に変わるのもこのころ。日本映画は全盛時代を迎えた。現在の交通公社ビル地である。

交通公社ビルの地の戦前は鉄道省の増築予定地で明地のまま終戦、昭和21年、東亜交通の社名を時代にそなえて改名した日本交通公社が木造2階事務所を建築した。交通公社の前身はジャパン・ツーリスト・ビューロー、日本旅行倶楽部で明治45年3月、外人旅行客の誘致斡旋機関として発足以来、丸の内とかかわってきた。最初の事務所は東京駅八重洲口にあった鉄道院総裁応接室で、大正3年東京駅の降車口2階に移り、一時運輸省第4庁舎、正金ビルにも本社を置いた。戦後、復職者と社業の拡大で事務所はたちまち狭溢となり、一方所有者から返還をせまられた。「戦災による都内の建物の払底ははなはだしく、八方努力のすえ丸の内1丁目1番地、現在の場所を三菱地所の好意で借受け、ここに新社屋を建築することとなった。敷地6百坪、木造2階建の本社屋は21年10月19日、5か月間の突貫工事で完成。社ははじめて待望の本社社屋をもった」（日本交通公社70年史）。昭和34年、木造庁舎老朽化にともない三菱地所との共同ビル建築に着手。1年11か月の工期をへた35年12月に地上9階地下3階延べ2万5千平方メートル、現在の交通公社ビルを竣工させた。

昭和戦前から戦後にかけて帝国生命、朝日生命の本社がおかれたこともあった。大正12年の関東大地震後日本橋の旧本社跡にバラックの仮社屋を建て不便さをかこっていた帝国生命が東京駅前の地に進出したのは昭和4年のことで、顧客カードや重要書類を焼失した苦い経験を生かして、鉄筋コンクリート8階の耐震耐火とした。当時の帝国生命は古河鉱業と深いかかわりをもったが、戦後同社が制限会社とされるにおよんで資本、経営陣を一新し、社名も朝日生命と改めた。昭和38年社勢の伸張にともなって新宿新社屋を新築移転、以後丸の内生命館と称した。

第1銀行は明治6年、第1国立銀行として創立されたわが国最初の銀行で創始者は渋沢栄一である。明治23年第1銀行と改称。戦時下三井銀行と合併したこともあったが、戦後日本勧業銀行と合併、現在の社名は第1勧業銀行となっている。この第1勧銀と朝日生命ビルと2つの風格のある建物を取り壊して、共同でテナントビルを建てることになった。昭和59年竣工の丸の内センタービルで地上20階の高層部と5階建ての低層部を連結し、歩道にそった明地にクスノキなどを植えた。壁面は土の風合いのタイルをはり、窓を壁面からひっこめた構造で、落ち着いたたたずまいをみせている。第1勧銀は東京中央支店、富士通が本社事務所、日本勧業角丸証券が本社をおいている。

JR本社ビルの明治以降は鉄道省用地で昭和12年鉄道省庁舎建築まで明地だった。昭和12年、東京駅の八重洲側構内にあった庁舎を新築とともに移転。うす緑の殿堂と称されたこの庁舎は昭和18年に逓信省と合併して一時運輸通信省になったが、20年に再度分離した。戦後は連合国管理下におかれ、24年『マッカーサー書簡』にしめされた連合軍総司令部の要求をうけて日本国有鉄道が独立、運輸省のビル内に東京鉄道管理局が同居した。運輸省は昭和41年霞が関庁舎新築移転までの本庁舎で石井光次郎、三木武夫、重宗雄三、荒船清十郎らの運輸大臣が執務した。国鉄はその後のわが国鉄道交通の基幹として発展したが、昭和62年行政改革の一貫として民営化されることとなり、JRと改称。現在はJR東日本、JR東海の本社がおかれている。

資料図I-17　（丸の内1丁目⑦、⑧、旧同町①、旧永楽町2丁目②　東京駅構内神田側線路敷、東北上越新幹線総合指令本部）

慶長ころ		村上9万石	村上周防守義明
寛永ころ			元和4年連座廃絶
正保ころ	～慶安4－11	松平丹後守中屋敷	
慶安4－11	～寛文11－7	戸田采女正氏鉄	大垣10万石
〃	〃	〃	氏信
寛文11－7	～貞享元－6	〃	但馬守氏西
貞享元－8	～元禄11－9	〃	采女正氏定
元禄11－9	～宝永4－8	蜂須賀飛騨守隆重	富田5万石
宝永4－8	～正徳4－9	〃	隆長
正徳4－10	～享保10－11	〃	正員
享保10－11	～〃	戸田伊賀守預かり	宗家相続返還
〃	10ころ～〃12－12	松平伯耆守資訓	浜松7万石
〃 12－12	～寛延元閏10	加納遠江守久通	東阿倉川1万石　享保元年～寛延元年御用取次

享保12－12～宝暦元－12　巨勢伊豆守至信　5千石　吉宗側
宝暦元－12～明和ころ　〃　至忠　小幡2万石
寛延元閏10～宝暦12－1　松平宮内少輔忠恒　寛延元年～明和4年若年寄
宝暦12－1～明和4－8　西尾主水正忠需　横須賀3万5千石
明和4－8～寛政5－10　安藤対馬守信成　磐城平5万石　明和4年～寛政5年若年寄
寛政5－10～〃12－1　松平和泉守乗寛　西尾6万石　文化6年～文政5年寺社奉行、京都所司代

〃12－1～文化3年　板倉内膳正勝長　福島3万石
文化3－4～文政5－7　文化3－4割り替え、添地　
松平和泉守乗寛　西尾6万石
文政5－7～天保9ころ　土井大炊頭利厚　古河8万石
天保9－4～〃13－12　松平伊豆守信順　吉田7万石
〃13－12～〃15－10　信宝　〃
〃15－11～嘉永2－7　信璋　〃
嘉永2－11～明治4年　信古　〃

明治4年～〃20年　兵営、第13大隊営、東京鎮台歩兵第3連隊営
〃23年～〃33年　三菱合資所有地、明地
〃25ころ～〃33ころ　東京郵便電話局厩
〃33年～〃43ころ　鉄道停車場、高架用地
〃43－9～大正3－12　呉服橋停車場　東京駅構内組込み
〃43－9～昭和5－11　鉄道院、大正9－5鉄道省、12－9鉄道省仮庁舎
昭和4ころ　第1、2改良事務所

⑦JR東北上越新幹線総合指令本部周辺　昭和38－2火災焼失
昭和30年代　東京電灯分区品川電力区、構内本部信号分室、東京電車区詰所、東鉄第1変電所
〃　40年代　東京保線支区、東京信号支区
〃　60年代～現在　東北上越新幹線総合指令本部、日本電設工事派出所、新幹線第2運転部

⑧JRバス駐車場周辺　東京鉄道管理局
昭和20年代～昭和55ころ　国鉄関東支社地方資材部、東鉄工業所東京支社
〃　30年代　新幹線総局東京運転所、東京電車区、鹿島建設工事事務所
〃　40年代～〃40年代　国労会館
〃　29－4～現在　新幹線総合指令本部、新幹線CTCビル、JRバス駐車場、
〃　60ころ～〃　JR東京管財区、東日本キヨスク東京営業所、東京ストア

⑧第1、2鉄鋼ビル、国際観光会館　埋立て
江戸時代～昭和22－11　外濠
昭和26－7～現在　第1鉄鋼ビル（神戸製鋼所、三菱銀行東京駅前支店）
〃　26年～〃　第2鉄鋼ビル（日本航空、第1勧銀支店、小野田セメント、電源開発）
〃　29－10～〃　国際観光会館ビル（国際観光ホテル）

資料図－18（丸の内1丁目⑧）
慶長ころ～明暦ころ　中根七蔵、吉兵衛
寛文ころ～元禄11－9　戸田采女正添屋敷（または中屋敷）
元禄11－9～　蜂須賀飛騨守邸（当初添屋敷または中屋敷）囲込み（以下資料図－17参照）

資料図－19（丸の内1丁目⑧）
慶長ころ～慶長14－2　井出志摩守正次　3百石
〃14－2～寛永18－3　〃　甚之介正成　〃
寛永18－12～明暦3年　〃　甚五左衛門正陳　〃
明暦3年～〃3－9　川添権兵衛重勝　3百50石
〃3－12～元禄6－7　〃　金左衛門重頼　5百50石
元禄6－7～〃11－9　太田道寿某　1千百石
〃11－9～　松平弾正忠邸囲込み（以下資料図－21参照）

資料図－20（丸の内1丁目⑧、旧同町①、旧永楽町2丁目②　東京駅構内東海道新幹線ホーム神田端）
慶長ころ～慶長19－4　駿府奉行
〃19－4～寛永17－7　小笠原左衛門佐信之古河2万石　小姓組番士
寛永17－9～元禄11－9　政信　関宿2万2千石　書院番
元禄11－9～〃14－10　土佐守貞信　勝山2万2千石　大番
〃14－10～〃15－4　吉良上野介義央　高家4千2百石　小十人番頭
〃15－6～宝永7－12　米倉長門守昌明　皆川1万2千石　奥医、さじ
宝永7－12～正徳5－11　丹後守昌照　飯田2万石
正徳5－12～享保13－7　堀石見守親賢　〃
享保13－9～延享3－2　若狭守親庸　〃
延享3－4～安永8－4　大和守親茂　〃
安永8－4～天明4－6　親長　〃
天明4－9～寛政8－4　河内守親忠　〃
寛政8－5～文化3－4　大和守親民　〃
〃　親しげ　〃

文化3－4～〃8－4　文化3－4割り替え、縮小　3千石
〃8－4～文政2－4　小田切土佐守直年　3千石
文政2閏4～天保7－9　永田備後守正道　5百石
天保7－9～〃11－1　榊原主計頭忠之　7百石
〃11－3～〃14－2　大草安房守高好　3千5百石
〃14－2～〃14－10　遠山左衛門尉景元　5百石
〃14－10～〃14－12　阿部遠江守正蔵　3千石
嘉永元－11～〃2－7　鍋島内匠頭直孝　5千石
〃2－8～安政3－11　牧野駿河守成綱　2千5百石
安政3－11～〃5－5　井戸対馬守覚弘　2千5百石
〃5－5～文久2－6　跡部甲斐守良弼　3千百石
文久2－6～〃2－10　石谷因幡守清貞　2千5百石
〃2－10～〃3－4　小笠原長門守長常　3千石
　浅野備前守長祚　3千5百石

のちに老中
〃　北町奉行所（3千石高）

文久3－4～文久3－4	佐々木信濃守顕発	2百俵	北町奉行所
〃 3－4～元治元－3	阿部越前守正外	3千石	〃
元治元－3～〃 元－7	都筑駿河守峯輝	2百俵	〃
〃 元－7～慶応2－6	池田播磨守頼方	3千石	〃
慶応2－6～〃 3－12	井上信濃守清直	2百俵	〃
〃 3－12～〃 4－2	小出大和守秀実	1千5百石	〃
〃 4－2～〃 4－5	石川河内守利政	3百俵	〃
〃 4－5～明治元－9	北市政裁判所		
明治元－10～〃 2－7	刑法官支庁、2－2刑法官本庁		
〃 2－7～〃 2－9	刑部省		民部省に移管
〃 2－9～〃 4ころ	不詳		御用地か
4、5年～	兵営（以下資料図－17参照）		

資料図－21（丸の内1丁目⑧）東京駅八重洲神田側端通路敷、国道10号線道路敷）

慶長18－12～寛永8－10	島田弾正忠利正	5千石	南町奉行所
寛永8－10～〃 15－1	堀式部少輔直之	5千5百石	〃
〃 15－5～〃 16－5	酒井因幡守忠知	1千5百石	〃
〃 17－5～寛文元－3	神尾備前守元勝	1千8百石	〃
寛文元－4～〃 13－1	渡辺大隅守綱貞	1千石	〃
〃 13－1～延宝8－2	宮崎若狭守重成	1千5百石	〃
延宝8－2～〃 8－8	松平与右衛門正重	2千石	〃
〃 8－8～元禄3－12	甲斐庄飛騨守正親	3千石	〃
元禄3－12～〃 10－4	能勢出雲守頼寛	2千石	〃
〃 10－4～〃 11－9	松前伊豆守嘉広	1千6百石	〃
〃 11－9～享保4－3	元禄11－9南町奉行所、戸田采女正、		太田道寿邸を拝領
享保4－3～元文4－2	松平備前守正久	甘縄2万2千石	
元文4－4～宝暦8－9	松平市正親純	杵築3万7千石	
〃	親盈		側用取次、のちに老中
宝暦8－9～明和4－8	田沼主殿頭意次	岩槻2万石	
明和4－8～文化7－7	秋元但馬守永朝	山形6万石	
文化7－8～文政10－4	〃 若狭守久朝	〃	
文政10－4～元治元－10	〃 但馬守志朝	館林6万石	
元治元－10～〃 2－4	〃	〃	礼朝
〃 2－4～慶応3－4	文化3－4割り替え		
慶応3－7～〃 4年	牧野備前守忠恭	長岡7万4千石	元老中、外国御用掛
明治はじめ	駿河守忠訓	〃	
〃 4ころ～明治22年	本多主膳正康しげ	膳所藩知事	
	兵営（以下資料図－17参照）		

資料図－22（丸の内1丁目⑧）
天正ころ～寛永5－2　町屋
正保ころ　炭屋長三郎、ハリツケ市左衛門

東京駅構内神田側線路敷、東北上越新幹線総合指令本部などのあたりの江戸はじめに村上義明邸がおかれた。村上家は堀秀治の家臣から独立して9万石をえたが、花井義雄著修事件に連座して領地を没収された。8代将軍吉宗後期、御用取次の加納久通邸などをへた最後は松平吉田7万石。信順は天保の改革をすすめた水野忠邦とあわず、老中就任2か月で退任。1代おいた信璋のとき嗣子なく鯖江藩主間部詮勝の2男を養子とし、寺社奉行、大阪城代を勤めた。慶応4年幕府軍の鳥羽伏見惨敗を目のあたりにして帰城。藩論を尊皇に統一した。

東京駅東海道新幹線ホーム神田駅よりあたりに忠臣蔵ゆかりの吉良義央邸があった。元禄11年の火災で鍛冶橋邸を焼失し、直後の区画再編の結果、勝山小笠原藩邸が賜邸された。吉良家は室町以来の名家で、義央は寛文3年従4位上、延宝8年に少将にすすんで高家筆頭とされた。京都の宮中や公卿とも交際が深く、儀典係として礼式の指導にあたったので諸大名からの贈物がきらず、生活は豊かであったという。

元禄14年3月勅使下向の饗応役として赤穂5万3千石城主の浅野長矩が指名され義央の指導をうけることになった。接待所の伝奏屋敷は吉良邸から徒歩5分。ここで数々のはずかしめをうけた浅野が江戸城内松の廊下において吉良に切りかかった。『忠臣蔵』の発端である。江戸城内での抜刀は将軍に弓ひくものとされ、浅野は即日切腹、吉良もお役御免。この年12月、幕命をもって吉良家は丸の内邸を上地され、義央は本所松坂町に隠居した。主君の仇敵報復にもえる大石義雄らの浪士47人が、この吉良邸に討入ったのは翌元禄15年12月。義央の生涯は61才であった。つづく堀家は豊臣秀吉5大老の1人秀政の嫡流で、親賢から7代が起居した。最後の親しげのとき寺社奉行、若年寄を歴任、天保の改革期に老中をつとめた。

文化3年3月の江戸大火は丸の内一帯を焼いたので割り替えとなり、大手町から北町奉行が移転して幕末までの62年間を町奉行所とした。ここでの初代は小田切直年で、3代に榊原忠之、5代遠山景元、10代に跡部良弼がでた。榊原は11代将軍家斉後期の奉行だが、鼠小僧次郎吉と相馬大作事件を裁いた。鼠小僧は後世義賊ともされたが、盗んだ金品を貧乏人に恵み与えたという事実はないという。浜町の大名屋敷に忍び込んで捕まり、浅草で獄門となった。

遠山は5百石の旗本景普の2男に生まれ、一生部屋住みの運命にあったので放蕩にふけり悪所に出入りした。兄が病に倒れたので家督を継ぎ、作事奉行、勘定奉行をへて北町奉行となった。当時の幕政は12代将軍家慶の治世で首席老中の水野忠邦が寛政の改革に取組んでいた。忠邦の改革は贅沢禁止令などが中心で市民からはげしい反発をかうことになる。極端に忠邦の命令を実行した相役の南町奉行鳥居燿蔵とともことごとく対立し、在任3年の

のち罷免された。名奉行遠山の金さんとして親しまれる遠山が南町奉行に復帰したのは水野が失脚して鳥居が免職された弘化2年のことであった。跡部良弼は唐津藩主の5男で水野忠邦の弟。旗本の養子に迎えられ、大阪町奉行、勘定奉行などを歴任した。大阪町奉行のとき大塩平八郎の乱を鎮圧、江戸町奉行も名判官とうたわれた。

最後の北町奉行は石川利政。慶応4年1月鳥羽伏見の戦いで幕府軍が敗走し、江戸進攻のはじまった2月に就任した。その後の2か月間激変の江戸治安をあずかることになる。4月江戸城が開城し、市中は官軍兵士であふれる。徳川将軍はすでに退去したとはいえ旧幕臣のなかには新政府に服さない者もあり、上野公園一帯は2千人の彰義隊が結集して決戦のときを待っていた。役人たちの中にも出仕を取止めたり、江戸を立退いた人たちが続出した。こんな中で利政の病死届がだされた。官軍にしたがうを快しとせず切腹したとの風聞がたった。新政府軍が上野彰義隊を一掃して江戸のすべてを制圧するのはそれからまもなく。町奉行の引渡しは慶応4年8月のことであった。

東京駅八重洲神田側端通路敷、国道10号線道路敷あたりの江戸はじめに南町奉行所があった。呉服橋門を入ってすぐ正面。前に紹介した北町奉行所の位置とは微妙に違う。島田利正は2代将軍秀忠の側近で、慶長18年、創世期の町奉行に就任し、9千5百石を拝領するがあと1歩大名にとどかない。寛永時代に堀直之が町奉行制度を確立したが、次の渡辺綱貞は流罪の悲運に泣いた。渡辺伯太藩祖1万4千石の6男で、父遺領のうち千石の分知をえて町奉行となったが、5代将軍綱吉が就任したとき越後騒動の第1回裁可にかかわったとして八丈島に流された。松前嘉広の元禄11年9月の大火で一帯が焼失。直後の割替えで南町奉行所は鍛冶橋門内の保科正賢邸と吉良義央邸へ移転。跡地と戸田采女正、太田道寿邸一部をあわせて松平正久邸となった。正久は甘縄の陣屋から大多喜城主2万石に昇格。6代将軍家宣に付属されて奏者番などをつとめた。

宝暦8年からの9年間、田沼意次邸となった。9代将軍の治世、宝暦期も田沼時代と総称されるが、当時の幕政は大岡忠光が家重と幕閣との間を周旋していて田沼はナンバー2。この年5千石を加増されて大名に列した。つづく秋元永朝は米所山形6万石。このころ天明の大飢饉で米騒動、打壊しが頻発した。牧野忠恭は京都所司代、外国御用掛、老中と混乱期の要職をつとめ、慶応元年の長州再征で病気を理由に辞任し家督を忠訓にゆずった。忠訓は大政奉還後の京都にのぼり公武の調和を建言するが、鳥羽伏見の戦いでの幕府軍敗退をみて急遽長岡に退いた。明治戊辰の戦いのとき河井継之助が新政府軍に藩主の嘆願書を提出したが拒否され、戦闘の末長岡城が落城した。

明治維新後、新政府は永楽町2丁目とよばれたこの地に前出の陸軍兵舎をおき、明治23年、跡地は三菱合資に払下げられたが、翌24年、新橋から東京駅呉服橋の高架を延長する新橋－永楽町間高架工事が政府事業として認可され、ただちに線路敷地の測量と設計が行われた。32年には逓信省鉄道局による用地買収がはじまり、三菱合資も永楽町1丁目2番地1万4千坪、有楽町2丁目1番地2筆2千坪の収用に応じた。工事は帝国ホテル裏手の石垣撤去作業からはじまったが軟弱地盤のため難航。7年間の歳月をへた40年5月にようやく竣工した。42年12月鳥森停車場に山の手線を延長、43年6月これを有楽町停車場にのばし、同じ年9月に呉服橋停車場まで開通させた。高架工事の総工費は5百万円。大倉組、清水組、大林組などが担当、築後百年をへた今日も新橋、有楽町、東京駅間の山の手線高架として健在である。呉服橋停車場は現在の東京駅構内神田側の一画。わずか4年間のはかない運命に終わる。呉服橋停車場に隣接してすすめられた東京駅新築工事の完工をもって閉鎖された。

呉服橋停車場の裏側、現在の新幹線CTCビル、JRハイウエイバス駐車場あたりに鉄道院がおかれた。鉄道院は明治時代の鉄道中央館長。明治41年、私鉄中心にすすめられた全国の鉄道を国有化。逓信省の鉄道局と鉄道作業局を一元化した。初代総裁が後藤新平で、大正9年に鉄道省に昇格。関東大震災で焼失したあと、バラック庁舎をへた昭和5年、東京駅反対側の正面のJRビル地に定まった。外濠通りに面した第1、第2鉄鋼ビル、国際観光会館、八重洲口駅舎鉄道会館の戦前までは江戸城外濠とその周辺地で魚の住む外濠が流れ、小船も行来した。東京駅の裏口だがヘンピで外濠通りは舗装されず、市電の線路に石畳がしかれていた。駅舎もなく、昭和4年につくられた粗末な改札口がポツンとおかれたという。

昭和20年の東京大空襲は市街の大半を焦土と化し、銀座も一面の焼野原でガレキが放置された。22年東京駅周辺の外濠はガレキの廃棄場とされアッという間に埋立てられた。八重洲口に駅舎が生まれたのは翌23年のことであったがわずか半年の短い運命に終わる。原因不明の火災で焼失。仕切直しの駅舎計画は27年国鉄の鉄道開通80年記念事業の一貫として鉄道会館の建設を決定。国鉄の財政事情から民間出資を含めたものとなったが、2年間の工期をへた29年に6階建ての近代ビルディングを竣工させた。当時の建築基準法では6階がリミットであったが、法律改正の行われた43年、さらに6階を継ぎたして12階とした。1階の主要部分は東京駅が使用し、残りに大丸デパートの東京店、名店街などが入った。44年には地下街が完成、3百店が軒をならべた。26年第1、第2鉄鋼ビルが竣工。国際観光会館も29年に完成し、八重洲口は装いを一新した。

資料図－23　（丸の内1丁目②、⑤、旧同町④、⑥、旧永楽町1丁目①　東京海上ビル本館新館、新丸ビル）
慶長ころ　～慶長17－5　蒲生飛騨守秀行　会津65万石　羽柴、松平姓を称す

慶長17－5～寛永4－1	蒲生下野守忠郷	会津65万石	松平姓を称す　無嗣廃絶
寛永4－2～〃11－8	中務大輔忠知	松山24万石	〃　再興、無嗣廃絶
〃12－2～明暦2－5	酒井讃岐守忠勝	小浜12万3千石	寛永元年～明暦2年老中、大老
明暦2－5～天和2－9	〃　修理大夫忠直	〃	〃
天和2－9～元禄6－12	〃　籾負佐忠隆	〃	〃
元禄6－12～享保4－5	土屋相模守政直	土浦9万5千石	貞享4年～享保3年老中
享保4－5～〃19－1	〃　但馬守陳直	〃	〃
〃19－3～〃19－6	〃　能登守篤直	〃	〃
〃19－6～延享4－6	本多中務大輔忠良	古河5万石	享保19年～延享3年老中
延享4－6～宝暦8－10	本多伯耆守正珍	田中4万石	延享3年～宝暦8年老中
宝暦8－10～天明元－9	松平右京大夫輝高	高崎8万2千石	宝暦8年～天明元年老中のちに大阪城代
天明元－11～〃4－5	〃　右京亮輝和	〃	天明4年～寛政2年老中
〃4－5～寛政2－4	牧野備後守貞長	常陸国内3万石	寛政2～10年老中
寛政2－4～〃11－10	本多弾正大弼忠かず	泉2万石	
〃11－10～〃12－1	〃　河内守忠誠	〃	〃
〃12－1～文化3－5	戸田采女正氏教	大垣10万石	〃　2年～文化3年老中
文化3－5～〃14－9	松平伊豆守信明	吉田7万石	文化3～14年老中のちに老中
〃14－10～文政元－8	〃　信順	〃	〃
文政元－8～天保8－7	大久保加賀守忠真	小田原11万3千石	文政元年～天保8年老中
天保8－7～〃14閏9	堀田備中守正篤	佐倉11万石	天保12年～弘化元年老中
〃14閏9～安政4－8	阿部伊勢守正弘	福山11万石	〃　14年～安政4年老中
安政4－8～万延2－1	脇坂中務大輔安宅	竜野5万1千石	安政4年～万延元年老中
万延2－1～文久3－9	松平豊前守信義	亀山5万石	万延元年～文久3年老中
文久3－9～慶応元－4	牧野備前守仲恭	長岡7万4千石	文久元年～慶応元年老中
慶応元－4～〃4年	松平周防守康直	棚倉8万石	慶応元～4年老中
明治元－10～明治元－12	小笠原豊千代丸忠のぶ	香春15万石	
〃元－12～〃23年	岡山池田藩邸囲込み、陸軍省、三菱所有地（この間丸の内2丁目資料図－1参照）		

② 東京海上ビルディング

明治23年～大正7－9	明地
大正7－9～昭和20－9	東京海上ビル
昭和20－9～〃31－7	進駐軍接収＝女子下士官宿舎
〃31－7～現在	東京海上ビル、49－3東京海上ビルディング本館（東京海上火災保険）

大正11～11～不詳	第1消防署丸の内派出所
昭和5－2～昭和20－9	東京海上保険新館、東京海上ビルディング新館
〃20－9～〃31－7	進駐軍接収＝極東空軍司令部
〃31－7～〃61－12～現在	東京海上ビルディング新館

③ 新丸の内ビル

明治23年～昭和12－6	明地
昭和12－6～昭和27ころ	新丸の内ビル基礎、貯水池
〃27－9～現在	新丸の内ビル（協和銀行丸の内支店、中国銀行東京支店、日興証券新丸ビル支店、日立製作所）

東京駅前東京海上ビル本館新館、新丸ビルの慶長図には羽柴飛騨守と記載され、徳川幕府成立直後は蒲生秀行邸だったことがわかる。秀行は豊臣秀吉時代に会津92万石をおさめた秀郷の嫡男で母は織田信長の3女冬姫といった。いったん秀吉の不興をかって宇都宮に転封されたが、関が原の合戦で家康にしたがって大勝すると念願の会津に復帰した。家康の3女振姫を妻としたので徳川外戚として松平姓を名乗り、次の忠郷のとき大御所秀忠と3代将軍家光のお成りがあった。『寛明日記』によれば「（辰の口上屋敷に）ご殿を設けお成門をたてその門柱に金をもって藤花を彫る（中略）蒲生家お成門を日暗門と名づけたり」とある。黄金の茶道具で将軍を迎えた寛永元年は奥羽一帯が冷害による大飢饉で、もち、酒、豆腐などの製造を禁止し、違反者をきびしく処罰した。江戸と国元のへだたりがあまりにも大きかった。その忠郷が25才で急逝したとき嗣子がなく、いったん封地が没収されたが、弟忠知をもって松山24万石で再興。蒲生騒動、一揆とゴタゴタがつづいて課役の減免など民政につとめた。寛永11年参勤交代の途中京都で病死。今度も嗣子なくついに廃絶。酒井忠勝は江戸初政の推進者で、老中をへて4代将軍家綱時代に大老にすすんだ。

元禄以降は老中役屋敷となった。将軍綱吉から4代30余年間老中をつとめた土屋政直をへた本多忠良も8代将軍吉宗、享保の改革期13年間の老中。享保5年の江戸大火で猛火を逃れようと民衆が両国橋に殺到したので、独断で橋を開放して大惨事を未然に防いだ。本多正珍は9代将軍家重期の老中。八幡藩領民の直訴を無視したとして罷免。松平輝高は10代将軍家治、田沼政権下の老中。国内出納のことをうけ1万石を加増された。

牧野貞長、本多忠かず、松平信明は松平定信、寛政の改革期の老中。忠かずと信明は定信の同志で反田沼派幕閣として入閣。田沼意次が失脚したあと、幼将軍家斉を懐して寛政の改革をすすめた。改革の精神は次の首席老中松平信明がひきつぎ、文化3年の老中再任期は北方問題に専念した。大久保忠真は天保の改革期前後の勝手掛老中。朝廷、幕府間を周旋し、貨幣改鋳や物価統制などをすすめた。天保14年からの阿部正弘は水野忠邦後の首席老中。嘉永6年のペリー来航に際して開国の政策をとり、ペリーの国書を諸大名に示して意見を聴取した。幕府独裁政治を改め御3家、西国雄藩と協調するなどその改革にみるべきものがあったが業なかばで急死した。

江戸時代の最後は松平康直（康英）。分家康済の養嗣子から外国奉行、勘定奉行、南町奉行を歴任。元治元年本家棚倉藩主康泰の病死で養子に迎えられた。慶応元年からの3年間、14代将軍家茂、15代将軍慶喜期の老中。水戸天狗党を追討して川越8万4千石にすすむが、慶応3年大政奉還、王政復古と時勢は大きく変貌した。慶応4年1月鳥羽伏見の戦

いで幕府軍が惨敗すると老中を退いて天皇に恭順し、維新の戦いではひたすら官軍に協力した。

明治維新直後の東京海上ビル、新丸ビルの地は丸の内2丁目の項で紹介する池田岡山藩邸に囲い込み、以後、司法省、陸軍兵学寮、東京鎮台第1大隊兵営、騎兵営などとなり、明治23年に三菱合資の所有となった。その後しばらくの明地をへたこの地に、日本最初の本格オフィスビル・東京海上ビルディングが建築されたのは昭和4年のことであった。曽根中条建築事務所が設計した鉄筋コンクリート7階で、延べ面積が1万7千平方メートル。ビルは直後の関東大震災、太平洋戦争の戦禍を免れるが、戦後の20年から31年まで、連合軍女子士官宿舎として接収された。

接収解除後の36年ころから老朽化がめだち、営業規模の拡大で社員数が増えたことから手狭となったので、49年に地上25階地下4階の新ビルを建築した。高さが百8メートル、延べ建築面積が6万3千平方メートルと旧ビルの4倍ある。レンガ色の格子状で、外装のタイルは約百万枚、特製で焼成されたものだという。創業百10年にあたる平成元年、1階に介護、福祉センターと帰国子女相談窓口などを作った。同一敷地にある新館は昭和5年の誕生だが、61年に地上16階地下4階のホワイトビルに作り直した。

新丸の内ビルの地は、三菱の所有地となった明治中期から昭和はじめにかけての40年間が明地で、独立会社を創設したばかりの三菱地所が合資の所有地に巨大ビル建設を計画したことにはじまる。紀元2千6百年を3年後に控えた12年、東京オリンピックと万国博覧会（いずれも中止）開催国の首都、東京中央駅の玄関口に東洋一の大建築をめざしたが、しのびよる戦争の影は、このビル計画を夢ものがたりとした。この年にはじまった日中戦争はとどまるところを知らないドロ沼へとのめり込んでいく。軍需産業が優先され、不要不急とされたビル建築資材の割当がえられない。三菱地所では基礎工事の完了をもって工事の一時中断を決定した。

昭和18年8月、戦局の悪化にともない、基礎工事地は防火用水のための貯水池とされることになり、1万平方メートルの敷地いっぱいに5万トンの水がはられた。浄化と夏蚊対策として5万尾の鯉が放流され、終戦直後のころ、貯木場とされた。苦難の道をたどった戦後の26年に工事が再開されたが、戦後ビルブームのはしりとはいえ、鉄骨やセメントも入手困難という極端なモノ不足時代。約2年間の工期をへて27年11月に竣工した。基礎工事開始から実に15年の歳月がたった。地上8階地下2階、延べ建坪は6万5千平方メートルにもおよび、三菱鉱業、日立製作所、大洋漁業、日本航空などの企業が入居した。

資料図1-24
天正ころ～寛永5-2　町屋

正保ころ　伝庵、薬院、幸阿弥与兵衛、水野　某

資料図1-25　（丸の内1丁目⑦、⑨、⑩、旧同2丁目①、旧永楽町1丁目②　東京駅）
慶長ころ　黒田筑前守長政　福岡52万3千石
〃　池田右近大夫輝興　佐用2万5千石
寛永ころ～寛永11-7　森　右近大夫忠政　津山18万6千石
〃　11-8～延宝2-4　大内記長継
延宝2-4～貞享3-5　〃　伯耆守長武
貞享3-5～元禄10-2　〃　美作守長成
寛永11年～明暦3年　森美作守中屋敷　養子衆利発病廃絶
元禄10-9～宝永元-2　松平讃岐守頼常　高松12万石
宝永元-2～〃　2-12　〃　頼豊
〃　2-12～正徳元-2　元禄11-9割替えで松平淡路守邸など拝領。若干移動　松平伊賀守忠周　上田8万石
正徳元-2～享保19-6　本多中務大輔忠良　古河5万石
享保19-6～寛延2-11　宝永7-1切地上地　土屋左門篤直　宝永7-1切地上地
寛延2-11～宝暦8-10　松平右京大夫輝高　高崎7万2千石
宝暦8ころ～〃　10-12　本多伯耆守正珍　田中4万石
〃　10-12～〃　12-1　井上河内守正経　浜松6万石
〃　12-1～〃　12-12　堀田相模守正順　佐倉10万石
〃　12-12～寛政元ころ　松平周防守康福　浜田6万5千石
寛政元ころ～〃　5ころ　松平和泉守乗完　西尾6万石
〃　5-10～文化12-4　安藤対馬守信成　平5万石
文化12-4～文政11-2　酒井若狭守忠進　小浜12万3千石
文政11-2～天保2-6　牧野備前守忠精　長岡7万4千石
天保2-6～〃　11-11　松平伯耆守宗発　宮津7万石
〃　11-11～〃　12-4　井上河内守正春　浜松6万石
〃　12-4～弘化2ころ　松平和泉守乗全　西尾6万石
弘化2ころ～嘉永元-10　酒井若狭守忠義　小浜12万3千石
嘉永元ころ～〃　7ころ　久世大和守広周　関宿5万8千石
〃　7ころ～文久2-10　水野出羽守忠寛　沼津5万石
文久2-10～元治元-9　井上河内守正直　浜松6万石
元治元-9～慶応2-10　松平伯耆守宗武　宮津7万石
慶応2-10～〃　4年　稲葉美濃守正邦　淀10万2千石
明治はじめ　仁和寺宮
〃　はじめ　三条実美
〃　はじめ～明治2-9　民部省
〃　2-9～〃　28-12　刑部省、4-7司法省

天保14年～嘉永3年京都所司代
嘉永元～5年西の丸老中、老中
安政6年～文久2年側用
文久元年～元治元年老中
慶応2～4年老中
別資料稲葉淀藩邸継続

明治30－3～明治32年　海軍予備校仮校舎
〃　5－7～〃30－1　司法裁判所、8－5上等裁判所
〃　中期～〃30ころ　高等師範学校第2校舎
〃　30－12～〃33ころ　東京地方裁判所
〃　中期～〃30－1　東京区裁判所
〃　30－1～しばらく　控訴院
〃　1905－1～明治30－1　永楽病院
〃　30－7～〃33ころ　東京駅用地
〃　33ころ～〃41－3　国鉄東京駅、昭和62－3JR東日本東京駅、JR東海東京駅
大正3－12～現在　東京駅貴賓施設

史跡

大正4－12～現在　旧司法省庁舎
昭和28年～昭和43年　霞が関移転
〃　～現在　旧司法大臣官舎

資料図1－26（丸の内1丁目⑨　東京駅中央ターミナル北側、北口バスターミナル）
慶長ころ～元和6－2　蜂須賀阿波守至鎮　徳島25万8千石
元和6－4～承応元－4　〃　忠英　〃
承応元－5～寛文6－5　〃　光隆　〃
寛文6－5～延宝6－7　〃　綱通　〃
延宝6－10～元禄11－9　〃　淡路守綱矩　〃
元禄11－9～　松平讃岐守邸に囲込み（以下資料図1－25参照）

資料図1－27（丸の内1丁目⑨　東京駅中央ターミナル南側）　資料図1－25参照
慶長ころ　黒田福岡藩邸つづき
寛永4ころ～寛永ころ　池田出羽守由之　池田輝政兄の長男。輝政の家臣。早世絶家
〃　ころ～明治2－1　池田岡山藩向屋敷
別資料　延宝図池田信濃守政言、天和図池田備中守某、元禄図池田丹波守輝録
元禄11－9大火後の割替えで松平讃岐守邸の一部を添地拝領　生坂1万5千石　生坂藩知事
池田丹波守政礼　司法省用地、上等裁判所、大審院（以下資料図1－25参照）
明治2－2～〃4ころ　近藤石見守秀用　井伊谷1万7千石　小田原定番
〃　4ころ～〃33年　〃　縫殿助用可　5千石

元和8年～寛文ころ　近藤縫殿助用治　3千9百石
寛文ころ～元禄はじめ　岡部左近、角左某
元禄はじめ～〃11－9　松平丹波守中屋敷
〃　11－9～〃14－1　坂部三十郎広慶　5千石　将軍綱吉小姓
〃　14－7～〃15年　広隆　〃
〃　15閏8～正徳4－1　丹羽遠江守長守　中町奉行所
正徳4－1～享保2－2　中山出雲守時春　享保2－2常磐橋もと北町奉行所あとへ移転。享保4年まで3奉行所制となる
享保2－2～〃14－10　植村土佐守正朝　勝浦1万石　大番頭、大阪定番
〃　14－10～寛延4－10　〃　恒朝　〃　大阪定番
寛延4－10～文化2－1　松平因幡守康明　6千石　寛延4－10松平因幡守半分を拝領。残りは堀又七郎預かり
文化2年～天保12－4　林　肥後守忠英　請西1万8千石　側衆、文政8～12年若年側衆
天保12－4～〃12－8　文政3－2松平丹波守邸の一部を添地拝領
〃　12－8～〃13－1　松平丹波守預かり　水野壱岐守忠実　鶴枚1万5千石　天保12～13年西の丸若年
〃　13－3～明治4年　肥前守忠順　〃　内務省警視局監舎、7－8警視庁鍛冶橋監獄署　市ヶ谷へ移転
明治4ころ～〃35年　東京駅用地（以下資料図1－25参照）

資料図1－29（丸の内1丁目⑨　東京駅中央部）
慶長ころ～貞享元－7　井伊掃部頭直孝　大番頭1万石　のちに彦根藩主、元老
寛永ころ～貞享元－7　近藤彦九郎用持　5千4百石　百人組頭ほか
貞享元－7～宝永ころ　用慶　5千石
宝永ころ～　町奉行所、松平丹波守邸に囲込み（以下資料図1－28参照）

資料図1－30（丸の内1丁目⑨　東京駅ホーム北側）
慶長ころ～寛永9－12　松平丹波守康長　松本7万石
寛永10－2～〃11－5　〃　康直　〃
〃　11－6～寛文8－7　〃　阿波守光重　加納7万石
寛文8－～宝永2－2　〃　丹波守光永　〃
宝永2－4～享保2－9　光熙　淀6万石
享保2－11～17－8　光慈　松本6万石
〃　17－10～宝暦6－11　光雄　〃
宝暦6－11～〃9－1　光徳　〃
〃　9－3～安永3－12　光和　〃
安永3－12～天明6－6　〃　阿波守光悌　〃
天明6－8～寛政12－2　〃　主膳正光行　〃
寛政12－2～天保8－2　〃　丹波守光年　〃
天保8－3～弘化2－10　光庸　〃　、松本藩知事
弘化2－10～明治3－8　光則　〃　正親町三条実愛　議定、大納言
明治3－8～しばらく　〃　〃　司法省用地（以下資料図1－25参照）
〃　5－3～

資料図Ⅰ-31、32　（丸の内1丁目⑲　東京駅ホーム北側）
慶長ころ～寛永ころ　村上源助某　不詳
寛文ころ～元禄11-9　土手屋敷　松平松本藩、近藤彦九郎向屋敷

東京駅のド真ん中、中央口、南口、東京ステーションホテルを中心に東は1～3番線ホーム、西は駅前南口ターミナルの大半を網羅したあたりに福岡52万石の黒田長政邸があった。長政は織田信長、豊臣秀吉時代に活躍した孝高（如水）の長男。家康の会津攻めで先鋒をつとめ、関が原の合戦では小早川秀秋を東軍に寝返させるなど勝利に貢献して筑前1か国が与えられた。東京駅北口は家康の娘ムコ池田輝政の6男輝興。はじめ父遺領のうち佐用2万5千石の分知をうけ、兄政綱の逝去にともなって赤穂3万5千石に直ったが、突然発狂して妻を刺殺。所領没収のうえ本家光政にお預けとなった。

黒田福岡藩邸の東半分、レンガ駅舎の一部は寛永ころから森津山藩邸となった。忠政は秀吉に仕え、関が原の合戦後川中島→津山18万石をえた。長成のとき5代将軍綱吉の生類哀れみの令が発令され、手伝い普請として中野に12万坪におよぶ大小屋建設をすすめたが急死。弟衆利を末期養子と定め幕府の裁可をえたがお目見え途上で発病改易となった。元禄時代は松平高松12万石上屋敷。頼常は水戸黄門光圀の長男だが先代頼重の嫡子綱条と入替え相続、緊縮政策で藩財政の建直しをはかった。

松平忠周からは幕閣の役屋敷となった。忠周は宝永2年から綱吉最後の側用人。本多忠良は老中待遇時代、松平輝高は京都所司代で、佐倉の堀田正亮は老中。享保の改革以後の幕政を掌握した。松平乗完のとき松平定信と寛政の改革で旧勢力を一掃した。牧野忠精は12代家慶期の老中、勝手方（大蔵大臣）だが、大御所時代、幕府の財政基盤は一段と脆弱化していった。老中再任となった松平乗全ころから幕末の風雲が急をつげるようになる。酒井忠義は12代将軍家慶期の京都所司代。安政の大獄、和宮降嫁などをすすめたが、寺田屋事件の責任をおって罷免された。久世広周も一ツ橋慶喜派老中として幕末期の政局に身をおく。最後は水野沼津藩邸。忠寛は井伊直弼大老の与党として安政6年側用人にすすむが、直弼の急死でお役ご免となった。忠誠は第2次長州征伐のときの老中だが帰陣途中で亡くなり、末家水野忠明の2男忠敬を養嗣子とした。鳥羽伏見の戦いがはじまると東征軍に恭順し、甲府城代として急進佐幕派の鎮圧にあたった。

東京駅レンガ積み駅舎の北口から中央口近くまで、バス発着場を含む駅前ターミナルの北側半分と1～3番線ホーム神田よりはじめに蜂須賀徳島藩邸があった。至鎮は豊臣秀吉の忠臣家政の嫡男。関が原の合戦のとき家康に組して阿波1か国を与えられ、大阪の陣の活躍で25万7千石に加増された。忠至のとき海部騒動が起こり、4代綱通に後継がなく分家綱矩を養子として後見した伯父隆重に富田5万石を分知した。

東京駅ホームの中央部あたりの慶長期に若き日の井伊直孝邸があった。直孝は徳川4天王の1人井伊直政の2男だが大阪の陣は病中の兄直継に替わって出陣し家康の命で父の遺領彦根城主の座を継承した。近藤秀用は家康の創世期にしたがい、大阪の陣は老体にムチ打って先陣をつとめて1万石の大名に列した。元和5年願いによって伊奈谷1万7千石に栄転、翌年徳川紀伊家に任官中の嫡係貞用をよびよせて3千石、2男用可に2千3百石などを分知して1万石を割り旗本となる。用持のときさらに分知し、用可も次代に2家にわかれた。

元禄後期のころ、これまでの南北2奉行所に、この地に新設された中町奉行所が加わって3奉行所となり、丹羽長守が任命された。このころ赤穂浪士に不穏な噂があったので、その備えともいう。享保2年、常磐橋の北町奉行跡に戻った。植村正朝は5代将軍綱吉期の大番頭だが、次の恒朝のとき分家植村千吉が斬殺され、虚偽の届出があったとして廃絶。林忠英は11代将軍家斉に近侍して木更津市内に1万7千石をえるが、水野忠邦による天保の改革でその取巻きとして処分された。最後は譜代名門の水野鶴牧藩邸。忠実は天保の改革期に若年寄となり、忠順が明治維新の戦いで、新政府軍の指揮下に入った。

東京駅構内のホーム北側の地に戸田松本藩邸がおかれた。戸田家は徳川家とは重縁で、松平姓を称した。康長のとき関が原の合戦の勝利で白井、古河、笠間、高崎をへて松本7万石にすすんだ。次の康直が18才の若さで亡くなったときいったん廃絶されたが、幕府の特別のはからいをもって養子光重が再興した。最後の藩主光則の慶応4年に明治維新。新政府に1万5千両を献上して奥州、会津を転戦した。

明治4年の廃藩置県を契機に丸の内一帯の府県旧藩邸が没収され、司法省が3万坪におよぶ広大な土地を収得した。その広さは津山松平藩邸を中心に旧本多藩邸、旧松平藩邸、旧酒井藩邸、旧岡山池田藩中屋敷、旧水野藩邸、旧戸田藩邸、旧水野藩邸の8邸跡で、東京駅を中心に丸の内側の駅前、ガード線路敷におよんだ。司法省の前身刑法官支庁が安藤与十郎邸に設置されたのは明治元年10月のことで、同じ月呉服橋そばにあった北町奉行所跡に庁舎をうつし、2年東京駅旧水野藩邸に再移転、同年刑部省、4年司法省とその名を改めた。転々とした本庁舎を東京駅前広場旧本多藩邸に定めたのは5年5月のことで、以後明治30年市区改正事業で司法省が霞が関に移転するまでの間、東京駅周辺が司法の中心地とされた。初代司法卿が江藤新平で、大木喬任、田中不二麿がつづいた。江藤は佐賀藩出身の官僚政治家で立法知識は百官ならぶものなしとされたが、明治6年西郷隆盛、板垣退助らの征韓論に同調して下野。反動士族の首領として挙兵、敗死した。

司法省構内には大審院、東京裁判所、司法省裁判所、控訴院、明法寮、司法大臣官舎などがおかれた。大審院は今日の最高裁判所にあたる。8年旧松平岩村藩邸に設置し、10年

に木造2階建のモダン庁舎を新築した。翌11年4月隣接して木造洋館、9百50坪の東京裁判所を開設。当時は高裁が上等裁判所で地裁を東京裁判所といった。控訴院は1審判決の上訴審査機関で、明法寮はわが国最初の法律専門学校。明治4年の設立で、翌5年大学南校（開成学校）のアメリカ人教師ソベロールを迎えて、第1期生20名が入学した。卒業生の多くはのちの法曹界を担った。旧水野鶴牧藩邸跡は警視局監舎となり、7年に洋式の新監獄署が新設された。明治11年大久保利通が暗殺されるという事件がおこったが、その犯人・島田一郎が収監された。14年構内に監獄女工場を新築して紡績などの労務に就かせた。明治30年市区改正方針にそって司法省諸施設を霞が関の新築レンガ建て庁舎に移転した。

跡地はしばらくの間、永楽病院、海軍予備校舎、師範学校校舎などとされた。永楽病院は開業医の養成試験を目的とし、海軍予備校仮校舎は海軍兵学校、海軍機関学校入学志願生徒の養成機関、高等師範第2校舎は湯島本校の分校。同じころ大手町で紹介した郵便電信局の既舎もおかれた。レンガ塀の建物で郵便集配の赤い馬車を引いた。

東京駅の建設が決定したのは明治22年のことであった。この年東京市議会は東京市区改正事業計画を審議し、東海道本線起点新橋駅と東北本線起点上野駅を高架線で結び、その中間点丸の内に中央停車場を建設することを決めた。その実現は予算不足と日清戦争などで延期を繰返したが、明治41年3月基礎工事を起工。7年間におよぶ工期をへた大正3年12月ようやく竣工式を迎えた。設計は辰野金吾博士が担当。総工費2百80万円。オランダのアムステルダム駅をモデルにしたといわれるルネッサンス式で、あまりにも大きくあまりにもモダン建築に世人は仰天した。12月20日の開業式には青島攻略をはたした久留米師団の凱旋が加わり、国家的行事の2重奏に群衆が殺到し、歓声をあげて竣工を祝福した。

開業まもなくの大正10年に駅構内出札通路で原敬首相が暗殺され、昭和5年には浜口雄幸首相もホームで狙撃された。当時の列車は山の手線が電車だったほかほぼ全車両が煙をたなびかせた機関車が引いた。大正8年東京＝下関間に初の急行列車が開通。12年には特別急行列車の第1号車が走った。大正12年9月、関東一円を襲った大地震は死者11万人、市内の建物の3分の2以上を倒壊、焼失させた。幸い東京駅舎はビクともしなかったが、列車の脱線、転覆が24本をかぞえ、東京駅構内にあった鉄道省と市内の18駅が焼けて線路はズタズタに寸断された。東京駅には避難の人々が殺到して待合室、通路、ホームや停車中の客車、貨車が鈴なりの人たちで溢れた。復興は驚くほどの早さですすめられ、2か月後に東京、上野間が開通し、東京駅が東北線の起点となった。

昭和に入って日本が軍事大国への道を歩むと、軍事輸送に主力がそそがれるようになってくる。観光客の姿が消え、出征兵士をのせた軍事列車がはばをきかせた。男子従業員は戦地にかり出され女子職員が改札にたった。昭和20年5月25日、東京の空を覆ったB29の編隊が東京駅にも焼夷弾の束を降りまくと不燃を誇った駅舎もみるみるうちに炎に包まれ、赤レンガの外壁を残してすべてが灰燼と化した。戦後の22年空襲で焼けただれた駅舎を模様替え、3階建てが2階建てとされた。翌23年八重洲口駅舎を開設するが失火焼失。現在の八重洲口鉄道会館が完成するのは昭和29年のことで、43年12階ビルに増築、東京駅と結ばれた地下に大商店街が完成した。

高度成長の陰で都心部の通勤ラッシュが過密をきわめたが、東京オリンピックを目前にした昭和39年東海道新幹線が開通。47年総武地下駅を完成させて千葉県と神奈川県を地下で結び、京葉地下駅も平成2年に開業した。東京駅は文字どおり首都圏中央駅として新鉄道時代のにないてとなった。東京駅の民営化は昭和62年に行われ、JR東日本、JR東海の2社に分割された。

資料図－33　（丸の内1丁目⑪　東京＝有楽町間JRガード、鍛冶橋換気所側）

慶長ころ　～寛永8－10　保科肥後守正光　高遠2万5千石
寛永8－11～〃10－2　〃　正之　山形20万石　将軍秀忠3男
〃10－2～寛文元－11　保科弾正忠正貞　飯野1万7千石
寛文元－12～貞享3－10　〃　越前守正景　〃　2万石　大阪定番
貞享3－10～元禄11－9　〃　兵部少輔正賢　奥勤
元禄11－9～〃16－11　寛文元－2割替えで土手屋敷添地拝領
〃16－11～宝永2－1　松前伊豆守嘉広　1千6百石　南町奉行所
宝永2－1～享保4－4　林　土佐守忠和　3千石　〃
享保4－5～〃6－2　坪内能登守定鑑　1千百石　享保2年中町奉行所
〃6－2～〃6－2　松平右近預かり　坪内能登守元屋敷、道路敷などを拝領
〃6－4～〃20－8　本多遠江守正武　沼田4万石　江戸城警護方
〃20－12～延享3－11　伯耆守正矩　〃　田中4万石　寺社奉行
延享3－11～天明元－4　伯耆守正珍　〃　岩村3万石　寺社奉行
天明元－4～享和3－8　松平能登守乗もり　〃　河内守乗保　〃　寛政10年～文化元年西の丸若年寄

享和3－8～文化3－10　安永元－5道路敷を添地拝領　寺社奉行
文化3－10～〃7－6　水野出羽守忠成　沼津3万石　大阪城代
〃7－6～〃12－11　松平能登守乗保　岩村3万石
〃12－11～〃14－12　青山大膳少輔幸孝　郡上5万石
〃12－12～〃14－12　〃　大膳亮幸寛　〃　文化12年寺社奉行
〃14－12～文政2－9　一部を松平越後守邸に囲込み
文政2－9～〃13－5　松平備前守預かり　別資料文政12－8～
〃13－5～　厩　曲木又六郎預かり　松平越後守邸に囲込み（以下資料図－40参照）

資料図－34～36　（東京＝有楽町間ＪＲガード、鍛冶橋換気所側）

慶長ころ～明暦ころ	朽木主膳某	不詳	
寛永6年～寛文元－2	小出信濃守吉親	園部2万9千石	別資料　慶長図
〃　6年～寛永20－10	吉良左兵衛督義弥	3千石	
寛永20－12～寛文8－3	若狭守義冬	4千石	
〃　上野介義央		1千4百石	元禄5～14年高家筆頭
寛文8－7～元禄11－9	別資料　寛文2－2小出伊勢守邸、土手際屋敷を添地拝領		
元禄11－9～	松平備前守邸に囲込み（以下資料図－40参照）		

資料図－37　（東京＝有楽町間ＪＲガード、東京駅側）

慶長ころ	木作左之助某、須賀摂津守某		
元和2－7～寛永9－8	朽木牧斉元綱	隠居3千2百石	
寛永9年～明暦3年	〃　与五郎友綱	朽木藩分家2千石	
正保ころ	荒川右近定昭	1千7百石	
寛文8－8～天和2－12	松浦猪右衛門信貞	3千石	勘定頭
天和2－12～〃　3－5	〃　覚左衛門信方	〃	
〃　3－5～元禄2－7	本多淡路守忠豊	郡山本多家分家	
元禄2－7～〃　11－9	大久保伊豆守忠高	八幡1万石	閉門中居住
〃　11－9～	松平備前守邸に囲込み（以下資料図－40参照）		

資料図－38　（東京＝有楽町間ＪＲガード、東京駅側）

慶長ころ～明暦2－3	日根野織部正吉明	府内2万石	
明暦3－3～元禄11－9	安藤壱岐守重良	安藤右京家分家	明暦2年無嗣廃絶
	明暦3－3安藤伊賀守重忠拝領ともいう		
元禄11－9～	松平備前守邸に囲込み（資料図－40参照）		

資料図－39　（東京＝有楽町間ＪＲガード、東京駅側）

慶長ころ～承応ころ	寺沢志摩守広高	唐津12万7千石	
明暦ころ～慶安2年冬	森津山藩中屋敷		
慶安2年冬～慶安3－3	松平周防守某	不詳	
明暦3－3～元禄10－7	池田岡山藩中屋敷		
元禄11－9～	山名主殿矩豊	6千7百石	交代寄合
	松平備前守邸に囲込み（資料図－40参照）		

資料図－40　（丸の内1丁目⑩、⑪、旧丸の内2丁目①、旧八重洲町2丁目①　東京駅南はじ構内、隣接ガード）

慶長ころ～元和4－7	秋元越中守長朝	総社1万5千石	
元和4－7～延宝6－10	蜂須賀徳島藩中屋敷		
延宝6－10～宝永4－8	蜂須賀飛騨守隆重	富田5万石	
宝永4－8～元禄11－9	〃　隆長		
	蜂須賀飛騨守、大久保伊豆守、吉良上野介、安藤長門守邸のうち拝領		
元禄11－9～享保6－2	松平備前守宣富	津山10万石	
享保6年～〃　11－11	松平浅五郎	津山10万石	
〃　11－11～〃　20－10	〃　越後守長ひろ	〃　5万石	
〃　20－12～宝暦12閏4	長孝		
宝暦12閏4～寛政6－8	康哉		
寛政6－8～文化2－7	康はる		
文化2閏8～天保2－11	斉孝	〃　10万石	
天保2－11～安政2－5	斉民		将軍家斉の16男、養子
安政2－5～明治2－6	三河守慶倫		
明治2－8～〃　4年	松平津山藩邸		

資料図－41　（東京駅丸の内南口側高架下）

昭和32ころ	⑩東京駅丸の内南口側高架下		
〃　5－3～	平成はじめ		
〃　5－8～明治14年	⑪国労会館、興銀ヤンマー合同ビル		
〃　15－2～〃　44－9	昭和20年代～現在		
〃　17－7～〃　44－9	喫茶丸の内、ミス歯科、弁当大和、セルバー商会、だんろ、朝霞製作所鉄道、資材商会、パチンコ木村、木村屋丸の内売店、資材部東京支部、自動車修理、三富すし、印金長堂、パチンコ東京、丸山バン、中野食堂、グリルニューヨーク、パチンコかもめ、喫茶ヤングベリー、更級そば、第1楼、軽食カヂヘン		
大正3－12～昭和17年	この間省略		
〃　44－9～大正3－12	はとバス待合所、コーヒーエース、ラーメンどさん嫁、カラーサービス、軽食木村屋、日通社員食堂、高金堂、スナックココ、双葉タイプ、美容みやこ、丸の内更級、第1楼、楼麻荘、小島時計、ニューヨーク、かもめ		
〃　29－3～〃　30年代～〃　30年代	東京工事局		
	国鉄労働会館		
	日本石油八重洲給油所		
	国鉄工事局東京施設、丸の内電気工事局、鉄道会館、構内タクシー案内所、鉄道郵便局分室、日本石油、東京電灯詰所、水道局詰所、千代田区役所詰所、鍛冶橋映画、駐車場		
	新橋建設区東京支区、八重洲第1工事所、工事作業現場		
	日本興業銀行中小企業センター、興銀ヤンマー合同ビル		
	首都高速鍛冶橋換気所		
	ＪＲ東海旅客鉄道		

⑪高架下周辺
昭和30年代　ナイロン靴下スリサエ、伊藤パン
〃32ころ　理容ペンギン、バーキャロン、双葉タイプ
〃38ころ　きやぼん、ロビン、さくら堂

資料図－41　（東京駅南はじ構内、隣接ガード）
寛文元－2～元禄11－9　吉良上野介向屋敷
〃ころ　～〃11－9　蜂須賀富田藩向屋敷
〃ころ　～〃11－9　保科飯野藩向屋敷
元禄11－9～　道路敷

地図をみると東京駅構内周辺は入組んで丸の内1丁目に入っている。その有楽町側JRガード、鍛冶橋換気所側あたりに最初の保科藩邸があった。藩祖の正光は家康の関東入府にしたがい、関が原の合戦後高遠2万5千石となった。元和3年、2代将軍秀忠から当時6才の4男正之の養育を命ぜられる。正光には嫡子がなくいったん家督はこの正之に継承されたが、やがて3代将軍家光の弟として重遇されるようになる。寛永13年、山形20万石に栄進。翌14年には保科家伝来の宝物を養父の弟の嫡子・正貞にゆずる。家督相続者として公認された正貞は慶安元年1万7千石をもって諸侯に列した。

元禄11年大火のため割替え、保科邸と吉良邸は鍛冶橋門前広場と南町奉行所とかわった。この地の奉行は松前嘉広以下の3人。坪内定鑑は火付盗賊改方から。享保2年の人事異動で、常磐橋の北町が数寄屋橋に異動して南町に変わり、前出、資料図－28の中町が北町跡に移転したので中町と改称した。4年、坪内は中町奉行を辞任。幕府は後任を定めず自然淘汰される形で2奉行制にもどった。本多沼田藩邸からは再び大名家上屋敷とされたが、文政年間に廃となり、松平津山藩邸に囲込みとなった。

東京＝有楽町間JRガード、東京駅側のはじめに小出吉親が住んだ。豊臣秀吉につかえた吉政の2男。関が原の合戦では祖父と父が西軍に属したが、オジらの一族は徳川方に与して旧領が安堵された。つぎの吉良家は清和源氏のわかれで室町時代は将軍家につぐ名門とされた。義弥のとき2代将軍秀忠につかえて3千石を与えられ、義冬は千石の加増をえて、役料千石が加算された。高家は幕府の儀式典礼のよりどころで勅使、公家接待などの公務が与えられた。義央は忠臣蔵の仇役として有名だが、事件の直前元禄11年の大火で東京駅神田側の地に移転した。

朽木元綱は関が原の合戦で西軍についたが東軍に内通し、小早川秀秋とともに大谷吉継陣営を破って家康の元にかけつけた。戦後9千5百石をえたが、家康没後剃髪して江戸にくだりガードの地に隠居邸をうけた。大久保忠高は家康側近の忠世弟の孫。3代将軍家光の信任をえて加増、1万石となり市原市内に陣屋をおいた。知足院造営を命ぜられたとき落度があったとされて閉門、8年後に許されて封地を近江に移した。

日根野吉明の父高吉は豊臣秀吉に仕え諏訪2万7千石を与えられた。関が原の合戦は家康陣営にしたがったが会津攻め途中で急死し吉明が壬生に減封された。明暦2年後継がなく廃絶。寺沢広高も父が関が原の合戦で唐津12万3千石となった。森、池田中屋敷をへた山名矩豊は元守護大名山名宗全の末裔で豊国のとき家康に近侍して6千7百石をえ、大名待遇の交代寄合で高家に列した。

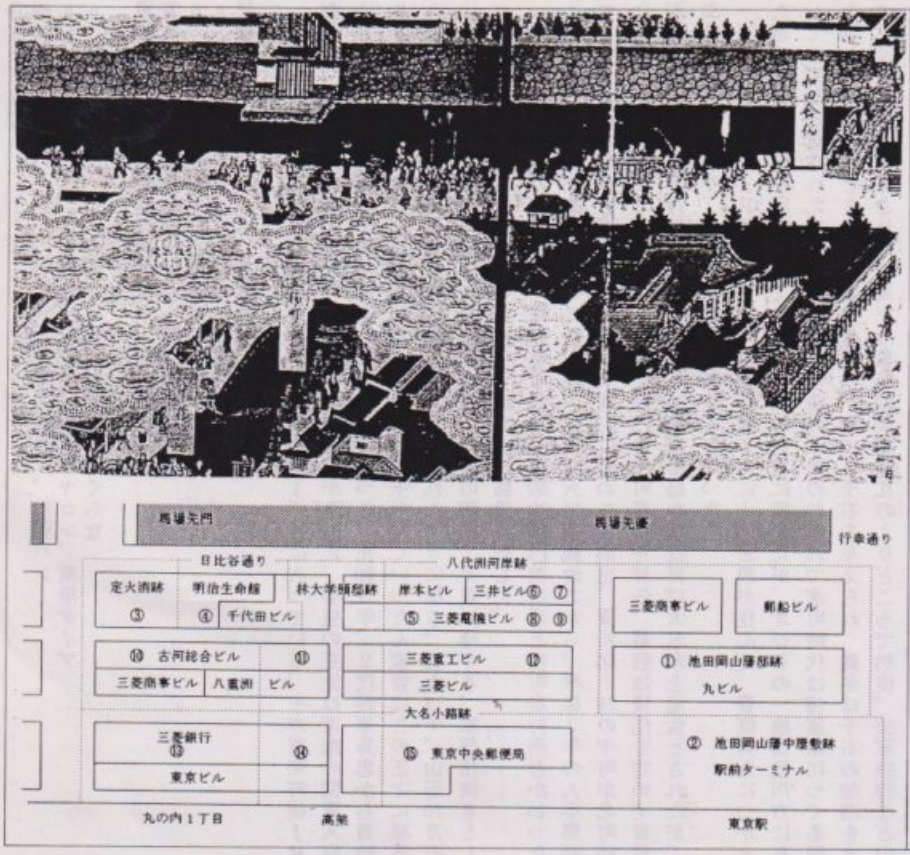
東京駅南はじ構内、隣接ガード周辺の秋元長朝は家康の家臣で関が原の合戦後総社1万石をえた。蜂須賀阿波藩の中屋敷をへた元禄11年の割替えで蜂須賀、大久保、吉良、安藤の4邸が松平津山藩邸になった。松平越前家の嫡流だが2代忠直、3代光長が改易処分とされ、名跡は残されたが世子綱国の家督相続は認められなかった。元禄6年姫路藩松平直矩の3男宣富をもって再興、津山10万石に封じられた。次の浅五郎のとき嗣子なく一門の松平白河家の子を末期養子としたとき5万石に減封され、斉孝のとき実子を差し置いて11代将軍家斉の16男斉民を養嗣子とし10万石に復した。人柄も温厚で幕末政局に重きをなし、明治元年徳川宗家の後見人となった。

明治維新後、警視庁発祥の地となった。警視庁の前身東京府ら卒が旧松平津山藩邸に配備されたのが明治4年のことであった。維新直後の東京市中は旧幕臣の抵抗もあって治安は乱れていた。みかねた新政府は諸藩兵、府兵、旧町奉行の市政裁判所に市中取締りを命じたが規律が悪く非力で、東京府は西郷隆盛の発議をうけてら卒3千名を採用した。5年8月司法省警保寮に移管、7年に東京警視庁となった。明治15年新庁舎を竣工したが、44年木造庁舎の老朽化と警察事務拡大による狭溢、東京駅工事のため有楽町に移転した。

大正3年、東京駅が完成。駅の八重洲側は広大な線路敷地で東京機関区がおかれた。機関区は客車を牽引する機関車の車庫。当初こそ一部に蒸気機関車もあったが、昭和2年の東海道線電化にともなってすべてが電気機関車となった。戦時色の強まった17年、品川、田町間に移転したが、跡地は引き続いて機関区とよばれた。戦後は八重洲民衆駅の誕生とともに周辺一帯の整備がすすみ、国労会館、東京工事局、興業銀行・ヤンマー合同ビルなどが建設された。

東京駅八重洲口の国労会館の竣工は昭和29年4月。日本国有鉄道国鉄労働組合の略称で、昭和22年国鉄の各部門が結集したわが国最大の単産組合。官公労組の中心として戦後の労働運動の先頭にたったが、23年にスト権を奪われ、組合内部のはげしい左右対立、組織離脱、国鉄民営化にともなうJR反対闘争など激動の戦後史をきざんだ。

第⑩話　丸の内2丁目ものがたり



丸の内2丁目は東京駅から皇居側にでた左側。丸ビル、東京中央郵便局、三菱ビル、三菱銀行、古河鉱業などがたちならぶ三菱街の一画にあたる。家康入府当時の丸の内一帯は日比谷入江の海中にあり、日比谷通りに沿って松林の連なる海岸線になっていた。文禄元年の西の丸工事で残土をはこんで整地作業を行ない、慶長5年の関が原合戦勝利のころ、オランダ船員のヤン・ヨーステンが日本に漂着して家康につかえ一画に屋敷をたまわって八代（重）洲殿とよばれたのが、八重洲の地名の起こりだという。

慶長8年2月、家康は諸大名に命じて日比谷入江埋立て工事に着手する。66名の大名を松平秀康、上杉景勝、本多忠勝、蒲生秀行、伊達政宗、生駒一正、細川忠興、黒田長政、加藤清正、浅野幸長の10組にわけそれぞれ石高千石につき10人づつの人夫を出しあったことから千石夫とよばれ、総数は1万人にもおよんだ。駿河台あたりとされる神田山を切崩した土砂が日比谷入江に運ばれ、方30町が埋立てられたという。丸の内郭はこのとき完成し諸大名邸地として与えられた。丸の内の名は城郭の内部を意味し、寛永以降の呼び名だという。当初は駅中央ターミナルの地に黒田長政、日本郵船、丸ビル一画に池田輝政が居館をかまえ、中期以降、定火消屋敷、幕府儒者林大学頭邸などがおかれた。皇居前広場の西の丸下とは馬場先門で、銀座側町屋とは鍛冶橋門でつないだ。鍛冶橋は慶長埋立て時の無名橋で、寛永6年奥羽諸侯が枡形門とした。明暦3年の大火で焼失したが万治2年に再築。櫓門をでた右に大番所があった。警護は1万石クラスの外様大名が鉄砲10丁などを常備して守った。橋名はわたって銀座側の鍛冶町に由来した。

資料図1-1　（丸の内2丁目③④、旧丸の内2丁目②、⑳、旧永楽町1丁目①　日本郵船ビル、三菱商事ビル別館、丸ビル）

慶長ころ	～慶長18－1	池田三左衛門輝政	姫路52万1千石
〃	18－6～元和2－6	武蔵守利隆	岡山42万石
元和2－6	～寛文12－6	新太郎光政	32万石
寛文12－6	～正徳4－10	伊予守綱政	〃
正徳4－12	～宝暦2－12	大炊頭継政	〃
宝暦2－12	～明和元－3	伊予守宗政	〃
明和元－5	～寛政6－3	内蔵頭治政	〃
寛政6－3	～文政12－2	上総介斉政	〃
文政12－7	～天保13－1	伊予守斉敏	〃
天保13－5	～文久3－2	内蔵頭慶政	〃
文久3－2	～慶応4－3	備前守茂政	〃
慶応4－3	～明治4年	〃	〃
明治4年	～〃4ころ	司法省	羽柴、松平姓を称す
〃5年	～〃8ころ	陸軍東京兵学寮、7－8陸軍士官仮学校	松平姓を称す
〃8年	～〃13年	明地、一部倉庫など	
〃14年	～〃23年	鎮台歩兵第3連隊第1大隊営、騎兵隊営、し重兵営	
〃23年	～	三菱社所有地	

③郵船ビルディング　明治23年～大正12年　明地　日本郵船ビル
大正12－5～昭和20－9　進駐軍接収＝NYKビル（アメリカンクラブ）
昭和20－9～〃31－1　ビル前道路敷にGHQバスターミナル設置
〃31－1～現在　日本郵船ビル、53－2郵船ビルディング（日本郵船、パリ国立銀行、東海銀行丸の内支店、足利銀行東京支店、三井信託銀行丸の内支店）

③三菱商事ビルヂング別館　明治23年～昭和14年　明地　鉄鋼会館
昭和14－8～〃20年　進駐軍接収＝TISモータープール、明地
〃20ころ～〃30ころ　三菱商事ビル、46－1三菱商事ビルヂング別館（三菱商事、千葉銀行東京支店、ケミカル信託銀行）
〃33－10～現在

④丸の内ビルヂング　明治23年～大正12年　明地　丸の内ビルヂング（三菱銀行丸の内支店、明治屋）
大正12－2～現在

現在の日本郵船ビル、三菱商事ビル別館、丸ビルをすっぽりと囲んだおよそ8千3百坪の地に池田輝政からはじまる岡山池田藩上屋敷がおかれた。池田家は信輝の代に織田信長の乳兄弟として仕え桶狭間の戦いなどの軍功で大垣13万石をえた。信輝の次子が輝政で豊臣秀吉の信頼をえて岐阜に移ったが、関が原の合戦で家康に味方して姫路52万石に栄進。輝政をおそれた家康は2女の富子をとつがせ、家康のムコとして西国の雄となる。丸の内邸は慶長8年ころの賜邸だが周辺では唯一変動なく3百年間をすごした。

長男の利隆が33才でなくなったとき、幕府は嗣子が幼少との理由で10万石を削って鳥取に移した。寛永9年利隆の弟忠雄の嫡子と入替えに岡山へ栄転。光政は熊沢蕃山を招いて陽明学を政治の基本理念とした。8代斉政と9代斉敏がつづいて早世したので中津藩主の4男慶政を養嗣子に迎える。幕末、藩内に尊壌派が台頭すると徳川水戸家から斉昭の9男茂政を養嗣子とし、2回の長州征伐はいずれも形だけの参加にとどめた。慶応4年2月新政府から東海道先鋒を命ぜられると、支藩の鴨方池田藩主政栓を養子として関東、奥羽、函館に兵をすすめた。

明治維新後は兵部省用地となり、陸軍兵学寮、陸軍士官学校、陸軍歩兵大隊、騎兵隊営などになった。兵学寮は新政府軍の補充兵養成機関。明治5年、大阪と沼津の寮を東京に移し、7年に陸軍士官学校と改称、独立した。

明治21年に勅命をもって交付された「東京市区改正条例」は丸の内を一新させることになった。明治10年代の丸の内には陸軍の主要施設が集中していたが、自由民権運動も下火になると皇居周辺の警備もさして重要でなくなる一方、軍事大国をめざす陸軍本拠としては手狭になっていた。この市区改正は陸軍省の青山転出、中央官庁の霞が関周辺統合と跡地に山の手線敷設、東京中央駅の開設などを折り込んでいた。陸軍省の移転経費は百50万円と推定され、これを丸の内の軍用地10万坪の払下げで賄うこととしたがだれも買ってくれない。「最後の切り札として松方大蔵卿から三菱社長・岩崎弥之助に購入方の要請があった。三菱社にとってもなかなかの大金であったが、国策に協力する意味で決然その購入を引受けた」（丸の内今と昔）。

このとき、三菱合資に払下げされた土地は、銭瓶町1番地（現大手町2丁目）銭瓶町砲兵方面8千坪、永楽町1丁目1番地、し重兵営1万8千坪、同2丁目1番地、近衛経理部6千坪、同2丁目2番地（以上丸の内1丁目）第3連隊跡、八重洲1丁目1番地（丸の内2丁目）近衛師団騎兵営1万9千坪、有楽町1丁目1番地（丸の内3丁目）、師団司令部1万5千坪、同1丁目2番地（同町および有楽町1丁目）監軍部および工兵方面8千坪、有楽町2丁目1番地（有楽町2丁目）有楽町練兵場で、市区改正予定道路敷などを引いた10万坪であった。

当時の三菱は海運業を中心に政府と密接な関係をきずきつつあった。世人は三菱の無謀さに驚いたがとうの弥之助はいっこうに平気で「竹でもうえて虎でも飼うさ」とうそぶいたという。「後世、虎がレンガや鉄筋コンクリートの大厦高楼となり、竹が変わってポプラやいちょうの並木になろうとは、まったく当時の人々の夢想だにしなかったことだろう」（丸の内今と昔）。三菱ではここをしばらく使用することなく放置したので、跡地はまたたくの間に雑草の生い茂る荒地になった。人々は三菱が原とも賭博が原ともいった。

大正12年、長らくの沈黙をやぶって郵船ビルが誕生した。フラー建築会社設計のアメリカ式鉄筋コンクリートビルで、内装はホテルロビーを思わせた。おなじころ丸ビル、東京海上も完成。世人はこの一画を1丁ニューヨークと言った。郵船ビルの戦後は米軍のアメリカンクラブとして接収。返却後の昭和40年代には建物の老朽化がすすんで、建て替えが必要になった。53年、鉄筋コンクリート、地上15階地下3階、延べ面積5万2千平方メートルにおよぶ郵船ビルが竣工。建物は船をイメージしたという白を基調としたデザインとなっている。

三菱商事ビル別館地の戦後は米軍進駐軍モータープールで、解除後駐車場や明地になっていた。千5百坪にもおよぶ明地の利用計画をさぐっていた三菱地所と、旧三菱商事系企業の大合同でオフィス統合をめざした三菱商事の希望が一致、昭和33年、地下3階地上9階塔屋3階で延面積1万5千方メートルの最新ビルを竣工させた。三菱商事ビル、三菱本館、東京ビルから全三菱商事社員が一堂に会した。ビル名もテナント名をとって三菱商事ビルとなったが、46年再度の三菱商事ビル新築にともなって別館と改称された。

資料図－2　（東京駅中央ターミナル南側）　丸の内1丁目資料図－26参照

万治3－11～延宝3－10	酒井長門守邸、坂部三十郎邸の一部を拝領		
延宝3－10～貞享4－11	山口平兵衛重直	5千石	定火消八代洲河岸役屋敷
貞享4－11～元禄9－4	久貝忠左衛門正方	5千石	〃
元禄9－4～宝永6－4	大久保彦兵衛忠庸	5千石	〃
宝永6－4～正徳4－7	斉藤帯刀利有	5千石	〃
正徳4－7～享保8－6	三枝右近守英	6千5百石	〃
享保8－6～〃15－3	戸田靱負光輝		〃
〃15－3～17－7	能勢長十郎頼尚		〃
〃17－7～元文2－10	土井左門利清		〃
元文2－10～寛保2－9	皆川左京庸春		〃
寛保2－9～寛延3－6	曽我圭水助有		〃
寛延3－6～〃7－6	秋山十左衛門正苗		〃
〃7－6～明和3－10	神保左京重清		〃
明和3－10～〃4－9	西郷吝宮員総		〃
〃4－9～安永2－11	甲斐庄兵部正堅		〃
安永2－11～〃9－11	本多大学助友		〃
〃9－11～天明3－4	安藤彦四郎直元		〃
天明3－4～〃6－11	中坊金蔵広看		〃
〃6－11～寛政11－6	巨勢六左衛門至親		〃
寛政11－6～文化2－4	酒井内記忠貞		〃
文化2－4～12	水野監物忠善		〃
〃4－12～〃9－11	青山喜右衛門幸発		〃
〃9－11～文政2－12	松平主税康正		〃
文政2－12～〃7－8	岡部中務盛勝		〃
〃7－8～〃9－3	前田権佐定邦		〃
〃9－3～	内藤外記正迪		〃

明治はじめ～明治23年～　三菱第2号館
明治生命ビル、9－3新築
進駐軍接収＝極東空軍司令部、連合軍対日理事会

①明治生命館
明治28－7～大正4－7
大正4－7～昭和20－9
昭和20－9～〃31－7　明治生命に譲渡

〃4ころ～明治23年～23年～　三菱社所有地

〃　戦　主膳忠可
この間三枝宗四郎、松平采女、上田豊之助、松平弥三郎、井上源三郎、松平熊之丞、諏訪主殿頭などが就任
〃　12番取締、徳川和歌山藩邸、池田鳥取藩邸
〃　陸軍教導団、東京鎮台騎兵営、近衛師団騎兵営
〃　三菱社所有地

昭和31－7～現在　明治生命ビル、明治生命館旧館（明治生命保険相互）
明治38－7～昭和38年　三菱第5号館、東9号館1
昭和40ころ～現在　明治生命館新館、明治生命本社ビル新館
明治37－7～昭和31年　三菱第7号館、仲9号館2～7
昭和16－11～〃20年　三菱造船会館、仲9号館別館
〃26年～〃42－4　三菱中重ビル、33－2三菱仲9号館別館　増築改称
〃42－4～〃51－3　千代田ビルヂング別館
〃51－3～現在　明治生命仲9号館別館、56－3明治生命館別館（明治生命保険相互、三菱電機OAプラザ）

資料図－4　（丸の内2丁目①　千代田ビル）

寛永ころ～万治3－1	久世三四郎広当	7千百石	百人組頭
万治3－12～元禄11ころ	〃　三郎右衛門広賢〃		
元禄はじめ～〃10－12	山口平兵衛重直	5千石	（前出）
〃10－12～〃12－11	松平市正某（松平重英か）		
〃12－11～〃16－4	中根大隅守正延	6千石	将軍綱吉側
〃16－4～享保8年	米倉六郎右衛門昌仲	3千石	小姓
享保はじめ～〃4－8	〃　新五郎正倫		
〃4－8～寛保3－7	稲生安房守正甫	1千5百石	
寛保3年～明和6－11	秋元隼人正貞朝		堺町奉行
〃末期～安永2－3	〃　隼人貞栄		秋元藩分家4千石　小姓大番頭
安永2－3～天明7－5	白須甲斐守政賢	2千石	大筒持頭
天明7－5～天保5－12	明和9－3添地拝領		側
天保5－12～元治元年	増山幾之助某	不詳	
〃　末期～慶応4年	横田筑後守准松	9千5百石	将軍家重側
明治はじめ～	織田若狭守信右	小幡2万石	
〃　4ころ	大半を松平相模守拝領。一部を火消組与力、林大学預かり		
	池田相模守添屋敷		
元治元年～慶応4年	天保5－12火消組与力屋敷添地拝領		
	横田筑後守邸一部添地拝領、資料図－10と1つに		
	安政3－1遠藤但馬守邸一部添地拝領、資料図－10と1つに		
	文久2－閏4水野和泉守邸に一部返上、同月牧野越中守邸に一部返上		
	酒井飛騨守邸囲込み（資料図－11参照）		
	別資料　文久2年～水野伊豆守添屋敷、慶応2年～小笠原老岐守邸		
	副島種臣　参事、外務卿		
	徳大寺大納言、下り御殿、鳥取池田藩囲込み		
	陸軍省用地（以下資料図－3参照）		

東京駅前明治生命ビル、千代田ビル別館の一画は土屋重成、酒井忠重からはじまっている。重成は家康につかえて一向宗の乱に討死した重治の3男。千5百石を知行して初代の南町奉行にすすんだ。つづく忠重は高田10万石家次の3男。家光の小姓をつとめて8千石をえたが、所領訴訟のことで采地を没収され8千俵に格下げとなった。明暦大火後の万治3年から定火消（前出）とされた。八代洲河岸定火消前には高さ10メートルの物見台がか

けられ、半鐘と板木が緊急出動を伝えた。初代の山口重直は家康につかえた牛久藩主重政の5男5千石の嫡男。久貝正方は松平氏信の3男から旗本の養嗣子となり、のちに火付改、勘定奉行をへて7代将軍家継の側にすすむ。大久保忠庸は大番頭に、斉藤利有は百人組頭に栄転した。寛政9年、この定火消屋敷長屋の一角で同心安藤源右衛門の子広重が生まれた。広重はのちに江戸後期代表的浮世絵師として一世を風靡する。幕府使者の供として京都への道すがらに『東海道53次』などの名作を書いた。

千代田ビル一画に江戸時代はじめ在住した久世広当は創世期を代表する直参旗本といえた。父広宣は家康とともに戦陣に明暮れ、その沈着な戦闘ぶりが知られた。広当は7千石の家督をついで小姓番頭、百人番頭などをつとめ、荒木又右衛門の活躍で有名な上野鍵屋の辻事件では仇役渡辺数馬の後だてとなった。米倉昌仲は皆川藩主昌ただの2男。3千石を分知されて5代将軍綱吉の小姓となった。稲生家は家康のもとで千5百石をえた正信の子孫。正甫が堺町奉行などをつとめた。

白須家は5代将軍側室の小谷の方のとりもちで5百石となり、政賢のとき10代将軍家治の側にあがって2千石に加増された。横田家の祖先は武田信玄の足軽大将で、のちに家康の麾下に属して5千石となり、准松のとき9代将軍家重の信任をえて9千5百石まですすんだ。織田信右は信長の次子信雄から6代の後胤。池田、水野家添屋敷をへた幕末は老中小笠原長行邸になった。唐津藩主長国養嗣子のまま幕閣に連なり、就任、罷免を繰り返して3度老中職をつとめた。明治維新の戦いのとき、藩は江戸の長行を廃嫡して官軍に加わったので脱走。奥羽列藩同盟参謀として新政府軍に抵抗した。

明治維新後は陸軍教導団、同病院、東京鎮台騎兵営になる。教導団は陸軍幹部、下士官の養成機関で、東京鎮台は明治前中期の陸軍主力部隊。丸の内3丁目にその本部をおくので、後出することになる。明治23年、三菱合資の所有地と替わり、28年には赤レンガの三菱第2号館が完成して、1丁ロンドンとうたわれた明治名所の中心街となった。現在、明治生命の南側、旧館の一画である。

明治生命は明治14年に創設されたわが国最初の近代的生命保険会社。当初は日本橋の坂本町にモダン洋風社屋を構えたが28年、現在地に三菱の第2号館完成にともない移転、本店とした。この館はイギリス人設計家コンドルとその高弟で日本建築界の父とも慕われた曽根達蔵設計のレンガ造りで、近代建築の先駆をなした秀麗な建物であった。当初は明治生命、東京海上、明治火災3社がテナントとして入居したが大正4年に明治生命が全館を買収した。昭和5年同社の業容拡大にともなう新ビルディング建築計画のため歴史的建造物の2号館を撤去、9年に新しい明治生命本館を竣工した。鉄筋コンクリート地上8階、地下2階、ギリシャ神殿風の円柱、花崗岩の外壁にルネッサンス様式を施した。設計は歌舞伎座の設計者で、明治の著名な設計技師・岡田信一郎。

太平洋戦争は被害受けることなく終戦をむかえたが、昭和20年9月、アメリカ極東空軍司令部、連合国対日理事会として接収。その内容は3日以内に立退くようにという厳しいものだった。この間本社を都内5か所に分散。本部も丸の内3丁目、渋谷区隠田1丁目、有楽町1丁目有楽町別館と転々とした。念願の本社返還は10年あまりをへた31年の7月に行われた。この日、本館屋上での返還式では星条旗に変わって日の丸が高々と掲げられた。本店の復帰は翌32年1月で、昭和43年には8階建ての本社新館、別館は56年に竣工した。平成9年、昭和期の建造物ではじめての重要文化財に指定された。

資料図1-5（丸の内2丁目①、②、旧同町⑫、⑭、⑯、⑱、旧八重洲1丁目① 千代田ビル、岸本ビル、三菱電機ビル）

慶長ころ		古田織部正重然	不詳
寛永ころ	～万治3－11	坂部三十郎広利	5千石
延宝4－6～貞享ころ		松平伊予守某	不詳
〃	5－5～〃 2－2	延宝5－5新庄越前守邸（資料図－6）	松平伊予守側を荒川土佐守拝領
貞享2－2～享保9閏4		荒川出羽守定昭	2千7百石＋2千俵
享保9閏4～宝暦7－6		貞享2－2大半を林大学頭拝領。貞享4－2残りを清水亀庵拝領（以下資料図－9参照）	
宝暦7－6～安永2－12		林 大学頭信篤	2千9百石
安永3－3～天明7－1		信充	儒者
天明7－3～寛政5－4		信言	〃
寛政5－7～天保12年		信徴	〃
天保12年～嘉永6－9		信敬	1千5百石
嘉永6－9～安政6年		衡	3千5百石
安政6年～慶応4年		健	〃
明治はじめ～23年～		輝	〃
		昇	〃
		寛政11－2添地拝領、寛政12－2添地永預かり	
		文化元－5三宅助右衛門邸を相対替、添地拝領	
		〃 10－9土屋甚之丞邸を相対替、添地拝領	
		副島種臣、お下り御殿、鳥取池田藩囲込み 資料図－4と同じ	
		三菱所有地	

①千代田ビルヂング

明治23年～明治40年		明地
〃 40－5～昭和35年		三菱仲9号館西より甲乙、仲11号館7～10
〃 40－9～〃 35年		三菱仲9号館東より甲乙、仲11号館1～4
〃 40－12～〃 35年		三菱仲11号館、仲11号館5、6
昭和16－1～〃 20年		第2鉄鋼会館
〃 21－3～〃 27－1		進駐軍接収＝東京CIDビル

昭和36－3～現在　千代田ビルヂング　37－7第2期工事（横浜銀行丸の内支店、香港上海銀行東京支店、旭硝子、日立電線）

②岸本ビル

明治23年～大正末期　明地

昭和元－12～昭和12年　時事新報ビル

〃　12年～現在　岸本ビルディング、55－7新築（安田信託銀行東京支店、バンカーストラスト銀行東京支店）

資料図1－9　（丸の内2丁目②　千代田ビルヂング、三菱電機ビルディング）

貞享4－2～元禄11ころ～〃14－8　清水亀庵某　7百石　医師

元禄11ころ～〃14－8～〃14－10　鵜川彦左衛門親ひろ9百石　奥右筆組頭

〃　14－10～宝暦4－5　溝口信濃守預かり　元禄14－10安見文平、大河内新助、和田伝蔵3邸に分割拝領

宝暦4－5～　安見文平元道　4百俵　近習番

享保ころ～元文5－7　溝口出雲守邸に囲込み（以下資料図－12参照）

元文5－7～寛保元－4　松平田宮幸隆　不詳

寛保元－4～明和ころ　安見助九郎預かり　西の丸先手

明和ころ～　田沼主水意識　5百石　一ツ橋家老

元禄14－10～　溝口主膳正邸に囲込み（以下資料図－12参照）　不詳

〃　～文化元－5　三宅助右衛門徳福　不詳

文化元－5～　林大学頭邸に囲込み（以下資料図－5参照）

元禄14－10～享保13－7　和田伝蔵長章、鉄之丞某　3百俵　儒者

享保13－8～文化10－9　河内隼人常識　5百石　近習番

文化10－9～　林大学頭邸に囲込み（以下資料図－5参照）

元禄ころ　木下道円守道　3百俵　医師、薬園

〃　中期～　林大学頭邸預かり（以下資料図－5参照）

資料図1－7　（丸の内2丁目②　岸本ビルディング）

慶長ころ　新庄越前守直定　麻生2万7千石

〃　後期～明暦3年　新庄越前守邸に囲込み（資料図－6参照）

明暦4－6～寛文4－9　高倉権大納言永慶　8百20石＋2百俵　高倉家江戸屋敷

寛文4－9～天和元－11　〃　永敦　〃　〃

天和元－11～享保10－4　〃　永福　〃　〃

享保10－4～〃17－8　〃　永房　〃　〃

宝永4－5～宝永4－9　松野壱岐守助義　1千5百石　仮北町奉行所　併設

享保ころ　小笠原左衛門某　不詳　西の丸小姓、笹本と改称

〃　17－8～天明元－1　大久保鞆負佐忠省　5百俵　小納戸

天明元－4～寛政10ころ　笹本熊之丞忠鋼　5百俵

寛政10ころ～文化12－8　坂部三十郎広高　3百俵

文化12－8～　内藤豊前守邸に囲込み（以下資料図－9参照）

千代田ビル、岸本ビル、三菱電機ビルの坂部広利は豪放大胆、家康に近侍して活躍した広勝の嫡男。父遺領の5千石を継承して先手鉄砲組頭などをつとめた。広利のころ旗本たちが月代をのばし、大刀をたばねて大手をふって横行した。広利は水野十郎左衛門を首領とした白柄組のNo.2で水野と共謀して町奴幡随院長兵衛を暗殺、旗本奴と町奴の対立が頂点に達した。

林家は朱子学を奉じて家康につかえた羅山の子孫で代々大学頭として重用され文教につくした。信篤は2代春斉の2男だが、兄の早世で3代を継承した。5代将軍綱吉から、家宣、家継3代に侍講、その教えは殿中に5経をひろめて、儒者を僧侶の格式から士分に認めさせた。7代信敬のとき後継がなく、幕命をもって衡が養子に迎えられた。衡は国学の創建と諸士養成を建議し、湯島聖堂を幕府の学問所とした。林家が丸の内邸拝領当時、濠端の八代洲通りから引込んでいたが、元禄14年ころ通りに接続、文化10年に土屋甚之丞邸を相対替えして有名な林家巽園をひらいた。林家の家禄は3千石だが高い格式をもって大名待遇とされた。

高倉家は足利幕府の信任をえ、南北朝時代権大納言を先途とした名門公卿。永慶のとき徳川幕府につかえ、丸の内に邸地を拝領して、装束、衣紋などを司った。宝永4年5月常磐橋門内にあった北町奉行所を焼失したので、臨時役所として高倉屋敷があてられることになった。工事期間の4か月間で奉行は松野助義。同じ年9月、新装なった有楽町駅、銀座側駅前商店街の数寄屋橋御門内の北町（のちの南町）奉行所に移った。

明治維新後は佐賀の尊壌藩士で、参与、参議となった副島種臣邸となり、陸軍鎮台兵営などをへて明治23年に三菱の社有地となった。明治後期から昭和戦前、戦後にかけて、三菱仲9号館、仲11号館などが建ったが、36年に千代田ビルと変わり、時事新報ビルは岸本ビルに建て替えられた。

千代田ビルは三菱地所が昭和34年に計画した丸の内総合改造計画の第1番手として建築された。丸の内総合改造計画は赤レンガ主体のビル街の老朽化にともない最新設備を備えた近代ビル街を建設しようというもので、その範囲は丸の内1、2丁目のほぼ全域におよんだ。千代田ビルの予定地はかつて木造の第2鉄鋼会館5百坪が置かれたところで、戦時中強制疎開のため撤去され、跡地は隣接する明治生命が借用していた。昭和34年にはじまった千代田ビル建築には丸の内改造計画の工事中テナントの受入れ先確保という意図もあった。2年間の工期をへた36年第1期工事を竣工。第2期工事は引続いて、三菱仲11号館取壊しと同時に続開。第1期ビルと接続した鉄筋コンクリート地上9階地下4階延べ1万3千平方メートルにおよぶ千代田ビルヂング全館が竣工したのは39年7月、旭硝子、極洋捕鯨などが入居した。

岸本ビルの地は大正まで明地で、大正11年に時事新報が三菱合資の土地を借りて、桜井

小三郎設計の6階建てビルを建てた。時事は明治15年、福沢諭吉創刊の新聞報道の草分けだが、丸の内時代、経営不振が深刻で、昭和11年に廃刊となった。跡地は昭和12年、八幡製鉄の代理店であった岸本商店が買収、これを改装して岸本ビルとした。建築後50年をへた昭和50年代に入るとビルの老朽化がめだつようになり、敷地の有効活用をはかるためにも高層化は時代の趨勢となっていた。55年7月、地上11階地下4階の新ビルを竣工。1階に安田信託銀行や外資系銀行が入り、7、8階フロアにテナントの旭硝子本社が入居した。

資料図1－6　（丸の内2丁目②　丸の内三井ビルディング）
慶長ころ　～慶長17－12　新庄宮内卿法印直頼　麻生3万5千石
〃　17－12～元和4－4　新庄越前守直定　〃　2万7千石
元和4－6～延宝4－6　〃　直好　〃
延宝4－6～〃　6－8　土岐伊予守半分拝領。残り半分荒川出羽守拝領（資料図－5参照）
〃　6－8～〃　7－8　土岐山城守頼行　上山2万5千石
〃　7－8～しばらく　伊予守頼たか　〃
元禄ころ　～正徳ころ　石川市正某　不詳
享保2－7～享保10ころ　山下道円某　〃
〃　10ころ～　小川長左衛門康明　3百俵
林大学頭邸囲込み（以下資料図－5、8参照）　将軍吉宗小姓

資料図1－8　（丸の内2丁目②、同町⑱、八重洲町1丁目①　丸の内三井ビルディング、三菱電機ビルディング）
明暦ころ　～元禄末期　荻　玄勝某　不詳
享保はじめ～享保11－5　小笠原左衛門信用　2千6百石
元禄後期　～〃　はじめ　小笠原左衛門邸囲込み　元禄後期割り替え進物役
ころ　享保11－5大久保伊勢守邸囲込み
〃　6ころ～元禄7－1　水野飛騨守某　不詳
〃　7－1～享保10－12　石川東市正総氏　石川亀山分家4千石　小姓番頭
享保10－2～寛政8－7　松平修理亮某　不詳　中奥
寛政8－7～文化14－8　土屋但馬守添屋敷　西の丸側ほか
文化14－8～文政5－9　大久保伊勢守往忠　5千石
文政5－9～文久2－3　享保11－5小笠原左衛門邸添地拝領
文久2－3～元治元年中止　稲葉兵部少輔正巳　館山1万石
元治元－10～慶応元年　酒井飛騨守忠ます　鞠山1万石
慶応元－4～〃　3－7　増山対馬守正修　長島2万石
明治はじめ～明治2－6　阿野公誠　集議院上院次官
〃　はじめ～明治2－6　松平左衛門尉近説　府内2万1千石
明治2－6～明治2－8　弾正台
〃　4ころ～〃　23年　陸軍省用地（以下資料図－3参照）
〃　23年～　三菱合資所有地

②丸の内三井ビルディング
明治23年～大正ころ　明地
昭和2－7～昭和21－3　昭和ビル
〃　21－3～〃　27－12　進駐軍接収＝エンバイヤーハウス（宿舎）
〃　27－12～〃　53－6　昭和ビル、32－12内外ビル
〃　56－2～現在　丸の内三井ビルディング（KDD営業部）

②三菱電機ビルヂング
明治23年～大正はじめ　明地
大正6－1～昭和35年　三菱第24号館、仲13号館
昭和10－3～〃　35年　丸の内三菱倶楽部、仲13号館別館
大正8－4～〃　21－3　三菱仲15号館
昭和21－3～〃　25ころ　進駐軍接収＝米軍教育センター
〃　25ころ～〃　35年　三菱仲15号館
〃　11年～〃　35年　丸の内変電所
〃　38－11～現在　三菱電機ビルヂング（三菱電機、八十二銀行東京支店、北海道拓殖銀行丸の内支店、印度銀行東京支店）

三井ビルの初代新庄直頼、直定父子は関が原の合戦で西軍に味方したため戦後蒲生秀行に預けられたが、4年後家康との旧知の間柄をもって麻生3万石を与えられた。直頼は将軍家に近侍してとき衆に加えられ、剃髪して法印を称した。

文化12年曽我伊賀守助より、坂部広高邸をあわせ内藤村上藩役屋敷となった。内藤信敦は寛政の改革をすすめた老中松平定信のもとで寺社奉行、若年寄、京都所司代などをつとめた。儒学を奨励し、産業の保護振興にあたった。この地に増山長島家が2度にわたって若年寄役屋敷をおいた。正寧は藩祖正利7代の後胤で14代将軍家茂期、正修は家茂と15代将軍慶喜期の若年寄。元治元年家茂にしたがって孝明天皇に拝謁。慶応元年には長州征伐のあと京都、大阪守護の任についた。鳥羽伏見の戦いでは朝廷帰順に抵抗したが、戦況の推移をみて藩兵を東征軍に加えた。

明治維新後、一画に弾正台がおかれた。弾正台は警察の律令時代の旧制で、明治2年5月、旧北町奉行所に新設された刑法官内に設立。ほどなく旧増山藩邸に移転した。弾正尹は九条道孝であった。

丸の内三井ビルの明治、昭和はじめは明地で、大正11年、三菱地所の土地を借りた内外不動産がビル工事を起こしたが、翌12年9月の関東大震災で倒壊して多数の死傷者をだした。このため工事は大幅におくれ、工事開始6年めの昭和2年にようやく竣工した。敗戦後、米軍接収も体験。昭和28年には満州国の全株取得などの変遷をへた経営も三井不動産

に移ってようやく安定した。しかし、三菱の牙城、三菱地所の借地に三井が建物をもつという、借地権の更新はなかなか合意に達しなかったという。たまたま隣接する岸本ビルが建て替えされることになり、これを機に両社の和解が成立、新ビル建設がすすめられることとなった。地上10階、延べ2万平方メートルの丸の内三井ビルデングが竣工したのは昭和56年2月。総工費は45億円であった。

三菱電機ビルの戦前戦後期は三菱仲13号館、仲15号館、丸の内変電所などであった。仲13号館は旧表示の第24号館で大正6年、仲15号館は大正8年、仲13号館別館は昭和10年、変電所は昭和11年建築であった。いずれも老朽化しており、丸の内総合計画にそって取り壊され、新ビル工事は昭和35年起工。およそ2年余の工事期間をもった38年、10階建てビルを竣工。入居テナントの社名から三菱電機ビルヂングとなった。1階には北海道拓殖銀行、インド銀行東京支店などの金融機関などが入居している。

資料図－10　（丸の内2丁目⑥、旧同町⑥、旧八重洲1丁目①　三菱商事ビル、古河総合ビル）

慶長ころ			
寛永ころ	～慶安3－7	京極若狭守高次	小浜8万5千石
慶安3－9～正徳4－7		織田因幡守信昌	小幡2万石
正徳4－8～享保16－6		〃　越前守信久	〃
享保16－7～宝暦9－11		〃　美濃守信就	〃
宝暦9－11～明和4－8		〃　兵部大輔信右	〃
明和4－8～天明2－9		〃　和泉守信富	〃
天明2－9～享和元－3		西尾主水正忠需	横須賀3万5千石
享和元－5～文政10－12		〃　隠岐守忠移	天明4年寺社奉行
文政10－12～天保10－6		〃　忠善	〃
		永井肥前守尚佐	加納3万2千石
天保10－6～〃 12－8		水野壱岐守忠見	北条1万5千石
〃 12－8～安政2－10		遠藤但馬守胤統	天保10～12年若年寄
安政2－10～〃 3－1		小笠原左衛門佐預かり	三上1万石　〃 12年～文久元年若年寄
〃 3－1～慶応4年		松平相模守邸添屋敷	当初は資料図－4に囲込み、文久4年資料図－2分を返上
明治元年　～明治4ころ		池田権中納言慶徳	鳥取32万石、鳥取藩知事
〃 4ころ～		陸軍省用地（資料図－3参照）	
〃 23年　～明治25－1		三菱合資所有地、明地	
⑥三菱商事ビル			
明治27－6～昭和43－6		三菱第1号館、東9号館	
〃 39－3～〃 42年		人力車車庫、東9号館西より別館	
〃 43－8～〃 42年		本社食堂、東9号館東より別館	
昭和46－1～現在		三菱商事ビルヂング（三菱商事）	

古河総合ビル、三菱商事ビルの慶長図に京極高次が記載されている。高次は豊臣秀吉の腹臣で大津宰相ともよばれた。関が原の合戦で東軍についたが石田軍の猛攻に大津城をおとしたので高野山にのがれた。戦後小浜9万石に復帰し、次の忠高のとき11万3千石にすすんだ。織田家は天下統一をはたした信長の子信雄の4男からはじまり、丸の内邸は信昌からの5代。永井尚佐は11代将軍家斉時代の若年寄で、引退後大御所付となった。水野忠見は10代将軍家治の世子時代からしたがって本丸若年寄になおった。遠藤胤統は12代将軍家慶、13代将軍家定期の若年寄で和宮婚儀御用掛、外国事務掛、軍政御用掛などをつとめた。

明治維新後は陸軍省の東京鎮台騎兵営とされ、23年に三菱合資の所有となった。20年代の丸の内は雑草が生い茂って人々は寄りつかず荒れるにまかせたので三菱が原とも呼ばれた。こうした状態がしばらくつづいた明治27年、東端にドイツ式建築の東京府庁舎が建設され、後を追って三菱第1号館が竣工した。第1号館はイギリス人建築家でわが国の洋風建築の父とも称されたコンドルの設計で25年着工、およそ2年半の工期をへた明治27年に竣工した。赤レンガを主体に要所に白い花崗岩を配した3階建て地下1階のレンガ造り建築で、英国ビクトリア時代を象徴するクィーンアン様式とよばれる建築方法。左右対象、急勾配のスレート屋根がコンドルならではの名建築とうたわれた。逆L字型の内部は南側と東側が違ったレイアウトで、馬場先通りに面して入口が3か所、旧大名小路に面して5か所、中庭側に7か所と合計15こをかぞえた。丸の内のオフィス建築こう矢ともいえる第1号館には三菱合資会社本社が入居し、第19国立銀行と高田商会が事務所をかまえた。第19銀行はのちに三菱銀行の発足で吸収された。高田商会は当時の代表的輸入商社で、皇室、大臣らの礼服なども納めた。

東9号館と改称した第1号館の解体は、戦後高度成長下で丸の内総合計画のすすんだ、昭和44年に行われた。名建築を惜しむ声も高く、再現のため一時は資材の一部を保管したが、実現しなかった。この旧第1号館と旧本社食堂、旧人力車置き場を改修した別館を加えた敷地全体に新ビルが建設されることとなり、工事は44年に起工、2年後に地上15階地下4階、延べ5万5千平方メートルの三菱商事ビルを竣工した。テナントの三菱商事はわが国を代表する総合商社。2丁目③番地の三菱商事ビルから本社を移し、旧ビルを別館と改称した。

資料図－11　（丸の内2丁目⑤、⑥、旧同町④、⑥、⑧、⑩、旧八重洲町1丁目①　古河総合ビルヂング、丸の内八重洲ビル、三菱重工ビル、三菱ビル）

慶長ころ	～慶長16－7	徳永式部卿法印寿昌	高須5万3千石
〃 16－	～元和ころ	〃　左馬介昌重	〃
寛永元－6～慶安元－3		松平大和守直基	姫路15万石
慶安元－3～しばらく		松平但馬守直良	大野5万石

貞享ころ		笹山5万石	松平駿河守典信
〃 ころ	～元禄10－7	6千7百石	山名主殿頭矩豊
元禄10－7～天保7ころ			溝口信濃守邸に囲込み
天保7年	～弘化2－6	岩槻2万石	大岡主膳正忠固
弘化2－6～安政5－7		小笠原左衛門佐長守	勝山2万3千石
安政5－7～万延元－12		小諸1万5千石	牧野遠江守康哉
万延元－12～文久2－6		山形5万石	水野左近将監忠精
文久2－6～〃 2－11		関宿5万石	老中
〃 2－11～元治元年		諏訪3万石	文久2年～元治元年若年
元治元年	～慶応2－2	鞠山1万石	元治元年～慶応元年若年
慶応2－2～〃 4年		唐津6万石	慶応2～4年老中
明治はじめ			別資料 笠間牧野邸を拝領
〃 4、5年～明治23年			徳大寺実則 議定、宮内卿
〃 23年～			西園寺公望 参事

文久2－6水野左近将監邸拝領、同地つづき旧松平相模守添屋敷当分預かり
交代寄合
天保7年～嘉永5年若年寄
安政5～7年若年寄
万延元年～文久2年若年寄
文久2年老中
元治元年～慶応元年若年寄
慶応2～4年老中

⑥古河総合ビル

明治37－7～昭和11－9		三菱第6号館、三菱仲10号館2～7	
昭和12－12～〃 41年		三菱仲10号館別館	
明治37－9～〃 39年		三菱第4号館、仲10号館1	
〃 40－9～〃 38年		三菱第8号館、仲12号館1～4	
〃 40－12～〃 38年		三菱第10号館、仲12号館5	
大正4－5～〃 38年		三菱第23号館、仲12号館7、中央亭	
〃 6－12～〃 33年		三菱仲10号館8	
〃 7－12～〃 33年		三菱仲10号館9	
〃 9－8～〃 38年		三菱仲12号館6	
昭和30年代		プレスクラブ	
〃 41－5～現在		古河総合ビル（古河電気工業、日本ゼオン、古河機械金属、富士通、第1勧業銀行丸の内支店）	

⑮丸の内八重洲ビル

明治24年	～明治30－3	三菱丸の内建築所	
昭和3－3～昭和21－4		八重洲ビル	
〃 21－4～〃 31－2		八重洲ホテル 進駐軍接収	
〃 31－2～現在		八重洲ビル、37－7丸の内八重洲ビル（三菱商事）	

八重洲ビル、三菱ビルの初代徳永寿昌は秀吉につかえて高松を居城としたが、関が原の合戦で東軍について高須5万石をえた。次の昌重のとき大阪城の石垣工事を命ぜられたが色香におぼれて怠り、その子昌勝は父が狂気として代行を進言して争ったことが幕府に知れて封地を没収された。松平直基は松平結城秀康の5男。次の直矩との2代で勝山、大野、山形、姫路、村上、姫路、日田、山形と転封を繰返し白河15万石に落着いた。溝口家囲込みをへた大岡忠固からは若年寄役宅になっている。忠固は8代将軍吉宗の側用人加納久周の5男で娘ムコとして大岡家に迎えられた。天保7年若年寄にすすみ本丸再建工事を奉行して3千石を加増された。牧野康哉は大老井伊直弼の片うでとして活躍、水野忠精は安政の大獄後混乱期の若年寄。久世広文は老中首席をつとめた父の広周が失脚、隠居を命ぜられたので10才で家督をついだ。

風雲がますます急をつげた幕末期も幕閣役屋敷とされる。諏訪忠誠は若年寄兼外国御用取扱。酒井忠毘は下関条約締結に活躍。最後の小笠原長行は唐津6万石の世子で、3度老中に就任した。明治維新の戦いでは奥羽列藩同盟に加わり、会津、函館などで新政府軍に抵抗した。

維新後は明治元勲の徳大寺実則、西園寺公望邸をへて陸軍省となる。西園寺は少壮公卿のホープとして岩倉具視の補佐役をつとめた人。山陰道鎮撫総督、新政府参与などをへてのちに総理大臣まですすんだ。明治23年、三菱合資所有地となり、37年の三菱第4号館につづいて、6、8、10号館とレンガ造り建築が建てられた。第4号館は3階地下1階、総建坪が7千4百平方メートルの事務所建築で明治の巨匠、曽根達蔵が設計で。第6号館からは2階建て事務所に住居がついた。

戦後、丸の内総合開発計画の第2次工事として新ビル建築工事に着手したのは昭和38年のことで、40年に第1期工事が完成、つづく第2期工事も翌4年5月に竣工している。地上9階地下4階、延べ5万1千平方メートル。古河電工、古河機械金属、富士通など古河グループ各社が入居して、ビル名も古河総合ビルヂングとした。古河グループと丸の内三菱地所のかかわりも深い。明治30年、建築まもなくの第1号館に古河鉱業事務所がおかれ、創業者・古河市兵衛の2階の西側オフィスを古河創業の部屋とよんだ時代もあった。第10号館には古河電工も入居した。

八重洲ビルの建築工事は大正13年からはじまり、昭和3年に完工した。陸屋根付きの8階、延べ建築面積が1万7千平方メートル。三菱合資にとって、丸の内ビルにつぐ高層賃貸オフィスビルであった。当時最新の5基の客用エレベータをはじめ、鋼鉄ドア、防火設備、暖房、給湯設備など時代を先取りした基本設計が話題をよんだ。太平洋戦争では戦禍をうけることなく終戦。戦後は米軍の八重洲ホテルとされたこともあったがまもなく解除された。昭和37年、増築。当時、東京八重洲民衆駅の完成で、八重洲口側にあるものと間違いされる客が多く、ビル名に丸の内をかぶせた。

資料図－12 （丸の内2丁目⑤、旧同町④、⑩、旧八重洲町1丁目① 三菱重工ビル、三菱ビル）
慶長ころ ～慶長15－9 溝口伯耆守秀勝 新発田5万石

慶長15－12～寛永5－10	溝口伯耆守宣勝	新発田5万石
寛永5－10～寛文12－9	〃出雲守宣直	〃
寛文12－9～宝永3－7	〃信濃守重雄	〃
宝永3－7～享保3－11	〃伯耆守重元	〃
享保3－11～〃17－7	〃信濃守直治	〃
〃17－7～宝暦11－1	〃出雲守直温	〃
宝暦11－1～天明6閏10	〃主膳正直養	〃
天明6閏10～享和2－8	〃出雲守直候	〃
享和2－10～文化9ころ	〃伯耆守直諒	〃
文化9ころ～文政2－8	元禄10－7山名主殿頭邸の一部を添地拝領	
文政2－8～天保5－11	宝暦4－5安見助九郎邸を添地拝領	
〃2－8～文政7閏8	有馬左兵衛誉純 丸岡5万石	文化9年～文政2年若年大半を拝領、一部を預かり
〃7閏8～天保5－11	田沼玄蕃頭意正 下村1万石	文政2～8年若年寄
天保5－11～天保7－8	田沼玄蕃頭預かり	
〃7－10～慶応4－3	上田左太郎、豊之助某 不詳	
慶応4－3～明治4ころ	田沼玄蕃頭、上田豊之助邸をあわせ拝領	
明治4ころ～23年～	織田若狭守信美〃 天童2万3千石	
	〃左近将監信学〃	
	〃兵部大輔信敏〃	
	東京鎮台兵営（資料図－13参照）	
	三菱合資所有地、明地	

⑤三菱重工ビルヂング	
大正6－1～昭和37年	三菱第25号館、仲14号1～6
〃6－1～〃37年	三菱第26号館、仲14号7～13
昭和12－3～〃21－1	三菱本館別館、三菱商事ビル
〃21－1～〃27－4	進駐軍接収
〃28－12～46年	光和ビル、三菱商事ビル、33－11新三菱重工ビル
〃39－8～現在	三菱重工ビル新館、48－3三菱重工ビルヂング（三菱重工業）
⑤三菱ビルヂング	
明治23年～大正はじめ	三菱合資所有地、明地
大正7－4～昭和21－1	三菱本館
昭和21－1～31－1	進駐軍接収＝女子宿舎、郵便部隊
大正7－4～〃46年	三菱本館、三菱本館新館
昭和48年～現在	三菱ビルヂング（三菱油化、三菱化成、三菱瓦斯化学、三菱樹脂、三菱信託銀行丸の内支店、パークレイズ銀行）

三菱重工ビルヂング、三菱ビルヂングの地は慶長9年ころから文化9年ころまでの2百年間溝口新発田藩邸であった。藩祖の秀勝は上杉家会津移封後越後大守に封じられた堀秀治の与力でポスト堀も新発田に根をおろして幕末におよぶ。関が原の合戦は国内一揆の騒乱で参戦が不可能となったが家康から所領を安堵された。慶長12年図に溝口伯耆守邸が記載され、溝口家記録には「慶長16年8月列侯の家族江戸引越しにつき居屋敷になる」とある。丸の内邸はつづく宣勝、宣直以下10代が上屋敷を構えた。直治のころ藩財政が逼迫して借米、御用金、はげしい倹約令をしいた。次の有馬誉純は11代将軍家斉期、田沼意正は家斉大御所時代の若年寄。最後の織田天童藩は織田信雄の嫡流で信敏のとき奥羽列藩同盟に加担して敗れた。

維新後は東京鎮台兵営をへて、三菱合資所有地としてしばらくの間、明地とされたが、大正6年に三菱第25、26号館が竣工、翌7年に三菱本館とよばれた第22号館が完成している。三菱は起工順に館名をつけたが、22号館の工期が長く後番が先に完成したので順番が入れ代わった。たまたま第1次世界大戦がはじまり、その影響で工事が遅れ、工費も20％ほど余計かかった。地上4階地下1階、延べ1万平方メートル。桜井小三郎の設計で日本ではじめてスチールサッシの窓枠がとりつけられた。竣工6か月後には、大戦後の経済好況で増築が必要となり、地上6階地下1階、延べ2万3千平方メートルの新館を増設した。完成後は三菱の総本拠ともいえる三菱合資本社となった。

三菱第22号館の跡地に丸の内総合改造計画の総仕上げともいえる三菱ビルヂング建設工事がはじまったのは昭和46年。48年3月には地上15階地下4階、延べ建築面積6万1千平方メートルの巨大ビルを竣工させた。同時進行した三菱重工ビルと地下と地上1、2階でつながり、高層部分を切り離した。気品あふれる近代ビルディングに格調の高さを感じさせる。三菱合資から三菱、三菱地所と改称された三菱本社が入居し、三菱化成、三菱油化などの三菱系化学企業がテナントとなっている。

昭和38年、三菱仲16号館1～7館とかわった三菱第25、26号館が取り壊されて、三菱重工ビルが竣工した。戦前の三菱重工は財閥解体で三菱日本重工業、新三菱重工業、三菱造船の3社に分割され、それぞれで本社を周辺ビルに構えていた。3社の合併話は着々と進行し、ビル竣工直前に新生三菱重工を発足させた。新ビルは地上9階地下4階、延べ2万3千平方メートル。テナント名から三菱重工ビル新館としたが、こえて48年、今度は隣接した新三菱重工ビルを取り込む形で増築、名称を三菱重工ビルヂングと改称した。昭和49年8月30日の昼さがり、三菱重工ビル正面玄関近くに仕掛けられた2個の時限爆弾が爆発、死者9名、重軽傷者3百85名をかぞえる未曾有の大惨事が起こった。犯人は過激派グループで、一帯は救助を求める罹災者に、救急隊、警察、機動隊の救護活動、ヤジ馬、マスコミ報道陣が加わり、戦場を思わせた。

三菱商事は大正7年設立の総合商社で旧三菱財閥系製品を一手に取扱った。創立当初は三菱合資の丸の内事務所を借りたが、業績の拡大にともなって手狭となり、昭和12年に新社屋を竣工させた。戦前期はわが国の代表商社として三井物産とその商圏を2分したが、終戦で連合軍GHQに解散の命令をうけた。やむなく品種別に10数社に分立することとな

ったが、合同への悲願をかけて25年、旧社名に戻し29年に大同合併して新三菱商事を復活させた。ビルは戦災の悲劇は免れたが米軍の接収も体験する。解除当時三菱商事の社名はなく継承した光和実業をビル名に冠せたこともあった。昭和33年現三菱商事別館の地に三菱商事ビルを建設して移転した。

資料図1-13　（丸の内2丁目⑦、旧同町③、⑤、旧八重洲町2丁目③　三菱銀行本店）

慶長ころ～慶長14-9　松平左馬充忠頼　浜松5万石　慶長14年被殺廃絶
〃15年～寛永16-2　〃大膳亮忠重　掛川4万石　8千石で再興
寛永16-3～元禄9-5　〃遠江守忠倶　飯山4万石
元禄9-7～10-5　〃忠喬
〃10-5～13-12　戸田能登守忠真　佐倉7万1千石世子、1万石若年寄、相続

〃　後期～宝永はじめ　阿部飛騨守某　不詳
宝永はじめ～宝永3-1　青山備前守秘成　郡上藩分家3千石
〃3-1～宝暦3-5　松平右近将監清武　館林4万1千石
宝暦3-5～明和5-9　松平伊豆守信復　浜松7万石
明和5-11～〃7-6　〃信礼　吉田7万石
〃7-7～天明7-3　〃信明　北条1万5千石　のちに若年寄
天明7-3～文化3-4　水野壱岐守忠韶
文化3-4～文政11-10　堀大和守親しげ　飯田2万石　〃
文政11-10～天保はじめ　文政9-2添地拝領　峰山1万1千石　元若年寄
天保はじめ～嘉永4-12　堀田摂津守正衡　佐野1万石　天保7～14年若年寄
嘉永4-12～安政4-8　鳥居丹波守忠挙　壬生3万石　嘉永4年～安政4年若年
安政4-8～〃5-7　本郷丹波守泰固　安政4～6年若年寄
〃5-7～万延元-8　稲垣長門守太篤　山上1万3千石　安政5年～万延元年若年
万延元-8～文久元-7　〃若狭守太清　〃一宮1万3千石　文久元～2年若年寄
文久元-7～〃2ころ　加納遠江守久徴　川成島1万石
元治元年～元治元-10　土岐山城守頼之　泉1万5千石　〃若年寄
〃元-10～慶応元-1　稲葉兵部正巳　峰山1万石　慶応元～2年若年寄
慶応元-1～〃2-7　松平能登守預かり　高鍋2万7千石世子
〃2-7～3-6　秋月右京亮種樹
〃3-6～3-11　作事奉行預かり
〃3-11～〃4-1　新選組屯所
〃4-1～〃4-3　坊城俊政
明治はじめ～5-3　司法省用地
〃5-3～4-12～明治20ころ　東京裁判所、8-7新築
〃20ころ～〃33年　始審裁判所　行政官弁事
明治33年～大正5年　明地
大正11年～現在　三菱合名銀行部、三菱銀行本店、昭和55-6三菱銀行本店新築

江戸はじめのころ、三菱銀行本店、東京ビル周辺に邸地を構えた松平忠頼は関が原の合戦で岡崎城を守り犬山、金山城番をつとめて浜松5万石を領有した。慶長14年日比谷公園入口の地にあった水野忠胤邸に招待されたとき配下の争論に巻込まれて被殺、嫡子幼く廃絶となった。しかし徳川家とは血縁の間柄のため翌15年、兄遺子忠重をもって深谷8千石で再興。のちに掛川4万石を領有した。元禄後期のころ、5代将軍綱吉期の老中戸田忠昌世子邸をへて、松平清武邸となった。清武は甲府宰相徳川綱重の2男で6代将軍家宣は実兄。家人越智の名跡をついで松平姓を称したが、宝永3年に大名に列しすすんで館林2万4千石をえた。

天保はじめの堀田正衡からは若年寄役宅となっている。正衡が若年寄就任時、領内は大飢饉で善政をしいて治安を守った。本郷泰固は2千石の旗本。老中阿部正弘の推挙で若年寄にすすんで1万石をえたが、正弘没後の安政6年おぼめしかなわずとして免職、5千石を減知されて旗本に復した。加納久徴は和宮降嫁の京都→江戸警護役をつとめ、幕府の海防方針にそって用兵訓練にあたった。稲葉正巳は若年寄再任期の役宅。15代将軍慶喜の信任をえて勝手掛、外国御用取扱、陸軍奉行をつとめ老中格とされた。

慶応4年1月からの3か月間は新選組屯所になっている。鳥羽伏見の戦いで鹿児島勢の砲火の前になすすべもなく敗走した新選組が江戸に逃帰ったのは近藤勇局長以下44名。当時、幕府の大勢は15代将軍慶喜の方針にそった恭順へと固まりつつあった。勝義邦（海舟）らは新選組を危険分子として江戸追放を画策。明城となっていた甲府城を守護する甲陽鎮撫隊を命じた。一行は近藤改め大久保大和守を隊長に土方歳三改め内藤隼人を副隊長にいただき、京都生残り隊員を中心に新規採用兵士を加えた総勢2百人であった。

鎮撫隊は大砲2門を曳いて甲府に向かったが、甲府城は一足早く板垣退助、谷干城率いる官軍の東山道先鋒隊が占拠し、旧新選組と見破った官軍は京都での恨みをこの一戦にはらさんと壊滅を期して猛然と襲いかかった。この戦いで鎮撫隊は50名におよぶ死傷者をだし完全に瓦解した。

維新後、一画は行政官弁事の坊城俊政邸となった。坊城は公家・勧修寺家の分家で、のちに参与、伯爵にすすんだ。明治4年からは司法省用地となり、現在の地方裁判所にあたる東京裁判所、始審裁判所がおかれたが、東京駅工事のはじまる明治中後期からは唄地となった。三菱銀行がこの地に進出したのは大正11年のことで、6年間の工事期間をへた。鉄筋コンクリート4階、イオニックスの列柱がならぶ古典様式で、内装はさながらギリシャ神殿を連想させた。大理石を敷きしめたピカピカの床に、まだ多かったゲタ履き客がと

⑪三菱銀行本店

まどったというエピソードも伝えられている。関東大震災、昭和戦災の被害もうけることなく終戦。三菱銀行の創業百周年にあたる昭和55年、24階延べ建築面積12万2千平方メートルのマンモスビルに建て替えられたが、1階のエレベータホールには旧本館入口の青銅製扉をはめこみ、24階に旧役員室が保存された。

資料図1-14　（丸の内2丁目⑦、旧同町③、⑤、八重洲2丁目③　三菱銀行本店、東京ビル、東京中央郵便局）

慶長ころ	～元和8－8	京極丹波守高知	飯田12万3千石
元和8－	～承応3－4	〃　高広	宮津7万8千石
承応3－4～明暦3－3		〃　高国	
明暦3－3～万治3－2		酒井摂津守忠当	庄内14万石
万治3－4～天和元－11		〃　左衛門尉忠義	
天和2－2～宝永6－10		〃　忠真	
宝永6－10～正徳元－2		元禄11－9大久保伊豆守上げ地残を拝領	
正徳元－2～享保9－12		本多中務大輔忠良	刈谷5万石
享保9－12～〃　11－4		松平伊賀守忠周	宝永7年～享保元年側用
〃　11－4～〃　後期		享保元－11町奉行所裏明地を添地拝領	上田5万8千石
〃　後期～宝暦5－2		三浦壱岐守明喬	享保2～9年京都所司代
宝暦5－2～明和6－9		〃　志摩守義理	刈谷2万3千石
明和6－10～寛政5－8		安藤対馬守信ただ	加納6万5千石　宝暦5年不行跡隠居滅封
寛政5－10～〃　7ころ		松平和泉守乗佑	西尾6万石
〃　7ころ～文化4－3		〃　乗完	
		〃　乗寛	
文化4－3～文政9－11		松平周防守康定	浜田6万1千石　寛政10年～享和3年寺社奉行
〃	康任	〃	文化14年～文政9年寺社奉行、大阪城代、京都所司代
文政9－11～安政2－7		松平能登守乗羲	岩村3万石　慶応3～4年陸軍奉行
安政2－9～明治4ころ		〃	
明治5－3～		司法省用地	
〃　5－8～しばらく		警保寮	
〃　4－9～明治8－5		明法寮	
〃　8－5～〃　29年		大審院	
〃　30－4～〃　33年		東京税務管理局	
⑦東京ビルヂング		明地	
明治後期～大正		東京中央郵便局仮局	
昭和2－12～昭和8－11		明地	
〃　8年～〃　21年		三菱新館（木造2棟）	
〃　21－9～〃　28年		東京ビルヂング　昭和30－6、47－6増築（南都銀行東京支店、博報堂、日本航空）	
〃　26－9～現在			

三菱銀行本店、東京ビル、東京中央郵便局の一画は京極高知からはじまっている。高知は豊臣秀吉に重用された高次の弟。関が原の合戦後田辺12万3千石をえたが、高国のとき民政不良とされ廃絶。酒井忠当は左衛門尉宗家の3代、米所庄内14万石の上屋敷。本多忠良は6代将軍家宣、7代将軍家継期の側用人で、8代将軍吉宗享保の改革期の13年間老中をつとめた。松平忠周も老中。64才の高齢をおしての就任だった。

安藤信ただは老中にすすんだ信友の嫡孫だが、著侈を好み、家中の怠慢が多く綱紀が乱れた。宝暦年間に家老一派に幽閉され、幕府は家中仕置きよろしからず隠居滅封を申し渡した。松平康任は大阪城代、老中にすすむが、仙石家内紛に関連して失脚。密貿易も発覚して永蟄居を命ぜられた。徳川時代の最後は松平岩村藩邸になった。乗命は15代将軍慶喜のもと陸軍奉行となるが、鳥羽伏見惨敗の報をえて官軍に恭順、征東の兵1こ小隊を送った。

明治維新後は司法省に所属し、法学校の前身明法寮、最高裁判所にあたる大審院がおかれたが、跡地は東京駅完成をはさんでしばらく明地で、昭和はじめころ東京中央郵便局の仮局舎とされたこともあった。終戦直後のころは、三菱の木造仮事務所が立ちならび、東京ビルヂングの竣工はさらに遅い昭和26年、鉄筋やセメントの確保もままならない時代。地上8階地下1階、延べ2万7千平方メートルで、総工費は5億6千万円かかった。昭和30年、隣接する三菱新館跡地に地上8階地下2階、延べ6万3千平方メートルを増築した。

資料図1-15　（丸の内2丁目⑦、1丁目⑨、同町2丁目③、八重洲2丁目②　東京中央郵便局、東京駅丸の内南口、南口バスターミナル）

慶長ころ	～寛永19－9	松平越後守光長	高田26万石
寛永ころ	～寛永19－9	有馬玄蕃頭豊氏	久留米21万石
〃　19－11	～承応4－3	中務大輔忠頼	
明暦元－4	～寛文元－3	〃　玄蕃頭頼利	
寛文元－3	～元禄11－9	安藤対馬守重博	松山6万5千石
元禄11－9	～正徳3閏5	土井周防守利益	唐津7万石
正徳3－7	～元文元－11	〃　大炊頭利実	
元文元－12	～延享元－7	〃　利延	
延享元－9	～安永6－8	〃　利里	古河7万石
安永6－10	～〃　6－10	〃　利見	
〃　6－12	～文政5－7	〃　利厚	〃　8万石
文政5－8	～〃　5－9	〃　主膳正利位	天明6年～文政5年寺社奉行、京都所司代、老中のちに老中
〃　5－9	～天保10－11	〃	西尾6万石
〃　11－1	～〃　11－1	松平和泉守乗寛	文政5年～天保10年老中
〃　11－1	～〃　12－6	〃　乗全	天保11～14年西の丸老中
		間部下総守詮勝	鯖江5万石

天保12－6～天保15－6	真田信濃守幸貫	松代10万石	天保12～14年老中
〃 15－6～弘化2－6	水野越前守忠邦	浜松7万石	弘化元～2年再老中
弘化2－6～万延元－7	松平和泉守乗全	西尾6万石	嘉永元年～安政2年老中
万延元－7～明治元－7	本多美濃守忠民	岡崎5万石	安政5年～万延元年〃
明治はじめ	太政官代、補相右京府		元治元年～慶応元年老中
はじめ～〃 2－8	正親町三条実愛	議定、大納言	
〃 2－8～〃 3－8	弾正台、九条道孝		
〃 3－8～〃 9－9	上等裁判所		
〃 5－5～〃 30年	司法省		
〃 30－4～しばらく	東京税務管理局		

⑦東京中央郵便局

明治後期～大正はじめ　明地

大正6－4～〃 11－1　東京中央郵便局　火災焼失

〃 11－2～昭和2－12　東京中央郵便局仮局舎、13－9東京中央郵便局本館

〃 12－9～大正13－10　通信省仮庁舎　関東大震災直後に同居

昭和8－11～現在　東京中央郵便局　20－9～24－12一部を進駐軍検閲機関が接収

東京中央郵便局の一部、東京駅八重洲南口周辺の慶長図に松平光長名がある。光長は不行跡で改易された北の庄67万石松平忠直の嫡子で母を秀忠の3女高田姫勝子といった。オジ松平忠昌と入替えに高田26万石をえる。光長は越前家の直系であり、世人は尾張、紀伊、水戸につぐご4家と称した。4代将軍家綱の後継騒動が起こったとき、妹の子有栖川宮幸仁親王の擁立をはかるが失敗。越後騒動の名目で取つぶしとなった。もっとも光長の誕生は元和元年、慶長時代の居住は史実とはいえない。

つづく有馬豊氏は豊臣秀吉に仕えた則頼の嫡男。父の関が原合戦戦功で久留米21万石にすすんだ。土井家は創設期の大老利勝の嫡流。4代利久のとき嗣子なく除封されたがオジ利益が7万石で再興され、利里のとき古河に移った。次の忠見も20才でなくなったが、土井家中興の祖とされる松平忠名の4男利厚を養嗣子に迎えた。利厚は寺社奉行、京都所司代をへた享和2年からの21年間老中をつとめた。

松平乗寛も寺社奉行、京都所司代から老中とエリートコースを歩む。当時の西尾藩は極端な財政難で5年間にわたるきびしい緊縮政策をしいた。間部詮勝は最初の老中期の役宅。水野忠邦による天保の改革期に意見の不一致で辞任。真田幸寛は寛政の改革をすすめた松平定信の2男。松代藩幸専の養子となり、家格を譜代格に改めて幕閣に迎えられた。土井利位、堀田正睦らと天保の改革をすすめ、水野忠邦の失脚後老中職を辞した。

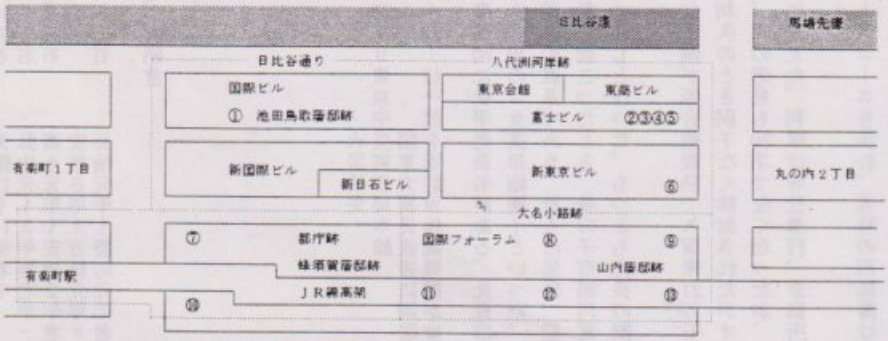
水野忠邦は老中再任期の役宅。対外危機の拡大で再登板したが、鳥居よう蔵らの不正を理由に再び失脚。2万石を減封され、隠居、蟄居処分をうけた。松平乗全も幕末期の主要幕閣。西の丸老中を足掛かりに嘉永2年からの11年間老中、安政5年再び老中に迎えられたが、井伊直弼が桜田門外に倒れた直後の万延元年4月、安政の大獄の責任をとらされて失脚した。最後の本多忠民は寺社奉行、京都所司代にすすみ、堀田正睦のもと日米通商条約の締結にあたり、老中に昇進した。和宮降嫁問題で安藤信正が失脚するといったん老中を辞任するが、元治元年再任。明治維新のとき藩論は勤皇、佐幕にわかれたので、忠民が新政府軍参加を決めた。

明治維新後は弾正台、三条実愛、九条道孝邸などに変わる。弾正台は明治新政府の警察官庁。丸の内三井ビルなどをへた明治2年からの1年間で、霞が関再移転後の明治4年には司法省に合併された。九条はその尹（大臣）、三条は大納言、議定などを歴任した。

大正はじめまで明地であったこの地に、日本橋から東京中央郵便局が引っ越ししたのは大正6年のことであったが、11年に火災焼失し、関東大震災前後のころ木造のバラック住まいをつづけていた。昭和2年、現局舎の基礎工事を開始、4年間の工事期間をへた6年12月に5階建て、延べ5万平方メートルの局舎が竣工した。通信省技師の吉田鉄郎が設計。白い壁面に黒い窓枠を大きくとった独特のデザインで、清楚な昭和初期建築の代表とされた。太い柱は大地震にも耐えるよう、機能重視で天井を高めたので、外目は8階ビルにもみえた。幸い戦災は免れたが、終戦後、一部を米国進駐軍が接収して私信に検閲機関の目が光るといった暗い時代も体験した。

第⑪話　丸の内3丁目ものがたり





旧都庁、国際フォーラムと国際ビル周辺の丸の内3丁目の家康入府当時は日比谷入江の海中にあり、遠浅で波静か、半農半漁の住民がのりや貝をひろい魚をとって生活したという。一画が陸地になるのは、1、2丁目や有楽町と同じ慶長8年丸の内郭埋立て工事で、翌9年ころ諸大名が続々と邸地を受けている。完成直後、慶長12年江戸城図によれば、外濠と石垣に囲まれた丸の内の地に広島49万8千石福島正則、和歌山37万6千石浅野幸長、高知24万石山内一豊上屋敷がならび、竹中重年、毛利高政らの氏名が記載されている。福島正則はのちの元和5年広島城無断修復を名目に改易。万一にそなえた武装兵士らが屋敷周囲を取巻いた。浅野家は霞が関に邸地を移し、山内家は丸の内で幕末を迎える。家康の娘ムコ池田輝政の3男忠雄が国際ビルの地に邸地を構えたのが元和7年、蜂須賀徳島藩上屋敷を旧都庁に迎えたのが元禄11年のことであった。幕末期は池田、山内、蜂須賀の3邸。このころ土佐藩邸に起居した勤皇志士坂本竜馬が大手町の神田橋門を抜けお玉が池の千葉周作道場にかよった。

資料図1　（丸の内3丁目①～④　旧同町②、④、⑥、⑧、⑩、⑫、⑭、旧有楽町1丁目①　国際ビル、新国際ビル、新日石ビル、東京会館、東京商工会議所、富士ビル、新東京ビル）

慶長9ころ～元和5－6	福島左近衛少将正則広島49万8千石	元和5年武家諸法度違反廃絶
元和7－3～寛永9－6	池田宮内少輔忠雄	岡山28万石
寛永9－6～貞享2－6	〃 相模守光仲	鳥取32万石
貞享2－6～元禄13－5	〃 伯耆守綱清	〃
元禄13－5～元文4－9	〃 相模守吉泰	〃
元文4－9～延享4－8	〃 宗泰	〃
延享4－10～天明3－10	〃 相模守重寛	〃
天明3－12～寛政10－6	〃 治道	〃
寛政10－6～文化4－7	〃 斉邦	〃
文化4－9～天保元－5	〃 因幡守斉とし	〃
天保元－8～〃 12－5	〃 斉訓	〃
〃 12－8～嘉永元－6	〃 慶行	〃
嘉永元－12～〃 3－5	〃 慶栄	〃
〃 3－10～慶応4年春	〃 相模守慶徳	〃
慶応4－春～明治3年	軍務官鳥取藩屯所、兵部省屯所	松平姓を称す
明治3－11～〃 9－1	文政元－3松平伯耆守邸の一部を添地拝領	
〃 9－1～19年	天保5－11堀内蔵頭邸、5－12火消組与力屋敷添地拝領	
〃 5－4～15－9	慶応4－春兵部省貸上げ、明治3－6兵部省貸上げのまま献上	
〃 11－12～19－7	兵部省、5－2陸軍省	
	陸軍省東京鎮台第1歩兵連隊	
	陸軍裁判所	
	監軍本部	

明治15－9～明治19－9　教導団
〃15－9～〃21ころ　軍法会議
〃19－2～〃21ころ　教導団軍楽基本隊
〃19－3～〃21ころ　監督部中央司令部
〃21年～〃23年　東京鎮台、陸軍省第1師団司令部残務部隊
〃23年～　三菱社所有地、明地

②富士ビルヂング
明治44－2～昭和35年　三菱第13号館、仲7号館
昭和20年代～昭和35年　進駐軍接収＝仲ホテル
〃20年代～昭和35年　仲7号館
明治45－3～〃35年　三菱第15号館、仲5号館1～5
三菱第17号館、仲5号館6、7
大正14－4～〃35年　竹葉亭、三菱仲7号館別館
昭和21－10～〃35年　三菱仲5号館
〃30年代　古河鉱業、明地
〃37－3～現在　富士製鉄ビル、45－3富士ビルヂング改称　東京会館を取込み

②東京会館
大正11－1～昭和15年　東京会館
昭和15年～〃16－12　大政翼賛会（徴用）
〃17年～〃22年　大東亜館
〃22－2～〃27－7　進駐軍接収＝将校クラブ
〃27－7～現在　東京会館
46－12富士ビルヂングに接合

③新東京ビル
明治29－4～昭和21－4　三菱第3号館、東7号館
昭和21－4～〃31－3　進駐軍米軍医学診療所
〃31－3～〃36年　三菱東7号館
明治ころ　人力車溜置場、たまり
昭和4－8～昭和36年　丸の内会館、三菱東7号館別館
明治43－8～〃36年　三菱第8号館、東12号館
〃45－4～〃36年　三菱第14号館、仲6号館1～5
〃45－4～〃36年　三菱第16号館、仲6号館6、7
大正3－6～〃21－3　第21号館、三菱21号館、仲21号館
昭和21－3～〃31－5　ソ連軍宿舎、極東空軍調達部、野史編集部、沖縄基地施設設計部（別資料では血液銀行、事務所）28年から順次返還
〃28年～〃38年　三菱21号館
大正7－6～大正14年　丸の内仲通郵便局、仲8号館別館
〃15－3～昭和36年　常磐屋、郵便局、仲8号館別館
昭和21－7～〃36年　仲6号館
〃38－6～現在　昭和21－4～24－7仲6号館、昭和21－8～23－12仲6号館および6号館を進駐軍接収。仲8号館、昭和20－12～24－7エコノミーリサーチ、昭和24－7～27－1通産省外国商社事務所として接収。新東京ビルヂング、昭和40－4増築（富士銀行丸の内支店、太陽神戸三井銀行丸の内南支店、大和銀行丸の内支店、千代田丸の内郵便局）

④新国際ビルヂング
大正元－8～昭和38年　三菱第18号館、仲4号館1～5
〃元－9～〃38年　三菱仲2号館
〃6－10～〃38年　日本製麻本社、富国徴兵保険、富国生命保険、昭和26飯野海連ビル
〃8年～〃38年　三菱仲2号第1生命別館
昭和38年～〃40年　生命保険協会
大正元－11～〃41年　帝国交通協会、日本交通協会
〃5－1～〃41年　新国際ビルヂング、42－3増築（住友銀行丸の内支店、生命保険協会、交通協力会）
昭和40－9～現在　有楽館（日本石油本社）

④新日石ビルヂング
昭和11－7～昭和20－10　進駐軍有楽ホテル、独身将校宿舎
〃20－10～〃31－1　日石ビル（日本石油本社、37－7日本石油）
〃31－1～〃54－7　新日石ビルヂング（日本石油、ユニバーサル証券本店営業部、ソウルシンタック銀行東京支店）
〃56－4～現在　初代帝国劇場
2代帝国劇場
日本倶楽部
三菱第19号館、仲3号館
東京会館別館　昭和21－9～24－9進駐軍宿舎
阪急BX共栄ストア、阪急航空代理店、駐車場、明地
国際ビルヂング（インドネシア国立銀行東京支店、ユナイテッド航空、日本倶楽部、丸宏証券丸の内支店、国際復興開発銀行、世界銀行）

①国際ビルヂング
明治44－3～大正12－9　帝劇ビル（帝国劇場、帝劇サブモール、出光興産、出光美術館）
大正13－10～昭和39－1　東京商業会議所、昭和2年東京商工会議所、18年東京商工経済会
〃10年～〃39年　東京商工会議所　昭和20－3戦災焼失、23－11復旧
〃元－8～〃39年　東京商工会議所新館
昭和戦前～〃39年　東京商工会議所ビルディング（日本商工会議所、東京商工会議所、東商ホール、KDD国際電信電話東京支店）
〃20年代～〃39年
〃41－9～〃

②東京商工会議所ビルディング
明治32－11～昭和20年　帝国ビル（帝国劇場、帝劇サブモール、出光興産、出光美術館）

資料図1－2～4　（丸の内3丁目②　東京会館、富士ビル）
慶長ころ　牧野伊予守成里　3千石
元和元ころ～万治3－12　織田丹後守長政　戒重1万石
万治3－12～寛文12閏6　〃　豊前守長定
寛文12－8～天和3－5　〃　主殿頭長明
天和3－5～元禄元－3　〃　丹波守長清　持筒頭

元禄元－3～元禄11ころ	伊東主殿頭祐春	3百石
〃 11－～享保2－7	小川長左衛門康明	3百俵
享保2－7～寛保3－6	林百助信智	3百俵
寛保3－9～宝暦はじめ	信有	〃
宝暦ころ～	松平相模守邸に囲込み（以下資料図－1参照）	
寛文ころ～貞享4－7	細川宗仙元隆	3百俵
貞享4－7～享保はじめ	〃桃菴法眼、自佃某	〃
明暦ころ～寛文	別資料 元禄9－8本多金五郎拝領	不詳
寛文ころ～延宝ころ	牧野信濃守某	不詳
貞享後期～元禄中期	織田左衛門中屋敷、印斉、山口某	不詳
正徳ころ	中川立甫某	不詳
享保はじめ～	安藤帯刀某	〃庭師
	山本道勾某	〃
	松平相模守邸に囲込み（以下資料図－1参照）	

資料図－5（丸の内3丁目②　東京商工会議所）

万治ころ～天保5－12	火消組与力屋敷。元禄～享保なしの可能性もある	
元禄4ころ～元禄6－12	堀三郎九郎某	不詳
〃 6－12～〃後期	曽我播磨守助興	6千5百石
宝永～正徳	水野飛騨守某	将軍綱吉側
天保5－12～	松平相模守邸に囲込み（以下資料図－1参照）	

資料図－6（丸の内3丁目③　新東京ビル）

慶長ころ	浅野紀伊守幸長	和歌山37万6千石
寛永ころ～正保元－10	杉原伯耆守重長	豊岡2万石
正保2閏5～〃年間	帯刀重玄	〃1万石
〃年間～慶安元－8	稲葉淡路守紀通	田丸4万5千石　慶安元年廃絶
慶安2－5～延宝7－2	青山因幡守宗俊	浜松5万石　寛文2年～延宝7年大阪城代
延宝7－4～貞享2－8	〃和泉守忠雄	
貞享2－10～享保7－6	〃下野守忠重	亀山5万石
享保7－6～〃15－7	〃因幡守俊春	〃篠山6万石　寛延元年～宝暦10年寺社奉行、大阪城代
〃15－9～宝暦10－7	〃忠朝	
宝暦10－9～天明元－6	〃下野守忠高	〃
天明元－6～〃5－7	〃伯耆守忠講	〃
〃5－9～寛政8－12	〃下野守忠裕	〃　寛政5年～8年寺社奉行
寛政8－12～文化5－8	松平大隅守宗允	宮津7万石
文化5－8～文政元－3	〃伯耆守宗発	〃　のちに老中
文政元－3～〃4－6	文政元－3大半を堀淡路守に、一部を松平因幡守邸に囲込み	
堀淡路守直興	須坂1万石	
〃4－10～天保5－10	〃中務少輔直格	〃
天保5－10～	松平相模守邸に囲込み（以下資料図－1参照）	

帝国劇場などの入っている国際ビルのはじめ、慶長9年から元和5年までの15年間、悲劇のヒーロー福島正則邸があった。正則は豊臣秀吉につかえ、しし が岳の役7本槍の筆頭とされた。関が原の合戦では家康方の先鋒として岐阜城を攻略し、戦後毛利の旧領、広島49万8千石を与えられた。しかし、幕府基盤の固まりとともに正則の立場は微妙になり、元和5年広島城石垣を修理したことが武家諸法度の無断修復にあたるとされて川中島での蟄居を命ぜられ、逝去廃絶となった。

元和7年から日比谷帝国ホテルの地に上屋敷をかまえた池田忠雄が移転してくる。忠雄の父は秀吉の功臣輝政で母は家康の次女督姫。9才のとき姫路6万3千石をえたが、輝政の亡くなったとき世継ぎをめぐって血なまぐさい毒饅頭事件が起こった。母の督姫が先妻の子をはぜそうと毒をもり、これに気づいた次兄が身代わりとなったとされる変事で、この結果忠雄はくりあがって岡山28万石に転じ、次の光仲のとき鳥取32万石に栄進した。斉訓のとき11代将軍家斉の27女泰姫を妻に迎えたが継子をえず急逝。後半の3代は養子がつづいた。慶行は東分家の長男で、慶栄は加賀前田家の2男、慶徳は水戸徳川家の5男で15代将軍慶喜の実兄にあたる。明治維新の鳥羽伏見の戦いでは薩長軍に与して、近藤勇の甲陽鎮撫隊、上野彰義隊を破って奥州を転戦した。池田邸の規模は当初約6千坪であったが、その後の添地拝領の結果1万3千5百坪の大邸宅となった。今日の国際ビルから新国際ビル、白石ビル、東京会館、東京商工会議所、富士ビル、新東京ビルにおよんだ。

新東京ビルの江戸はじめ図に浅野広島藩を創設した幸長名が記載されている。幸長は秀吉の腹臣長政の長男で、甲斐16万石を与えられ朝鮮出兵で加藤清正とかの地を転戦した。関が原の合戦では徳川方先鋒として岐阜城を攻め、つづく大阪の陣の功績で広島42万石の大封をえた。次の杉原重長は父の長房が関が原の合戦で西軍に属したが、浅野長政のとりなしで本領を安堵された。重長のとき嗣子なくいったんは所領を没収されたが、半年後養子をもって再興。しかしその重玄も17才の若さでなくなり無嗣廃絶となった。

青山家は家康の信任をえた忠成の孫宗俊からの8代。忠朝のとき寺社奉行にすすんで篠山5万石に栄進。忠裕が老中となり邸地を西の丸下役屋敷に改めた。松平宗允は5代将軍綱吉の母桂昌院の弟として大名となった宗賢6代の後胤。織田長政は織田信長の弟長益の4男。父長益が関が原の合戦で家康に味方し3万石をえ、元和元年弟とともに1万石の分知をうけた。伊東祐春はお肥藩主祐久の3男。明暦3年に父遺領のうち3千石を分知されて交代寄合に列した。寄合は3千石以上1万石未満で、参勤交代を行った旗本を交代寄合といった。林信智は幕府の儒官として知られる林家3代信篤の4男。兄信充とともに6代将軍家宣に進講し3百俵をえた。

明治2年、有栖川宮熾仁親王と西郷隆盛率いる東征軍の軍務官が兵部省と改め、翌3年

11月に国際ビル一画の旧鳥取藩邸跡に移転した。新政府軍の軍部本拠が丸の内に誕生、軍都として明治前中期の16年間を送ることになる。移転直後の明治5年に陸軍省と改称、6年には国民皆兵、徴兵制度がしかれた。陸軍卿は長州出身の尊壌倒幕志士・山県有朋で2度組閣、軍部と警察力をにぎって隠然たる権勢をふるった。創設当時の軍部は皇居の警護や国内の治安対策が主目的であったが、やがて列強をめざすことになる。

明治5年の大火で周辺軍施設の大半を焼失。工事費の不足で兵舎の再建もおぼつかなかったので、仮建築とし、明治9年に霞が関の地に移した。跡地は陸軍省の東京鎮台とかわる。鎮台は駐屯地を意味する常備軍で丸の内に7千の兵力を集結させた。新有楽町ビルの本庁舎には山田顕義、種田政明、大山巌以下の歴代長官が就任。大山長官は日露戦争で大国ロシアを破って軍神と崇められた。

国際ビル周辺には監軍本部、教導団、陸軍裁判所もおかれた。監軍部は軍の教育機関で、教導団は下士官の育成機関、陸軍裁判所は軍規違反者を罰した。明治19年、政局の安定で皇居周辺の警備もさして重要でなくなる一方、施設が手狭で軍事大国をめざすうえに不適当であるとして退去、残り部隊は師団と改称された。丸の内はこの鎮台移転を契機に軍都としての歴史的使命を終え、23年残り施設も青山に引っ越した。

この年、10万坪にもおよんだ軍施設は三菱合資に売却され、三菱の丸の内計画創生期の三菱第3号館が明治26年に着工、29年に竣工した。3階建て地下1階のレンガ造りで、先に建設された1号館、2号館、直後に竣工する商業会議所ビルと馬場先通りをはさんで4棟のレンガ建築が立ちならんだので、人々は三菱村の4軒長屋と呼んだ。第1号館と第2号館は居住者ごとにそれぞれに独立した玄関をもったが、第3号館は当初から郵船の専用事務所用に設計されたので、出入口も1つで、中廊下を中心に部屋割りし、オーチス社の水圧式エレベータ、蛇口式の水道を設置した近代オフィス形態とした。第3号館に入居した日本郵船会社は郵便汽船三菱と共同運輸が合併して生まれた国策会社であったが、大正12年、現在地の丸の内2丁目への引っ越し作業で火災をだし、大改造した。

周辺に三菱合資によるビル建設が続いた。第8号館は明治40年の完工で、レンガ造り地上2階地下1階の4棟、住居兼用のオフィスであった。当時はまだ共同ビルの需要は少なく、テナントの要請で独立した建屋とした。明治44年竣工の第21号館は最初のレンガ造り本格オフィスといえた。地上3階地下1階で、延べ建築面積が5千平方メートル。大部屋を多くとって、入居者が自由に仕切れるようにしたが、玄関やトイレは各社別々という構成だった。第14号館からはレンガ造りが鉄筋コンクリート建築になった。第17号館までは3階建てで、1棟3百平方メートルほどの専用小型ビルを2～5棟連ねた。このころ馬場先通りは道路をはさんでレンガ造り建築がならんだので1丁ロンドンの名が定着した。

大正12年9月の関東大震災はビル建築のはしりとなった三菱の赤レンガ街にも1大試練の場となったが、東京会館が半壊した以外無傷で、震災につよいビルという評価が評判をよんで、京橋や日本橋周辺の焼失会社から事務所申込みが殺到し、震災翌年には丸の内に本社をもつ企業数が2倍以上にふくれあがった。

昭和20年の太平洋戦争でも一帯の被害は甚少だったが、江東地区が全滅した昭和20年3月10日、東京商工会議所の前身東京商工経済会に焼夷弾が命中、木造屋根をつきやぶって内部を焼失したほか、三菱仲4号館、仲5号館、仲6号館も被害にあった。三菱第21号館には屋上に焼夷弾が18本、中庭に11本、3階窓に1本など40本近くが被弾。屋上はコンクリート建築のため自然消火したが、その他の火は防護団員が防火用水のバケツリレーで消し止めた。米軍の戦後資料によれば、占領政策上必要な丸の内周辺建物の爆撃を見送ったともいう。わずか数百メートルしかはなれていない銀座が絨毯攻撃で跡形もない焼け野原と変わったのとくらべれば、まだ恵まれたともいえた。終戦と同時に進駐したアメリカ軍は周辺ビルをかたっぱしから接収していった。三菱東7号館と変わった第3号館が医学診療所に、三菱第21号館がソ連軍宿舎、極東軍空軍調達部など、仲7号館（旧第13号館）が宿泊施設の仲ホテル、仲3号館（旧第19号館）が軍宿舎、東京会館が将校クラブといった具合。これらの接収は最長、昭和31年までつづいた。

富士製鉄ビルヂングの前身は、東京駅側が明治45年に竣工した赤レンガ造りの三菱仲5号館（旧15号館）跡地で、仮設の仲5号新館、有楽町側は明治44年竣工の三菱仲5号館（旧第13号館）が連合国軍の接収解除されたままで残されていた。工事は昭和35年にはじまり、37年に鉄骨鉄筋コンクリート地上9階地下3階延べ1万4千平方メートルを完成。ビル名は当初主要テナントの富士製鉄ビルヂングとされたが、45年3月、八幡製鉄と合併して大手町の新日鉄ビルヂングに移転したことから富士ビルヂングと改称した。翌46年に東京会館の改築にあわせて増築取込み、延べ床面積が8万2千平方メートルとなった。

富士ビルに連結、取り込まれた東京会館は、昭和11年、日本経済の中心地丸の内に国際的な社交場とホテルをつくろうと提言した東京商業会議所の藤山雷太会頭と帝国劇場山本専務との合意にもとずいて、会議所と帝劇中間の三菱合資の所有明地に建設された。鉄筋コンクリートの4階、資本金のほとんどを建築費に投じたという豪華レストランで、最上階の窓は半円形で、回りに装飾をほどこした。当初は上階にホテルも計画したが当局の許可がおりず、地下は帝劇と連結して観劇の幕間に食事が楽しめるようになった。東京新名所とされた東京会館の悲劇はわずか10か月ほどで起こった。大正12年9月の関東大震災で半壊、諸種の負債を整理した14年に帝劇に合併吸収された。戦争の影がしのびよる昭和15年、大政翼賛会に徴用された。大政翼賛会は第2次近衛内閣が創設した国民組織で、当初

は軍勢力の監視機関的な性格をもったが、のちに行政補助機関として戦時体制の推進役となった。既成政党は先を争って解散、加入したので、大政翼賛会一色となった。16年12月8日、第2回中央協力会議が行われたこの日、わが国はアメリカ本土の真珠湾を急襲して太平洋戦争に突入した。挨拶にたった東条英機首相兼総裁は「帝国の興亡はまさにこの一戦にかかっている。国家の総力をあげて大進軍を決行しよう」と大見栄を切った。戦時の一時期、大東亜館と改称したこともあった。昭和18年には日本を盟主に、満州、中華民国、フィリピン、タイ、ビルマ、インドなどが参加した大東亜会議がこの大東亜館で開かれたが、戦局が回復することはなかった。終戦直後のころ、連合軍に接収され、将校高級クラブに、帝国劇場側にあった別館は進駐軍兵士の宿泊所を体験した。接収解除後は引きつづく高級レストランとしての評価を高めたが、昭和46年に大改造して富士ビルヂングと結んだ。

新東京ビルは昭和36年、岩戸景気で投資ブームをつくった日興証券のオフィス確保要請が契機となった。ここには三菱仲6号館（旧第14号館）、三菱仲8号館（旧第16号館）、三菱東7号館（旧第3号館）、三菱第21号館などがたっていた。第1期工事はテナントとの調整の遅れた三菱第21号館を除いたかたちで38年完成、第2期工事も40年の4月に竣工した。地上9階地下4階、延べ建築面積が10万6千平方メートルにもおよび、大手町ビルとならぶ東洋有数の近代賃貸ビルディングとされた。テナントには日興証券本社と旧ビル企業が引つぎ、地下にアーケード街もオープンした。

新国際ビル地の戦前戦後期に交通協会と生命保険会館があった。帝国交通協会は明治31年創設の交通関連の親睦団体。大正5年、三菱合資所有地を借りて3階鉄筋コンクリートビルを竣工、戦後は協会名を日本交通協会と改めて41年まで会館をおいた。生命保険協会は明治38年に発足した生保団体で、明治43年三菱地所所有の現在地にレンガ造3階建ての生命保険会館を竣工させていた。新国際ビルの第1期工事は三菱所有の三菱仲2号館、仲4号館（旧第20号館）跡地に昭和40年竣工。日本交通協会、生命保険協会、三菱仲2号別館などの第2期工事を42年に完成させた。地上9階地下4階、延べ面積が7万7千平方メートルあり、隣接の国際ビルに相対しているとして新国際をビル名とした。主要テナントは日新製鋼と共同ビルの交通、生保協会で、1階フロアに住友銀行などの金融機関がオフィスを構えている。

わが国の石油企業を代表する日本石油の創業は明治21年、柏崎市における石油採掘にさかのぼるが、本社の東京進出は、創立26年をへた大正3年のことで、以後、丸の内と深くかかわっている。この年、三菱第21号館の2階全フロアと3階一部に移転。社勢の興隆で自社ビル建設の機運がみなぎると、三菱合資から21号館横の明地2千2百平方メートルを借りて、昭和11年、地上7階地下1階の鉄筋コンクリート構造、延建築面積1万5千平方メートルの有楽館を完成した。直後に太平洋戦争がはじまり、18年には悪化した戦局挽回のため、航空機、戦艦、銃弾などの大増産が至上命令となり、日本石油も軍需工場に指定された。戦後、有楽館は進駐軍に接収され、本社は一時、三菱仲5号館などに分散したが31年に復帰、37年の西新橋の本社ビル日石本館建設までの間、本社となった。

築後50年以上をへた昭和40代の後半に入ると建物の老朽化がすすんだので、敷地所有者の三菱地所と日本石油との間で共同ビル建築の話がまとまり、56年に竣工した。新ビルは鉄筋コンクリート地上11階地下4階、延べ面積が2万6千平方メートル。隣接する新国際ビルと軒高、デザインなどを統一し、地下の駐車場を接続した。

国際ビルの地には以前、三菱の仲3号館と帝国劇場、日本倶楽部などがあった。仲3号館は大正元年建築の鉄筋コンクリート3階建てで、3百平方メートル程度の独立事務所5棟からなっていた。日本倶楽部は電気ビル旧清棲伯爵邸跡をへて大正10年から三菱地所所有地に事務所をおいたが、再開発で両社の合意が成立した。三菱側のこうした丸の内総合開発計画の一方、帝国劇場を所有した東宝にも、高層ビル計画があり、共同ビル計画が具体化されることになった。

日本最初の本格洋風大劇場として知られる初代帝国劇場の竣工は明治44年3月のことで、ルネッサンス風フランス式建築の木造5階建て（地下ふくむ）建坪6百45坪。外部を白色のレンガで表面をくるんで白亜の殿堂とも呼ばれた。屋上には帝劇の象徴ともいえる翁の立像を立て、内部は大理石の円柱、色とりどりの絵画、彫刻が壁面をかざった。定員が千7百人で全席が椅子席。その豪華さが明治東京人の目を奪った。帝劇のコケラおとしは尾上梅幸、松本幸四郎の『頼朝』西洋舞踏『フラワーダンス』など。有力な幹部俳優の引き抜きや女優養成所第1期生の初舞台などで世上をにぎわしていたので初日があくと観客は待ち兼ねたように詰めかけた。45年には文芸協会の『ハムレット』が上演され、大正3年の『復活』では松井須磨子が『カチューシャかわいや』を歌って満都のファンをわかせた。

帝劇舞台の人気のひとつに専属女優劇があった。日本最初の女優・川上貞奴が作った帝国女優育成所の後身で、女優劇やダンスがもてはやされた。1期生に森律子、村田嘉久子らがいたが、その後めだった後輩がでず、1期生の容姿の衰えとともに凋落していった。「歌舞伎の女形に女優を演じさせる試みは失敗したが、女優の現代劇は帝劇名物として成功した。そして簡便な切符制度、食堂利用の食事、チップの廃止、観劇時間の短縮など帝劇が時代に先駆けたのであった」（帝劇の50年）。三越のコマーシャル「きょうは帝劇、あすは三越」が流行語となり、帝劇の人気はいやがうえに高まった。

大正12年の関東大震災で焼失。復興工事に百20万円を投じて再建したが、2代目時代は

低調で経営も松竹、東宝へと移った。昭和14年、東宝移管後の帝劇は東宝の宿願でもあった演劇殿堂としてスタートを切るが、太平洋戦争の直前で、翌15年には内閣情報局庁舎として接収された。開演中の3月新国劇公演は千秋楽を迎えることなく打切り。戦争の影は色濃く帝劇に覆いかぶさった。戦後は20年10月に再開場、待ちかねた演劇ファンの期待にこたえた。

国際ビル建設工事は39年にはじまり、2年半後の41年に完成した。地上9階地下3階、延べ建築面積が11万7千平方メートル、日本屈指のマンモスビルディングと評判をとった。その1階から3階に最新の舞台装置と音響設備、照明設備を網羅した3代目帝国劇場が入った。9月20日、東宝オールスターによる『帝劇オープニングフェスティバル』で華ばなしくオープン。空前の大スペクタル『帝劇グランドロマン・風とともに去りぬ』が大ヒットした。国際ビルヂングには地下に商店街の帝劇サブモールが入り、4～9階に出光興産、出光石油化学がエフィスを構え、出光美術館が開設された。

東京商工会議所の地にその前身にあたる東京商業会議所が開設されたのは明治32年のことであった。福沢諭吉、大倉喜八郎らを発起人に24年発足。当初は商工業界の利益代表として中小企業の融資、商圏擁護などにあたったが、建物は20年3月の東京大空襲で焼失し、23年に改装復帰した。戦後は21年に東京商工会議所を復活、大業界、大企業優先の経済連、日経連に対して、中小商工業の利益代表としての性格を強めた。

資料図－7

慶長ころ	～元和元年	（旧都庁1号庁舎、都議会庁舎、JRガード）	
元和元年	～寛永11－10	竹中伊豆守重年	府内2万石
〃	～筑後守重信		3千石
不詳	～明暦3ころ	松平能登守乗政	5千石
万治3－11	～延宝7－11	坂部三十郎広利	5千石
延宝7－11	～元禄8－6	〃 広象	
元禄8－7	～〃11－9	〃 播磨守広慶	
〃 11－9	～享保13－1	蜂須賀阿波守綱矩	徳島25万石
享保13－1	～〃20－6	淡路守宗員	
〃 20－6	～元文4－2	〃 宗英	
元文4－2	～宝暦4－5	〃 阿波守宗鎮	
宝暦4－5	～〃4－7	〃 至史	
〃 4－8	～明和6－10	〃 阿波守重喜	
明和6－10	～文化10－9	〃 治昭	
文化10－9	～天保14－10	〃 斉昌	
天保14－10	～慶応4－1	〃 斉裕	
慶応4－1	～明治2年春	〃 斉韶	

寛永11年兄重義不行跡連座廃絶
小姓組番頭のちに松平岩村家立藩
百人組頭
定火消
小姓
将軍家斉22男、養子

元禄11－9山内土佐守の一部、荒川土佐守、坂部三十郎邸を拝領。宝暦7－8、宝暦7－9、天明5－5添地拝領
文政10－閏6松平伊豆守邸の一部、道路敷を添地拝領
山内高知藩邸囲込み（以下資料図－9参照）

明治2年春～

資料図－8

慶長ころ	～寛永5－11	毛利伊勢守高政	佐伯2万石
寛永5－11	～〃9－11	〃 摂津守高成	
〃 10－	～寛文4－8	〃 伊勢守高直	
寛文4－11	～〃11年	〃 阿波守高重	
〃 11年	～	山内土佐守邸に囲込み（以下資料図－9参照）	

資料図－9

（丸の内3丁目⑥、⑦、⑧、旧有楽町2丁目①、④、⑤ 旧都庁2号庁舎、有楽町駅の一部、そごう、JRガードの一部）			
慶長8年	～慶安10－9	山内土佐守一豊	高知24万石
慶安10－11	～明暦2－7	〃 忠義	
明暦2－7	～寛文9－6	〃 対馬守忠豊	
寛文9－6	～元禄13－9	〃 土佐守豊昌	
元禄13－11	～宝永3－8	〃 豊房	
宝永3－8	～享保5－4	〃 豊隆	
享保5－5	～〃10－9	〃 豊常	
〃 10－10	～明和4－11	〃 豊敷	
明和5－1	～寛政1－8	〃 豊ちか	
寛政1－10	～文化5－2	〃 豊策	
文化5－2	～〃6－3	〃 豊興	
〃 6－5	～天保14－3	〃 豊資	
天保14－3	～嘉永元－7	〃 豊熙	
嘉永元－9	～〃元－12	〃 豊惇	
〃 元－12	～安政6－2	〃 土佐守豊信	
安政6－2	～明治4ころ	〃 豊範	
明治5年	～〃25ころ	寛永4年奥田喜左衛門邸添地拝領	
〃 14－4	～〃20－4	寛文11年毛利阿波守邸相対替え拝領	
〃 14－4	～〃20－4	元禄11年永井靭負、池田岡山藩下屋敷一部添地拝領	
〃 14－4	～〃20－4	別資料 寛永ころ～元禄2年敷地一部に山内中村藩上屋敷設置	
〃 27－7	～平成3－3	陸軍省練兵所	
平成3年	～	東京憲兵本部	
		東京憲兵隊第1管区屯所	
		東京府庁、東京市役所、東京都庁	
		東京国際フォーラム建設中	

⑤旧東京都庁西側

明治27－7	～昭和20－3	東京府庁舎、	昭和18－7東京都旧本庁舎 戦災焼失
〃 31－10	～〃20－3	東京市庁舎、	昭和18－7東京都旧本庁舎 〃
大正10－10	～〃20－3	商工奨励館	〃
〃 12年	～平成3－3	工業奨励館、	西第8庁舎

大正13年～平成3－3　都庁西3号庁舎、帝国農会、衛生研究所、西第10号館、麹町保健所

〃　14年～3－3　官房庁舎、西第1号館

昭和2－12～〃　3－3　日本赤十字社

〃　9年～〃　3－3　都庁西2号庁舎

〃　13年～〃　3－3　帝国農会ビル、西第3号館

〃　13年～昭和45ころ　議会局庁舎、議会局分庁舎

〃　25－10～平成3－3　議会局庁舎

〃　32－2～〃　3－3　都庁舎新館、都庁第1本庁舎

〃　45－1～〃　3－3　新議会局分庁舎

〃　3年～昭和11－10　東京府農工銀行

〃　11－10～19－6　日本勧業銀行東京支店

〃　21－12～〃　末期　日本勧業銀行丸の内出張所、有楽町支店、第1勧業銀行有楽町別館宝くじ部

⑥⑦旧東京都庁脇高架商店街
昭和30年代　フジフォトサービス、サン写真車庫、上野運送、トキワクラブ、東京商工、視覚教材、国鉄協生活協組、藤越商事、三工商会、三近酒場、日本宣伝、小林、共栄産業、飲食用水貯蔵所、東京都クラブ、三星興産、財法民生会、日本擬水、丸の内産婦診療所、国際観光自動車寮、サンゼット商事、東装備、東洋軌材、三和建設、谷自動車、バー青白、ぎんらく、三木、さつきや、サロンクリッパ、パチンコピース、有楽町観光サービス

この間省略

平成はじめ　富士花梨、とんかつ繁、TOMOE丸の内分室、松文社、日交、鈴光電業、日本宣伝、グリーン、東京都倶楽部、荒木商店、クラブ食堂、日の丸自動車分室、ミルクワンタン、日恵、朝日レストラン、シャノアール、古谷製作所、東京商工、とんかつ繁、オリオン、常磐倶楽部、東洋軌材、モトーレン東洋、山楽、さつまや、三喜、こうじの、マル美、谷、有楽町倶楽部、末広、区民会館、区民集会所、養老の滝、丸三倶楽部、毎日、玉菊酒造、ふじ虎、珈琲館、信州庵、松本理容店、楽々、BORO、変圧器室、有楽サービス、東鉄管内温泉旅館案内所、ドリンクコーナー、丸の内、新角ラーメン

⑧旧東京都庁東側
明治末期～昭和50年代　東京市水道局
昭和戦前～7－6～平成3－3　東京市下水課、社会局、土木局、保健局
〃　7－6～平成3－3　都庁東3号庁舎、丸の内食堂
〃　22年～〃　都庁東2号庁舎
〃　20年代～昭和30年代　職業安定所分室、民生局救護世話課、労働局、清掃局、健康保険組合、都職員共済組合診療所、教育庁
〃　40年代　計量検定所、南多摩開発本部、総務局電子計算課
〃　35－4～平成3－3　都庁第2本庁舎
〃　38－2～〃　3－3　交通局仮庁舎、都庁東6号庁舎
昭和50－1～平成3－3　都庁第3本庁舎、都庁丸の内庁舎

資料図Ⅰ－10
慶長年中～元和元年　青山五郎八成重　下総国内1万石　元和元年改易
元和元年～寛永7－3　酒井右近太夫直次　左沢1万2千石　寛永7年絶家
寛永7年～不詳　酒井庄内藩中屋敷
承応ころ～寛文10－1　神尾宮内少輔守勝　3千石
寛文10－1～元禄9－8　水野福山藩下屋敷
元禄9－8～〃　11－9　別資料元禄はじめ図大久保安芸守忠増　将軍綱吉小姓
〃　11－9～　荒川土佐守重好　1千石
松平徳島藩邸に囲込み（以下有楽町編参照）

資料図Ⅰ－11
慶長年中～元和元年閏6　福島掃部頭高晴　大和松山3万石　元和元年除封
元和2年～慶安3年　織田刑部大輔信則　柏原3万6千石
慶安4年～寛文2－3　伊丹播磨守勝長　徳美1万2千石　慶安3年～寛文2年勘定奉行
寛文2－6～元禄4－6　〃　大隅守勝政　〃　寛文2年黒川金山奉行
元禄4－9～〃　9－8　〃　左京勝守　〃　元禄9年発狂自殺廃絶
〃　9－8～〃　11－9　池田岡山藩下屋敷　〃　11年類焼上地
〃　11－9～　山内土佐守、蜂須賀阿波守邸囲込み（以下資料図Ⅰ－9参照）

資料図Ⅰ－12、13
慶長年中～慶長11年　彦坂小刑部元成　伊豆金山奉行　慶長11年改易
不詳～寛永4年　慶長後期～寛永はじめ2分　奥田喜左衛門某　不詳
寛永4年～元禄2年　高知山内藩中屋敷（または下屋敷）
元禄2年～　山内土佐守邸に囲込み（以下資料図Ⅰ－9参照）
寛永ころ～寛文2－7　松平出雲守勝隆　佐貫1万5千石
寛文2－9～延宝8－8　〃　山城守重治　〃　延宝3年～天和元年寺社奉行
延宝8－8～元禄11－9　永井籾負直円　新庄1万石
元禄11－9～　山内土佐守邸に囲込み（以下資料図Ⅰ－9参照）

資料図Ⅰ－14（外濠沿い向屋敷）
延宝ころ～元禄11－9　松平出雲守、永井籾負向屋敷
〃　〃　山内土佐守向屋敷
〃　〃　伊丹大隅守、池田岡山藩向屋敷
〃　〃　不詳、曽谷長順　外濠沿い道路敷
元禄11－9～

日本一の良妻で知られる山内一豊も丸の内3丁目に邸地を構えた。一豊は父盛豊が織田信長に攻められたとき自刃したので母とともに落ち豊臣秀吉の麾下に属した。29才のとき

若党の娘を妻とし、一豊を献身的な内助の功で出世させていく。5百石取りだったころ馬を買う金がない。妻が鏡箱の中からソッと黄金10枚をさしだした。関が原の合戦で徳川方について一躍24万石をえるが、この増封でも妻の働きがめだった。大阪方では徳川方についた諸大名の妻子を人質としたが、翻意を迫る大阪方書状に独自情報をしのばせ家康に報告させた。一豊には実子がなかったので弟の忠義が養子となった。野中兼山を登用して、藩政の改革にあたるが、不共和音もつよく忠豊のとき弾劾書をだして失脚させた。豊ちかのとき天明の大飢饉がおこり逃散や打壊しがつづいた。豊ちかは若手人材を登用して、徹底した減量政策をすすめた。

幕末期に英主とたたえられた豊信（容堂）がでた。支藩高知新田藩から本藩を襲封、吉田東洋を起用して藩政改革と富国強兵をはかった。安政5年の将軍継嗣問題では松永慶永、島津斉あきらと一ツ橋慶喜擁立をはかるが井伊直弼にはばまれ、安政の大獄で隠居と謹慎を命ぜられた。万延元年、井伊大老の横死で政界に復帰し、公武合体の立場から朝廷と幕府間の融和につとめた。慶応3年、15代将軍慶喜に大政奉還を建白。明治戊辰の戦いのとき板垣退助が官軍参謀、谷干城が大軍監となって東海道を進軍し、北陸征討軍監の岩村精一郎が河井継之助の長岡城に戦火をあびせた。丸の内邸は当初こそ2千坪にすぎなかったが、元禄11年大火後の割替えなどで添地。明治維新時は7千坪を領有した。

江戸時代はじめは竹中重利、毛利高政らの邸地もあった。竹中重利は秀吉の軍師竹中半兵衛のイトコで関が原の合戦の勝利で府内2万2千石にすすんだ。嫡子の重義が長崎奉行にすすんで別家をたてたので、弟重信が相続したが、重義が切腹廃絶されるにおよんで連座、お預け、改易となった。松平乗政は館林藩主で老中をつとめた乗寿の2男。4代将軍家綱の小姓から出世して小諸2万石となった。坂部広利は旗本奴として悪名高い白柄組のナンバー2。「夜更けてとおるは何者ぞ。加賀爪甲斐か泥棒か、さては坂部の三十」とその名を恐れられた。

青山成重は忠世3男忠重の家系。忠重に子がなかったことから成重が養子に迎えられたが、慶長18年、大久保長安事件に連座して改易処分とされた。伊丹勝長の父康勝は2代将軍秀忠に近侍し、3代将軍家光のとき勘定頭にすすんだ。代々勘定奉行、金山奉行などの要職をつとめたが、4代勝守のとき発狂自殺、所領が没収された。彦坂元成は家康腹心の1人。関東入府にしたがって江戸町奉行、相模、伊豆代官などに任ぜられた。年々の豊凶によって徴収額を決める彦坂流で名代官とうたわれたが、鶴ケ岡八幡宮造営工事担当を命じられたとき、家康の不興を被って閉門。折しも領民の訴えで不正が露顕したとして改易となった。

松平勝隆は家康の側近重勝の5男。寛永16年3代将軍家光に近侍して佐貫1万5千石の新封をえる。次の重治のとき寺社奉行となるが機密情報を身分低いものに教えたとして改易。つづく永井家は三河以来の譜代だが、直長が4代将軍家綱の法要奉行を命ぜられたとき、鳥羽藩主の内藤忠勝に刺殺され無嗣廃絶となった。延宝8年弟直円をもって新庄1万石の名跡相続を認められたが、元禄11年に山内土佐藩邸に囲込みとなった。

元禄11年の大火は一帯をなめつくし、直後の割替えの結果、旧山内邸の一部、荒川土佐守邸をあわせた5千百坪が徳島25万石蜂須賀綱矩邸になった。綱矩は豊臣秀吉につかえた正勝6代の後胤。当時の阿波藩は米作と藍や塩の産業振興を基盤にした藩財政が逼迫、藩政改革をめざすが、一揆や騒動、阿波踊りといった反封建運動が爆発し、人形浄瑠璃で有名な阿波の十郎兵衛がハリツケとなったのもこのころのことであった。養子重喜のとき藩政改革に失敗、国政よろしからず隠居を命ぜられた。斉裕は11代将軍家斉の22男として江戸城で生まれ、養嗣子に迎えられた。文久2年幕府陸軍総裁に就任、海軍総裁を兼ね、朝廷、幕府間の仲介につとめた。慶応4年最後の藩主茂韶が襲封。明治戊辰の戦いで2百名を東征軍に送った。

明治5年2月、大火で旧山内藩邸を焼失。跡地は復興のめどがたたないまま、放置されて、陸軍の練兵場とされた。この練兵場の北隅に東京憲兵本部、東京憲兵隊第1管区屯所がおかれたこともあった。憲兵は軍事警察のことで、明治14年皇居外苑で開設、14年から20年まで旧都庁国際フォーラムの一部においたが、府庁の移転に先だって大手町に移った。

東京都庁の前身・東京府庁が内幸町から有楽町駅前に移転したのは明治27年8月のことであった。この年旧都庁第1庁舎の所に府庁舎を新築。宏壮なるレンガ造りで玄関の上にこうろ型の物見台をのせた。ドイツ式2階建て洋館の威容が草ぼうぼうの三菱が原に映えた。丸の内ビル街建設前夜のことであった。府庁（都庁）は以後庁舎の増設をくりかえしながら、平成3年までの90年間この地で東京都政（府政）をしいた。東京の都市計画をいかにすすめるかが歴代知事の懸案でもあった。東京を丸ごとヨーロッパにしようというエンデ・ベックマンの東京改造論が論議されたこともあったが日の目をみない。内務官僚のまま東京知事を兼任した芳川顕正の市区改正意見書が、明治後期から大正7年ころまでかかってようやく実現した。関東大震災後、東京府はふたたび大規模な特別都市計画法を施行。中心市街地に道路を開き隅田川に次々と近代橋梁を建設した。

この府庁に一時東京市役所が併設された。府庁舎が有楽町に戻った明治22年、府の管轄下のもと東京市が生まれたが、府知事が市長を兼任するという変則運営で市政とは名ばかりであった。31年10月1日、地方自治制度の要求が高まると、本格的な東京市が誕生、府庁内に市役所が誕生した。この日を『自治記念日』とし、のちに『都民の日』となった。東京市は戦時下の昭和18年首都東京行政の一元化の名のもとに府と市が廃止されて東京都

に生まれかわった。

戦前から戦後にかけて、都庁には日本赤十字社、商工奨励館、衛生研究所、帝国農会、東京府農工銀行などの関係機関がおかれたが、昭和20年3月、東京大空襲で歴史ある旧本庁舎と商工奨励館が焼夷弾の直撃をうけて全焼。一時、庁舎を東京会館の前身大東亜館に移した。戦後の東京はその3分の2が焦土と化してその復興対策におわれた。人々は衣食と住居を求めるギリギリの生活に甘んじた時代。やがて、朝鮮動乱を契機に経済復興がすすむと、日本は高度成長へと歩む。都庁は行政分野の拡大から一気に狭溢化がすすんだ。機構改革のたびに増改築をくりかえしたが、到底入りきれず、有楽町の交通会館の一部などに分散したこともあった。都知事が安井誠一郎、美濃部亮吉、鈴木俊一と変わった昭和60年の都議会は、ついに本庁舎と議会棟の新宿副都心移転を決議した。

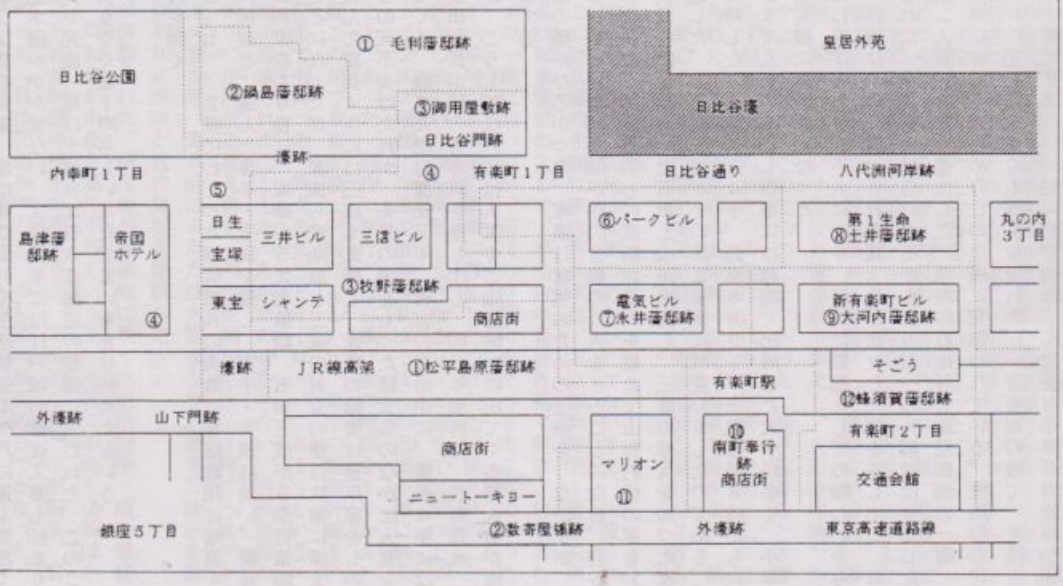
都庁の移転作業は平成2年10月からはじまった。翌3年1月にかけての第1次、第2次移転計画でOA機器や備品，書類などが送り込まれた。1万3千人を超える本庁職員と什器、一般書類を移動する第3次計画はさらに5陣に分けられ、この年の第1回都議会例会が終了した3月8日夜から月末までに全職員の移庁が行われた。明治27年開庁以来実に百余年間の歳月があった。

参考　徳川歴代将軍の幕閣　本書の主要登場人物

初代征夷大将軍＝徳川家康（慶長8年～慶長10年）
老中＝大久保忠隣、榊原康政、井伊直政、本多忠勝、本多正信、大久保長安、本多正純、成瀬正成、安藤直次、内藤清成、青山忠成　京都所司代＝板倉勝重
第2代征夷大将軍＝徳川秀忠（慶長10年～寛永元年）
老中＝土井利勝、酒井忠世、安藤重信、内藤清次、青山忠俊、井上正就、永井尚政
第3代征夷大将軍＝徳川家光（寛永元年～慶安4年）
大老＝酒井忠世（寛永13年）土井利勝（寛永15年～正保元年）酒井忠勝（寛永15年～明暦2年）老中＝森川重俊、青山幸成、堀田正盛、阿部忠秋、松平信綱、阿部重次
第4代征夷大将軍＝徳川家綱（慶安4年～延宝8年）
大老＝酒井忠清（寛文6年～延宝8年）井伊直澄（寛文8年～延宝4年）老中＝久世広之、板倉重矩、堀田正俊
第5代征夷大将軍＝徳川綱吉（延宝8年～宝永6年）
大老＝堀田正俊（天和元年～貞享元年）井伊直該（元禄10～13年）柳沢吉保（宝永3～6年）老中＝阿部正武　側用人＝牧野成貞、勘定奉行＝荻原重秀
第6代征夷大将軍＝徳川家宣（宝永6年～正徳2年）
大老＝井伊直該（正徳元～4年）側用人＝間部詮房　儒者＝新井白石
第7代征夷大将軍＝徳川家継（正徳3年～享保元年）
第8代征夷大将軍＝徳川吉宗（享保元年～延享2年）
老中＝水野忠之、松平乗邑、側御用取次＝有馬氏倫、加納久通　勘定奉行＝神尾春央
寺社奉行＝大岡忠相
第9代征夷大将軍＝徳川家重（延享2年～宝暦10年）
老中＝堀田正亮、松平武元　側用人＝大岡忠光
第10代征夷大将軍＝徳川家治（宝暦10年～天明6年）
大老＝井伊直幸（天明5～8年）老中＝田沼意次、井上正経、久世広明、水野忠友
若年寄＝田沼意知
第11代征夷大将軍＝徳川家斉（天明6年～天保8年）
大老＝井伊直亮（天保6～12年）老中＝松平定信、本多忠かず、大久保忠真、水野忠成　寺社奉行＝脇坂安だ
第12代征夷大将軍＝徳川家慶（天保8年～嘉永6年）
老中＝土井利位、真田幸貫、阿部正弘、水野忠邦、松平忠優
第13代征夷大将軍＝徳川家定（嘉永6年～安政5年）
大老＝井伊直弼（安政5年～万延元年）老中＝堀田正睦、間部詮勝　勘定奉行＝川路聖あきら　外国奉行＝岩瀬忠震
第14代征夷大将軍＝徳川家茂（安政5年～慶応2年）
大老＝酒井忠積（元治2年～慶応元年）老中＝安藤信正、久世広周、板倉勝静、阿部正外、本庄宗秀、松前崇広　政治総裁＝松平慶永　京都守護職＝松平容保
第15代征夷大将軍＝徳川慶喜（慶応2年～慶応4年）
老中＝小笠原長行　陸軍奉行＝小栗忠順　軍艦奉行＝勝海舟

第⑫話　有楽町ものがたり





①有楽町のあけぼの

有楽町の百余年の昔は江戸城の一部であった。蛇のように曲がりくねった高速道路のところに外濠が回り、その有楽町側には石垣が積まれて、銀座側の江戸城下と分断されていた。当時の有楽町は将軍家への人質と参勤交代のための大名屋敷がつらなり、日比谷通りを登城のための大名行列が静しずとすすんだ。ここには徳島、高知、鳥取、高崎藩などの上屋敷や大岡越前や遠山の金さんが活躍した南町奉行所があり、日比谷公園の地に伊達政宗、毛利輝元、鍋島直茂らが邸地をうけた。

明治維新では官軍の屯所や明治元勲邸にかわり、陸軍本拠や警視庁、府庁（都庁）が開設された。戦後の混乱期は連合軍総司令部のGHQがおかれ、駅前闇市街に夜の女とかっぱらいが横行した。映画と演劇の街として戦後の暗闇に夢と勇気をあたえたのも有楽町であった。首都東京の顔として繁栄をかさねた有楽町の4百年間はまさにわが国の近代史そのものでもあった。

はじめに日比谷入江ありき

東京がはじめて都市としての端緒を開いた、いまを去る5百数十年、長禄2年（一四五八）4月、太田道灌江戸城開設当時の一帯は台地と入江が入り組んだ複雑な地形で有楽町は日比谷入江の海中にあった。道灌は足利家と関東の勢力を2分した上杉家の家臣で、千葉県内の足利方豪族の動きを封ずる目的で江戸城を築いたが、中傷をうけて暗殺され、江戸は北条家の手におちた。

その後の百年間は戦雲の動乱がつづく戦国時代のまっただなかであった。天正18年（一五九〇）には、天下統一をはたした豊臣秀吉が20万の大軍を率いて小田原城を囲み、江戸は浅野長政が攻め、戸田忠次に明け渡された。小田原落城に先立つ2か月のことであった。この戦いの勝利で徳川家康は北条氏の旧領関東6か国を与えられ、江戸城に入った。江戸城は戦火を免れたとはいえひどく粗末であったが、ゆっくりと城作りに専念できない。奥州、転じて京都、さらに文禄元年（一五九二）からの1年半、秀吉の朝鮮出兵をたすけて佐賀県の名護屋に帯陣している。

この間、江戸町作りは留守部隊が担当した。天正18年には日比谷入江から江戸城へ通ずる道三濠開設工事と神田上水道工事を実施。堀は建設資材や生活物資を江戸に運ぶ要路で、飲料水の乏しい江戸の町に上水道がかかせない。文禄元年には江戸城の修復工事も始まり翌2年3月本丸近くに西の丸が完成。揚げ土は日比谷入江周辺の整備に使われた。このころ周辺のアシ原も払われてようやく城下町らしいただずまいを見せ始めたという。

慶長8年、家康、江戸に幕府を開く

文禄元年と慶長2年（一五九七）、2度にわたった朝鮮派兵の失敗は豊臣政権に暗雲を漂わせた。いったんは秀吉の後継者に選んだ養子・秀次を殺し、実子・秀頼は幼い。慶長3年に秀吉が亡くなると前田利家をもり役に、家康が5大老筆頭、石田三成が5奉行筆頭に就任して秀頼を補佐することになったが、家康ら武断派と三成の対立の根は次第に深まっていた。しかし、利家の死んだ慶長4年には三成も失脚し、家康の権勢は豊臣家をしのぐようになる。秀吉なきあとの天下人はだれか。先見の明をもった諸大名のなかに人質を江戸に差し出すものが現れてくる。藤堂高虎は慶長元年、秀吉の存命中に。慶長4年には利家の死後大老職を継いだ前田利長が母の芳春院を差し出し、同じ年堀秀治、浅野長政、細川忠興らもこれにならった。こうして江戸には人質やご機嫌伺いに出てくる諸大名が滞在するための大名屋敷が登場する。

慶長4年、上杉景勝に謀叛の噂がひろがった。家康は釈明のための上洛をうながすが、景勝はこれを無視し、天下分け目といわれた関が原の合戦の口火をきることになる。翌5年6月、家康は福島正則、黒田長政、加藤嘉明らの武断派諸将を従えて上杉討伐の軍をおこした。一方大阪では上杉討伐の隙をねらった石田三成が挙兵し、三成の挙兵を知った家康は西軍討伐を決めて軍を返した。上杉討伐軍がそのまま東軍に早変わりしたのである。9月15日、両軍は関が原に対峙した。東軍7万4千、西軍8万3千。決戦は朝8時から火蓋が切られた。戦況は昼過ぎまで互角。しかし西軍には義理で出陣した大名が多く、小早川秀秋が東軍に寝返ったのを契機に総崩れになった。

関が原の合戦の勝利で家康は文字どおり天下人になり、江戸は覇都としての賑わいをみせることになる。合戦直後、西軍について減封された諸大名が次々と人質を差し出し、日比谷の海岸べりなどに賜邸された。毛利輝元は百12万石から36万石への大減封に甘んじたうえ6年、嫡子・秀就を証人（人質）として差出した。現在の日比谷公園地裁側の一画。鍋島直茂も関が原の合戦で西軍に味方したため存亡の危機に見舞われている。柳川の立花宗茂を攻め、長男の勝茂を江戸へ差し出し辛くも改易を免れた。一方東軍の雄で、愛娘五郎八姫を家康の6男忠輝に嫁がせて姻戚関係を結んだ伊達政宗も慶長6年9月日比谷公園の交差点際に賜邸された。

慶長6、7年にかけて外様大名が賜邸を受けた日比谷、桜田、霞が関の一帯は湿地で砂地が多く、型通りの埋め立てが進められていたとはいえ、満足な宅地造成も出来ていないデコボコ地であった。敷地を拝領した諸大名はお濠の揚げ土などを貰って屋敷作りを行った。人質を差し出し、徳川家に二心のないことを表す手段として競って豪華な江戸屋敷の建設をすすめる。江戸初期の日比谷には1国1城の主を意識した豪華絢爛たる桃山風建築がイラカを接したのであった。

日比谷公園に伊達政宗桜田屋敷お成り御殿が誕生

日比谷公園周辺の初代住民のなかで、一際めだつ江戸屋敷を構えたのが伊達政宗である。慶長6年（一六〇一）10月家康のいる伏見に上洛した政宗は江戸に邸地を与えられる旨を告げられた。ただちに工事を起こし、翌7年10月竣工。NHKの大河ドラマ『独眼龍政宗』の舞台ともなった桜田屋敷がこの日比谷公園邸である。有力大名は将軍家のお成りに備えた『お成り御殿』を作ったが、伊達邸のそれはとくに豪華だった。櫓門の表門のほか金箔の彫刻を施したお成り門があり、あまりの美しさにみとれて時間のたつのを忘れたことから日暮らし門の異名をとった。建物の周囲には長屋をめぐらせ、4隅に2層の櫓をあげた。御殿には大広間、小広間、書院、ご座間、数寄屋などがあり、千帖敷とも伝えられる大広間がとくに有名だったが、慶長19年の台風で倒れ、元和元年の毛利邸出火、7年大火、寛永12年の島津邸出火といずれももらい火で焼失した。

当初は長男の秀宗が証人として入居し、政宗が定住したのは9年閏10月。翌秋国元に戻って、以後1年ごとに江戸と仙台の間を往復した。のちの参勤交代を率先し、制度化への先鞭をつけた。慶長8年12月将軍家康がお成り。12年には2代将軍秀忠、寛永元年3月には3代将軍家光と、将軍家のお成りがくりかえされた。寛永13年（一六三六）5月政宗が病いで倒れたとき、将軍家光自らが日比谷公園の藩邸に見舞った。

日比谷伊達邸はこの政宗を初代に、忠宗、綱宗、綱村の4代が住んだ。政宗には妾腹の長男・秀宗と正妻の産んだ忠宗、宗勝ら10男3女があったが、秀宗は宇和島藩を立藩したので宗家は次男の忠宗が継いだ。綱宗、綱村のとき伊達騒動が起こった。夜ごと遊女遊びに興じていた綱宗が吉原三浦屋の高尾太夫を川遊びの船中で一刀のもとに切り捨てた。万治3年（一六六〇）5月のことであった。やがてこの事件は伊達騒動へと発展していく。江戸家老・伊達宗勝と国家老・伊達安芸両派の対立が日を追って深まっていた。幕府は綱宗の隠居逼塞を命じ、わずか2才の綱村が宗勝を後見人として宗家を継ぐことになる。寛文11年（一六七一）3月、事件はクライマックスを迎えた。伊達安芸が将軍家に訴え、安芸は宗勝の腹心原田甲斐に殺害されるが、宗勝の罪状が定まって伊達家は安泰となるのである。伊達騒動を乗り越えた綱村は後に親政をしいて名君となった。寛文元年2月、火災焼失後の跡地を徳川甲府藩へ下げ渡されることとなり、引っ越し料銀2千貫を受けて麻布白金台に移転となった。

毛利輝元、鍋島直茂、島津家久が桃山殿舎を連ねる

戦国武将として、有名をはせた毛利元就の孫・輝元が日比谷公園の地裁側の地に邸地を受けたのは慶長8年8月で、以後、元治元年（一八六四）第1次長州征伐に先立つ幕府の邸地没収までの2世紀半、この地に上屋敷を構えた。輝元は関が原の合戦では西軍の総大将となったが一戦も交えることなく関が原を退去し、戦後安泰を信じた輝元に旧領6か国没収の命が下り、慶長6年9月、嫡子・秀就を江戸へ差し出した。

日比谷公園賜邸は8年春。9月桜田台なり、秀就移徙。慶長12年には本格的な桃山風殿舎が完成した。瓦ふき入り母屋造りの大門は江戸城大手城門に比すとも。当初の邸地は東西55間、南北百33間の7千5百坪だが、貞享3年、享保16年などに添地拝領があり、最後は1万7千坪となった。

初代秀就の最大の難関は大減封にともなう家臣団の再編成と旧領の返租であった。毛利家ではこの年の年貢をすでに徴収していたので新領主から弁償を求められ、慶長13年、萩に新城を築き、万治3年には『当家制法条々』を定めて藩体制を確立した。正保2年（一六四五）11月、上屋敷改築工事のため秀就と正室、世子千代熊（のちの綱広）の一家は完成したばかりの麻布下屋敷に移転。当初は仮屋敷のつもりであったが、工事中に秀就が亡くなり、代々の藩主がここを居屋敷としたので日比谷公園の上屋敷は江戸詰家老と江戸留守居役らが表向き用務を担当した。

講談の鍋島騒動や化けねこ騒動で知られた佐賀35万7千石、鍋島藩上屋敷が日比谷公園正面入口周辺にあったのは慶長6年（一六〇一）春から明治2年（一八六九）4月まで。途中元禄10年（一六九七）5月から宝永3年（一七〇六）2月までの間、甲府徳川家上屋敷として上収された間を除く2百50余年間にわたっている。

鍋島家も関が原の合戦で西軍に味方して危機を迎えたが、慶長6年家康から本領安堵が許された。この年、嫡子勝茂を証人として江戸に差し出し日比谷公園に邸地を受けた。8年には家康の要請を受けて証人のひとりに龍造寺高房を加えたが、この高房は戦国の荒波に翻弄されたヒロインでもあった。鍋島家の主家の嫡子として誕生したものの、旧領は養父直茂の手中に握られ、高房はいつまでも所領を返さない直茂を恨んでこの日比谷公園邸で自殺した。歌舞伎や講談で知られる鍋島騒動は、この龍造寺家の怨念を宿した怪猫が鍋島家にたたりをなし、これを鍋島藩の勇士・小森半平太が退治するというストーリーにな

っている。

鍋島藩の日比谷藩邸は表門櫓門がとくににみごとだった。「2階櫓門上の左右にめうがの丸のご紋彫物、諸さかわ金物、形彫物総金」（向念覚書）と金造りだったことを伝えている。鍋島家は以下、光茂、綱茂、吉茂、宗茂……、と12代をかぞえた。

関が原の合戦で西軍に属し、戦うことなく関が原を去った島津家久の上屋敷もまた、大和生命、NTT本社ビル、第1勧銀の一画にあった。家久は関が原戦後いち早く家康に謝罪して本領を安堵された。『島津家文書』によれば「本邸は慶長15年（一六一〇）9月大将軍・徳川秀忠より、島津陸奥守家久にたまう所なり、家久はじめて琉球を征服したる後、この年琉球王・尚寧を率いて駿府にありし家康に謁し、また江戸により秀忠に謁せし時のことなり」と書いている。諸大名は会見を機に江戸屋敷を与えられ会見を重ねて主従関係が安定していった。

敷地面積6千5百坪。当初はこの屋敷を上屋敷と称していたが、藩主は間もなく芝の藩邸に常住するようになり、承応（一六五二～）のころから中屋敷と呼びかえた。明治2年（一八六九）まで。島津家は初期は琉球を配下に治めて貿易を独占。新田開発、金山の発掘などをすすめた。中期は消費経済の進行や本城と江戸上屋敷の焼失で出費がかさみ、一時総年収の2倍にあたる5百万両の負債を抱えて藩経済の建て直しに奔走した。

この日比谷薩摩藩邸を世間は装束屋敷といった。装束の名は島津藩の付備であった琉球国王が将軍と国王の代替わりごとに江戸へでて、将軍に挨拶した時ここで装束を改め登城したことによる。琉球国はいまの沖縄県。戦国時代は日本と中国に挟まれた南国の王朝国家として栄えたが、慶長14年島津家久の攻撃を受けて首里城が陥落、以後鹿児島藩の属国となった。

日比谷入江を埋め立てて有楽町が誕生

慶長8年（一六〇三）2月、徳川家康は征夷大将軍に任命された。家康にとって晴れて全国の諸大名を従えることになった訳だが、これを契機に江戸を中心とした新しい支配体制を展開する。町造りも急ピッチで始まった。この年、日比谷入江埋め立てを含む江戸港整備、翌9年から豪壮華麗な江戸城築城に着手。新将軍の威光を天下に示すためにも日本一の城造りが不可欠であった。

有楽町の曙ともいえる日比谷入江の埋め立ては江戸城構築のため全国から運ばれる建築資材の荷上げ用江戸港整備も兼ねた。この工事は天下普請で幕府から命令された諸大名が千石について10人づつの人夫を差し出したことから千石夫ともいわれた。結城秀康、本多忠勝、伊達政宗、加藤清正ら全国の有力大名60名が工事に携わり、神田山を切り崩した土砂が日比谷入江に運ばれた。この埋め立てで新橋から日本橋に到る広大な地域が造成された。尾張町、加賀町、出雲町などの町名はこの時担当した大名家の国名がつけられたものだという。

慶長12年の江戸図が現存する。日比谷埋め立て4年後、初代住民たちの氏名が読み取れる。皇居外苑から有楽町にかけて譜代大名邸が軒を並べる。有楽町は西に日比谷濠、東は高速道路になった外濠に挟まれ、外濠の一端は日比谷公園の心字池から日生ビル、宝塚劇場を経て高速道路に続いていた。有楽町は文字どおり江戸城内の一画に位置したのであった。慶長8年の日比谷入江埋め立てで作られた有楽町市街はその後、3百数十年をへた関東大震災までほとんど変わることがなかった。

有楽町のはじめは松平一門と徳川功臣

慶長初期の有楽町には松平一門と徳川幕府創設期の功臣邸が立ち並んだ。一族として家康を支えた松平信吉と家康の長女を娶った奥平家昌、家康生母大の生家＝水野忠重の次男・忠胤邸などであった。松平藤井家の藩祖は家康4祖の5男にはじまる。信一のとき家康に従って関東に入り、関が原の合戦の勝利で土浦3万5千石をうけたが、その子信吉が三井ビルに賜邸を受け、忠国、信之の3代が住んだ。有楽町での80年間は家康の縁に繋がって出世街道をすすみ、信之のとき古河で9万石となった。忠国は将軍秀忠に御前元服し、3代将軍家光の4男・綱吉のへその緒を切るおへらの役を勤めた。信之は幕閣としても活躍した。将軍綱吉の貞享年間で、堀田正俊横死後の1年間老中に就任した。

徳川幕府創設の功臣・奥平信昌の興した奥平家昌と松平奥平忠昌の兄弟2邸がパークビル、日比谷交差点の一画と新有楽町ビルの一画に賜邸された。信昌ははじめ今川方に属し、義元の死後家康方になり、一時は武田信玄にも組したが信玄の没後再び徳川方にくら変えした。長篠の戦いのとき武田勢の猛攻から長篠城を死守し、織田・徳川連合軍を勝利に導いた。戦後家康の長女で正妻築山殿との間に生まれた亀姫をめとり、関が原の合戦後加納10万石となった。

新有楽町ビルは宗家で忠昌、忠隆の2代。忠昌は家康の孫として松平姓が許されたが病弱で隠居中の父が補佐した。次の忠隆も加納夫人と呼ばれた亀姫が後見したが若死にし、血統の絶えた奥平家は取りつぶしとなった。奥平家昌は信昌と亀姫の長男。関が原の合戦では秀忠に従って木曽路を攻め、宇都宮で10万石を領有した。有楽町には忠昌、昌能、昌幸の4代が住んだ。忠昌が亡くなった時家臣の1人が殉死し、これが禁止令に触れたとして2万石を削られた。

水軍の九鬼、森蘭丸弟、わが道をゆく織田有楽斉

やきとり横丁で有名な有楽町ガード周辺に水軍で知られた九鬼守隆が住んだ。九鬼は熊野湾に面した豪族だが、のちに織田信長の水軍となり、豊臣秀吉につかえた。関が原の合戦で親子は東西両陣営に分かれたが、子の守隆が徳川方にあって5万6千石に加増された。守隆が亡くなった時お家騒動が起こった。守隆の長男が早世し、次男が病弱で嫡子を辞したため、一度は宗門にあった久隆が還俗して家督を継ぐことになる。ところが別家を立てていた隆秀が宗家の相続を主張したので九鬼家は両派に分かれた。この争いは幕府の裁許の結果、久隆が2万石を削られ三田3万石に転封、敗訴となった隆秀も一旦所領没収のうえ改めて綾部2万石に取り立てられた。幕府はお家騒動を口実に九鬼水軍を2分したのである。

織田信長の寵臣で信長とともに本能寺に散った森蘭丸の弟・忠政も有楽町駅と駅前商店街の一画にあった。忠政は蘭丸ら3人の兄を本能寺で亡くし、残る2人も討死にしたので6男から繰り上がった。関が原の合戦では秀忠に従い、戦後、津山18万石に栄進した。津山は流行かぶき踊り・出雲阿国のモデル地。名古屋山三と井戸宇右衛門の両家老が対立して藩内を2分したので忠政は一方の山三に井戸を討つよう命じ、井戸も山三もともに討たれた。

伊達政宗の長男で宇和島藩10万石を立藩した伊達秀宗邸はいまの第1生命、農林中金一画にあった。秀宗は4才の時豊臣秀吉の人質となり、聚楽第で元服したとき秀吉の1字を貰った。慶長5年の関が原の合戦で父の政宗が徳川方につくのがわかると宇喜多秀家のもとに送られ、徳川の天下が決まった7年徳川の人質になった。大阪夏の陣のとき父と木津今宮内口を攻め、宇和島10万石が与えられた。有楽町には秀宗と宗利の2代が住んだ。

情け容赦ない改易劇がつづく

関が原の合戦で徳川方について近世大名としてスタートを切った諸大名のすべてが3百年の江戸時代を順調に生きのびた訳ではなかった。徳川幕府が諸大名の統制を強め、長期政権の確立のために改易と転封を進めたからであった。ある者は『豊臣遺臣』一掃のため、ある者はお家騒動での統治能力を問われ、またある者は跡取りを決めなかった事を理由に、情け容赦のない改易劇がくりかえされた。有楽町の初代住民の中にもとりつぶしの悲運に泣いた大名たちがいた。

幕府基盤確立のためには、徳川の外戚を立藩の基礎にした水野家といえども容赦されることがなかった。日比谷公園の交差点そば、三信ビル前の一画に慶長9年から6年間住んだ水野忠胤も悲運に泣いた。水野家は家康生母・大の実家で、父忠重は大の弟だから家康のイトコになる。大の兄弟はやがて徳川譜代大名として重きをなし、忠重は神戸4万石となった。結城藩を興した勝成はこの忠胤の兄。兄弟は関が原の合戦で大垣城を攻め、勝成は備後、備中国内で3万石、忠胤にも三河国内で1万石が与えられて大番頭になった。大番頭は戦時は先鋒として敵に切り込み、平時は将軍を警護した。忠胤は実に些細なことから破綻を招いた。慶長14年9月浜松5万石の藩主・桜井忠頼を自宅に招待したとき、配下の大番士が酒のうえの口論から忠頼を殺害するという惨事を引き起こしたのである。忠胤に切腹の沙汰が下り、家康のイトコとして出世が約束された男のあまりにもあっけない最後となった。

有楽町駅の一部と交通会館、そごうの一画にあった葛上藩の桑山元晴、貞晴2代の上屋敷は世継ぎ断絶の悲運を味わっている。桑山は秀吉の長浜時代からの家臣だが、関が原の合戦で徳川方につき御所2万6千石となった。貞晴が26才の若さで亡くなった時、あわてて弟栄晴を養子に迎えようとしたが末期の養子を認められず、改易となった。末期養子とは本人が死ぬ間際に遺言しましたと幕府に相続を願い出ることを言った。実子もないのに跡継ぎを決めておかないのは家の相続についての責任を放棄しているからだとして、幕府はこれを廃絶処分とした。しかし実子がないからといって早めに養子を迎えると実子ができたときトラブルになりやすい。そうこう考えているうちに藩主がなくなって改易される大名が多かったのである。家康から家光にいたる江戸初期に57家を数え、全大名家の20パーセントにも及んだ。多くの悲劇を生んだ末期養子禁止が緩められたのは浪人対策という社会問題を提起した由井正雪の慶安事件以後のことであった。

江戸初期の有楽町にもう1人忘れられない人がいた。千利久7高弟のひとりで有楽町の語源ともなった織田有楽斎である。天下統一をはたした織田信長の弟で信長が明智光秀の謀叛にあって本能寺に散ったとき二条城にあって難を逃れ、豊臣時代はおとぎ衆として茶道に親しんだ。関が原の合戦では徳川方に加わり、戦後大和国内に3万石を受けた。有楽斎の有楽町邸は現在の泰明小学校と東芝ビルの一画で正式には銀座5丁目ということになる。「藩邸は慶長のころ織田有楽屋敷にくだされしが、のち明地となり、3、4丁ほどの芝生。春はつみ草、夏は池辺の晩冷を賞し、築山のかたち残り（略）秋色おもしろく人多く遊びし」と『柳本織田家文書』が伝えている。有楽斎は晩年3人の息子に1万石ずつを分知し、余生を茶人として送った。

② 幕藩体制の確立と大名たちのくらし

2重生活をおくった大名たちの生活

初代将軍家康、2代秀忠、3代家光とつづく徳川政権の確立期は全国の諸大名に容赦のない目がひかっていた。将軍家の将来に少しでも禍根あり、とされた大名家は即座に処分の対象とされたからであった。前政権の座から65万石の1大名に降格された豊臣秀頼は関が原の合戦14年後の慶長19年（一六一四）と元和2年（一六一六）2度におよぶ大阪の役で滅亡され、豊臣恩顧の福島正則、加藤忠広（清正嫡子）、小早川秀秋もねらい打ちされた。

譜代の腹心・大久保忠隣は私婚がとがめられ、天野康景はご料所の農民殺害のかどで改易された。災禍は肉親にもおよんだ。家康の6男・忠輝も兄将軍に悪影響ありとして配流処分とされたのである。この後も大名家の廃絶、削封は驚くほどひんぱんに行われた。慶長後期から元禄時代までの間をとってみても2百40家が処分の対象とされた。諸大名は徳川家の威光にそむけばどのような処分をうけるかわからぬという恐怖感を身をもって体験させられたのであった。

徳川幕府は3代家光の治世に至って幕藩体制が確立した。老中、若年寄、寺社奉行、勘定頭（奉行）などの職務基準と幕閣組織が明確化し、『武家諸法度』の改定で大名の生活が厳しく制約されたからだ。『慶安お触書32条』による農民統制の強化、キリシタンの弾圧と日本人の海外渡航を禁止した『鎖国令』交付などもこのころのことであった。

寛永12年（一六三五）の『武家諸法度』は諸大名の妻子を江戸に置いて1年ごとに江戸と国元で生活することを義務づけた。参勤制度のはじまりであった。関東地区の大名は2月と8月の半年交代で、以遠の大名は毎年4月に東西交互に在府することになった。交代の旅が大名行列で、初期は互いに権勢をきそったので人数も増え経済的な負担も大きく、8代将軍吉宗のころ行列の人数を制限したりした。世人の知る大名行列は先払いの侍が通行人に土下座を命じ「下に、下に」としずしずと通過する。だがそれはごく一部だけに限られ、道中はかなりの強行軍であった。朝4時ごろ宿を出立、約40キロを行進して夕方の6時ころ次の宿場についた。日比谷公園にあった伊達家の記録によれば大名行列は2千名を越えたといい、鍋島家では片道2千6百両の経費がかかり、藩財政を逼迫させた。

江戸に妻子を住ませる江戸屋敷には公認の上屋敷、中屋敷、下屋敷のほか私設の抱え屋敷などを持つ藩もあって4つ5つになることも珍しくなかった。大名屋敷は本来拝領屋敷であったが、相対替えの名目で交換や売買もできた。大名家同士が内談して拝領屋敷間の交換であるように体裁を整えて幕府に願い出ると、申請どおりの賜邸があった。江戸中後期の屋敷替えはこうした相対替えが主流を占めた。江戸城内の一画に位置した有楽町の大名屋敷は当然上屋敷で、藩主とその家族が住む広い御殿と庭園を中心に高級藩士の住む邸宅、一般藩士の長屋などがあり、藩主の在府中は江戸屋敷合計で5百人から3千人ほどの侍、家族、使用人がいた。延享3年（一七五〇）の毛利家文書によれば総勢2千百71人。藩邸に入りきれない藩士らは町の借家に分散した。御殿はさらに表、中奥、奥の3つに区分けされ、表は政治の場であり、応接の場になる。中奥は普段大名が起居する所で、奥は大名夫人と奥女中たちの生活の場。男子禁制で厳重な仕切りが設けられた。上屋敷を対外交渉の窓口にして、大名の居屋敷を中屋敷や下屋敷とした大名家もあった。外交は上屋敷に定住している江戸詰家老や江戸留守居役があたった。幕府や他藩との交渉など、藩の命運をかけた外交専任官の手腕がひかった

大名は現代人が考えるほど自由奔放、気ままに過ごせたわけではなかった。規則づくめの藩邸で与えられた生活に甘んじた。起床は午前7時ころ。係の小姓が月代や顔をあたり髪を整えた。ついで先祖、歴代の位牌、両親への挨拶を済ませてから朝食。食事は古くは朝夕2食。元禄のころから3食になった。5代将軍綱吉時代に権勢をふるった柳沢吉保のメニューには「朝は1汁3菜、夕御膳は1汁5菜、ご夜食は1汁3菜。朝夕ともに随分軽き品召し上がられ候」とあり、広島42万石の最後の藩主・浅野長勲は「朝はやきみそに豆腐ぐらい。昼と晩が1汁2菜」（浅野老侯のお話）と質素な食生活を証言している。午前9時ころ表で政務につく。初期は細かな点までチェックした大名が多かったが、時代が下がるにつれて権限委譲がすすみ、1時間くらいですべてが終わる。あとは中奥に戻って学問や読書、武術の稽古。退屈するとわずかの供をつれて江戸市中の名所見学に出かけたりした。大名の趣味は能、茶の湯、囲碁が多く、伊達騒動の発端ともなった舟遊びも享保ころからはやらなくなった。就寝は午後10時ころ。奥泊まりの時は予め所定の手続きを経て錠つきの連絡通路を渡った。

江戸城に登城して将軍に謁見する日もあった。毎月1日、15日、28日と5節句などである。将軍のお出ましにあわせて早起きし、登城ラッシュの丸の内を江戸城へとすすんだ。拝謁は一瞬。ほとんどの大名はみ籠ごしの将軍に団体で平伏した。

日比谷門、数寄屋橋門が出入りをきびしくチェック

江戸築城工事の一貫として日比谷門、数寄屋橋門、山下門の3門が有楽町に建設されたのも3代将軍家光治世の寛永時代のことである。日比谷門は現在の日比谷公園の交差点側・朝日生命館のまん前にあった。日比谷通り沿いにうっそうとした老木の連なる石垣と小さな散歩道があるが、この皇居側が日比谷見附門跡になる。明治36年に日比谷公園が建設されたとき櫓門石垣の一部と城濠の一部にあたる心字池が保存され、日比谷口の門柱に日比谷門礎石が使われた。

慶長8年の日比谷埋め立て時、やや南側に作った土橋を架けかえたもので、寛永4年（一六二七）広島城主の浅野長晟が石垣を築き、6年に伊達政宗が枡型の高麗門と渡櫓門を構築した。枡型門は外に向かって狭く、一度に大勢が入れないうえ、一旦中に入ると三方から射くめられるようになっていた。枡型に接して大番所が作られ、ここには2、3万石クラスの大名か大身旗本が1年交代で警備した。『諸門番所御法令書』によれば、鉄砲10丁、持筒20丁、持弓1組などを常備し、4人の番士が羽織袴に威儀を正して通行人を見張った。夜間は暮れ6つ（午後10時ころ）まで。明暦大火など何度か焼失したが都度再建、明治6年（一八七三）に渡櫓門などを撤去した。

数寄屋橋門は現在の有楽町マリオン旧朝日新聞社屋に枡型があり、大番所は同じマリオン旧日劇側。橋自体は朝日新聞から東芝ビルに向けて架けられた。日比谷門と同じ寛永6年（一六二九）、伊達政宗が造営。番士3名が守った。明治6年（一八七三）城門が撤去されて橋だけになった。ぐっと後世のものだが『明治の銀座職人話』に江戸時代の数寄屋橋を彷彿させる一文がある。「鍛冶橋の方からきた外堀は橋の手前で丸の内よりに曲がっていて橋は南北に付いていた。橋の所は両側から堤防が突き出ていて、その狭くなったところに橋がかかっていた。長さ3間、幅2間くらいの小さな木橋で、橋の下の川底には大きくて平らなみかげ石が3枚敷き詰めてあり、四六時中ゴーゴーと音を立てて実にきれいな水が流れていた」。

2元政治の犠牲になった大久保忠隣

江戸城と江戸城下造りがすすんだこの時期、有楽町の藩邸街にも時代の波がおしよせている。外様雄藩の没落と新勢力になる徳川姻戚や譜代功臣とそれに連なる譜代支藩などの賜邸であった。寛永12年（一六三八）から延宝5年（一六七七）まで有楽町ビルと新有楽町ビルの地にあった大久保家は忠世、忠隣とつづいた徳川創設期の功臣の直系である。家康の腹心として活躍した忠隣だが、その晩年は悲運に満ちたものとなる。大久保長安事件に連座し、さらに私的婚姻として捕らわれの身にも置いた。世人はライバル本多正信の策謀だと噂し、のちに正信の子正純が宇都宮城の釣り天井事件で断絶したとき因果はめぐったと胸をなでた。駿府と江戸、2元政治の犠牲者でもあった。

大久保家ではすでに嫡子が亡くなっていたので孫の忠職が加納3万石の家督を継いだ。有楽町邸はこの忠職とつぎの忠朝の2代。この間、明石7万石、唐津8万3千石、佐倉8万8千石、小田原11万3千石とトントン拍子に加増された。忠朝は延宝5年から元禄11年までの21年間老中を勤めた。4代将軍家綱、5代将軍綱吉の元禄時代。酒井忠清、堀田正俊の両大老を補佐し、柳沢吉保の側用人時代は実権のない老中首座（現在の総理大臣）に甘んじた。貞享4年綱吉の命を受けて『生類あわれみの令』を発令、犬や猫を殺したり虐待した者を容赦なく罰した。市民は悪政に泣いた。

徳川功臣のひとつ青山家の支藩・郡上青山藩も江戸時代はじめの有楽町に深くかかわった。寛永18年（一六四四）から元禄3年（一六九〇）までの50年間、有楽町電気ビルに上屋敷を構え、元禄6年から天明8年（一六八七）の90年間、有楽町三信ビル、三井ビル、日比谷シャンテの一画に住んだ。あわせて百40年。

青山家は家康の先代以来の重臣で、忠成のとき老中として秀忠の傅人になったが、その3男幸成が尼崎に立藩して5万石をえた。有楽町は幸成から、幸利、幸督、幸秀、幸道、幸完の6代。幸成がかぞえどし14才のとき関が原の合戦があり、父に従ったが幼少との理由で戻された。大阪冬の陣では晴れて初陣、夏の陣で燃え盛る大阪城に攻め入った。幸秀のとき飯山、宮津と転封。幸道が郡上に移ったが5万石は変わらなかった。幸道は松平定信の『寛政の改革』当時、幕閣になった。天明8年から寛政3年、病いで倒れるまでの3年間で、役宅も西の丸下に改まった。

水野一族は家康の母・大を生んだ外戚であり、7大名家を作ってうち6家が幕末におよんでいる。交通会館とそごう、有楽町駅に元和期（一六一五～）から寛永7年（一六三〇）までおかれた水野監物家（通称＝山形水野家）は於大の弟・忠守の嫡子・忠元が山川3万5千石で入封したのが始まり。有楽町にはその子・忠善が住む。忠善は戦国武将の名残を残した豪傑で本多の鬼内記（政勝）青山の鬼大膳（幸利）とならんで鬼監物と恐れられた。水野家は転封が多かった。4万5千石を領して田中に移封、次いで吉田に替わって5万石で岡崎に移された。岡崎は徳川ゆかりの地。わがことなれりと喜んだ。

次の井伊家は寛永7年（一六三〇）から寛保2年（一七四二）までと、延享2年（一七四五）から天明元年（一七八一）までの2回、あわせて百50年間有楽町に住んだ。井伊家といえば桜田門外の変で暗殺された彦根藩主の直弼が有名だが、こちらはその支藩。藩祖直勝から直好、信武、直朝、直矩……と10代続いた。直勝は井伊家の長男で、13才のとき

父の遺領を継ぎ彦根城を築いたが、大阪の陣は病床のため、弟直孝を出陣させたので、宗家を弟に譲って分家した。直朝のとき自らが発狂して存亡の危機にみまわれたが、そこは譜代最大の重臣一門である。幕府は宗家直矩の養子相続を承認して与板2万石への減封にとどめた。最後の直朗のとき若年寄にすすんだ。11代将軍家斉ブレーンで、『寛政の改革』と『化政文化』時代、幕閣生活30年におよんだ。

悪政のはての改易、減封処分も

元和期（一六一五～）から元禄11年（一六九八）までの80年間有楽町マリオンと有楽町駅前の朝日街1画に真岡、鳥山、飯田2万石、堀宗家の上屋敷があった。堀家は豊臣秀吉の重臣として上杉謙信後の春日山45万石を領有、関が原の合戦で徳川方について本領を安堵された。その子直俊のとき内紛、改易となったが、秀治の弟親良が蔵王3万石から宗家を継いだ。次の親昌は和歌に長じて都文化に憧れた。以下有楽町で親貞、親常、親賢と5代つづき、最後の親賢のとき牛之助事件が起こった。結婚お礼のための目通りで側室との仲をかんぐった親賢が手討ちにした。

帝国ホテルは伊達家中屋敷のあと2分され、銀座側は上山藩2万5千石の土岐頼行、頼殷邸、皇居側は横須賀5万石の本多利久邸になった。土岐氏は定政のとき家康に仕え定義のとき高槻2万石になったが、頼行の襲封時は幼少で減封された。本多家は家康の江戸入りに従って岡崎5万石を領有した。4代の利長が帝国ホテルの地に住んだが、横須賀37年間の厳しい農民政策がつとに知られている。情け容赦ない取立てで領民の不満が高まり、「天和2年2月、領内の政事よろしからず、所領を公収せられ出羽国内において1万石をたまい出仕をとどめられ」（寛政重修諸家譜）た。

『真田3代記』で父弟と訣別して徳川方についた信之の長男の興した沼田真田藩中屋敷が元和はじめ（一六一五～）から万治2年（一六五九）まで三信ビル前の日比谷通りにあった。徳川方に属して旧領を安堵された信之は元和2年上田に移り、父の遺領沼田2万7千石は長男信吉が領有することになる。有楽町邸はこの信吉から熊之助、信政、信澄と替わった。最後の信澄のとき松代の幸道と宗家の相続争いがあった。対抗意識に燃えた信澄が領内検地で宗家を上回る14万4千石をはじきだした。この石高はこれまでの3倍以上にあたり実体に即したものではない。厳しい増税に加え領内は飢饉が続いた。困った領民が直訴を計画し、信澄は主犯の茂左衛門をハリツケにした。しかし圧政では藩の経済危機を救えない。天和元年（一六八一）幕府から両国橋普請を命ぜられたがはたせず、領地没収、改易となった。自らの悪政の報いでもあった。

③ 華ひらく日比谷元禄

甲府家宣、6代将軍に迎えられる

江戸幕府設立後百年をへた元禄時代（一六八八～一七〇三）。戦さがなくなって久しく、武士にも町人にも農民にももはや平和は当然のことと考えられていた。江戸は急激に発展し、人口はすでに百万をかぞえたという。消費は拡大し貨幣経済がすすみ、商人が大きく力をもってくる。有楽町もまた、華麗にくりひろげられた元禄文化のなかに絢爛たる日比谷元禄を現出したのであった。

万治4年（一六六一）からの43年間、日比谷公園の交差点よりに甲府宰相・徳川綱重邸があった。3代将軍家光の3男で、その子綱豊（家宣）のとき6代将軍に迎えられた。三信ビルと三井ビルのところは酒井雅楽頭家上屋敷と替わった。4代将軍の後継争いに敗れた忠清の子・忠挙邸で、下馬将軍とよばれた丸の内の旧邸をライバル堀田正俊に取られた。有楽町はまた幕府政治の中心地でもあった。老中や若年寄、寺社奉行の役宅ともなったからである。彼らは江戸城内のほか自らの役宅で執務した。パークビル、電気ビル、第1生命館などの1画には土屋数正、戸田忠真、本多正永、稲葉正往らの幕閣が移り住んだ。

元禄時代といえば太平の夢を破った赤穂浪士の討ち入りに触れないわけにいかない。東京駅の山陽国際パルプビル、東京海上ビルの1画に幕府の勅使接待所＝伝奏屋敷があったが、元禄13年3月、この屋敷で数々の辱めを受けた浅野内匠頭が殿中松の廊下で吉良上野介に切りかかる。旧主の仇を討ち取った大石良雄の快挙に江戸市民が酔いしれたとき元禄の幕が降ろされた。

日比谷公園の交差点際に上屋敷を構えた甲府24万石の徳川綱重は正保元年（一六四四）の生まれだがこの年は家光が41才、この年の子には悪いことがあるという当時の迷信に従って里子に出された。この養子先が大阪落城のとき奇蹟的な脱出をはたした3代将軍家光の姉千姫であった。綱重は竹橋御門の千姫邸でそだち、寛文元年に甲府城を与えられた。日比谷公園邸は直前の火災で焼失したばかりの伊達邸上げ屋敷で幕府から作事料2万両を受け、この年9月に竣工した。兄の4代将軍家綱は病弱で実子がなく早くからその後継者が注目された。第1候補にあげられたのがこの綱重であったが、延宝6年（一六七八）34才の若さで亡くなった。この人がもし2年長生きしていたら5代将軍に座ったことだろう。

延宝2年兄将軍が没して弟の綱吉が将軍職を継いだ。

綱吉ははじめ『天和の治』といわれる文治政治を展開したが、老中筆頭・堀田正俊の死後は柳沢吉保の側近政治がはじまり、政治は弛緩する。太平ムードのなかで消費生活がすすみ、元禄文化を現出するが急成長にともなうインフレがすすみ『生類あわれみの令』などの悪政もめだっていた。甲府宰相とよばれた綱重の将軍への夢はその子綱豊にいたって開花する。綱豊は綱重の長男として誕生した。母は千姫のもとに奉公していた保良の方といい、もとは魚屋のむすめであった。綱豊が生まれたとき綱重に関白二条光平の娘との縁談がすすんでいた。正妻を迎える前に子供があってはまずいということで、家老の新見正信がわが子として育てる。後にこのことが騒動の発端になった。正妻が亡くなって正式の嫡子として迎えようとしたとき、新見の反対派が綱豊はすでになくなって自分の子を身代わりにしていると幕府に訴えたためであった。晴れて正当性が認められた綱豊は延宝6年父の後を継いで甲府城主となった。やがて元禄文化が絢爛と華開くが、おじにあたる5代将軍・綱吉は子宝に恵まれない。綱吉のなんとか後継者をの祈りは『生類あわれみの令』という世界に例をみない悪法につながったりもした。綱吉生母・桂昌院（玉の方）の健康を気づかったと伝えられるが、桂昌院が側室時代に家光と寵をきそいあったライバル夏の子に将軍の座を譲ることを嫌ったためだともいう。宝永元年に長女・鶴姫が死ぬとついにあきらめて綱豊を養子に決め、西の丸に迎えた。

宝永6年（一七〇九）1月、綱吉が死んだので、綱豊は家宣を名乗って6代将軍となった。家宣将軍の登場は綱吉の悪政に悩まされた市民に歓迎された。家宣はまず『生類あわれみの令』を廃止し、真部詮房と新井白石を登用していわゆる『正徳の治』を布いている。しかし家宣も正徳2年（一七一二）10月、51才で病死。その治世は3年にすぎなかった。7代将軍にはその子家継が襲封したがわずか4才。実際の政治は真部と新井がすすめるが幕閣内には反対勢力が強く、対立がつづいて幕政が停滞した。正徳6年（一七一六）4月こんどは家継が逝去、8才のはかない生涯であった。

玉の輿にのった月光院と大奥女の戦い

7代将軍・家継の生母・月光院（喜世）の玉の輿ものがたりはよく知られている。浅草唯念寺住職の娘だが甲府桜田邸の奥勤めがきっかけで家宣の手がつき、宝永元年家宣にしたがって大奥に入った。宝永6年（一七〇九）7月西の丸で将軍世継ぎを生み、将軍在世中は世子の生母として大奥に君臨した。家宣の死後、幼将軍をもり立てた真部は自宅にも帰らず24時間江戸城につめ、しばしば大奥の月光院をたずねたのでふたりの仲は大奥中にとりざたされた。病弱だった家継が死期を早めたのもふたりの責任だという説がある。風邪ぎみの幼将軍を花見に連れ出し花見酒に浮かれた。

同じ家宣側室の須免の方ものちにこの甲府邸後身桜田御殿の住民になる。綱吉の寵臣・柳沢吉保が大奥に送り込んだ絶世の美女で、真部の推した喜世とほぼ同時期に大五郎を生み、将軍継嗣をめぐって大奥を2分した。この争いは大五郎が3才で急逝したことで幕となった。正妻の熙子は近衛関白大政大臣の姫で延宝7年（一六七九）に結婚した。熙子は長女と長男を生むがいずれも早世した。家宣の将軍職襲封で江戸城西の丸に移り、将軍逝去後は落飾して天英院と号してひたすら冥福を祈った。幼将軍・家継を擁した月光院が大奥の権勢をほしいままとしたのにくらべあまりにも寂しい生涯でもあった。

正徳4年（一七一四）に絵島事件を起こした大奥年寄・絵島は日比谷公園甲府邸以来の月光院の腹心でもあった。この日はたまたま先代・家宣の命日にあたり、例年の習わしにそって芝増上寺へ墓参した。月光院の名代・絵島にしたがう奥女中57名は墓参もそこそこに芝居小屋の山村座に繰り込んだ。江戸城の奥深く閉じ込められた大奥女性たちにとってこうした外出にかこつけての息抜きはいわば公然の秘密で、絵島以下に罪の意識があろうはずがなかった。しかし翌日には事件が公けになった。大奥綱紀の乱れと出入り御用商人の利権問題が複雑にからんだこの事件で関係者に重い処罰がいいわたされた。絵島は月光院のとりなしでお預けの身にとどまったものの、歌舞伎小屋・山村座は断絶。生島新五郎らの主要役者は流刑で、死罪、追放など連座者は千5百人にもおよんだ。月光院の権勢に影がさしはじめたのはこの事件以後のことであった。

綱吉に嫌われた下馬将軍の最後

「天下のことみな雅楽頭の指南にあずからぬものなし」。江戸城大手門前の下馬札先にあった酒井雅楽頭忠清を人々は下馬将軍といった。累代にわたる譜代最大の重臣家をバックボーンに4代将軍家綱の信任を独占してその専横ぶりは人々を恐れさせた。しかし大老酒井忠清にも最後のときがきた。4代将軍家綱の後継問題で鎌倉幕府の先例にならい、京都の宮家から有栖川宮幸仁親王を迎えてこれを将軍にたてたいと提案したからである。幕閣の最大権力者の発言に一時は大勢も決したかにみえたが、堀田正俊と水戸光圀の反対工作が実を結んで逆転。綱吉が新将軍として迎えられると忠清は大老職罷免され、下馬先屋敷も没収された。

有楽町三信ビル、三井ビルの一画に移された忠挙は忠清の嫡子。延宝9年（一六八一）から元禄6年（一六九三）までの12年間上屋敷を構えた。父の失脚で前橋13万石を継承したとき「父在職中のはからいにいきすぎがあった」とされて6か月間の逼塞命令をうけた。忠挙は以後中央政務にかかわるとはなく、藩体制の強化をすすめた。家臣には学問と武芸

を奨励する一方、綱紀の粛清、倹約を徹底して、違反者を厳しく処分した。諸制度の整備、検地、産業の振興など、その充実した藩政は前橋酒井家随一とされている。

パークビル居住者が3代つづいて老中に昇進

日比谷パークビルと大正生命ビル、日比谷交差点周辺の元禄時代は3家が続いて老中昇進をはたしている。延宝7年（一六七九）からの土屋政直、元禄元年（一六八八）からの稲葉正往、元禄13年の戸田忠真である。土屋家ははじめ武田家に仕え忠直のとき家康に認められて関が原の合戦後久留里2万石を与えられた。その次男が藩祖で政直は2代。田中6万5千石から譜代門閥コースを歩む。大阪城代をかわぎりに京都所司代、侍従をへて、貞享4年から31年間老中をつとめた。その治政は5代将軍綱吉の元禄時代を中心に家真、家継、吉宗の4代。正徳6年4月家継が亡くなり、後継将軍が問題になったとき、御台所の天英院と結んで吉宗を担ぎ出した。

稲葉家は曾祖父正成の妻が3代将軍家光の乳母春日局で、縁につながって出世した。有楽町時代は正往。小田原8万石で寺社奉行、京都所司代のエリートコースをへて元禄14年からの6年間老中となった。元禄末期は赤穂浪士の討ち入りに歓喜したものの飢饉や大火が多かった。人々は元禄の繁栄の影にお犬さまに泣き、富士の大噴火に揺れた。戸田忠真は家康の関東入国に従った尊次の3代後胤で高田6万7千石。正徳4年から15年間老中となった。

電気ビルの地に元禄3年（一六九〇）から6年間すごした本多正永も老中にすすんだ。老中正信の弟正重の子孫で、真田信澄の拡大検地事件ではりつけ茂左衛門の悲劇があった沼田藩で、お助け検地など威信回復につとめた。寺社奉行、若年寄をへて宝永元年と宝永6年の2度にわたって老中職に。第1生命館と農林中金ビルの一画に天和元年から16年間上屋敷を構えた篠山藩5万石、松平信庸も京都所司代をへて正徳4年から2年間老中にのぼった。

永住記録百70年の蜂須賀家と2百年の松平深溝家

江戸時代有楽町に上屋敷を構えた大名家のすべてが幕閣として中央の政治にかかわったわけではなかった。外様雄藩のひとつ、阿波25万石蜂須賀家は元禄11年（一六九八）から慶応4年（一八六八）までの百70年間、有楽町駅と交通会館、そごうデパート、都庁の一部に上屋敷を、文政6年（一八二三）から明治2年（一八六九）までの間日比谷門前の小邸を下屋敷として賜邸された。

蜂須賀家は正勝のとき豊臣秀吉に仕え、関が原の合戦で東軍に属して25万石を得た。有楽町に住んだのはその6代綱矩から宗員、宗英、宗鎮、重喜……とつづく9代。阿波は藍や塩などの産業振興を基盤に経済発展を遂げたが、一方で米作り主体の藩経済を圧迫していた。藩は相次ぐ改革で藩財政の再建をめざし、都度重臣や農民が抵抗して挫折した。一揆や騒動、阿波おどりの盛り上がりなど反封建運動も爆発し、人形浄瑠璃の阿波の十郎兵衛がはりつけになったのもこのころのことであった。久保田新田藩からの養子重喜のとき藩政改革を断行するが猛反対にあい、幕府も国政よろしからず隠居を命じた。実権を握った重臣たちにとって優秀な藩主は無用の長物だったのかも知れない。

アミューズメントセンター裏の有楽町ガード周辺に住んだ松平深溝家は元禄4年（一六九一）から明治10年（一八七七）まで、実に2百年間有楽町に邸地を持った。深溝家は家康第3祖の7男が藩祖になる。3代連続で討ち死にし、家忠も関が原の合戦のとき伏見城の留守を守って戦死した。有楽町邸は1代とんだ忠房から、忠雄、忠倶、忠刻以下の13代。

最初の忠房が福地山から島原6万6千石に栄転したとき、「島原は難治の地ゆえ、人を選んで移すのでよく忠勤するよう」訓令された。しかしつづく4代は養子で、派閥による内紛、天災、悪疫、農民の逃散などもつづいた。忠刻が参勤交代の途中で急死したとき、12才の忠祇に宇都宮転封の命がくだり、25年後に島原に戻った。

日比谷門前の沼田真田家中屋敷跡地は江戸中期にかけて小大名邸や役付きの大身旗本邸に変わっていく。万治元年（一六五八）からの22年間が岡田善政。勘定頭にすすんで有楽町邸をうけ7千5百石に加増され、善次のとき分知して6千石になった。延宝8年（一六八〇）からは家光に近侍した堀田正盛の4男正英。若年寄にすすんで1万3千石をえたが相続のとき8千石に減知された。つづく、深見藩1万石の坂本信治も寺社奉行となるが、勤務成績が不良のため2千2百石に降格、植村忠朝も1万1千石のとき、植村千吉殺害事件に連座して改易された。

④ 南町奉行所と桜田御殿の女たち

大名家の台所は財政赤字で火の車

元禄文化は泰平ムードのなかで消費生活を向上させ、新井白石、室鳩巣、荻生徂来らの学者を輩出した。文学や絵画、芸能の世界も井原西鶴や近松門左衛門、松尾芭蕉らを産んで絢爛たる元禄文化を現出するが、一方インフレや道義の頽廃もめだち、米作経済を基盤とする封建制度そのものを揺さぶる。日比谷公園にあった徳川綱豊（家宣）が5代将軍綱吉の養子としてその子家継とともに将軍宗家を継承したが、その家継もわずか8才で病死して8代将軍には紀州徳川家の吉宗を迎えることになった。

吉宗は徳川光貞が下ばたらきの女に産ませた庶子であったが、紀州家の嫡子が亡くなって御3家を継ぎ、やがて将軍となった。これまでとはまったく違った環境に育った将軍は次々と新方針を打ち出した。節約と尚武の風を奨励して軟弱な幕府政治を正す、いわゆる『享保の改革』を推進したのである。吉宗の30年間にわたる改革をすすめたのが老中筆頭の松平乗邑であり、南町奉行の大岡忠相であった。江戸中期の有楽町は引き続く幕府政治の中心地として、財政危機のすすむ中堅譜代大名たちの収奪強化の本拠地として、将軍側室たちの余生の場として多彩な『有楽町ものがたり』を演出していった。

吉宗ブレーンの松平乗邑も老中就任前の元禄4年（一六九一）から享保8年（一七二三）までの32年間有楽町ビル、新有楽町ビルの一画に住んだ。乗邑の有楽町時代は鳥羽、亀山、淀、佐倉6万石と転封した。大阪城代をへた享保8年に老中職を拝命。上米制、足高の制、5公5民制の採用、貨幣の大量発行、株仲間の育成などをすすめた。

駅前商店街の南町奉行所で大岡越前と遠山の金さんが活躍

大岡越前守らが活躍した南町奉行所が有楽町駅の1部とマリオン裏の商店街に定まったのは宝永4年（一七〇七）のことである。当時、江戸市中には南、中、北の3奉行所があって北町奉行所とよばれたが、享保4年（一七一九）に2奉行所に縮小されたとき位置に合わせて南町と変更された。

初代が松野助義で2代目に大岡忠相が入った。大岡家は累代の直参旗本で養父忠真のとき千7百石にすすんだ。忠相は同族の大岡美濃守家からの養子。山田奉行、普請奉行をへて江戸に戻ると、享保2年（一七一七）には町奉行に抜擢されて越前守に昇進した。在任中の20年間、吉宗ブレーンとして『享保の改革』をすすめた。3方1両損、地蔵縛り、天一坊事件などの名裁判が有名だが、これらのほとんどがフィクションであったり、ほかの奉行の裁判記録や中国の故事を脚色したものだという。町火消し制度の整備、小石川療養所の建設、物価安定策の推進などその業績が大きく、公正な裁判ぶりとともに江戸市民の人気を集めた。

町奉行は老中支配で旗本の中からとくにすぐれた人材が登用された。これは重要職責に加え、配下の与力や同心が世襲制で、よほどの俊才でないと勤まらないという背景もあった。その職務は江戸市中の行政、司法、立法、警察、消防などを司った。南北2つの奉行所が1か月ごとに交代で執務し、月番にあたった方は大門を開いて新しい訴えを受け付けた。

南町奉行所を伝える『大岡越前守お役屋敷絵図』によると、敷地面積が2千6百17坪。建坪＝千8百9坪でうち役所向き3百75坪となっている。銀座側に面して正門を構え、入ると庭で玄関まで玉砂利が敷き詰められところどころに芝草が植えられていた。表が役所で裏が住居、周囲に長屋を巡らせた。時代劇で有名なお白州は役所向きの奥まった1画にあり、テレビ映画では遠山の金さんが片肌をひろげて遠山桜を散らした。町奉行のもとで実務に従事したのが町方役人で、定員が与力25騎と同心百名。この同心に岡っ引とか手先とかいわれた目明かしがついて幕末期にはその数、千名にも達した。

収奪強化と領民弾圧に一揆がつづく

帝国ホテルに明和9年（一七七二）から天明元年（一七八一）まで住んだ堀田家は、先立つ寛保2年（一七四二）から延享2年（一七四五）までと天明元年（一七八一）から文政元年（一八一八）まで交通会館、有楽町駅、そごうの一画にも上屋敷を構えており、有楽町には延べで50年かかわっている。堀田家は3代将軍家光の乳母春日局の養子正愛が藩祖で、正俊は3代将軍家光の側近正盛の3男である。4代将軍家綱の小姓、近習をへて老中となるが、家綱が亡くなったとき5代将軍に綱吉を擁立して大老にすすんだ。正俊は農業政策と大名統制の強化をめざすが志なかばで江戸城内で刺殺された。堀田家はこの変事のあと古河から山形へ移封となり、4代後の正亮のとき佐倉11万石に戻った。

有楽町にはこの正亮から正順、正時、正愛4代が住んだ。正亮は寺社奉行、大阪城代とエリートコースを歩んで延享2年から16年間老中をつとめた。9代将軍家重の就任直後で前将軍の信任厚かった老中松平乗邑が突如免職となり、大岡忠光らによる側用人政治がはじまろうとしていた。家重は病弱で言語障害がつよく、ただ1人聞きわけることができた

大岡の権勢が高まり、10代将軍家治のとき田沼意次が登場してまいない政治がその極に達した。正順のころ藩財政は次第に欠乏し、天明時代の飢饉で一段と厳しさを増した。領内の各地で一揆が続発して、その一揆が佐倉城下にまで迫った。

有楽町の江戸中期は引き続く幕府政治の中心地であったが、どの藩の台所も火の車であった。帝国ホテルの阿部宗家は相次ぐ転封にあって藩財政が逼迫、これを補うために収奪強化と厳しい領民弾圧をくりかえした。前出した堀田佐倉藩はもちろん、このあと登場する牧野笠間藩、大河内高崎藩、本多岡崎藩など有楽町に上屋敷を構えた中堅譜代大名家も同様であった。多額の借財を抱えて藩政の改革に迫られていたのである。

元禄2年（一六八九）から明和元年（一七六二）までの78年間帝国ホテルの地に藩邸をもった阿部家は3家ある阿部藩の宗家で、正次のとき家光に認められて岩槻5万石をえ、その子重次が9万9千石に加増された。帝国ホテル邸は4代後胤の正邦と正福、正右の3代が住んだ。この間、封地は宮津、宇都宮、福山と転じ、相次ぐ国替えに藩財政が窮迫した。帝国ホテル時代の阿部家は農民一揆の対応に追われた。宝暦3年の全藩一揆では強訴、打ち壊しと暴動化した。藩主は農民の要求を一旦みとめたが、のちに首謀者を厳罰に処したので領内に消えがたい不信感が残った。続く明和、天明の大飢饉でも農民一揆が激発した。正右は中央幕閣として活躍した。寺社奉行、京都所司代をへて、明和2年から21年間老中をつとめる。田沼政権の一員として10代将軍家治につかえたが、田沼の失脚で老中を辞した。

阿部家のあと明和元年（一七六四）から9年までの8年間、帝国ホテルに住んだ井上河内守家は先立つ享保8年（一七二三）から宝暦10年（一七六〇）まで有楽町ビル、新有楽町ビルにも在住している。井上家は徳川創設期の重臣・正就の子孫で正之、正経、正定の3代が有楽町に在住した。多くの幕閣を輩出した名門で、正経も寺社奉行、大阪城代、京都所司代をへて、宝暦10年からの3年間は老中首座にすすんだ。

畳千枚、戸9百本、障子5百本。詳しい牧野家の引継ぎ記録が残っている

幕末維新の戦いのとき、長岡6万石城下を焦土と化した牧野宗家藩祖・康成の3男のそのまた4男からはじまる笠間牧野藩は有楽町と深くかかわった。元禄10年（一六九七）から天明4年（一七八四）までの86年間が現在の第1生命、丸の内署の一画に住み、寛政2年（一七九〇）から明治元年（一八六八）までの78年間、三信ビル、三井ビル、日比谷シャンテの地に上屋敷を構えた。

藩祖の成貞は5代将軍・綱吉の信任を得て側用人となり、2千石から7万3千石の大名に列した。綱吉はしばしば牧野邸をおとずれたためか、世人は妻と娘が接待のため提供されたとも噂した。有楽町には孫の成央から貞通、貞長、貞喜、貞幹、貞一以下の9代が起居した。牧野藩は関宿、吉田、延岡と変わり、最後の笠間では百年以上にわたって藩政を布いた。教育と武芸熱心な城下として知られたが、きびしい年貢取立てに大規模な減免一揆が起こって藩政をおびやかした。貞長は京都所司代をへて天明4年からの6年間田沼時代とその後の混迷期に老中をつとめた。最後の貞直は元治元年から慶応4年まで最後の大阪城代になった。幕末の政局混乱期の大阪は14代将軍の逝去、15代将軍の鳥羽伏見の戦い敗戦などあわただしく暮れた。牧野藩の相対替え賜邸記録によれば、南北70間、東西60～80間の5千76坪でうち建坪が千5百43坪。明細目録には門扉7枚、戸9百本、襖2百34本、畳千93枚、障子5百97本とあり、当時の江戸藩邸の規模がうかがわれる。

文政6年（一八二三）から11年までの間、第1生命ビル、丸の内署の一画に牧野宗家が賜邸されたこともあった。長岡藩9代藩主・忠精の2度にわたる老中勤務の間隙期で、松平定信のもと寺社奉行にすすみ、大阪城代、京都所司代をへて老中となった。

松平大河内家も江戸中期、後期にかけての有楽町にかかわっている。元禄4年（一六九一）から6年までの新有楽町ビルが最初の賜邸で、天明4年（一七八三）から文政6年（一八二三）までが第1生命館、農林中金の一画、文政8年（一八二五）から慶応4年（一八六八）春まで再び新有楽町ビルに戻った。あわせて85年間になる。大河内家は18松平の1つ吉田大河内家の支藩で信輿が若年寄にすすんで土浦2万2千石を領有したのがはじまり。有楽町には輝貞と2代とんだ輝和、輝延、輝承、輝徳、輝充、輝聡、輝声が住んだ。輝貞が元禄時代側用人に登用されたとき、5代将軍綱吉とその母・桂昌院の絶大な信頼を得たので、綱吉がその死にさいして「右京も死んだら余のもとにまいれ」と遺言した。輝延は文政6年からの1年間老中にすすんだ。高崎藩は中仙道の主要宿場として発達、産業も豊かであったが、農民の打ち壊しや天明の浅間山噴火、大飢饉、侠客博徒の横行など領内は不穏な状況がつづいた。

日比谷交差点から日比谷パークビル、大正生命ビル周辺の江戸中後期に岡崎藩5万石の本多家上屋敷があった。延享4年（一七四七）から万延元年（一八六〇）までの1世紀余りで、この間藩主も忠良、忠敞、忠盈、忠粛、忠典……と8代をかぞえた。この本多家は徳川4天王の1人忠勝の末孫で、封地が岡崎に定まるまで11か国の領国を転々としたので財政難がつづき、移封のたびに幕府からの借金をくりかえした。加えて忠良の養父・忠孝が12才で亡くなったとき嫡子がなく、15万石から5万石へ大減封された。最後の岡崎も歴代領主の過酷な取立てで欠落人が多く農村類廃がすすんでいた。安政8年、天明6年の大飢饉が藩財政を圧迫して寛政期に藩政改革に取り組むがほとんど効果をみないまま終息し、このころ藩主・忠顕が女色に狂って財貨を浪費した。みかねた用人が死を決して諫め、忠

顕が隠居した。本多家の有楽町時代は病死短命がつづいて養子をくりかえしたのでながらく藩主を幕閣に送り込めなかったが、最後の忠民が老中にすすんだ。万延元年、元治元年の2回で最初が井伊直弼の暗殺直後、2度めが安藤信正時代で公武合体期であった。

ビル脇にひっそりたたずむ旧大名家の守り本尊

電気ビルの享保2年（一七一七）から明治4年（一八七一）までの百50年間は高槻3万6千石の永井飛騨守邸があった。江戸時代の大名に永井姓は3家あるがいずれも一族。宗家は摂羅1万石でほかに加納藩がある。宗家藩祖直勝の次男が府内2万石を分知されたのが始まりだが、高槻に転封以後1度も国替えのないまま明治維新を迎えた。有楽町には直期から直行、直珍、直進、直与、直輝、直矢、直諒の8代が住んだ。藩財政は直期、直行ころから悪化、租率の固定化や御用金などでは追いつかず、大阪の御用商人からの新規借入も困難を究めるようになった。文化年間に入箇騒動がおこった。村々では代表を江戸の藩主に直訴させた。いまでも電気ビルのガードよりにひっそりとお稲荷さんが立っているが、この神社は永井家の守り本尊。「当社は永井飛騨守が天下泰平と子孫繁栄を祈念して安政6年に創立したものであります。社のかたわらにある手洗鉢は万延元年8月に奉納との銘があり、当時から非常に信仰が厚かったことが偲ばれます」。大理石に嵌め込まれた碑文が社の由来を語っている。

元禄時代の電気ビルで紹介した本多正永の3代子孫正珍から正供、正温、正意とつづく4代が新有楽町ビルの一画に復帰するのは宝暦10年（一七六〇）から文政8年（一八二七）までの67年間で封地も沼田から田中4万石に国替えされていた。正珍は寺社奉行をへた延享3年から老中に就任した。『享保の改革』と田沼時代のはざまだが、文政8年に将軍家重の不興を買って「老中在職中の勤務ぶりが不良」とされた。本多家は天保元年に起こったおかげ参りを契機に藩政改革に取り組み、明治元年に白浜に移されて廃藩を迎えた。三信ビル、シャンテ周辺の地に天明8年（一七八八）から寛政2年（一七九〇）まで住んだ小幡藩2万石奥平家は宗家の養子が藩祖になる。実子ができたとき2万石を分知した。忠福はその4代後胤。田沼政権末期の天明5年から3年間若年寄をつとめた。

日比谷門前の小邸に延享3年（一七四六）から文政6年（一八二三）までの78年間、幕府医官の今大路邸があった。わが国医学中興の開山といわれる道三正盛、正紹父子の子孫で、有楽町には元勲、寿国、正福、親興、正雁の5代が住んだ。幕府医官の最高職・典薬頭で従5位下千2百石。登城の乗輿、白むく着用が許された。

先代将軍の側室が比久尼屋敷で念仏三昧の余生をおくる

日比谷公園の交差点寄りにあった甲府藩主徳川綱豊が5代将軍綱吉の養子に迎えられたことを元禄時代の項で紹介したが、その旧邸の一部は桜田御殿、桜田御用屋敷と呼ばれて幕末までであった。御用屋敷は将軍没後残された側室たちの比久尼屋敷で、将軍が亡くなると側室たちはこの屋敷に集められた。彼女らは髪をおろして将軍の冥福を祈る念仏三昧の余生を義務づけられた。

中に3千8百坪の御殿を作った徳川清水家祖生母・安祥院の姿もあった。安祥院は現役時代の名を逸の方といった。浪人の娘に産まれたが、旗本の養女として大奥に入り、10代将軍家治の生母幸と家重の寵を競った。逸は次男清水重好を生んだ。家重の子はこの2人だけ。重好も清水門内に屋敷を与えられ、10万石で御3卿の1つとなった。家重没後、落髪してしばらく西の丸などにとどまったが、明和9年（一七七二）世代交代のため桜田御殿に移り、寛政元年までの余生を送った。

11代将軍家斉には愛妾、側室が40人いたが、うち16人が子持ち。しかし粗製乱造のせいか53人の子女の大半が幼少時に亡くなったので、将軍没後桜田屋敷は満員になった。真性院、志賀の方、利尾の方、屋知の方、百の方らが住まい、ここで生涯を終えた。彼女たちは生涯親元へ帰ることが許されず、病気のときも屋敷内の療養所で治療した。12代将軍家慶の側室琴の方はたまたま出入りの大工に情を寄せたのがバレ、兄に引き取られて手打ちとなった。不都合があったとき実家が涙を振るって処置をとった。変わり種高丘も一時この桜田屋敷に在住したとする説もある。11代将軍・家斉時代、田沼派大奥老女として絶大な権勢を振るい、失脚後の政治空白期に大奥を結集して松平定信の老中就任に反対した。定信の政治改革はやがて大奥にまでおよぶので高丘の老後も決して安閑としたものでなかったに違いない。

御用屋敷には庭番屋敷もおかれた。庭番は8代将軍吉宗が享保元年（一七一六）紀伊藩の下級武士を呼び寄せて創設した情報機関で、江戸城内の宿直、内庭の巡察に加え、幕府隠密として諸大名の秘密を探ったりもした。いったん任務を受けると農民や商人などに変身して目的地に侵入したが、身分がわかって非業の最期を遂げることもあった。このように危険をともなうことから機転がきいて武術のすぐれた庭番が多くでた。彼らははじめ桜田御用屋敷内の長屋に住まい、やがて屋敷を与えられたり、虎の門、雉子橋御用屋敷などに分散した。庭番は20家の世襲制で当初はトップの両番所格でも2百俵だったがのちに2百石になった。庭番から世に出た人も多い。明楽茂村や梶野良材は勘定奉行に、村垣範正は日本初の遣米副使となった。

⑤ 日比谷雄藩と混迷する幕末諸侯

内憂外患にゆらぐ幕府政治

天明7年（一七八七）11代将軍家斉の補佐役として老中首座に就任した松平定信は、田沼1族を追放して『寛政の改革』を断行するが6年で挫折し、『大御所時代』とうたわれる文化、文政時代へとつづいた。滝沢馬琴、喜多川歌麿、市川団十郎、平賀源内らに代表される文化文政の華が咲き誇った繁栄の一方で、地方の困窮はその極に達していた。12代将軍家慶のもと幕閣の中心に座した水野忠邦は大御所の逝去を待って、江戸幕府最後の財政改革『天保の改革』にいどんだ。この改革は幕府財政立て直しのため奢侈を取締り低物価政策を貫こうというものであったが、安逸になれた役人や一般市民に歓迎されるはずがなかった。上知令を契機に忠邦が失脚し、土井利位が変わって老中首座にすすんだ。江戸後期の有楽町は引き続く幕閣の町であり、南町奉行所の町であり、財政難にあえぐ中堅譜代諸侯、そしてその勢力を着々と養いつつあった外様雄藩の江戸屋敷の地でもあった。

利位を生んだ土井家は徳川幕府創設期の重臣土井利勝の直系で11代の後胤にあたる。大阪城代時代に大塩平八郎の乱を鎮圧して幕府の評価を受けた。利位はつづいて中央幕閣への道を歩む。京都所司代にすすんで天保10年から弘化元年まで老中になった。水野忠邦の『天保の改革』実務推進者としても有名。『大御所時代』専横をきわめた若年寄林忠英、お側衆水野忠篤らを処分し、大奥の粛清をはかった。やがて上知令がおこって内外に反対者がでると部下の鳥居燿蔵らと忠邦を見限った。利位は変わって現在でいう総理大臣の地位を獲得するが外交問題に対応できず失脚。有楽町の第1生命館上屋敷には引退後の弘化元年（一八四四）から慶応4年（一八六四）まで、利亨、利則、利与と4代が住んだ。

土井利位の腹臣鳥居燿蔵は天保12年から弘化元年までの南町奉行で、水野3羽がらすと呼ばれた。『天保の改革』を推進、渡辺崋山、高野長英ら『蛮社の会員』を告発した。鳥居の手段は現在でいうおとり捜査。点数かせぎのため通常の取締りでは間に合わなくなった部下たちは庶民を罠にかけて犯罪者に仕立てあげた。こんな政治が歓迎されるはずがない。水野の掲げた理念もガタガタと音をたてるように崩れていった。鳥居のライバル遠山景元は5百石取りの旗本の長男に生まれたが家族構成が複雑で、本人も相続ないものとあきらめていた。講談では部屋住み時代悪所に出入りして背負った入れ墨をトレードマークに悪人ばらをやっつけることになっている。水野忠邦の『天保の改革』では北町奉行として抜擢されたが、鳥居と意見があわず大目付に転じた。遠山が南町奉行に復帰するのは水野と鳥居の失脚後のことであった。改革が失敗した水野が文字通り石をもて追われたとき、市民の期待を背負って再登場した。

そごうデパートと有楽町駅、交通会館の地は文政元年（一八一八）から10年まで松平大河内の吉田7万石上屋敷になった。3代将軍時代、幕藩体制の確立をはかった信綱の7代子孫信順で、天保8年に3か月だけ老中にすすんだ。第1生命、農林中金の天保8年（一八三七）から弘化元年（一八四四）までは篠山5万石藩主青山忠良邸で、弘化元年から嘉永元年までの幕末混乱期に老中を勤めた。

文政11年（一八二八）から天保8年（一八三七）まで在住した酒井忠義は井伊直弼の腹心として京都所司代を勤め、条約直許、将軍継嗣問題などに取り組んだ。『安政の改革』では京都での志士逮捕をすすめ、自藩を脱藩して尊皇攘夷運動の指導者した梅田雲浜を処分した。万延元年（一八六〇）井伊直弼が桜田門外で暗殺されると、幕府の権威は一気に失墜していく。これまで政治からまったく無視され続けた朝廷と結ぶほか政局の打開は道はなく、総理大臣格老中・安藤信正が公武合体のため、孝明天皇皇妹・和宮の14代将軍家茂への降嫁を願い出るよう忠義に指示した。交渉が実り、この政略結婚が発表されたとき尊攘志士たちは憤慨した。安藤を坂下門外に襲って負傷させ辞任に追い込んだ。直弼腹心や和宮降嫁関係者への天誅がくりかえされた。忠義も文久2年、所司代を免ぜられて隠居、1万石の減封が命ぜられた。

ふんばる最後の幕閣も時代の波にかてない

帝国ホテルの江戸後期に棚倉阿部10万石の上屋敷があった。天明元年（一七八一）から元治元年（一八六四）までと同年11月から慶応4年（一八六八）までの2回にわたって賜邸されている。阿部家は徳川家光6人衆のひとり阿部忠秋が藩祖で5代正敏から正識、正由、正権、正篤……とつづく11代が住居をかまえた。幕末期の正外は元治元年から慶応元年まで老中になった。井伊直弼が桜田門外に倒れた後の幕府は公武合体への道を歩むが、一方では尊攘派志士の画策や薩長連合など反幕府体制が盛り上がりをみせていた。外交面でのもたつきも混乱をさらに深める。英、米、仏、蘭の4か国は条約締結と兵庫開港、税率の軽減をせまり、幕府内の意見も分かれた。兵庫開港を主張した正外は朝廷の猛反対にあって勅命をもって老中職を降ろされ、慶応元年ほかの2項が勅許された。翌年正静が相続すると棚倉に移された。

帝国ホテルに元治元年（一八六四）の5か月間上屋敷を構えた板倉勝静も幕末期を代表

する幕閣のひとりだった。安政4年寺社奉行に就任するが『安政の大獄』に反対して免職、文久元年に復職して翌年老中にすすんだ。当初は外国事務を担当、再任後は会計総裁になった。15代将軍慶喜の信任が厚く、鳥羽伏見の戦い後、慶喜とともに江戸に帰って終末期の幕政を処理した。明治維新の戦いでは、家督を勝弼に譲って函館に転じ榎本武揚とともに新政府軍に抗戦したが敗れた。

小栗忠順は幕末期の硬派幕閣として知られている。南町奉行の後、井伊直弼にみいだされて開国事務取扱、勘定奉行にすすんだ。日本海軍の始祖ともうたわれ、横須賀造船所を興した。兵制、軍備改革にすぐれた識見をもっていたが、江戸開城期に強硬な主戦論を主張して慶喜から免職された。のち新政府軍が江戸に進攻したさい忠順を引き出して首をうった。

江戸中後期の日比谷パークビル、大正生命ビル、日比谷交差点の一画は岡崎本多藩と泉本多藩邸だが幕末混乱期は有馬道純、松平信義、本多忠紀、遠山友禄、永井尚服と老中、若年寄役宅となった。有馬家は九州のキリシタン大名・有馬晴信の子孫で有楽町時代は若年寄、文久3年から1年間、板倉勝静、阿部正外時代の老中もつとめた。松平信義は万延元年からの老中で、外国御用取扱、京都守護職補佐などをつとめた。

江戸中期で紹介した日比谷三井ビル、三信ビル、日比谷シャンテ笠間牧野藩最後の藩主・貞直は元治元年（一八六四）から慶応4年（一八六八）まで大坂城代になった。幕末政局混乱期の大坂は京都所司代の二条城とともに幕府の関西本拠でもあった。慶応元年には長州毛利再征のため14代将軍・家茂自らがこの大坂城に乗り込むが幕府軍敗報のうちに急逝し、2年後の慶応4年には大政奉還後なお、政権の奪還に意欲を燃やした15代将軍慶喜が大坂城に前線本部を作った。しかし鳥羽伏見の戦いでの敗戦が決まるとあわただしく退去した。2百60余年におよんだ江戸幕府終焉のときが迫っていた。

実力をたくわえた薩摩、長州が同盟を結ぶ

嘉永6年（一八五三）アメリカ艦船を率いたペリー提督の来航は幕府政治を根底からゆすぶることになった。国論は開国か攘夷か、勤皇か佐幕かでわきかえった。安政5年（一八五八）大老となった井伊直弼はアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと通商条約を調印、尊皇攘夷派の弾圧、将軍継嗣問題で独裁制をしくが、こうした強硬策に直弼への不満も高まった。万延元年（一八六〇）3月、井伊直弼が桜田門外で水戸浪士に襲撃されるという大事件が起こった。白昼幕政の最高責任者が殺されるなどとはまったく考えられなかったことで幕府の権威は一気に失墜していく。

日本の夜明けは日比谷雄藩からはじまった。明治維新の推進藩を薩長土肥というが長州山口毛利藩は日比谷公園の地裁側に上屋敷を構え、肥前鍋島藩もそれに隣接した日比谷公園正門に、土佐山内藩邸は旧東京都庁の地にあって、薩摩藩はＮＴＴ日比谷ビル、大和生命の1画に中屋敷を開いていた。

このなかで最初に幕末史のひき金を引いたのが毛利敬親であった。井伊大老が倒れると「外には積極的に開国し、国内は公武合体で強力政権」を藩論に決め、公武両派から支持を得た。しかし、藩内には久坂玄瑞、桂小五郎、高杉晋作らの尊攘派が多く、やがて自らも尊皇攘夷論へとかわっていく。吉田松蔭一門にかつぎあげられた敬親は上洛して朝廷に尊攘論をぶって火に油をそそいだ。元治元年5月、公武合体派の会津、薩摩藩らが尊攘派を一掃する勅許をえたことで、急進派公卿とともに自らも長州にひきさがる。世にいう8・18クーデターと7卿落ちであった。

蛤御門の変、下関戦争とつづいた敗戦は長州藩をますます苦境においこむ。蛤御門の変では御所に向けて発砲したことから長州を討てとの勅命も受ける。幕府にとって尊攘派の拠点であり、何かと幕政の批判をつづける長州はまさに目のうえのタンコブ。千歳一遇のチャンスでもあった。江戸上屋敷であった日比谷公園邸もこの時没収された。『稿本もりのしげり』によれば、7月25日に藩邸を没収し、8月11日から3日間江戸市内の火消しに引き渡させて残材を銭湯に払い下げた。藩邸を没収したとき藩士の1人が自刃し、幽閉者に51人もの病死者がでた。

中国、四国、九州から集まった21藩15万の軍勢が国境を取り囲んだので、長州藩はあわてて謝罪し、3家老の首を差し出してことなきを得るが、こうした解決方法に藩内尊攘派の不満が高まっていく。外面恭順を表しながら幕府との一戦に備えるという武備恭順が決まり、元治元年には高杉晋作らの松下村塾門下生が藩論を統一した。大村益次郎による軍政改革がすすみ、倒幕色が一段と強まる。慶応2年には坂本龍馬の仲介で薩長連合ができる。倒幕運動が現実のものになった。

一方の薩摩鹿児島藩の柱は12代藩主の島津斉彬であった。斉彬は熱心な開国主義者で、13代将軍の後継問題、通商条約の調印問題などで中央政界に大きな発言力をもってくる。斉彬のもとで育った進歩的考え方が薩摩藩倒幕運動の柱になる。生麦事件を契機にイギリス軍艦と戦うが利非ずとみると講和を結んだ。次の忠義を後見した久光（斉彬の弟）は公武合体論で、8・18クーデター後は朝幕周旋に乗り出す。元治元年には攘夷をめぐって後の15代将軍慶喜らと対立して孤立するが、第1次長州征伐では長州の謝罪を取りまとめた。

佐賀藩を維新の雄藩に育てたのは鍋島直正である。貿易収支改善などの経済対策と軍政改革による強兵策に取り組む。大砲を鋳る反射炉が築かれ造船所や小銃工場が生まれた。一大洋式軍事基地が誕生したのである。佐賀藩は内政第1主義をとって藩士に尊攘運動に

加わらせなかったので、倒幕の藩方針を固めたのは慶応3年のことであった。藩の財力と近代兵器は新政府軍の柱となって明治維新をすすめる。明治元勲の大隈重信、江藤新平らを送り出した。土佐藩には山内容堂（豊信）がいた。老中阿部正弘時代の幕政に関与し、将軍継嗣問題では一ツ橋慶喜をおして敗れた。『安政の大獄』では大老井伊直弼に対立して隠居、謹慎を命ぜられ、後公武合体論を唱えて幕末期の政局に活躍した。最後の藩主が豊範で西南雄藩のひとつとして明治維新へと大きく歩んだ。

慶応3年（一八六六）10月、慶喜は大政の奉還を行うが、同じ日薩長両藩に倒幕の密勅がくだった。12月の小御所会議では尊攘派が徳川家の辞官、納地を主張して旧将軍家を挑発した。こうして舞台裏の整った薩長土肥四藩は佐幕派の薩摩屋敷焼き打ちを契機に起こった幕府軍の京都進撃に呼応して兵を起こし、鳥羽伏見の戦いを皮切りに戊辰戦争へと連がるのである。

江戸城無血開城、2百65年の幕府政治に終止符

徳川幕府最後の将軍になった慶喜の在位はわずか1年にすぎない。慶応2年（一八六六）12月、長州再征軍を指揮して大坂城で急逝した14代将軍家茂の跡を継いで15代将軍に就任するが、翌3年10月には大政を奉還して徳川開府以来2百65年間の幕府政治に終止符がうたれた。しかしこの大政奉還ですべてが解決したわけではなかった。あくまで武力による倒幕をめざす薩長軍五千と、大義によって君側の奸を一掃するとした幕府軍1万5千の両軍が鳥羽伏見にまみえたのは4年2月のことであった。しかしすでに士気の衰えた幕府軍が近代軍制のもと錦旗をなびかせて進撃する薩長軍の敵ではなかった。全軍総崩れとなると慶喜は松平容保ら数人をともなってアメリカ軍艦で江戸城に帰りつく。新政府軍はさらに追い打ちをかける。慶喜征伐の大号令を発し、諸藩に服従をせまる。鳥羽伏見の戦いでの勝利を目の前にみた西日本の諸藩はたちまち新政府軍に入った。ただちに東征大提督に有栖川宮熾仁親王を任命。東海、東山、北陸の各道へ鎮撫総督軍が出発する。そのなかにNHK大河ドラマ『翔ぶがごとく』主人公・西郷隆盛らの姿があった。東征軍は3月12日品川、板橋に陣を進めて江戸総攻撃態勢が固まった。

一方、大坂から逃げ帰った慶喜は強硬論の小栗忠順を罷免して勝海舟を登用。自らは江戸城を出て上野寛永寺で謹慎生活に入った。勝は外国の軍事介入や続発する農民エネルギーの暴動を恐れ、戦闘回避につとめる。13日田町の薩摩藩邸に西郷をたずねて江戸城の無血開城を交渉している。こうして江戸城は4月11日新政府軍に明け渡された。

激動した幕末期、有楽町に上屋敷を構えた諸大名たちはどう対応したのであろうか。ある藩は恭順して新政府軍の1員に加わり、またある藩はあくまで抵抗して城下を焦土と化した。歴史の流れは有楽町住民たちの明暗をわけた。国際ビルの1画にあった鳥取藩の最後の藩主は池田慶祝で、15代将軍になった慶喜の実兄である。慶祝は水戸藩主徳川斉昭の5男で父の影響を受けて勤皇思想も強かった。藩内には早くから尊攘派と佐幕派の対立があり、文久2年には勤皇派の22士が京都の自藩本陣を襲い、第1次長州征伐では反対派が大目付を惨殺した。藩論はやがて勤皇と決まる。鳥羽伏見の戦いでは薩長軍に加わり東海道鎮撫隊の先鋒をつとめた。東山道別働隊は近藤勇の甲陽鎮撫隊、上野の彰義隊を破り、以後奥州各地を転戦した。

大勢を見通して恭順し、新政府軍に協力した藩が多かった。ほとんどの藩が破産同様の経営内容で、戦力もなく戦争を避けたいという気持ちを持っていたからだ。三井、三信ビル、日比谷シャンテに住んだ牧野笠間藩は最後の藩主貞直が大坂城代をつとめるなど代々幕府の要職に位置したが、早々に恭順を決めて新政府軍に加わった。当時の関東諸藩は軍政の改革が遅れており、槍隊2百騎が連発銃隊に挑んで多数の死傷者を出した。日比谷シャンテ裏の松平島原藩は戊辰の戦いがはじまると藩論を尊皇に統一、アメリカ軍艦に乗船した藩士2百50人が大砲2門を曳いて奥羽戦線を転戦した。

新有楽町ビルの大河内高崎藩は武器弾薬と1万両を献納。上越国境で会津勢に備えた。第1生命ビルの土井古河藩は藩主が若かったので家老が藩論を恭順に決め、上洛して勤皇を誓った。

しかし一方で落城の悲運を味わった大名家もあった。帝国ホテルの阿部正静、正功父子である。阿部家は慶応2年に棚倉10万石に転じたが4年には旧領の白河もあわされていた。はじめ勤皇佐幕どちらにも決めかねたが、奥羽鎮撫隊がすすむと傘下に加わり、その後仙台、米沢藩の要請を受けて遅ればせながら同盟軍に加わることにしたので話が難しくなった。この白河城を薩長鳥取連合軍が攻めた。その数兵7百に大砲7門。迎え撃つ同盟軍も2千の兵力に大砲8門。勢いに乗る新政府軍はこの戦いに勝って、市街に乱入した。同盟軍は一旦棚倉に退いて再度の決戦を期すが、再び猛攻勢を受けて棚倉城下を焦土と化した。

⑥ 明治元勲と官軍の街・有楽町

官軍本拠となった国際ビル・鳥取藩邸

慶応4年（一八六七）、東征大総督の有栖川宮熾仁親王と西郷隆盛に率いられた新政府軍（官軍）が無血開城した江戸城に入ったのは4月11日のことであった。有楽町の明治維新は新政府を作った官軍屯所と維新戦争の活躍組の街へと変わっていく。国際ビル・鳥取池田藩邸は官軍鳥取屯所。有栖川宮と大村益次郎が入居し、新有楽町ビルの鹿児島藩屯所には参謀の穂波経度、万里小路通房が居住した。第1生命の一画と交通会館、都庁跡も高知藩、旧南町奉行所は鹿児島、徳島藩屯所に変わった。開城直後、周辺に新政府軍の主力を集結したのは江戸城から徳川将軍を追い出して明治天皇を迎えたとはいえ、いつ反薩長派が皇居の奪還をはからないとも限らなかったからだ。

徳川最後の将軍となった慶喜は江戸総攻撃中止の条件となった1大名への降格を受け入れて謹慎したとはいえ、これに反発する幕臣は上野寛永寺にこもり、幕府びいきの江戸市民もまた露骨に新政府軍に不信を表した。市内は不穏な空気に包まれるが、5月新政府軍の近代兵器が彰義隊を一蹴。東北、北海道と続く旧幕臣の抵抗のすべてが翌明治2年に終息した。

慶応4年3月14日、江戸総攻撃中止を決めた西郷と勝海舟会談が行われたこの日、京都の紫宸殿では、大名、公卿を前に明治天皇が『5か条のご誓文』を神々に誓った。天皇神格化の第1歩でもあった。9月、明治と改元。10月には明治天皇がはじめて江戸行幸をはたし、江戸を東京と改称した。翌2年3月の再行幸では、天皇の行列が数寄屋橋を渡って有楽町から東京城に入った。首都を京都から移す、いわゆる東京遷都が実現したのもこのとき、現在の皇居宮殿にあたる西の丸が皇居になった。

岩倉具視、中山忠能、大隈重信……、明治元勲が有楽町を占拠した

明治はじめの有楽町には維新の大業をはたした明治元勲邸がならんだ。パークビル、大正生命ビルは明治はじめ倒幕運動の演出者・岩倉具視邸となり、3年には有栖川宮邸、6年に中山忠能邸になった。三井ビルの一画に大隈重信邸があり、尊壌派公卿として知られ万里小路、東伏見宮邸などもあった。

岩倉は堀川中納言の次男に生まれ、岩倉家の養子になった。尊壌派公卿として木戸孝允、西郷隆盛、坂本龍馬らを指導、慶応3年12月の小御所会議では徳川家の納地辞官を迫った。皇政復古と明治新政府を実現し、武力による幕府旧勢力の一掃を主張したのもこの人。岩倉考案の倒幕勅許と錦旗が官軍のシンボルとなった。有栖川宮は4親王家のひとつで、仁孝天皇の第8皇女・親子内親王（14代将軍家茂御台所）の元婚約者。戊辰の戦いがはじまると官軍の東征大総督として、江戸に攻めのぼり、進攻直後の鳥取藩邸（現国際ビル）につづき、明治3年1月から旧島原藩邸の一部、同じ年12月から翌4年3月までパークビル、朝日生命館の一画とあわせて14か月間有楽町に住んだ。

維新元勲のひとり中山大納言も有楽町に住居を構えた。中山家ははじめ2百石の堂上公卿であったが、娘慶子局が孝明天皇につかえて明治天皇の生母となった。明治天皇は5才までこの中山家で育てられ、即位後は尊壌派の中心として、幕末の混乱期に少年天皇から倒幕の密勅を引き出した。有楽町時代は新政府議定、神祇伯を歴任。嗣子は孝麿。東宮侍従長、宮中顧問官などをつとめたが、明治35年ころ、都市計画で中山家が2分されるのを機に転出した。

この中山邸で大正天皇が幼少期を送った。天皇は明治12年6月、柳原伯爵家の愛子局を母親に誕生、12月から中山邸で養育された。『明治の銀座職人話』によれば「日比谷交差点のあたりに前大納言の中山侯爵邸があり、大きな大名門の中にお屋敷があった。明治の中ごろ、大正天皇のご幼少のころここでお育ちになった。父から聞いた話では白りんずのお召物で水色のへこ帯のようなものを結んだお姿を門の外から垣間みることができたという」。

大衆政治家として市民に親しまれた大隈重信が三信・三井ビル、日比谷シャンテの一画に住んだのは明治4年から7年8月までの3年間であった。報知新聞記者・篠田鉱造の『明治百話』によれば「大きな大名門が表玄関でソレが今日ではほとんど跡形もない。日比谷公園の所で大隈邸の外回りの石垣でいま残っているのは日比谷門の内、日本池に望んだアノ石垣がソレであった。ちょうど日比谷交差点に面したあたりが大名門であって北むきにきつ立していた」。有楽町当時の役職は参議兼大蔵卿（大臣）で、後に総理大臣も勤めた。当時の高級官吏の生活はきわめて恵まれていた。維新を機に旧大名とならぶ地位と生活に躍進。生来派手ずきの大隈邸では重信を慕って集まった友人らと天下国家を論じ、夜ごとお祭り騒ぎを繰り返した。中に伊藤博文、井上馨、五代友厚らの姿もあった。人々は梁山伯とよんだ。

明治2年に実施された版籍奉還で旧藩主と公卿に華族の称号が与えられ、東京転勤が命ぜられた。有楽町にも宮家や公卿が続々と移住してくる。東伏見宮（仁和寺宮）は第一生

命の地が明治2年4月から、日比谷シャンテ裏のガード周辺が4年4月からいずれも数か月間、電気ビルに万里小路家が入り、有楽町から丸の内にかけて徳大寺大納言、西園寺中納言、坊城右大弁宰相邸が並んだ。

万里小路博房は幕末期の朝廷若手急進派のひとり。維新戦争では旗監兼参謀として江戸攻めにも加わった。電気ビルは明治4年から23年までの20年間。明治元年に議定に就任、のちに宮内卿（大臣）、皇太后太夫を勤めた。2代は通房。この万里小路家から跡見学院の2代校長・跡見李子が出た。明治元年の京都生まれ。「明治初年に有楽町に移り、有楽町の屋敷から姉の伴子とともに跡見の塾にかよった」と『跡見百年』が書いている。

明治23年から32年まで跡地が清棲家教伯爵邸になった。家教は4親王家のひとつ伏見宮邦家親王の15王子で、青少年期を仏門ですごし21年に伏見宮に復帰した。山梨、新潟県知事、宮内顧問官などを歴任。日本倶楽部などに変わる跡地は戦後まで養子・幸保が所有した。

藩知事に横すべりする旧大名たち

こうした新政府の躍進グループの影でひっそりと息をひそめた徳川一門と旧反政府軍リーダーらがいた。明治元年から3年4月まで帝国ホテルの地に屋敷を構えた清水昭武、篤守兄弟、同じ年三井ビルと三信ビルの一画にあった伊達宗基などである。清水昭武は水戸藩主徳川斉昭の18男。波瀾の生涯は慶応2年、兄の慶喜が15代将軍として徳川宗家を継承したことにはじまる。当時幕府はナポレオン3世のもと経済力、軍事力で世界を席券したフランスと友好関係を結びつつあった。慶応3年、パリで開催される万国博覧会への参加を決めた幕府にフランス政府は将軍親族の派遣を求め、慶喜は昭武に御3卿のひとつ徳川清水家を継承させたうえ幕府代表としてパリに派遣することにした。昭武がパリ万博のあと西欧諸国を親善旅行中に徳川幕府が倒れた。

明治維新を境に有楽町の大名街は明治元勲邸や新政府軍の屯所に変わったが、藩知事と名を改めた旧大名もしばらくの間この町に止まっていた。旧都庁の地にあった土佐藩邸はそのまま官軍土佐藩の屯所となったが、支藩の高知新田藩が隣接する旧蜂須賀藩邸に移った。藩主の山内豊福は徳川家の安泰に最後まで心を砕いた1人。大阪から逃げ帰った慶喜を追って江戸に戻り、急進幕臣らを説得、自らの死をもってこれを制した。阿波蜂須賀藩は明治元年いったんに旧藩邸を上収されたが明治4年から2年間、ツインタワービルと大正生命ビルの地に戻った。最後の藩主・茂韶が明治5年にヨーロッパ外遊に出発。明治の事業家としても成功して、東京府知事、文部大臣なども勤めた。

日比谷公園の正面に藩邸をかまえた佐賀藩主の最後は直大。薩長土肥の一員として官軍に加わり、新政府では左近権少将、外国官副知事などを勤めた。NTT日比谷の一画にあった薩摩藩邸は明治2年から同族の佐土原島津藩邸となり、忠寛が維新後2年間住んだ。帝国ホテルの地は明治3年から1年間、中津奥平藩最後の藩主昌邁邸で、東宝映画街裏ガード周辺の島原松平藩邸ははその一部を一時有栖川宮邸、東伏見宮邸などに提供したが、最後の忠和が明治10年までこの地に止まった。

陸軍省と東京鎮台を有楽町におく

明治はじめの有楽町は軍都として展開した。明治元年新政府はその本拠ともいうべく軍務省を皇居外苑においたが、2年7月に兵部省と改めて、翌3年11月に有楽町の現国際ビルの地にあった鳥取藩邸を上収して移転した。有楽町の大半は関連施設で埋まった。5年2月、陸軍省と改称。陸軍省の有楽町時代に徴兵制度が発令され、御用商人らとの癒着がとりざたされて陸軍卿・山県有朋の責任が追求された。

明治5年3月皇居外苑の陸軍省添地から出火。おりからの強風にあおられた火はみる間に有楽町をおそった。現在の国際ビル、第1生命館、有楽町ビル、旧都庁、有楽町駅、交通会館、駅前商店街の一部などを焼いて外濠を越え、銀座、築地へとのびた。有楽町の陸軍省はこの火災で設備の大半を焼失、旧都庁と交通会館の大部分はしばらく放置され、有楽町練兵場となった。

明治9年1月、陸軍省が手狭になったことから霞が関近くの地に移転。跡地は陸軍省の管轄下にあった東京鎮台と変わった。以後10年間、有楽町ビルの鎮台本部を中心に第1生命館には工兵大隊、国際ビルと東京ビルには陸軍裁判所、陸軍教導団、監軍本部、軍楽隊、軍法会議をおいた。

日比谷公園の江戸時代後期は毛利、鍋島藩邸と御用屋敷、新橋側に南部、北条、小笠原、丹羽藩邸があったが、江戸開城後は官軍屯所、明き屋敷、桑茶畑などにかわった。当時の皇居周辺は大名が国元に引き上げたうえ旗本も四散し、広大な建物や跡地が空き地として放置され、この活用に新政府が頭を悩ました。その解決策のひとつとして採用されたのが、さびれた武家地を開墾して桑や茶を植えようというものであった。明治6年には周辺に百10万坪の桑茶畑が誕生した。しかし、輸出が軌道にのらなかったうえ、枯れ死が多く、東京を首都として発展させていくうえで時代に逆行しているという批判も高まってやがて中止となった。

旧鍋島藩邸と御用屋敷は官軍屯所になった。「いまのちょうど厚生省、農林水産省のある区域から丸の内にかけて肥前の屋敷や諸大名の屋敷があったが、その長屋の中に寝台をこしらえて方々の藩から集まった近衛兵がいたが、ほぼ兵営ができてから屋敷を開いて練

兵場にした。いまの日比谷公園の所がそれである」（大迫尚道子爵＝漫談明治維新）。明治4年夏のことである。当初は日比谷操練所とよんだが明治18年に日比谷練兵場と改め、21年、陸軍施設の青山移転までつづいた。

南町奉行所は府庁の前身市政裁判所にかわる

江戸時代の有楽町を代表した南町奉行所が新政府軍の統制下に入ったのは慶応4年5月23日のことであった。この朝、奉行所前はきれいに掃き清められ、正面は八文字に開かれていた。両側に羽織袴に威儀を正した奉行所の役人たちが居並ぶ中を新田三郎、土方大一郎らの官軍判事がだん袋にしゃく熊といういでたちで数寄屋橋を渡り、玄関式台に最後の南町奉行佐久間播五郎が出迎えた。

翌24日、南北奉行所は南北裁判所と改称、奉行が主任となった。奉行所は旗本の与力が50騎、御家人の同心250騎が定員であったが、江戸城の明渡しが決まってからは奥羽方面に脱走するものも多く出勤者は少なかった。江戸市中の治安をどう守るか新政府内の意見が分かれたが、江戸のことは江戸の役人に任せるのが一番、と継続雇用がきまった。8月両裁判所を有楽町に統合して市政裁判所と改称、9月には東京府が誕生して、日比谷の富国生命ビル、大阪ビルなどの新庁舎に移転した。有楽町の市政裁判所はあわせて4か月にすぎなかったが、幕府時代から府庁への移行期として歴史的意義があった。

日比谷の府庁長屋で明治の代表的女流作家・樋口一葉が生まれた。一葉の父義則は山梨県の貧農の出で、初恋の淳子と駆け落ちして幕末風雲急を告げた江戸にたどり着いた。安政4年のことであった。2人は蕃所調書小使いなどの苦労の末、南町奉行所同心の株を買うが念願の御家人生活も1年間にすぎなかった。慶応4年には江戸幕府が倒れて、義則は府庁の下役人に甘んじることになる。旧幕臣で中年の父に昇進のチャンスはなかった。一葉が5か月のとき退職し、その後は職を転々として生活苦がつづいた。一葉はやがてみずからの体験からくる貧しい女性の姿に哀切な叙情をこめた『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』などを発表。わずか24歳の生涯を終えた。

上野公園にある東京国立博物館の前身・博覧会事務局と博物局が明治はじめ帝国ホテルと第1勧銀、NTT日比谷の一画にあった。新政府は明治5年、翌年ウィーンで開催される万国博覧会への出展を決め、その準備のための事務局を旧薩摩藩邸に開設した。慶応3年のパリ万博で徳川昭武に随行した佐野常民が実務上の推進者になり、ドイツ人技師の指導のもとで準備がすすめられた。出品物は名古屋城の金のシャチをメインに鎌倉大仏の張子など日本の伝統的工芸品が中心で、現地に66名の事務局員が派遣された。日本館の開館式にはオーストラリア皇太子が臨席、岩倉具視以下のヨーロッパ視察団も立ち寄った。

政府はウィーン万博を契機に常設博物館の設置と内国博覧会の開催をめざすことになる。事務局業務が現地に移された6年3月には文部省博物館、書籍館、小石川薬草園を吸収して日比谷博物館とした。しかし、明治14年になると鹿鳴館用地としての収用が決まり、7月閉館、農務省会計局に跡地を引き渡して上野公園へと転じた。

明治4年11月、廃藩置県にともなう置県条例により、有楽町は第1大区第2小区に編入され、翌5年4月には有楽町の町名が制定された。江戸初期のころ、数寄屋橋の銀座側に住居を構えた織田有楽斉に由来した。後年同じ泰明小学校の地に江戸城で茶の世話をした数寄屋坊主が有楽流の茶道をたしなんだからだともいう。有楽は「うらく」と読んだが時代とともに「ゆうらく」と呼び直されていく。明治11年第1大区の一部などが麹町区と変わり、昭和22年3月、現在の千代田区が成立するまで続いた。

⑦ 帝国議事堂と鹿鳴館、そして神道の町

明治中期の有楽町は帝国議事堂、鹿鳴館、東京府庁など政治の中心地

明治はじめの有楽町は新帝を守る政府軍屯所や元勲たちで占められたが、明治中期の有楽町は帝国議事堂や鹿鳴館、東京鎮台、陸軍練兵場、東京府庁に代表される政治の中心街であった。明治22年、わが国初の明治憲法が発布され、翌23年には第1回総選挙が実施された。とはいえ、有権者は15円以上の税金を収めた一部の特権階級の人たち。1パーセントの金持ちが選んだ新議員3百50名が第1回帝国議会にのぞんだ。その檜舞台ともいえる最初の帝国議事堂が日比谷公園の南隣、現在の通産省の一画に建設された。設計者はドイツ人技師エンデ・ベックマンと日本人の吉井茂則。当初ベックマンは日比谷公園を中心に中央官庁街の建設を計画するが採用されない。やがて帝国議会の開催が迫って本格建築の建設は不可能になっていた。21年に着工し、23年11月竣工。第1回帝国議会開会式には明治天皇も出席したが、翌14年1月原因不明の火災で焼失。2代目も仮堂で明治24年10月竣工し、昭和11年までつづいた。

明治時代の政権は長州と薩摩のたらい回しで、彼らは国会開設後も政党政治や議院内閣制度を否定し、みずからの思うままに政治を行なうという超然内閣主義を帝国議会に持ち込もうとしていた。自由党、改新党をはじめとした各政党が猛然とこれに対決し、日比谷帝国議事堂で両者は火花をちらして渡り合った。本格議事堂の建設計画は早くからあり、大正9年には霞が関の地を選んで起工祭を実施したが、中断などもあって工事は延々16年にもおよんだ。この間日比谷帝国議事堂では47年間、明治、大正、昭和の3代、69回におよぶ帝国議会が開催された。

高官婦人らがなれないステップを踏んだ鹿鳴館

明治10年代の後半は内外に多くの難問を抱えていた。日本国憲法が制定される一方で反政府運動取締りが強化され、新しい経済政策が市民生活を圧迫した。幕府時代に締結された不公平条約の改定も急務でもあった。政府は条約改定を進めるうえで日本が開化国であることを認識させる必要があると判断、明治13年、日比谷に壮麗な外務省接待所の建設を決めた。大和生命、第1勧銀、NTT日比谷の一画、旧薩摩藩邸に開設された鹿鳴館であった。

鹿鳴館はイギリス人技師・コンドルの設計で14年起工、3年間の工期と14万円の工費をかけて竣工する。レンガ造2階建てのゴシック風建築で建坪4百10坪。館内2階は舞踏の間と客室10室、階下に食堂、ビリヤードが作られた。16年11月の開館式では内外千6百人の来賓を迎えて陸海軍楽隊と百20発の祝賀花火が夜空に開いた。鹿鳴館は新しい明治史を彩る。政府が率先して欧化熱をあおったことがたちまち上流社会に浸透した。世にいう鹿鳴館時代であった。洋装文化に代表される衣服革命に、食生活、住生活に。欧風文化の波はまたたくまに全国に広がった。鹿鳴館では外国使臣を招いた園遊会や舞踏会、バザー、音楽会などが開催された。総理大臣・伊藤博文以下井上馨、山県有朋、三条実美らの政府高官や高級軍人らが洋装婦人をともなって社交ダンスのステップに興じた。しかし、こうした上流社会の饗宴はデフレーションに悩む一般大衆の反感を買うばかりか外国人の嘲笑をも買うことになる。23年4月、諸外国との条約改定交渉が失敗に終わると政府はあっさりと鹿鳴館の閉鎖を決定。わずか8年間のはかない運命であった。

鹿鳴館は宮内省管轄に変わり、明治23年から華族会館が借りた。明治維新後の旧大名は政治の第1線からの退却を余儀なくされ、華族の称号が与えられたとはいえ、心のよりどころをなくしていた。こうした実情をみかねた三条実美らが皇室の藩屏として衆庶の模範となるよう、華族会館を結成した。27年の大地震で会館を損失。鹿鳴館設計者・コンドルの手で全面改修が行われたが、大正12年の関東大震災で再び大破、昭和4年三井町に新会館を新設して引っ越した。跡地は徴兵保険の所有となったが昭和16年取り壊され、有名な旧薩摩屋敷表門も昭和20年の戦災で焼けた。

新生日本の首都にふさわしいホテルを。井上馨の提唱でうまれた帝国ホテル

明治20年6月、三信ビル前の日比谷通りに東京ホテルが竣工した。横浜の回船問屋鹿島屋が発起人で木造2階建て洋館25室。田山花袋の『東京の30年』によれば「（現在の晴海通り）は雨が降ると道が悪く、車夫は車の泥濘に埋もれるのをこぼしたところである。そして日比谷大神宮に行く途中にグランドホテル（東京ホテル）といういまではあんな小さな外国旅館などみたくともみれないようなホテルがあった」。このホテルに、22年フィリピン独立の父と慕われたホセ・リサールが逗留した。スペインの植民地支配からの弾圧と迫害に立ち上がったリサールは故国をおわれて有楽町に住んだが、のちに35才の若さで刑場の露と消えた。

明治20年、渋沢栄一、大倉喜八郎、浅野総一郎ら当時の実業界を代表する人たちが集まった。外務大臣・井上馨の「新生日本の首都にふさわしいホテル作りを」との提唱に応え

た人たちであった。資本金26万5千円、有限会社帝国ホテルの誕生が決まった。予定地は農林省の陳列所と外務省、宮内省用地であったが、政府はこのホテル建設を国策事業としてとらえ、農林陳列所を引っ越し、官有地を貸下げた。

明治21年から3年間の工期をへた23年11月に竣工。木造レンガ造り3階建ての壮麗なルネッサンス建築が宝塚、東宝会館の所にあった外濠に影を落とした。当時の『東京日日新聞』には「玄関の正面に広間あり、いとひろやかなる談話室あり。玉突き場あり、舞踏室あり。いずれも百畳敷くらいの室なり。この舞踏室はもっとも広く、5、6百人も集まるべき会合にはこの室をもって臨時の食堂にあつるよし」。客室が60。料金は50銭から7円であった。帝国ホテルの創世期は宿泊客も平均14、15名程度にすぎず、日比谷帝国議事堂が焼失したとき仮議場になったり、政府主催の天長節祝宴会場などに利用されてやっと息をつないだ。

神前結婚式場のはじめ。政府高官で日比谷大神宮に訪れぬものなし

有楽町の歴史のなかで神道の果たした役割も忘れられない。明治3年、新政府は神道を国教とする大教宣布を発した。大教宣布はこれまでの仏教は幕府体制の遺物で、天照皇太神の子孫にあたる天皇への忠誠心を高めるというものであった。有楽町が神道の町となったのは明治8年3月、三井ビルから日比谷シャンテにかけての一画にあった大隈重信邸跡地に神宮司庁出張所が引っ越してからである。神宮は伊勢皇太神宮のことで、神宮の教化体制を固めるうえから政府との連携を必要としたのであった。

この神宮司庁に4月から神道事務局と神道教会所などが加わった。当時の神道は大教院を中心とした神仏合同布教方式をとったがうまくいかず、神官だけの布教組織・神道事務局と教会所をこの地に誕生させた。当初、皇太神宮と神道事務局の合同仮拝殿が日比谷通りにあったが、この仮拝殿を本格的なものに建設しなおそうと全国からの寄付金を募り、明治天皇も1千円を下賜した。13年3月の遷座式には皇族、大臣、参議などが参列し、多数の参詣人がおしかけた。新神殿は本殿が26坪、拝殿44坪、事務所28坪、屋上に千木をあげた。清しやにして高潔、粛然として起敬せしめたという。

開設直後の日比谷大神宮に神道界を2分する大騒動がおこった。伊勢派は天照大神以下4神を主張し、出雲派も大国主命を加えた5神を譲らない。両派の争いは神道界に激しい対立をうんだ。この事件におこりた政府は神社を宗教から分離させる、神社・宗教分離令を発令、この結果宗教団体にあたる神宮司庁は日比谷大神宮の権利を放棄し、同居していた神道事務局も独立して退去した。こうして15年、神宮教院はその名を神道神宮派（通称＝神宮教）と改め、初代管長に田中頼庸が就任した。田中は鹿児島藩出身の尊壌志士で、維新後、神祇官、神宮宮司、神道学務局副管長をつとめた。碩学の名は高かったが経営にはまったく無頓着で側近に不良もあって財政は乱れた。

明治19年、経営に行き詰まった神宮教が全敷地の7割にあたる5千3百坪を抵当に平沼八太郎の融資を受けた。やがて土地は第一九銀行をへて三井家に転売される。現在の三井ビル、三信ビルの地であった。八太郎の父専蔵は波瀾万丈の立身伝で有名。埼玉県の貧農の3男に生まれ、日本橋の材木商の飯炊きとして住み込んだが、慶応3年に起こった米騒動で大もうけし、土地投機、綿花相場で巨万の富を得た。

さて神社敷地の3分の2を失った神宮教だが、しばらくはそのまま使えたので大きな障害になることはなかった。しかし26年には教院の経理問題が表面化して田中管長が辞任し、27年、売却地に三井集会所が建設されると、事務所は移転を迫られた。このため28年工事を起こして翌年7月に竣工、引き続き本殿、拝殿工事が行われた。新体制による改革がすすんだ。宗教から脱却、独自の立場で神宮精神を高揚すべきだとして神宮奉斎会への改組もはかった。

ここに日比谷の真清水とよばれた井戸があった。「（井戸は）後々まで私たちの住んだ社宅の前にあり、町内の人々も重宝したものだが、大震災後の区画整理で跡形もなくなったのは惜しいものである。大鳥居の左方、往来に面して大名屋敷の名残である太い格子窓のある長屋に私たちは住んでいた。右方の土手下にも職員の住宅があり、その土手上から練兵式をみたことがある。現在日比谷公園の東北隅にある石垣の土手が唯一の記念物である」（藤岡好春＝東京大神宮史）。

日比谷大神宮は結びの神様としても知られた。明治32年5月10日、大正天皇のご成婚が行われたが、翌34年講堂で神前結婚式を予行し、改善して一般にも開放した。わが国の神前結婚式のはじめでもあった。32年から始まった日比谷市街の再編工事は日比谷大神宮をさらに便利にした。これまで帝国ホテル側は濠にさえぎられてゆきどまりになっていたのが、取り払われて地つづきにし、参道が表裏両側から通じることになった。左右にはやがて茶屋や料理屋がならび門前町には桜も植えこまれた。明治末期から大正時代にかけて東京桜名所のひとつにもかぞえられたのである。「（日比谷大神宮の）神殿は南向きでさほど大きくなかった。参道は玉石を敷き詰め、檜づくりの社殿は一段高くなっていて金糸の縁どりをした真紅の御簾がいつもさがっていた。社殿は檜の木立に覆われて境内はいつもきれいに清掃され、神々しい雰囲気を漂わせていた」（明治の銀座職人話）。

イバラの道を歩んだ幸徳秋水の平民社

明治4年の廃藩置県を契機に有楽町は政治の中心地として脚光を浴びる一方、一般大衆の町への第1歩も記している。その典型的な例が有楽町駅前の中央通り商店街、朝日街などの一画であった。ここは江戸時代の南町奉行所の跡地で、維新後市政裁判所、鹿児島・徳島藩屯所をへて、明治4年7月から東京府に移管されていた。5年大火で大半を焼失。正確な記録がないが長屋の一部が残ったらしい。東京府の幹部職員とみられる田中光儀、堀直好が10年ころまで住んだ。

明治のはじめ払い下げられ、いつのころからか一画が渡辺保全の所有地になった。社長の渡辺治右衛門は東京1の多額納税者で第1回の貴族院選挙で第1位当選もはたした。2階建て長屋や小住宅が多く、職人や勤め人などが住んだ。『明治百話』（篠田鉱造）によれば、明治8年10月、ここ有楽町2丁目の2番長屋に借家していた、近藤秀司なる旅館従業員が高利貸し南条某を殺害した。執拗な悪徳高利貸しの追求に思いあまった末の犯行だった。36年には平民社が誕生した。平民社は日本における社会主義の源流として知られている。この年『万朝報』をあきたらずに退職した幸徳秋水と堺俊彦が、この一画で『平民新聞』を創刊。紙面には日露戦争に向けて高まる好戦熱に真向から対抗する反戦論がおどった。

不屈の社会主義運動家・荒畑寒村の『平民社時代』に平民社の回顧がある。「日本劇場（現マリオン）の裏あたりの角が平民社で、日比谷公園よりの角に中山2位局だかの邸があり、その中間に住家がならんで1ブロックを作っていた。そしてやや広い溝がこの一画をとりまいていて、どの家も小さい木の橋で、前は30間ばかりの道路をへだてて数寄屋橋教会、有楽泉という名の銭湯、冬になると焼芋屋にかわる氷水屋などが軒を並べていた。平民社はやせた松の木をのぞかせた2階屋で階上の10帖、7帖半の2た間が編集室。階下の9帖、4帖半、3帖、2帖の4間が応接室、食堂、寝室、販売発送などの事務室などにあてられていた」。

女性社会主義活動家・西川文子も平民社の一員だった。「編集は幸徳氏、堺氏、西川光二郎氏、石川三四郎の4人で発送には斎藤兼次郎氏と神崎順一氏、柿内武郎氏がいて台所やちょっとした会計を私と延岡さんとでしていた」（平民社の女）。当時この平民社に社会主義者の多くが集まった。政府の迫害も強まる。相次ぐ発行停止処分と責任者の入獄と罰金刑を。『週間直言』への改題をへた38年、2年間の平民社時代も終焉を迎える。悲劇はこれにとどまらない。40年、堺と西川の興した日本社会党が結社禁止令を受け、43年には赤旗事件、大逆事件で逮捕された幸徳以下幹部が刑死処分された。

トンガリ帽子の数寄屋橋教会で北村透谷が挙式

明治18年から大正12年までの39年間、一画に数寄屋橋教会があった。東京初のキリスト教々会として誕生した第1長老教会から明治9年4月に分離した銀座教会の後身で、13年京橋、18年から有楽町に移ってメソジスト数寄屋橋教会といった。

「スレートがわらのトンガリ屋根、2階建て洋館でかまぼこ型の窓はよろい戸だった。日曜日ごとに西洋太鼓やタンバリンを打ちならして、神の子やさけべやうたえとどなるのだが、当時の庶民は一向にふりむきもしなかった」（明治の銀座職人話）。荒畑は先の『平民社時代』で綱島佳吉が牧師だったとしている。綱島は霊界の巨人ともいわれた。わずか25才で悲劇の生涯をとげた明治ローマン主義の先覚者北村透谷もこの数寄屋橋教会で受洗している。北村を政治から文学の世界に転向させるきっかけを作った石阪ミサが熱心な会員で2人は明治21年数寄屋橋教会牧師・田村直臣の司会でキリスト教式の結婚式をあげた。19才であった。

明治後期のこの町を『明治の銀座職人話』（野口孝一）が詳しく紹介している。「数寄屋橋を渡ったところは朝日新聞社（現マリオン）だが、ここは大正のはじめまでは土手続きの見附御門の塁壁のあとであった。その土手の斜面は芝生で覆われ、点々と黒松が植えられてあった」。同じマリオンの旧日劇側は江戸時代、数寄屋橋門の大番所と周辺道路敷、島原藩邸の一部だったところ所だが、市区改正工事で飛び地になった。「明治39年前後のころ、古トタンのナマコ塀をめぐらし、そこに当時売出し中のばら歯磨きの宣伝文がでかく書かれていた。この塀の中に工場があったが工場とは名ばかりの平屋建てで、その回りは白い粉でおおわれていた。この裏側には外堀に通ずる大溝があった。大溝といっても実にきれいな水がちょろちょろ流れていた。この大溝に沿って武家長屋（旧奉行所の長屋）があたりに取り残されたように立っていた。長屋は2階建てで、1階の羽目板は柿渋黒塗りの鎧り、2階は白壁で各戸ごとに武者窓が切ってあり、屋根は切妻。長屋は4、5軒つづきでこの付近の往時の面影をとどめていた。この大溝の先は通路がそのまま広がったような空き地になっていた。土手はなだらかで青草が生えこどもたちの恰好の遊び場であった。

土手の裾には三島という幌馬車の修理工場があった。広い空き地をわがもの顔に古馬車の残骸を所せましと野ざらしにしていた。空き地の突き当たりの工場には数人の工員がいたが、仕事をしているやら遊んでいるやら判らずいたってのんびりしたものだった。この隣は丸谷といって弥左衛門町の和紙問屋の隠宅であった。丸谷は江戸川という手紙用の巻き紙をあつかっていた。この隠宅は『吾妻新誌』の発行所ともなった。ご隠居のお妾さん

がここで首吊りをしたというわさが流れて当時の界隈はその話でもちきりだった」。後に市電車庫、市電気局となった東京交通会館の明治30年代であった。

「丸谷の隠宅から1軒おいてとなりの角にメソジスト教会があり、さらにその棟隣り2、3軒先に路地があってその路地に沿って平屋建ての9尺2間のむねわり長屋が立て込んでいて職工さんとかあんま、女髪結い、左官、大工、安月給取りや、戸口に植え込みのある小粋な住まいにはこの付近の小金持ちの妾宅などがあって、この長屋は異様な雰囲気があった。夏のころともなると戸や障子を明けはなし、表から裏側まで筒抜けにみえ、女房などが浴衣の肩をはずして濡れ手拭いをかけて冷をとっている姿や、陽のくれるころ雨戸で囲って行水しているさまもみえたものだ。この右側の路地の角はいかにも薄暗い平屋の餅菓子屋で、そのガラス障子の中の盤重には大福餅、スアマ、饅頭、鹿の子もちや水っぽいようかんなどが置いてあった。

この隣は有楽町の市川床といって日本かみそりの腕利きで、この界隈では評判の髪結床だった。主人は長いあごひげを蓄え、職人気質の腕自慢。一風変わった人物だった。店は簡素なガラス戸の構えで、土間へ入った右側に客用の腰掛けがおいてあり、奥の正面には黒の太々しい額縁に入った大鏡が4、5枚はめてあった。散髪用の椅子ときたら大型の角ばったもので、左右に肘かけがあって、その先に龍頭のほりものがしてあり、背後には伸縮自在の頭かけがついていた。髪の洗い場は木でできており、その中に銅の打ち出しの金だらいがあった。客待ちの壁には横浜絵というガラス絵がかかっており、灯油は生たきのガス灯だった。夏場になると客のサービスに小僧が高いほう歯の高下駄をはいてお化けのようなバカでかいうちわで扇いでくれた」。

この一画に有楽泉という銭湯があった。「ドーム型の屋根でパラペットは白壁がぬりこまれ中央に丸い明かりとりの大窓が切ってあり、その左右にカマボコ型の窓に挟まれて男女別々の入口が突き出て付いていた。袖垣は明るさと清潔感にあふれていた。この付近の地域は住民が少なくいつ行ってみてもひっそり感として実に清々しい気分にしたれる湯屋であった。そのころ銭湯は男女とも3銭で子供はただ。しかもお湯は大きな桶で使い放題だった。5銭出すと背中をながしたり軽く肩をもんだり、あがり湯を次々汲んでくれたものだ。入口の番台で流しというと木札を渡し拍子木を打って奥へ知らせた。1つチョンと打つと男性、2つチョンチョンと打つと女性と知らせる合図で番頭はそれで男か女であるかを知った。

有楽泉の先の角は8枚入りのガラス戸の嵌まった洋服屋であった。畳敷の店には仮縫いの服を掛けたマネキンがあり、その横手に洋反物が井桁に積み重ねてあった。この店はいつみても人の気配はなく、しごく閑散としていたが当時の洋服屋はこんなものだった。この横通りのはずれにそのころとしては物珍しい白馬堂小川という看板屋があった。店は小さいがその付近の空き地をわがもの顔に大きなトタンの看板をとっちらかしていた。この店は早いころ上野広小路へ移転して行った」。

日比谷シャンテ裏のガード周辺で明治大学がうぶ声をあげた

日比谷シャンテ裏のガード周辺の明治時代も商工業、そして一般庶民の町へと変遷を続けていく。ここは江戸後期の島原藩邸で旧藩主の松平忠和が明治10年まで居住した。『銀座ばやし』（永井保）がこの一画と銀座・対鶴館のかかわりにふれている。「（亀岡勝知は）明治維新、有栖川宮の財政顧問といった資格で江戸に入ると大蔵省の役人もつとめた。折から政府は大名屋敷を民間へ売り渡すことになり、亀岡も1枚加えられて土地の払下げを受ける。当時坪2銭で買いうけた土地の広さは、いまの朝日新聞社（現マリオン）から土橋のあたりまでおよんだという。（その土地も）藩から扶持をもらえなくなった武士たちに自立の糧としてほとんどわけてしまう。時勢に応じた商売をはじめる決心をして宮家を辞めると対鶴館という旅館を開業した」。

この一画で三楽舎が注目をあび、明治大学がうぶ声をあげた。三楽会では政府批判の演説会が開かれ、自由民権運動のメッカともいわれた。明治14年、岸本辰雄、宮城浩蔵らの新進法学者らが旧鳥取藩主と島原藩主の財政支援をえて、旧三楽舎跡に明治法律学校を開校。西園寺公望も講師に招聘された。翌15年には第1回卒業生19名を送り出したが、19年に駿河台の地に新校舎を建築、移転、36年に明治大学と改称した。

明治の10年代に清水米蔵所有地になった。清水は幕末の天保元年、鎌倉に生まれた。12才のとき江戸に出て蔵前の森村屋という札差屋に奉公したが、明治維新の幕府崩壊で旗本、御家人に融資した莫大な貸付金が貸倒れになり、さしも豪商とうたわれた森村屋も没落した。清水はやむなく黒船町に移って土地売買を始める。「一大世変の後、人心未だ安定せず地所の地価極端に低落し、はなはだしきは無代価をもって譲与せんと欲するもこれを受くるものなかりしという。この時にあたり翁は10年後、20年後の将来を考え力の許す限り市内各所の土地を買取りついに今日の成功の基をなせり」。伝記『清水米蔵翁』が書いている。清水精一当主によれば旧島原藩邸の取得価格は坪2円50銭であったという。「地域教育に熱心な人で日本橋女学校の開校に尽力したり、坂本小学校の振興に私財を投じたりもした」。5人の男子はみな早世して末娘の生んだ清水が継いだ。明治19年の参謀本部陸軍部測量局地図をみると、旧藩邸のほか敷地内に次々と小建物が増築され、建屋ごとに賃貸されていることをうかがわせるが、28年図では区画整理されて横4列、縦6列の19区画が整然と立ち並んでいる。こえて38年ころ晴海通り建設でマリオンの旧日劇側が飛び地に

なり、43年、山手線ガードが中央部を縦断した。有楽町駅完成直後の周辺写真によれば2階建ての民家が建ち並び、この町並みは大正12年の関東大震災まで続いた。

実業の日本社の前身大日本実業界が創業期にこの地を足掛かりとした。創立者・増田義一と光岡威一郎は東京専門学校（早大）の同窓で、当初京橋に本社をかまえたが31年7月に有楽町に転じた。「現在のニュートーキョーのあたりと思われる。庭先は大きな松の木がある土手を隔てていまは埋め立てられて高速道路となった皇居の外堀に面していた。邸内には母家につづく14、15帖の土蔵があった。これが事務所に使われた」。同社の『75年史』が伝えている。33年健康をそこなった光岡がこの自宅兼事務所を増田に譲り、この年大日本実業界も飯田橋に退いた。

前出の『明治の銀座職人話』によれば「日本劇場（現マリオン）の向かい側は雑貨屋とげた屋が2、3軒あるくらいで人通りもなく寂しい町だった。その先の横町角に久寿美屋酒店、少し離れて月山靴店と鈴木炭屋があった。そしてその裏側には長屋が立て込んでいてその中に豆腐屋が1軒あった。（この長屋に）宇野吉五郎親分が住んでいた。もとは金春大工といわれ、新橋花街を根城に仕事をろくすっぽしないで乱暴ろうぜきを繰り返し、新橋芸者をちぢみあがらせていたという。しかし明治10年ころ食いつめてこの地に移り、ここでも顔を利かせて何ごとにも口をはさんでピンハネをして隣近所の嫌われものになっていた。この一画はジメジメしていて陰気臭く空き家もあった。いつのころであったか、この空き家に幽霊がでるという噂がたち、それを新聞記者が嗅ぎつけて新聞に載せたからたまらない。たちまち評判になって夕涼みがてら物見高い人々がわんさか押し掛け、一時は警官が出動する騒ぎになった」。

⑧ すすむ市区改正

市区改正という名の都市計画で江戸時代の町並みを一掃

明治12年12月と14年1月の2度にわたる大火は東京市街の1万戸以上を焼失させるという大事になった。東京府はこれの反省にたって市区の改正、すなわち大都市計画を推進することになった。有楽町もこのプロジェクトを受けて大変身をはたす。ひとつはその大半を占めた軍事施設の移転と三菱の丸の内進出であり、ひとつは外濠一部の埋め立てと石垣の撤去、日比谷交差点を中心とした晴海通り、日比谷通りの新設、日比谷公園の開設などであった。有楽町からは中山大納言邸、清棲伯爵邸などの華族、皇室関係邸が消え、変わって府庁、警視庁、有楽町駅などの官公庁舎、帝国劇場、市電会社、電灯会社などの先進企業や庶民の街・山かん横丁などが誕生してくる。政治、軍事の中心地から経済の町、一般大衆の町へと華麗な変身をとげるのであった。

有楽町は日比谷門や数寄屋橋門が撤去されていたとはいえ町並みも旧幕時代そのままで、南は日本生命、宝塚劇場、東は高速道路にあった外濠と石垣でさえぎられたうえ、道路も曲がりくねっていた。市区改正工事は日比谷交差点を新設して銀座につづく晴海通りを作り、外濠の一部を潰して日比谷通りを完成させることなどが織り込まれていた。

明治32年1月、この計画道路の中心地にあった日本倶楽部仮館（旧東京ホテル）が焼失し、これを機に大規模な都市計画工事が始まった。この月東京市議会において新道路拡幅工事予算が可決。日比谷地区区画整理予算11万4千円、うち2万7千円が濠池埋立て費であった。工事はただちに着工され、35、36年ころ外濠の埋め立てと24間幅の日比谷通りが完成した。36年9月にはこの拡幅道路の一部に東京市街鉄道（後の市電）が開通し、40年ころ日比谷交差点が完成、数寄屋橋も木製の大橋に変わった。折から建設中の高架鉄道と国鉄（現JR）山手線・有楽町駅が開業するのは明治43年6月のことで、40年ころ有楽町と銀座を隔てた外濠の石垣も取り払われた。この都市計画で敷地を2分されることになった中山家は有楽町を退去し、跡地は南半分が飲食、旅館街に、一方の北半分は不平不満をかこちながら不景気をなげく一山組みの町・山カン横丁へと変わった。

わが国初の近代洋風公園・日比谷公園が完成

日比谷公園も市区改正という都市計画で作られた。練兵場跡地の公園化は21年の市区改正委員会の決定を東京市告示で公式のものとした。しかし21年に青山に引っ越したはずの陸軍がその後も諸行事に使用したり、付属建物の撤去や濠池埋め立ての遅れ、計画段階に入ってからもさまざまな意見がでてなかなか決まらなかった。この間日比谷公園は日比谷が原とも呼ばれる広漠とした荒れ地に変わった。計画ばかりの公園建設に市民の批判も高まった。

難航した日比谷公園建設を軌道に乗せたのが東京農科大学の本多静六博士であった。明治33年秋、市顧問の辰野金吾からむりやり地形図を押しつけられ、「1週間ばかりかかって作った下図を持参したところ辰野氏は大いに賛同されてさっそく私のことを町田市長に話し、私は市長から改めて公園設計を嘱託されることになった。私も本当のところ公園の設計ははじめて。はなはだ心細かった。だがまだ日本には専門家はいないので私は異常な希望と決心をもってやりはじめたのである。今日存する日比谷公園の大通りは私がフリーハンドでかってに書き上げたもので公園敷地をその大通りで4つに区分した」。本多博士の著書『体験86年』にある。

公園は35年起工、翌36年6月開園式を迎えた。この日は快晴。午後2時6つのゲートが開くとまちかねた市民が殺到した。総工費30万円。5万1千坪の総敷地は後楽園ドーム球場の3倍。うち洋風庭園が4割を占め、日本式庭園、池沼、運動場などで構成された。大噴水とつづく芝生地が当時の運動公園で地裁寄りの日本庭園がテニスコート周辺までのびていた。有楽門、日比谷門など6門は現在と変わらず、70基の白熱ガス灯、千2百燭光アークライトなどの夜間照明が市民の目を驚かせた。

日比谷公園ができた36年に日露戦争がはじまった。総力を振り絞って大国・ロシアに挑み、明治維新以来の宿願であった富国強兵の実をあげるが、日比谷公園では祝勝会がつづいて時代の波を反映していく。37年仁川海戦、遼陽城占領、38年になると旅順港占領、連合艦隊大勝利などなど。政府首脳や軍人の国葬、戦勝大会といった国家行事がくりかえされて日本が軍国化していくさまを見守った。

明治38年の日露講和条約反対国民大会で日比谷焼打ち事件が起こった。日露戦争は東郷平八郎の率いる海軍が仁川沖でロシア艦隊を破り、この年5月にははるばる回航してきたバルチック艦隊を撃滅する。一方乃木希典率いる陸軍も遼陽、沙河の合戦で勝利を収め、肉弾攻撃で多くの死者を出した旅順も二〇三高地を占領して開城させた。しかし日本の戦力消耗も著しく、ロシアも内戦で国民の戦意が喪失していた。両国は戦争の早期終結を望みアメリカ大統領の勧告を受けて講和への道を歩んだ。日露戦争の勝利は一部特権階級に莫大な利益をもたらせたが一般市民は戦場にかり出されたり、特別税やインフレに悩まされていた。講和条件は日本の戦勝国たる権利を大幅に譲歩したものだとして市民の怒りが爆発した。

9月5日、日比谷公園での反対大会には3万人の群衆が集まった。会場は麹町署の中止命令を無視して、公園閉鎖を突破した人たちで埋まった。講和条約破棄を要求する4項目の決議を採択して皇居前に進んだが、2重橋近くで巡査隊と衝突。このとき主催者の河野広中と大竹貫一が検挙され、群衆の激昂はますます高まった。暴徒化した一行は公園に戻って帝国ホテルの地にあった内務大臣官舎を襲い、巡査出張所や電車を焼いた。

日比谷公園開園の翌37年、音楽堂と心字池近くに和洋1店づつの喫茶店が開店した。公入札をかち取った1人が銀座の日本料理店・松本楼の小坂梅吉であった。小坂は明治6年生まれの秦明小学校第1期生で松本楼を継いだ。「(最初の松本楼は)屋根の急勾配部分に窓を開けて光りを採り入れた当時流行のマンサード屋根、3階建てのしゃれた店構え。緑と花はなに囲まれてひときわ美しいたたずまいでした。明治37年といえば東京の人口が百60万人になった文明開化の時代。日本と外国のふれ合いもすすむなかで、松本楼は市民の食生活に洋食を浸透させていきました。蓄音機、自動車、カフェ、モダンガール……。そんな言葉に象徴される古きよき時代、松本楼でカレーを食べてコーヒーを飲むことがハイカラな習慣になりました。店内に流れる音楽を聴き、美しい森の緑を眺めながらの憩いのひとときは豊かで自由な時代の幕開けにふさわしいモダンなスタイルだったのです」(松本楼創業80周年)。

松本楼は文学や芸術の世界でも重要な役割をはたした。小山内薫、北原白秋、高村光太郎、市川左団治氏の『パンの会』が開かれたのもこの松本楼であった。「大都のまったただ中、バンドに耳を傾けながら飲みも話しもいたしたく」案内状にある。松本楼とともに落札した三橋亭は下谷三橋際に本店があった。初期の女性社会主義活動家・西川文子も常連客のひとり。著書に三橋亭へおしるこを食べに通ったという記述もある。日比谷パークセンターがその後身。明治38年に高柳亭と麒麟亭が追加承認された。

日比谷図書館は明治41年11月に開館した。「階上の閲覧室は広壮にして中央に2本のコリンス3葉式円柱あり、6この吊り灯(シャンデリヤ)天井より垂れ……」(東京朝日新聞)。当初は有料で一般3銭、児童1銭の閲覧料が必要だった。正門日比谷口向かって右側の小音楽堂は明治38年8月に建った。ハイカラな8角形の鉄骨銅板屋根のバンドステージで、当初は陸海軍が交互に演奏し多くのファンを作った。屋外大音楽堂は大正12年のオープン。鉄骨板張りの舞台と楽屋、観覧席があり6千人が収容できた。『東京公園文庫

・日比谷公園』によれば「公園西隅に接するもと貴族院から東の方にかけて一帯は中欧森林原野風庭園として設計されたもので、明治39年、戦役用徴発馬多数を一時ここに繋留したことがあったが、この時折角の樹木が馬のために樹皮を食いあらされ、その回復ができないまま荒廃の状態で放置されていた場所を整理する意味でできたのがこの大音楽堂であった」。有楽門を入った右側にバンガロー様式の木造建物が目につく。明治42年に竣工の公園事務所で現在は東京公園資料館になっている。

日比谷交差点に接した有楽門を入るすぐ左手、うっそうとした木立ちに囲まれた石垣周辺は江戸時代の日比谷門と大番所跡で、日比谷公園の建設にあたり石垣と濠の一部が保存された。日比谷公園には史跡やエピソードが多い。6つの門にすえられた巨石もそのひとつ。桜門は鍛冶橋門と数寄屋橋門礎石で、有楽門には「日比谷御門旧礎をもって建造」の文字が彫られている。このころ取り壊された旧門礎石をここに集めた。昭和47年ころまで見附跡に大カエデがあり、現在もその根本部分が残っている。日比谷門建設当時、樹齢3百50年という。松本楼前の首かけイチョウは江戸時代旧牧野藩邸前の道路敷にあった老イチョウだが、市区改正の結果、この老木も切り倒されることになり、見かねた本多静六博士が自らの首をかけて、現在地に移転した。

三井ビル、三信ビルの前身三井集会所が完成

市区改正は有楽町、丸の内を日本経済の中心地としてよみがえらせた。丸の内は『1丁ロンドン』とよばれ、有楽町の外濠埋め立て地には市街鉄道、東京電灯などの先端企業が入った。そしてこの一画の20年代から三井集会所があった。三井元方が神宮教院の境内であった5千3百坪の土地建物を第一一九銀行から入手したのが明治19年ころのことで、27年には三井集会所本館が落成した。旧幕時代の御殿向きを模し、大広間2、舞踏室、演芸室、庭園あり。国内珍奇の木石をあつめた。洋館とよばれた新館が完成するのは明治32年。三井不動産課の大西儀八が書いた『関東大震災と不動産』によれば「正門は大きな黒塗りの切妻屋根を持つ立派な門でした。北側は公園側と同じ柵塀、東側は両面ナマコ板張り、高さ18尺くらいの防火塀で南側はレンガ塀であった。（なかに木造入り母屋造り天然スレートぶき平屋建ての洋館があった）間取りは車寄せ、玄関、広間、和室、食堂2室、厨房、玉突き場などがあり、南側に幅6尺の廊下とその外に濡れ縁がつき、庭に下りる階段が東向きに1つ、南向きに2つついていた」。

明治31年、時の総理大臣・伊藤博文が黒めがねにステッキをつきながら来場。この年の4月に『二六新報』の三井攻撃がはじまるが、その書き出しもまた三井集会所であった。「麹町有楽町にここに掲げるがごとき厳めしき御門あり、これぞ世にも名高き三井集会所にして、三井一門がだれはばかることなく奢侈贅沢をきわめる。周囲の縁は古風なる高欄をもって打ちめぐらし、その間々に階段をもうけ、み簾を巻き上げたるさま、九重の雲もたなびくかと疑がるるばかり」。この三井攻撃は2か月後の中止の弁をもって終わる。「今日の富豪として三井のすみやかなる反省悔悟を多とし一転攻撃に用いし同じ筆をもってあえて三井の雅量を歎称するところなり」。

集会所は関東大震災で倒れ、直後に取り壊された。外濠の埋め立てでできた日本生命側の3百45坪を大正元年に買いたし、三井物産自動車係をへて4年、自動車輸入会社・ヤナセの創業の地になった。三井物産から独立した梁瀬長太郎が「輸入自動車の一手販売権を三井物産より譲り受け、同時に日比谷公園前の約2百70坪の店舗および工場設備を三井物産より拝借し、有楽町3丁目3番地で営業をはじめた。ここには現在三井銀行（現さくら銀行）の日比谷本店がある」。大正6年本店を呉服橋に移転して日比谷分工場とし、7年社業の発展とともに商会発祥の地を三井物産に返還した。2代目社長・梁瀬次郎の著書『わだち』にある。

マリオンから神田橋へ最初の市街電車がはしる

明治36年には外濠埋め立て地で現在の日本生命館の一部に東京市街鉄道本社が仲間入りした。明治15年、新橋から日本橋までレールのうえを馬が引っ張る馬車鉄道が誕生したが、36年にはその馬車鉄道のレールに東京電車鉄道が東京ではじめての路面電車を走らせ、一足遅れて数寄屋橋、神田橋間にこの市街鉄道が2番目の電車を開通させた。9月15日午前8時、現在マリオンになっている始発停車場を1番電車が発車。旧道を埋め立てられたばかりの日比谷通りに出て神田橋までの約2キロを走った。乗客が窓から顔を出さぬようにボードを2本横に通した車体の前後に神田橋行き、数寄屋橋行きの標識をかかげた。発車の合図はよびこ笛で開業初日は10本のダイヤすべてが満員になった。この年11月日比谷交差点から半象門までの路線が加わり、現交通会館の地の一部が電車々庫になった。

翌37年には東京電気鉄道が加わり、東京の路面電車は3社時代を迎える。市中に網の目のように広がる路線網は、新しい時代の市民の足として定着していく。そして39年、3社はこれまでの3銭では採算が取れないとして5銭への値上げを申請したので、反対する市民は総決起大会を日比谷公園で開き、走る電車を破壊して気勢をあげた。この事件を契機に3社は合併して東京鉄道に代わり、44年に民間鉄道官営化のため東京市に買収されて電気局となった。千54両、99キロ、6千4百58万円。当時の車両数と総営業距離数、そして買収価格である。当初はこの車庫へ数寄屋橋側の土手沿いに引込み線があったが、大正7年に本庁舎が完成すると外堀線から有楽橋をこえて引っ張るようになった。新庁舎は木造

2階建てで四角く囲まれた真ん中に中庭があった。外堀線の車庫には20台くらいの市電が体を休めた。

東京市街鉄道といえば夏目漱石の『坊ちゃん』が忘れられない。生1本で純真な坊ちゃんがいなか中学の教師となるが、教師間の権謀に憤慨して教頭を殴って帰京する。正義感と反骨精神がみなぎった主人公の再就職先がほかならぬ街鉄の車掌だった。明治40年、森鷗外の発表した短編小説『有楽門』にも3社時代の市電がある。「日比谷公園有楽門。お乗換はありませんか、三田よりきたれり電車はとまりたり、所は日比谷公園近く、時は大祭日の夕なればこの停留場にもあらゆる階級、あらゆる年令の男女20人あまり押しあいてたてり、午後より晴れたりし空、ようやく雲におおわれて傾きかかる冬の日は近き際に残れる空気の浅ねぎ色をもはや久しくは保つまじう思われる停車場に待てる群衆は先をあらそいて車にせまりぬ」。優れた人物描写の中に明治40年代の日比谷公園周辺の繁栄ぶりを伝えている。

同じ明治36年から関東大震災まで現在の宝塚劇場の地にあった東京電灯は東京電力の前身、関東配電のそのまた前身である。わが国に最初に電灯がともったのは明治11年だが、その後実用化の機運が高まって、15年この東京電灯社が生まれた。こうこうたる電灯の輝きが人々を魅了して契約件数も伸びた。しかし明治24年、竣工したばかりの帝国議事堂が焼失すると漏電説が流れ、せっかく取りつけた電灯を廃止するものも出た。その後関係者の地道な努力が報われる時がきた。折からの需要増に対処するため発電所を増強、同社がこの地に本拠を構えたのは22年間、大正12年の震災で焼失、職員百17名を殉職させた。跡地は材料置き場としてしばらく放置された。

10年間の難工事をへて有楽町駅が開業

有楽町駅は明治43年6月に開業した。山手線の誕生は明治18年赤羽→品川間に最初の電気機関車を走らせたことに始まる。その後小刻みに増設を繰り返し、この年、上野、池袋、新宿、品川、鳥森（現在の新橋）間の路線を有楽町まで延長した。

工事は明治33年から始まったが、高架工事の騒音や立ち退き反対などの阻止運動がおきたり、軟弱地盤という技術問題、日清、日露戦争にともなう予算不足などによる工事中断などがあって工期は10年にもおよんだ。この工事の模様を『有楽町今と昔』（交通会館編）にのちの有楽町駅長・橋川政人が書いている。「有楽町を中心とした鳥森、呉服橋間の工事を請け負ったのは鹿島組だった。当時は人夫さんは大勢集めることができて労力には苦労しなかったという。町とびは大部分が神田とびで長さんという有名な親分が芝にいて、レンガ積みはこの親分の指図によったというが、有楽町駅周辺の高架工事は思いのほか難工事であった。

それは東京から有楽町にかけて濠がのびてきており、高い石垣のうえに老松があり、これを切り倒して石垣を取り壊して掘り下げ、軟弱な地盤を固めなければならなかったからだ。19メートルの松丸太を15メートルの高い櫓からヨイトマケで打ち込み、あとはまた明日などと息をぬくとつぎの朝には打ち込んだはずの杭がすっかり抜けあがってしまう。ひどい泥湿地帯であったという」。ドイツ人技師ヘルマン・ルムシュテルの設計で、約10メートルのアーチ型ブリッチを連続させて高架にした。現在有楽町周辺にみられるガードは皇居側の約半分が当時のもので、工事のたびに百年前の松の丸太がほりだされたりしている。

開業当時の有楽町駅は日比谷口1か所しかなく駅前の広場は車夫やエンタクの溜まり場になった。駅前の有楽町ビル付近には木造の丸の内署や東京日日新聞社（現在の毎日新聞）があり、報知新聞社、読売新聞社などが誕生していた。ホームは幅9メートル、長さ90メートルのものが1本、電車もボギー車1、2両の編成で、駅員が9名。乗降客も1日千人にすぎなかった。「大正時代駅を利用した旅客の服装は男も女もまだ洋服を着用している人はきわめて少なくほとんど和服で袴をつけていたが、若い女性の間では紫の袴が大流行した」（有楽町今昔）。大正12年の関東大震災でホームと駅舎を類焼。この震災を機に駅は大きく変わる。中央部分のアーチを活用して駅を横断する道路が新設され、銀座口も開設された。銀座の玄関駅として着実に業容を広げた。

騎馬巡査が口ヒゲをはやした有楽町警視庁庁舎

有楽町がアミューズメントセンターとして脚光をあびるのは昭和はじめのことだが、明治末期には有楽座と帝国劇場が開場してその基盤を築いていた。江戸時代から引き続いた明治中期の劇場は歌舞伎界の興隆とともに独特の発展をとげていた。こうしたこれまでの劇場経営を改め近代劇場の端緒を開いたのがわが国最初の洋風劇場として知られたこの有楽座であった。

明治41年12月のオープンから大正12年の関東大震災までの15年間、現在の駅前朝日街にあった。ドイツ風木造洋館3階建てで舞台が11メートル。客席は全部椅子席で定員9百名あった。42年には小山内薫の自由劇場旗揚げ公演が開演された。自由劇場は歌舞伎にあきたらない新しい演劇ファンを集めて一大センセーションをおこした。坪内逍遙の文芸協会初公演は45年であった。島村抱月の『故郷』で、松井須磨子が一躍スターダムにのしあがるが、2人の不倫スクープが『明治フォーカス』を賑わしたりもした。このほか、井上正夫の新時代劇協会、小花菱の土曜劇場などがこの有楽座で旗揚げしたが、大正9年帝国劇

場の傘下になった。

明治後期から大正時代にかけての有楽町全盛期に警視庁が第1生命館の地に、消防本部が丸の内署などの地に、明治27年には都庁跡地に東京府庁、市庁舎が進出した。警視庁は明治7年当時の官庁街であった鍛冶橋の旧津山藩邸で開設された。現在は東京駅構内の線路敷になっている。明治後期になると警視庁庁舎は老朽化したうえ狭く改築の必要に迫られていた。また、たまたま、東京中央停車場（東京駅）建築計画で警視庁の敷地が包含されることとなったため日比谷濠近くに新庁舎を建築することとなった。工事は39年に着工し、44年3月に竣工した。

建築面積7百30坪、3階建て、総工費は48万円であった。朝日新聞社のまとめた『有楽町有情』に常磐ビルの宮沢三郎オーナーが警視庁の思い出を寄せている。「赤レンガでねェ。お掘に面して堂々とした建物だった。当時めずらしい自動車がしきりに出入りして騎馬巡査というのがいました。裏庭には馬小屋があって回りの道路は馬フンのにおいがしましたよ。警視総監の官舎がすぐ裏手でね。総監も毎日のように馬で日比谷公園あたりを散歩するんだ。そのころのポリスは大抵口ひげなんかはやしてね。おっかなかった。長いサーベルをガチャつかせて歩くんでメンコやってもガチャガチャがきたってばらばらと逃げ出したもんです。学校の帽子を上着の腹にかくしましてね」。有楽町庁舎時代に市電スト、明治天皇の逝去、米騒動、原首相暗殺事件などが起こった。東京名所として親しまれたが大正12年の関東大震災で焼失、馬場先門内の仮庁舎をへた昭和6年桜田門の現在地に移転した。

警視庁といえば丸の内警察署の前身・日比谷警察署の歴史も古い。明治42年3月、現在の隆和ビルあたりに20坪ほどの木造2階建てを麹町署日比谷分署とした。43年有楽町ビルの地の木造2階建て庁舎に移転、機構改革で日比谷署に昇格した。関東大震災では周囲一帯を焦土と化すが幸い署は類焼をまぬかれた。昭和5年警視庁跡地の現在地に地上4階地下1階の鉄筋コンクリート建て庁舎を建築して移った。現在のは昭和49年竣工の4代目。旧警視庁に隣接する新有楽町ビルには警視総監官舎があり、周辺に警務部長、保安部長、消防部長、官房特高課長、外事課長、日比谷署長官舎などが並んだ。官舎は明治末期から昭和はじめまで。途中震災で類焼した。

東京消防庁の前身・消防本部も明治44年3月から関東大震災で焼失した大正12年まであった。近代消防の夜明けは明治2年に江戸時代の町火消しが東京府に配属されたことにはじまる。警視庁が設置されるとその一部門となり、有楽町時代に深川大火、神田錦町大火などに出動した。関東大震災では都内各地の消火活動にあたったが部員の帰るべく庁舎も焼失していた。

知事までの人事が日本倶楽部で決まった

有楽町駅皇居側・電気ビルの明治後期は万里小路家から変わった清棲伯爵家もほどなく有楽町を離れ、跡地は日本倶楽部などになった。日本倶楽部は明治30年近衛篤麿、鳩山和夫らの発議で誕生した政財界の集まりで、翌31年三信ビル前の日比谷通りにあった旧ブラジル公使館を借りて仮会館としたが、32年失火焼失。33年には清棲伯爵邸跡地に移して21年間をすごし、大正10年現在国際ビルの地の有楽町駅側角に新会館を完成させた。「装飾やエレベータなども取りつけて鉄筋4階建て8百20坪、ほかに塔屋をもった見違えるように立派な会館になった。構成メンバーは華族ばかりでなく、政官界人、それに軍人もいた。軍人はべた金の将官でなければ問題にならず、官界でも勅任官以上でなければダメ。大臣はみな会員といった具合でブライドの高いものだった」（丸の内百年）。当時は政変のたびにこの倶楽部が溜まり場になり、知事くらいまでの人事がここで決まったともいう。日本倶楽部は5たび居を移して現在国際ビルに本拠を構えている。

一画に一色印刷、塩瀬総本舗などの老舗もあった。一色活版は明治15年新富町の創業で、アメリカの印刷技術を学んだ一色忠雄が明治42年に有楽町に進出した。震災焼失後の昭和3年鉄筋コンクリート3階建て新社屋としたが、10年代に日本橋三代町に移った。シンガーミシン裁縫学院はわが国最初のミシン専門学校。明治37年神田で開校し、同じ年日比谷シャンテ裏ガード周辺、39年に電気ビル北館の一画に移った。ミシンは明治中ごろ伝わったが当初はすべて輸入。洋風化がすすむ社会風潮にそって生徒も増え、最盛期は2百80人の生徒が4科に学んだ。

睦屋は有楽町駅が開業した明治43年ころから駅前にあった。当初は人力車屋で「何か事件があると睦屋を電話で呼ぶとおやじが先棒で兄弟で後押しして上野まで15分くらいで行った」。当時有楽町駅前に陣取っていた東京日日新聞や報知新聞の記者たちが使った。人力車はやがて衰退して廃業、大正中期には引っ越し運送業、そして睦屋ツーリストになった。塩瀬総本店は日本橋明石町・塩瀬の前身で、明治35年から昭和11年まで有楽町に店舗を構えた。東山義政から五七の桐の商標を許されたという老舗で江戸時代は数寄屋橋の銀座側にあり、大火で有楽町に移った。明治中期はこのあたりはさびしく塩瀬の工場がポツンと立ったという。

旧中山大納言邸跡地の東京側・日比谷パークビルの一画は後に有楽町を代表した山かん横丁に変わるが、明治後期のころは弁護士や貿易商、中小商工業社の雑居する町で、山かん横丁の下地がすでに形成されつつあった。『東京辞彙』では「田中幸吉＝輸出業および貸しビル経営。有楽町に3階建て洋館ビル数棟を新築」という記載もある。

東日と報知が進出して新聞街が幕をひらく

戦前から戦後期にかけて有楽町は朝日、毎日、読売、サンケイ新聞本社を擁したわが国最大の新聞街を形成するが、その草分けは明治42年、有楽町ビルの地に本社を構えた東京日日新聞（現在の毎日新聞）と43年そごうの地に進出した報知新聞であった。東京日日新聞は明治5年東京初の日刊新聞として創刊。一時、政府の御用新聞ともいわれたが38年三菱が買収して加藤高明が社長を引き継いだ。木造モルタルの2階建てで4隅に塔屋をめぐらせた本館と工場の2棟を建築。加藤の社運をかけた有楽町進出も折からの不景気風にあおられてまたたくまに経営は悪化した。引継ぎ時に4万5千あった読者も半減し、毎月2、3千円づつの欠損をうむという最悪の事態にさえなった。

こうした苦境に手を差しのべたのが東京進出を計画していた大坂毎日新聞であった。大毎は明治15年の創刊で、大坂朝日新聞とはげしいライバル争いを演じていた。この東京進出には一足早く東京進出を成功させた朝日に追いつけ、という大毎のメンツもかかっていた。本山彦一社長はこれより早い36年に電報新聞を買収して有楽町の電気ビルの地に本社を構えた毎日電報が不人気であっただけに渡りに船の朗報だった。明治44年合併吸収。当時の発行部数は東日が2万4千、毎日電報が3万5千であわせて5万9千部になった。東日の古いノレンに大毎の新風を盛り込んだ紙面が東京市民にも認められて発行部数は日を追って増えた。大正5年10月東日本館が漏電のため全焼。幸い印刷工場が無事だったのでかろうじて新聞発行が続けられた。ただちに新社屋建設に着手。翌6年3月、鉄筋コンクリート3層の1号館を落成した。しかし間もなく手狭となって10年隣接して6階建て（地下とも）の3号館を増設。11年2号館、14年旧工場を一新した4号館が誕生した。社勢の興隆は印刷能力をますます不足させた。昭和3年には元警視庁官舎跡の払下げを受けて鉄筋コンクリート4階建ての新工場＝5号館も竣工。のちに新館（東日館）と別館を加えて有楽町の毎日新聞社屋を構成した。

報知新聞の創刊は明治5年で、一時福沢輸吉の支援で改進党色を打ち出すが、その後紙面を大衆化して東京最大紙になった。明治43年、現在そごう南半分の敷地に木造3階建て洋館を建てて銀座から移った。大正時代は道路ひとつ隔てた東日と東京の新聞界を2分、大正11年創刊50周年事業の一環として鉄筋コンクリート5階建て延べ5千平方メートルの新社屋を建てた。当時の発行部数36万部。関東大震災にも燃えず昭和30年の取壊しまで32年間風雪に耐えた。

⑨ 関東大震災に揺れる有楽町

大正デモクラシーに市民生活も繁栄

明治45年12月明治天皇が逝去され、大正時代を迎えた。この15年間は資本主義の繁栄期であり、国際的地位が高まって世界列強の仲間入りを果たした時でもあった。市民生活も繁栄し、大正デモクラシーが一世を風靡していた。

改元早々に憲政擁護の民衆運動が有楽町一帯を緊張の渦に巻き込んだ。いわゆる大正政変であった。明治23年に第1回帝国議会が開催されて民主化への道が開かれたが、議会は名ばかりで薩長元老による藩閥政治がくりかえされていた。憲政正常化をめざす政友会、国民党とこれを支持する民衆が立ち上がった。大正元年、陸軍の横車で西園寺内閣が倒れて桂内閣が登場すると不満が一気に爆発した。翌2年2月10日、日比谷帝国議事堂、日比谷公園周辺を反対する数万の民衆が取り囲んだ。警官と小競り合いをくりかえしながら交番を焼打ちし、政府の御用新聞といわれた『二六新報』と『国民新聞』を襲った。与党・立憲同志会の事務所があった帝国ホテルでは「官僚党をやっつけろ」と叫んで石を投げつけ玄関部分を破壊した。1隊は日比谷交差点周辺で平野屋の窓ガラスを破り、たまたま通過した市電2両を襲った。午後9時数寄屋橋上には抜刀した警官80人が並んで阻止線を形成したので突破できず、退いて警視庁舎（現在の第1生命付近）に押しかけたものの消防車の放水にあって再び退却した。騒動は翌日大阪に波及、桂内閣が倒れた。

大正時代の有楽町は西に皇居、北に丸の内、東に銀座を控えた東京名勝地で、「東京の中枢は丸の内。日比谷公園、両議院、いきな構えの帝劇に、厳めし館は警視庁、諸官庁ズラリ馬場先門、海上ビルディング、東京駅。ポッポとでる汽車どこへ行く。ラメチャンたらギッチョンチョンでバイのバイのバイ。パリコとバナナでフライフライフライ」大正中期にはやった『東京名所の歌』が有楽町の繁栄ぶりを伝えている。作者の添田さつきは当時16才。山かん横丁にあった売文社（後出）で受付兼給仕の仕事をしていた。

大正時代の数寄屋橋周辺は土肌がむきだしの原っぱで電車通りに面してトタンぶきのタクシー会社があるだけのふきっさらしの広場であった。有楽町児童は日比谷公園裏の日比谷小学校が通学区になっていたが、外濠にかかった木造の数寄屋橋を渡った銀座側の泰明小学校への越境入学者が多かった。「後に毎日新聞社（現在の有楽町ビル、新有楽町ビル

）になったあたりには、警視庁の官舎などが建っていて、そこに住んでいても泰明小学校に通っていることもたちがいた。そういう級友の家へ遊びにいったりすると、帰ってから遠っぱしりをしたといって叱られた。丸の内官舎の級友の所へ行くとその近所の同じ官舎住まいの日比谷小学校のこどもたちが出てきて、いろいろと意地悪をした」（池田弥三郎＝銀座・有楽町あれこれ）。「数寄屋橋公園ができたのは大正3年5月のことだというから私の生まれる半年前にできたわけだがこの小公園は私に自転車の練習をさせる場所を与えてくれたり、数寄屋橋の向こう側に住んでいる日比谷小学校の生徒との縄張り争いのけんかの場所を与えてくれたりした。日比谷小学校のこどもたちが越境して数寄屋橋公園で遊んでいるのをみつけると私たちはまず遠くから石をぶつけ、ひるむところを衆をたのんで追い回し追っ払った。向こうが少人数だと彼らは「泰明学校ボロ学校。あがってみてもボロ学校」とはやしながら橋を渡って逃げていった」（銀座12章）。

マリオンにわが国最初のタクシー会社

明治45年8月現在マリオンの地にわが国最初のタクシー会社が開業した。社名をタクシー自動車といいT型フォード6台で営業を開始した。初期のタクシーは幌馬車に毛がはえたような恰好をしていた。胴体からはみでてバンパーとステップが取りつけられ、エンジンは前から鉄棒を差し込んでいきおいよく回転させて起動した。料金は1マイル60銭で以後0・5マイルごとに10銭づつが加算された。この年の自動車数が全国で5百21台、タクシー運転手が青年の憧れの職業となった。

タクシー会社の旧日劇側が事務所と控室で旧朝日新聞側は背の低い塀をめぐらせた車庫になっていた。社長は政友会の長晴登代議士。しかし営業不振だったのか大震災直前に廃業した。跡地は大正12年春、車庫側に万歳生命がたち、隣接した土手敷地に浄瑠璃座が建設され、日劇側は空き地となった。万歳生命は日華生命と合併して日華万歳生命と変わる現在の第百生命の前身。浄瑠璃座とともに同じ年9月の関東大震災で焼失した。

タクシー自動車の裏側、現在の有楽町駅前中央通り商店会、朝日街の一画は有楽座を中心にキリスト教会、銭湯、長屋や民家がいりくんだ小路になっていた。慶応大学の池田弥三郎教授も少年時代から新劇の殿堂・有楽座にかよった。「震災までは外堀に橋が少なくて数寄屋橋から北へは鍛冶橋までなかった。だから有楽座へは数寄屋橋を渡って今の朝日新聞社（現在の有楽町マリオン）となる前の土地を回り道して行った。大正のはじめ（7年の市電気局本庁舎建設まで）は電車の引込線が堀にそって通っていた」。有楽座は小山内薫が自由劇場公演を成功させてから新劇運動の拠点になった。「当時の小山内氏は文壇にも劇壇にも抜きんでた存在で、若い文士たちを数多く集めた。少し飛躍した言い方であるがもし銀座とつい目と鼻の先に有楽座ができなかったら、大正期における香り高き銀座もまた生まれなかったかも知れないと思う」（銀座12章）。

『人生劇場』の舞台になった山かん横丁に尾崎士郎がかよった

明治末期から大正時代にかけて、現在の日比谷パークビル周辺を山かん横丁といった。体制の不満と不景気を嘆きながらひと山あてようと人たちが集まったことからこの名がついた。3階建ての長屋が軒をならべたこの町に早稲田大学を除籍された青成瓢吉が出入りした。尾崎士郎の半自叙伝『人生劇場』の舞台でもあった。

「山かん横丁という呼び名には嘲罵をふくんだ感情の底にもねっとりとくる親しさがにじんでいるではないか。それは山かんということばが身についた悪らつさを感じさせるよりも、むしろ底意のないホラ吹きのたよりない希望に満ちあふれた姿を象徴しているためであるからだともいえる。そんな名前はいま東京の町を探したら無数にころがっているであろうが、しかしそのころの丸の内の一画にどっしりとあぐらをかいた山かん横丁の存在はたしかに天下の偉観であった。大正12年の震災でこのはきだめのような路地は一たまりもなく押しつぶされてしまったが、間もなく地区の改正が行なわれて山かんの梁山伯を偲ばしめたこの愛すべき路地は復興の機運にも恵まれることなく根こそぎ取り払われたのである。」『人生劇場・愛欲編』書き出しにある。

『人生劇場』では主人公の青成瓢吉（実は尾崎士郎）がかよった山かん横丁を通じて、震災前の有楽町をいきいきと描き出している。尾崎が文壇登場のチャンスを掴むのもこのころ。山かん横丁にあった売文社の解体後、そこで知り合った高畠素之邸で食客生活を送っていたとき、『時事新報』の懸賞小説で2位当選をはたしたことがきっかけになる。そして1位の女流作家・宇野千代とのロマンスがジャーナリズムをにぎわした。

明治43年、赤旗事件での刑期を終えて出獄した堺利彦は四谷によろず代筆業・売文社を開業し、明治の末期この山かん横丁に引っ越してきた。ここは大杉栄、荒畑寒村、山川均ら社会主義運動の絶好の溜まり場になったが、大正9年、激しい内部あつれきをへて解散した。売文社がなければ社会主義の火種は弾圧の嵐で消えたという人もある。同じ山かん横丁に服部浜次洋裁店があった。服部は腕がよく日露戦争で軍服の注文が殺到して、その資金で有楽町に出てきた。「その3階で大杉栄と私がサンジカリズムの研究会を開きました。明治末のころです。月2回夕方から夜にかけてです。出席者は多いときで20人、少ないときは4、5人。（警察官がきて）忌諱に触れることがあればすぐ中止、解散という。大杉がタモトをわかってからは山川均の労働組合研究会を月2度ほど開きました。出席する顔ぶれは変わりませんでしたね」（有楽町有情）。

山かん横丁には、現在も有楽町に店舗を構える岩崎食堂があった。「岩崎の経営者は社会主義者の岩崎善右衛門といい、もとは新橋の芸者街で人力車夫をしていた。車夫のころ刑事が尾行していて、岩崎が芸者をのせて走り出すとあとから別の車で追跡するというシーンもあったという。まことに絢爛と混乱していた時代といえよう。岩崎は義侠心の強い人で後に千葉の中山で養老院を開設するなど社会事業につくした」（交通会館編＝有楽町）。関東大震災後、有楽町駅近くのガード下に移転。現在の日の基の一画で『働らかざるもの食うべからず』とみずからの哲学を大書きした。24時間営業で、おでん、酒、食事となんでもあった。

大正11年に山かん横丁で創業した山水楼の宮田武義会長は震災前のこの街の貴重な生き証人でもある。「昔の警視庁や消防本部、警視総監官舎。ええ、みんな覚えていますよ。山かん横丁はその昔ひと旗組の山かん連中がすくったという場所で、いま日比谷パークビルになっています。3階建ての木造長屋がならんでた小さい街でね。弁護士があったり、いろんな会社がならんでいた。山水楼はこの一画の3階建て長屋のはじっこの60坪を借り受けて開業しました。調理場の路地裏からは岩波書店の印刷所の機械の音が騒々しく聞こえました」。岩波書店『社史』によれば山かん横丁の工場は野村印刷といった。

震災で全滅した山かん横丁も20軒ほどのバラックが立った。昭和2年ころの模様を『新版大東京案内』が紹介している。「日比谷公園前で電車をおりてバラック建ての東華生命（現パークビル公園際）の角にそうて帝劇（現国際ビル）の方へ向かうと横へ切れる一線、それは路地というより、堂々たる街通りだ。右手に張り巡らされた板壁にはペンキの色も濃く謙元組所有地と書かれている。窓ガラスのササラになったねずみ色の洋館（電気倶楽部ビル＝現電気ビル）が3分方覗かれる。震災以前まではいわゆる山かんの山かん横丁たる所以をもっとも雄弁に立証していた総本山の日本倶楽部がきわめて奇怪な触手を広げていた場所である。そればかりか山かん横丁の存在をより以上天下に宣明した社会主義おでん屋・岩崎善右衛門の本拠であった。昨今は岩崎おでんの跡に日本料理25銭、定食20銭という張り紙を出した民衆食堂ができて、昔日の山かん横丁らしい気分はわずかにその食堂にみられるにすぎなくなった。

大正生命の貧弱なメッキ式洋館、帝国ホテルの感じだけをまねたような簡易ライト式とでもいいたい謙元組管理事務所、次が大看板を屋根にあげた折笠医院、隣がたばこ屋の西川商店、カフェ喜楽、そしてこの家並みの切れ端が電気土木の金文字を光らす吉田商店、ひと昔モダンで鳴らしたカフェオデッサも今は消失し、外語協会学校も今日では跡形もなくなった。はかないものは学校の移転先を知らせる立看板の色あせた姿だ。有楽町寄りの一角には黄と褐色のだんだらぞめした大建築・日本電気倶楽部が奇怪なる印象を投影しつつそびえている。変電所のモーターの唸りにホッと目をあげると突き当たりが省線（現JR）有楽町駅。頭の上を省電がスパークしながら走りぬける」。

「山かん横丁にもバラックが建ち始めましたが、震災前のような華やかさはありませんでした。家主は三田にいた画家の家でした。その家主に山かん横丁におった人たちが追い立てを食いましてね。一緒になっていろいろ交渉をしましたけれど中々ラチがあかない。とにかくなにがしかのお金をもらって解散するわけです」（宮田会長）。昭和4年山かん横丁が撤去されてサラ地に変わった。

交差点近くにある大正生命は創業以来有楽町と浅からぬ因縁があった。大正2年、総合商社鈴木商店の肝入りで創業。木造洋館2階建ての本社ビルを構えた。『保険年鑑』によれば、鈴木商店の営業基盤がバックボーンとなり、事業すべりだしは順調であったが、昭和6年鈴木商店が経営破綻をきたし、創設者が辞任したことで経営の実権は金光家が掌握した。日本教育生命が姉妹会社で、社長柳原、専務金光という顔ぶれで両者の協力関係が続いた。柳沢義光は大正天皇の生母柳原2位局の血縁で、金光庸夫は後の東京商業会議所会頭、衆議院議員。大正12年の関東大震災で焼失、直後にマリオン旧日劇側に仮本社を建設、ついで朝日街に社屋を移して昭和11年、創業の地に復帰した。

大正時代、日比谷交差点に接したパークビルの濠端に、木造4階建ての日比谷ビルジングがあった。関東大震災は幸い焼失をまぬかれたが大きく傾き、直後に取り壊した。震災前の『法人名簿』によれば武蔵電気鉄道、中央興信所、毎日通信出版社などが事務所を構えた。

松旭斉天勝が経営した平野屋と水明館

有楽町の日比谷公園側の大正時代は日比谷大神宮の門前町として発展した。いまの日比谷シャンテの丸くなったあたり、旧日比谷劇場の所に社殿があった。現在とは微妙に違うがほぼ宝塚劇場と東宝会館の間あたりから表参道を行くと拝殿に出、通り抜けて晴海通りにでた。大正のはじめころまでは「境内桜樹多く、花時美観を呈す」と花の名所に数えられたが、中ごろに一帯を整理して料亭などを作った。そのひとつに大松閣があった。大正8年東宝会館の地に松本楼の小坂武雄が建てた大神宮の結婚式場で、現在も飯田橋に移った東京大神宮（日比谷大神宮の後身）に付属している。

日比谷朝日生命館、東宝ツインタワービルの一画は千5百坪ばかりの3角街になっていて、料亭や旅館、写真館などが並んでいた。この3角街の中心は平野屋で、明治36年ころ開業した。「日比谷の交差点を内幸町の方向へ踏み切った左手をみると平野屋と書いた提灯が2階の軒先に吊るされて風にゆられるさまが客をこまねいているようにみえた。風雅

な純日本式料理が特色で自然に盛大を極めたものであった。家をとりもつ赤前垂れのすてきはほとんど京都からの輸入品で古代的情緒をたっぷり含んだ京都なまりで、お入りやすいなと小首をちょっと傾けられては近代的な非凡も天才も懐古的気分でついのれんをくぐったものである」（縦横よりみたる東京）。

大正10年にこの平野屋が松旭斉天勝の経営になった。天勝は『魔術の女王』とうたわれた女流奇術師。名人天一の門に入り、15才の時の海外興行で一躍スターダムにのし上がった。美しい肢体をおしげもなく披露して有楽座や浅草帝国館のファンをわかせた。平野屋は大正12年の関東大震災で焼失するが天勝と有楽町のかかわりは続く。14年日比谷大神宮本殿隣接地（現日比谷シャンテ前広場）に旅館・水明館を開き、ここに天勝興行事務所を併設して実弟の吉沢広吉が責任者になった。「三信ビル前のこじんまりした日本旅館だった。天勝も時々きていましたね」戦前からの住民の1人が覚えていた。天勝は昭和10年引退して20年に亡くなり、水明館は強制疎開で取り払われた。

大正8年に戦前の有楽町を代表した陶々亭（後出）と電気鍋の幸楽が生まれた。幸楽は木造3階建ての料亭で、洋風化の代表格となった牛鍋を食べさせた。震災で被災、しばらく仮店舗で営業したが、昭和4年ころ赤坂に移転して、2・26事件の舞台ともなった。同じころ料亭の長陽軒が交差点と皇居に正対してキリンビールの大看板を掲げた。日比谷通りに面して洋館3階建ての大武武夫写真館があった。山形県から当時ようやく浸透しつつあった写真術を志して上京、41年に開業した。

愛国生命は明治30年創業で、大正元年日生会館の地に本社を新築移転した。屋根はドーム型になっていてその前面に日輪がはめこまれていた。それが太陽にキラキラ反射してまぶしいほどだった。『日本生命90年史』によれば鈴木万次郎が衆議院議員であったころ菓子税法の廃止に尽力したことで、全国の菓子業者がその功労に報いようと生命保険会社を設立した。昭和7年東華生命、翌8年寿生命を吸収、19年日本生命と合併した。この間、関東大震災、第2次世界大戦を経験したが被害はなかった。

ライトの2代帝国ホテル竣工式は関東大震災日だった

有名な帝国ホテルライト館（新館）は大正12年9月1日、関東大震災の日に竣工式を迎えた。設計者ライトの完璧主義が工事を大幅に遅らせ、たまたまこの日にあたっただけのことであったが、この不幸な門出が逆にライト館の信頼を高め、帝国ホテルの今日の繁栄を築く基盤にさえなった。震災前最後で最大のビル建設工事といわれるこの工事にはスタート開始前から多くの難関がともなっていた。建設地には内務大臣官舎があり、まず、霞が関に新官邸を作って寄付し、官邸を撤去して新館を建築するという順序が必要だった。ライトの完璧主義はよく知られていたが、帝国ホテル工事ではそれが一段と徹底された。大谷石をみに栃木県の石きり場へ出掛け、だんつうを求めて中国へ飛んだ。予算も超過また超過、責任を追求されたライトは工事なかばに辞任して、帰国した。しかし、震災の日に竣工したホテルは周囲の街やビルが灰燼と化すなか厳然と建ち残った。絶対安全な耐火建築ホテルを身をもって実証したのであった。

総建坪9千5百坪、鉄筋コンクリート5階、独特の内外装がライト建築の傑作としての評価を集めていく。玄関前に大きな池があり、大谷石とレンガを組み合わせた装飾的な建物が横にひろがってみえた。「そこに出入りする人たちは外国のそれも著名な方とか裕福な方、高い地位にある方たちです。日本のお客さんももちろんそうなのですからこれは貴族の館ということになるのでしょうか。そして、ホテルの中は建物以上に貴族的な雰囲気があったものでした。1階のダイニングルームで食事を召し上がるために奥様方はイブニングドレスに着替え、タキシード姿の主人とか、またお嬢さまですとお父さまと一緒に長い廊下を歩いていかれるのです。その時キュッキュツと絹ずれの音がするんです。それがなんとも優雅な感じでいまだに私の耳に残っております」（竹谷年子＝帝国ホテルの昭和史）。

ライト館は大正、昭和期と日本の迎賓館としての役割をはたしていく。政治、経済などの外国人賓客に混じって不滅の米大リーガーベーブ・ルース、世界の喜劇役者チャップリン、3重苦の偉人ヘレン・ケラーなども宿泊された。戦後の昭和42年、老朽化したライト館の取壊しがはじまると名建築を惜しんだ人々の間で存続を巡って大論争がおき、その一部が犬山市の明治村に保存された。

木造住宅はすべて倒壊し、3か所の火はみるみる有楽町を焼きつくす

明治後期から大正期にかけての有楽町は政治と経済の中心地、演劇の町、日比谷大神宮の門前町、そして大正ロマンを彩った銀座の玄関口として繁栄をつづけたが、大正12年9月1日、突如として関東地方を襲った大地震が有楽町の町を廃墟とかえた。

この日午前11時58分、関東一円がマグニチュード7・9の激震にゆれた。この大地震は家屋の倒壊に加えて、同時に多発した火災が未曾有の大惨事を引き起こしていく。有楽町では最初の激震で木造住宅のほとんどを全壊した。朝日生命館の一画にあった料亭、旅館街や日比谷パークビルにあった木造の日比谷ビル、山かん横丁の木造長屋、電気ビル周辺の商店、工場などが倒れ、また大きく傾いた。火は有楽町の3か所で発生した。ひとつは電気ビル南館の所にあった田中製版所で、折からの南風にあおられ、たちまちのうちに木造住宅のシンガーミシン会社に燃え移り、ここで火は2方向に分かれた。1方は警視庁の

官舎（現新旧有楽町ビル皇居側）を焼きつくし、馬房演舞場と警視庁東面新館（現第1生命側）をあおりながら警視総監邸（現新有楽町ビル皇居側一部）を焼き、東京府庁、市役所（現都庁跡）へ燃え移る寸前に市の消防隊が消し止めた。

他方の火流は警視庁の遺失物倉庫裏から山かん横丁の建物密集地域へ拡大し、たまたま朝日生命館方面から晴海通りを越して拡大した火災と合流し、ますます火勢を増した。午後2時30分ころ、消防庁舎（現丸の内署、糖業会館）をはるかに高く飛び越えて警視庁（現第1生命ほか）3階の総監官房室のひさしに燃え移り、帝国劇場（現国際ビル）と周囲の建物を焼いた。

午後3時ころ、有楽町の東京電灯（現宝塚会館）付近から発生した火災は南の風11メートルの強風にあおられ、数寄屋橋方面へ燃え広がった。たまたま橋上に運び出された荷物があり、これが延焼の媒体となって午後5時30分ころ銀座側に燃え広がり、八官町からの火災と合流した。火は山手線ガードから有楽座と電気局、帝国ホテル付近に燃え移って午後10時30分ころ新橋方面へ延焼した。そして3つめの火は日比谷公園の松本楼を焼いた。（丸の内消防署＝50年のあゆみほか）

『東京大神宮沿革史』には「家屋倒壊、大火災、阿鼻叫喚、酸鼻をきわめた巷の中に奉斉会もこの災厄からのがれることができなかった。みるみる火は本院を包んで一握りの灰と変じせしめた。この最中に役員はご神霊を奉じて宮内省にご動座、ついで日枝神社に奉安することができた」。藤岡好春の『震災体験記』では「（あわてて本院にかけつけると）古い建物は倒壊していたものの本殿、拝殿、事務所などはみな無事だった。何分ゆれかえしがひどく、しかも烈風中に火災が迫ってくるので難をさけるのが精いっぱいである。事務所の大きな建物には燃えあがる大松閣の火災が覆いかぶさるように降りそそいでおり、正殿、拝殿ともこれが見納めかとながめるほかなかった」。

山水楼会長の宮田武義も震災体験者のひとり。「ちょうど昼近くでした。中野の自宅から省線で出てきて、当時は万世橋という駅がありましたが、ここへきた時でした。電車はガタッとして止まり、窓の外をみると家の屋根がガタガタと揺れている。それが崩れて時々バーッと土埃がたつ。これは大変だと思っていると電車もそれきり動かない。あきらめて歩いて店まで行ったが、もう火がきて焼けているのですよ。従業員も誰もいない。観念して日比谷公園に逃げて行くんですけど、1歩あるくごとにゆらりゆらりと余震が次々にくる。やっとのことで公園に入ったらいま噴水のあるあたりに料理人が4人避難している。3時か4時くらいまでそこで様子をみていたけれども火は方々燃えている。こうしとったらいかん。家へ帰ろう言って線路に沿って歩いて帰りました。生きた心地がしませんでしたね」。

のちにホテル王とうたわれた犬丸撤三は帝国ホテル別館のオープン祝宴の来賓を待って玄関先にいた。「なにか異様な鈍い地鳴りのごとき物音を耳にしたと思ったとたん、足元から突き上げてくる激動を全身に感じた。はげしい地震である。大地が大揺れに揺れ、建物は突き上げられ、つきさげられ前後左右に揺れる。裏玄関を出ると東京電灯本社が火災をおこしたらしく窓からもうもうたる黒煙を噴出している。東電の従業員たちはすでに社屋をみすてて全員退避したらしい。火の粉は帝国ホテルの屋上にも無数に落下する。破損したガラス窓からは容赦なく黒煙が入る。私の脳裏にはいまここで新館を焼失したならばこれを再建することは不可能だろう。励声一番、従業員を叱咤した。「水がなければ体で火の粉を防げ。どんなことがあってもこの建物を命がけで守るんだ」。著書『ホテルとともに70年』に書いた。

震災復興の先鞭は日比谷公園からはじまった

有楽町で関東大震災をまぬかれた建物はそごうの地にあった報知新聞と有楽町ビルの日日新聞、新有楽町ビルの日比谷署、三井ビルの三井集会所と日本生命ビルの愛国生命、傾いたままの日比谷ビルなど数棟にすぎなかった。いずれも前後左右を焼かれた奇跡的な生存だった。そのひとつ三井集会所は「木造入り母屋造り平屋建ての純日本風で5百坪以上の堂々たる建物であったが、大震災の際、南側の柱が数本内法鴨居上で折れたため大きな屋根は瓦そのまま軒先を地上についていた」（大西儀八＝関東大震災と三井不動産）。

関東大震災における東京府下の罹災者は百32万人。全焼、全壊家屋31万戸、死者不明者9万7千人におよんだ。有楽町周辺の被災者は日比谷公園と皇居前広場などに集まった。当時の内務省調査によれば日比谷公園5千6百人、東京市役所付近2千人、宮城前1万3千人、東京駅付近5千人となっている。有楽町マリオン前の隆和ビル1階にたばこやを開いている小川商店は明治20年代からの有楽町住民だが震災も店舗兼住居をかまえたこの地で罹災した。「大正12年の大震災の時は6年生でした。なぜか家にいたなぁ。2学期の始業式が終わって帰ってきてたのかしら。宮城前に逃げて2重橋のたもとで1夜を明かしました」（小川キミ＝有楽町有情）。関西の喜劇役者の曽我廼家五郎も人波に揉まれて、丸の内から宮城に避難し、帝劇女優1期生の森律子もふらつく足で楠公の銅像の下に辿りついた。ほとんどが着のみ着のまま、芝生の上で野宿した。

震災直後の有楽町を『関東大震災全史』が書いている。「ぼうばくとして満目荒涼たる一面の荒野。石のかけらとレンガの壊れとアメのようになった鉄とうず高い灰と死体（がつづいている。日比谷交差点は）無数の自動車が疾駆して、その間をシャツ1枚、やぶれユカタ1枚の通行人が左右に逃げまどう。いままでならばしゃれた流行の装いをこらした

紳士淑女が遊楽のちまたへといそぐこの日比谷街頭には焼け石の茶褐色の灰の上におかゆと冷水の接待があってたくさんの人だかりだった」。官民一体となった救援活動がはじまった。警視庁、東京府、東京市、鉄道省、三菱地所などによる救護隊、飲料水、食料品の提供などであった。三菱地所の『丸の内今と昔』によれば「2日目のお昼ごろには身をもってのがれた人たちがいよいよ空腹を感じてきた。そこで三菱本社から数10俵の米を貰い受けただちに炊き出しにかかる一方、乳児や老病者に対してコンデンスミルク、ビスケットなどを提供した」。東京府と市も貯蔵の米を放出して救済活動にあたったがもとより罹災者の口を満足させるものではなかった。

帝都復興の先鞭を切ったのが日比谷公園だった。「すいとんや、おでんや、牛めしやができ、これが繁盛すると空き地という空き地にバラックが立ち並んで荒物、雑貨、酒、醤油、文房具……。見物にゾロゾロ出かけるものが右往左往してその混雑はいうばかりもない。人々は足を棒にして復興へ復興へといそいだ」（関東大震災全史）。

日比谷山水楼の再開も早かった。「家主を督促して2階建てのバラックを建てにかかりました。バラックができると房師たちは焼け跡から煉瓦を集めてそれを積み重ね、それに泥をぬりこめてカマドを作りました。鍋釜や調理道具は大阪へ行って買い求め、汽車は馬入川の鉄橋が落ちているので自転車を踏んで厚木から回りました。バタバタと急いで建てた板屋で電気配線もなく昼間だけの営業です。大震災のあとで市民もぜいたくな料理を食べるという状況でもないので、麺類や炒飯中心のメニューでしたが人々はただただお腹をすかしていたので、戦争のような忙しさでした。白飯が5銭、そばが2、30銭くらいで1日百円程度の売上げがありました」。

有楽町児童が通った日比谷小学校は無事だったが、多くの子弟を越境入学させていた泰明小学校は全焼した。9月には焦土の中をわずかばかりならしてたてた天幕の中で授業がはじまった。「多くの住民が離散し、結局クラスメートの半分くらいはそれきり銀座の学校へ戻ってこなかった」『泰明百年ものがたり』が書いている。15年5月、外堀沿い市電線路敷を買収。旧校舎敷地と交換して得た現在地千5百坪に新校舎の建設を決める。鉄筋コンクリート3階の現校舎が完成するのは昭和4年6月のことであった。

有楽町駅も災禍を免れることはできなかった。「さすが丹念にレンガを積みあげた駅の高架部分はビクともしなかったが、ホーム上は延焼で火の海と化して大損害を受けた。当時はホームも鉄骨支え部分も総アスファルト敷であった。これが猛火で溶け黒飴のようにたれさがり、鉄のアングルが各所で露出して、アバラ骨のように無残な姿をさらした。このためホームは使用できなくなり、都庁寄りに仮ホームを造り急場をしのいだが使ってみると利用者が多くなかなか好評で、間もなく復旧した日比谷口とともに乗降客が増加する一方となった」（橘川政人＝有楽町駅今昔）。震災を機に有楽町駅は大きく変わる。急拵えの改札口は京橋口、都庁口となり、新たに銀座口を完成させる。駅の中央高架下にはアーチ2画をそのまま通り抜ける横断道路が完成。昭和18年中央口ができて現在の駅舎が整うのである。

帝国ホテル、三菱赤レンガ街に仮事務所申込みが殺到

震災で企業の多くは社屋を失い、仮寓の住居を求めていた。ライト館の完成で日本1の防災ホテルとしての折り紙がついた帝国ホテルには「社屋焼失の難にあり取材活動も意にまかせぬ東京朝日新聞、電報通信その他の新聞通信各社にロビーの一隅や客室を提供することにした。次に英、仏、米、伊などの各国駐日大使館にも同様に客室を事務所として提供し、さらに王子製紙、東京電灯、大倉組、日本土木、大倉商事などの罹災各社にもホテル内に仮本社を設置せしめた」（犬丸撤三＝ホテルとともに70年）。大震災はビル建設のはしりともなった三菱が原の赤レンガ建築にとっても一大試練の場となったが東京会館が半壊した以外被害は軽微で、日本橋周辺の事務所はこぞって丸の内に仮本社を移した。

日本橋駿河町一帯に威容を整えつつあった三井合名（現三井不動産ほか）もこの震災ですべてを失ない、焼失を免れた有楽町の三井集会所を足がかりにしている。倒壊した集会所を撤去し、跡地に木造平屋亜鉛板ふきの6棟を建設して三井各社の仮事務所とした。完成は10月末で付属建物とも千6百80坪。工費30万円であった。13年3月には三井信託の仮本社が建った。現在のさくら銀行本店の日本生命ビル寄りの鋭角の敷地で、木造2階建て延べ4百42坪。米国モスラー社製の厚さ6インチの扉をそなえた24坪の大金庫室をもつ特殊構造で坪あたり工事費が4百38円にもなった。「木造建築とはいいながら手を抜くことなくこれがそのままバリあたりの街角に建てられたとしてもなんら違和感が感じられないほど洗練された古典主義の様式を正当に表現した」（三井本館と建築生産の近代化）。昭和4年、三井本館が日本橋室町の現在地に竣工すると三井信託も同館に本店を移転。翌5年、不動産部を新築の三信ビルに移し東京支店とした。

一面の焦土と化した有楽町駅銀座側。大正時代の有楽町を代表した有楽座と数寄屋橋教会も消え再びその姿を世に現すことがなかった。周辺の空き地を加えた跡地は再整備されて現在の区画になる。有楽町駅前の中央通り商店街、朝日街の町並みが生まれたのは震災直後のことである。有楽座跡地は中央自動車、宮沢自動車商会、鈴木法律事務所などに変わり、戦前の駅前商店街が形成されていく。

現在マリオンになっている旧日劇の地は大正12年秋に大正生命仮本社、日本教育生命本社、金光邸になった。大正生命は日比谷濠に面した本社を震災で失い、空き地のここに木

造2階建ての仮社屋2棟を建てた。昭和4年に日本劇場の建設がはじまるが、両社はこれにともなって駅前商店街に再度仮本社を建てて移った。木造2階建て洋館。現在の初藤、浜伸、パチンコサンスターなどの一画で、13年大正生命本社ビルの竣工で東京支店に変わり、20年、強制疎開で撤去された。

現交通会館の地にあった市交通局も震災で大きな被害をうけた。市電車両の約半数にのぼる8百89両と有楽町本庁舎をはじめ設備の大半を焼失したが「全局員の涙ぐましい努力と苦心は余燼のなお消えない震災3日目から応急修理の下に一部電車を運転した」（東京市電気局40年史）。大正13年6月には一時芝浜町に移転した仮庁舎も有楽町にもどす。明治時代に建てたバンガロー風の2階建て車庫はなくなったが、変わって木造の5棟を渡り廊下でつないだバラック風庁舎になり、有楽町駅側には市電切符の印刷工場も作られた。こちらも昭和19年の強制疎開までつづいた。

晴海通りを挟んだニュートーキョー側の一画もすべてが灰燼に化したが、大正13年、数寄屋橋畔に有楽タクシーと東京商業興信所ができた。東京タクシーは木造洋館2階建てで1階が車庫兼待合所、2階が事務所、正面の壁に主要地までの料金大看板がかかった。現在の隆和ビル周辺は1、2階建ての木造バラックがならんで震災の爪痕を深くきざんでいた。その1軒にうなぎの大和田があった。『ジャズで踊って』（瀬川昌久）によれば「大正13年になると有楽町の大和（大和田?）というううなぎやの広い食堂が踊り場を失った連中の溜まり場になった。そこの女給はみなダンスの心得があってうなぎの定食をたべると相手をしてくれた」。毎日新聞社がまとめた『1億人の昭和史⑪』には大正12年11月、震災で仕事がなくなった舞台協会の女優たちが有楽町高架下でカフェ・ステージを開業、かけつけた当時のトップスター岡田嘉子の写真ものっている。

明治、大正時代の有楽町に彩りをそえた日比谷大神宮が飯田橋に引っ越したのは昭和3年のことであった。震災で大きな被害を受けた大神宮ではあったが、旧本殿跡にあたる日比谷シャンテの地にさっそく仮拝殿を建設したほか、和洋2軒の大結婚式場・大松閣と大松軒を竣工させていた。しかし大正13年にいたって、市は震災復興のための『新都市計画』を発表し、この結果、木造の神殿建築が許されないことになった。神宮では有楽町での再建をあきらめ、飯田橋駅前の東京大神宮現在地を移転先に決めた。昭和3年10月14日。遷座の行列はしずしずと有楽町を後にした。

⑩ 有楽町新聞街の繁栄

朝日新聞が加わり中央全紙が有楽町にそろった

有楽町の昭和は震災復興に明けたといってもいいだろう。震災は有楽町に壊滅的な大打撃を与えたが、その復興もまた驚くべくペースですすんだ。ひとつは旧大神宮周辺の区画再編であり、都心部建造物の耐火構造化であった。昭和3年、晴海通りはこれまでの22メートル幅を36メートルにひろげた。アミューズメントセンター側の敷地が削られ、現在の道幅が確定した。3角街から三井の仮事務所にかけての一画が再編されて長方形の新しい町並みが生まれ、同じ年数寄屋橋が架けかえられた。明治40年製の木橋を拡幅、鉄筋コンクリート橋に改めた。橋上には市電が走り、下の外濠に小舟が行き来した。後に『君の名は』で知られることになる、東京名所・数寄屋橋の誕生でもあった。全長39・5メートル、幅員36メートル、総工費34万2千円。昭和20年の東京大空襲にも耐えたが、36年外濠埋め立て工事で撤去された。

戦前期の有楽町は新聞街であり、電気の町であり、アミューズメントセンターであり、銀座玄関口として発展した。有楽町ビルの地に現在の毎日新聞の前身・東京日日新聞があり、そごうにあった報知新聞と2大新聞社が対峙していた。この有楽町に朝日新聞が進出したのは昭和2年3月のことであった。

朝日新聞は明治12年の創刊だが、21年に東京進出をはたして全国紙としての基盤をきずいた。東京本社の丸の内進出構想は早くから村山社長らの胸中にあった。関東大震災の翌大正13年12月、数寄屋橋のたもとに日華生命保険（現第百生命）の所有地で間組の材料置きになっていた9百98坪がみつかった。「位置は申し分なく地質もすばらしいことがわかったので早速買収することになった。価格は百万円であった」（朝日新聞の90年）。当時建築界の巨匠とうたわれた石本喜久治が設計し、竹中工務店が施工した。ここは江戸時代数寄屋橋御門の升型があったところで、掘りすすむうちに礎石が出てきた。「ちょうど、敷地の中央にあたって6、7尺くらいの巨石をつんだ石垣が厳然として相対し、その間に見附の入口を扼した江戸時代のこの方面の固めを眼前にした」（朝日新聞小観）。社屋は鉄筋コンクリート8階、総工費は2百50万円であった。外観はみるからにユニークで外濠に影を落とす景観は東京新名所のひとつにかぞえられた。以来60年、『ニュースの殿堂』

として昭和の有楽町とともに歩んだ。

報知新聞は幸い関東大震災を免れたものの、震災後、朝日、東京日日の攻勢ではじまった新聞戦国時代のあおりを食って大苦境に立たされた。大隈重常、野間清治、三木武吉と経営者が目まぐるしく変わったが好転せず、昭和16年、正力松太郎の社長就任以来、大躍進を遂げた読売新聞に吸収された。報知は読売新聞に統合されたがしばらくの間『読売報知』として題号が残された。

一方の東京日日新聞は震災を免れたことを躍進のきっかけにしていく。ただちに非常体制がしかれ、散乱した活字を拾い集めた手刷り新聞を発行した。安否も知れない販売店を捜し出して販売網を確立する。適切な応急措置がその後の経営基盤を不動のものにしていく。大正13年元旦号は販売部数を80万部にのばし、昭和に入ってますます発展した。戦争が激しくなった昭和18年、70年間にわたった日日の題号を毎日新聞に改題した。

元朝日新聞記者の思い出が『有楽町今と昔』にある。「3社があそこにあったときは有楽町は事実上の新聞街。ロンドンのフリート・ストリートと同じで、読売もその後数寄屋橋川向こうの銀座に移ってくる。（朝日が）有楽町に移ってから石井光次郎が営業局長、杉江潤次が会計課長に入ってきて、大福帳から複式簿記になった。ボーナスも大阪本社から現金輸送してきた。梅田駅を何時の汽車に積み込んだという報せがくると、みんないつ着くかいつ着くかと待っている。1人ひとり石井光次郎のところへもらいにいきましたよ。ぼくが大正15年に入ったときの月給が70円で、2・26事件の直前に社会部次長になって百70円。昭和15年、戦争のはじまる前の年社会部長になって2百80円だった」（荒垣秀雄）。「夜勤で最終版の締切がすむと国鉄有楽町駅ガード下の夜明しおでん屋・岩崎によくいった。お酒1本15銭で勘定が1円にならなかった。東京日日、読売、報知などの顔なじみもいっぱいで、当時の有楽町は文字通り新聞街、インクの街だった」（有楽町60年）。

昭和13年10月、東京日日新聞が本社屋隣接地（現新有楽町ビルの一部）に東日館（新館）を建設した。鉄筋コンクリート8階地下1階の延べ3千6百坪。6階から8階までがドイツカール・ツアイス社から47万円で購入したプラネタリウムを装置した。プラネタリウムは全国の少年少女に束の間のロマンを感じさせたりもした。

中世様式を巧みに取り入れた電気協会ビル、戦前は電気の町でもあった

戦前の有楽町はまた電気の街でもあった。市電と市バスの本拠・東京市電気局庁舎が交通会館の地にあったほか、市の電気研究所、電気博物館が数寄屋橋たもとに構え、電気協会、電気倶楽部も電気ビルの一画にあった。大正から昭和戦前期にかけて市電は文字どおり東京市民の足となった。大正3年には系統番号制が採用され、日比谷交差点には7番の目黒→日比谷線、8番の天現寺→京橋線をはじめ12番、16番、24番、37番などの系統路線がめぐった。

電気ビルのところにあった市電気局変電所は明治41年から市電の電圧調整の役割を担った。震災で痛手を受け昭和6年に大改造。戦後資料によれば回転変流機3台、総容量3千キロワット、3相変圧器1台2百キロワットであった。外濠沿いマリオン裏にも市電車庫用の変電所があった。こちらは大正7年建設の東京電力有楽橋変電所といった。閉鎖後もしばらく3階建てのコンクリート建屋が廃屋のまま残った。

後に公害研究所と変わる東京市電気研究所は震災直後の大正14年11月に完成した。電気の応用開発のための研究機関で一時電気博物館が併設された。ここはかつての江戸城外濠石垣と道路敷で、明治40年ころ石垣が撤去されたあと市電気局用地として空き地になっていた。大正12年着工したが震災のため中断。鉄筋コンクリート4階建て、建坪3百68坪、総工費は百25万円であった。

電気ビルの語源となった電気協会と新有楽町ビルに本拠をかまえる電気倶楽部は表裏一体、有楽町とかかわってきた。電気事業がはじまってまもなくのころ起こった帝国議事堂火災で漏電説が流れ、世間は電気を危険なものと決めつけようとしていた。後に『電気の父』とうたわれることになる藤岡市助が「市民の知識啓蒙が必要」と電灯協会の設立を提唱した。当初東京駅近くにおいた事務所をいったん有楽町のガード周辺に転じた後、昭和6年、東京電灯に隣接した旧電気局庁舎（現在の東宝劇場の一部）に移った。電気倶楽部は明治37年に発足したビリヤード同好会で、大正11年、電気ビルの一部にあった日本倶楽部を買収するため社団法人とした。ここは清棲伯爵の旧邸あとで、建物の買収費は7万1千円。これを改造して同年秋に協会も移った。

大正12年関東大震災で焼失。13年倶楽部跡地に2百坪の仮会館を建て、昭和2年には延べ千2百坪の会館を完成させた。鉄筋コンクリート5階建て、スパニッシュな味わいが美しい造形美をみせた。その後の協会の発展で竣工3、4年にすぎない昭和6年には早くも倶楽部が手狭となった。昭和7年、隣接地に2百44坪を買収、工事は昭和7年大倉土木の手ではじめられ、9年に延べ千84坪の電気協会ビルを落成させた。中世様式を巧みにとりいれた鉄筋コンクリート5階建てであった。戦争がはげしくなった昭和20年5月東京爆撃で一部を被災。

震災でそのほとんどを焼失した電気ビルの地には三柏ビル、富士アイス館が竣工し、一色印刷、塩瀬ビルなども再建された。三柏ビルは昭和3年完工の鉄筋コンクリート地上7階地下1階ビル。地階の下にさらに1階重量コンクリート部分をうずめるという特殊工法

で、早大工学部の建築学教室にビルの設計図、詳細写真などが永久保存されている。施工主の三柏商事は明治35年創業のバッカード輸入商社で、現在も電気ビル主要テナントのひとつ東光電気『社史』によれば「40年の長い間本社ビルの置かれていた東光ビルの所有者・東光建物は昭和13年、当時の東京電灯社長・小林一三によって設立され、同年7月三柏ビルを買収し、ビル名を東光ビルと改称した。東京電灯関係および電気関係の会社や団体が逐次入居し、当社の前身・東京電球も同年入居した。昭和20年5月の空襲によりビル内部が全焼、一時銀座7丁目に仮移転したが、戦後復旧してから同ビルに戻り、以来50年までビルの2、3、4階および8階の一部に入っていた」。戦前の1時期7階に林時夫スタジオがあった。林はタップダンスの第一人者で、ダンス映画が続々封切られ、それに刺激された若い男女がスタジオに集まった。

富士アイスは大正13年に創業した。中野区の野口順太郎OBによれば「電気ビルの駅側に3階建ての本社ビルがありました。昭和9年の建築で富士アイス館といい、ここに12年から31年間かよいました。富士アイスはアイスクリーム、レストラン、製菓、製パンが柱で、当初は銀座4丁目の教文館ビルに本社と営業所がありました。有楽町は1階でレストラン、ベーカリー。2、3階は古久根組という所に貸していました。私は兵隊にもいかず頑張り、最後は社長と専務と私の3人だけになりました」。そして終戦。戦後は進駐軍接収も体験した。

古き良き時代の代表建築・三信ビルいまも健在

昭和初頭の代表的事務所建築として知られる三信ビルと旧朝日生命館が建設されたのは昭和5年のことである。三信ビルの三信は三井信託の略称であった。三井信託銀行がその創立事務所を丸の内の有楽館（現在の三井銀行丸の内支店）に設けたのは関東大地震直後の大正12年で、翌13年現在の三井ビルの地にあった三井合名との仮事務所で銀行業務を開始したが、この三井信託と三井合名が子会社＝三信建物を設立して、三井合名の所有地であったこの地に三井信託不動産部自社ビル＋賃貸オフィスビル＝三信ビルの建設に着手した。

三井不動産社資料によれば、起工は3年7月で、基礎工事完成4年5月、鉄骨完了9月コンクリート工事完了12月。基礎工事清水組、上層工事大林組となっている。総工事費4百32万円、地上8階、地下2階、延べ2万1千平方メートル。その堂々たる構えは古き良き時代の傑作ビルのひとつでもある。日比谷周辺の土地は有楽層といってヘドロ状の軟弱な地盤で、三信ビルでは20メートルの松の生木を岩盤まで打ち込んで基礎を固めた。現在ビル入口に6段の階段があるが、周囲が地盤沈下したなかで基礎のしっかりしたこのビルだけが最初の高さを保っているためだという。テナントの第1期生は王子製紙、三機工業など。現在もこのビルに本社をかまえる電気化学工業も昭和6年1月、藤原銀次郎会長以下さっそうと第1歩を印した。当初は3階から7階までがいわゆるオフィスで地下1階は食堂、カフェ、理髪店、マーケットなどになっていた。

三信ビルの玄関ドアを押してなかに入ると航空会社や宝石店の並んだ商店街になっていて、吹き抜けの2階から古風な欄干と天井の装飾が目につく。ついで重厚な感じの石畳の通路をあゆむと丸くなった中央ロビーに出る。ここにはよそではお目にかかることなどとなどあり得ないようなクラシックな飾りのついたエレベータが5基並んでいる。かつてこの大理石づくりの中央階段付近に1メートルもの台座のついたシャンデリアが飾られたが昭和16、17年ころ金属の供出命令で、ほかの装飾品といっしょにゼロ戦や弾丸に変わった。8階はほかのフロアと造り方が違っている。竣工当時三井グループの厚生設備＝三友倶楽部が置かれ、戦前の三井マンがビリヤード、トランプ、囲碁、謡に興じた。

朝日生命の前身・常磐生命は昭和2年の創立で、14年日本共立生命と合併して前川生命と変わり、17年帝国生命に合併して現社名とした。常磐生命設立直後の昭和3年、本社ビル建設のため有楽町に4百8坪を取得。2年余りの工期をへた6年11月、鉄筋コンクリート地上8階塔屋2層地下1階、延べ面積1万平方メートルの常磐生命ビルを竣工させた。近世ローマ・ゴシック建築で、壁面レンガに彫刻をきざんだ昭和初頭建築最高傑作のひとつでもあった。

常磐生命ビルでは7、8階を自らの事務所としたが、地下から6階までを美松デパートに賃貸した。美松は常磐生命が肝入りとなり、松屋呉服店の支援と食堂部分を阪急百貨店の指導で開店、三越、松阪屋など既成の銀座デパートに一大攻勢を掛けたはなばなしいデビューで注目されたが、昭和10年オーナーが急死したあと経営不振のため廃業した。この間『東京音頭』の起源にもなった日比谷公園での盆おどり大会で美松デパート特製の町会浴衣が大評判をとったこともあった。やがて喫茶店や食堂、ダンスホールの食堂ビルへと転身していく。有楽町でサラリーマン生活30年を数えた田隅龍二もこの美松は思い出の店だという。「有楽町は子供時代、学生時代、電気化学（三信ビル）時代といろいろな思い出があるよ。こどものころ朝日生命館の1階に美松というバンド入りの立派な大食堂があった。たしか2階も食堂だった気がするね。日曜日はよく親に手を引かれて銀座へ行ったが、宵の銀ブラの前にここでバンド演奏を聞きながらカツライスを食べるのが楽しみでね。そのせいか今でもトンカツは大好きだ」。昭和55年新ビル建設のため撤去された。

関東大震災で焼失した警視庁と消防本部跡地は警視庁職員の官舎となったが、一部は空き地のまま放置されていた。この跡地の一部に昭和5年丸の内警察署、8年に丸の内消防

署合宿所が誕生した。現在の丸の内警察・消防合同庁舎の前身であった。震災当時、丸の内署は有楽町ビルにあったが「昭和5年11月地上4階、地下1階の鉄筋コンクリート建て、延べ千5百平方メートルの庁舎が落成移転した。当時4階建の庁舎は警視庁管内でもはじめての立派なものであった。そして翌々日、その名も麹町丸の内警察署と改名された。その威容を誇った庁舎は太平洋戦争下の大空襲にも損害を受けることなく残った」（丸の内警察署編＝首都中心の治安を担う）。消防出張所は8年3月、鉄筋コンクリート2階建延べ2百20平方メートルの消防署合宿所兼器具置き場としてスタート。15年有楽町警備派出所と改称、17年消防派出所、19年消防出張所に昇格した。46年合同庁舎建設のため閉鎖、49年に現庁舎が竣工した。

蚕糸会館は昭和8年に開館した。蚕糸業組合法の公布で蚕糸業同業組合中央会が解散したのを機に、会の残余金50万円をもって建設した。「敷地は有楽町駅前の警視庁があったところ、警視庁舎が関東震災で焼失してほかに移りその後には警官や巡査の官舎があった。その一部の3百30坪を払い下げてもらった」（玉利高之＝日本蚕糸新聞）。「第1期工事は農中金側の北半分を作りました。工事は大林組で工費は36万8千円。地下1階、地上7階、外装は生糸の色にあわせて白色擬石タイルを貼って、白亜の殿堂と呼ばれたものでした」（皆川俊之＝蚕糸会館余話）。2階3階が事務所階で4、5、6階が吹抜きの蚕糸講堂、7階には和洋11室のホテルが作られた。蚕糸講堂は戦後のビデオホールの前身になる。第2期工事は14年、仕舞屋が建っていた南側地続きの民有地百30坪を買収して、新館5百69坪を増築した。戦争が烈しくなった18年、団体　統合解散令が出て、蚕糸中央会も解散を余儀なくされたが、21年、財団法人・大日本蚕糸会として再出発した。

糖業会館は昭和10年日本糖業協会連合会が創立25周年の記念事業として、社団法人・糖業協会の設立と糖業会館の建設を決定したことに始まる。翌11年三月、現在地の大蔵省所管地2百86坪と民有地百11坪を購入、13年に工事を起こして、14年完工した。鉄筋コンクリート5階建て。戦争が烈しくなった19年に閉鎖、4階までを農工務省に賃貸して協会業務を休止した。

戦時は高射砲を屋上にあげ、戦後はGHQマッカーサー総司令部に

数ある戦前建築中もっとも歴史的な役割を果たしたビルといえば第1生命館を置いてないだろう。ビルが辿った数奇な運命はわが国の歴史さえ変えた。ビル所有者の第1生命は明治35年設立の生保相互会社で、昭和6年、警視庁舎跡地の国有地が民間に払い下げられたとき用地を取得した。本館建物の外観は一般から募り、葛西万司、横河民輔が設計した。ところが地盤が極めて軟弱であることがわかり、大ビルディングを建築するのがはたして適当であるかどうかが問題となった。

そのため「当時珍しい潜函工法が採られた。巨大な鉄筋コンクリートの箱を土の中に沈めるもので、最大で長さ約24メートル、幅約8メートル高さ約4メートルの箱が15こ使われた。箱は深さ20メートル以上の岩盤の上に直接のせられ、4階分の地下部分として利用し、さらにその上に7階建てのビルを建てた。生命保険会社にとってもっとも大事な契約原本を守ることが至上命題。関東大震災級にも耐えられるものをめざした。その結果、総重量16万トン。今時のビルの2倍以上もかかった。計画したとき、警視庁が目の前の皇居のお掘の水が抜けるといって許可をくれず、試験掘りをしてやっと納得してもらった」（矢野一郎相談役＝朝日新聞）。「（第1生命館の）建設当時から軍がさまざまな注文を出してきた。鉄骨が立ち始めた昭和11年、陸軍の下士官がおとずれ「非常事態のときに市民が避難できる場所が必要なのでさらに補強するように」と指示して行った。その結果、1階の床はそれまで計画していた厚さ25センチを60センチに直し、鉄骨量は1階で50パーセント増し、屋上部分は2倍にした。「当時は軍が幅をきかせていて、何をやっているんだと視察にきたので工事現場を案内した。そうしたらいざという時皇居を守る高射砲を乗せたいというので鉄骨の柱の真上にあたる屋上に高射砲4門を乗せる台を作った。その後昭和18年、実際に高射砲をクレーンで吊り上げて据えつけられた。いまでも台座が残っているはずです」（松本与作顧問技師、当時技師長）。

昭和19年、ビルの6階以上を軍に提供せよという命令がきて、6階の会長室に東部軍管部区司令官の田中静壹大将が、社長室には参謀長が入った。20年に入ると空襲が烈しくなり、警視庁はこのビルの地下4階を国賓などの待機所とした。空襲警報が出ると帝国ホテルからインドのチャンドラ・ボーマやビルマ初代首相のバモー氏らが避難してきた。敗戦直後の20年8月24日深夜、田中大将が6階の自室で自決した」。朝日新聞63年10月の『記写縦横』にある。地上8階地下4階、総床面積4万6千平方メートルで竣工が13年10月。建築費は千4百万円かかった。

農林中央金庫は大正12年農林、漁業協同組合全国金融機関として設立された。昭和8年警視庁跡地の払下げを受けて本社ビルを建設、現在は東京支店になっている。地上5階地下1階、延べ面積3千平方メートル。正面に6本の力強い円柱を、側面にも6本の角柱を配した堂々たる構えで、円柱と角柱の上部はイオニア式とよばれる独特の設計。金融機関らしい重厚な雰囲気をかもしだしている。1階事務所は広い窓と太い大理石柱がゆったりとしたオフィスを作り、かつてこの天井に豪華なシャンデリアが輝やいた。

⑪ アミューズメントセンター誕生

東京宝塚劇場、日比谷劇場、有楽座があいついでウブ声

日比谷、有楽町がアミューズメントセンターとして今日の興隆をみるのは、大阪宝塚の成功で東京進出をめざした小林一三がこの地に一般大衆向け劇場と映画館を中心にした興行街の出現を計画したからであった。「映画や芝居などの娯楽はいずれ家族で楽しむようになる。交通便利な有楽町が最適」と、東京電灯（現在の東京電力）の材料置き場3千3百平方メートルを買収した。「昭和8年の秋も更け有楽町界隈には木枯らしが吹き始めたが三信ビルの小さなオフィスには熱気があふれ、そこだけは深夜までこうこうと明かりが輝いていた。すぐそばの東京宝塚劇場建築現場では、すでにすさまじい勢いで工事が進行しつつあった。また、日本の洋画劇場として画期的役割を果たした日比谷映画劇場も8年7月5日に地鎮祭を終えて着工、小林社長の胸中にはすでに全国大都市における劇場建設の構想がたてられていたのである」（東宝50年史）。昭和9年1月1日、東京宝塚劇場は宝塚歌劇月組公演の歌劇『紅梅殿』とレビュー『花詩集』で華々しく開場した。10年は11回、11年は通年でその華麗な舞台は東京のファンを魅了した。ひきつづく9年9月には劇場5階に定員4百42人の東宝小劇場も開場。のちに寄席芸人憧れの高座となった東宝名人会であった。

日比谷劇場が旧日比谷大神宮跡地に開場したのは宝塚劇場から1か月遅れた昭和9年2月1日。ハイカラな円形ドームの塔を建てその先端に東宝のマークを掲げた。千7百席の大ロードショー館で、料金システムを50銭均一興行にした。映画は無声時代からトーキーへと躍進している時代で、外国映画にはスーパー字幕が入り、カラー作品も登場した。地下1階地上2階、延べ坪3千2百平方メートル。設計阿部美樹志、施工竹中工務店であった。洋画1本立ての長期ロードショーが定着するのは戦後のことで、当時の洋画封切りは2本立てによる1週がわりが普通であった。ドイツ映画『南の哀愁』とイギリス映画『ウインナ・ワルツ』の2本立てでスタートしたが、3月にはパラマウント映画との間に10本の独占封切り契約を結び、そのころ丸の内における松竹洋画興行部の牙城だった帝国劇場に対峙した。

昭和10年6月には隣合わせた空き地に有楽座も誕生した。ここも神宮跡地の一部で近所の人たちがキャッチボールを楽しんだり、ときにはバイクの練習場にもなった所だという。なまこ壁の和風を採り入れた地下1階地上2階建て鉄筋コンクリート劇場で、定員が千6百31。東宝専属グループから発展した東宝劇団の常打劇場としてスタートした。

俳優の森繁久弥もこの有楽座は思い出の劇場であったという。「昭和10年の有楽座のこけら落しは早稲田から群衆で出演した。出し物は後年猿翁になった猿之助の『国性爺合戦』で、花道にゴマンとならんでカルカさまカルカさまと絶叫しただけのことであったが、馬鹿馬鹿しいので、すぐ劇研の後輩に譲ってサボってしまった。まもなく藤原義江のオペラ、『レハールの微笑みの国』が上演され、この劇場に厄介になった。当時楽屋に入っていた店屋物は、国定の天丼。ここの悴がブルーコメッツの井上忠夫である。双葉の親子、きじ丼、大きな荷をしょってくる寿司屋の久さん。わたしたちの仲間は方々に借りができ、3月も4月も払わないで劇場中を逃げ回ったが、舞台の袖まで追い詰められて舞台から引っこめずに往生したのを思い出す。舞台稽古はおおむね徹夜である。私たちはカツラや舞台衣装のままガード下の岩崎で一杯をやり、めしを食った。丸の内の珍風景であったことだろう」（日比谷・有楽町を愉しむ）。

日本劇場が開場。ダンシングチームデビューする

日本劇場の起工式は宝塚や日比谷劇場より早い昭和4年2月のことであったが、途中経営者の交代などで工事が中断して、おばけ屋敷と呼ばれたりもした。たまたま天皇陛下がみとがめられ、関係者は恐縮して工事を再開した。昭和8年12月24日開場。鉄筋コンクリート地上4階地下2階。延べ建坪1万4千平方メートル。円形ドームの美しい建物に8角窓が並んだ。定員数2千9百40人という巨大劇場が人々の目を奪った。

日本劇場は昭和8年12月30日から『ゴールド・デイガース』と『カバアルケード』、翌年1月にはチャップリンの『街の灯』を封切るが、その後の興行は不振で10年3月、東宝が買収した。小林一三の描いた一大興行街建設の夢がこうして徐々に実現していく。前出の森繁久弥によれば「私が最初東宝に入ったのは昭和11年の暮れで、大川氏が建てた日劇を東宝が買ってからだ。その日劇の舞台課に勤めろといわれ、役者になりたかったがいやいや日劇に入った。この建物はいささか手抜き工事もあったらしく、ある時舞台と客席をふさぐ大きな鉄扉が轟音をたてて舞台に落ちたり、綱場のフンドウが落ちてきたり新参ものの私などおそるおそるあがる毎日だった」（日比谷・有楽町を愉しむ）。

10年12月、日本最初の地下劇場・日本劇場第1地下劇場がニュース短編映画専門館としてオープン。9月には専属舞踏団日劇ダンシングチームも生まれた。「日劇ダンシングチームは、秦豊吉がブロードウエイにあるロケットガールにヒントを得、その卓抜な独創力

と不屈の意思によって作り上げた。初舞台は昭和11年1月から日本劇場のステージを飾ったジャズとダンスである。チームは前年9月日本劇場専属舞踏団として募集を行ない、3百人以上の応募者のなかから厳選した40人の女子団員によってスタートした。日劇5階の大ホールを稽古場とし、毎日10時から午後4時までハードトレーニングが続けられたがその烈しさに途中で脱落する者が多く、初舞台を踏んだ第1期生は半数の21名になってしまった」（東宝50年史）。

「この第1期生の1人に丹下キヨ子さんがいた。『亡くなった人のことをどうこう言うのはきらいだけど、秦というのはマルキ・サド、有名なサディストよ。あのサドにあやかろってんでペンネームに丸木砂土とつけたくらい大変な男なんですよ。私の隣で踊ってた娘なんて竹ザオでしょっちゅう太モモをつっ突かれて随分いじめられた。ほかにも不愉快なことがあって、私は3年ちょっとでやめちまったよ。だけどね、あの反感、畜生やってやるぞ、という気持ちのお陰で私も多少は名が知られたんだと思えば、ちっとは感謝しなくっちゃ』。秦はしかし、研究生の体調を心配してカルシウムを摂取させなければと七輪を持ち込んでイワシを焼いて食べさせたり、肝油と牛乳を毎日与えたりもしている。丹下さんのほかに、1期生からは女優の三浦光子、バレエの松山樹子、牧由紀子、『20の扉』で活躍した柴田早苗らが成長した」（有楽町有情）。

戦前のよき時代に有楽町映画街が満開

昭和12年12月、東宝は帝国劇場と東京会館を所有する帝国劇場社を吸収合併した。帝国劇場は定員千3百86人、明治44年開場以来白亜の殿堂と呼ばれ、日本の近代演劇史に不滅の足跡を残したが、昭和に入って業績低下を招き、昭和5年から松竹に経営を委ね洋画の封切り館とされていた。東宝公演は15年3月宝塚雪組、4月新国劇公演をもって再開場、演劇劇場として再びファンの期待に応えた。しかし一方では非常時色が刻一刻と深まってもいた。この年夏、政府から情報局庁舎としての徴用命令が下る。戦前興行は9月10日をもって打ち切られた。

日比谷映画街で映画にめざめたという映画評論家の荻　昌弘にとって戦前の映画街の思い出は青春そのものでもあった。「有楽座でエノケンの舞台を楽しんだ少年時代、日比谷劇場にフランス映画『格子なき牢獄』をみた旧制中学時代、いまの人生展開を予測できたはずもなく、この一画を変遷させる日本の運命じたい想像のほかだったのだから。日比谷劇場と三信ビルがつくる（今も広い）空間に、当時は市電が引き込まれていた。いまは朝日生命の日比谷交差点角、大喫茶店・美松では吹き抜けのメザニーンのバルコニーからイブニングの美女がレコードをかけつづけた。あの昭和12、13年が私には日比谷に夢中の第1期だった。東京宝塚劇場、日比谷映画劇場、日劇が開場した（私が小学校2年の）昭和9年冬から3年後。補導協会の怖い目をかいくぐり、自前で映画館のカネを払うことに自立の快感を味わってた少年には、全館50銭の日比谷映画劇場は球形の印象が古い場末の館とまるで違うモダンでなかでも発声装置を誇示する入口脇のブロンズプレート『ウェスタン・エレクトリック』の英字が重い信頼感となった。5千の男たちが日劇へ李香蘭（山口淑子参議院議員）のエキゾチズムを見に殺到し、大混乱で興行中止を引きおこしたのは昭和16年の紀元節（1月11日）である。私には日比谷映画街は何より、どこより外国映画の街だという固定観念が育ちつづけた」（日比谷百）。

有楽町アミューズメントセンターといえば東宝のイメージが強い。しかし、戦前戦後期外国映画の本拠ともなった松竹の邦楽座も盛時を知るファンには懐かしい劇場のひとつだった。大正13年7月、震災で焼けた浄瑠璃座跡で開場、昭和9年6月丸の内松竹、12年8月国際ニュース劇場、13年6月丸の内松竹、14年12月邦楽座と何度も名前を変えた。

戦前ビル建設すすむ。東京名物食堂ビルいまも健在

ニュートーキョーから東宝街にかけてのガード周辺の昭和はじめもビル建設が進む。3年に建築された電日ビルはほろほろ鳥料理・大雅の一部として現在も使用されているが、同じころ建てられた日本閣ビル、久須美屋ビル、淘淘亭ビル、大沢ビル、石川ビル、砂本ビル、明和ビルなどはその後の改造工事で一新した。そして昭和10年代になってニュートーキョービル、東宝旧本社ビル、東京名物食堂ビル、カテイビルなどが相ついで建設された。

電日ビルは鉄筋コンクリート建て5階。電気日報は大正末期創刊の業界紙で当初外濠を挟んだ銀座・泰明小学校の地においたが、この年自社ビルを竣工して移った。戦争が烈しくなった15年ころ朝日新聞別館、のちに朝日ビルとなった。8年、ラクチョービルの地に6階建鉄筋コンクリートの日本閣ビルが竣工して外濠に美しい影を落とした。当初、日本新聞社屋として建設されたが、12年には前田久吉が買収して大阪新聞兼日本工業新聞支社とした。大阪新聞は一介のローカル夕刊紙であったが、昭和8年日本工業新聞を興し、戦争が烈しくなった17年には全国的な新聞統合令推進で産業経済新聞（現サンケイ新聞）と改号、この時有楽町の東京支社も産経新聞東京支社とした。第2次大戦中東京の日本経済新聞とならんで天下を2分することになる。20年1月直撃弾をうけてマリアナ式印刷機2台も被災した。

東宝による有楽街建設構想も着々進んだ。昭和12年には東宝本社別館とも呼ばれた東宝文芸ビルが完成する。現在有楽町シャンテシネ1、2が建った一画である。4階の鉄筋コ

ンクリートビルで当初は1、2階が舞台の大道具作業場。3階が稽古場で4階が事務所になっていた。有楽町で少年期を過ごした土地っこの1人は1階でローラースケートを楽しんだとも。

東京宝塚劇場本社がこのビルに引っ越しするのは16年1月から18年12月まで。この年東宝映画と合併して新社名が東宝とかわり、本社も銀座7丁目の旧東宝映画本社に吸収された。映画界が苦難の道を歩むのもこのころ。「16年後半に入ると輸入会社のストックも底をついて洋画興業は再映を多用するようになり、太平洋戦争開始と同時にすべてのアメリカ映画は上映禁止を命ぜられた。11月19日公開の『空の要塞』が開戦前日比谷映画劇場で上映された最後のアメリカ映画である。こうした戦時体制下で東宝の演劇部門は既成勢力の堅塁摩しみごとに開花した。その中軸を形成したのは古川緑波1座と榎本健一1座の活躍である」（東宝50年史）。ロッパは有楽座で火野葦平の『ロッパと兵隊』を、エノケンも日本劇場で『突貫弥次喜多』『人間大砲』などを上演して戦争に疲れた観客の心をいやした。

昭和19年2月25日政府は第1次決戦非常措置令を発動、全国の大劇場19か所に向こう1年間の閉鎖を命じた。時局重大の折から高級享楽は停止すべき、というのがその理由であった。有楽町では東京宝塚劇場、有楽座、日本劇場、帝国劇場などが指定され、劇場街の灯が消えた。

東宝ツインタワービルのマン前に古めかしい小ビルがある。劇場街発足当時、10年12月完成の東宝食堂ビルで、戦前は東京名物食堂あるいは東宝名物食堂ビルといった。1階が東宝の案内所で2階から上がいまでいう味のデパート。すし金、すえひろ、ハゲ天、竹葉亭など有名店が支店を構えた。有楽町の帝劇サブモール地下2階のすし金（鈴木守）が独立したのもこのビル。12年、33才のときだった。15年ころ学生服のまま劇場街にかよいつめたという、写真家・いまいとおるによれば「あのビルはいまも変わっていない。屋上に名物食堂と書いた大きな看板がかかっていて、劇場帰りに2階のてんぷら屋なんかにも行った。やし油を使って目の前であげるんだ。なにしろうまかったね。もっとも家に帰って学生の分際でってしかられましたが」。3階建てのカテイビルも東宝が有楽街構想の一貫として10年1月に開設した。主として喫茶店。戦前は明朗クラブ・コーヒィハウスといった。

孫文もかかわった日比谷陶陶亭

東宝ツインタワービルの三信ビル側に大正8年創業の中華料理店・陶陶亭があった。震災前は鉄筋コンクリートの4階ビルで、屋上近くに大きく切り文字の店名を掲げていた。昭和5年、震災復興計画で区画が再編されたのを機に5階建ての本格ビルを新築。1階がグリルで、2、3階が洋間、4階は日本間の宴会場で1度に3百人も入れた。「主人は中国革命を援助した民間の志士で孫文の臨終をみとった唯一の日本人・菅野長知氏だった。菅野氏は革命軍に武器輸送をくわだてたり、犬飼毅内閣のとき密使として蒋介石との間に満州事変解決の和平工作に派遣されるなど生涯を中国革命に捧げ、昭和22年に死亡した。亭をついだ息子の長雄氏も死に、亭の創立を知る人も少なくなった。そのひとり井上正見元支配人は「開店に際し孫文は金をいくらかだし、中日友好協会長の父は株主になっていました。陶陶亭の近くに漫画家・杉浦幸雄さんのお父さんが住んでいて、孫文はそこに居候していました」。

陶陶亭は昭和17年統制で店がはやらなくなったこともあり、社団法人・満州交友会に買収され満州会館と命名された。交友会の事務所探しも手伝ったという片倉衷は満州事変のときの関東軍参謀で元陸軍少将。「満州国は10年間に人口が1千万人増えて4千万人になった。17年は建国10周年になるのでなにか満州国をもり立てることを考えているところに、鮎川義助満州重工業初代総裁が百万円を寄付してくれた。そこで陶陶亭を日満両国国のかけ橋になるようにと、買収したんです」（有楽町有情）。戦後はアジア諸国との交友機関に改め国際善隣倶楽部として再発足、亭も倶楽部が経営した。

ビールの殿堂ニユートーキヨーの『?』

ビールの殿堂として有名なニユートーキヨーのオープンは昭和12年6月であった。有楽町タクシーと東京商業興信所の土地3百60平方メートルを12万円で買収、白亜の殿堂を建てた。「工事中囲いに赤ペンキで?と書き何ができるのかと人の目を引いた。屋上ビアガーデンは日本ではじめて。?がきいたかどうか開店のとき2千人近い行列ができた。『すべて準備がととのったのですが、あわてたのは当時建築許可権をもっていた警察がなかなかウンといわなかったことです。ちょうど裏に泰明小学校があり、その前にビアガーデンはけしからんというわけです。川っぷちに目かくし用の植木を入れることでようやく許可になった記憶があります』（当時からいる速水健太郎副社長＝有楽町有情）。

地下1階がドイツ風ビアホールでふたつきの陶製ジョッキがインテリ層にうけたという。1階が生ビール専門の大ホール、2階は食事のできるビアホール、3階はすき焼き、4階はカフェで若い男女の社交場、5階は屋上ビアガーデンで数寄屋橋の下を流れる川面をながめながら生ビールを楽しんだ。「ビアホールでは、昔のバスの車掌のように革のカバンを方から斜めにかけ切符方式で売っていました。地下のジャーマンルームにはいまのボトルキープ式に陶器のジョッキを預かる棚を作り、人気がありました。いまだに親子3代で

ジョッキをかたむけにくる人もいます」（開店のときからいる小林馨子さん）。「当時はショッピングセンターの所が川で1階から釣り糸をたれるとハゼが釣れた。常連に萩原朔太郎、高見順、河上徹太郎、石黒啓七、山本嘉次郎、それに朝日、毎日、読売の記者たち（がいた）」（有楽町有情）。が生ビールファンにとってよいことばかりが続かない。太平洋戦争への突入を境いにビアホールも苦難の道を歩むことになる。18年にはニュートーキョーも閉鎖をよぎなくされ、従業員は戦地や軍需工場に駆り出された。

9割以上が戦後の人。駅前商店街の戦前を知る人は少ない

関東大震災で1面の焼け野原となった有楽町駅銀座側、旧有楽座跡周辺の復興は早かった。大正13年には現在レバンテになっている中央自動車が竣工し、隣に村井自動車が建った。中央自動車は鉄筋コンクリート、1階が吹き抜けの車庫と工場で2、3階が事務所。小林菊造社長は日本自動車商工連合会の会長をつとめ、フォード、リンカーンなどの輸入外車を取り扱った。自動車工場の村井商会は鉄筋コンクリート2階。2つの建物はほとんど変わることなく今日に残っている。

戦後、有楽町町会長をつとめた鈴木重毅は関東大震災の直前に弁護士となり、大正15年3月、現在のアマンド、かもめの地に法律事務所を構えた。「ここは昔有楽座があった所で工事の時敷石がでた、と父から聞かされました」。鈴木重行元店主は大正12年生まれで泰明小学校に通った。「当時はまだ第1生命やパークビルのあたりは原っぱでトンボを追ったり、数寄屋橋で魚を取ったりしました」。有楽町駅と日劇、朝日新聞、そして外濠に囲まれた戦前のこの街を実に鮮明に記憶されていた。

「駅側の1列目は経済連の会長になられた稲山さんの実家のお屋敷で、後に平岡さんというお風呂屋さんになった。入口が銀座側で裏の細い路地を通って駅に抜けた。背中合わせに喜多村食堂と精養軒ベーカリーがあり、交通局側の角がすし食堂で隣にたばこ、菓子と雑貨屋さんの梨本商店などがあった」。鈴木家のアルバムには町内総出かと思われる入営記念写真が収められていた。稲山家は帝国ホテルから山下橋を越えたすぐ旧山下町にあった稲山久仙の別邸で、祖先は幕府直属の稲山流検校元締めであったという。明治時代多くの私立銀行が誕生したが久仙の興した稲山銀行もそのひとつ。後に新日鉄社長に就任した稲山嘉寛の生家でもあった。

「割烹・初藤やパチンコサンスター、有楽シネマなどのある2列目は交通局側が三芳さんの自宅。黒板塀をめぐらせた立派な構えで、大きな松の木が塀越しにのぞいていた。その隣が三芳さん経営の三勇社印刷。丸の内署の署長官舎と寮があり、おまわりさんが生活していた。朝日新聞側は2階建ての真っ白な木造で、ここに大正生命の本社と東京支店があった。3列目のいまのレバンテが中央自動車で、新聞輸送の所が村井自動車、お米屋さんを挟んで朝日新聞社の別館。真ん中の通りは号外屋さん、逗子、そしてうち（鈴木事務所）があり、竹中活版、タイプ屋、上田三交社などが並んでいました」。鈴木氏は青年期であった戦時下の昭和16年からの6年間を療養生活を余儀なくされた。「17年の防空法制定でこのあたりは交通疎開地に指定されました。20年3月に銭湯を除くすべての木造家屋が取り壊され、駅前の爆撃はその疎開地跡に落ちたと聞いています」。

「朝日街と中央通り商店街で戦前からいる人ですか？9割以上が戦後の人でしょうからいまはもういくらもいませんね。鈴木さんと戦前から新聞輸送の一画の所有者だった村井さん、国際マージャンの青木さんくらいのものでしょうか」喫茶店・るびあんの宮沢彬オーナーも数少ない戦前派。「昭和4年に父が上京して有楽町に住みましたが、18、19年ころ強制疎開のため19年から22年の3月まで長野の田舎に引っ越しました。東京に戻ってきたころは焼野原とヤミ市街でした」。

自転車で片手でかつぐ出前屋。売上げも日本1だった更科

ニュートーキョー一画の昭和はじめをマージャン・日比谷荘（昭和62年閉店）の加藤八重女史が詳しく覚えていた。「まだ映画街もない寂しい街でしたね。いまニュートーキョーがある外濠沿いは有楽町タクシーと商業興信所が並んで、その裏側に印刷所とぎん味亭、享楽美術クラブ。いまの大雅のあたりに鳥料理の曙があった。私の家は中央文芸といって九重ビルとますやビルあたりで、印刷の写真製版をしていました。隣が小川履物（げた）店、平野屋雑貨店、藤村さんの更科、大沢ビル。ガード沿いの富可川、大和田さんで一区画を作っていました」。加藤芳太郎、さき夫妻の養女で、昭和20年、この一画は強制疎開で木造建築がすべてとりはらわれ、戦後旧地主が土地を手放したときガードを挟んだ日比谷劇場裏に移転した。

隆和ビル2階の信州そば店・更科は大正11年に創業した。「昭和のはじめころは自転車で片手でかつぐ出前屋というのを7、8人は雇い、売上げも日本1でした。いまは周りに飲食店も増えたせいもありますがヒマになりましたよ。それに客のほうも味がわからなくなりましたね」。昭和3年にこの更科に嫁入りした藤村八重女史が『有楽町有情』で語っている。亡くなった主人の昇太郎は戦前の有楽町名士で、宣伝がきらいでいいものをだせば自然に客は集まると「無声人を呼ぶ」とみずからの哲学を大書した額を掲げた。

同じ隆和ビル1階のたばこ店・小川商店は明治20年代から。「父親の小三郎も銀座の知り合いの家に寄留していることにして（泰明小学校）に通った、と話してましたね。大正天皇さんが馬車で学校の前を通るときは、生徒がみんな直立不動の姿勢で立ったものよ。

洋裁の子はめずらしくって、ほとんどが着物にハカマでした」（小川キミ＝有楽町有情）。

『東京音頭』を残したおとっつぁんたちの世なおし

戦前の有楽町の顔といえる人に井上忠次郎がいた。「大正6年、米沢市の高校を卒業して親友の斉藤悌三郎さんと上京、有楽町で飲食店を開きました」（佐藤清）。昭和はじめ小唄勝太郎がうたった『東京音頭』の元歌『丸の内音頭』推進者としても有名。「お父さんら町内会の顔役が不景気の時なので何かやろうと『丸の内音頭』を作ったんです。それをビクターが歌詞を変えて『東京音頭』で売り出した。気っぷのいい人だったんで1銭も貰わずに権利をみんなやっちゃったんですよ。お前損したと随分いわれましたが、世直しのためにやったんだからって」（炉端・井上すずさん）。一緒に世直しに走り回った顔役に岩崎善右衛門さんとおとっつぁんと呼ばれた藤村昇太郎さんがいた。井上さんはナワのれん富可川、岩崎さんはおでんや岩崎、藤村さんはそばや更科をやっていた」。（有楽町有情）。

千葉県の沼南町の佐藤清町議は井上忠次郎の義理の弟・佐藤栄治の次男で、忠次郎の興した富可川と国定の2代目を引き継いだ。「戦前の有楽町はこどもたちのパラダイスだった。三井ビルの所は大きな広場になっていたし、日東紅茶のコーナーハウスにらせん状の階段になっていて、きれいな芝地と池があった」。佐藤家と井上家はニュートーキョー裏の3角街にあった。現在も戦前戦後の面影を残すこの一角に貿易店、新聞店、小料理屋、八百屋、魚屋などがあった。

久須美屋ビルは昭和4年の竣工。小谷家は明治10年代のころ、先々代が酒店を開いたのがはじまりで、関東大震災後の焼け跡にビルを建てた。ムラサキビルになった砂本ビルは明治39年創業という象牙店で、昭和のはじめに鉄筋コンクリート3階にした。大沢ビルも5年から。地下のロシア酒場から『ローレライ』の歌声がひびいた。

三井ビルはトンボとバッタ、帝国ホテル裏は戦争ゴッコの明地

広田ビルの広田正介家も大正はじめ以来の有楽町住民であった。大正9年、このビルの前身であった広田酒店の長男に生まれて泰明小学校にかよった。「こどものころは遊び場に不自由しませんでした。日比谷公園の野球場で毎日暗くなるまで遊んだ。三井ビルの空き地はトンボとバッタの宝庫。帝国ホテルの裏は高さ4、5メートルの築山で兵隊ゴッコはここでした。晴海通りの向こう側のお稲荷さんでは毎年2午に舞台が造られ、お神楽をみるのも楽しみでした。雨が降るとお堀の水が水門をこえて数寄屋橋の所に落ちてくる。一緒に鯉や鮒が流れてくるのだけれども、外濠は汚く酸素不足で水面をパクパクさせながら泳いでいるところを網ですくいあげる。大雨の日はバケツをもって川へ行ったものですよ。当時は子供が生まれると、日比谷大神宮へ行ってお祓いを受け、名前を付けてもらいます。3つほどめでたい名前を選んでくれて、その中から親が決めるのです。ここの住民の初詣は靖国神社と大神宮に決まっていたね」。昭和16年から21年まで兵役。ここの間、有楽町の広田酒店は強制疎開のため取り壊されて麹町、杉並を転々とした。

ガードと日比谷シャンテのちょうどマン中あたりにある大衆食堂・だるまとマージャン雀士苑の先代・曽根政雄も関東大震災以前からの土地っこだった。「私は築地小田原町の釣り船屋のせがれだったんだ。それが八百屋の小僧にだされてね。奉公を終えてはたちの時にここで八百屋を出したんです。いまでこそご存知の賑わいだけど、その時分は1面の原っぱでね。その原っぱの脇に日比谷大神宮っていうのがありましたよ。あれはいま飯田橋へ移っちまって東京大神宮に出世しちゃった。八百屋だから野菜のきれっぱしやなんかたくさんでるでしょ。それを使ってニワトリやウサギも飼っていました」（有楽町有情）。

昭和63年に閉店したやきとり・ぼっぼとマージャンすずめを経営した大久保孝太郎元店主も戦前からの有楽町住民の1人だった。明治41年4月茨城県の岩井市生まれ。小学校卒業と同時に芝愛宕山下で氷屋を開いていたオジを頼って上京。昭和9年に有楽町のガード近くに大久保氷店を開いた。「ちょうど東宝の興業街ができる直前、その建設で街は活気があふれていました」。直後に2・26事件が起こった。「雪の朝でね。日劇の前には機関銃がズラリと据えられてビックリしました。町内の人たちは1時日劇と三信ビルに避難させられました」。戦争も敗色が濃くなった19年から21年まで兵役に。大陸の重慶ではテング熱にやられて死にかけ、爆弾で富士山も半分ふっとんだ、と聞かされた故国にほうほうの思いで引き上げた。

吉川ビルの前身・埼玉屋豆腐店も明治30年代から。初代が埼玉県の出身で、主人の吉川銑之助元店主は昭和10年に娘婿となった。「昔は朝3時に仕事を始めたもんです。この辺に住んでる人も多くて、朝のミソ汁に皿をもってどんどん買いにきてくれたからね。小さくヤッコやサイノメに切って渡しました」。

日比谷山水楼、大神宮結婚式場を引きつぐ

昭和4年、山水楼の宮田会長が現在東宝会館になっている当時の大松閣を引き継いだ。「震災後、山かん横丁のバラックに4、5年おりましたが、家主から追い立てを食いましてね。変わりの所を探している時に大神宮が九段に移ることになった。松本楼の小坂さんが新婚披露場の大松閣と大松軒という木造洋館と日本建ての2軒を背中で一緒になっていたのを経営されていた。それが空いたものだから知り合いの弁護士が斡旋してくださった。

新しい山水楼は帝国ホテルと道を隔てた北隣で、宝塚劇場のまん前です。延べ4百50坪。赤じゅうたん敷の床に大理石の階段、天井にはシャンデリヤが下がっている。宮殿にもひとしい感じがしました」。

明治14年、広島生まれ。竹腰三叉の『南国記』に深い感銘を受けたという宮田は、大正元年、この1冊の書を携えて上海に学び外務省に就職するがすぐ脱サラ。「大正11年の春、広東で1流厨師の符炎さんを頭に単国、区亮卿さんら4人を採用して日本に戻りました。広東で大きなデパートの会計課長をやってた人を私の友人が知っていて料理人を選んでくれた。その時、うちにも子供が11人いるから1人連れてってくれといわれたのが、当時18だった区さんだった」。慶楽初代主人の若き日であった。「当時この辺は東宝も有楽座もない大神宮跡の原っぱでね。大銀杏なんかがあって、若い者はキャッチボールを楽しんだりもした」。厨師14人、従業員総数70人。すべてが順調に推移した。「時代はまさに軍国政治の疾風怒濤の時代に突入しようとしていました。満州事変、5・15事件、満州国建国、2・26事件、日華事変。日本中は沸き返りました。政治集会が花盛りの時代でした。店には公債の気概に燃える人士がたむろして中国の梁山泊みたいだといわれたりもしました」。しかし、戦局の推移とともに飲食店の経営は次第に困難をきわめることになる。アルコールをはじめあらゆる物資が欠乏し、18年1月に営業を停止した。

帝国ホテルの地下アーケードと有楽町ガード沿いに宝石店をかまえる植田商店は明治中期以来有楽町にかかわってきた。明治17年、神田駅近くに装身具や置物、銀食器店を開店。建設まもない帝国ホテルに進出したが、客の大半はホテル滞在の外国人要人で言葉や文化の違にとまどったりもしたという。昭和期は総合宝石店として新たなスタートを切った。

植田商店が日比谷進出百周年を記念して出版した『日比谷百』に植田義巳専務の『日比谷80年の思い出』という一文がある。「私の家が西銀座から有楽町に越してきたのは数え年6つ（明治45年）のころでした。大震災で焼け野原になったこの界隈も数年後には東宝劇場もでき、その周辺には飲食店や小売店が立ち並んで町の様相もずいぶん変わってきました。当時の顔というと、なんといってもライトが設計・施工し、大正12年に完成した帝国ホテル。そのころは今日のように一般庶民が気楽に出入りできる雰囲気とは程遠くどちらかというと上流志向でした。面白いのは昭和初期から周辺がなんとなく下町風となり、氏神である日枝神社の祭礼には神輿まで出るようになったことです。日比谷公園では『丸の内音頭』が盛んに踊られました。昭和初期というと私は東京商大（現一橋大）の学生。父が町内会長をしていましたので私もよく引っ張りだされたものです」。

⑫ ひろがる戦禍

2・26事件にしのびよる軍靴のひびき

昭和はじめ、いまはなき日比谷劇場からJRガードにかけての一画は元すり横丁と呼ばれた。震災前は2階建てのしもたやがつづいた住宅地だが、日比谷大神宮も引っ越して空き地ばかりがめだった。やがて商業の街と変わるが、当初は何をやっても当たらず元すり横丁の名がついたという。この町内会が不景気をふきとばそうと『丸の内音頭』を作り、日比谷公園で踊りまくった。昭和7年夏の1週間であった。提灯をめぐらし、水玉模様の揃いの浴衣を着込んだ町民が音頭にあわせて踊った。藤本二三吉が歌ってレコードとなり、翌8年には『丸の内音頭』の替え歌が西条八十作詩、中山晋平作曲、三島一声、小唄勝太郎の歌で売り出された。盆踊り曲としてゆるぎないあの『東京音頭』であった。

昭和12年2月26日、東京は珍しい大雪にみまわれていた。この日未明、野中四郎大尉率いる近衛歩兵第3連隊、歩兵第1連隊らの一部兵士千4百名が首相官邸、内大臣私邸、蔵相私邸、侍従長官邸などを襲撃して高橋是清蔵相以下3首脳を殺害、鈴木貫太郎侍従長に重症をおわすという大事件が勃発した。2・26事件であった。日比谷、有楽町はこの事件の舞台ともなっていく。朝9時、トラック2台に分乗した反乱軍部隊が有楽町の朝日新聞社に押しかけた。中橋中尉の率いた高橋蔵相襲撃部隊で、蔵相を殺害したその足で朝日新聞社を「国体破壊の元凶」として襲ったのだった。反乱軍と主筆の緒方竹虎が応対した。「窓からみると兵隊がトラックでやってきて、日劇前の電車通りに日比谷の方に向いて散兵を布いて襲撃ちの姿勢をとっている。守衛があがってきて「いま隊長がきまして社の代表者を出せといっておりますが…」という。いよいよやってきたな、と思って降りていったが、みると中尉の制服を着けた男が目を真っ赤に血走らせて立っている。こいつだなと思って「私が代表者だ」と名紙をだした。みると両足を踏ん張って右手にピストルを持って、腰の辺をゴソゴソやっているのできみ悪かったが無言のまま向き合っていた。非常に長い時間に思われたが、実際は20秒か30秒くらいのものだったろう。そうこうしているうちにその中尉はいきなり右手を高く上げ、天井をみながら大声で、国賊朝日をやっつけるのだとかどなった」（朝日新聞の90年）。反乱軍は活字ケースを倒し、社内を目茶苦茶にする乱暴を働いて引き上げたが、社員にけがはなく、新聞も休刊することなく発行された。

永田町一帯を占拠した決起反乱軍を正規軍隊が包囲し、日比谷公園には鎮圧部隊の高射砲がすえられた。29日、反乱軍は無抵抗で帰順したが、事件を契機に日本はますます軍事色を深め戦争の泥沼へと踏み出すことになった。

『欲しがりません勝つまでは』国民生活は一段と厳しさを

昭和16年大東亜戦争に突入。当初は南北に戦線を拡大し、連戦連勝のニュースに国民は酔いしれるが、17年ミッドウエー海戦の大敗を契機に劣勢に転じ、ガダルカナル、アッツ島と相次ぐ敗戦に戦況は早くも敗色を濃くする。有楽町からも成人男子の多くが戦地にかりだされた。日比谷シャンテガード周辺に住んだ住民の1人は「戦争が激しくなって、この町に男の人はいなくなった。今のかねだのあたりは富永中尉の実家で、運動具店の板倉少尉。大久保さん、神崎さん、広田さんなどが戦地に出征されました」。

状況は有楽町に本社を構えた企業も同じだった「あいつぐ召集令で当社からの出征軍人は、職員千名中3百20名、工員9百名中百70名と、全従業員の4分の1におよぶ多数にのぼった。出征する社員に対してもはじめのころは女子社員が心尽くしの千人針を贈ったり、社長はじめ総出で盛大な見送りをやったものだが、応召者がふえるにしたがい、しだいにありきたりの日常行事化していった。召集のほかに徴用があった。当社でも多数の従業員が徴用され、軍需工場の工員になったり技術者は軍属になったりした」（三機工業35年史）。三機は昭和19年4月軍需生産工場に指定され、以後の応召が解除された。

太平洋戦争のはじまりとともに国民生活は一段と厳しさを増すようになった。昭和15年4月には米、味噌、醤油などの食料や衣類などが統制されて配給制度になった。米や味噌が玄米、いもの粉、豆かすにかわり、それも途絶えがちになった。戦争がはげしくなった19年3月、政府は『決戦非常処置令』を発令した。学徒動員、徴用、女子挺身隊の強化、高級料亭、遊興機関の廃止、休日の縮減などなど。国民皆兵、すべてが軍事態勢下におかれた。欲しがりません勝つまでは、を合言葉にひたすら勝利の日を信じた。近所の空き地を耕して慣れぬ畑仕事に精出した人も多かった。点数制の衣料もあったが品物はいつもなかった。ほころびを直そうにも糸や針がなく、糸はほかから抜いて使った。戦争末期は灯下管制におびえ空襲警報にさまよった。ここには人間らしい生活はなかった。

有楽町では、宝塚劇場、日本劇場、有楽座、帝国劇場が閉鎖され、ニユートーキョーや松本楼、山水楼などの高級料飲店も閉めた。歓楽街の灯が消え閉鎖された劇場や料亭は軍事施設に変わっていく。宝塚劇場、日本劇場は陸軍の風船爆弾工場となり、帝国劇場と有楽座は鄂跡機関局に徴用された。山水楼は関東軍需管理部の会議場に変わった。東宝地下街の食堂は外食券食堂となったが、雑炊を求める長蛇の列が劇場を半まわりして愛国生命（現日本生命館）の電車道まで並んだ。

18年、第1生命館は軍の命令を受けて東部軍管区司令部の本拠となった。ビルの屋上には高射機関砲が据えられ、田中司令官が6階に入った。地下には内閣情報局や内務省防空本部をはじめ6省の分室が入り、NHKの第2放送所、新聞社の電送写真設備などにもあてられた。会社や家庭から金属類が供出された。丸の内、有楽町に誇ったビル群からは豪華なシャンデリヤやエレベータがなくなり、一部は電車軌道さえも取り払われた。戦闘機や軍艦、戦車、弾丸に変わって戦争にかりだされた。

帝国ホテルに客室係として勤務し、国際親善功労者として黄綬褒章を授章した竹谷年子女史の『帝国ホテルの昭和史』によれば「そのころの通勤は防空服といって黒っぽい上着を着てモンペをはき綿の入った防空頭巾を肩から背中にかけて背負い、白いズックで作ったかばんを下げていました。そのかばんの中身は3角巾。これは傷の手当てをする時に使います。それから薬、乾パン、手拭い、手帳など。かばんや防空頭巾、上着のえり裏には姓名、住所、血液型を墨で書いた木綿の布がぬいつけてありました。昭和20年に入ってから空襲に明け暮れる日々でした。どこの家でもB29の様子を知るために夜はラジオをかけっぱなしにしていました。ビーッという警報の合図の音とともに「東部軍管区情報。ただいま敵機は父島上空を北上中、〇時〇分ごろには帝都上空に達する見込み」という放送があったんです。ところが放送が終わるころにはもうB29が東京上空に来ているのです。空襲警報がなるとそのたびに電車はとまってしまいます。そして近くの防空壕に入って警報が解除になるのを待つんです」。

「サイパンが陥落して東京空襲がはじまると、社屋の窓ガラスには爆風で細かく飛散しないように紙テープが貼られ、夜は灯火管制の黒幕を引いた。持参した米か米の配給券を社員食堂に渡して食券と引換えないと食事ができない。それも代用食が多い」。戦時下の新聞社の生活ぶりを元朝日新聞の熊倉正弥が『有楽町60年』に書いた。

大規模な強制疎開で木造建築のすべてが取りこわされた

昭和17年10月、防空法が制定され大都市は防衛対策のひとつとして防空空き地を設定することになった。強制疎開の法令化であった。当初は住宅密集地の空き地を守ることが目的であったが、戦局の悪化とともに現存する建造物を破壊して消防活動に役立てようと大規模な強制疎開が行われるようになってくる。19年1月疎開空地帯確保のための防空区画として第1次指定が行われ、以後重要施設疎開空き地、交通疎開空き地、疎開小空き地、と繰り返され、さらに念を入れた第5次、第6次疎開が実施された。

こうした相次ぐ指定で東京都内で10万戸の建物がとりこわされた。有楽町も第3次疎開

で駅前朝日街、中央通り商店街などが対象となり、木造住宅のすべてが取り壊された。都電の本拠だった交通局も19年、青山学園に移転。駅前商店街には鉄筋コンクリートの旧中央自動車、村井自動車工場、朝日別館、第1相互貯蓄、丸の内署官舎、市電気研究所、変電所が残った。日劇、朝日新聞、邦楽座（現有楽町マリオン）とならんだ晴海通りも1歩有楽町駅側に入ると、櫛の歯がぬけたように小ビルが残った。

首都空襲の危険が迫った昭和19年3月には一般疎開促進要綱が発令され、学童の地方疎開が始まった。当初は個人的な縁故をたよったが、多くの学童らは地方に疎開先がなく、8月から9月にかけて有楽町児童らのかよった泰明小学校生徒百85名が埼玉県の新会村、八基村へ集団疎開した。「この疎開先の学童の生活はみじめであった。年少の身で親元を離れ、長期間にわたって集団生活を営むためさまざまな問題がおこった。各宿舎に寮母がおかれ、共同の給食が行われたがただでさえ食料難のときだったから、食べざかりの児童を満足させるような十分な給食ができないのは当然であった。寝具や燃料も十分ではなかった。飢えと寒さと寂しさにさいなまれるいたいけな子供たちの姿は戦争の生んだ大きな悲劇でもあった」（千代田区史）。昭和19年夏、18才になったばかりの藤木広子女史は、泰明小児童が集団疎開した埼玉県・新会村の正伝院で寮母をしていた。「朝はイモまじりのご飯におみおつけとおこうこ。おみおつけの身はあの太い深谷ネギだけ。野菜はネギしかないからお昼はそれをカレー味でいためたり、夜はケンチン汁とネギばかり。子供たちは元気で屈託がないがいつもおなかをすかしている。夜は布団のなかから忍び泣きの声が聞こえました」（東京新聞＝泰明小の元年っこ）。『泰明百年物語』によれば疎開先は八基村・妙光寺、新会村・大林寺、東雲寺、正伝院、社務所、宝蔵寺の6か所。八基国民学校、新会国民学校における授業は杉沼教頭以下の引率教師があたった。集団疎開は戦後の昭和20年11月に百71名の寮生が帰京解散してすべてが終わった。

和紙をコンニャクのりではりあわせて風船爆弾をつくる

戦争が激しくなった昭和19年、劇場閉鎖令が出されて日比谷有楽街の灯が消えたが、この映画街の一隅に風船爆弾を作る軍需工場がひっそりと開設された。宝塚劇場と日劇地下の中外化工であった。厳重に板囲いされた秘密工場に女子挺身隊の学生がかり出された。湯島天神の自宅から跡見学園に通った長滝叔子女史（栃木県芳賀郡）も担任の井上幸子先生に引率されて宝塚劇場で紙風船作りに励んだ。

「19年7月12日に動員令書を受領しました。最初は7月17日から9月30日までの予定でしたが、文部省の指令で20年3月31日まで延長されました。風船爆弾の作業は長い板の前に並んで正座して和紙をコンニャクのりで張り合わせていきます。直径10メートルの風船ができると、送風機で空気をいれてでき上がりを確認しました。当時はこの紙風船が何に使われるのかわかりませんでしたが、戦後、爆弾をつりさげて、アメリカ本土を攻撃したことを知らされてビックリしました。劇場の2階に上がる正面には「欠勤即戦列離脱」と大書され、作業開始の前に太いコンクリートにかけられた慈母観音を全員で拝みました。昼休みには歌のじょうずな生徒さんたちがシューベルトの野ばらを合唱され、一時のやすらぎを感じました」。この工場には跡見学園生百名のほか雙葉高女、麹町高女3校生徒が働いた。戦後の米軍資料によれば、相当数がオレゴン州などで森林、人畜に被害を与えた。

昭和20年1月27日と5月25日、有楽町に焼夷弾の嵐が降る

昭和20年1月27日、東京は低く垂れた濃い密雲に覆われたが、午後2時南方海上から伊豆半島を北上した米軍編隊の一団が鈍い爆音を響かせながら有楽町上空に迫っていた。元有楽町駅長の橘川政人がこの日の模様を『有楽町今と昔』に書いている。「サイパン島の日本軍が玉砕してからサイパンから飛び立つB29の空襲が日毎に激しさを加えてきた。いよいよ敗色濃く国民の不安が日毎と深まっていった。都内のいたる所に防空濠が掘られたが、有楽町駅周辺はコンクリートのため土のうや砂袋を積んで地上退避濠とした。

昭和20年1月27日、天候曇り、風位北、風力軟、有楽町駅周辺は濃いナマリ色の雲に覆われて寒気の厳しい日であった。13時3分突如警戒警報のサイレンが厳冬の空にコダマした。この日の有楽町駅は疎開や急用などでキップを購入しようという人々が長い行列を作っていた。第1生命の屋上からは高射砲が火を吹きその炸裂音が耳をろうせんばかり、ぶきみな爆弾の落下音、そして続いておこる炸裂音、有楽町駅とその周辺はたちまち黒煙につつまれ砂煙りに目を覆った。付近に20発もの爆弾が落下、うち2発が駅中央部に直撃した。中央出札所に命中、同出札所は一瞬にして飛散し、おりから執務中の福島清成出札主任以下9名の職員が爆死、殉職した。キップ購入の行列の人々も退避濠を目の前にして無残にも爆死した。その数は百30名とも百70名ともいわれて定かではない」。

富士アイス館勤務の野口順太郎は有楽町駅のホームで九死に一生をえた。「電車はこない、人は溢れる、といった中で突然空襲警報が鳴りました。駅員が駅前の中央口広場にあった防空濠に入るようにどなっていましたが、誰も本格的な空襲の怖さを知らないので平気でいる。その内に戦闘機が火だるまになって落ちていくのがみえる。これはいけないと改札口を出て会社に帰ることにした。その瞬間です。轟音とともに爆弾が富士アイス館の隣で取り壊したばかりの空き地に落ちて、大音響とともに吹き上げた土砂が通路を覆いました。まさに腰がぬけるような衝撃でした」。

泰明小学校には3発の爆弾が落ちた。うち2発は校長室を直撃、6教室が完全に吹っ飛

び女教師ら4人が殉職した。久保田校長らは紙一重の差で難を逃れ、疎開しなかった残留児童もたまたま土曜日で授業を終え、帰宅してぶじだった。朝日新聞社と日劇のあいだの通路にも落ちた。日劇地下ホワイトの米元平一も目撃者のひとり。「突然ドカーンって音がしてこの建物（日劇）がグラングラン揺れ出した。地上に出てみると、朝日の前で記者待ちしていた車がボンボン燃えてるんです。その下に体半分突っ込んで死んでいる。人がうなっている。顔から血をながしている。駅の方から血だらけの人がヨロヨロ歩いてくる。もうバカみたいになっちゃって茫然としていました」（東京被爆記）。

「ニュートーキョー横向かって右の角を曲がるとマージャン、すし屋、（やきとり屋）の横丁がある。マージャン屋・邑楽と九連閣の前あたりにも爆弾は落ちた。吉沢英子さんはいま邑楽の建っている場所に住んでいた。「日比谷公園の方から爆弾の落ちる音が聞こえてきました。『敵機ライシュー』って声と同時に反射的に防空濠に入ったんです。とたんにザーッと音がして……。出てみると何もなくなっていました。3、4軒の家がペチャンコでした。おじいちゃんとおじさん夫婦が生き埋め。帰ってくると崩れたビルの中から女子挺身隊員の遺体を発掘していました。忘れものを取りにビルに帰り、生き埋めになったそうです」（東京被爆記）。

東宝会館のところにあった山水楼にも2百50キロ爆弾が2発直撃した。中広間では当日関東軍の秋永大佐主催の鉄鋼統制会議があり、会議に出席していた9人全員が即死、山中支配人以下4名の従業員も殉職した。宮田会長もこの時4時間にわたっての生き埋めを体験した。「1発は洋館の屋根を突き破り、もう1発は隣の有楽座舞台の厚壁に直径3メートルほどのかぜあなを作って山水楼洋館全部を倒壊させ、日本館も類焼してしまいました。私は倒壊した柱や梁の間で生き埋められて、ウツラウツラ夢みるような心地でいるところを助け出されました」。この時有楽町には都庁の商工奨励館近く、帝国ホテル裏、植田商店のあったガード沿い商店街、日比谷映画劇場近く、三井広場前日比谷通り、日比谷公園、丸の内橋など17発の大型爆弾が投下された。

昭和20年も3月になると、米軍艦隊から飛び立ったB29が昼夜の別なく首都圏を襲い、攻撃パターンも精密爆撃から無差別焼夷攻撃へとエスカレートしていた。日本軍はすでに本土の制空権を失い、米軍機が東京の空をじゅうりんしていた。3月10日の大空襲は太平洋戦争最大の被害を下町に与えた。午前0時すぎ空襲警報のサイレンに起こされた江東地区の人たちの頭上に超低空で襲来する米軍機の大群があった。B29は銀翼を真赤に光らせながら胴体の底を開き、総重量千7百トンの焼夷弾の束を降らせた。この日、被災家屋27万戸、死者10万人ともいわれる犠牲者がでた。

都心部はこの日の攻撃は免れたが、5月25日に大空襲の洗礼をうけた。「昭和20年5月25日の夜半、東京大空襲で（毎日新聞）東京本社は焼夷弾を受け新館（東日館）の4階から上の内部を焼失した。当時の新館は3階に編集室があったが、4、5階は貸室、6、7、8階はプラネタリウムと貸室であった。幸いにも印刷局が被災を免れ、新聞発行に支障がなかったのは不幸中の幸いであった」（毎日新聞百年史）。『読売新聞発展史』にはそこうにあった読売報知の罹災記事がある。「20年5月25日夜の東京大空襲で本社は本館（現在の銀座プランタン）別館（有楽町）とも炎上焼失した。9時半ころ、B29の大編隊が本社周辺に焼夷弾を集中投下し、まず中庭の工場屋根が青い火を吹きだした。来賓室の屋根に数10発、5階寝室、屋上食堂が燃えた。地下室は巻取り紙で火の海となり裏階段が煙突の役目をして6階まで黒煙がふきあげた」。この日都内の各新聞社が罹災、新聞発行が不可能になったので、朝日新聞から共同新聞を印刷した。1面には「B29帝都を無差別爆弾。47機撃墜、帝都固守、蛮行に返礼」と徹底抗戦を主張する大本営発表記事がおどった。

この日の空襲で帝国ホテルの南館、電気協会、倶楽部ビルなども燃えた。日比谷公園から三宅坂方面に広がった火勢は折からの南風に煽られた火の玉が周辺の内堀を飛び越えて皇居をも焼いた。これより先の2月硫黄島を占領した連合軍は5月の末にはここに空軍基地を完成させ空母艦隊とあわせて本土全域への波状攻撃を開始した。しかしこの時すでに東京の市街はほぼ全滅していて、以後集中砲火の対象となることはなかった。8月6日広島に、9日長崎に原子爆弾が投下され、さらにソ連が突然参戦。日本はポツダム宣言を受諾して日中戦争以来15年間にわたる戦争に終結をつげた。

戦争終結を告げる天皇放送を涙して聞く

悲喜こもごもの思いを抱いた昭和20年8月15日、戦争終結を告げる天皇の声がマイクを通じて流れた。「朕深く世界の大勢と帝国の現状とにかんがみ、非常の措置をもって時局を収拾せむと欲しここに忠良なるなんじ臣民に告ぐ。朕は米英支ソに対し、その共同宣言を受諾する旨通告せしめたり」。のちの毎日新聞社平岡敏男社長は有楽町の本社でこの放送を聞いた。「終戦当時、政経副部長、いわゆるデスクの仕事をしていた。家族は青森県の黒石に疎開していたので杉並の自宅で単身自炊生活を送っていた。職務上和平交渉が進行している状況や内容を刻々と知らされていたが、広島、長崎の原子爆弾がいつ東京へおとされるかも知れないという恐怖感を抱いていた。8月15日の放送は社内で全員が起立して聞いた。戦争責任をどうするのだという声も聞かれたが、多くの男たちは黙ったまま立ちすくんでいた」（毎日新聞の90年）。

⑬ GHQと闇市の街・有楽町

連合軍、第1生命など有力ビルのすべてを接収

太平洋戦争は昭和20年8月15日、政府の『ポツダム宣言』受諾決定にもとずく無条件降伏で終結した。3日後、東京湾内の米艦隊・ミズーリー号において戦勝国代表と日本政府代表との間で、全面降伏文書の調印が行われ、わが国は連合軍の占領下におかれることとなった。8月30日、連合軍総司令官のマッカーサー元帥が空路、厚木飛行場に到着。9月8日、はじめて首都東京への進駐第1歩を記した。このとき、日本の占領軍を構成したのは米国太平洋軍（極東軍）の第8軍と6軍、駐日海軍と米陸軍、太平洋空軍の45万で、このほか山口県下に進駐したイギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、インドのイギリス連邦軍があった。

当時、帝国ホテル支配人だった犬丸徹三社長にとって、昭和20年9月11日、マッカーサー元帥とはじめて会ったこの日のことは終生わすれることができない。帝国ホテルロビーにキラ星のように居並んだ将官が出迎えるなかを元帥の乗用車が横付けになった。「元帥は幕僚に一顧を与えたあと徹三の傍につかつかと歩み寄っていきなり言った。「支配人、部屋をみせてくれ」元帥から直接声をかけられるなどまったく思ってもいなかっただけに驚いた。徹三は元帥を先導してホテルの内部を回った。部屋をみせながらライト式建築の特徴を説明するとフンフンとしきりにうなずいた。中庭に出たとき元帥は再び命令した。「食事までまだ40分ある。その間に東京を案内してくれ」これは徹三をして充分驚倒せしむるにたる1言であった」（犬丸一郎＝帝国ホテル）。

帝国ホテルを出た車は日比谷通りを北進、三信ビル、帝国生命館、第1生命ビルから三菱街と有楽町、丸の内の焼失を免れたビルビルを説明しながら進んだ。都心部を1周して新橋方面から第1勧業銀行前に出るとそこから日比谷交差点にかけて道路の両側に進駐軍兵士が整列して出迎えていた。自動車は速力を落とし、元帥は兵士たちの捧げ銃を左右にながめながらこれに挙手の礼をもって返した。犬丸は敗戦国民の1人として複雑な心境で元帥をみあげた。

連合軍の東京進出にともない占領業務執行のための庁舎や宿舎が必要になってきた。調達は日本政府の責任とされたが、混乱の極にあった政府はほとんど行政能力を失なっていたので占領軍は独自に物色をはじめた。「第1生命館は空襲の被害もまったく受けることなく堅牢そのものの威容を誇っていたが、この堂々たるビルが占領軍の目にとまらぬはずはなかった。わが社においても接収されるのではないかとの風説がながれ、全社をあげてことの成り行きを案じていた。はたして9月6日に連合軍総司令部から大佐2名の訪問があった。用件は案じていたとおり社屋に対する状況聴取であった。すでに覚悟をしていた矢野常務は第1生命館について詳細な説明を行い、また図面や資料も提供した。ここにおいて社内一同いよいよくるものがきた、と身をもって感じとったのである」（第1生命70年史）。政府からの接収命令は10日にきた。地上全館を15日正午までに明け渡すこと。書類をのぞき家具、什器などの一切を持ちだしを禁止とするという厳しい内容であった。接収は覚悟していたものの移転のために与えられた期間はわずか4日間であった。移転は月曜から土曜まで昼夜の別なく進められた。重い荷物は手車やリヤカーが使われ、約束の日にはみごとに明け渡された。

第1生命にはマッカーサー元帥率いるGHQ総司令部が入った。GHQはゼネラル・ヘッドクォーターの略称で、マッカーサーのここでの5年間は日曜、祭日もない規則正しい生活に明け暮れた。宿舎のアメリカ大使館で朝8時に起床し、10時にGHQに出勤した。午後2時一旦大使館に帰って食事、4時に再び出勤という日課だった。1日に4回GHQ前に姿をみせるマッカーサーをみようという人たちが連日人垣を作った。マッカーサーは天皇のうえに位置する超法規的存在として占領政策をすすめた。民主国家の建設へ、同じ第1生命ビルに本拠をかまえた民生局（GS）スタッフの進歩的考えがマッカーサーの名で次々に交付されていった。

昭和25年7月、朝鮮動乱がはじまると極東米陸軍総司令官を兼ねたマッカーサー元帥は北朝鮮軍の侵攻に対決したが、26年4月、トルーマン大統領の停戦案に反対して解任。米国議会で「老兵は死なずただ消え去るのみ」の名セリフを残した。後任には朝鮮動乱で指揮をとったリッジウェイ大将が就任したが、その任期は1年間にすぎなかった。

第1生命ビルの6階役員会議室に白布のかかった大きなロッキング・チェアが飾られている。ブロンド銘板に英文と日本文の解説がある。「この室は連合軍最高司令官室としてマッカーサー元帥およびリッジウェイ大将が使用されました」。主を失って40年間保存されたこの椅子は終戦直後マッカーサー元帥愛用のものであった。

第1生命には総司令部のほか民政局、参謀部、公衆衛生福祉局などがあった。公衆衛生局はDDT作戦を展開した。伝染病対策として引揚者や学童たちにDDTが振りかけられた。進駐当時性病の蔓延に手を焼きパンパンガールとよばれた夜の女たちの狩り込みや日本人立入り禁止地区・オフリミットを指定したのもこの公衆衛生局であった。

作家の安岡章太郎は終戦直後の20年12月からの2か月間、掃除夫のアルバイトにこのGHQに通った。「勤務は夜7時から9時までで月給3百円。すでに食料や衣料の闇値は高騰していたが、大学出の初任給が百50円ぐらいだったから、夜2時間の勤務で3百円はベラ棒に割高の労賃である」。通訳の勉強になると思ったが、掃除に通訳がいらないことも分かる。仕事そのものは大した労働ではなかったがアメリカ軍のほうきや棒ゾウキン、ゴミ箱までがばかデカくて重く、2人がかりブラさげて歩いた。米兵とのトラブルもあった。大抵は机の上のたばこやチューインガムをちょろまかすといったことだが、横浜からきていた50がらみのパパさんという班長がすっ飛んでいき、その兵隊の前で両手をを合わせ「エクスキューズ・アス・フルリーズ……」という。すると、それで大体のところカタがついた。『僕の昭和史Ⅱ』にある。

連合軍は第1生命館をGHQ総司令部に指定したあと、有楽町周辺の焼け残ったビルを片っ端から接収していった。帝国生命館、三信ビル、農林中央金庫、大正生命などのオフィスビル、市政会館、帝国ホテル、松本楼、ニュートーキョー、富士アイス、宝塚劇場、邦楽座、日比谷公会堂さらに日比谷公園、駐車場用地としての周辺空き地などであった。

帝国生命館（現朝日生命館）は昭和20年10月から31年2月まで憲兵本部、MP司令部になった。MPは米陸軍の軍事警察で、軍内部の犯罪調査や軍規の確立などにあたった。ある事件にかかわって証人のひとりとしてMP本部によばれたという写真家の今井徹は「朝日生命館の3階が美松ダンスホールになっていて一時は新橋のフロリダと東京1、2を争ったものだ。その上がMPの憲兵本部だった。薄暗い部屋でスポットをあてられながら事情聴取を受けた。こちらからはみえないが、関係者がむこう側からみているんだなと思った」。

三信ビルも20年9月から25年6月まで接収された。地下と商店街は外人経営の商店、会社が入り、3階以上が通信隊になった。小部屋に細分され、室内はけばけばしいペンキで装飾され、宿泊用のベットが据えられた。三信ビルの主要テナントのひとつ電気化学工業もGHQの接収指定であわただしく退去した。目黒研究所に仮本社を移し、帝国興信所をへて5年後の25年11月接収解除された三信ビルに戻った。農林中央金庫は30年9月から31年2月まで経済科学局、大正生命館は20年10月から27年まで陸軍輸送部隊になった。

帝国ホテルは総司令部直属宿舎で、戦勝国将官、主要民間人の宿泊滞在に限定された。支配人としてモーリス中尉が就任し、従業員はこの人の管理下で働かされた。モーリスの指導は厳しいものだった。米国流の人事管理のもと徹底した衛生指導が行われた。大理石の肌をいかした柱や梁がペンキで真っ白くぬりかえられた。占領政策のひとつとしてだされた財閥解体で大倉財閥の総帥でもあった大倉喜八郎男爵が帝国ホテル会長の座を辞任して公職から下がったのもこのころであった。そして21年9月戦火をあびた南館と宴会場の復旧工事が行われ、帝国ホテルは昔日の姿を取り戻した。

日比谷公園で進駐軍兵士が野球やテニスに興じた

日比谷公園は直接戦火をうけなかったが、食料難対策として空き地や花壇はじゃがいも畑にかわり、金属回収のため公園外柵や名物の鶴の噴水鉄製台座、ルーパロマーナ像などが撤去されていた。主要部分は接収され、ドウリトル球場、ドウリトル広場などとよばれた。進駐軍兵士たちが野球やテニスに興じた。日比谷公会堂は占領軍用劇場となり、日本人小中学生を対象にした教育映画なども上映された。

日比谷公園内の市政会館は20年12月から24年10月までインボデン少佐率いる民間情報局新聞課になった。GHQは占領開始とともに旧軍部言論統制を撤廃したが、一方で占領軍による報道制限を行ったので新聞の暗黒時代が続いた。GHQの指示は連合軍の批判、動静報道の禁止などだが、担当者の個人的な判断に負うところが多く、編集者は原稿が検閲を通過できるかどうかに神経をとがらせた。各紙は事前検閲のため日比谷公園の市政会館に通って1つひとつの記事の承認をとった。数寄屋橋際に本社を構えた朝日新聞社は共産党色が強すぎるとして2日間の発行停止処分も受けた。差し替えの時間的な余裕がなかったが、その部分を白地で発行したり、地方版はそのまま流したりもした。

日比谷公園にあった戦時士気高揚のための『軍艦行進曲』の記念碑も撤去された。公園の復旧工事がはじまるのは26年ころから。公園外柵が整備され、昭和36年には運動公園跡に大噴水が完成した。松本楼も20年9月から憲兵司令部の佐官級将校の宿舎になったが26年11月レストランとして再開。大戦末期海軍高級将校の宿舎として徴用されて以来7年ぶりのことであった。

アーニーパイル劇場、オフリミット売店にかわる宝塚劇場

宝塚劇場は20年12月から30年1月までアーニーパイル劇場になった。アーニーパイルは沖縄で戦死した米軍従軍記者で劇場正面に遺影が飾られた。観客は米軍兵士だが、出演者や舞台裏では日本人が切り回した。「進駐軍が東京に入ってくるとまもなくアメリカ第8軍はもと宝塚少女歌劇の本城であった丸の内の東宝劇場を接収した。第8軍はこの劇場へ本場アメリカから芸人を呼んで兵隊の慰問に努めたが、翌21年の3月にはじめて日本人の手による日本のレビューをここの劇場にかけた。第1回作品『ファンタジー・ジャポニカ』を上演するまで猛訓練がつづいた。場所はアーニーパイル劇場の日比谷公園側の屋上だった。三信ビル側からみるとあそこの屋上にサーカス小屋のような天幕がみえた。あの天

幕が舞踏団の練習場で、応募者のなかには東宝舞踏団から千葉静子と江中久爾子が入っていた。この2人は熟練工だからたちまちアーニーパイル・ショーのスターになった」（カストリ誌・淑女）。

アーニーパイル劇場は戦後の『日本のエンターティンメント発祥の地』ともなった。大正5年に欧州からアメリカにわたり、ニューヨークで振付師として活躍していた伊藤道郎が劇場総監督に就任して日本人にも門戸を開いた。米軍の支配人や舞台監督なども演劇のプロが占めた。初期のころ『欲望という名の電車』やミュージカル『ミカド』などの力作も上演された。当時この劇場で活躍した指揮者の紙恭助がのちのジャズ界を背負い、戦後活躍した楽団リーダーや芸能人の多くがここが出発点になった。

歌手の淡谷のり子もアーニーパイル劇場を忘れられないという。日本人歌手に課せられたオーディションでスペシャルAの評価をえた淡谷はのり子をもじった『ノラショー』で大あたりをとる。映画の合間のわずか15分間だがオペラあり、ルンバあり、とバラエティに富んでいた。「私が歌い手になって本当に良かったと思ったのもアーニーパイルでした。戦前からジャズ、シャンソンなど外国の歌を歌っていた私ですが外国人を目の前にして歌う機会はありませんでした。それがアーニーパイルで7、8回もアンコールを受けたのです。自分の歌に送られる拍手喝采、アンコールを求める声々……。とくに印象的だったのは兵隊さんたちがノリにノッてワーッとステージに上がってきてしまったときのことです。こんな嬉しいことはありません。いい歌には勝者も敗者もないんだ、とつくづく思いました」（有楽町・日比谷を愉しむ）。

東宝宝塚会館は劇場部分だけでなく全館が接収された。スカラ座は米軍兵士用のニュース専用劇場、東宝小劇場は将校専用のヌードショー劇場、食堂は図書館にかわり、地下は軍用売店のPX。屋上はオンリー・ビアガーデンなどになった。日比谷公会堂と邦楽座も接収されて米軍専用劇場となった。日比谷公会堂は時によって日本人向けの教育用映画に開放されたこともあった。それぞれ24年10月、同年3月までと一足早く解除された。

日比谷三井ビルの地にあった日東紅茶コーナーハウスも接収されてGHQ民間情報局のCIE図書館になった。図書館は20年11月日比谷の放送会館で開設されたが、翌21年3月に日東紅茶に入り、27年講和条約の調印を期にアメリカ文化センターと改称、翌28年に芝公園に移転した。小境昭三氏の『カメラマンたちの昭和史』には「戦災の焼け跡だらけの東京・日比谷に進駐軍のCIEの図書館が開設され、ここにあるアメリカのさまざまの刊行物が無料で閲覧させてもらえた。写真雑誌、婦人雑誌もあった。秋山（庄太郎）らはその写真の新鮮さ、手法の大胆さ、広告の斬新さに瞠目し、それらの感覚を独自に消化していった」。みるものすべてがアカぬけた海外誌に感動したのは大竹省二、稲村隆正、杵島隆氏ら後のファッション写真界を代表する人たちだった。

ニュートーキョーは翻訳通訳隊と占領軍のビアホールになった。店内にはアメリカ、イギリス、オランダなどの万国旗がはためき、進駐軍兵士たちがジョッキを片手に米大リーグの中継に一喜一憂した。ダンスに興じた兵士たちもいた。酒は日本人とはくらべられないほどつよく大ジョッキで軽く10杯もたいらげた。当時の日本人はドブロクかカストリ、バクダンを飲んでいた。日本人の多くは陽気にはしゃぐ進駐軍兵士をうらめしげにのぞいた。佐倉市に住む原田女史はとなりの九重食堂の帳場にも座った。「ニュートーキョーはユニオンジャックのオンリービアホールで学生たちがアルバイトで働いていた。日劇前は進駐軍の兵士がたむろしたり、くつみがきや花売りのこどもたちがいてとてもこわかった」。数寄屋橋は進駐軍兵士と日本人との接点。米軍兵士たちの人種差別喧嘩にまきこまれたり、からかわれて外濠に投げ込まれたという日本人もいた。

富士アイスも占領軍の製パン工場になった。「20年12月に接収されてGHQ－PXベーカリーとよばれることになった。原料の小麦粉はアメリカから送られてくるのを優先して回してくれる。これでドーナツやパンを作り、進駐軍専用売店のPXにおさめる。世の中も落ち着きを取り戻し始めた23年11月GHQに働きかけてようやく返還、以後本社も移ってレストランを再開しました」（野口順太郎）。広場も接収された。三井ビル用地、パークビルの広場、山水楼跡地などである。これらは三信モータープールなどと呼ばれて進駐軍の専用駐車場となった。

有楽町駅前は新宿、新橋とならぶ3大闇市のひとつに

昭和20年8月の終戦直後は東京の大半が焦土のうえ、4百50万人といわれた失業者に復員軍人と大陸からの引揚者が加わってそれぞれが住居と食事と職場を求めてさまよった。ターミナル駅周辺は闇市街にかわるが、有楽町駅前も新宿、新橋とならぶ3大闇市のひとつになった。現在の交通会館と駅前広場の地、有楽町駅前の中央通り商店街、朝日街商店街、数寄屋橋周辺、そして駅をはさんだ皇居側の駅周辺、ガードなどの一帯であった。ここには道端にむしろをしいた即席露店や仮設マーケットがたちならんだ。人が集まれば当然食べ物屋がうまれる。いも、焼きそば、ふすまとうもろこしを混ぜたパン……。口に入るものならなんでも売れた。進駐軍の残飯を煮込んだシチューに長い行列ができた。政府の配給もほとんど途絶えた。人々は生き残るために闇市にたより、米とさつまいもを求めて近郊の農村に足を運んだ。即席の露店には使い古しのナベカマ、古着、軍用物資、進駐軍の横流し品などがならんだ。銀座周辺の焼け落ちたビルや地下道、防空濠などをねぐらにした浮浪児が有楽町を闊歩し、くつみがきやかっぱらいで食料を得、売春に走った少

女たちもあった。

『文壇資料・戦後有楽町界隈』（加藤一郎）には「駅を中心にしてほとんど焼け落ち、黒い眼がねのような窓を並べた日劇、迷彩のまま煤けた朝日新聞社屋、倉庫のような邦楽座、濁った河をへだてて読売新聞社など、どこをみても戦争で精魂つきはてたといったたたずまいだった。貼紙だらけのガードをくぐると、くすんだ毎日新聞社とそれに続く灰色の三菱の煉瓦街。これらをのぞく焼け跡には死獣にむらがるハエのように、朝から夜中まで人間の蠢きで、そこから異様に臭気が発散していた。しかし誰もその空気にはなれっこになっており、むしろこの感覚こそ大空襲をうけた首都の誇りのような気取りさえ伺われた。肩章をはぎとった兵隊服、油煙に塗れた国民服、戦闘帽、膝の抜けたモンペ、これらの男女は言い合わせたようにリュックを背負い、帯芯で作った雑 を肩にかけ、たがいにぶつかりあいながら流れ流され歩いている。

焼土の上に焼けトタンを敷き並べ、種々雑多の商品ともいえぬ品物を並べて口々にわめくにわか商人。さすがに手にいれたいもの、食いたいものは何でもあった。どこにかくされていたのかと思うほど生活物資がどっと溢れ出した。金より物の巷であり、金がなければ物々交換もできた。喧騒のうちに夜を迎えると闇市はやや表情を変え、ろうそくの明かりを風にかばいながらそこここに屋台が出現し、コンクリートのかたまりや木箱に渡した板に腰かけた酔客のかん声、歌こえが埃っぽい夜空を賑わした」。

終戦当時の有楽町駅前、中央通り商店街と朝日街の一画はわずかに鉄筋コンクリート造りの6戸が空襲と強制疎開を免れたばかりで、そのほとんどが空き地になっていた。ここから数寄屋橋、数寄屋橋公園にかけての一帯に露店がたち、木造バラックの急造商店街が造成されていく。露店が急成長した背景には失職罹災者・引揚者の急増、食料を中心とした物不足、流通経路の崩壊などの戦後事情があった。生活に困った人々はてっとり早い生活手段として道端に店をはってあらゆる物を並べた。デパートや商店が再開できずにいた当時、焼け跡を整理して街の灯をともした。食料や日用品を求めた客たちがどっと押し寄せた。

有楽町駅前の地に3代続いた印刷店・三好家の長男・長治オーナーは有楽シネマ、立ちそば屋などの一画の地主だった。終戦直後に復員、戦後の混乱期、一等地の立地を活かして波瀾万丈、はげしく生きた。間口2間ほどのほったて小屋を建てて、氷屋、カツドン屋、すし屋、ミルクホール、中華屋……なんでも手をだした。「いまだから話せるけど、敗戦直後はヤミ専門でね。食いもんのない時分で1万円仕入れたら翌日それが30万円になった。とにかく品物さえ並べればよく売れたよ。これを勘定するのに3時間ほどかかった。百円札までしかないんだから大変だ。30万円というと百円札ばかりで3千枚。10円札なら3万枚だもんなあ。リュックにぎゅうぎゅう詰めてやっと80万円だ」。

大陸からの復員軍人はほとんどが着の身着のままだったが、内地復員者の中にはドサクサにまぎれた人たちもいた。戦前からガード周辺に住居をかまえたA氏も「隊が解散したとき軍のトラック1台に物資を積み込んだ。途中いくつかあった検問も挙手の礼をしながら堂々と通り抜けた」と近所の人に話した。

朝日街のゲームランドパレスとカーニバルプラザの高橋賢介オーナーは千代田区一番町のホテルダイヤモンド社長でもある。高橋の立身伝も戦後の有楽町とともにあった。原子爆弾の研究をしていたという理化学研究所勤務で敗戦。知人の紹介でパレスの地に有楽園というトンカツと酒の店を開いた。20年の秋だった。「店といってもヨシズで囲い、天井にルーフィングという紙の屋根材をのせた手製の掘っ建て小屋。雨もりがして客はカサをひろげ、うちの鳥小屋のほうがもうちっとマシだよ、と笑って合成酒をあおった。それでも店の前に次の客が立って待つほどに繁盛した。奥さんの花子さんが揚げるトンカツが値段のわりに大ぶりだったのが人気を呼んだ。百円札がエプロンやモンペのポケットにギューギュー詰めても入りきれない夜がつづく。近くに店をもう1軒（第2有楽園）だした。トンカツが儲かるというので近所がトンカツ屋だらけになった。高橋さんは2軒の店を小料理屋にかえ、やがてもう1軒を占領軍専用の日本人オフリミットのバーにした。

かいわいではじめてバンドを入れ、日劇の踊り子さんに頼んでショーをやる。朝鮮戦争帰りの米兵は金ばなれがよかった。店の名前をバーダイヤモンドといった。『天女中空におどる』のキャッチフレーズで空前の大あたりをとばしたクラブダイヤモンドは27年に開店した。残っていたもう1軒も改造したのだ。こっちはバーダイヤモンドと違って日本人も相手にした」（有楽町有情）。2階建ての建物に吹き抜けの中2階を作り、ガラスを渡してその上で美女が悩ましげなブルースを踊った。

『君の名は』の数寄屋橋は戦後有楽町の象徴だった

「終戦当時の数寄屋橋は下にちゃんと川もながれていた。酔っぱらった米兵が夜の女を橋の上から投げ込んだなんていう事件もあった。終戦直後は橋の上にも露店がならんだ。傷痍軍人が白衣をまとってアコーデオンをひいたり、親子づれの物乞いがあったり、やがてNHKラジオの連続ドラマ『君の名は』で全国に知れわたるようになる。数寄屋橋は戦後の有楽町の象徴みたいなものだったね」。有楽町にかよいつめたという元富国写真の中川謹三郎社長が戦後をなつかしむ。

全国の女風呂を空にしたというNHKの連続ラジオドラマ『君の名は』は27年から29年までの丸2年間放送された。20年5月24日の東京大空襲で有楽町が猛爆をうけ、ふりそそ

ぐ焼夷弾の雨をくぐって逃げまどった氏家真知子と後宮春樹が互いに名も知らぬまま手をとりあった数寄屋橋で6か月後の再開を約束する。すれ違いドラマは戦後の世相を折り込みながら数寄屋橋を舞台に進んだ。「忘却とは忘れ去ることなり、忘れえずして忘却を誓う心の悲しさよ……」懐かしいフレーズが40年後（平成3年）のNHKテレビに再映されたが昔日の人気は戻らなかった。

数寄屋橋公園の終戦直後を22年2月の『朝日新聞』が伝えている。「1番奥の汚くこわれかかった忠魂碑の下で北国同朋帰還促進の断食男星野芳樹氏。すでに断食16日、エンエンたる気迫をはきつつ小さな3角テントの中に横たわる。その隣が街頭写真屋。橋のとっつきは日本人民党の天皇護持、民主主義統領主義をさけぶ百日説法。その左隣と右隣が勧業銀行の3角くじと外務省監修の日米会話集、勧業銀行さんは1日6千本、6万円を売り上げる。このコントンたる風景の最中に日本共産党東京中部委員会がインフレとヤミの利用者を政治から追放せよ、とさけんで赤旗10数本をふったてている」。

人々はすきっ腹を抱えてその日ぐらしの生活に追われていた。戦災孤児たちは繁華街にタムロし、すりやかっぱらいでその日の飢えをしのいでいた。昭和22年の夏ころ、数寄屋橋公園に中央少年ハウスが建った。たてたのはこの公園の銀座側真ん前に戦前小さなタバコやを開いていた河村契善であった。河村夫妻は最初ここで露店をだした。孤児たちがやってくる。「自身も東京大空襲で家を焼かれている河村さんはこどもたちの浮浪生活をなんとかしてやりたいと思うようになる。せめて雨露をしのぐだけでも……ハウスは古材やリンゴ箱をかき集めて作った。20人ほどのこどもたちが転がり込む。『鐘の鳴る丘』の赤い屋根とはまるで違ったバラックだったがここを根城に靴みがきや宝くじ売りに家なき子たちは勇んで出かけた。少年は正業を求めている、看板に大書した写真が残っている。貧しくとも寝る場所と食事は保証するがそれ以上は自分の手でつかめというのがオヤジの主義だった」。河村が亡くなった61年8月、『読売新聞』コラムが紹介した。

一般市民の住宅事情も同じだった。有楽町も爆撃と疎開で櫛の歯がかけたように半焼けのコンクリートビルだけが残った。バラック住宅を建てて住めた人はまだ恵まれていた。駅に仮眠する人もあれば、防空濠をねぐらにした人たちもいた。サンケイ新聞裏（現新幹線ガード）の防空濠にも、サンちゃん、イノちゃんの2人が住み込んだ。「中にニュートーキョーの米兵からもらった古いベッドを持ち込んだ。1人は元ガラス屋の職人で、近所のガラス切りを手伝い、夜はパンスケが連れ込んだ進駐軍兵士に住居を譲った。面倒みもよかった。2人が寝たばこで焼死したとき、死を悼んだパンスケの焼香がつづいた」。外濠沿い新幹線の山下橋周辺にしばらくの間バラックが並んだ。

岡田真澄、E・Hエリック兄弟の出発点も有楽町だった

終戦直後の有楽町ガードに引揚者を対象にした日の基1泊寮が開設された。戦前、有楽町名物と親しまれたおでんや・岩崎（現日比谷シャンテ裏）の跡地で、現在は日の基、新日の基などの飲食店になっている。敗戦と同時に大陸からの引揚者や復員軍人が東京に殺到したが、市街の大半は焼け跡で、引揚者は野宿同様の生活を余儀なくされていた。みかねた栗田久男理事長が21年から25年まで引揚者寮にした。栗田は大分県の出身で、15才のとき上京、新聞配達などをしながら実業家をめざした。戦前鉱山事業でかせいだ資金で引揚者寮を作り、のちに日の基社会事業団とした。

「1回に収容できるのは百20人。1泊が原則で東北方面に引き揚げる人が主だった。25年に廃止するまで、のべ10万人は利用したと思います。日の基は日蓮の行動とキリスト（基督）の反省を、と両名からとりました」（常務理事・石田善次郎＝有楽町有情）。栗田は47年に亡くなったが彼の興した養護老人ホーム・青老閣は現在も北区にある。俳優の岡田真澄とE・Hエリック兄弟も1か月間、この寮に泊まった。2人は日本人の父とデンマーク人の母とともに14年に台北へ移住したが敗戦。フランス時代の父の親友をたずねて東京に引き揚げたがすでに疎開した後だった。「基隆からリバティ・シップで和歌山・田辺に着き、DDTをふきつけられて上陸しました。東京への汽車はデッキまで鈴なり。窓もあけられずおシッコにゆくにも人の頭の上をボールのようにリレーされたものです。寮は畳じきで雑魚寝。大正海上ビル近くに外食券食堂があり、3食ずーっとスイトンでした。母はいま81才（昭和55年当時）でコペンハーゲンで元気にしていますが、金髪の進駐軍がなぜ外食券食堂にくるのかと白い目で見られ、当時はどんなつらい思いをしただろうとかわいそうでした。有楽町は日本での自分の原点です。ですから引き揚げ寮にいたことは恥ではなくむしろ誇りに思っています」（岡田真澄＝有楽町有情）。

2人が芸能界入りのきっかけをつかんだのも有楽町だった。スピーカーの技術者だったエリックが26年三信ビルの1階の外資系電気店RCAに入社、日劇ミュージックホールへマイクの点検や整備にかよった。さそわれるままトニー谷、泉和吉と組んだ『数寄屋橋コント』が大当たりしてそのままトラバーユした。岡田の芸能界入りはエリックが病気のとき代打で引っ張り出されたのがきっかけ。その後、東宝ニューフェイスにパスして本格的にデビューした。

1泊寮の使命を終えた日の基は、25年に日の基デパートという名のマーケットを経営した。食料品、雑貨、小間物、ケーキ屋、パチンコ店などになったが長つづきせず、ほどなく日の基食堂、日の基まんてい、日の基ときわ、東亜の酒造などの飲食店街に変わった。日の基の隣にある食安酒店はかつて食生活安定協会といった。食料事情逼迫をみかねた坂

本晴吉社長が消費者のための産直販売をやった。21年4月、1貫め10円で売られたトラック1台のさつまいもに1万人が殺到し、近所のおまわりさんが整理に駆けつける騒ぎになった。

大あねごがとりしきった夜の女がタムロした

復員兵士たちの一部は旧社に復帰したが、大半は戦争で会社もなくなっていて新たな職場探しに走った。幸い家が確保でき、職場がみつかったサラリーマンたちも休日には買い出しが必要だった。極端に食料が不足し、配給もアテにできなかった。人々は食料を求めて千葉や埼玉にとんだ。満員の電車に1貫め40円から50円したさつまいもをリュックいっぱいに仕入れた。商売にしたヤミ屋が横行した。

元時事新報社員で終戦直後の有楽町に詳しい産業広告の猪俣敏信社長。「有楽町には21年から7年間かよいました。発送係で勤務は午後からでしたが、3勺の米とさつまいもを持参して夕飯を飯盒で炊きました。日劇の前にさつまいもをふかしたのを売ってる店が10軒ほどならんでいて、7～8ミリぐらいの厚さのが6枚ほどで10円。パンともちのあいのこみたいなすっぱい澱粉が5、6枚で10円だったと思います。なにもない時代だったが金さえだせば何でも買えた。ヤミのおばさんが銀シャリのおにぎりやのりまきを売りにきた。みんなうらやましそうに覗いたが、警備員の1人がいつもこの銀シャリを買って食べていた。ところがこの警備員、会社の白損（傷つき用紙）をこっそり持ち出したのが警察に見つかってクビになった」。

終戦直後の有楽町はまたパンパンガールとよばれた夜の女たちの街でもあった。駅周辺には一目でそれとわかる女たちがタムロした。有楽町は進駐軍の本拠だけに外人相手が多かった。兵士たちはカネが余っていたし、性にうえてもいた。交渉がまとまると焼けビル跡や公園、ときには輪タクや防空濠跡までが利用された。女たちは手っ取り早い現金収入の手段として自らの貞操を生け贄にした。日本警察による刈り込みもあった。性病の蔓延に手を焼いたGHQが日本政府に指示したが、検挙、釈放を繰り返して更生の道は遠かった。

「敗戦直後、このへんはラク町のお時のかせぎ場だった。お時は空襲で家族に逃げられた夜の女、占領軍の兵士を相手にした。しかも仲間の娘たち百50人を取り仕切るアネゴ株だった。正確には夜桜のあけみという大あねごがいてその妹分、つまりNo.2だった。22年4月、NHKの街頭録音。聞き手、藤倉修一アナ。隠しマイクをもつ。話相手はお時19才。ふじ色のセーターにグレーのスラックス、髪にターバン。『身寄りも職もないわたしたちはどうやって生きていけばいいの。好きでさ、こんな商売やってると思うの？苦労してカタギになっても世間のヤツらはうしろ指をさすじゃないか。それでまたこの道に仕方なく帰ってくるんだよ』。ラジオが全国にながした。大反響だった。手紙やカンパ、バイブルまでがNHKに届けられた。がお時は放送の翌日ブッツリ姿を消した」（有楽町有情）。彼女たちは戦災で家を焼かれ、肉親を失った娘や戦争未亡人などの生活困窮者だった。終戦の翌21年夏ころから地域ごとに組織が作られ、縄張りができボスが統括するようになった。有楽町界隈には最大グループの夜桜のあけみ以外に、血桜おすみ、ギャングのチー坊といった5人ほどの大あねごがそれぞれ縄張りをもった。ボスは組員からショバ代を取立て、変わりにすべての面倒をみた。

敗戦の翌年、およそ7年ぶりに大陸の戦場から帰国した作家の田村泰次郎は混乱期の有楽町や新橋を歩いた。有楽町駅が彼の乗り降りの駅になり、その周辺に米兵相手の夜の女たちが集まっているのをみた。「付近のビルはまだ骸骨のようなみにくい姿をさらしていた。掘割（数寄屋橋下の外濠）には半分しずみかけた船が繋がれたままになっていた。パンパンたちはホームや階段のところまで入ってきて客を引っ張っていた。私はその逞しい生き方に目を見張った。体ごとぶつかっていく生き方に長年同じような生き方をしてきた私自身が一種の共感を覚えたのかもしれない。私は夢中で自分のイメージのなかの彼女たちのことを書いた。事実はどこにもない。全部空想である」（田村泰次郎＝群像）。作家としての地歩を不動のものとした代表作品『肉体の門』は有楽町、銀座が舞台であったのは多くの人の知るところでもあった。「地下の闇に、宙ずりのボルネオ・マヤの肉体はほの白い光りのかさにつつまれて、十字架の上の予言者のように壮厳だった」。田村は書き終えた時、あとにもさきにも感じたことのない一種の虚脱感をおぼえたという。

ヨシズばり、焼けトタンにローソクでスタートしたカストリ横丁

有楽町の闇市街の中心となった旧交通局跡地は戦時下に疎開して空き地になっていたのをテキヤが区分してマーケット街を作った。その数5百店。土地は三菱地所の所有地だが明治時代から東京都の交通局が借りていた。もとより不法占拠だが戦後の混乱期にクレームのつくはずがなかった。闇市は24年の交通局の復帰までつづいた。3坪ばかりの敷地をヨシズで囲んだもので屋根は戦禍をうけた焼けトタンなどで覆ってかろうじて雨露がしのげた。最初はろうそくで、のちにそれぞれの店に裸電球が1個づつついた。

平成元年まで交通会館の地下で飲食店・ちどりを経営した岸田孝一店主の兄がこの闇市マーケットに店をかまえたのが闇市街開設直後昭和21年のことだった。「45才だった兄は満州の後備兵として老人部隊・柳川将軍のもとで従軍後復員。マーケットの権利はツテを頼ってヤミ米屋から6万円で買いました。ほとんど飲み屋かたべもの屋だが戦後の混乱期

でどこも繁盛していた。しろうとだったが近くのミルクワンタンのおやじに商売のコツを教わってやきとり屋を開業、やがて焼鳥やヘビ、カエル、鹿、猪肉などの専門店にかえた。酒は統制だったが川崎で焼酎を仕入れて運び、売る時もドビンに入れて警察の目を逃れました。私は22年から兄の店を手伝い、30年にその兄が亡くなったので店を継ぎました」。

『非常時日本文壇史』（巌谷大四）に闇市街にあったおきよの記述がある。「終戦後まもなく有楽町駅の東側にバラックの呑みやがごちやごちゃと出来てそのあたりをカストリ横丁と呼ばれた。屋台に毛がはえたようなバラックの縁台のような椅子に5、6人かければ1杯になるような店ばかりで1杯になるとみんなまわりをかこんで、立ったままコップになみなみとつがれたカストリ焼酎を呑むわけである。そんなたちならんだ中におきよというのがあった。誰がみつけたのか知らないが自然に作家連中があつまった。常連は寺崎浩、丸岡明、舘野信之、青野季吉、中島健蔵、横山隆一、那須良輔、高見順、田村泰次郎武田泰淳……といった諸氏に豊島さん、久米さんなども顔をみせた。当時はカストリがもっとも珍重された時代でこれを3杯呑むとけっこう酔いがまわった。トンカツをかじりながら呑むのがこの店のしきたりだった。カツの油とカストリとがよくあうのだといわれていた」。おきよは日本ペンクラブと早稲田派15日会の2次会場で当時の著名文壇人の多くが出入りした。24年、横丁の閉鎖で一旦築地に移転したが、後に有楽町のすしや横丁に復帰し、新幹線工事で再び有楽町を去った。

終戦直後の有楽町勤務者の多くはカストリ焼酎の恩恵に浴した。「食うや食わずの時代だったけどいいもやバンばかりでなくホルモンやきとか、カツ丼、すしなんてのもあった。夜はカストリ焼酎の町になった。何軒かいきつけの店もあったけど名前はわすれました。酒に飢えていたせいかなにしろうまかった。時々黄色い日本酒を飲んでるのがいる。うらやましそうにみていた。有楽町のガードはくつみがきがならんで、夜はパンスケがたむろしていた。ちょっと油断してると横からこどものかっぱらいが飛び出してきた。有楽町が殺伐とした時代だが、私にとっては懐かしい青春時代の思い出の町でもあった」。有楽町時代のサンケイ新聞につとめた産広通信斎藤一郎社長が語っている。

有楽町交通会館の地下や駅周辺に終戦直後のカストリ横丁以来というお店もある。旧都庁ガードのミルクワンタン島藤。初代・音吉がシベリヤに出兵したとき現地で覚えたボルシチにヒントをえた。「牛乳の統制のとれたときはじめ当時百円でした。勤め人の給料が7、8千円のころですから今の千円以上ですか。ちょっと変わっていると評判で日劇のおどりこさんもよくきましたね。栄養のたりない時代のせいかよく売れて獅子てんやさん、地下鉄漫才の三球さん、永六輔さんなんかはよく足を運んでくれました」（2代目昭二さん）。てんやも「すし屋横丁にあったミルクワンタンって店、2人でよく行きました。ワンタンの汁が牛乳でモツの煮込みが入れてあるんです。カウンターにアブラムシがはって床にはニワトリの足だの首だのが落ちていたけど味は最高だった。小ライスを別に注文したのにその分のお金をとらない。なぜ？っていうとオヤジさん、あんたら貧乏人ははらわなくていいっていうんです」（有楽町有情）。

有楽町駅前にカストリ横丁があったのはすしや横丁誕生までの4年間だが、昭和21年10月現在という商店名簿が『東京都便覧』という本に残っている。分類すると食堂が6軒、小料理31軒、喫茶店16店、食料品店15軒、ほかに日用品雑貨店、電気店、レコード店、宝石店、靴、金物などなど。合計数が百56店で伝えられる5百店の3分の1程度にあたる。ちどりのほかグリーン、ホネー、曙、ラッスル商会などしばらくの間有楽町にとどまった懐かしい店名もあった。

大丸、千代田、日の基、KS、デパートという名のマーケットが氾濫

闇市街として復興した有楽町にマーケットが氾濫した。前出三好長治オーナーのマーケットはまるミデパートといい、パチンコ大丸の地のマーケットは大丸デパート、駅前商店街に千代田デパート、ガード下に日の基デパート、KSデパートなどがあった。大丸デパートは終戦直後のころ食料品や軽食を販売したのがはじめで、26年に大丸産業が食堂デパートとした。1階は食堂、すし、喫茶、焼酎ホールで、2階にビアホールが入った。まるミデパートも25年ころまるミビヤホール、らくちょうホールと変わり、駅側に南国調のネオンが輝いた。KSデパートは晴海通りを東宝側に渡ったすぐのガード、現在のゆうかりの一画にあった。こちらは飲食店が中心で精肉、菓子などの食品店もあった。

中央通り商店街のマリオン側と駅近道の小路付近は現在も戦後のマーケットの面影を残している。マリオン裏旧日劇側は21年焼け跡に建てたバラックがはじめ、4軒とおしの2階部分に海産物・食料品、銀座ハットなどの広告文字を浮かばせた写真も残っている。「ここは戦前から岡部さんの所有地で、大三元という三国人経営の中華屋、銀座に移った英国屋、そして千代、ももやと続いた。4軒続きのバラックは独立していて裏の小さな路地に共同トイレがあった」。喫茶店・千代は22年に開店した。人々はその日の生活におわれる殺伐とした時代。25年おしるこ屋に転向、27年からは2階でバー千代を開店して終夜営業した。マリオンの銀座側を占めた朝日新聞記者たちの溜まり場で、中曽根康弘元首相も河野一郎代議士の秘書時代にこのカウンターにとまった。

2列目マリオン側は千代田デパートといった。「終戦直後のころ南京豆やいも、雑貨などを売るマーケットになったが、どこも長続きしなかった。義父の佐藤忠がスマトラから復員したのが23年で、戦友だった真鍋さんという方からここを借りてプロマイド屋を始め

ました」。24年開店というブロマイドふじやの高橋繁店主によると、たまたま義父の妹が戦前の大手ブロマイド店に嫁入りしていたのがきっかけ。ブロマイドブームで映画ファンが集まった。東京が深刻な食料不足に悩まされていたがやみ米屋のおばさんが商売ものの米と交換していったので不自由することがなかったという。その義父も41年脳溢血で倒れ、自動車メーカーからトラバーユした高橋が継いだ。

一角のたばこ屋さん鈴木商店は鈴木高弘店主が復員した24年に店を開いた。たばこ販売の前身の専売公社時代、たばこの販売成績が顕著だとして何度も表彰された。「開店当時は戦後の混乱期で、進駐軍兵士が有楽町にたむろした時代。東京オリンピックの後からぐらいですか。マイルドセブンといわれて少しでもモタモタしているともういいって。最近では自動販売機の売上げの方が多くなりました」。千代田デパートは23年の開設で、ドラゴン、次郎長ずしなどがあった。毎日新聞社の『1億人の昭和50年史』に27年の千代田デパート前の写真がある。「定食、カレーライス70円初藤」と書かれたプラカードをサンドイッチマンがかかげた。

靴みがきにブラックマーケット、有楽町は戦後日本の縮図だった

敗戦直後、有楽町駅中央口のガード下に80人前後の靴みがきがいた。ほとんどが戦争で夫をなくした女性か引き揚げ者だった。「ガード下の道路両側の歩道にいくら詰めても50人ほどしか座ることができない。それで朝7時半に出てくる朝番と昼すぎからの夜番の2組に分かれていた。サエキという前科3犯のヤクザが一日10円の場銭を集めにきた。駅や丸の内署も通行の邪魔だ、と立ち退きを要求した。女性たちは途方にくれた。伝え聞いたある新聞記者がなかに入った。世襲や交代なしの1代限りで、という条件で駅と警察は女性たちの店開きを認めることに話がまとまった。サエキは姿を消した。その後の30数年間に再婚したり亡くなったり、クシの歯がぬけるように女性たちは減っていき、いま同じ場所に4人が店を開いている』（有楽町有情）。

有楽町の戦後、ガード以外にも靴みがきがあった。戦災孤児が多かった。広場をみつけて勝手に店開きする1人仕事や親方の元で歩合制のものまでさまざま、少年たちもまた精一杯生きた。「有楽町は米兵の巣となりました。少年のくつみがき、浮浪者や娼婦。その一方で駅前にならんだ露店がすしや横丁になった。スシ横ではホルモン焼きの臭いがただよい、メチルで目をつぶしたといった話が絶えなかった。またヤミの統制できびしかったんですが、ふだんおからの上に具がのってるおからズシなのに米のメシをくれというと箱の下の方からでてきて本物が食べられたりして戦後日本の典型的な縮図でしたね」（元有楽町駅長・橘川政人）。米兵は数寄屋橋から日本人を何人か川へ投げ込み、白人兵と黒人兵のケンカもしょっちゅうあった。夜、都庁の構内で強姦事件がおきたり、おいはぎもしばしば。当時はリンタクがズラリと客待ちしていたが昼間から構内にとめて女性とたわむれたりするスサンだ時代だった」（有楽町有情）。

劇場街の裏手ガード周辺の終戦直後は爆撃と強制疎開のため一面の焼け野原。復員者の中には皇居の外濠までのぞける自宅跡にたたずんで、人が住める町になるのかと本気で考えた人たちもあったという。しかし、復興への足取りは早かった。旧住民の多くはまたたくまに仮店舗を建て、商売を再開していく。広田酒店は戦災の傷痕も生々しい21年にバラックの酒店を興した。が、配給制度で仕入れができず、運送梱包業者に変わった。大久保氷店は23年にほったて小屋を建て氷屋を再開。一時はかき氷や今川焼きにも手をだした。軽3輪車で有楽町周辺のお得意さんをかけまわった。新しく権利を得た人たちも加わり、23年ころには戦前をしのぐにわか商店街が確立していた。明治時代からの地主であった清水家が旧居住者を中心に土地を分譲したのも22年であった。晴海通りに面した土地が坪1万円で、その他が7千円で分譲された。

当時三信ビルは米軍の通信隊に接収されたが、地下と1、2階は進駐軍向けの商店街になっていて外資系の貿易商や3国人の商店などが並んでいた。テレビ司会者の前田武彦も終戦後の一時期三信ビル1階の米軍兵士向け商店に勤めた。兵士はGHQ発行の軍票で買物をした。一部はブラックマーケットで、麻薬が売買されているという噂もあった。1ドル3百60円の公定価格時代、4百20円前後で外国製品が取引された。三井ビルは進駐軍の駐車場になっていたが、その隣の宝塚劇場は接収されて地下にPX（進駐軍向け売店）があった。日本人オフリミットの建物を囲んでMPやダフ屋、パンパンガール、シューシャンボーイらがタムロしてあたりは異様な雰囲気に包まれていた。ダフ屋は米兵から1カートン7、8百円で仕入れたラッキーストライクやキャメルを倍近くで売った。町にはモクひろいという珍商売もあった。すいがらを拾い集めて再生してさばいた。

スバル街で本物のコーヒーがのめ、ナイロンストッキングが買えた

終戦後の一時期、電気ビル北館の一部にスバル街とよばれた名店街があった。スバル街の象徴であったモダンな白い2階建てマーケットは22年に建てられた。中2階の階段を登るとアスファルトの道路をはさんで両側に飲食店がならび地下には外国製品などを売る商店などがあった。ないないづくしのこのころ日本人のほしいものがなんでもあった。喫茶店には砂糖が山盛りされ、本物のコーヒーが出た。洋品店には外国製のナイロンストッキングやレインコートがならんだ。「スバル街が物資が豊富だったのは3分の1ほどが朝鮮や中国の人が経営していて、日本人みたいに厳しく統制をうけなかったせいです。それに

中2階の下に米軍将校クラブがあり、MPも取締りにこなかったからでしょう。私ははじめキッチンをやり、あとに東京1の美人ぞろいのキャッチフレーズでトリスバーをだしました」（マージャンフロリダ経営・渡辺元二＝有楽町有情）。北区の秋谷四郎は24年から5年間、このオープンキッチンに勤めた。「まだ焼け跡も充分整備されきれない当時。スバル街といえば銀座より有名でした」。

28年当時、皇居側からスバル、ブラウン、ママ、ハリウッド、ミスズ、サモール、フロリダ、オロ、モカ……とU字型にならんだ。すべて飲食店。のちに現在も有楽町にかかわっている毎日書房、中本ラーメン、しのだずしなどが加わった。地下入口には火災で銀座から移転したキャバレー・バッカスがあったが、のちにパチンコのねこ遊技場に変わった。サンドイッチマンにぬいぐるみのまねき猫をかぶらせ通行人をさそった。戦後を知る世代には忘れられない風物詩でもあった。ハリウッドは俳優・宝田明の姉の店、31年、朝鮮人民共和国から13年ぶりに帰国、宝田の配慮でこの地にトリスバーを開いた。「29年から映画にではじめ、連日、世田谷の砧撮影所へ通った忙しいときでした。でも、撮影後砧から有楽町へ直行。ギターやウクレレ片手に自分の主題歌を歌ったり、いい憩いの場になっていました。それになかなか一般の人と話す機会がないので、俳優の立場を離れてお客と話し合えたのも貴重でした」（宝田明＝同）。

ラジオ全盛時代、近くのニッポン放送とラジオ東京（現TBS）の時間待ちにスバル街を利用した芸能人も多かった。その1人コロンビア・トップは「有楽町は日本の民間放送の電波の源といえましょう。放送の合間にコーヒーを飲み、パチンコをし、ラーメンを食う。1週間ずっとスバル街で生活したなんて時もありました。奥に博雅という中国人がやっていた中華料理店があった。その主人がエノケン劇団にいたとかで芝居心があり、おもしろくてよくいきましたね。店にはエノケンもきていました。スバル街に出入りして何人もの芸能人が電波にのる機会を得、育っていったもんです。

歌手石井好子さんも無関係ではない。2つ違いの姉でピアニストの朝吹京さんが昭和22年ころ喫茶店マロンを開いた。スバル街の入口付近、15人も入るといっぱいになってしまう小さな店だったが、大学教授夫人京さんの冗談話が本当になり、自分のピアノを売って開店資金をつくり、7、8年続けた。さらに歌手市丸さんも弟の後藤二郎さんに喫茶店オロをだしてあげていた」（同）。

スバル街はまた戦後ジャズのメッカでもあった。「まん中あたりにママというジャズ喫茶があった。ここはジャズブームのはしりになった京橋のユタカについで2番目にジャズを始めた。のちに新宿キーヨやヨットが登場して全盛時代を迎えることになる。同じスバル街オロのジュークボックスではアートブレーキーとジャズメッセンジャーズの曲が流れた。客はジャズファンの若者や学生が多かったが新宿などにくらべるとウルサ型がなくのんびりできた」。学生時代ママにかよったという、三信ビル・電気化学の作田紘広報課長が話している。スバル街は48年までに電気ビル建設のため取り壊された。スバル街の名前はすぐ隣にあったスバル座に由来した。21年8月に開場したこの劇場は木造2階建て8百席の洋画ロードショー専門館で、全席指定入替え制。料金は高かったが席もゆったりして設備もよく23年には『わが最良の年』を17週続映してロングラン記録を作った。

28年9月スバル座が燃えた。「1階廊下掃除用具置き場付近から出火。同館千百平方メートルを全焼した。出火時は空想科学映画『宇宙戦争』を上映中で千名くらいが入っていた。上映時間も終わりに近づいたころ突然ドンという異音が発生したと同時に1階の不滅灯ブラケットが落下して火炎を吹き出した」（丸の内消防署50年の歩み）。出火場所は駅前の繁華街であったため野次馬が取り囲み、隣の毎日新聞新館にあったラジオ東京から日本ではじめて火災実況放送も行われた。

横流しが多くいくら米国から物資をおくってもたりない

有楽町ビルの駅寄りの戦後は毎日新聞所有地に21年大和銀行有楽町支店のバラックが建築され、24年にはこの大和銀行に隣接して木造モルタル2階建ての毎日新聞別館が竣工した。これまで毎日新聞本社（現有楽町ビル）の1階にあった商店街がこの1階にうつされた。本館の方から大和銀行支店、有楽書房、ネクタイ屋、眼がね店、洋品店となり、2階へあがる階段の反対側に丸の内書店、農村工芸の店、セントラル・ファーマシーとつづいた。ファーマシーの経営者はやがて歌手としてデビューすることになる雪村いずみのお母さんだった。

昭和40年代に『一流品ブーム』を引き起こしたグッチの総代理店、銀座・サンモトヤマも終戦直後この有楽町が出発点になった。茂登山長一郎社長を書いた『舶来屋1代』（前淳一郎）によれば「昭和21年3月、有楽町駅前の皇居側にあった毎日新聞ビルはほとんど直撃弾も受けずに焼け残っていた。1階にレストランがあり、その脇の入口を入ったすぐ右手が戦前から商店街になっていた。父はここで日興商事と看板の出た店の主人になっていた」。中国から復員した茂登山はここで父の雑貨屋を手伝いヤミ屋まがい商売を始める。靴下が洋モク、チューインガム、チョコレート、砂糖、コーヒーと広がり、やがて外国製カメラ、冷蔵庫、外車と手に入らないものがなくなってくる。仕入れは米軍GHQの取調官や米兵、その家族とあらゆるツテをたどった。彼らはPXで買ったり、本国のデパートから通信販売で取り寄せてべらぼうな値段で吹っ掛けてくる。茂登山はこれに2倍の値をつけて1坪ばかりのオフィスで売りさばいた。ズボンのポケットにはつねに大量の百円札

がつまっていた。

日米両警察による取締りもあった。このころ進駐軍はPXやOSSの品物が闇市にあまりにも流れすぎることに頭を痛めていた。OSSの裏口からトラックごとどこかへ消えてしまってはいくら砂糖やメリケン粉を本国から送っても追いつかないからだ。ある日GHQそばで米兵に捕まるが、仕入れたばかりのバーラー万年筆の出所はついにわらない。33年には有楽町駅をはさんだ日劇裏の商店街で株式会社サンモトヤマを設立登記した。「1階の入口は間口1間、それでも入口脇には明るいショーウインドーをこしらえた。国産の雑貨や衣類を並べてにぎやかにする。店の奥といっても2、3歩入ったところにテーブルと椅子をおく。ヤミの品物を買いにくる客とはここで商売をする」。そして32年からの7年間、はじめて水面に出て三信ビルの現在ニューワールドの地に移った。サンモトヤマが銀座進出をはたしたのはその後、昭和39年のことであった。

写真界の梁山泊サン写真大学と漫画ブームの火つけ役漫画集団

サンモトヤマが有楽町駅前の毎日新聞ビルにあったころ、同じ毎日ビル6階にサンニュース・フォトスがあった。A級戦犯のひとりである松岡洋右元外務大臣の長男松岡謙一郎が社長で、編集長が写真界の大家・名取洋之助であった。氏の年来の夢であった日本のライフを作ろうとの呼び掛けに木村伊兵衛も木村一家を引き連れて参加した。23年11月に週刊サン写真ニュースを創刊したが、わずか1年2か月で閉刊。しかし「『サンニュース写真大学』といわれて、写真界の梁山泊みたいになっていた。藤本四八、三木淳、牧田仁、樋口進、石井彰、菌部澄、長野重一らそうそうたるのが素浪人みたいにゴロゴロしており、漫画家の岡部冬彦、根本進らも一員だった。『サン写真ニュース』はすでに休刊になっており、会社は月給らしい月給が出せないほど経営は苦しかった。田沼武能が月給をもらえない不満を木村伊兵衛に洩らすと木村は目玉をむいて皮肉った。写真を教えてもらっているのに月給をくれとは何事だ。ここはサン写真大学なんだからお前の方から月謝を納めろ。月給はでないかわりに社外でのアルバイトは自由であった。食うために武能は夜中に浅草国際劇場の稽古場へいって、松竹少女歌劇のスナップやファン用のブロマイドを撮った」（小境昭三＝カメラマンたちの昭和史）。

終戦直後の一時期、日比谷シャンテ前、噴水のある喫茶店と芸能人の手形がはめこまれたあたりが漫画集団事務所だったこともあった。「（22年に開店した）インテリゲントは裏に広い空き地をようした白塗りの喫茶店であった。その2階の7坪ほどを集団の事務所に開放してくれた人がいた。いま考えると夢のような話だが、たまたまメンバーの横山隆一さんが専務の山下恵三さんを知っていて、社長の小坂亀雄さんが2つ返事で申入れを聞いてくれたのであった。店内とは別に表から直接2階に入れる階段がついていた。窓の正面には都電の引込み線をとおして日比谷公園の森をみることができた」。漫画家・永井保の著書『銀座ばやし』にある。漫画集団には横山、永井のほか、近藤日出造、杉浦幸雄ら戦後の漫画界をせおった人たちがいた。彼らはここで創作活動をつづけた。集団そのもののヒットはその後の漫画ブームの火つけ役にもなっていった。23年から25年まで。インテリゲントではやがてバンド演奏をはじめた。バンドマンは3人でタンゴが多かった。平日は夕方、土、日は3回演奏したがいつも満員になった。

駅前ロータリーにあったすし横が有楽町の代名詞だった

昭和23年、駅前の1等地現在の交通会館と駅前ロータリーの地にあった闇市街・カストリ横丁に建開中の都交通局が復帰することになった。ここには終戦直後の混乱期にテキヤが開いたマーケットがあり、5百軒ほどの人たちがヨシズばりの1坪飲食店を開いていた。正規の権利者が戻るからといって食うや食わずの人たちをほおりだす訳にはいかないと露店を整理することになった。この年、有楽町商業共同組合（すしや横丁組合）を結成、都交通局と正式に借地契約した。

「すし横を作る時千8百平方メートル内に百6戸とし、抽選で決めた。申込金5万円をだして2百30戸が申し込んだ。『当選したのはいいのですが、ヤクザ追い出し金、店の建築費などで一人4百万円はかかりました。1、2年後、転売に3、4倍の値がつきましたが大変でした」（ガード下でがんばるおでん屋の山楽主人新島仁吉＝有楽町有情）。

昭和24年木造2階建ての都交通局庁舎が有楽町駅前の現交通会館の地に竣工。その前、駅ロータリーの地は新築の木の香がみなぎる有楽町の名物商店会・すしや横丁に変わった。榊要次郎の人生はこのすしや横丁とともにあった。21才のとき上京して日本橋の高島屋すし部に就職したが、家が戦災で焼けて一旦、故郷の和歌山に帰った。榊が有楽町にかかわるようになったのは戦後の21年再び上京したとき数寄屋橋周辺で屋台のおでん屋を開店以来のことだ。すしや横丁の誕生と同時にだるま鮨を開店。「米は統制品だから表向き、すしは売れない。『加工ずし』と称してそばやおカラ、麦めしのすしを売った時代。客が米を持ち込んできたのをすしにして出す、なんて回りくどい営業形態もあった。

だるま鮨の常連だった漫画家、横山隆一さんは「銀座が焼け野原だったでしょう。足はどうしてもあの横丁へ向かいました。それで、終電まで飲んだ。鎌倉へ帰るのに駅のまん前でしたからね。終電ギリギリまで飲んでいられるんだ。横丁にはすし屋のほかに1杯飲み屋、ラーメン屋、餃子屋、バーなんかいろいろあって、カストリ、横流しのバーボンウイスキー、日本酒とよく飲んだなあ」。プロレスの力道山がときどき顔をだした。1度に

にぎりを80個から百個食べた。普通の客の4、5人前。2個ずつ口にほおりこむ。にぎるのが間に合わないことが多かった。日本酒はガラスのコップで飲んだ。1口かふた口でコップが空になって7、8杯から10杯をあけ、しれっとしていた。「文字どおり上客でした。惜しい人を亡くしたって思ったもの」（有楽町有情）。だるま鮨はすしや横丁の最後もみとった。駅前都市計画で37年から立ち退きが始められたが全部がなくなるまでに7年もかかった。その最後の1軒がだるま鮨だった。43年8月都職員の手で強制撤去された。「よくがんばった」遠巻きにした千人あまりのヤジ馬から拍手が起こった。

いまも交通会館にある中村屋もすしや横丁とともにそだち、廃止に最後まで抵抗したひとり。中村重雄店主の父が終戦直後の20年9月カストリ横丁でおでんやを開業。すしや横丁の開設と同時に移った。戦後の苦しい時期、汗水ながして守った土地だ簡単に明け渡せるものか。「いまは都庁内のガード下にシャノワールの店をやっているブラックキャットのおやじさんと金はいいから代替地を斡旋しろ、とがんばったんですよ。最後は美濃部さんが都知事に初当選したんで新しい街づくりに協力するかって身を引いた。その美濃部さんにも結局は裏切られましたがね」（有楽町有情）。

ジャズ喫茶のはしりとなったコンボもすしや横丁に26年から30年まであった。天才ジャズマン渡辺貞夫がまだ無名時代ここに出入りし、この店で知り合った奥さんと結婚した。「大橋巨泉さんでしょ、ハナ肇さん、植木等さん、ジョージ川口さん、それに秋吉敏子さん、湯川れい子さん、フランキー堺さん、小野満さんたちが常連でした。巨泉さんはまだ早稲田の角帽をかぶってた。みなさん、あのころから明るくって楽しくってすでに現在の名エンターティナーになれる素質充分でした」（同）。

研究熱心が高じて厳寒の2月に数寄屋橋からとびこむ

いまは伝説的ものがたりになったすしや横丁に忘れられない名物サンドイッチマンがいた。交通会館の地下で本日開店というバーを経営する安倍久店主だ。安倍はすしや横丁開設直後の昭和24年、広島から憧れの東京へ満員の夜行列車にゆられてきた。22才の春、最初におりたったのが有楽町だった。世間はようやく落ち着きを取戻しつつあったが、まだまだ終戦直後の混乱がうずまいていた。広島から上京したばかりの安倍青年の心を捕らえたのは有楽町の活気あふれた復興ぶりだった。この街を第2の故郷にしようと心に決める。これからは宣伝の時代。裸一貫でできるサンドイッチマンに一匹狼で飛び込む。夢中で取り組む安倍に次々と新しい仕事が入った。なにしろ研究熱心。竹馬に長大ズボンをはいてまたがったり、月光仮面、西部劇の2丁拳銃、タップダンスとめだつことならなんでもやった。酒蔵利久の宣伝に外濠に飛び込むなんて芸当もやった。なにしろ厳寒の2月、思ったより冷たい。ブクブクとメタンガスのわく悪臭ただよう水が口や鼻に飛び込む。あやふく呼吸困難に陥りそうだった。橋の上は鈴なりの人垣ができ宣伝効果も満点だったが、後で丸の内署のおまわりさんに大目玉をくった。「警官が大勢の人を押し分けてガード近くの丸の内湯に連れていった。ひざの関節は寒さでガクガク。まともに立っていられない。お湯につかってもしばらくオチンチンがちじみっぱなしだった」。36年、ラジオ、テレビの興隆でサンドイッチマンの時代は終わった、とすしや横丁の一画に念願のバーを開いた。同じころ、数寄屋橋周辺にもう1人有名なサンドイッチマンがいた。高橋三吉連合艦隊司令長官のひとり息子。こちらは銀座樋口靴店のPRが専門で脇目もふらず行く手をじっとみすえながら晴海通りを行き来した。ほかにも数寄屋橋でこもをかぶったり、「命売ります」という物騒な看板をかかげたのもいた。

安倍は正確にすしや横丁の町並みを覚えていた。「駅の銀座口いま新幹線が通っているあたりにパチンコ屋が3軒、この1軒のスワローで軍艦マーチをながした。町には進駐軍兵士があふれた時代、景気つけに流したマーチがたちまち話題になって全国にひろがった。駅を出たまん前、交通会館の手前のロータリーになったところに商店街があった。これがすしや横丁だった。最初の1列めが駅に向いてならび、背中あわせに小路をはさんだ2、3列めが向かい合っていた。小路の入口にアーチ型の看板がかかっていて、くぐると両側に飲食店がならんでいた。この街には独特の雰囲気があった。共用トイレの臭いと焼き魚の香りが漂う横丁に、客と客との心のふれあいがあって、店ももうけより暖かな雰囲気を大切にした」。小路を1歩入ると、更科、南大門、アラスカ、高砂、七天……と飲食店が両側にひろがった。ここでは横丁の名前にもなったすしやの多さが目をみはらせた。現在も駅前朝日街に店舗を構える栄すし、柳すし、交通会館でがんばる照すしをはじめ、都すし、勇すし、末広すし、曙すし、梅すしなど20店をかぞえた。この横丁で10円ずしがはじまった。なんでも10円。すしは高級のイメージをやぶったこの商法にサラリーマンが集まった。

昭和36年、東京オリンピックを控えた都市計画ですしや横丁の撤去がはじまった。これを機に新天地をめざした人、新設された交通会館のテナントとなった人、有楽町にとどまって次期の都市計画工事を待つ人などなど。さまざまな人生航路の中に有楽町の戦後史の節目があった。このとき交通会館に桃園、田じま、元禄、べに鶴、大正軒、満留賀、あけぼの、喜世司電機などが入居した。

区役所の道具置き場からはじまったエントツ横丁

有楽町名物の煙突（やきとり）横丁は終戦直後の22年ころにできた。戦前は麹町区役所

土木課の箱番といって、リヤカーや材木などの道具置き場になっていた所だが「終戦直後、区役所につとめていたという人が権利をもっていて貸した。ところが借りた人がまた別の人に貸したりして複雑でね。お店は姉の山下みどりが終戦直後のころ開店。ことぶきといったけど姉が47才で亡くなったので私があとを継ぎました」。焼きとり・ふじの川村静子女史の話だ。平成9年に閉店した清すしは23年の開店。職人気質の小林清次郎店主と1人娘の連れ合いが50余年間店を守った。小松の女主人・小松原うめ女史も終戦直後の24年にご亭主と2人で店を出した。戦前は神田司町で鳥肉屋を経営していたが戦災で焼かれ「焼き鳥屋になったのは26年から。それまでは肉とうなぎやをやっていました。主人は29年になくなりましたが、当時はみんな最初は焼き鳥屋じゃなかったわね、いまみたいになったのは最近のことなのよ」。

その煙突横丁新橋側、天米の女主人川口よね女史。「まだまだ終戦の名残も残っていた時代。横丁の入口の角が洋品の富士見屋。有楽コンコースの所にあるワイシャツのフジヤマがあった。ここは天吉といって入口の所が黒塀になっていて芸者みたいなのが外人相手にペンペンやってた。何だか変な店だった。亡くなった主人が神田天米の職人で、昭和27年に結婚しました。当時のことだから新婚旅行なんてもちろんないし、本店で祝言をしてここでお店を開きました。早く借金を返さなくっちゃー、と一生懸命でね。疲れて電車の騒音も気にならなかった。最初のころは隣同志トンネルが続いてトイレが共通だった。夜中によその人が入ってきたりするのがいやで、主人がなげいていた。31年のガード工事で古い山手線部分が鉄骨のアームで補強され、地下鉄建設の時に地下から皮ごとそっくりついた松の木の杭が出てきた。百年も前の物だと聞いたけど丈夫なものですね」。

煙突横丁のうたたと運とん、味わいなど5店を経営する高橋テル女史は、戦後松坂屋デパート地下にあったダンスホール・オアシスから身を興した。「ダンサーというのは冬底冷えするんです。まとまったお金がたまるまでがまんしてトンネル中の1軒を買いました。昭和27年でしたね、あれは。最初は串の名前だって分からないドシロウトでしょ。新橋の焼き鳥屋さんで半年ほど修業しましたよ。でもね。クシを焼く指先が熱くなるだけで底冷えは変わりませんでした」（有楽町有情）。

アミューズメントセンターが復活、ウエスタンカーニバルにわいた

終戦直後の有楽町のもっとも大きな特色は日本最大とうたわれたアミューズメントセンターがみごとに復活して、全国の若者たちに夢と希望を与えたことだった。有楽町マリオンの地には映画、演劇の頂点に立った日本劇場があったが、戦時中にこおむった損傷の改修も整った20年11月に再開場した。東宝映画の戦後第1回作品、ジャズとロマンスの明朗音楽劇『歌え！太陽』封切りと、灰田勝彦、轟夕起子のグランドショー『ハイライト』の2本立てであった。終戦4か月、戦争で荒廃した東京で娯楽に飢えた人々は日劇に殺到した。劇場従業員は切符を売るより、客を断るのが仕事だった。年も改まった21年1月には人気絶頂のエノケン一座が『エノケンのサーカスキット』を上演、3月には古川ロッパ一座がファンを沸かせた。

20年代の前半はゲストショーと洋画の併演が多かった。なかでも最大のスターは『ブギの女王』笠置シヅ子だった。ブギブギのメロディが全国に広がっていった。彗星のように現れて消えた『パンチ歌手』暁照子、人気急上昇の越路吹雪、『ブルースの女王』淡谷のり子らが日劇舞台を飾った。日劇ダンシングチームも復活し、ラインダンスが若者たちを魅了した。『第1回日劇春のおどり』が開演したのは26年3月のことで、この年から夏、秋を加えた日劇3大おどりが恒例化した。福田富子、重山規子、上条美佐保、根岸明美らの活躍でレビューは全盛時代を迎える。29年からは『新春スターパレード』も開演した。江利ちえみ、三橋美智也、三波春夫が舞台を飾り、『ウエスタン・カーニバル』でロカビリー歌手に熱狂的ファンが群がった。

日劇5階にあった小劇場は21年1月に『東宝名人会』で再開場した。前年11月に宝塚劇場小劇場ではじまった名人会が進駐軍の接収で閉鎖させられたので会場を移した。柳屋小三治、三遊亭金馬らが出演した。日劇ミュージックホールへの衣替えは27年の3月に行われた。客席中央に円形セリ舞台を新設し、伊吹まり、ヒロセ元美、メリー松原など人気絶頂のヌードダンサーが豪華ショーを繰り広げた。日劇会館には封切り映画館の丸の内東宝と地下リトル日劇とかいった小屋もあった。たしかワンドリンク付き千5百円で、常連も多かった。本舞台をめざした新人ダンサーらが踊った。

日比谷シャンテの地にあった有楽座は終戦1か月後の20年9月に東宝専属スター総出演の『東宝芸能祭』で再開場した。禁止されていた外国映画や演劇がみれる。戦後体制の不安のなかに人々の期待もまた大きかった。待ち兼ねたファンが押し掛けた。11月のエノケン一座『どもり奇胆』では入りきれない観客が劇場を取り巻いた。有楽座はその後も東宝劇団の専用劇場として発展したが、26年、ブームの洋画専用劇場に変わり、『風とともに去りぬ』で空前の大ヒットをとばした。一方の日比谷劇場は21年に『王国の鍵』『追憶』などのアメリカ映画を上映。その後も『肉体の悪魔』『第3の男』『禁じられた遊び』などの大作が相次いだ。29年、マリリン・モンローが有楽座で『ナイヤガラ』をロングラン上映したとき、日比谷劇場ではオードリー・ヘップバーンが『ローマの休日』を大ヒットさせていた。世界の銀幕を2分した両優の競演は戦後の混乱期のなかで暗中模索していた日本人に夢と希望を与えた。

すべての大新聞が有楽町に集まり、民間放送も有楽町からはじまった

戦後の有楽町は引き続く新聞街でもあった。マリオンの銀座側に朝日新聞が本社を構え、新有楽町ビルの地に毎日新聞本社が、銀座プランタンとそごうに読売新聞本社、そしてラクチョービルの地にはサンケイ新聞本社が進出した。日比谷の東京新聞本社を含め、文字通り、大新聞のすべてが有楽町に勢ぞろいした。

サンケイ新聞の戦後は時事新報の復刊からはじまった。時事は慶応大学を創設した福沢輪吉が明治15年に創刊した日刊紙だが、戦時中に休刊していた。名門紙の復刊に慶応ＯＢの政財界人がかつぎだしたのが産業経済新聞（現サンケイ）の前田久吉だった。21年1月、戦火を浴びたマリアナ式輪転機2台を修復して新聞印刷を再開したが、昔日の人気は回復せず産経新聞に吸収された。一方、産経新聞は時事に2年遅れた23年に復刊。25年には東京でも独自の紙面を発行した。用紙事情の苦しい当時ではあったがいち早く4ページ建て紙面を断行、27年、東京、大阪両本社あわせた発行部数が百万部を突破した。

有楽町の本社はすぐ手狭になった。この年、朝夕刊セット制の実施にともなって山下橋寄りの国鉄（現ＪＲ）線と外濠（現高速道）との間にあった空き地いっぱいに輪転機3台を入れる工場を増築した。しかし、東京進出以来急膨張に次ぐ拡充で有楽町本社では到底対応できなくなった。30年3月、千代田区大手町に地上9階、地下1階の東京産経会館が竣工。20年間に及んだサンケイ新聞の有楽町時代が終わった。

マリオンの西武側に朝日新聞東京本社があった。戦後の新聞界は連合軍の強い圧力に悩まされたが、朝日新聞は日本のマスコミ界を代表する新聞として徹底的にマークされた。紙面も拡充につぐ拡充を重ね、有楽町時代発行部数は5百万部を数えた。周辺道路には朝日新聞の社旗をなびかせたハイヤーがタムロし、千羽に近い伝書鳩が有楽町の空に舞った。朝日新聞増築工事は松竹ピカデリー（旧邦楽座）を包含して、31年から5年間かけて行われた。新社屋は戦前部分の重厚さと増築部分の軽快さを兼ね備えたみごとな建物だった。増築部分に朝日放送などが入り、8階のアラスカからのながめは銀座一帯を見下ろせた。まもなく外濠の埋め立て工事がはじまり、数寄屋橋が高速道の陸橋に変わった。有楽町に数々の歴史をきざんだ朝日新聞の築地移転は55年10月のことであった。

そごうにあった報知新聞が読売新聞に吸収されたのは戦時下17年だが、終戦直後の20年10月からの2年間、読売新聞の仮本社として紙面の印刷もした。有楽町本社時代に天下を震撼させた大争議とレッドパージがあった。西尾末広労働争議調停委員長をまん中に、正力松太郎社長と共産党の徳田球一委員長がテーブルをたたき、灰皿をとばして激論を戦わした。大正11年建築の旧社屋は昭和30年1月まであった。

読売別館と道路を隔てた新有楽町ビルの地にあった毎日新聞本社の戦後は戦災社屋の復旧工事から始まった。22年5月6階ホールが復活。紙面も当初、厳しい用紙統制をうけたが、26年には全面解除されて朝夕刊セット販売とした。毎日新聞が高度成長の波にのって拡大の一途をたどったのは戦後の有楽町時代だが、41年9月その使命を終えて一ツ橋のパレスサイドビルへ移転した。明治42年、有楽町進出以来実に54年間の歳月が流れていた。

毎日新聞ビルの一室で、プロ野球の毎日オリオンズ（現ロッテ）が誕生し、日本最初の民間放送・ラジオ東京（現ＴＢＳ）が旧プラネタリウムを改造した公開スタジオから第一声を送った。戦後もようやく安定した26年12月のことであった。ＮＨＫしかなかった時代、本当にただでラジオが聞けるのかと世間は疑った。「海のものとも山のものともわからない状態で、正直のところここまで発展するとは思いませんでしたね。ＮＨＫからの経験者、まったくの素人と混成部隊でしたが家に帰るのは週に1日か2日。医務室から毎朝義務的に注射をうけて仕事をしていました。官営ＮＨＫに対抗して民間放送を作りあげようという情熱がうずまいていました」（財前和夫業務部長＝有楽町有情）。ニッポン放送が有楽町の糖業会館で開局したのが29年7月。当時、ＮＨＫの本庁舎も日比谷公園側の日比谷国際ビルにあった。有楽町が全盛だった昭和2、30年代にかけて、映画、演劇、新聞に加えたもうひとつの顔、放送街が誕生していた。

⑭ 高度成長への道のり

不死鳥のようによみがえる有楽町

戦後の有楽町駅前商店街はカストリ横丁、すしや横丁につづく銀座玄関口でもあった。戦災でその90パーセントを焼失した銀座は、終戦直後の混乱期こそ有楽町に遅れをとったが、進駐軍直轄地として着実に復活、昭和20年代中ごろから30年代にかけて日本1の盛り場になっていた。とくに年末クリスマス前後の夜は人波が銀座全域をうめつくし、有楽町駅→数寄屋橋→銀座4丁目の縦動脈は身動きできないほどだった。

駅前商店街と公害研究所跡からなる町並みは当時の面影を残している。駅側1、2列目は中央通り商店会で、2、3列目を朝日街とよぶ。ガードと接して狭苦しいが、39年に新幹線ができるまではそこが道路でひろびろとしていた。釣り具などの店太陽の所に21年から49年まで亀八食堂があった。戦前からの飲食店で、駅にかざられている大黒天は当家の家宝でもあった。山王権現境内の神木で彫られ、戦争がはげしくなって疎開したとき駅に寄贈した。商売繁盛の霊験があらたか、行き交う人々の心を和ませている。百果園は終戦直後の22年の開店。かつて、くだものの王様だったバナナを東京ではじめて叩き売りした。隣の中劇亭は21年からだが、一代、小田急案内、ゲームコーナーのあたりは次々と店が変わった。魚河岸、芳松屋、有楽町花馬車、金楽、オペラなどなど。飲食店や喫茶店が開店しては消えた。

ジャーマンベーカリーは終戦直後の昭和22、23年ころ、ウィリヘルム・ミュラーがはじめた。背が高くいかにも西欧人といった彫りの濃い顔つきをしていた。パンと喫茶、洋食、何の変哲もないお店だが、昭和の2、30年代の若者がアメリカン・スタイルをそっと体験したところだ。ジャーマンベーカリーを「現代日本のおしゃれ文化発祥の地」といった人がいた。

第2大丸の地のあたりは戦前、お風呂屋さんだった所だが、戦後中華料理店、レストラン、そばやなどをへて、昭和33年からパチンコ店になった。白鳥、大丸パチンコとの間の小路は戦後のマーケットの名残で、現在も甘栗太郎とふじやフルーツがミニショップを構えている。中華料理・銀華も終戦直後の開店。終戦直後のころ中央通り商店街の日劇側通路は輪タクの溜まり場とされたこともあった。

コーヒーショップ東和の一画はかつての有2ビルで、一時期、丸の内署の寮と署長官舎などになっていた。コンクリート造りのため周辺でただひとつ強制疎開を免れ、戦後は協和銀行有楽町支店などが入った。第1生命の系列で、本店が進駐軍に接収された昭和20年から新有楽町ビルに引っ越す44年まで。川又甘物店は川又ビリヤード、さざ波とかわり、ひつじ屋ははじめ甘党の店、喫茶のドラゴンは戦後まもなくの21年の開店で、3、40年ころはやったレベッカは鳥の座になった。

駅前2、3列目の向かい合った商店街朝日街の名はすぐ裏にあった朝日新聞からとった。「そごうがオープンした32年ころ父の重毅が2丁目の町会長で、親しみやすい名前をつけようということになった。当時朝日新聞社はこの街のシンボル。朝日街の名は私が応募しました」（鈴木重行）。朝日街には終戦以来有楽町とかかわった店舗も多い。入口の3階建てコンクリートビルは有楽会館レバンテで、22年の創業。2、30年代のはじめ、文化度の高さでジャーマンベーカリーと界隈の人気を2分した。終戦直後のころ早稲田派文壇の定例集会場となった。丹羽文雄、尾崎司郎、加藤一郎、室生犀生、石川達三らが毎月16日に集まって文学論に花をさかせ、近くのカストリ横丁やスシや横丁に繰り出した。有楽町マリオンの所にあった朝日新聞が紙面を飾った座談会もここが多かった。店内はその後の改造工事で一新したが、戦後の雰囲気を懐かしげに訪れるオールドファンも多いという。かつて常連の1人、松本清張の代表作『点と線』もこのレバンテからはじまった。レバンテに誘った料理屋の女に被害者と同行する同僚の最後の姿を偶然のようにみせつける。犯人は先回りして殺害し、何くわぬ顔をきめこむが刑事らの追求でアリバイが次々にくずされるというストーリーであった。

柳すしとその隣で平成はじめに閉店した栄すしにはすしや横丁時代の雰囲気が残っていた。柳すしは24年、栄すしは32年から。栄すし周辺は激しく変遷した。戦前から有楽町にかかわった喜多村食堂復活の地で、江戸一、ニッカバー、続いてパチンコサンになり、2階が喫茶店ボアだったこともあった。

昭和62年までゲームコーナーかもめ2階に麻雀荘有楽クラブをもった鈴木重行元店主は法律事務所を開いた父以来2代にわたる有楽町住民で、戦後1階をバーレオとパチンコかもめに譲って法律事務所を2階に移した。「昭和40年にマージャン屋を開いた。有楽クラブといってね。当時、有楽町にあった朝日新聞のみなさんが常連で、朝から閉店まで大盛況でした」。全盛期、近くに事務所を構えた瀬戸わんやも常連客の1人だったという。舞台の裏方さんや芸能人を誘って夢中でパイを掻き回した。レオは28年喫茶店アマンドと囲碁の有楽棋院に変わり、パチンコかもめは東京ではじめてオール20の新型機を設置してファンを喜ばせた。有楽町にはパチンコ店が多いが一時期周辺に20軒以上、マージャン店も

10軒あまりをかぞえた。

有楽町駅前の朝日街、ゲームインの一画は大東楼という中華料理屋をへてこどもマンガ新聞になった。漫画家の鈴木郁三が全国の少年に夢と希望を与えようと創刊した週間紙で、跡地はビリヤード、お好み焼き紅鶴、セヴァンをへてゲームインに。やるきそば中園亭分室、パチンコダイヤ、プリンスと変遷した。陣屋そばの前身はひょっとこといい、やはりそばやだった。この2階に漫才の内海突破が事務所を構えていて、獅子てんや、瀬戸わんもこの事務所が出発点になった。てんやは24年、丸の内警察署巡査、機動隊などをへてトラバーユ。わんやは26年に弟子入りしてコンビをくんだ。てんやの奥さんは近くの甘党屋・おかめに勤務していたので、当時、おかめ、ひょっとこの結婚式と町の話題をさらった。

芸能人といえば裏の宮沢ビルに歌手の雪村いずみも一時事務所を構えた。喫茶店るびあんの2階で、後に東洋歯科に変わり、現在は画廊になっている。戦後の一時期その1階に有楽町有線放送があり、街頭スピーカーで映画館やお店のコマーシャルをながした。有楽町では数少ない親子2代、戦前からの有楽町民である宮沢彬オーナーがるびあんをはじめたのが昭和32年。すぐ目と鼻の先にあった朝日新聞社の社員が新聞印刷の合間をぬって憩いのひとときを楽しんだ。現在も有楽町全盛期のロマンがただよっている。となりのゆうかりの郷案内所の戦後は自家用自動車協会などをへて、昭和30年代から62年まではろんどんやという喫茶店になっていた。ここもちょっとした気取りがあって新聞記者たちの溜まり場であった。マリオン側のルミエールは俳優の田崎潤がはじめた。

美濃部都政とともに消えた公害研究所

有楽町マリオン裏の朝日別館は昭和5年の建築だが戦災もまぬかれた。数寄屋橋際、朝日新聞社の付帯建物で、戦後出版事業部となり、一時、朝日ソノラマ、朝日法律相談所など関連会社が入居した。新聞輸送は第2次大戦も敗色が深まった昭和19年の創業。当時の新聞業界は戦時体制で各社は統合紙面を編集していた。

駅前商店街の4列目は駐車場になっているが、ここに東京都の電気研究所（前出）があった。昭和43年、美濃部都知事の誕生で東京都公害研究所に変わる。光化学スモッグや自動車廃棄ガスなど公害行政の先端的役割をはたしたが65年、庁舎の老朽化で江東区へ移転した。その裏側のゴチャゴチャとした一画に世論会館という小さなビルがあった。20年秋、元時事新報の論説委員だった清水伸社長がラクチョービルの地にあった産業経済新聞社の1室を借りて世論研究会を発足、翌21年東京都交通局の焼けビルに移った。天皇制度についての世論調査を実施して国際的な評価を受けた。

交通局側はハトバス案内所、観光ハイヤー案内所で、中央部分に喫茶店やナイトクラブ、中華料理店、突き当たりの外濠に半分とびでた一杯のみやの大田があった。外濠の対岸銀座側にはこういう店がズラリとならんで戦後有楽町界隈の風物詩でもあった。突き当たりは変電所で、交通局旧庁舎の名残。都電廃止までの間、外濠通りと晴海通りを縦横に走った電車の電力供給役をはたした。

巨人×毎日。セ、パ両雄事務所が道路はさんで対峙

戦後の有楽町駅皇居側は都庁、丸の内の玄関口であり、新聞街、スバル街を中心とした繁華街になっていた。現在そごうデパートの都庁側の地に読売会館があった。読売会館は大正11年建築の旧報知新聞社屋で、後に読売新聞社に吸収された。会館にプロ野球読売巨人軍の球団事務所と読売ホールがあった。巨人はプロ野球の父とうたわれた正力松太郎社長が昭和9年に創設。戦後は川上、青田、千葉、別所らを擁して最強軍団を形成していた。昭和25年プロ野球は2リーグに分かれ、道路1本はさんだ毎日新聞社内にパシフィック・リーグ事務局と毎日オリオンズ（現ロッテ）事務所が生まれた。戦後復興期のこの時期、プロ野球の爆発的人気は少年たちに夢と勇気を与えた。読売ホールも話題をよんだ。当時有楽町、丸の内、銀座周辺で演奏会ができたのは接収解除後の日比谷公会堂とこのホールのみ、毎週水曜日の演奏会はいつも満員の盛況を続けた。レイモンド・コンデ、依田輝男、松本文彦らのコンボ演奏が観衆を魅了した。

有楽町ビルと新有楽町ビルの所には毎日新聞社が本社を構えていた。都庁側から旧館、新館とならび、新館には丸の内名画座と戦前のプラネタリウムを改造した毎日ホールが完成、ラジオ東京がココの声をあげていた。木造2階建ての別館が増築され、大和銀行、第1銀行、オリオン座、スバル座と続いた。オリオン座は21年から30年ころまで。スバル座は前出の火災後、しばらく空き地で、旧館の裏側は進駐軍のモータープール、別館の裏手の農林省直営外食券食堂は農協会館に変わった。

有楽町ビルは昭和41年、新有楽町ビルは44年に竣工した。完成直後の43年に2階有楽サウナで入浴客3名が焼死するという痛ましい惨事がおきた。火事を発見した従業員の誘導でいったんは廊下に避難したが、衣類をとりに戻って煙に巻き込まれた。この火災でポンプ車など28台が出動、駅周辺は野次馬でごった返した。

ブライアント少将らが列席して第1生命返還式

有楽町駅皇居側にある第1生命館は終戦直後にGHQの総司令部として接収されて『GHQ第1生命館』の名が世界に轟いていた。その後国際情勢の変化にともなって日本の独

立復興機運が高まり、26年9月には内閣総理大臣・吉田茂とアメリカ講和特使・ダレスとの間に『日米講和条約』が調印された。翌27年6月総司令部が市ヶ谷の旧日本軍に移転。7月7日には矢野恒太社長、参謀副長ブライアン少将などが参列して待望の返還式を実施した。旧軍時代の徴用以来、実に10年ぶりの返還であった。同じGHQに接収された農林中金ビルは、その後も日本ファイナンスビルとよばれてしばらく接収が続いたが、31年ようやく返還されて、農林中金の東京支店になった。昭和8年の建築で広い窓と太い大理石。ゆったりとしたオフィス空間がすばらしかった。

終戦直後のころ大正生命ビルの1階に森永ストアという食堂が入った。海草入りそばや雑炊、当時人気のアイスキャンデーなどを販売した。蚕糸会館と糖業会館も幸い戦災を免れたので戦中、戦後期は焼け出された農林省の仮庁舎になった。蚕糸会館の戦前は蚕糸7団体の共同建築であったが、戦局が悪化した18年に解散し、その後の曲折をへて大日本蚕糸会に無償譲渡された。蚕糸会と関係団体が有楽町にもどったのは戦後28年のことで、戦前の蚕糸講堂は大阪の放送局に丸貸しするビデオホールと変わった。民間放送が華やかに登場したころで、文化放送の『3つの歌』、フジテレビの『歌の饗宴』などが公開録音された。司会のロイ・ジェームス、コント55、ザ・ピーナツなどがこのホールを足掛かりにして世に出た。58年装いを一新、現在の蚕糸会館が誕生した。糖業会館も19年から当時の農商務省に徴用され、戦後の28年まで引き続いて農林省に賃貸された。この年12月、会館1、2階に糖業協会が復帰、3～5階にニッポン放送が入居した。

電気ビルは電気倶楽部、電気協会、東宝、東光建物、明治生命、東京都交通局、国際自動車の土地所有7社と三菱地所の共同建物だが、建設前は小ビルが連なり、スバル街とスバル街病院、お稲荷さんと変電所などもあった。ガード側正面に構えた明治生命は本社有楽町別館などと呼ばれた。初期は総務部、企画部などが入り、後期は東京外務部と変わった。昭和27年、電気倶楽部とスバル街の間の空き地にスバル街病院が建った。慈恵医大出身の中村嘉雄院長が当時蔓延していた性病、秘尿外科の専門医として開業したもので、45年、ガード側に中村ビルを竣工した。電気協会ビルと東光ビルの間にも小さい空き地があったが戦後しばらくのころ芳見ビル、伊藤家、日比谷歯科、カメラの日比谷商事などになった。日比谷歯科は23年の開店で東宝の女優さんらを常連にした。40年、東宝がこの用地を買収して東宝有楽ビルを建てたが、いくばくもしないうちに撤去された。

占領米軍の接収を23年に解除された富士アイスは本社もこの有楽町館に移し、喫茶店兼レストランとして再出発した。人々は本格的な洋食を待ち望んでいたし、国鉄副総裁、日通社長もつとめた創始者太田永福社長の幅広い人脈、民間放送ブームなどの追い風もあって富士アイスの名がまたたくまに広がった。『有楽町で逢いましょう』のビルのほとりのティルームのモデルで、一世を風靡した映画『君の名は』ロケの支度部屋にもなった。芸能人や政治評論家が食事や打合せ、記者会見場などに使った。一時、都内に工場1、店舗37をかぞえたが、太田が亡くなると経営が乱れ、たまたま隣接地に関連企業のKM観光とKMタクシーをもっていた国際自動車が救済に乗り出すことになる。「波多野社長は富士アイスのお客さまで、ビーフシチューとフライプロンがお好きでした。社長は有楽町の土地61坪と月島の2百25坪にも魅力を感じられ、KMグループの食品部門への参入という観点から決断をされたと聞いています」（最上部長）。富士アイスはこの年、有楽町の本社を閉め赤坂に移転、以来グループの一員としてステーキハウス、ビル経営などにあたっている。

戦後の電気ビル駅側にKM観光バス案内所とKMハイヤー営業所があり、大正生命館と蚕糸会館の間には現在もKM日比谷案内所とハイヤー車庫がある。KMすなわち国際自動車と有楽町とのかかわりは終戦直後からあった。22年バス案内所、27年にハイヤー案内所がうまれ、42年には両所を合同したが、47年観光バス部門を有楽町ビルに移転して電気ビルにハイヤー部門のみが残った。

日比谷パークビルにあった日活国際ホテルで石原裕次郎夫妻が挙式

日比谷パークビルの一画は戦前から空き地で、終戦後接収されて進駐軍の専用駐車場になっていた。接収解除にならないかぎりビル建築など思いもよらなかった23年、日活の堀久吉社長が外人用ホテル建設を計画した。日本政府は願書をみて爆弾が落ちたようなものだ、と驚いたという。関係各省での回議の結果、モータープールが解除になったときをもって効力を発生するとの条件つきで内許可がおりた。「そこで所管セクションであるG4のエブェリー少将に面会して接収解除お願いしたところ、できうるかぎり処理してやろうと好意ある回答を得た」。三菱地所が保管する堀社長メモが書いているという。11月MP本部においてモータープール出入口の鍵が手渡された。

工事は当時画期的ともいえた潜函沈下方式によった。総面積千6百平方メートル、総重量2万5千トンの地下4階部分を徐々にさげ、百74日かけてすっぽり沈めた。27年3月に竣工。地下2～4階が駐車場で、地下1階と1階が店舗、2～5階が貸事務所で6～9階が日活国際ホテルになった。当時の様子に詳しい日比谷パークビル商店会の山縣悠紀夫会長は「6階はフロント・オフィスに吹き抜け式の大きなロビー、シルバールームとよばれた大食堂。7、8、9階はグリル、バー、ビリヤード場、客室といった具合でした。客室は全部で百20、特別客室12の本格的なホテルでしたね。なにしろこの界隈でホテルといえば帝国ホテルだけでしたから。外人客も多く、活気がみなぎっていました」（丸の内）。

国民的人気スター・石原裕次郎と北原三枝夫妻の結婚式もこのホテルで開かれ、日活が本社にもした。日活の有楽町本社時代はその全盛時代。チェーン劇場が全国に広がった。当時有楽町駅前・毎日新聞社の裏手、現新有楽町ビルの一部にも丸の内日活劇場と14レーンのボウリング場などを包含した丸の内アトルが建った。日活の躍進ぶりを象徴した近代劇場であった。日活国際会館は45年、日活の手を離れて三菱地所の所有と変わり、同時に日比谷パークビルと改称、ホテルも閉鎖した。

戦後の香り漂うアメリカン・ファーマシーも開館以来、有楽町駅側の1階に店舗を構えている。アメリカ海軍に深い関係をもった水光社の経営で、初代オーナーは日系2世のウエスリー・K・大山といった。アメリカ人のドクター以外は全部日本女性だが、採用はオーナーが一人ひとり英会話で面接して決めた。「先輩はみんな英語がペラペラで、頭のいい人が多かったですね。当時、東京を訪れたアメリカ人は必ずといっていいほど、この店に寄られました。シャーリー・マックリーン、イベット・ジロー、野球のジョー・ディマジオやスカルノ大統領もみえました」（25年間、従業員として勤務した相馬女史）。日本人がアメリカ文化にあこがれた昭和2、30年代、「（ここには）さまざまなアメリカ産の生活用品が置かれていた。プラスティック（魔法のようなことばだった）の台所用品をはじめてみたのはここである。ナイロンのシームレス・ストッキングも、クリスマス・カードも目にふれたはじまりは、まずこのアメリカン・ファーマシーだった。つまりは日本人が夢みた（豊かな生活）が、すべてここにあったのである」（鴨下信一『日比谷・有楽町を愉しむ』）。

東宝ツインタワービルの前身は弁護士ビルとバラック食堂、東宝材料置場だった

有楽町駅から日比谷公園よりにすすみ、晴海通りをまたいだ公園側の一画の戦後は米軍進駐軍の町であった。朝日生命館がMP司令部、三信ビルが通信隊、三井ビルの空き地はモータープールとCIE図書館、東京宝塚劇場がアーニーパイル劇場、ピアホール、PX売店とされたほか、隣接した日比谷公園のほとんどと帝国ホテルも接収されていた。これらの返還は25年からはじまり、朝日生命館の31年を最後にすべてが解放された。

日比谷朝日生命館は戦後MP司令部として接収されたが一部はそのまま使用できた。朝日生命はここを東京東支社、西支社、日比谷支社とし、オフィスビルとして賃貸もした。1階はテナントの千代田銀行（現三菱銀行）日比谷支店で、ビルの所有管理者でもある朝日不動産が地下のレストランアサヒと屋上の日比谷ゴルフ練習場の経営もした。10打席ほどのミニ練習場だが昼休みやオフタイムはサラリーマンでいっぱいになった。再建された朝日生命日比谷ビルは平成5年の竣工で、大理石をふんだんに使った地上14階地下2階。ユニオンセメント、タイ航空などが入っている。

東宝ツインタワービルの晴海通り側に小ビルとバラックなどがあった。喫茶店日比谷にかわる草野ビル、東宝診療所になった中央亭、まんなかの日比谷土地建物には戦後しばらくあったバラック食堂は安くて大ぶりと評判だった。向かって右側は日比谷ビルで、弁護士や経理事務所が多く有名な御手洗辰雄もここにオフィスを構えた。裏の三信ビル側は戦前編で紹介した陶陶亭で、劇場街側はモータープール、東宝の材料置き場で現場事務所が建った。陶陶亭を除く一画は早めに移転し、板塀で囲まれた。

東宝ツインタワービルは総工費30億円をかけて昭和44年に完成した。地上9階地下3階で屋上に20メートルほどの円筒を2つのせてビル名になった。このビルには航空会社が多い。キャセイ航空、スカンジナビア航空などなど。マカオ観光局、香港貿易発展局、ニュージーランド大使館別館などの外国政府機関とともにビルのひとつの顔をつくっている。東天紅日比谷店と9階の食堂街・9番街、地下飲食店街がビル街の憩いの場所なら7階の東宝ダンスホールと8階土井勝料理スクールも異色テナントといえる。1階玄関のすぐ脇劇場街に面した道路側の日比谷チャンスセンターは、日劇前にあった日劇チャンスセンターの後身。かつて日本1当たる宝くじ売場としてその名を轟かせたが、いまはひっそりとビル街にたたずんでいる。

接収解除後の三信ビルにベッド跡がくっきり、ペンキがベタベタ

三信ビルは昭和25年に接収解除になった。このビルに戦時から戦後にわたって勤務したデンカ化工元社長の宮崎茂郎（故人）は「18年に三信ビルの電気化学に入社しましたが、20年の終戦で進駐軍に接収されて、目黒にあった研究所などを転々としました。接収が解除されて戻ってきたころはビル内に兵士が泊まっていたベッドの跡がくっきりと残り、ペンキがベタベタとぬりたくられていました。商店街は進駐軍時代の外国人経営者が多く、一部はブラックマーケットのようでした」。地下と1、2階には横文字の商店がならび、日本中どこを探してもみつからないようなぜいたくな輸入品が店頭に積み上げられた。地下にピーターという高級レストランがあった。近くにレストランらしいものはなく、占領下では米軍関係者以外オフ・リミット。すきっぱらを抱えた日本人の羨望の的だった。このビルで玄関近くに現在も店舗を構えるコロンビアウォーカーのショーウインドーが当時の名残を伝えている。

『日比谷・有楽町に愉しむ』にフリーライターの三宅菊子がワールドサービスの思い出を書いている。「前は航空会社のオフィスになっている側にあってツナ・サンドやコーンビーフ・サンドをはじめて食べたのがこの店だった。まだ世の中にシーチキンがなかった

時代で、そのころのツナ・サンドはものすごくおいしかったように思える。ニューヨークのビジネスマンがでてくるミステリーなどで読むような雰囲気のある店。いまでもビルの造りの古めかさを眺めたり、地盤沈下のため舗道からビルにあがる段々がいやに高いのがおかしくてフト笑ってしまったりするために、ときどきこのビルを通り抜け、たまにあの店でお茶を飲む」。ビル1階に渡辺プロダクション宣伝部、近くに東宝の本社や劇場街をもつ場所柄もあってか、後身のニューワールドサービスに芸能人などの姿も多い。25年三機工業、旭化成などが復帰し、五十嵐カメラが開業したのが26年。郵船航空サービス、英国航空、ジャパンエアサービスなど航空関係会社が多い。地下と1階は商店街で、ラブロムナード、三信書店、マツダゴルフなどが知られている。

床面積第2位（当時）とうたわれた三井ビルの竣工は昭和35年だが、それ以前に米軍モータープールから返還された駐車場と日比谷劇場に正対して2階建てコンクリートビル日東農林（現三井農林）コーナーハウスがあった。日東は戦後進駐軍の民間情報教育局に接収されてCIE図書館となったが、26年に返還されたとき三井不動産が譲り受けて喫茶店を再開、現在もビル2階にテナントとしておさまっている。大理石をフンダンに使ったこのビルの1階主要部分にさくら銀行東京営業部が入り、旭化成、電気化学工業などが本社を構えている。また、地下と2階商店街では本格的インド料理マハラオ、とんかつ井泉、喫茶スプローザなどが有名である。

宝塚劇場にベルサイユのバラが満開

宝塚劇場も米軍進駐軍に接収された。30年1月朝鮮戦争の勃発で進駐軍兵士が減少したことをうけて返還、この年4月新装、晴れて日本人向けに再開場した。直後の32年2月ミュージカル『アイヌの恋歌』の上演中に出火。舞台上部から火がみえたとき真に迫った演出と勘違いした観客から拍手が起こった。一瞬後緞帳と垂れ幕に火が燃え広がり、劇場内は大混乱となった。死者3、重軽傷25人という大惨事で、死者は楽屋にいた人たち。濃煙と熱気に巻き込まれ、負傷者は階段などで転倒、折り重なったらしい。人のでさかる土曜日午後とあって周辺は野次馬でごったがえした。復興工事はおどろくほどの早さですすめられ、2か月後に再開場。その後の宝塚劇場は宝塚歌劇の黄金時代とともに歩んだ。年6か月ほどの東京公演が続けられ、数かずのすぐれた作品が上演された。『ワルシャワの恋の物語』『モンパリ』『華麗なる千拍子』『風とともに去りぬ』が高く評価され、劇画プームを採り入れた『ベルサイユのばら』が驚異的な人気をよんだ。春日野八千代、鳳蘭、榛名由梨らのスターが誕生していった。

小劇場は接収解除後の30年東宝名人会再開場第1回興業を幕開け、当時映画全盛におされた席亭が次々に廃席していたさなかで、伝統を誇った名人会の再開はファンの夢を満喫させた。三遊亭円生、柳家小さん、リーガル千太、万吉、東京ぼん太、小野栄一らの演芸人が活躍したが、55年8月の東宝演芸場お名ごり特別番組を最後に戦後25年の歴史をおろした。昭和56年日劇閉鎖にともない当時一世を風靡していた日劇ミュージックホールがここに移ったが昔日の人気はなかった。

宝塚劇場の地下は幕間食堂を中心にした地下のれん街になっている。もっとも大きい東宝食堂は戦時下のスイトン食堂、接収時代の進駐軍兵士向け売店なども経験した。現在も復帰直後の幕間食堂の雰囲気が残っている。同じ地下のタカラジェンヌは日劇地下の閉鎖時に移った。宝塚出身者の同窓会・宝友会の事務所兼喫茶店だから、思いもかけないかつての大スターがひょっこり座っているなんてこともある。

日比谷シャンテのある小路を帝国ホテルにすすんだ両側には東宝の劇場群がならんでアミューズメントセンターを形成しているが、戦後の有楽町はこの一画の繁栄とともにあった。映画の最盛期は33年で、この年全国7千軒の映画館に延べ11億人が詰め掛けた。その後テレビの普及と娯楽の多様化がすすみ映画は衰退の一途をたどったが、日比谷劇場と有楽座は洋画界『最後の殿堂』として、その後30年にもわたって頑張った。59年10月、設備の老朽化と時代の趨勢にそった東宝の日比谷再開発計画のため閉鎖が決まり、1か月におよんださよなら公演に戦前戦後を懐かしむファンが有楽町を賑わせた。日比谷劇場横に宝塚花壇があった。スターへの贈り物だろうか「平均5千円見当。宝塚公演のとき普段の2倍半売れた」。さらにその奥まった一画にゲームコーナーや食堂などがならんだ小路があった。家族亭、酎庵、炉端、日比谷サロンなど。日比谷劇場横の階段をのぼると珈琲館ウエストン、洋酒サロンシャトウ、スナックビュッフェで地元サラリーマンなどに隠れたファンが多かった。

日比谷シャンテとつながった東宝会館の終戦直後は米軍進駐軍モータープールであった。接収解除後も駐車場になったが、32年に現在の東宝会館が竣工。6～9階が東宝本社と関東支社で、上階から芸術座、千代田劇場（現日比谷劇場）、みゆき座の3劇場と地下に喫茶東宝が入った。同じ年新築なったニュートーキョービルにニュー東宝（現ニュー東宝シネマ1）、数寄屋橋東宝（同2）も開場した。東宝の劇場チェーンが拡大の一途を辿ったときでもあった。

噴水と東宝人気スターの手形が並ぶ広場、しゃれた喫茶店ヴイヴイのあたりをシャンテ合歓の広場といい、地下は大駐車場になっている。ここは東宝3番街に変わった国策パルプビル、喫茶ビルカテイがあった所である。国策パルプは製紙パルプを作った一部上場企業の本社オフィスで、地上8階、地下1階総面積4千3百平方メートルの巨体を三信ビル

に相対していた。戦後25年の竣工で、1階の主要部分に住友銀行有楽町支店、地下にニューアサヒというビアホールがあってオフタイムはサラリーマンでいっぱいになった。昭和49年東宝が買収して東宝3番街ビルと改称、東宝本社の一部と関連企業などが入った。最後のテナントはゲームスポット、ヒズアンドハズショップ、日比谷麻雀センター、パブ三番街など。戦前編で紹介した喫茶ビルカテイは地盤沈下のせいか、大きく傾いて隣のビルに寄っ掛かってみえた。

シャンテシネ1、2とNETテレビ、放送スタジオなどのある東宝日比谷ビルの戦後は東宝本社別館と東宝駐車場、割烹ひさごなどになっていた。東宝本社別館は昭和12年の竣工の4階建てビルで、戦後の一時期、本社ビルになり、その後も一部が残って本社別館と呼ばれた。最後のころはインドネシアラヤ、阪急茶屋など阪急共栄物産と東宝食堂の直営飲食店ビルで、その裏側にあった木造2階建てのうなぎ屋ひさごは安くてうまいとサラリーマンの行列ができた。

日生会館の竣工は昭和38年だが、それ以前は大正12年建築の愛国生命の旧ビルがあり、宝塚の間は広い空き地になっていた。旧ビルは木造3階建てドーム風で、日本生命の吸収後東京総局が入り、ヌード写真家の草分けとなった杉山吉良の事務所兼暗室もここにあった。昭和38年、日本生命の創立70周年記念事業として日本生命日比谷ビルが竣工。地下5階、地上8階、延べ面積4万2千平方メートルで、外装には格調高い花崗岩がめぐらせた。ビルの大半は東京総局がひきつぎ、建物の半分が日生劇場にあてられた。座席数千3百50、わが国屈指の近代劇場で、ベルリン・ドイツオペラを招いてこけら落としを行った。

みゆき通り、JRガード周辺には終戦直後からの老舗が多い

帝国ホテルに面したみゆき通り、JRガード沿いの商店街に終戦直後からの老舗が多い。平成元年に9階建ての紫ビルに変わった砂本ビルは鉄筋コンクリート3階のかずなくない戦前派ビルだった。合成樹脂新聞社、広告社が終戦直後からオフィスを構え、サカイ好古堂、渡辺商店が新ビルに引き続いている。ガード側いすのコトブキビルは事務用品の寿商店本社で戦後22年ころから。宝石貴金属の植田商店は帝国ホテル店創業以来のかかわりで、戦前はガード側にも店舗と自宅があり、戦後店舗を現在地に移した。美術品の中沢商店、みゆき画廊も終戦直後から有楽町に店舗を構えた。

パチンコ、喫茶、パブ、マージャン店のある富士ビルの所に明和ビルがあった。戦後24年の建設でタイプ養成所、文具新聞社、住宅新報社のほか理髪店、医院などもあった。なかむらは黒塀に囲まれた料理屋で、現在は富士ビルの奥まった一画にお店をかまえている。有楽ビル、第3コカジビルとパチンコポオルのある4階ビルあたりはアートコーヒー、フアニーテクニック、東京茶房、紅鹿、こかじと喫茶店や中華料理がかたまっていた。アートは23年の創業で、コーヒーチェーンの出発点となった。若林というマスターが男前で、香水の香りを漂わせながら町会の世話役をやっていた。落ち着いた感じのこかじのレジに宝塚の準スターだったという美人ママが座って、友人の越路吹雪らがいきつけた。

白バラは25年、喫茶店ボバイあとに開店。最初のママは3か月くらいでやめたので、小松原ママが引きついだ。「当時の銀座、有楽町は盛り場。女の子を5～6人はおいて、いつもお客さんは満員。新有楽町ビルのところにあった毎日新聞の記者が多く、将棋の枡田幸三名人がゲタばきでみえたり、巨人の市川マネージャーが選手をつれて飲みにこられる、なんてこともありました」。いまも3、40年代の雰囲気ただようカウンター、ボックスで昔を懐かしむ常連客がグラスを傾けている。文房具兼雑貨店というより「たばこやのおばあさん」といったほうが通りよかった。小川マサ女史が昭和22年から守った平野屋。マサさんはマリオン前を挟んだ晴海通りの反対側、隆和ビルの所にあった平野屋履物店の長女で、戦後はたばこ屋の店をだしながら2階に住んだ。「お祭りのおそろいのユカタもみこしもちようちんもみんな消えてしまった」と昔を懐かしんだが、79才の平成6年まで店頭に立った。

広東料理で有名な慶楽は大正10年に大陸から来日、有楽町山水楼の調理師として腕をみがいた先代が昭和21年に独立したもので、23年に現在地に移った。53年に火災焼失するまでの慶楽は木造3階建てのモルタル造りで、上に行くほど迷路のようになっていた。階段が急でときに滑り落ちる人もいたが不平をいうでもなかった。越路吹雪、金子信雄、林隆三らの芸能人グルメが足しげくかよった。レストラン赤ひょうたんは45年ころだが、戦後は銀座のグリルコンホールになっていた。割烹かねだとマージャン千賀来のある4階建て金田ビルの金田正昭店主は家族5人でこのビルの階上に住居も構えている。有楽町にがんばる5所帯のうちの1軒。なやみは相続税と固定資産税とか。戦時下の19年創業で、当初は数寄屋橋外食券食堂といった。22年に俳優の山村綜がこのかねた裏あたりで釣り具店を開いたがはやらなかった。

かねたとなかむらビルの間の空き地にはマージャン日比谷荘があった。終戦直後の23年から62年まで。戦前隆和ビルの所で印刷製版所を開いていた加藤芳太郎の未亡人が開き、養女の八重女史が継いだ。全盛期は6台ほどの雀卓がまたたく間に埋まった。時計の月曜堂も20年代はじめからの老舗。なかむらビルは終戦直後有楽町駅前で開店したスバル街病院を45年に移した。角の広田ビルは、戦後焼け野原となった旧宅酒店跡地にバラックを再建。「親父が有楽町にもどってきて酒屋をはじめようとしたが肝心の酒の割当がない。そのうち私と弟も復員してきたので、運送梱包でもはじめようということになった。日比谷

便利社のはじめで、一時、私たちは杉並に住んで、父母だけが残りましたが、35年に建て直して戻り、53年まで有楽町で生活しました」（広田正介社長）。この年広田ビルを竣工。郷土料理店などがテナントとして入った。

日比谷シャンテとJRガードにはさまれた商店街に飲食店やマージャン屋がならぶ小路が通っている。入口の太陽ビルは終戦直後リーダーフォンテホールといい、30年ころから喫茶セシボンに変わった。セシボンのママは美人で雑誌「装苑」の表紙モデルにもなった。パチンコ店、割烹大漁などに変遷したが長続きせず、60年から太陽ビルに変わった。反対側の喫茶店日比谷は40年ころから。ステントグラスをあしらった落ち着いたたたずまいが有楽町全盛期ともいえた3、40年代の雰囲気を伝えている。終戦直後のころはここに丸の内輪業と中華新華があった。丸の内輪業の主人は神崎忠正。「1メートル80はあった大男でね。奥さんと2人くらしで店に若い衆が何人かいました。何しろ豪傑だった。酔っぱらって晴海通りのまん中でゴロンと寝ころんだなんてこともあった。通行人が驚いて丸の内署のおまわりさんが駆けつけるが神崎さんじゃしようがないや、と笑って家へかつぎ込んだ。おやじは戦前は静かで人情味があったと話していたな。終戦で有楽町へ戻ってきたころは一面の焼け野原でバラックの自宅から皇居の森も望めたってね」。

となりの多る満食堂と雀士苑は先代以来の住民で、曽根美子オーナーと末妹が現在も2階に住んでいる。食堂は39年、マージャン店は45年の開店。長男は大学を出て証券会社に勤めたが、お店が忙しくて脱サラし、一家で家庭料理の味と安さを守っている。桜井ビルの地は戦前から桜井大路オーナーが易いをやっていた。戦後は木村映画、東西通信がオフィスを構え、多門、吉うら、幸作などの飲食店にかわった。2階に桜井が経営する雀荘の英があった。マージャン全盛のころで、三井や東宝関係ビルのサラリーマンが卓を奪い合った。

マージャンとやきとり店を経営した大久保孝太郎元店主。「23年に戻ってみると回りは爆撃と強制疎開で一面の原っぱ。そこへバラックを建てて氷店を再開しました。まだ、冷蔵庫もいきわたらない時代。朝早くからミゼットを運転してお得意さんを回るんだけど目が回るほど忙しかった」。その氷屋も40年に見切りをつけた。当時のサラリーマンのオフタイムといえばマージャンか飲むこと。大久保氏はガード沿いにマージャン・日比谷荘を開き、36年には自宅のまん前にもう1軒ぼっぽというマージャン店も開いた。飲食店に転向したのもこのころ。45年にやきとり・すずめをオープン、店数も2軒にした。62年店のま裏に日比谷シャンテが竣工。「日あたりなんてとっくに諦めてるけど病気になると心細くてね」。平成元年思い出の有楽町を引き払って長男の近所に引っ越した。

その隣、大久保跡地とゆう楽ビルの間の駐車場は戦後、小料理の鶴田で、九重のアンコ工場だったり住居だったこともあった。小路の突き当たり、シャンテの裏出口のあたりに小公園があるが、ここは最近まで小路が延びていた。戦後三星宝石店、美登里旅館（東宝みどり荘）、東宝工事センター、東宝スポーツなどに変遷した。美登里旅館は東宝の寮で下役の役者さんや劇場関係者が泊まった。旧一松の佐藤正行邸、銀床などもあった。銀床は戦前からの理容師で村上銀次、常雄の親子2代が昭和60年までカミソリをあたった。

小谷ビルの前身・久須美屋ビルは有楽町最初のビルだった

有楽町東宝映画街の晴海通りに面した一画の戦後も変遷が激しかった。ガード沿い小谷ビルの前身は昭和4年竣工の久須美屋ビルで、戦後の一時期、日比谷ビアホールを併営したこともあった。34年ビル建て直しのため、いったんま裏にあった日比谷ラウンレットに仮店舗を移したが、主人が亡くなって廃業した。38年9階ビルを竣工。1階にTICがある。運輸省の特殊法人のひとつ国際観光振興会が、東京オリンピックを控え来日する外国人客への案内所として開設した。

隣の6階建て常盤ビルは2代にわたった常盤すしをやめビルにした。ギャラリー日比谷になっている4階ビルは中華料理のくえびこの跡地で、ケーキ・ラバンは食堂いとう。喫茶ビバリ、伊藤商店と変わり、さらに隣、洋品のシーバーライトアンドサンド今井商店は戦中18年の創業であった。平成3年、佐藤正行店主の逝去で閉店した一松は大正5年以来老舗であった。1階が和食々堂で2階がお座敷の割烹。佐藤は有楽町町会長もつとめた。都心だから便利はいいが、日常の生活は不便と、夫人は買物の足を霞が関までのばしたという。

有楽町東宝街の入口、晴海通りに面した一画。みるから歴史を体感させる建物がならんでいる。角の東宝食堂ビルは昭和10年建築でこのあたりでは最古参になった。戦後、東宝案内所、東宝OGクラブ、東宝寮などを変遷、現在、うどんの店どんと、洋食サンマルトになっている。となりの薪屋そばは先々代が薪炭業を営み、戦前からそば屋になった。平成2年に閉店したタクトはステントガラスに蔦をはわせたクラシックな雰囲気を残した名曲喫茶だった。「タクトの2階はガラスばりでその一角から日比谷の通りがよく見下ろせた。僕は2時間も3時間もその席にねばり、脚本を書いたり友人に手紙を書きながら、行き交う人々を眺めて少しも飽きることがなかった。僕が21、22才ころ。学生で時間はたっぷりあるけどお金はなかった時代だった」（市川森一＝日比谷・有楽町を愉しむ）。

鉄筋コンクリート10階建ての第2日比谷ビルは、明治時代から有楽町にかかわった築山家の戦後2軒あった和菓子屋築山と喫茶店月山の後身で、当初は木造2階建て、おしることみつまめが有名だった。平成3年、8階ビルに建て替えたマクドナルドは、かつて昭和

25年建築の5階建てビルだった。はじめ新日本汽船東京支社（現在の山下新日本汽船）でイベレットビル、興和火災ビルと改めた。

渡辺プロ人気にミーハー族が松井ビルを取り囲んだことも

有楽町東宝映画街の入口、晴海通りに面した1列目の裏側に松井ビルがある。角の第2小谷ビル、岩崎食堂を抱え込むように、L字型に建っている。ここにそれ以前、昭和34年に焼失した丸の内湯があった。この銭湯は戦前、有楽町のだんな衆が朝風呂につかりながら盆おどりの企画をめぐらせ、東京音頭の元歌『丸の内音頭』を誕生させたというエピソードももっていた。松井ビルは40年に竣工した。周囲の反対があって銭湯は再建できなかったが、ちょうど有楽町から住民が少なくなりはじめたころでもあった。

新築の松井ビルに芸能プロダクションの渡辺プロが入った。渡辺美佐、普社長夫妻が『ナベプロ王国』を築いたのもこの松井ビルであった。「30年春、それまで銀座8丁目のてんぷら屋においていたプロダクションを株式組織に切替えて日比谷の三信ビルに移転し、著名バンドを動員して、興行界に乗り出した。が、資金が続かず、翌年8月にはいき詰まって有限会社にしてわずかに孤塁を支えていた。美佐にとってもっとも苦しい一時期だったわけだ。この危機を救い、また今日の興隆のもとを作ったのは、美佐が銀座のジャズ喫茶を回って集めた寺本一、ミッキー・カーチス、平尾昌章、山下敬二郎らを総動員し、33年2月に日劇で開いた『ウエスタン・カーニバル』である」（ドキュメント・テレビ時代）。この興行は連日超満員となり、渡辺プロは一躍興行界の雄へとのしあがった。手狭となった三信ビルの事務所を新築の松井ビルにものばしたのもこのころ。クレージー・キャッツやドリフターズ、ザ・タイガース、ザ・ピーナツ、アグネス・チャンなどのスターがこの事務所から生まれて育った。ビル前をスターに逢いたいというミーハーファンが取り囲んだこともあった。隣の小林ビルは50年の建設で、一部が町会事務所にもなっていた。楓ビルを経営する太田家は戦前からで、大田食堂を始め楓と変わった。

ブルーシャトーの井上忠夫も有楽町で育った

東宝映画街の2列目は半分がシャンテ合歓の広場に変わったが、ガード側の残る半分は戦後の雰囲気を漂わせている。6階のなる巳ビルははじめモルタル2階建てのラーメン店だった。亡くなった木村平四郎が昭和4年なる巳すしを興し、晩年なる巳食堂に変えた。未亡人の志い女史は現在もこの最上階に住んでいる。「昔も賑やかでしたがいまとは違いました。街を歩いてもやぁこんにちは、と声をかけあって笑いがあった。人情味があった。ところがいまは違う。作られた賑やかさとでもいうのでしょうか」。

ガラス格子戸のはまった2階建ての小料理屋・炉端は戦前有楽町の有力者だった井上忠二郎の流れをくんでいる。『丸の内音頭』生みの親でもあった忠二郎のお店が合歓の広場のところにあった富可川。戦後、忠二郎の義理の弟の次男佐藤清沼南町議が隆和ビルの地で富可川を引継ぎ、もう1軒のお店国定をガード際のこの地で開いた。「外食も食券がなければだめという時代でね。すし屋も米持参者に握るという委託加工方式だったが、戦前から東宝に弁当を仕出ししていたので、接収されていたアーニーパイル劇場の仕出しができた。24年、統制になっていない鰻をふきながしにして百円で売り出した。これが大当たりして、朝日新聞に元祖百円うなぎと紹介されたこともありました」。

「昔風のガラス戸のついた2階建ての小料理屋でね。ママは宝塚の仕事もしていたというコマタの切れあがった美人だった。会議が終わると仲間と2階に上がり込んで飲んだり歌ったりした。大変な騒ぎだった」。客として出入りした中川謹三郎が話している。杉山アキママは麹町で割烹・さん幸を開き、国定は佐藤の兄貞雄と結婚した忠二郎の1人娘・井上すずママに引き継がれて炉端となった。2階がバー・ブルーシャトーだったこともある。森と湖に囲まれてのあの『ブルーシャトー』を作曲した井上忠夫はすずママの長男で有楽町で生まれ育った。「昔は祭りが盛んで、東宝の寄付が少ないとみこしが上映中の日劇や日比谷映画館に突入したことを覚えています。有楽町には今の下町みたいな人種がいたのです。映画と歌を組み合わせた最先端の文化を作る面でなんとかその伝統を守っていきたいですね」（井上忠夫＝有楽町有情）。

4階建て角屋ビルの女主人高橋志づ女史も亡くなった主人が戦後しばらくからかどや食堂を開いていた。54年に建てられた中国飯店には千代田区のタウン週間新聞・丸の内タイムスがあった。昭和26年の創刊で、平成2年に2千号を突破した。先代大塚孝吉社長は63年間有楽町に勤め、町会長も努めた。平成2年に建設された吉川ビルにかつて吉川豆腐店があった。明治35年の創業。「昔は朝3時から仕事をはじめた。最近では近所に住民も減って、ここも共同ビルということになるのでしょうか。そうなればもう豆腐屋もやっていけない」。口ぐせの悩みが現実のものとなった。

昭和39年の新幹線工事でニユートーキヨー裏がかわった

ニユートーキヨー周辺も戦後の雰囲気が息づいている。ニユートーキヨーは27年5月に進駐軍の接収が解除された。この日、日本人オフリミットの看板をはずし、『生ビールの殿堂』として再オープンをはたした。生ビール党にとって待ちに待った日であった。再開間もなくの31年旧館を撤去して現在の9階建てビルを竣工。ビールは大型のタンクローリーで届き、地下の貯蔵庫に収められる。夏期はこれが2回。一日5千リットルにおよぶ売

上げは日本1だという。戦後の35年から15年間、ビール祭りの絵皿プレゼントがあった。著名画伯の絵皿がもらえるとあって大変な人気で、平成元年創立50周年を記念して、当時の絵皿を復刻して、オールドファンを喜ばせた。有楽町のニュートーキョー本店は地下が喫茶、1階がビアホール、2階和食ビアホール、6階パブ、8階がすきやき、9階中国料理、そして屋上が夏期ビアガーデンで、ニュー東宝シネマ1（旧ニュー東宝）と2（旧数寄屋橋東宝）の異色テナントを加えビル全体がビールの殿堂になっている。有楽町にはニュートーキョー経営店が多い。ラクチョービルのケラー、庄屋、東宝ツインタワービルのきふね、おたやんなどが知られている。

ほろほろ鳥料理で有名な大雅は27年の創業。当初は駅側の半分だったが38年に隣接した朝日別館を吸収した。このビルは昭和3年建築の旧電気日報ビルで、朝日新聞社が朝日広告などを入れて第2分室、別館などと呼んでいた。ラクチョービルにはサンケイ新聞の東京本社があったが、昭和30年、サンケイ新聞の旧社屋ビル、工場ビル跡地とその間にあった有楽ダンス教習所、協和興業の2階建ての木造モルタル建築が、新幹線ガードとラクチョービル工事のため取壊された。ラクチョービルは地上10階地下2階ビルで、テナントにはフジ・サンケイグループ系列企業などが入居している。

ニュートーキョー横の3角街。晴海通り沿いは9階ビルが壁を築いている。独立しているがちょっと目では気付かない。九重、マスヤが昭和39年、隆和は翌40年の建築でそれぞれ戦前以来有楽町と係わったお店がビルを建てた。隆和ビルの所にはそばの更科、薬局の小川堂、はきものの平野屋、ほかに中華そば店、麻雀店、割烹などの木造家屋が軒を連ねていた。現在もビル2階にそば屋を開く更科は亡くなった藤村昇太郎が大正11年に創業。町内ではおやじと慕われた。宣伝がきらいで、いいものをつくれば客は必ずくると「無声人を呼ぶ」の大額を店内に飾った。「おとっつぁんは元騎兵隊員で、町内を回るのが日課になっていた。商売はどうだ、なんていいながらブラッと店に入ってくる。戦後しばらくしたころ、便利社のあたりにヤミのたばこ売りが出ていてラッキーセブンやキャメルなんかを売っていた。それが警察に捕まって帰して貰えないというんで、おとっつぁんが代表して引取りにいく。町内みんなに親しまれていた」（近所の人）。平野屋と小川堂は親戚。ビルと1階のたばこ屋を経営する小川利夫店主の祖父が明治時代に履物屋を開いた。

戦前からあった富可川は、木造2階の小料理屋で、屋根にのった清酒・白雪の大看板が山手線からはっきりと読めた。38年新幹線のガード工事を機に閉店。マスヤの戦後は中華料理店。九重会館は甘味もの、割烹、てんぷらの九重で、一時江戸幸、オリンピア、鶴田などの看板を掲げたこともあった。かどのノッポビル有南ビル2は平成元年ころまで渡辺ビルといった。昭和38年竣工の9階ビルで、それ以前に戦前昭和5年建築の大沢ビルがあった。3階ビルの屋上に大きな広告塔をせおっていた。

地下にバービードロのあるチケットセンタービルは40年からで、それ以前は石川囲碁クラブだった。戦前からつづいた小料理おかよは麻雀仲間、尾瀬をへてねのひに、白石日昌堂は4階の白石ビルになった。同じころ飲食店ビルの福石ビル、宮石ビルも誕生し、まといずし、九連閣、双葉すしの一画はくし焼き鳥銀になっている。

有楽町ガード沿い3角街の新幹線ガードあたりに小公園があった。戦前から戦後にかけたお祭りで神楽の舞台がたち神輿の中継点にもなった所だという。昭和39年の新幹線工事にともない区画整理が行われ、8メートルほどけずられたので、ニッカ絵具製造所、小林交易、有楽社などが去った。この一角が大きく変わった年でもあった。ラクチョービルの所にあったサンケイ新聞本社も移転し、変わって新幹線と外濠を埋め立てた高速道が3角街を取り囲んだ。

百年間の有楽町史をみつめたJRガード

有楽町を中心に新橋側、東京側へとのびる赤レンガの高架ガード。皇居側の半分は明治43年国鉄（現JR）山手線開通当時のもので、東海道線が継ぎたされて、昭和39年に東海道新幹線ガードが追加された。旧都庁横に広がる名物商店街、飲食店やマージャン屋が続く一画だが、都庁移転ですっかり客足が遠のいたと主人らはなげく。大半は昭和39年に外濠通りから移転した人たちだ。銀座プランタン（当時読売新聞本社）前あたりの外濠に半分つきだすようにならんだのが、東京オリンピックのための都市計画で外濠に高速道路が建設されることになって引っ越した。山楽はすしや横丁からの転身。「都庁移転反対」と独自の構想を示しながらがんばった。

駅構内日比谷口の隣に店舗を構える川井理髪店は、先代好二郎の父が昭和5年に朝日別館2階で創業。戦後、銀座口高架下の現在花屋さんのあたりに移転、駅の改造計画で現在地に移った。「巨人の別所さん、青田さん、日劇にでていた灰田勝彦さんもみえたし、日航事故でなくなった坂本九さんもおなじみさんだった」という。先代の実弟が昭和9年から55年まで日劇地下で理髪店ホワイトを開いていた米本平一だった。

川井理髪店で働きTBS店に勤めた五十嵐園子女史も理髪一家で有楽町にかかわった。父は終戦直後のころ有楽町ガード近くの明和ビルにあった川島理髪店に勤め、兄もGHQ近くの田中理髪店勤務。「進駐軍の理髪をしていたのでチョコレートや珍しい菓子をよくおみやげにいただきました」。GHQ幹部の髭をあたった田中理髪店は、その後京浜急行の立合川駅付近で子息が店をつづけている。「有楽町に勤めはじめたころは戦後もようやく落ち着こうというころでした。まだゲタを履いていた人が多かった。父が木でボックリ

をくりぬいて火にあぶって磨きをかける。鼻緒は母が着物をほどいて作ってくれたのを覚えています。そのポックリをはいて山手線で通いました」。

晴海通り近くの日本交通公社ＪＴＢプラザ有楽町は戦前の昭和19年、山手線側で開店、新幹線ガードのできた昭和39年に店舗を広げた。天井を新幹線が走り抜けるが、内部にガードの雰囲気はない。有楽町支店開設から50年になる。日の基1泊寮と日の基デパートは日の基と新日の基などの飲食店に引きつがれた。新は兄の西沢栄一店主が経営し、日の基は弟の右二店主が守っている。「亡くなった父が戦後まもなくのころ開店しました。はじめは駅寄りの一部だけで、その後徐々に店を広げました。開店当時はトイレがなく、用たしをよそおった飲み逃げに頭を痛めました」。新の2階はつい最近まで畳敷で1泊寮時代の面影を残していた。跡取りは青い目のアンドルー・ラント。イギリスに留学していた西沢の1人娘と知り合い、ロンドンで結婚して一緒に日本にやってきた。やがて5年。流暢な日本語で注文とりにまわっている。日本文化にあこがれ、すっかり日本人になりきっている。栗田久吉の興した株式会社日の基は現在もこのガードに事務所をかまえている。同じく24年開店のアマンテ。「当時は朝日新聞の記者たちの溜まり場だった。みんなになにかをみつけようと目が輝やいていましたね」。酒店の食安は21年に開設された食安協会の後身。ワイシャツのフジヤマは煙突横丁に興した洋品店を移した。パン屋、囲碁クラブなども一時交通公社あたりにあった。

晴海通りの反対側東宝映画街寄りのガードはＫＳデパートのあと、弘済食品、喫茶ファシーなどをへてゆうかりチェーンになった。利久の酒造、料理楽天、国鉄（現ＪＲ）東京第2工事区などがつづき駐車場のままのところもあった。煙突横丁天米の従業員・岩野茂は現在もこの店の2階に住んでいる。「新潟の高校を出て東京の文房具会社に勤めた。49年に食い道楽が高じて従業員にしてもらいました。2階の部屋は6畳ひとま、まん中に高架の梁がとおっていて狭いんだけどすめば都です」。主人川口一家は35年に鎌田に引っ越したがその後も住民票は有楽町のまま、2代目のこども3人は有楽町最後の泰明小学校卒業生になりそうだ。みゆき通り側はサンケイ新聞駐車場が朝日新聞駐車場に変わり、ドイツビアホールのバーデンバーデンとシュタインハウスになった。丸の内新聞事業合販所は戦時中から、有楽町第2駐車場と呼ばれていたコーナーが赤ひようたん、奥の駐車場はうどん木屋、中華料理の有楽苑はパチンコのミユキに変わった。

ネオンの奥のトンネルにアメ横みたいな店舗がならぶ

ＪＲの山手線と新幹線ガードをまたぐようにインターナショナルアーケードと西銀座電気センターがならんでいる。少しばかり毒どくしいネオンがあってトンネルのようなガードの両脇に店舗がならんでいる。ちょうどアメ横が日比谷に出現したようだ、といった人がいた。外人向けの免税装身具、電化製品、カメラ、時計、みやげものの複製浮世絵、どこでさがしてきたのか中古のハッピやまえかけまでもがところせましと陳列されている。「最近の円高で売上げはへっています。立ち寄る外人も値段を調べるだけという人が多いですね」（店の人）。

新幹線ガードが完成したのは昭和39年。ガード下の商店街もこのときに誕生した。西銀座電気センターから有楽町駅に向かって千成、家族亭、八起、通路を挟んで金陵、札幌屋、一文字と飲食店がつづいている。スパゲティの店サンレオと居酒屋ゆうかりの所にはじめ肉の万世があった。「学生時代は貧しいものばかり食べていたのではじめて万世のバーコラーメンを食べたときは、世の中にこんなおいしいものがあるのかと感動した」。朝日新聞の記者時代、有楽町に通勤したという映画評論家の河本三郎が『日比谷・有楽町を愉しむ』に書いている。「夜になると同僚たちと酒をのみに街へ繰り出した。行く先はなんといってもニュートーキョー裏の有楽町から日比谷に抜けるガード下の焼き鳥横丁が一番多かった。会社から歩いて5分もかからないところだし、何より安くて活気があるからだ。1日の仕事が終わった夕暮れどき、この路地裏にもぐり込んでビールを飲み焼き鳥をほおばる。それだけでなんだか大人になったみたいな気がした。あらゆる酒のなかでいちばんおいしいのは仕事が終わったあとに飲む最初のビール1杯だ、ということを知ったのはこの路地裏でである」。有楽町全盛期、地元サラリーマンはこの一画にロマンを求めた。

⑮ あすへの飛翔

東京オリンピックを契機に有楽町の大改造がすすんだ

昭和35年の東京は『日米安全保障条約』の改定をめぐって激しい闘争のうずにあった。この年1月に調印された『安保条約』は5月20日、野党排除の衆参両議院で強行採決され、これに反対するデモ隊が連日国会を包囲していた。その数は自然承認の前日6月18日には33万人にも達した。15日には全学連の4千人が国会議事堂に乱入し、デモ隊を迎えうった警官隊との攻防のなか、東大生・樺美智子の死去という痛ましい惨事も引き起こした。安保の嵐は有楽町を襲った。日比谷交差点周辺は火炎ビンの煙の中で、両軍が一進一退を繰り返した。商店は店を閉め、大戸をおろした。ガラスが破られ、逃げまどったデモ隊員が民家にも逃げ込んだ。同じような事件が46年11月にもあった。『沖縄返還協定批准』に反対する社共統一デモ隊27万人が国会議事堂周辺を取り囲み、学生中心の過激グループが有楽町で火炎ビンを投げまわった。そして日比谷公園が衝突の場となった。

火炎ビンや公園の石をなげつける学生たち。やがてその一部が門を閉ざしていた松本楼に乱入して放火した。一瞬にして高さ50メートルにもおよぶ炎が夜空を焦がした。松本楼の再建は炎上2年後の48年9月、この時から名物の「10円チャリティカレー」がはじまった。再開記念日の1日、30人のスタッフが1週間かかりでつくるというハイカラカレーが10円で販売され、すべての収入が社会福祉事業に寄付される。順番待ちの行列が3百メートルにもおよぶ。

『安保の年』昭和35年を境いにわが国は高度成長への道を歩みはじめる。新安保を成立させた岸内閣総辞職のあとを受けた池田内閣が『所得倍増計画』を発表する。有楽町も空前のビル建設ラッシュを迎えた。このビルブームの推進役は39年に開催の決まった東京オリンピックであった。まず交通路。当時の道路事情は深刻でこのままではせっかく開催するオリンピックの選手輸送も危ぶまれていた。有楽町を取り囲んでいた外濠の埋め立て工事がはじまった。新橋からヘビのように曲がりくねった2階立てビルが有楽町をへて、東京駅方面にのび、その屋上に高速道路がのった。33年有楽町フードセンター、数寄屋橋シヨッピングセンター、西銀座デパートが誕生したが、一方で江戸時代から親しまれた数寄屋橋が取り壊されるという悲話も生まれた。34年隣接する数寄屋橋公園に、数寄屋橋ゆかりの『君の名は』作者菊田一夫の書になる「数寄屋橋ここにありき」碑が完成、往事をしのばせている。

32年10月、地下鉄丸の内線が開通し、ニユートーキヨー前に西銀座駅が誕生した。当時国鉄（現ＪＲ）の山手線は殺人的ラッシュが繰り返されていた。地下鉄乗り入れは有楽町や銀座サラリーマンたちの夢でもあった。その後、日比谷線、千代田線、有楽町線、都営三田線が相次いで開業、有楽町は首都交通網の一大拠点となっていく。新幹線工事は33年から用地交渉がはじまり、37年から高架工事が開始され、そして39年10月、第1号車が走った。有楽町が大きく変わろうとしていた。

東京オリンピックを契機にはじまった有楽町のビルラッシュはとどまることなくすすんだ。まず新幹線工事のため区画再編の行われたガード周辺の三角街が先鞭をきった。生ビールの殿堂として親しまれるニユートーキヨーが33年に新ビルを完成させ、サンケイ新聞跡地に38年ラクチョービルが生まれた。表通りの九重ビル、マスヤビルも38年、隆和ビルは翌39年に完成したが、晴海通りをはさんだ有楽町駅側には同じころ朝日新聞が大改造工事をおこしていた。昭和2年完成の重厚さあふれる旧館に2倍分の新館を組み合わせた新社屋が有楽町新聞街の象徴にもなった。

ビル建設はさらに続いた。35年三井不動産が当時日本最高（床面積第2位）といわれた日比谷三井ビルを竣工させ、37年には小谷ビル、40年に松井ビル、第2日比谷ビル、41年有楽町ビル、日比谷国際ビル、そして42年には3代目帝国ホテルが誕生した。しかしこうした華やかなビル建築の影に寂しい話題もある。大正時代の代表的建造物として知られた2代目帝国ホテルが42年に、同じとし明治以来市民の足として定着していた都電が撤去され、交差点の日比谷停留所、三信・三井ビル間にあった日比谷始発停留所などもなくなった。

37年には有楽町駅前整備都市計画が決まった。雑然とした東口を再開発して新しい都市づくりをめざそうというもので、すしや横丁と交通局がＡ地区で、朝日街がＢ地区、日劇と朝日新聞がＣ地区。43年、戦後の有楽町史そのものだったすしや横丁が撤去された。最後まで頑強に抵抗しただるま鮨もこの年8月衆人監視の中に強制撤去された。都職員のマイクを借りた主人・榊要次郎のあいさつに拍手がなりやまなかった。55年には朝日新聞が築地新社屋に引っ越す。翌年1月には日劇もさよなら公演。48年間にわたる歴史を幕を閉じた。一方交通会館が完成したのはこれより先43年のことであった。地下2階地上8階の延べ面積2万坪のうち5千坪を都が区分所有し、残りを三菱地所が持つ。テナント数3百の雑居ビルと都庁分室の同居する官民一体ビルとなった。

有楽町駅前にあった読売新聞別館が、現在の読売会館、そごうデパートに変わったのは

昭和32年のことであった。フランク永井がうたって大ヒットをとばした『有楽町で逢いましょう』がこのそごうデパートのコマーシャルソングだった。CMといえば社名、品名のオンパレードだった当時、そごうの名は一字もない。歌のヒットでこのキャッチフレーズが開店時にはすっかり定着し、人並みが幾重にもビルを囲んだ。そごうが全盛期の有楽町を若者の町へとぬりかえていった。同じ題名の映画も作られた。京マチ子、川口浩、野添ひとみらが出演し、当時珍しかったエスカレータや扉のないエアドアなどが出た。「カラーでライトの熱がなにしろすごかったの。デートの場面のパーラーでスプリンクラーがはたらいちゃったの。俳優さんもスタッフもみんなビショ濡れ、大笑いでした」（野添ひとみ＝有楽町有情）。現在もエアカーテン前が待ち合わせ場所の有楽町ランキングで上位に入っている。

日劇のサヨナラフェスティバルで最後の緞帳がおりる

昭和56年2月、日劇会館の最後を飾る『サヨナラ日劇フェスティバル』が公演された。1か月にわたった最終舞台のトリをかざったのが、長谷川一夫とかつての大スター李香蘭こと山口淑子参議院議員であった。舞台にたつ人、それを見守る人々それぞれの思い出を胸に涙のフィナーレに2度とあがることのない緞帳がスルスルと下りた。日劇会館には映画館のほか、宝くじ売場・日劇チャンスセンター、日劇パーラーなどがならび、地下2階に理髪店、マージャン屋、飲食店など20数軒の商店街があった。宝くじ売場は日本1あたると評判で長い行列ができた。理髪店のホワイト（前出）は戦前の9年から。食堂のふじやは14年から41年間つづいた店を閉めた。「最初は牛めしいっぱい30銭ではじめたのよ。その時分には私の店のほかに喫茶店だのすし屋だの、うなぎ屋、おでん屋、クツみがきの店まであってそれは賑やかでしたよ。地下のニュース劇場がたしか20銭、力だめしが1回1銭。1円もってくれば、食べて、見て、遊んで、1日過ごせたのね」（内藤照＝有楽町有情）。日劇の解体工事がはじまったのはこの年夏のことであった。

マリオンの西武側にマスコミ界を代表した朝日新聞の東京本社があった。旧館は昭和2年の建築。戦後の興隆がめざましく有楽町時代、発行部数5百万部を数え、高速輪転機がビュンビュンとうなりをあげた。周辺路地には朝日新聞の社旗をなびかせたハイヤーがタムロし、千羽に近い連絡用の伝書鳩が有楽町の空に舞った。24年1月の第24回総選挙では2階バルコニーから各党々主らがあいさつして人並みは数寄屋橋まであふれた。朝日新聞の増築工事は松竹ピカデリー（旧邦楽座）を包含して31年から5年間かけて行われた。新社屋は戦前部分の重厚さと増築部分の軽快さを兼ねそなえたみごとな建物だった。増築部分に朝日放送などが入り、8階アラスカからのながめは銀座一帯を見下ろせた。まもなく旧外濠の埋め立て工事がすすみ、数寄屋橋が高速道の陸橋に変わった。有楽町に数々の歴史をきざんだ朝日新聞の築地移転は55年10月であった。

いま高らかに国際フォーラムの槌音がとどろく

昭和20、30年代にかけて日本最大のアミューズメントセンターを誇った有楽町も、昭和40年代後半に移ると、テレビの普及、レジャーの多様化現象に押された映画界の凋落とともに『若人の町』の看板は新宿、原宿、六本木、渋谷などに奪われた。それは銀座の地盤沈下に影響されてもいた。有楽町－数寄屋橋－銀座4丁目をむすぶ縦動脈の人流れもめだって減少し、東宝映画街にも全盛期の面影がなかった。こうした現状に1束の明かりを投げ掛けたのが有楽町マリオンの誕生であった。昭和59年10月第1期工事が完成、旧日劇側に阪急デパートが進出し、日劇もビルの上階に、日本劇場、日劇東宝、日劇プラザの名でとどまった。

旧朝日新聞側の主要部には西武デパートが構え、住友銀行、丸の内ピカデリー、朝日新聞記念会館が入った。西武×阪急、有楽町駅前に陣取る巨大ビルの対決はプロ野球の両チームの決戦を彷彿させたりもした。地上11階のマンモスビル。イベントホールがぶつかりあうホットゾーンとしていったんは銀座、有楽町をみはなしたかにみえたヤング層を呼び起こし、周辺一帯をマリオン1色にそめた。中でも人気をよんだのが、晴海通り側入口にしつらえられたカラクリ時計、毎正時の5分間、小人の楽団が人々に時間を知らせる。旧ピカデリー側も一足遅れの平成元年に完成した。正式には有楽町センタービル別館といい丸の内ルーブル、丸の内松竹などがある。

この東口開発の残された一画、朝日街と中央通り商店会は銀座方面へいそぐ人波で現在も活気にみちている。銀座側の1列は都有地千坪と東京電力変電所跡地70坪でここはすでに移転を終えたが、駅側の3列は再開発の足並がそろわない。ここには駅前ロータリーと高層ビルがたつ。再開発準備組合などを中心にすでに20年間にわたった論議も、複雑な利権がからんで意見統一ができないためだ。有楽町の戦後が色濃く残されたこの一画が新しい駅前ゾーンに生まれかわるのもそう遠い先のことではなさそうだ。

昭和62年10月、日比谷シャンテの開館をつげるファンファーレが有楽町のアミューズメントセンターに響きわたった。この日、かつての日比谷劇場、有楽座跡地に建設をすすめていた東宝再開発工事が完了し、竣工式が行われた。地上18階、地下4階のマンモスビルを中心に4階建ての映画館ビル、芸能人の手形や噴水時計のある広場に若者たちが溢れた。東宝の将来計画にはガード周辺を含めた幅広い地域再開発の構想があるという。広場はその名「合歓の広場」として地域振興の期待をもになっている。平成3年3月、今度は有楽

町駅前で百年間の歴史をきざんだ東京都庁が新宿新庁舎移転のため閉鎖された。大議論を呼んだ五万平米におよぶこの都庁跡地に東京国際フォーラム建設の槌音がひびいている。有楽町はいま大きく変わろうとしている。21世紀に向けて躍進する有楽町。その未来も永遠にかがやくに違いない。

のりや貝をひろって生活した漁村が一転して江戸城に変わり、大名たちが起居した。登城のための行列が静々とすすみ、錦のみ旗もとおった。明治維新後は官軍兵舎や元勲邸に占められ、鹿鳴館や帝国議事堂、陸軍省などが開設された。明治後期、大正期は三菱村のレンガ街から近代産業が産声をあげ、昭和前半、軍国主義への道を辿ったこともあった。常に政治と経済の表舞台を歩み続けた有楽町だが、戦後の混乱期には米軍進駐軍のGHQが置かれ、闇市と夜の女、かっぱらいが横行した。映画と観劇の街として戦後の若者たちに夢と勇気も与えたのもこの街。新聞街、放送街、電気の街、丸の内サラリーマンの街、銀座の玄関街……、いろいろの顔が有楽町にあった。首都東京の象徴として繁栄した有楽町の4百年はまさにわが国近代史の縮図でもあった。

有楽町1丁目　（一部2丁目）

資料図1-1　（有楽町1-②、③、⑥　2-①、②、③　シャンテ裏ガード周辺）
慶長8ころ～元和元年　九鬼長兵衛某　本家7百石　台所頭、元和元年無嗣廃絶
〃　8ころ～慶安2-1　九鬼大和守久隆　三田3万6千石
慶安2-5～寛文9年　長門守隆昌
寛文9-9～貞享3-6　和泉守隆律
貞享3-11～元禄4-12　長門守副隆
元禄4-12～〃　11-4　松平主殿頭忠房　島原6万5千石
〃　11-4～享保20-12　忠雄
享保20-12～元文3-3　忠倶
元文3-5～寛延2-5　忠刻
寛延2-7～宝暦12-9　忠祇　宇都宮6万5千石
宝暦12-9～寛政4-4　飛騨守忠恕　島原6万5千石
寛政4-7～文政2-1　主殿頭忠馮
文政2-3～天保11-4　忠候
天保11-6～弘化4-4　忠誠
弘化4-6～安政6-6　忠精
安政6-12～万延元-6　忠淳
万延元-9～文久2-7　忠愛
文久2-10～明治10年　忠和　〃、島原藩知事
明治3-1～〃　4-4　天明5年添地拝領
〃　4-4～しばらく　有栖川宮邸熾仁親王　皇族
〃　しばらく～10年代～昭和22年　仁和寺宮邸彰仁親王　〃
〃　10年代～10年代はじめ　別資料　明治はじめ亀岡勝知所有地
〃　10年代はじめ～13-12　清水栄蔵所有地
〃　13-12～17年　19年～40ころ　三楽舎
〃　17年～31-7～〃　33年　明治法律学校
〃　31-7～〃　33年　信陽堂
〃　31-8～しばらく　大日本実業会兼光岡威一郎邸
〃　しばらく～37-12～明治39年　内外新聞→自由新聞（改号）→明治新聞（改号）
〃　37-12～明治39年　晴海通り沿い（まばらな商店）、裏側（民家、長屋）
後期～大正はじめ　シンガーミシン洋裁学園
〃　伊藤製版、秋山事務所、渡辺松太郎、牧野逸馬、有楽社
〃　明治28ころ19区画に整備（2階建て＝中小会社および民家）。
〃　33年～43年山手線高架工事のため敷地中央部を2分
〃　32年～39年晴海通り新設工事のため敷地北部を分離

2丁目部分
③リューワビル、ますやビル、九重ビル（大正12年関東大震災焼失、昭和20年強制疎開）
大正はじめ～昭和20ころ　加藤中央文芸

昭和10ころ～現在　鶴田マージャン、食堂、江戸幸→戦後鶴田九重喫茶→30年代料理菓子九重、割烹九重、てんぷら九重→39年九重ビル

〃　22ころ～〃　ますや→39年ますやビル

明治10年代～昭和38ころ　小川雑貨店→戦前小川堂薬局たばこ、平野屋履物店、長谷川食堂、てんぷら

大正時代　～〃　38ころ　藤村さらしなそば

〃　時代　～〃　38ころ　井上富可川

〃　12ころ～〃　38ころ　浅井大和田→戦後麻雀有楽荘

昭和はじめ～〃　38ころ　安野→戦後東京卸売リューワビル

〃　40年～現在

〃　5ころ～〃　大沢ビル→34年渡辺ビル→平成はじめ有2ビル（改称）

③ニュートーキョー裏3角街（昭和20年強制疎開）

昭和はじめ～現在　車田八百屋、五月→23年江戸幸→30ころ石川囲碁くらぶ→55ころチケットセンター

〃　はじめ～〃　喫茶店、おかよ→尾瀬、三善、わらじ→ねのひ

大正末期　～昭和38ころ　小林光栄堂、ニッカ絵具

昭和はじめ～現在　白石日昌堂→白石ビル

〃　はじめ～〃　さかな屋→九連閣→双葉すし→鳥銀。新聞店→金陵

〃　はじめ～〃　福石→福石ビル

〃　はじめ～〃　井上→22年有楽社→36年滝山新聞店→宮内ビル

〃　5ころ～〃　石川、石川ビル→ミニ妙ビル

①東宝裏高架商店街

明治43年　～戦前　使用なし→戦前大成社、国際通運倉庫、新橋改良事務所、神田新聞店、三晃社、清風堂菓子、倉庫、ナショナル金銭登録機KSデパート（楽天、若水、きよた、イトウ、精肉、菓子）→ゆうかり、ファシー、弘済食品→レストランゆうかり

昭和戦後　～現在　時事新報車庫→57年シュタインハウス

〃　戦後　～〃　25ころ丸の内メッセンジャー。第2駐車場→48年赤ちょうちん

〃　戦後　～〃　駐車場→53年木屋。駐車場→有楽苑→60年パチンコみゆき

①えんとつ横丁、けむり横丁

明治43年　～現在　通路

昭和戦前　麹町区役所道具置き場

〃　22年　～現在　小松。ことぶき→43年富士。25年～平成9年清すし

〃　22ころ～〃　フジヤマ洋品→33年うた→47年と運とん。おたね→43ころ爛漫

〃　22ころ～〃　喫茶店→24年天吉→27年天米

〃　22ころ～〃　珍亭→30年のみや→42年マージャン→53年養老の滝

①新幹線高架下商店街

明治43年　～昭和39年　道路敷、小公園

昭和39年　～現在　万世→サンレオ、居酒屋ゆうかり

〃　39年　～〃　チボリ→一文字、札幌屋、笹一→金陵、八起、華族亭、千成インターナショナルアーケード、西銀座電気センター

1丁目部分

⑥東宝街（20年戦災または強制疎開）

昭和10年　～戦前　東京名物食堂ビル（東宝）東宝案内所、すし金、すえひろ、はげ天、竹葉亭

戦後　東宝友会、東宝寮、喫茶店、ホットドッグ店、阪急共栄物産

現在　東宝食堂ビル　東宝食堂事務所、どんと、サンマルト

明治はじめ～現在　荒井薪炭店→藪そば→薪屋そば

昭和4ころ～〃　床屋　松川歯科→スターライト、てんぷら松風→タクト→平成はじめ明屋

〃　4ころ～〃　築山しるこ、片岡大工→野口写真館、トム洋菓子、カフェ→22年一松→平成7年新ビル

〃　4ころ～〃　新井うなぎ→22年今井商店→59年シーバーライト

〃　4ころ～〃　井上グリル→29年いとう→42年ビバリー

明治後期　～〃　和田洋食→30年くえびこ→42年ローレンス→56年ギャラリー

昭和4ころ～〃　常磐すし→50年常磐ビル

5番館タクシー→25年新日本汽船→31年エバレッド汽船→43年

興和火災→56年マクドナルド→平成はじめマクドナルド新ビル

〃　4ころ～〃　岡崎アルマイト→月山→43年月山ビル→61年第2日比谷ビル

明治後期　～〃　小谷久須見屋酒店→昭和はじめ小谷ビル→新小谷ビル

大正3年　～現在　花の茶屋→戦前寮→昭和22年竹内外科、小林→46小林ビル

⑥松井ビル周辺（昭和20年強制疎開）　昭和22年かえで→48楓ビル

昭和4ころ～現在　丸の内湯（昭和36年火災焼失）→36年松井ビル

〃　戦後　～〃　町会事務所→日比谷ラウンセット→久須見屋→53年久須見屋管理ビル

〃　22年　～〃　岩崎食堂

日比谷シャンテ広場（昭和20年強制疎開）

昭和4年　～戦前　大正14年水明館、大正井上国定、丸の内タクシー、岡田公証役場、牧野財男事務所

〃　22年　～昭和25年　喫茶インテリジェント、空き地

〃　25年　～〃　60年　国策パルプ本社ビル、49年東宝ビル、東宝3番街ビル

〃　10年　～〃　60年　喫茶カティビル、ベーカリー

〃　62－10～現在　日比谷シャンテ合歓の広場、喫茶ブイブイ、地下駐車場

②東宝日比谷ビル（昭和20年強制疎開）

昭和12年　～昭和60年　東宝文芸ビル、東宝本社ビル、東宝本社ビル別館

〃　4年　～戦前　ABC喫茶、小林菓子、西村ビリヤード、光田、小料理→20年疎開空き地

〃　戦後　～昭和60年　東宝駐車場、うなぎひさご、小花すし、七福

〃　62－10～現在　東宝日比谷ビル（シャンテシネ1、2、スタジオ）

②東宝街第2列（昭和20年強制疎開）
明治35年　～現在　吉川埼玉屋豆腐→平成はじめ吉川ビル
昭和戦前　～〃　木村なるみ食堂→なるみ寿司→50ころなるみビル。美宝堂時計
〃　戦前　～〃　藤平、大寺新聞店→戦後丸の内タイムス→60年ころ中国飯店
〃　戦前　～〃　道原レコード、みどり、花田、美容室、平井浮世絵、九州、バー、カフェかどや→かどやビル。照花→宝来。国定→炉端。
昭和戦後　～現在
②東宝街第3列（昭和20年強制疎開）
大正9年　～現在　広田酒店→明地→23年日比谷便利社→62年広田ビル
昭和戦前　～〃　石川そば→明地→戦後AC美容室→伊藤製作所→中村ビル
〃　戦前　～〃　料理一心→明地→20年代前半月曜堂
〃　戦前　～〃　萩原→明地→23年加藤日比谷荘マージャン→62年明地
〃　戦前　～〃　石井小間物、富永→19年金田数寄屋橋外食券食堂、料理かねだ
〃　戦前　～〃　戦後一時山村釣具店
神崎自転車、岡田カーテン、大寺新聞→明地→戦後丸の内輪業、新華、日本インターホン→40年ころ喫茶日比谷
〃　戦前　～〃　星野製版→明地→戦後曽根、39年曽根だるま
②日比谷シャンテ裏（昭和20年強制疎開）
昭和戦前　～現在　大参社→明地→20年代リーダーフォンテホール→30年ころ喫茶セシボン→58年パチンコ、大漁→60年太陽ビル
〃　戦前　～〃　桜井易学、富田製本→明地→はなぶさ、吉浦、多聞、幸作→桜井ビル
〃　戦前　～〃　市川大工→明地→20年代鶴田アンコ工場→ゆうらく→東宝邑楽ビル
〃　戦前　～〃　湯川→明地→36年大久保すずめ→日比谷8
大正　～〃　曽根八百屋→明地→駐車場
②日比谷シャンテ裏小公園（昭和20年強制疎開）
昭和戦前　～現在　村上ブリキ店→明地→戦後村上銀理容、佐藤正行→小公園
〃　戦前　～〃　山崎板前、小杉トビ、羽生トビ、平島美術→明地→三星宝石、美登里旅館→東宝みどり荘→東宝工事センター、東宝スポーツ→明地→小公園
②東宝街第3列（昭和20年強制疎開）
昭和戦前　～現在　中野祐智通訳→明地→戦後コンホール→45年ころ赤ひょうたん
〃　9年　～〃　大久保氷→明地→戦後氷→40年ぼっぽ→平成元年閉店
〃　戦前　～〃　板倉運動具、少尉留守宅→明地→21年慶楽
〃　戦前　～〃　田代金属→明地→戦後錦江
〃　戦前　～〃　安藤製版→明地→戦後喫茶ポパイ→25年白バラ　22年～平成6年平野屋
戦後山泉堂コーヒー→東京茶房→コジカ→第3ココカジビル
戦後アートコーヒー→ポール→ポールビル
②東宝街行幸通り裏（昭和20年強制疎開）
明治後期　～現在　植田商店、矢沢ハンコ→明地→戦後有楽ビル→有楽ビル
昭和戦前　～現在　岩本ビル、佐藤ビル→24年明和ビル→富士ビル
東宝街行幸通り（昭和20年強制疎開）
昭和戦前　～現在　中屋美術→明地→戦後中沢商店
〃　戦前　～〃　源大洋服、渡辺敬商店→明地→戦後植田商店→平成UNビル
〃　戦前　～〃　砂本ビル→平成はじめ紫ビル
〃　戦前　～現在　岩本ビル、佐藤ビル→戦後イスのコトブキビル

資料図－2（有楽町2－②　ニュートーキョー周辺）
慶長8年　～明治36年　資料図－1庭園の一部として使用
寛永13年　～〃　36年　外濠沿い土手地
明治36年　～　外濠石垣、上に松並木
明治36～40年市区改正工事、山手線工事のため石垣撤去
清水栄蔵所有地
②ニュートーキョー
大正はじめ　藤原商店ほか（大正12年関東大震災焼失）
〃　末期　～昭和10ころ　東京タクシー
〃　～〃　10ころ　商業興信所
〃　～〃　はじめ　吟味亭→昭和はじめゆたか→昭和5年ころ歌の茶屋
〃　～〃　はじめ　共栄美術倶楽部→明地
昭和12－6～〃　21年　ニュートーキョー（初代）、別館　18年閉店
〃　21－7～〃　27－5　進駐軍接収＝オンリービヤホール、翻訳通訳隊
〃　27－5～〃　32ころ　ニュートーキョー（初代）　再開
〃　32－10～現在　ニュートーキョー（2代＝数寄屋橋東宝、ニュー東宝シネマ1、2）
②大雅ビル　あけぼの→空き地→昭和30年大雅→45年大雅ビル
大正末期　～現在　日本動産火災→昭和3年電気日報ビル→15年ころ朝日第2別館、
〃　～〃　朝日新聞分室、朝日公舎、滝山分室→大雅囲込み
②ラクチョービル　青雲堂印刷
大正末期　日本閑ビル（日本新聞社）→昭和12年大阪新聞支社、日本工業
昭和8年　～昭和30－3　新聞支社→17年産業経済新聞支社→20年時事新報、21年産業経
〃　戦前　～〃　35ころ　済新聞東京本社
徳永医院→空き地（防空濠）→28年ころ産業経済新聞工場
28年ころクラブトスカ→32年ころダンス教習所
28年ころ高速交通営団工事区→32年ころ協和興業
ラクチョービル
〃　38年　～現在

資料図－3（有楽町1－①、④　三信ビル、三井ビル、日比谷シャンテ周辺）
慶長9ころ～元和6－8　松平伊豆守信吉　高崎5万石
元和7年　～万治2－2　〃　山城守忠国　明石7万石
万治2－4～天和元－3　〃　日向守信之　古河9万石

天和元－3～元禄6－12	酒井河内守忠挙	前橋13万石
元禄6－12～宝永7－8	青山播磨守幸督	尼崎4万8千石
宝永7－10～延享元－9	〃　大膳亮幸秀	宮津4万8千石
延享元－10～安永4－10	〃　大膳大輔幸道	郡上4万8千石
安永4－10～天明8－4	〃　大膳亮幸完	〃
天明8－4～寛政2－6	松平玄蕃頭忠副	小幡2万石
寛政2－6～寛政4－3	牧野備後守貞長	笠間8万石
〃　4－3～文化14－10	〃　越中守貞喜	〃
文化14－10～文政11－8	〃　貞幹	〃
文政11－10～天保11－11	〃　貞一	〃
天保11－12～〃12－6	〃　貞勝	〃
〃　12－9～嘉永3－3	〃　越中守貞久	〃
嘉永4－4～慶応4年	〃　〃　貞直	大坂城代
明治元年～明治4年	伊達亀三郎宗基	仙台28万石、藩知事
〃　4年～〃7－8	大隅重信	大蔵、民部大輔
〃　7－8～〃8－3	明屋敷	
〃　8－3～〃15－1	神宮支庁出張所	
〃　8－3～〃15－1	皇太神宮遙拝殿	
〃　8－5～〃13－5	神道事務局拝殿	
〃　8－5～〃15－1	神宮大教院、神道事務局、神道教会所、神風講社出張所	
〃　15－1～15ころ～	神宮教大神宮（後出）	
①④三井ビル、三信ビル	平沼八太郎抵当、第一一九銀行抵当変わり	
明治19ころ～明治27－10	三井銀行用地	
〃　27－10～大正12年	三井集会所	
〃　32－1～〃12年	三井集会所新館	
	関東大震災倒壊	
慶長8年～明治32年	外濠	
寛永13年～〃32年	外濠石垣	
大正元年～大正4年	明治32～35年市区改正外濠埋め立て地	
〃　4年～〃7年	大正元年東京信託用地、同年ころ京釜鉄道用地	
〃　13－3～昭和4年	三井物産自動車係	
	ヤナセ本店→6年同東京支社→8年集会所敷地組み込み	
昭和4年～〃42年	三井信託仮本社	
〃　4年～〃20－9	昭和4年市街再編、中央部に道路でき敷地2分	
〃　20－9～〃25－6	東京市電気局始発駅	
〃　25－6～現在	三信ビル	
大正12年～昭和4年	進駐軍接収＝通信隊	
〃　12年～〃4年	三信ビル	
	三井合名仮本社	
	三井系仮事務所5棟	

昭和4年～昭和33ころ	広場、駐車場→20年進駐軍モータープール→27－3駐車場	
〃　13年～〃21－3	日東コーナーハウス	
〃　21－3～〃28－3	CIE図書館＝進駐軍接収	
〃　28－3～〃33ころ	三井不動産日東コーナーハウス	
〃　35－8～現在	三井ビル	
②日比谷シャンテ	神宮奉斉会大神宮神殿　関東大震災焼失	
明治30－2～大正12－9	神宮奉斉会大神宮仮神殿→跡地明地	
大正12年～昭和4－9	日比谷劇場	
昭和9－2～〃10－6	有楽座	
〃　10－6～〃59－10	日比谷ゲームセンター	
〃　12ころ～〃59－10	日比谷アーケード	
〃　22ころ～59－10	最後のころ	
〃　62－10～現在	ファンタジーコーナー、アートギャラリー、ギンレス、スタンド売店、宝塚花壇、パブボンド、日比谷サロン、ろばた邑楽、邑々楽々亭、笑福、宝くじ売場、ルックミアアクセサリー、阪急エアーズ、有楽ピュッフェ、ウエスタン、シャトウ	
②東宝会館	日比谷シャンテ	
大正11年～大正12－9	大松閣	
〃　13年～昭和20年	大松閣新館（再建）→昭和4年山水楼洋館（昭和20年戦災焼失）	
昭和20年～〃30ころ	進駐軍接収＝モータープール→25年駐車場	
〃　32年～現在	東宝会館の一部（芸術座、千代田劇場→日比谷劇場、みゆき座）	

資料図1－4	（日比谷公園①　有楽町1－④、⑤さき　三井ビル前日比谷通り）	
慶長9ころ～慶長14－10	水野市正忠胤	愛知県内1万石
寛永ころ	沼田真田家中屋敷	大番頭、慶長14年切腹廃絶
万治元－12～寛文10－12	岡田豊前守義政	勘定頭
寛文10－12～延宝8－12	〃　善治	伏見奉行
延宝8－12～不詳	堀田対馬守正英	茨城県内1万3千石
貞享ころ～元禄2－6	坂本内記重治	深見1万石
元禄2－8～〃7－4	植村土佐守忠朝	千葉県内1万1千石
〃　7－4～〃9年	北条伊予守氏治	狭山1万1千石
〃　9年～元禄10－11	〃　遠江守氏朝	〃
〃　10－11～〃15－12	松平主計頭近鎮	5千石
〃　15－12～享保7－7	土屋丹後守朝直	3千石
享保7－7～〃12ころ	〃　兵部少輔秀直	〃
〃　12年～享保17－4	松平内匠頭東興	5千石
〃　17－4～〃17－5	安藤山城守愛定	5千石
〃　17－5～17閏5	〃　内匠頭定厚	〃
〃　17－7～延享3－9	青山大膳亮預かり	預かり地を2分。一部を解除
延享3－9～寛延3－12		

大番頭	
〃	
側衆	
〃	
〃	
中奥小姓	

寛延3－12～明治2－3　山内土佐守中屋敷
延享3－9～宝暦9－6　今大路民部大輔元勲1千2百石
宝暦9－8～明和4－6　〃　寿国　〃　典薬頭
明和4閏9～寛政5－7　〃　正福　〃　〃
寛政5－10～〃6－5　〃　雄五郎親興　〃　〃
〃6－8～文政6年　〃　典薬頭正庸　〃　〃
文政6年～明治2－3　蜂須賀阿波守添屋敷
明治2年～〃3ころ～〃4年　伊達亀三郎預かり（前出）
〃3ころ～〃4年～〃7－8　仙台藩邸囲い込み（前出）
〃4年～〃7－8　大隅重信邸囲い込み（前出）
〃8－3～〃8－3～15－1　神宮司庁出張所の一部（官舎）
〃8－3～15－1　皇太神宮遙拝殿（前出）
〃8－5～13－5　神道事務局拝殿（前出）
〃15－1～20ころ　神宮教大神宮の一部（境内、官舎）
〃15ころ～〃20年　平沼八太郎抵当、第一一九銀行抵当替え
〃20年～〃31年　東京ホテル→28年ブラジル公使館
〃31年～〃32年　日本倶楽部仮館
〃　明治36年市区改正工事開始
〃　39年日比谷公園、前庭、日比谷通りの一部になる

資料図－5　（有楽町1－①、②　東宝会館、宝塚劇場、日生会館）
慶長7年～明治36年　外濠

①日本生命日比谷ビル（大正12年関東大地震焼失）
明治36年～大正元年　愛国生命用地
大正元年～現在　愛国生命→日本生命→昭和38年日本生命日比谷ビル（日生劇場）

①東京宝塚会館（大正12年関東大地震焼失）
明治36年～大正7ころ　東京市街鉄道→39年東京鉄道→44年東京市電気局庁舎
〃36－12～〃12－9　東京電灯→大正12－9～昭和8空き地、石炭置場
昭和9年～昭和19年　東京宝塚会館（宝塚劇場、東宝小劇場）
〃19年～〃20年　中外化工作業場
〃20年～〃30年　駐軍接収＝アーニーパイル劇場、PXほか
〃30年～現在　東京宝塚会館（宝塚劇場、東宝演舞場→56年日劇ミュージックホール）昭和33年焼失改修

②東宝会館（大正12年関東大地震焼失）
明治36－12～　神宮奉斉会用地
〃後期～大正12－9　神宮物置など小設備、トム商会ほか
大正13年～昭和20－1　大松軒→昭和4年山水楼日本館（昭和20年戦災焼失）
〃戦前～〃20ころ　和泉組、喫茶店、魚住
〃20ころ～〃30ころ　進駐軍接収＝モータープール→駐車場
〃32年～現在　東宝会館の一部（東宝本社、芸術座、千代田劇場→日比谷劇場、みゆき座）

資料図－6　（有楽町1－⑤、⑧　パークビル、大正生命、丸の内署）
慶長9ころ～慶長19－10　奥平大膳太夫家昌　宇都宮10万石
慶長19－11～寛文8－2　奥平美作守忠昌　宇都宮10万石
寛文8－8～延宝7－9　〃大膳亮昌能　山形9万石
延宝7－9～元禄元－2　土屋相模守政直　田中6万5千石　貞享4年～享保3年老中
元禄元－2～〃13－12　稲葉丹波守正往　小田原8万石
〃13－12～正徳4－9　戸田能登守忠真　高田6万7千石
正徳4－9～元文3－9　秋元但馬守喬房　川越5万石
元文3－10～延享4－6　〃越中守喬求
延享4－6～宝暦元－7　本多中務大輔忠良　古河5万石
宝暦元－9～〃9－7　〃中務大輔忠敞　浜田5万石
〃9閏8～明和4閏9　〃忠盈
明和4－11～安永6－5　〃忠粛　岡崎5万石
安永6－7～寛政2－8　〃忠典
寛政2－10～文政4－2　〃忠顕
文政4－2～万延元年　〃美濃守忠考
万延元－6～文久2－7　本多能登守忠紀
文久2－8～〃3－8　有馬遠江守道純
〃3－8～〃3－10　永井飛騨守預かり
〃3－10～元治元－7　松平豊前守信義
元治元－7～〃元－12　本多能登守忠紀
〃元－12～慶応3－6　遠山信濃守友禄
慶応3－6～〃4年　永井肥前守尚服
明治元ころ～明治3－11　岩倉具視
〃3－11～〃4－3　有栖川宮熾仁親王
〃4－3～〃4ころ　蜂須賀徳島藩邸

⑧パークビル　日比谷ビル
大正はじめ～大正12－9　山かん横丁
明治末期～昭和4年　43年～大正9売文社、服部浜次洋裁、岩崎善右衛門おでん食堂、花月食堂、カフェオデッサ、外国語協会学校、大正11年山水楼、野村印刷、大正9年信泰洋服、明治44年日本ジケードコットン、東華生命、日比谷タクシー、鎌元組管理事務所、折笠医院、西川たばこ、カフェ喜楽、吉田電気土木、神田新聞、集成社印刷、紅露法律ほか
昭和4年～〃24－11　明地→20年進駐軍接収＝モータープール
〃27－3～現在　日活国際ビル（日活国際ホテル）45年日比谷パークビル
晴海通り　明治40年～現在　晴海通り、昭和4年道路拡張
⑤朝日生命　京都平野屋、長陽軒
明治40ころ～大正12－9

大正はじめ		東京自動車、日比谷建築
	昭和6－12～昭和20－10	昭和3年関東大震災後市街再編
	〃 20－10～〃 31－2	常磐生命（美松デパート、美松）前川生命、帝国生命
	〃 31－2～現在	進駐軍接収＝MP司令部
⑤東宝ツインタワービル		朝日生命 58年再建
明治末期		日比谷ホテル、スター商会、松原浪司事務所
大正8年	～昭和17年	陶々亭→震災直後仮建築→昭和5年陶々亭（3代）
昭和17年	～〃 39－11	満州会館、国際善隣倶楽部、陶々亭
大正はじめ～〃	戦前	大竹写真館
〃 8年	～〃 はじめ	幸楽
昭和4年	～〃 44ころ	カフェ日比谷→山本日比谷料理→日比谷食堂→喫茶日比谷
〃 4年	～〃 戦前	有楽庵、富坂商店、ひさご、尾木商店、明治製菓販売、斉藤有楽町郵便局、明治食堂、たなか屋、椿クリーニング、塚原事務所、モーロー、そばや、近田小間物、美松倉庫、五番街タクシー、日比谷タクシー駐車場→東宝材料置場。東宝診療所、日比谷ビル、東宝用地
〃	戦後 ～〃 44ころ	
〃	44年 ～現在	

資料図1－7	（有楽町1－⑦ 電気ビル）	
慶長ころ	明地	
〃 10年代～慶長19－9		池田備中守長吉
〃 19－冬～寛永9－4		〃 長幸
寛永9－8～〃 18－9		出雲守長常
〃 18年 ～〃 20－2		青山大膳少輔幸成
〃 20－3～貞享元－8		大膳亮幸利
貞享元－9～元禄3－6		播磨守幸督
元禄3－6～〃 9－10		本多紀伊守正永
〃 9－10～〃 14－10		内藤丹波守政親
〃 14－10～宝永5－10		松平紀伊守信治
宝永5－10～〃 7ころ		土井甲斐守利知
〃 7－12～正徳4－9		森川出羽守俊胤
正徳4－9～享保2－9		石川近江守総茂
享保2－9～寛延元－1		永井飛騨守直期
寛延元－1～宝暦8－4		近江守直行
宝暦8－6～明和7－11		
明和8－1～文化6－8		日向守直珍
文化6－8～天保13－11		飛騨守直進
天保13－11～文久元－9		直与
文久元－9～慶応元－4		飛騨守直輝
〃		直矢
慶応元－5～明治4ころ		日向守直諒
明治4ころ～〃		万里小路博房

		鳥取6万石
		松山6万5千石
		無嗣廃絶
		尼崎5万石
		4万8千石
		沼田4万石
		泉2万石
		笹山5万石
		大野4万石
		生実1万石
		下館2万石
		高槻3万6千石
		藩知事
		議定、宮内卿
		公卿

明治	～明治23年	万里小路通房
〃 23年	～〃 32年	清棲家教、幸保 伏見宮第15王子伯爵 宮中顧問官（昭和22年まで土地所有）
⑦旧電気倶楽部ビル		（明治後期清棲家教所有地）
明治32年	～大正11年	日本倶楽部
大正11年	～〃 12－9	電気倶楽部（関東大震災焼失）
〃 13－2～昭和2ころ		電気倶楽部仮館
昭和2－9～〃 50ころ		電気倶楽部ビル 20－5一部戦災焼失
〃 9－1～〃 50ころ		電気協会ビル
⑦旧スバル街		（明治後期清棲家教所有地）
大正はじめ～昭和20年		シンガーミシン、空き地
昭和23年 ～〃 50ころ		スバル街
		マロン、ナイル、タワー、フロッセル
		スバル→みどり・ナイル、ブラウン、ママ、ハリウッド、ミスズ、カモワール、フロリダ、オロ、モカ、博雅、オパール、コロンボ→ユニコン、ハブ、リボン、シント→新羅、大井→月太日書房、地下ねこ遊技場
⑦旧電気協会ビル		（明治後期桜井小太郎所有地）
明治30ころ		日本改進党本部
大正ころ		明地
昭和9年	～昭和50ころ	電気協会ビル
〃 27年	～〃 45ころ	スバル街病院
⑦旧東光ビル		（明治後期桜井小太郎所有地）
明治26年	～大正時代	電報社→明治36年毎日電報→大正はじめ内外興業
昭和3－3～昭和13－7		三柏ビル
〃 13－7～〃 50年		東光ビル（20－5ビル内部戦災焼失）
⑦旧東宝（明治後期桜井小太郎所有地）		
明治末期	～昭和20年	藤原商店→大正2年一色印刷→昭和はじめ一色印刷（再建）
昭和20年代		芳美ビル、伊藤、オリエンタル、日比谷商事
〃 23年	～昭和50ころ	日比谷歯科
〃 38年	～〃 50ころ	東宝ビル
⑦旧明治生命（明治後期桜井小太郎所有地）		
明治33年	～昭和15ころ	塩瀬総本店→昭和はじめ塩瀬総本店（再建）
昭和12年	～〃 50ころ	東宝→21年明治生命
⑦旧電気局変電所周辺（明治後期青木友子所有地）		
明治後期	～昭和20ころ	睦屋人力車→睦屋運送（関東大震災焼失）→睦屋車庫、売店→
		明地
昭和22年	～〃 47年	国際自動車バス案内所、KM観光案内所
〃 27年	～〃 50ころ	国際ハイヤー案内所
大正はじめ～大正12－9		田中製版（関東大震災焼失）
昭和9年	～昭和20－12	富士アイス有楽町館

昭和20－12～昭和23－11	進駐軍接収＝GHQ－PXベーカリー
〃 23－11～〃 43年	富士アイス本社
明治中期～〃 50ころ	電気局変電所
江戸時代～〃 50ころ	有楽稲荷
⑨JR高架山の手、京浜東北線ガード	
明治42年～現在	明治30ころ鉄道用地→明治32ころ工事開始→山の手線開通
大正末期～昭和戦前	岩崎食堂
昭和戦前～〃 21年～現在	カツ屋、魚善、東成社、曙食堂、倉庫
	日の基一泊亭→25年日の基デパート
	一平、喜久屋、きよし、すみれ、ときわ、漫亭、吉川小間物、
	山中食品、千葉菓子、稲荷ずし、パチンコなど
	25年日の基食堂、25ころ東亜の酒造→40ころ新日の基
	最上、すし銀→さわら。漫亭→アマンド→ラーメン。ラン→
〃 20年代～〃	チカロ
〃 20年代	天楽、ルーエ、富士堂→食料品などのマーケット
〃 20年代～現在	食料安定協会→食安酒店。交通公社。フジヤマ。エキスプレス→パン、囲碁
〃 20年代～〃	有楽町アーケード
	ショールーム→カナダ靴店→七味八珍→ラーメン
	紫光堂カメラ屋→不詳→有楽町しむら→ともえ商会→チャンポン→やきとり
⑨新幹線ガード	
昭和39年～現在	交通公社プラザ有楽町
⑦電気ビル	
昭和54－3～現在	電気ビル北館
〃 50－9～〃	電気ビル南館
〃 54ころ～〃	有楽稲荷

資料図1－8	（有楽町1－⑨、⑬ 第1生命・農林中金ビル、丸の内警察署周辺）
慶長～明暦3－7	伊達遠江守秀宗
明暦3－7～天和元－10	宇和島10万石
寛永ころ	宗利
天和元－10～元禄10－4	内藤若狭守重頼
元禄10－4～享保4－5	松平紀伊守信庸
享保4－5～寛延2－9	牧野備前守成央
寛延2－11～天明4－5	越中守貞通
天明4－5～寛政12－8	貞長
寛政12－11～文政6－11	松平右京亮輝和
文政6－11～〃 11－2	右京太夫輝延
〃 11－2～天保5－2	牧野備前守忠精
天保5－2～〃 8－5	酒井修理太夫忠順
〃 8－5～弘化元－12	侍従忠義
	青山駿河守忠良

弘化元－12～嘉永元－4	土井大炊頭利位
嘉永元－4～〃 元－8	古河8万石
〃 元－11～慶応3－4	利亨
慶応3－4～〃 4－2	利則
	利与
	空き家（東征軍兵隊屯所か）
明治2－4～〃 2ころ	仁和寺宮
〃 2ころ～〃 4ころ	高知藩屯所
〃 4－3～〃 4ころ	徳島藩屯所
〃 5年～〃 23年	東京鎮台第1大隊教導団、21年陸軍省第1師団
〃 23年～	三菱地所所有地
⑬旧第1生命館	
明治44年～大正12－9	警視庁（大正12年関東大震災焼失）
大正12－9～昭和10ころ	明地、警視庁官舎
昭和11年～〃 20－9	第1生命館→19年東部軍管区徴用（部分）
〃 20－9～〃 27年	GHQ総司令部＝進駐軍接収
〃 27年～平成5ころ	第1生命館
平成	合同ビル建設中
⑬旧農林中金ビル	
昭和8－10～昭和20－9	産業組合中央金庫→20年農林中金ビル（名称変更）
〃 20－9～〃 31－2	GHQ経済科学局 進駐軍接収
31－2～平成5ころ	農林中金ビル、農林中央金庫東京支店
平成	合同ビル建設中
⑨丸の内警察署消防署合同庁舎、糖業会館、蚕糸会館	
明治44年～大正12－9	警視庁消防本部（大正12年関東大震災焼失）
大正12－9～昭和はじめ	明地、警視庁官舎
昭和5年～〃 48ころ	丸の内警察署→8年丸の内消防署合宿所→12年有楽町警備派出所→17年有楽町消防派出所→19年有楽町消防出張所
〃 49年～現在	丸の内警察署、丸の内消防署有楽町出張所合同庁舎
〃 10年～〃	糖業会館→19年農工省徴用→20年糖業会館
〃 8年～昭和55ころ	蚕糸会館旧館
〃 14年～〃 55ころ	蚕糸会館新館
〃 58年～現在	蚕糸会館

資料図1－9	（有楽町1－⑩、⑫ 新有楽町ビル、有楽町ビル（一部）
慶長9ころ～慶長19－4	松平飛騨守忠政
〃 19年～寛永9－1	加納10万石
	忠隆
寛永9ころ～寛文10－4	大久保加賀守忠職
寛文10年～延宝後期	唐津8万3千石
元禄はじめ	〃 出羽守忠朝
〃 はじめ	小田原11万3千石
〃 4ころ～元禄5－1	加藤佐渡守明英
〃 5－1～〃 6－10	壬生1万5千石
	松平伊賀守忠周
	亀山3万5千石
	松平助十郎信治
	小島1万石
	松平右京亮輝貞
	高崎7万2千石

	無嗣断絶

有楽町2丁目

元禄6－10～享保8－4	松平左近将監乗邑	鳥羽6万石
享保8－4～元文2－4	井上河内守正之	笠間6万石
元文2－11～宝暦10－12	〃　正経	〃
宝暦10－12～安永2－5	本多紀伊守正珍	田中4万石
安永2－5～〃　6－6	〃　正供	〃
〃　6－8～寛政12－7	〃　伯耆守正温	〃
寛政12－7～文政8－5	〃　正意	〃
文政8－5～天保10－6	松平右京亮輝承	高崎8万2千石
天保10－9～〃　11－8	〃　輝徳	〃
〃　11－11～弘化3－9	〃　輝充	〃
弘化3－9～万延元－6	〃　輝聡	〃
万延元－8～慶応4－春	〃　輝声	〃
慶応4－春～明治はじめ	官軍鹿児島藩兵隊屯所	
明治はじめ～〃　4ころ	大河内輝声	高崎藩知事
〃　5年～〃　9－1	明治5－3火災焼失、御用地	
〃　9－1～〃　19－11	東京鎮台第1大隊教導団	
〃　19－11～〃　23年～	〃　本部	
	〃　第1大隊教導団、陸軍兵事学校	
	三菱合資所有地、明地	

⑫新有楽町ビル旧毎日新聞

明治42年～大正5年	東京日日新聞
〃　42年～〃　11年	東京日日新聞工場
〃　末期～〃　11年	大田正弘
大正6年～昭和41年	東京日日新聞、毎日新聞旧館（6年東日1号館、11年2号館3号館、14年4号館、昭和3年5号館）
昭和13年～〃　41年	東日会館、東日新館（東日プラネタリウム）
明治後期～戦前	警視庁用地、警視庁幹部官舎、明地
昭和20年代～〃　14－7	農林省外食券食堂
〃　14－7～昭和42ころ	農林組合中央会館、農協会館（第1生命別館）
明治後期～戦前	警視庁幹部官舎、警視総監官舎、明地
昭和20年代～〃　29－9	進駐軍駐車場
〃　29－9～昭和43ころ	日活テアトル（丸の内日活、ボウリング場）
〃　44－6～現在	新有楽町ビル

⑩有楽町ビル

明治43年～昭和5年	日比谷警察署
昭和5年～〃　23ころ	明地
〃　24年～〃　41年	毎日新聞別館
〃　41－5～現在	有楽町ビル

資料図1－11（有楽町2－⑤　有楽町マリオン周辺）

⑤旧日劇側

天明5年～明治10年	松平島原藩邸の一部（前出）
寛永6年～〃　6年	数寄屋橋門大番所
慶長時代～〃　40年	周辺道路敷
寛永13年～〃　40年	外濠石垣
明治40年～現在	晴海通り
〃　39年～明治末期	バラ歯磨き工場
大正元年～大正11ころ	タクシー自動車
〃　12年～昭和2年	大正生命、日本教育生命、金光庸夫
昭和8年～〃　56－2	日劇会館（日本劇場、日劇ミュージックホール、第1地下劇場→丸の内東宝、日劇小劇場）19～20年中外化工作業場
〃　20年代～〃　56ころ	日劇チャンスセンター、アートシアター日劇文化
〃　61年～現在	有楽町センタービル（マリオン）1（有楽町阪急デパート、日劇東宝、日本劇場、日劇プラザ）

⑤旧朝日新聞周辺

寛永6年～明治6年	数寄屋橋門枡型
〃　13年～〃　40年	外濠石垣
〃　6年～昭和32－7	数寄屋橋→明治40年晴海通りに移築→昭和4年コンクリート橋
昭和34－3～現在	高速道新数寄屋橋
大正11年～大正12－9	万歳生命
〃　12年～昭和3年	間組材料置き場
昭和4年～〃　55－10	朝日新聞　昭和35年大改修、増築
大正11年～大正12－9	浄瑠璃座
〃　13年～昭和9年	邦楽座
昭和9年～〃　21年	丸の内松竹→12年国際ニュース→13年丸の内松竹→14年邦楽座
〃　21年～〃　22年	ピカデリー＝進駐軍接収
〃　22年～〃　34ころ	ピカデリー→25年松竹ピカデリー　昭和35年朝日新聞に併合
〃　61年～現在	有楽町センタービル（マリオン）2
〃　64ころ～	有楽町センタービル（マリオン）3

⑦旧公害研究所周辺

寛永6年～明治40年	外濠石垣
明治40年～大正12年	明地
大正14－10～昭和43年	電気研究所
昭和43年～〃　65年	東京都公害研究所
大正7年～〃　40年	京橋変電所、東京電力有楽橋変電所
昭和戦後～〃　40ころ	交通局健康保険組合、世論会館、第1カーボン、モナリザ、エリザベス、春香苑、ハトバス案内所、新日本ハイヤー、自動車車庫、道場
〃　40ころ～〃　65ころ	新聞輸送仮作業所、駐車場
65ころ～現在	東京都交通局協会管理有楽町駐車場

資料図1-10（有楽町2-⑧、⑨ 有楽町駅一部、朝日街）

慶長年代	森	美作守忠政	津山18万7千石	
元和年代～寛永14-5	堀	美濃守親良	真岡1万2千石	
寛永14-9～延宝元-7	堀	美作守親昌	飯田2万石	
延宝元-9～貞享2-11	〃	周防守親貞	〃	
貞享3-3～元禄10-3	〃	美作守親常	〃	
元禄10-5～宝永4-4	〃	岩見守親賢	〃	
宝永4-4～享保2年	松野	壱岐守助義	1千5百石	
享保2-2～元文元-8	大岡	越前守忠相	2千2百石	
元文元-8～〃4-9	松波	筑後守正春	5千百石	
〃4-9～〃5-12	水野	備前守勝彦	1千石	
〃5-12～延享3-6	島	長門守祥正	1千2百石	
延享3-7～寛延3-1	馬場	讃岐守尚繁	2千石	
寛延3-3～宝暦3-11	山田	肥後守利延	2千5百石	
宝暦3-12～明和4-5	土屋	越前守正方	1千石	
明和5-5～天明4-3	牧野	大隅守成賢	2千2百石	
天明4-3～寛政元-9	山村	信濃守良旺	5百石	
寛政元-9～寛政7-6	池田	筑後守長恵	9百石	
〃7-6～〃8-9	坂部	能登守広吉	5百石	
〃8-9～〃10-10	村上	肥後守義礼	1千石	
〃10-11～文化12-11	根岸	肥前守鎮衛	5百石	
文化12-11～文政3-2	岩瀬	加賀守氏紀	1千7百石	
文政3-3～〃4-1	荒尾	但馬守成章	5百石	
〃4-1～天保12-4	筒井	和泉守政憲	2千2百石	
天保12-4～〃12-12	矢部	左近将監定謙	5百石	
〃12-12～弘化元-9	鳥居甲斐守忠耀		3千石	
弘化元-9～〃2-3	跡部	能登守良弼	3千百石	
〃2-3～嘉永5-3	遠山	左衛門尉景元	5百石	
嘉永5-3～安政4-12	池田	播磨守頼方	3千石	
安政4-12～〃5-10	伊沢	美作守政義	2千5百石	
〃5-10～文久元-5	池田	播磨守頼方	3千石	再任
文久元-5～〃2閏8	黒川	備中守盛泰	1千6百石	
〃2閏8～〃2-12	小栗	豊後守忠順	2千7百石	
〃2-12～〃3-8	井上	信濃守清直	2百俵	
〃3-8～元治元-6	佐々木	信濃守顕発	2百俵	
元治元-6～〃11	松平石見守	康直	5千石	
〃11～〃12	有馬	出雲守則篤	2千5百石	
〃12～慶応元-11	根岸	肥前守衛奮	1千石	
慶応元-11～2-8	山口	駿河守直毅	2千5百石	
〃2-8～2-10	有馬	出雲守則篤	3千5百石	
〃2-10～4-1	駒井	相模守信興	2千石	

	元禄11-9割替え			
	北町奉行所（3千石高）			
	南町奉行所 4年～			
慶応4-1～慶応4-3	黒川	近江守盛泰	1千6百石	北町奉行所
〃4-3～〃4-3	松浦	越中守信寛	3百俵	〃
〃4-3～〃4-5	佐久間	幡五郎信義	8百俵	
〃4-5～〃4-8	南町	市政裁判所		
〃4-8～〃4-9	市政	裁判所		北町市政裁判所併合
〃4-9～しばらく	官軍	鹿児島・徳島藩屯所		兵部省所管
明治4-7～明治10ころ	東京	府移管		明治5年火災焼失。長屋の一部が残る
〃7年～〃12ころ	田中	光儀		
〃7年～〃10ころ	堀	直好		
〃10年代～はじめ	渡辺	治右衛門所有地		
〃10年代	旧奉行所長屋（下級官吏？）			
〃36年～明治38年	旧奉行所長屋（大丸、初藤、朝日別館の一画）（中小会社社屋）			
〃10年代	平民社			
〃18年～明治41年	戸建て小邸（官吏、妾宅など）			
	棟割り長屋（職工さん、あんまさん、女髪結い勤め人など）			
	数寄屋橋教会			

⑧駅前商店街3列目（大正12年関東大震災焼失、昭和20年木造家屋強制疎開）

明治41-12～大正12-9	有楽座	
〃41年～〃12-9	数寄屋橋教会	
大正13年～現在	中央自動車→昭和22年レバンテ（喫茶→レストラン）	
〃13年～〃	村井自動車→昭和18年新聞輸送	
昭和はじめ～〃	号外屋→20年明地→24年第2有楽園→27年ダイヤモンド→37年金剛→有楽屋→パレス	
〃はじめ～〃	カフェ、厨子→20年明地→24年柳すし	
〃はじめ～〃	小川看板店→20年明地→20年喜多村食堂→25年江戸一→27年ニッカバー→28年パチンコサン→32年栄すし	
〃元年～〃	鈴木法律事務所→20年明地→21年レオ→28年アマンド	
〃4年～〃	かもめ（パチンコ、ゲーム）、麻雀宮沢、米屋→20年明地→戦後放送案内、雪村いずみ事務所→32年るびあん	
〃戦前～〃	タイプ屋→20年明地→中園亭分室→41年パチンコダイヤ→44年プリンス	
はじめ～〃	竹中活版、朝陽印刷→20年明地→自動車協会→三和交易→ダイハツ輸送→ろんどんや→武蔵建設→熊谷組	
	21年こども漫画新聞→ビリヤード→パチンコ→紅鶴→セブアン→ゲーム	
	三好宗十郎邸→20年明地→ひょっとこ→陣屋	
	上田三交社→20年明地→21年ルミエール、つるや	
	21年有楽園→ダイヤモンド→金剛支店→カーニバル	
	斉藤事務所→昭和5年朝日別館、報知診療所	
大正末期～現在	昭和20年木造家屋強制疎開）	

明治後期　〜昭和戦前
昭和戦後　〜現在

三勇社印刷、三好邸

明治後期
昭和はじめ〜現在
〃　はじめ〜〃
〃　はじめ〜〃
明治後期
大正4年　〜戦前
〃　4年　〜〃
昭和戦後　〜現在
〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃

昭和20年三好商店（軽食）→21年ころ三好まるミデパート
23年クリーニング→33年東武→33年富士アイス→42年東武ピュッフェ→浜新
23年クラブセンター→33年東武鉄道観光→50年浜新
21年珍楽すし→24年かっぱすし→お好みやきかっぱ→59年ラーメン　60年ダイドー
23年カナイ紳士服。22年おかめ。福助楼→47年牛屋
23年亀八喫茶→31年亀八食堂→52年後楽そば。52年東武トラベル
23年山藤青果→23年パチンココロンボ→55年ゲームコーナーココロンボ
32年有楽シネマ
棟割長屋
五十嵐→20年明地→24年ドラゴン
洋服屋→20年明地→24年甘党ひつじ屋→レストランひつじ屋
丸の内署寮→23年レストランれんが→43年パリシュ→51年酔心
丸の内署長官舎→21年川又ビリヤード→24年さざ波
有楽泉、市川床ほか
大正生命本社→昭和13年大正生命東京支社
日本教育生命本社→日本教育生命東京支社
第一繊維→協和銀行→東和
田園→タイト→グレコ　32年サンスター
宇都宮氷店→宇都宮理容室→57年浜新
みむろと→アリタリア→カジノパレス
すみだすし→レストランありちゃん→マイアミ→ラスベガス
23年千代田デパート（大学いも、ピーナツなど軽食売店）
24年鈴木雑貨　成峰堂→成雅堂
23ころ喫茶ドラゴン→トリスバー→ドラゴンベーカリー
23年プロマイド印楽→ふじやプロマイド
25年レストランニュードラゴン→喫茶ニュードラゴン
23ころ初藤、麗都　レベッカ→53年鳥の座
12年関東大震災焼失、昭和20年木造家屋強制疎開）
白馬堂看板、洋服店、だ菓子屋
稲山久仙別邸
平岡銭湯有楽泉
23年大三元→25年ますや
23年海産問屋→千代田食堂→23年銀座ハット→英国屋→国際カメラ→せきや薬局　23年銀華
23年MAKE→ももや　マーケット→そば屋→大丸パチンコ
ペットショップ→勝味
芳松屋→35年白夜→50年マジックランド。50年デートイン→

⑧駅前商店街1列目（大正
明治後期
大正末期
昭和戦前

昭和はじめ〜戦前
〃　戦後　〜現在

昭和戦後　〜現在
⑨JR有楽町駅構内
昭和戦前
〃　22ころ〜現在
〃　25ころ〜昭和40年代
〃　25ころ〜現在
〃　40ころ〜〃

〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃
〃　戦後　〜〃

56年赤札堂→モンタナに吸収
喜多村食堂、精養軒ベーカリー、トンカツ、秋山、梨本商店、隅田、囲碁、すし
20ころ大丸デパート→26年大丸産業食堂部（食堂デパート）→30ころ大丸パチンコ。33年喫茶白鳥→ゲーム喫茶白鳥
魚河岸→パチンコミス銀座→35年モンタナ。甘栗
ジャーマンベーカリー
来々軒→50年一代。オペラ→有楽園小田急案内
スリースター→黒助すし→華麗房。リオ→45年みどり。亀屋→
太陽釣具
日本農産、20年交番→24年百果園。24年中園亭
床屋、柏屋、食堂
川井理容室→40ころ花屋
浅野屋そば、酒の道場、スワロー、温泉旅館案内所
三井観光案内所
川井理容室

資料図1-12　（有楽町1-⑪、2-⑨、⑩　有楽町駅一部、交通会館、読売会館）
慶長9ころ〜元和6-7　桑山伊賀守元晴　葛上1万石
元和6年　〜寛永6-9　〃　貞晴　無嗣廃絶
慶長年代　堀田因幡守某　不詳
元和年代　〜　水野監物忠善　山川3万5千石
寛永7-9〜寛永9-12　井伊右近太夫直勝　安中3万石
〃　9-12〜寛文12-1　〃　兵部少輔直好　掛川3万5千石
寛文12-3〜元禄7-11　〃　伯耆守信武
元禄7-11〜宝永2-12　〃　兵部少輔直朝　元禄11-9割替え
宝永2-12〜享保16-2　〃　直矩
享保16-2〜17-10　〃　丹波守直陽　与板2万石
〃　17-12〜20-4　〃　伯耆守直員
〃　20-5〜寛保2-6　〃　伊賀守直存
寛保2-6〜延享2-4　堀田相模守正亮　山形10万石　のちに老中
延享2-4〜2-12　松平相模守預かり
〃　2-12〜宝暦10-9　井伊伊賀守直存
宝暦10-11〜10-12　〃　内膳直郡　（前出）
〃　11-2〜天明元-9　〃　兵部少輔直朗　与板2万石
天明元-9〜宝暦11-2　堀田相模守正亮　（前出）
宝暦11-3〜文化2-7　〃　大蔵大輔正順　佐倉11万石
文化2-8〜〃　8-4　〃　相模守正時
〃　8-5〜文政元閏8　〃　正愛　松平伊豆守信順
文政元閏8〜文政10-6　〃　吉田7万石
10-6〜慶応4-7　徳島蜂須賀藩邸囲い込み（以下後出）

慶応4－7～明治元ころ　新政府軍徳島藩屯所、徳島藩邸の一部
明治元ころ～〃4ころ　高知新田藩邸の一部
〃5年～〃8年　火災焼失（空き地）
〃8年～〃18年　有楽町操練場
〃18年～〃23年　有楽町練兵場（改称）
〃23年～　三菱合資所有地

⑪そごう
明治41年～大正　東京毎日新聞
〃42年～〃9年　報知新聞
〃43年～〃末期　報知新聞
大正11年～昭和30－1　→17年読売別館（戦災内部焼失）→20年読売報知新聞→22年読売新聞（読売ホール）
昭和32年～現在　読売会館（そごうデパート、読売ホール）

⑨有楽町駅
明治20年代後期　鉄道用地（30年ころから工事開始）
〃39年～現在　有楽町駅の一部（東京側）　主要設備の開設
開業当時の施設概要　明治39年　日比谷口
ホーム　90メートル1本　大正12年　都庁口
ホーム屋根　スカイライト　〃12年　京橋口
駅舎　現三井観光付近　〃13ころ銀座口
駅事務所　ホーム上　昭和18年　中央口
大正末期　中央横断道路
明治39年　第1ホーム
昭和26年　第2ホーム

⑨駅交通会館側ガード下商店街
昭和戦前　ミルクホール、小荷物扱所、塚本、倉庫
〃20年代　ラッスール食品、ラッスール喫茶、ラッスールペロケ、スモールペロケなど
〃30ころ～昭和年間　30ころ書店→35年ころ有楽洋品→ザボン、ばら、志の川酒造、コーヒー
30ころ国鉄東京地方組合→34年ころパチンコがぼん→50年まで
30ころ喜仙酒店→37年ころ国際カントリー→夢科
34ころパチンコスワロー→50年ころ喫茶オリンピック、パブオリンピック
35ころ有楽フォトサービス→50年ころ有楽棋院。35ころ芸能書房
30ころ保険代理店→34年ころパチンコスワン→50年ころ吉野屋
東京メデアサービス、そごう外商部、喜仙、ローヤル、らーめん亭

⑨新幹線高架下商店街
昭和39年～現在　高架下商店街

平成はじめ　スナックビーターバン、ネクタイゆうらく、中華宝、とんかつちよだ、来々、ロココ

⑨駅前広場、交通会館
明治23年～　三菱合資用地
〃36－9～大正7年　明治40年旧外濠石垣を撤去。石垣部分は皇居付属地とされ、道路敷を加え東京市街鉄道用地に加える
大正7年～昭和18年　東京市街鉄道車庫→東京鉄道車庫→東京市電気局車庫
昭和18年～〃20年　東京市電気局庁舎
〃20年～〃24年　東京都電気局疎開跡明地

昭和24年～昭和43年　カストリ横丁
喜久屋、第一電気、つたや、東松社、関根靴、田中雑貨、どみの、田高商店、叶商店振興商会、吉沢商会、東新洋食器、紅や、長瀬商会、楽聖、富士や、マルミ、磯崎商会、エトワール、辰美商会、影山、前田商会、万債寸、菊や、伊藤屋藤屋、吉村、不二、蔦屋、海楽、志むら、好の屋、セスト、矢車、エイ、ミヨシ、弥生、さん平、グリーン、はなぞの、こやなぎ、楽楽、百武、恵比寿屋、きよし、小堤時計、藤田印房、サンライト、富久部、おかめ、とく山、富士、やなぎ、かずよ銀楽、龍月堂、すず屋、双葉、月城、美登利屋、野の屋、好香、よしの、美商、ぼたん、街、天川、アオイ、大和田、有楽堂、ブーケー、井筒、船越、長谷川、松木、土佐、スター、榎本、ブラックキャッツ、ホラー、ふたば、豊橋、和泉、新生堂ほか（21年現在）

すしや横丁
1列め（東京側から）○内数字はブロック　2階略
①マルニュラ、ハナヤ、ペンギン、キッチン→フライパン、おかめ、女性トリスバー→山田食品、レストラン、レストラン、そば、千鳥、珍万
②しらたき、楽衆荘、みずわ屋、だいふくや、きらく、さざ波、楽衆軒、オルガ、宝来
③たかさご、末広すし、勇すし、来来、あきら、むさし、都すし、栄すし、ハッピー食堂、都すし、オリエンタル→有楽ドラッグ
2列め（東京側から）
①満腹屋そば、山楽、喜世司電機、ミルクワンタン、のみや、レインボー→元禄、喜久屋、チャンポン桃園
②すし有楽、てんぷら、バーメイヨー、たつみ、バーれでぃ、すし曙、すし梅、てんぷらすし
③ながらすし、板門店食堂、柳すし、七天、高砂すし、バーアラスカ、レストランげんぼう、南大門、更科そば
3列め（東京側から）
①モード、すし、ライト→ベラミ、田子作、タカオ、田島、上海、吉田、鳥銀、双葉→一平、バー静、千代田商事

②地球→小松、花月、テル、ハムラ、のみや、すしたこ→米すし、とりみ→一寿美、松月、三友、だるま
③むらき、新長、ひろしまや、やきとり平沢、双葉電機、蛇の目すし→墨田すし、飲食店、ポンポン亭、不動産→セキネ薬局

昭和43ころ～現在　駅前広場
〃　23年～昭和37－2　東京都交通局
〃　40－6～現在　東京交通会館

日比谷公園周辺

資料図1－1　（日比谷公園－①　都立日比谷公園地裁側）

慶長8ころ～慶長10年　大関土佐守資増　黒羽2万石
〃　10年～元和2－5　〃　政増　〃
元和2－5～正保3－8　〃　高増　〃
正保3－11～寛文2－4　〃　増親　〃
寛文2－6～貞享4－7　〃　信濃守増栄　〃
慶長8－8～〃　9－11　毛利権中納言輝元　萩　36万石
〃　9－11～慶安4－1　右近衛権少将秀就〃
慶安4－2～天和2－2　長門守綱広　〃
天和2－2～元禄7－4　〃　吉就　〃
元禄7－4～宝永4－10　侍従吉弘　〃
宝永4－11～享保16－9　長門守吉元　〃
享保16－10～宝暦元－2　侍従宗広　〃
宝暦元－4～天明2－8　式部大輔重就　〃
天明2－8～寛政3－6　侍従治親　〃
寛政3－7～文化6－2　〃　斉房　〃
文化6－4～文政7－2　〃　斉ひろ　〃
文政7－2～天保7－9　左近衛権少将斉元〃
天保7－12～〃　7－12　〃　敬親　〃
〃　8－4～元治元－7　〃　斉広　〃

元治元－7～〃　元－8　空き地黒田甲斐守預かり地
〃　元－8～慶応4年　鍋島肥前守預かり替え
明治2ころ～　桑茶畑（以下後出）

資料図1－2　（日比谷公園－①　都立日比谷公園帝国ホテル側）

慶長8ころ～寛永8－2　大田原備前守晴清　大田原1万2千石
寛永8－4～寛文元－3　〃　政清　〃
寛文元－5～延宝5－9　〃　山城守高清　〃
延宝5－9～貞享3ころ　大田原備前守典清　大田原1万2千石
慶長6－春～慶長12年　鍋島加賀守直茂　佐賀35万7千石
〃　12年～明暦3－2　〃　信濃守勝茂　〃
明暦3－2～元禄8－11　〃　丹後守光茂　〃
元禄8－11～〃　10－5　〃　信濃守綱茂　〃
〃　10－5～宝永3－2　徳川甲府邸囲込み　〃
宝永3－2～〃　3－12　鍋島信濃守綱茂　〃　復帰
〃　4－5～享保15－3　左衛門佐吉茂　〃
享保15－5～元文3－12　飛騨守宗茂　〃
元文3－12～宝暦10－11　丹後守宗教　〃
宝暦10－11～明和7－7　信濃守重茂　〃
明和7－7～文化2－1　肥前守治茂　〃
文化2－5～天保元－2　斉直　〃
天保元－2～文久元－3　斉正　〃
文久元－3～明治2－4　斉大　〃

資料図1－3　（日比谷公園－①　都立日比谷公園日比谷交差点側）

慶長6－9～寛永13－5　伊達陸奥守政宗　仙台62万石
寛永13－5～万治元－7　〃　忠宗　〃
万治元－9～万治3－7　〃　綱宗　〃
〃　3－8～〃　4－2　綱村　〃
〃　4－2～延宝6－9　徳川左馬頭綱重　甲府25万石　将軍家綱弟
延宝6－12～宝永元－12　〃　権中納言綱豊　〃　35万石　のちに6代将軍

宝永元年～元文ころ　桜田御用屋敷（比久尼屋敷＝名称変更）
元文ころ～慶応4年　桜田御殿

明和9－7～寛政元年　主な入居者　右近の方（家宣側室）久免の方（吉宗側室）
享保元年～慶応4年　真性院、志賀の方、利尾の方、美尾の方、屋知の方、百の方（家斉側室）加久の方、琴の方（家慶側室）

安祥院逸の方　清水重好の生母
庭番長屋　最初の居住者
川村弥五佐衛門利徳、明楽惣右衛門正親、西村庄左衛門、馬場滝右衛門包広、中村万五郎祥信、野尻七郎兵衛高豊、村垣吉平忠充、古坂与吉供憲、高橋与右衛門恒佐、倉地文左衛門満房、梶野太左衛門満実、和多田孫市利常、川村新六修常

文政7－12割り替え御用屋敷、庭番長屋
門番所、万里小路、亀岡、花園、花町休息所、女中養生所、和多田次太夫、高橋与太夫、馬場吉之助、馬場善蔵、川村庄五郎長屋、伊賀者北川彦太郎、深沢大助、横井定次郎、鈴木喜三次、斉藤釜五郎、門番組頭田島又五郎、門番小田切直次郎、須

藤幸三郎、須藤幸次郎、吹上庭の者長屋、山里庭の者向井栄太郎、湯本吉太郎、酒井定次郎、倉地新平拝借地、植留、畑
文化5年～天保9年　鶴見又吉預かり既
天保9年～文久元年　鍋島直正室盛姫
明治はじめ　不詳（新政府軍兵舎か）

明治以降の変遷

明治4－夏～明治21年　日比谷操練場　18年日比谷練兵場
〃　18年～〃　26年　教導団騎兵兵舎、馬場　21年練兵場跡地（東京市管理）
〃　26年～〃　36年　日比谷公園用地
〃　36－6～現在　日比谷公園（昭和20～24年進駐軍ほぼ全面接収）

主要施設の推移

寛永4年～現在　開園当時の公園概要
慶長9年～〃　夜間照明　白熱ガス灯70基、アークライト10基
明治36－6～〃　休息施設　あずま屋2、ベンチ百50基

主要記念物

日比谷見附跡
有楽門（日比谷門礎石）日比谷門（赤坂、四谷門礎石）霞門（数寄屋橋門礎石）幸門（幸橋門礎石）桜門（鍛冶橋門礎石）西幸門、旧江戸上水道本管石枡、御成門桜川石橋
首かけいちょう、開園当時の鶴の噴水、手洗い、水飲み
自由の女神、自由の鐘、南極の石、古代スカンジナビア碑、ヤップ島石貨、トーテムポール、ホセ・リサール碑

〃　36年～昭和64年　旧外濠石垣の一部
〃　38－8～現在　心字池（旧外濠の一部）
〃　41－11～〃　洋風庭園→第1花壇。大運動場→第2花壇大芝生、大噴水
〃　42年～〃　芝生地→草地、テニスコート。日本庭園。児童遊園→健康増進広場。三笠山。雲型池
大正12－7～〃　貴族院議長官舎→昭和22年地裁別館
昭和4年～〃　日比谷図書館（〃　32年再建）
〃　4年～〃　日比谷公園事務所→昭和51年東京公園資料館
明治37年～〃　日比谷公園大音楽堂（昭和20～26年進駐軍接収、昭和29年再建）
日比谷公会堂（昭和20～24－10米軍専用劇場）
市政会館→18年都政会館（昭和20～24－10民間情報局接収）
日比谷松本楼（大正末期再建、昭和20－9～26－10憲兵司令部佐官級宿舎）（48年再建）
三橋亭→日比谷パークセンター
きりん亭→夏目亭。高柳亭→日比谷パレス
地下駐車場

〃　37年～〃
〃　38年～〃
昭和35年～〃

資料図－4　（内幸町1－①　帝国ホテル）

慶長18ころ～元和7－3　池田宮内少輔忠雄
元和7－3～寛永13－5　伊達陸奥守忠宗　淡路6万3千石
寛永13－5～明暦3－5　伊達陸奥守中屋敷　仙台62万石嫡子
明暦3－5～天和2－2　本多越前守利長　横須賀5万石
〃　3－5～延宝6－8　土岐山城守頼行　上山2万5千石
延宝6－8～天和2－2　〃　伊予守頼殷
天和2－4～正徳5－1　阿部備中守正邦　福山10万石
正徳5－3～寛延元－11　〃　伊勢守正福
寛延元－11～明和元－5　〃　伊予守正右　大阪城代
明和元－5～〃　3－5　井上大和守正経　浜松6万石　寺社奉行、京都所司代
〃　3－7～〃　9－3　〃　伊予守正定
〃　9－3～天明元－9　堀田相模守正亮　佐倉11万石　寺社奉行
天明元－9～〃　7－4　阿部能登守正敏　忍10万石
天明7－5～寛政8－2　阿部豊後守正識　忍10万石
寛政8－2～文化5－12　〃　侍従正由
文化5－12～文政6－10　〃　正権　白河10万石
文政6－11～天保2－11　〃　能登守正篤
天保2－11～〃　9－5　〃　正瞭
〃　9－6～嘉永元－5　〃　正備　京都所司代、寺社奉行
嘉永元－5～〃　元－10　〃　正定
〃　元－11～元治元－3　〃　侍従正ひさ
元治元－3～〃　元－6　〃　正外
〃　元－6～〃　元－11　板倉伊賀守勝静　亀山5万石　寺社奉行
〃　元－11～慶応2－6　阿部侍従正外（前出）
慶応2－6～〃　4年　〃　美作守正静　棚倉10万石
〃　4年～明治元－11　徳川左近衛権昭武　清水10万石　将軍慶喜実弟
明治元－11～〃　3－4　篤守
〃　3－4～〃　4年　奥平美作守昌邁　中津藩知事
〃　4－5～〃　14－11　博覧会事務局　8－3博物館
〃　14－11～〃　23年　農林陳列所
〃　23年～大正11－4　帝国ホテル（初代）　明治38年再建
〃　35年～〃　7年　内務大臣官舎　主な入居者　児玉源太郎、芳川顕正、原敬、平田東助、大浦兼武、一木喜徳、後藤新平、水野錬太郎
大正12－9～昭和20－9　帝国ホテル
昭和20－9～〃　27－4　進駐軍接収＝総司令部宿舎インペリアルホテル
〃　27－4～〃　42年　帝国ホテル（通称ライト館）
〃　45年～現在　本館
〃　29年～昭和57ころ　帝国ホテル第1新館
〃　33年～〃　57ころ　第2新館
〃　58年～現在　インペリアルタワー

あとがき

電気化学工業社に勤めて、11年ほど有楽町の三信ビルにある本社広報課に籍をおいたことが江戸城とのかかわりはじめになった。有楽町や丸の内が江戸城の一部だったことに興味をいだいて、その社内報『ぐんばい』に『デンカの60年をみつづけた街日比谷』を連載し、これを自己出版したところ多くの反響をいただいた。

その後、三井グループ『三友新聞』に『日比谷ものがたり』と『大手町1丁目2番地ものがたり』を連載、以後、江戸城一帯に研究の輪をひろげた。定点居住者の変遷をたどるという、なんの変哲もない作業だが、これが中なか面倒である。まず、江戸時代から、今日にいたる地図をかたっぱしから精査、解読して、これを年代別に整理する。ひとくちに江戸図といっても精度差がはげしく、年代や内容のウソにも注意がいる。うち百図ほどを資料集にまとめた。

居住者の入居、転出記録を『東京市史稿』などからさぐる作業が第2ステップとなる。市史稿は5センチほどの厚さで百冊にもおよぶ大作だが、拝領記録などが載っている。根気よく探せばある程度は見つかる。居住者が判ればあとは人物の特定。松平何々守という人物を『寛政重修諸家譜』や各種武鑑などで特定すれば、変遷がつかめる。

明治以降は各社の社史を参考にさせていただいたり直接お話を伺った。とくに三菱地所の『丸の内今と昔』『丸の内百年の歩み』は地域全般にわたる記載が多く、『有楽町有情』『有楽町60年』（朝日新聞）『有楽町今と昔』（交通会館）『日比谷百』（植田商店）『明治の銀座職人話』（野口好一）『日比谷・有楽町を愉しむ』（講談社）『大名小路から丸の内へ』（菱芸出版）など多くの書物を血肉とさせていただきました。まだまだ、解明できない部分も多く、みなさんからご指摘をいただければ幸いです。

定年後は大森拓二氏が主催する城を歩く会に加入している。婦人や年配者向けの気軽な城めぐりハイキングといったところだが、多年にわたる氏の城郭研究成果を披露していただける。結構楽しい。ご希望の向きには下記へ。

文中掲載分をのぞく主要参考文献＝御府内沿革図書（東京府）江戸城下変遷絵図集（原書房）大武鑑（橋本　宏）江戸武家名鑑集成（柏書房）集約江戸絵図（古板江戸図刊行会）江戸切絵図集（斉藤直成）地籍図（内山書房）江戸城史（伴三千雄）江戸城（村井益方）江戸城（学習研究社）千代田城とその周辺（田村栄太郎）江戸の町（内藤　昌）皇居外苑（前島康彦）日本の城の基礎知識（井上宗和）城の日本史（内藤　昌）竹橋、赤坂・喰違、和田倉御門、丸の内3丁目遺跡発掘調査報告書、住宅図（公共施設地図、ゼンリン）その他各種地図、歴史読本、歴史と旅、丸の内およびその増刊号

江戸城ものがたり
皇居周辺の4百年
＊
試作版発行日
平成9年8月1日
＊
城郭研究
江戸城周辺史研究
城を歩く会世話人
山岸　弘明
＊
〒290
千葉県市原市八幡北町2－12－12
グリーンハウス501
＊
城を歩く会連絡先
〒156
東京都世田谷区桜上水3－15－13
大森　拓二会長
入会費＝無料
定例見学会＝1、2か月に1回

DVDBY　塚原　茂